公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（39）

東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

小牧（こまき）遺跡 2

（鹿屋市串良町）

旧石器時代～縄文時代早期編

2021 年 3 月

鹿 児 島 県 教 育 委 員 会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 セ ン タ ー









序　文

この報告書は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）建設に伴って，平成27年度から平成29年度にかけて実施した鹿屋市串良町に所在する小牧遺跡の発掘調査の記録です。

小牧遺跡は，旧石器時代，縄文時代早期～晩期，弥生時代中期，古墳時代，古代，中世，近世の遺構や遺物が発見され，各時代の集落や人々の活動の場であったことがわかりました。

本報告書では，旧石器時代，縄文時代早期の調査成果を報告しています。旧石器時代のナイフ形石器文化期，三稜尖頭器文化期，細石器文化期の石器や石器製作跡，縄文時代早期前葉では，竪穴建物跡，土坑，連穴土坑，集石などの遺構と共に出土した多くの土器や石器の発見は，当時，串良川流域で生活していた人々の暮らしの様相を知る貴重な資料となりました。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財保護の普及・啓発や研究の一助となれば幸いです。

最後に，本県の埋蔵文化財保護のために御協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿児島県教育庁文化財課，鹿児島県立埋蔵文化財センター，鹿屋市教育委員会等の関係各機関並びに御指導をいただきました先生方，発掘作業，整理作業に従事された方々，遺跡の所在する鹿屋市串良町細山田集落の皆様に厚く御礼を申し上げます。

令和３年３月

公益財団法人　鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長　中原一成

報 告 書 抄 録

ふ り が な	こまきいせき　2
書 名	小牧遺跡２（旧石器時代～縄文時代早期編）
副 書 名	東九州自動車道建設（志布志IC ～鹿屋串良JCT間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	39
編 著 者 名	西園勝彦・肥後弘章・田中時太郎・大保秀樹・北園 和代・堂込秀人・福永 修一
編 集 機 関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号 TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576
発 行 年 月	西暦2021年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
こまきいせき 小牧遺跡２	かごしまけん 鹿児島県 かのやし 鹿屋市 くしらちょう 串良町 ほそやまだ 細山田	46203	203-350 (旧2-350)	31° 26′ 45″	130° 56′ 43″	分布調査 2000. 2 月～ 2002. 4 月～ 試掘調査 2012.10月～ 確認調査 2013. 8 . 1 ～ 2013.10.28 2015. 7 . 4 ～ 2015.7.28 本調査 ①2015. 7 .13 ～ 2016. 1 .27 ②2016. 5 . 9 ～ 2017. 1 .27 ③直営2017. 5 . 8 ～ 2018. 2 .23 民活2017. 5 . 9 ～ 2018. 1 .26	19,200	東九州自動車道（志布志IC ～鹿屋串良JCT間）建設に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小牧遺跡２	散布地	旧石器	ブロック３ヶ所	ナイフ形石器，三稜尖頭器，尖頭器，細石刃，チップ，フレーク，石核	
	集落跡	縄文時代早期	竪穴建物跡38基，土坑21基，連穴土坑７基，集石51基，石器集積４基	岩本式，前平式，加栗山式，小牧3A，札ノ元Ⅶ類，吉田式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，中原式，押型文，手向山式，平栫式，塞ノ神式，苦浜式石鏃，石匙，打製石斧，磨製石斧，磨敲石，石皿，石錘，軽石製品，石製品（垂飾）	

遺跡の概要

小牧遺跡は，大隅半島中央部を東流する串良川の左岸，笠野原台地の東南端に位置する独立丘陵状の台地上に立地する。本遺跡は，旧石器時代，縄文時代早期～晩期，弥生時代中期，古墳時代，古代，中世，近世の遺構や遺物が発見され，各時代の集落や人々の活動の場として，使われてきた遺跡である。本報告書は，そのうち旧石器時代から縄文時代早期の遺物・遺構について報告する。

注目されるのが，縄文時代早期の遺構群である。38基の竪穴建物跡と21基の土坑，７基の連穴土坑，51基の集石，4基の石器集積である。出土した遺物は，岩本式，前平式，加栗山式，小牧3A，札ノ元Ⅶ類，吉田式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，中原式，押型文，手向山式，平栫式，塞ノ神式，苦浜式の土器とともに，石鏃，石匙，打製石斧，磨製石斧，磨敲石，石皿，石錘，軽石製品，石製品（垂飾）が出土した。遺構と遺物の対比が可能であるため，当時の地域及びその周辺の歴史を紐解く上で貴重な資料である。



遺跡位置図（1：25,000）

例　言

1　本書は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）建設に伴う小牧遺跡の発掘調査報告書（旧石器時代～縄文時代早期編）である。

2　小牧遺跡は，鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。

3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という）が受託し，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下，「埋文調査センター」という）へ調査委託し，埋文調査センターが平成27～29年度の３年間にわたり実施した。

4　平成27～29年度の発掘調査を行うに当たっては，埋文調査センター担当者の管理のもと，発掘調査支援業務ならびに基礎整理業務を新和技術コンサルタント株式会社へ委託した。また平成29年度は，埋文調査センターと支援業務委託の２班体制で調査を行った。

5　整理・報告書作成事業（旧石器時代～縄文時代早期編）は，平成31年度～令和２年に埋文調査センターが第２整理作業所で実施した。

6　掲載遺物番号は，土器・石器別の通し番号であり，本文・挿図・表及び図版の番号は一致する。掲載遺構番号は，遺構の種類ごとに番号を付し，本文・挿図・表及び図版の遺構番号は一致する。

7　遺物注記等で用いた遺跡記号は，「コマキ（カタカナ表記）」である。

8　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高度である。

9　本書で使用した方位は，全て磁北であり測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。

10　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，主として調査担当者が行った。また空中写真の撮影は，ふじた航空写真に委託した。

11　本編に係る遺構実測図・出土遺物の実測，トレース図の作成は，埋文調査センター職員の指揮・監督のもと行い，石器実測の一部を株式会社九州文化財研究所及び国際文化財株式会社に委託した。

12　出土遺物の写真撮影は，埋文センターの写場にて埋文調査センターの福永修一，西園勝彦が行った。

13　本報告に係る自然科学分析を，パリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。また，鹿児島県立埋蔵文化財センターで顔料分析・圧痕分析を行い，そのうち圧痕分析の電子顕微写真は鹿児島大学研究推進機構研究支援センターに依頼した。

14　執筆担当は，以下のとおりである。

第Ⅰ章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　福永
第Ⅱ章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　北園
第Ⅲ章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　福永
第Ⅳ章第１節・・・・・・・・・・・・・・・堂込・西園
第Ⅳ章第２節・・・・・・・・・・・・・・・大保・北園
第Ⅴ章・・・・・・・パリノ・サーヴェイ　株式会社
鹿児島県立埋蔵文化財センター
埋文調査センター 真邉 彩
第Ⅵ章・・・・・・・・・・・堂込・西園・大保・北園
写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・福永

15　使用した土色は，『新版　標準土色帖』（1970　農林水産省技術会議事務局監修）に基づく。

16　遺構種別ごとに略記号を付して調査を行った。遺構の略記号を以下に示す。

ＳＨ：竪穴建物跡　ＳＫ：土坑　ＲＥＮ：連穴土坑
ＳＳ：集石　ＳＵ：石器集積

17　遺構の縮尺は，次を基本とした。

竪穴建物跡：１/40
連穴土坑：1/20　土坑：1/20
集石：1/20　石器集積：1/20

18　遺物の縮尺は，次のとおりである。

土器1/3，　石器1/1，1/2，1/3，1/4

遺物についてはこの限りではなく，各図中にスケールを示してある。

19　本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は，埋文センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

凡例

石の稜線…　――　――　――

すり面…　――――――――

タール付着部分…

※赤色顔料付着部分は赤の網掛けで示す

本　文　目　次

表紙
巻頭図版（カラー）
序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言
目次
第Ⅰ章　発掘調査の経過……1
　第１節　調査に至るまでの経緯……1
　第２節　整理・報告書作成……1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……5
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……5
　第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡……9
第Ⅲ章　調査の方法と層序……15
　第１節　調査の方法……15
　第２節　層序……16
第Ⅳ章　調査の成果……21
　第１節　旧石器時代の調査……21
　第２節　縄文時代早期の調査……43
第Ⅴ章　自然科学分析…… 241
　第１節　小牧遺跡の出土資料の自然科学分析…… 241
　第２節　赤色顔料分析…… 243
　第３節　土器圧痕分析…… 244
第Ⅵ章　総括…… 245
　第１節　旧石器時代…… 245
　第２節　縄文時代早期…… 246

挿　図　目　次

第１図　グリッド配置図及び調査範囲図及び確認調査トレンチ配置図……3
第２図　年度別調査範囲図……4
第３図　周辺遺跡位置図……8
第４図　東九州自動車道関連（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）遺跡位置図……14
第５図　基本層序……16
第６図　土層断面図（１）……17
第７図　土層断面図（２）……18
第８図　土層断面図（３）……19
第９図　土層断面図（４）……20
第10図　旧石器出土状況図（１）……22
第11図　旧石器出土状況図（２）……23
第12図　第Ⅰ文化層の石器（１）……25
第13図　第Ⅰ文化層の石器（２）……26
第14図　第Ⅰ文化層の石器（３）……27
第15図　第Ⅰ文化層の石器（４）……28
第16図　石器の摩滅痕跡等（１）……29
第17図　石器の摩滅痕跡等（２）……30
第18図　摩滅痕跡等写真（１）……31
第19図　摩滅痕跡等写真（２）……32
第20図　摩滅痕跡等写真（３）……33
第21図　第Ⅱ文化層の石器（１）……34
第22図　第Ⅱ文化層の石器（２）……35
第23図　第Ⅱ文化層の石器（３）……36
第24図　第Ⅲ文化層の石器（１）……39
第25図　第Ⅲ文化層の石器（２）……40
第26図　旧石器時代その他の石器（１）……41
第27図　旧石器時代その他の石器（２）……42
第28図　Ⅶ層遺構配置図……45
第29図　Ⅶ層遺物出土状況図（１）……46
第30図　Ⅶ層遺物出土状況図（２）……47
第31図　Ⅶ層遺物出土状況図（３）……48
第32図　Ⅶ層遺物出土状況図（４）……49
第33図　Ⅶ層遺物出土状況図（５）……50
第34図　Ⅶ層遺物出土状況図（６）……51
第35図　Ⅶ層遺物出土状況図（７）……52
第36図　Ⅶ層遺物出土状況図（８）……53
第37図　竪穴建物跡１号・竪穴建物跡２号 ……55
第38図　竪穴建物跡３号・出土遺物 ……56
第39図　竪穴建物跡４号・竪穴建物跡５号・出土遺物…57
第40図　竪穴建物跡６号・出土遺物 ……58
第41図　竪穴建物跡７号・出土遺物 ……59
第42図　竪穴建物跡８号・出土遺物 ……60
第43図　竪穴建物跡９号・出土遺物 ……61
第44図　竪穴建物跡10号・出土遺物 ……62
第45図　竪穴建物跡11号……63
第46図　竪穴建物跡12号……64
第47図　竪穴建物跡12号出土遺物……65
第48図　竪穴建物跡13号・出土遺物 ……66
第49図　竪穴建物跡14号……67
第50図　竪穴建物跡15号・出土遺物 ……68

第51図　竪穴建物跡16号・出土遺物 ……69
第52図　竪穴建物跡17号・出土遺物 ……70
第53図　竪穴建物跡18号・出土遺物 ……71
第54図　竪穴建物跡19号・出土遺物・竪穴建物跡20号…73
第55図　竪穴建物跡21号・22号 ……74
第56図　竪穴建物跡21号・22号出土遺物 ……75
第57図　竪穴建物跡23号・24号・出土遺物……76
第58図　竪穴建物跡25号・出土遺物 ……77
第59図　竪穴建物跡26号・出土遺物 ……78
第60図　竪穴建物跡27号・28号 ……80
第61図　竪穴建物跡27号・28号出土遺物 ……81
第62図　竪穴建物跡29号・出土遺物 ……82
第63図　竪穴建物跡30号・出土遺物 ……83
第64図　竪穴建物跡31号・出土遺物 ……84
第65図　竪穴建物跡32号・竪穴建物跡33号 ……86
第66図　竪穴建物跡34号・竪穴建物跡35号 ……87
第67図　竪穴建物跡36号・出土遺物 ……88
第68図　竪穴建物跡37号……89
第69図　竪穴建物跡38号・出土遺物 ……90
第70図　連穴土坑１号……94
第71図　連穴土坑２号……95
第72図　連穴土坑３号・連穴土坑４号 ……96
第73図　連穴土坑５号・連穴土坑６号 ……97
第74図　連穴土坑７号……98
第75図　土坑１号…… 100
第76図　土坑２号～４号…… 101
第77図　土坑５号・土坑６号・出土遺物…… 102
第78図　土坑７号・土坑８号 …… 103
第79図　土坑９号・土坑10号 …… 104
第80図　土坑11号・土坑12号 …… 105
第81図　土坑13号・土坑14号 …… 106
第82図　土坑15号～17号 …… 107
第83図　土坑18号・土坑19号 …… 108
第84図　土坑20号・土坑21号 …… 109
第85図　Ⅶ層集石分布図…… 111
第86図　集石１号・出土遺物 …… 112
第87図　集石２号・集石３号 …… 113
第88図　集石４号・出土遺物 …… 114
第89図　集石５号・出土遺物 …… 115
第90図　集石６号・集石７号 …… 116
第91図　集石８号・集石９号 …… 117
第92図　集石９号出土遺物…… 118
第93図　集石10号・出土遺物 …… 118
第94図　集石11号…… 119
第95図　集石12号・出土遺物 …… 120
第96図　集石13号・出土遺物 …… 121
第97図　集石14号・集石15号 …… 122
第98図　集石16号・集石17号 …… 123
第99図　集石18号・出土遺物 …… 124
第100図　集石19号 …… 125
第101図　集石20号・出土遺物…… 126
第102図　集石21号 …… 127
第103図　集石22号・出土遺物・集石23号・出土遺物… 128
第104図　集石24号・集石25号・出土遺物 …… 129
第105図　集石26号 …… 130
第106図　集石27号・出土遺物…… 131
第107図　集石28号・出土遺物・集石29号・集石30号… 132
第108図　集石31号・集石32号…… 133
第109図　石器集積１号・出土遺物…… 136
第110図　石器集積２号・出土遺物…… 137
第111図　Ⅰ・Ⅱ類土器分布図…… 138
第112図　Ⅰ類土器 …… 139
第113図　Ⅱ類土器 …… 140
第114図　Ⅲ・Ⅳ類土器分布図…… 141
第115図　Ⅴ類土器分布図 …… 141
第116図　Ⅲa類土器…… 142
第117図　Ⅲb類土器（１）…… 143
第118図　Ⅲb類土器（２）…… 144
第119図　Ⅲc類土器（１）…… 145
第120図　Ⅲc類土器（２）…… 146
第121図　Ⅲd類土器（１）…… 147
第122図　Ⅲd類土器（２）…… 148
第123図　Ⅳ類土器（１）…… 149
第124図　Ⅳ類土器（２）…… 150
第125図　Ⅴ類土器（１）…… 152
第126図　Ⅴ類土器（２）…… 153
第127図　Ⅴ類土器（３）…… 154
第128図　Ⅵ類土器分布図 …… 156
第129図　Ⅵa類土器（１）…… 157
第130図　Ⅵa類土器（２）…… 158
第131図　Ⅵa類土器（３）…… 159
第132図　Ⅵb類土器（１）…… 160
第133図　Ⅵb類土器（２）…… 161
第134図　Ⅵb類土器（３）…… 162
第135図　Ⅵc類土器…… 162
第136図　Ⅵd類土器 …… 163
第137図　Ⅵe類土器…… 163
第138図　Ⅶ・Ⅷ類土器分布図…… 164
第139図　Ⅶa類土器…… 165
第140図　Ⅶb類土器 …… 166
第141図　Ⅷ類土器 …… 166
第142図　Ⅸ類土器分布図 …… 167
第143図　Ⅸa類・Ⅸb類土器 …… 168
第144図　Ⅶ層石器出土状況図 …… 174
第145図　Ⅶ層出土石器（１）…… 175
第146図　Ⅶ層出土石器（２）…… 176

第147図　Ⅶ層出土石器（３）…… 177
第148図　Ⅶ層出土石器（４）…… 178
第149図　Ⅶ層出土石器（５）…… 179
第150図　Ⅶ層出土石器（６）…… 180
第151図　Ⅶ層出土石器（７）…… 181
第152図　Ⅶ層出土石器（８）…… 182
第153図　Ⅶ層出土石器（９）…… 183
第154図　Ⅶ層出土石器（10）…… 184
第155図　Ⅶ層出土石器（11）…… 185
第156図　Ⅶ層出土石器（12）…… 186
第157図　Ⅵ層遺構配置図及び土器出土状況図 …… 189
第158図　Ⅵ層集石分布図 …… 190
第159図　集石33号 …… 191
第160図　集石34号･出土遺物…… 192
第161図　集石35号･出土遺物…… 193
第162図　集石36号･出土遺物（１） …… 194
第163図　集石36号出土遺物（２）…… 195
第164図　集石37号 …… 195
第165図　集石38号･出土遺物…… 196
第166図　集石39号 …… 197
第167図　集石39号出土遺物 …… 198
第168図　集石40号 …… 198
第169図　集石41号･出土遺物…… 199
第170図　集石42号･出土遺物（１） …… 200
第171図　集石42号出土遺物（２）…… 201
第172図　集石43号･出土遺物･集石44号･出土遺物… 202
第173図　集石45号 …… 203
第174図　集石45号出土遺物 …… 204
第175図　集石46号 …… 205
第176図　集石46号出土遺物（１）…… 206
第177図　集石46号出土遺物（２）…… 207
第178図　集石47号･集石48号…… 208
第179図　集石49号･出土遺物（１）…… 209
第180図　集石49号出土遺物（２）…… 210
第181図　集石50号･出土遺物…… 211
第182図　集石51号 …… 212
第183図　石器集積３号･出土遺物…… 214
第184図　石器集積４号 …… 215
第185図　石器集積４号出土遺物 …… 216
第186図　Ⅹ～ⅩⅣ類土器分布図 …… 217
第187図　Ⅹ～ⅩⅡ類土器 …… 218
第188図　ⅩⅢ類土器 …… 219
第189図　ⅩⅣ類土器 …… 220
第190図　Ⅵ層石器出土状況図（１）…… 221
第191図　Ⅵ層石器出土状況図（２）…… 222
第192図　Ⅵ層石器出土状況図 …… 224
第193図　Ⅵ層出土石器（１）…… 225
第194図　Ⅵ層出土石器（２）…… 226
第195図　Ⅵ層出土石器（３）…… 227
第196図　Ⅵ層出土石器（４）…… 228
第197図　Ⅵ層出土石器（５）…… 229
第198図　Ⅵ層出土石器（６）…… 230
第199図　Ⅵ層出土石器（７）…… 231
第200図　Ⅵ層出土石器（８）…… 232
第201図　Ⅵ層出土石器（９）…… 233
第202図　Ⅵ層出土石器（10）…… 234
第203図　Ⅵ層出土石器（11）…… 235
第204図　Ⅵ層出土石器（12）…… 236
第205図　Ⅵ層出土石器（13）…… 237

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表……７
第２表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡……９
第３表　石器観察表（第Ⅰ文化層出土）……34
第４表　石器観察表（第Ⅱ文化層出土）……37
第５表　石器観察表（第Ⅲ文化層出土）……38
第６表　石器観察表（旧石器時代その他の石器）……42
第７表　竪穴建物跡一覧表（１）……89
第８表　竪穴建物跡一覧表（２）……91
第９表　土器観察表（竪穴建物跡出土）……91
第10表　石器観察表（竪穴建物跡出土）……92
第11表　連穴土坑一覧表……98
第12表　土器観察表（連穴土坑出土）……98
第13表　土坑一覧表…… 110
第14表　石器観察表（土坑出土）…… 110
第15表　集石（Ⅶ層）一覧表（１）…… 134
第16表　集石（Ⅶ層）一覧表（２）…… 135
第17表　土器観察表（集石Ⅶ層出土）…… 135
第18表　石器観察表（集石Ⅶ層出土）…… 135
第19表　石器観察表（石器集積Ⅶ層出土）…… 137
第20表　土器観察表（Ⅰ類）…… 139
第21表　土器観察表（Ⅱ類）…… 142
第22表　土器観察表（Ⅲa類）…… 148
第23表　土器観察表（Ⅲb類） …… 150
第24表　土器観察表（Ⅲc ～Ⅳ類） …… 151
第25表　土器観察表（Ⅴ類） …… 155
第26表　土器観察表（Ⅵa ～Ⅵb類）…… 169
第27表　土器観察表（Ⅵb ～Ⅵd類）…… 170
第28表　土器観察表（Ⅵe ～Ⅸb類）…… 171

第29表　小牧遺跡石材分類表…… 172
第30表　石器観察表（Ⅶ層出土）（１）…… 187
第31表　石器観察表（Ⅶ層出土）（２）…… 188
第32表　石器組成表（Ⅶ層）…… 188
第33表　土器観察表（集石Ⅵ層出土）…… 210
第34表　集石（Ⅵ層）一覧表…… 212
第35表　石器観察表（集石Ⅵ層出土）…… 213
第36表　石器観察表（石器集積Ⅵ層出土）…… 216
第37表　土器観察表（Ｘ～ⅩⅣ類）…… 220
第38表　石器観察表（Ⅵ層出土）（１）…… 238
第39表　石器観察表（Ⅵ層出土）（２）…… 239
第40表　石器組成表（Ⅵ層）…… 239
第41表　遺構番号新旧対応表…… 240

図　版　目　次

巻頭図版１
巻頭図版２
巻頭図版３
巻頭図版４
写真１　第Ⅲ文化層の非掲載遺物……40
写真２　№29土器外面……76
写真３　№S194出土状況 …… 183
写真４　集石46号北側から…… 205
写真５　№S391石器正面 …… 237
写真６　№S391石器赤色顔料付着部分拡大 …… 237
写真７　№93土器 表面 …… 243
写真８　№93土器 裏面 …… 243
写真９　№100土器 裏面…… 243
写真10　№S286石器正面 …… 244
写真11　№S286石器下面～右側面 …… 244
写真12　№S396石器 裏面 …… 244
写真13　№S396石器赤色顔料付着部分拡大 …… 244
写真14　圧痕レプリカSEM画像 …… 244
写真15　集石46号東側より…… 251
図版１　小牧遺跡遠景　断面ほか…… 253
図版２　Ⅺ層～ⅩⅡ層遺物出土状況ほか…… 254
図版３　Ⅸb ～Ｘ層遺物出土状況ほか …… 255
図版４　Ⅸ層遺物出土状況ほか…… 256
図版５　竪穴建物跡１号・３号ほか …… 257
図版６　竪穴建物跡２号・４号ほか …… 258
図版７　竪穴建物跡５号・８号ほか …… 259
図版８　竪穴建物跡６号・７号ほか …… 260
図版９　竪穴建物跡７号・９号ほか …… 261
図版10　竪穴建物跡10号ほか…… 262
図版11　竪穴建物跡12号ほか…… 263
図版12　竪穴建物跡11号・13号ほか …… 264
図版13　竪穴建物跡14号・15号，16号ほか …… 265
図版14　竪穴建物跡17号・18号ほか …… 266
図版15　竪穴建物跡19号・20号ほか …… 267
図版16　竪穴建物跡21号・22号ほか …… 268
図版17　竪穴建物跡25号・26号ほか …… 269
図版18　竪穴建物跡23号・24号・27号・28号ほか …… 270
図版19　竪穴建物跡30号・31号ほか …… 271
図版20　竪穴建物跡29号・32号・34号ほか…… 272
図版21　竪穴建物跡33号・34号・37号ほか…… 273
図版22　竪穴建物跡35号・36号ほか …… 274
図版23　竪穴建物跡33号～ 38号ほか …… 275
図版24　連穴土坑１号～４号ほか…… 276
図版25　連穴土坑５号～７号ほか…… 277
図版26　土坑２号～６号ほか…… 278
図版27　土坑７号～９号ほか…… 279
図版28　土坑12号～ 16号ほか …… 280
図版29　土坑17号～ 21号ほか …… 281
図版30　集石１号・２号・４号～８号・10号ほか …… 282
図版31　集石11号～ 18号ほか …… 283
図版32　集石19号～ 26号ほか …… 284
図版33　集石27号～ 32号，石器集積１号・２号ほか 285
図版34　集石33号～ 39号ほか …… 286
図版35　集石40号～ 47号ほか …… 287
図版36　集石48号～ 51号，石器集積３号・４号ほか 288
図版37　旧石器時代第Ⅰ文化層出土石器（１）…… 289
図版38　旧石器時代第Ⅰ文化層出土石器（２）…… 290
図版39　旧石器時代第Ⅰ文化層出土石器（３）
及び剥片集中１出土状況…… 291
図版40　旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器（１）…… 292
図版41　旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器（２）…… 293
図版42　旧石器時代第Ⅲ文化層出土石器
及びブロック外出土石器…… 294
図版43　Ⅶ層遺構内出土遺物（１）…… 295
図版44　Ⅶ層遺構内出土遺物（２）…… 296
図版45　Ⅶ層遺構内出土遺物（３）…… 297
図版46　Ⅶ層遺構内出土遺物（４）…… 298
図版47　Ⅶ層遺構内出土遺物（５）
・Ⅵ層遺構内出土遺物（１）…… 299
図版48　Ⅵ層遺構内出土遺物（２）…… 300
図版49　Ⅰ類・Ⅱ類土器 …… 301
図版50　Ⅲa類・Ⅲb類土器 …… 302
図版51　Ⅲc類土器 …… 303
図版52　Ⅲd類土器 …… 304
図版53　Ⅳ類土器…… 305
図版54　Ⅴ類土器…… 306
図版55　Ⅵa類土器（１）…… 307
図版56　Ⅵa類土器（２）…… 308
図版57　Ⅵb類土器 …… 309
図版58　Ⅵb類～Ⅵe類土器 …… 310
図版59　Ⅶa類・Ⅶb類土器 …… 311
図版60　Ⅷ類～Ⅸb類土器 …… 312
図版61　Ｘ類～ＸⅣ類土器…… 313
図版62　Ⅶ層出土石器（１）…… 314
図版63　Ⅶ層出土石器（２）…… 315
図版64　Ⅶ層出土石器（３）…… 316
図版65　Ⅶ層出土石器（４）…… 317
図版66　Ⅶ層出土石器（５）…… 318
図版67　Ⅵ層出土石器（１）…… 319
図版68　Ⅵ層出土石器（２）…… 320
図版69　Ⅵ層出土石器（３）…… 321
図版70　Ⅵ層出土石器（４）…… 322
図版71　Ⅵ層出土石器（５）…… 323
図版72　赤色顔料付着遺物…… 324

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道の建設を計画し，志布志ＩＣ～末吉財部ＩＣ区間の事業地内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育庁文化財課（以下，文化財課）に照会した。

この計画に伴い文化財課は，平成11年１月に鹿屋串良ＪＣＴ～末吉財部ＩＣ間を，平成12年２月に志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の埋蔵文化財の分布調査を実施し，50ヶ所の遺跡が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに，事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室，文化財課，県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）の４者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後，日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減を検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い，遺跡の緻密な把握が要求されることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査，試掘調査，確認調査が実施されることとなった。

平成14年４月には，志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡について再度分布調査を実施した結果，遺跡の調査対象範囲が678,700㎡となった。

その後，日本道路公団民営化の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設が確定，平成15年11月に暫定２車線施行に伴う議事確認書締結，同年12月に大隅ＩＣ（平成21年４月28日「曽於弥五郎ＩＣ」へ名称変更）から末吉財部ＩＣ間の発掘調査協定書締結，平成16年３月に国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事の間で新直轄方式施工に伴う確認書が締結された。工事は，日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に委託することとなり，これまでの確認書，協定書はそのまま継続されることになった。また，日本道路公団からの委託は曽於弥五郎ＩＣまでで終了し，曽於弥五郎ＩＣからの先線部分は国土交通省からの受託事業となった。

その後，平成23年度からは試掘・確認調査は文化庁の国庫補助事業を導入し，県内遺跡事前調査事業として埋文センターが実施することとなった。

県内遺跡事前調査事業の確認調査は，平成23年度は荒園遺跡の他２遺跡，平成24年度は町田堀遺跡の他３遺跡，平成25年度は小牧遺跡他２遺跡，平成27年度は小牧遺跡を実施した。

東九州自動車道建設等の事業促進に伴い，埋蔵文化財調査の事業量の増大が見込まれ，従前の調査体制では対応が困難な状況となりつつあったため，平成25年４月に，公益財団法人鹿児島県文化振興財団に埋蔵文化財調査センター（以下，「調査センター」という。）を設立し，国関係の事業に係る発掘調査等をより円滑かつ効率的に実施することにした。

小牧遺跡の調査経過は，以下のとおりである。

発掘調査

１　分布調査：平成12年２月，平成14年４月
２　試掘調査：平成24年10月
３　確認調査：平成25年10月，平成27年７月
４　本 調 査：平成27年６月～平成30年２月

事前調査（試掘調査・確認調査），本調査の詳細及びその調査体制については，令和元年度に刊行した「小牧遺跡１　古代～近世編」を参照していただきたい。

第２節　整理・報告書作成

報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成30年度から旧福山中学校跡地に新設した第２整理作業所で実施した。

平成30年度は，古代～近世編の整理・報告書作成作業と縄文時代後期～古墳時代の基礎整理作業を民間支援業務の整理・報告書作成作業として（株）九州文化財研究所に委託して行い，令和元年度に，「小牧遺跡１　古代～近世編」の刊行を行った。作業体制や作業内容は，「小牧遺跡１」を参照していただきたい。

本報告書の刊行に係る整理・報告書作成作業については，令和元年度から「小牧遺跡１」の報告書刊行と平行して実施してきた。本報告書では，平成30年度からの作業内容・作業体制について記述する。

本年度は，旧石器時代～縄文時代早期編を「小牧遺跡２」として刊行することとなった。

１　作業内容

遺構については，発掘調査時に作成した実測図と台帳との照合や遺構・時代ごとに実測図の仕分けを行った。その後遺構配置図の作成，各遺構図のトレース・レイアウトを行い，報告書掲載用の写真を選別した。併せて遺構計測表と遺構内出土遺物の観察表を作成した。

土器については遺物台帳との照合・接合・実測・トレース・拓本等の各作業のあとに挿図作成，報告書掲載用の

写真撮影及び図版作成を行った。併せて，分類ごとの土器観察表を作成した。

石器については仕分け･分類を行った後に実測･トレース・観察表作成を行い，報告書に掲載する挿図を作成した。また，報告書掲載用の写真撮影及び図版作成を行った。原稿執筆については，遺構・遺物の整理作業と併行して随時行った。なお，石器実測の一部を（株）九州文化財研究所（平成30年度，令和2年度）と国際文化財（株）（令和元年度）に委託した。

2　作業体制

令和元年度以降の体制は，以下のとおりである。

令和元年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局	
	大隅河川国道事務所	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成総括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団	
	埋蔵文化財調査センター	
	センター長	中原　一成
作成企画	〃総務課長兼係長	中島　　治
	〃調査課長	寺原　　徹
	〃調査第二係長	有馬　孝一
作成担当	〃文化財専門員	西園　勝彦
	〃	肥後　弘章
	〃	田中時太郎
事務担当	主査	有川　剛弘

令和２年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局	
	大隅河川国道事務所	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成総括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団	
	埋蔵文化財調査センター	
	センター長	中原　一成
作成企画	〃総務課長兼係長	中島　　治
	〃調査課長	寺原　　徹
	〃調査第一係長	福永　修一
作成担当	〃文化財専門員	西園　勝彦
	〃	大保　秀樹
	文化財調査員	北園　和代
事務担当	主査	有川　剛弘

報告書作成指導委員会

11月５日　　調査課長ほか７名

報告書作成検討委員会

11月19日　　センター長ほか５名

3　整理作業の経過

整理作業の経過は，以下の通りである。

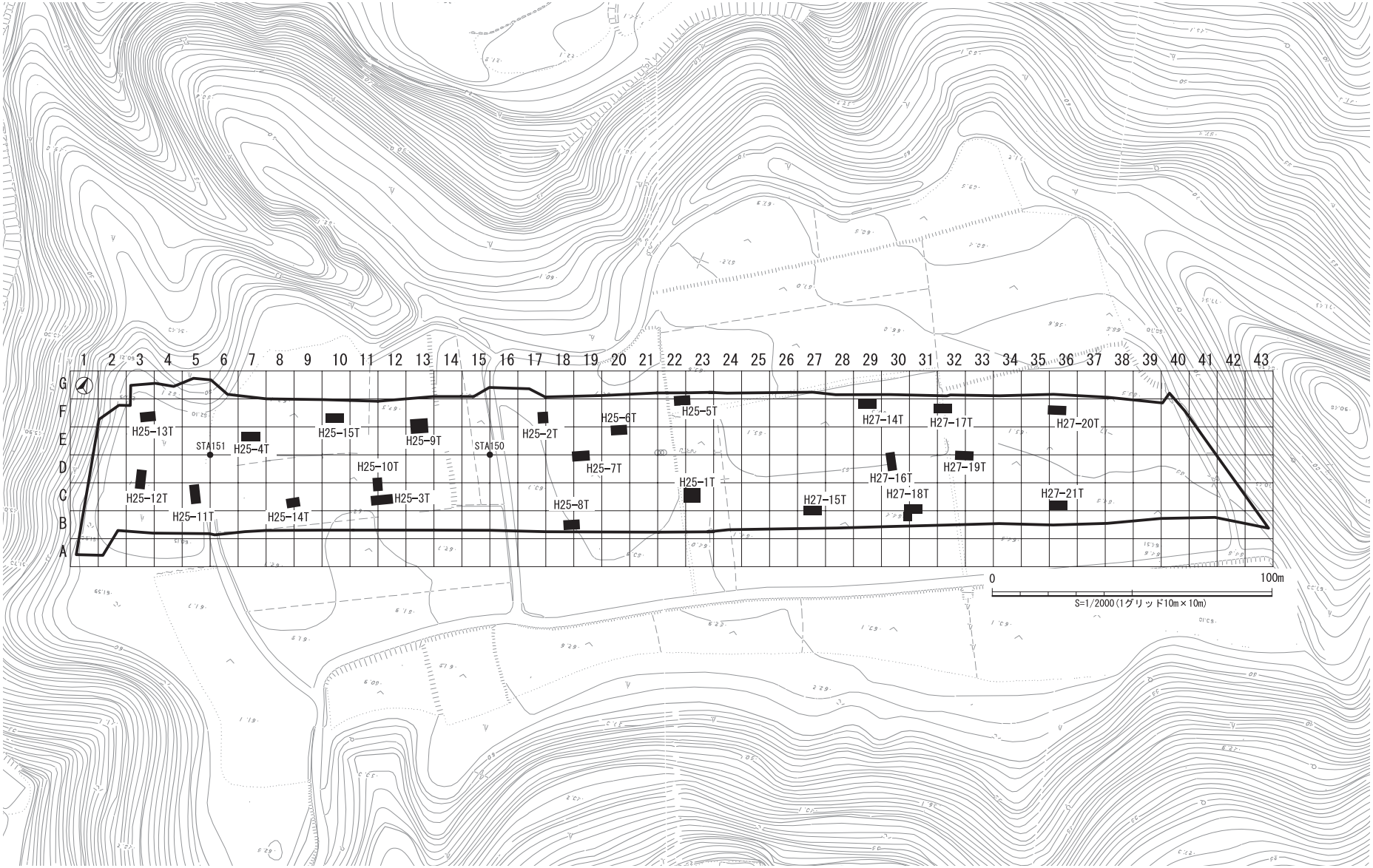
令和元年度

「小牧遺跡１　古代～近世以降編」の刊行と旧石器・縄文時代早期の報告書作成業務及び縄文時代後期の整理作業を行ったため，本報告書の業務経過のみを掲載する。

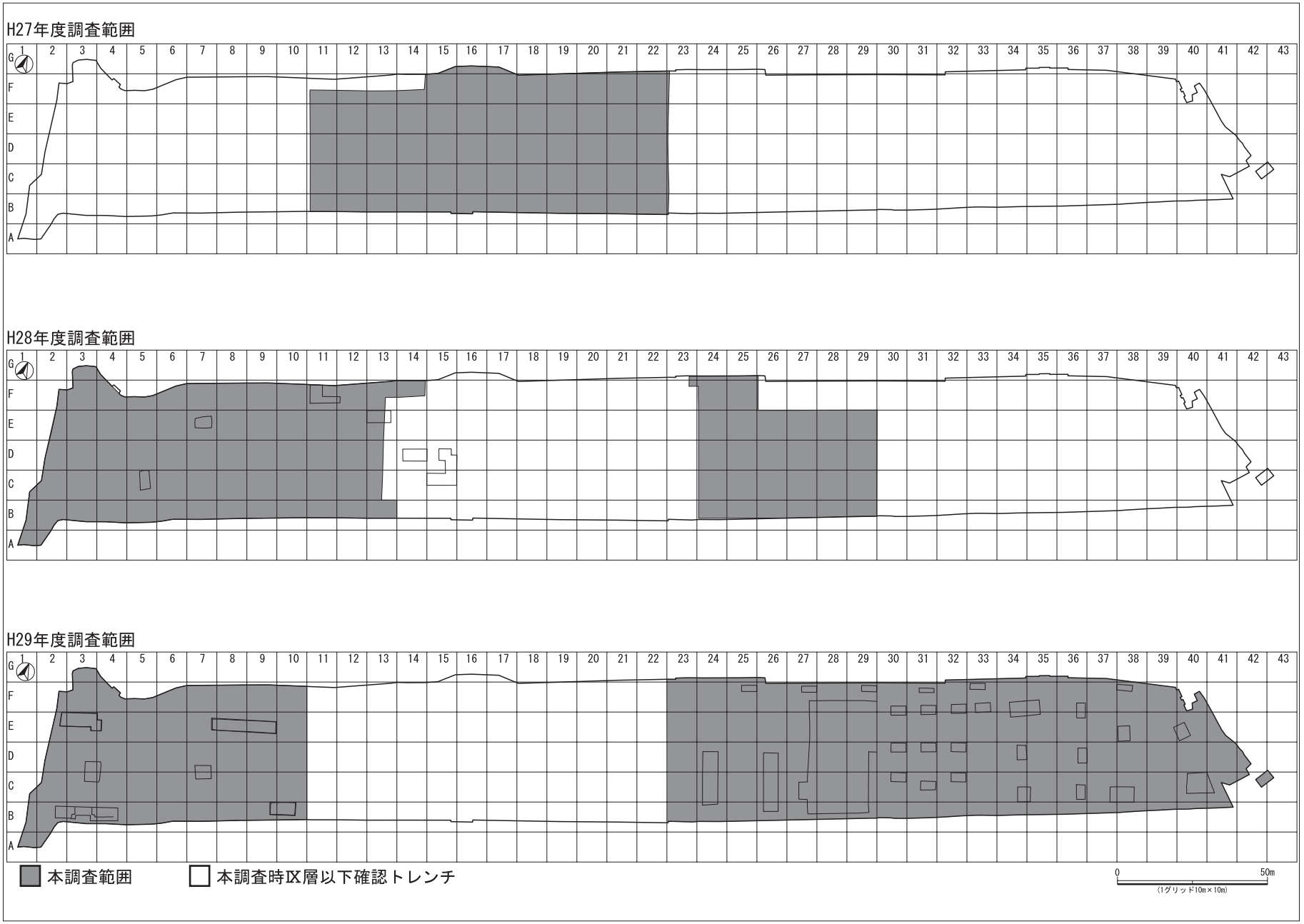
４月　整理作業準備，遺物分類，土器接合
５月　遺物分類，土器接合，原稿執筆
６月　遺物分類，土器接合，原稿執筆
７月　遺物分類，土器接合，原稿執筆
８月　土器実測，遺物トレース，原稿執筆
９月　土器実測，遺物トレース，原稿執筆
10月　土器実測，遺物トレース，原稿執筆
11月　土器実測，遺物・遺構トレース，原稿執筆
12月　土器実測，遺物・遺構トレース，原稿執筆
１月　レイアウト，原稿執筆
２月　レイアウト，原稿執筆
３月　原稿執筆

令和２年度

４月　整理作業準備，遺構トレース
５月　遺構トレース，石器実測，写真選別
６月　遺構レイアウト，石器実測，写真選別，編集
７月　土器レイアウト，石器トレース，原稿執筆
８月　各レイアウト，観察表作成，原稿執筆
９月　遺物写真撮影，レイアウト確認，原稿執筆
10月　遺物写真撮影，レイアウト確認，原稿執筆
11月　レイアウト確認，原稿執筆
12月　印刷・製本入札
１月　校正
２月　校正
３月　納品



第１図　グリッド配置図及び調査範囲図及び確認調査トレンチ配置図



第２図　年度別調査範囲図

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

鹿屋市串良町は，大隅半島東南部のほぼ中央に位置し，東には東串良町，南には肝属川を隔てて肝付町，西には鹿屋市東原町，旭原町，笠之原町，北東は立小野台地を隔てて曽於郡大崎町と接している。平成18年１月１日に旧鹿屋市と合併するまでは，広大な笠野原台地を旧鹿屋市と二分していた。

串良町が位置する大隅半島は，九州山地の延長をなす東西の山地，その間の丘陵，台地及び低地等の低地帯から構成されている。

東側の山地は，志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119m）で，中生代層の地質からなっている。

西側の山地は北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み，南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は，大篦柄岳（1,236m）を主峰に横岳・御岳等1,000m級の山から成る山地で，山容は急峻で深い森に覆われている。

東西の山地は，ともに九州山地の延長をなし，それらの間は低地帯となり丘陵や台地及び低地となっている。これらの山地間を埋めるような形で，洪積世の火山活動である南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や，鹿児島湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流が堆積している。また，これらの火砕流をはじめとする噴出物が，堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開析され，断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や，ほとんど浸食されず残った広大な台地となっている。これらの地形の地質は大部分がシラス，ボラ等の火山灰土壌となっている。

一方，低地は，高隈山地や荒磯岳等を水源とする本城川や肝属川，菱田川などの大小の河川が走り，鹿児島湾，志布志湾等に注いでいる。この河川は，上・中流域で谷底平野を形成し，また下流域では，河岸段丘の形成も認められる。

この大隅半島に位置する串良町の地形は，東西に6.5㎞，南北に13㎞の狭長で北部の山地中央部の台地，南部の低地に大別されるが，大部分において山地は少なく，笠野原台地と呼ばれる平坦なシラス台地から成っている。台地は「クロボク」と呼ばれる黒色火山灰土壌に覆われており，広大な畑地帯が形成されている。南部及び東部は肝属川とその支流の串良川が流れ，それによる沖積地が広がり，約560haの水田地帯を形成している（平成16年度旧町統計）。また，北部には低い丘陵状地形の山地が存在するが，町域に占める割合は少ない。

小牧遺跡は，串良町の北東部，串良川東岸の新調堀台地の南端に位置している。周囲を串良川やその支流の浸食を受けることで地形面が開析され，標高約65mの独立丘陵状の地形となっている。

周囲の環境としては，調査開始まで台地全面に，サツマイモ畑が広がっていた。また，台地南側の沖積平野には，稲田が広がっている。遺跡が所在する下中集落は，串良川両岸の台地の裾野に家屋を建て，稲作と畑作などの農業並びに畜産業が盛んである。

第２節　歴史的環境

小牧遺跡に関連，もしくは特筆すべき成果を時代別に紹介する。

（１）　旧石器時代

小牧遺跡では旧石器時代の剥片が出土している。串良川を挟んだ対岸に位置する川久保遺跡では三凌尖頭器・細石刃等の旧石器時代の遺物や集石が確認されている。

（２）　縄文時代

縄文時代草創期の遺跡としては，天神段遺跡・川久保遺跡で無文土器や貼り付け等が施された土器片の出土が確認されている。

早期の遺跡としては、本遺跡と同じ台地上に位置する益畑遺跡・細山田段遺跡他，周辺には川久保・十三塚・石綰・牧山・田原迫之上遺跡等が挙げられる。益畑遺跡では竪穴住居跡・連穴土坑・集石が確認され，早期の各形式の土器が幅広く出土している。磨製石鏃，石匙・磨敲石・石皿などの石器も多数出土し，本格的な縄文時代早期の集落跡の発見となった。竪穴住居埋土に桜島起源の軽石（P13）がレンズ状に堆積し，その下位から前平式土器が出土している。

細山田段遺跡では，下剥峯・桑ノ丸・押型文土器を中心とした早期後葉の土器の出土が主体であり，塞ノ神式の壷型土器と，横位の山形押型文土器の二カ所の埋設土器が検出されていることが注目される。集石が18基検出されており，殆どが掘り込みをもたない散礫状の形態であったことが報告されている。

小牧遺跡では，早期全期に渡り多様な土器が出土しているが，各型式ごとの個体数は少ない。石器の器種構成は，磨敲石・石皿が多く，石鏃などの剥片石器が一定量みられ，石斧に伐採斧がみられないことから，狩猟しながらのキャンプ地や，堅果類の採集・加工場所であった可能性が想定されている。

前期・中期の遺跡としては，細山田段遺跡で170基を

超える縄文中期の土坑が検出され，在地系の深浦式土器が多く出土するなかで，近畿地方の大歳山式・鷹島式土器，瀬戸内地方の船元式土器が出土し，広範囲での交流を知ることができる。

後期の遺跡としては，牧山・立小野Ａ及びＢ・田原迫ノ上・立小野・ホンドンガマ遺跡で指宿式・市来式土器が出土している。

牧山遺跡からは，建物跡を構成した可能性のある300～400個の柱穴群が環状に発見され，複数の埋設土器と，石冠が1点出土している。

細山田段遺跡では丸尾式・北久根山式・西平式・御領式土器が出土している。町田堀遺跡では，中岳Ⅱ式土器が数多く出土し埋設土器としての例も見られ，竪穴住居跡から橿原文を施す完形の石刀が出土した。

晩期の遺跡としては，川久保遺跡で入佐式古段階～黒川式古段階に相当する精製の浅鉢や，突帯文土器が出土している。

永吉天神段遺跡では突帯文土器の伴う竪穴住居跡や鉢，壺，打製石斧，石鏃，石匙，石皿などが発見された。

（3） 弥生時代

田原迫ノ上遺跡では山之口式･中溝式土器，土製勾玉･鉄器・磨製石鏃などが出土し，ベッド状遺構を伴う方形や円形の大型竪穴住居跡，掘立柱建物跡，円形・方形の周溝などが検出されており中期の遺構と比定される。

十三塚遺跡では，花弁形・方形・円形の竪穴住居跡が発見された。山之口式土器，土製勾玉，打製・磨製石鏃，棒状敲具などの遺物とともに無茎の鉄鏃が出土した。

牧山遺跡では中期の竪穴住居跡から銅鑿が出土した。

永吉天神段遺跡では中期の円形周溝墓と土坑墓群から国内最古級となる鉄鏃（十三塚出土品と類似）が出土した。ほかにも入来式・山ノ口式・黒髪式土器が多数出土しており，弥生時代の長期に渡り集落が存在したことが窺える。

（4） 古墳時代

志布志湾沿岸部には唐仁古墳群，塚崎古墳群，横瀬古墳などの多くの高塚古墳が存在する。また，南九州特有の墓制である地下式横穴墓も多く分布する地域である。

小牧遺跡近隣の上小原古墳群には前方後円墳1基・円墳20基および地下式横穴墓が存在する。岡崎古墳群には18基の高塚古墳と地下式横穴が存在し，長方板革綴短甲･頸冑・肩冑の出土が知られる。

立小野堀遺跡では，地下式横穴墓が190基発見されており，鉄鏃や鉄剣等の鉄器，青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数検出された。成川式のうち辻堂原期の特徴を持つ壺・高坏類が多く出土し，折損・欠損行為・穿孔行為を受け，祭祀的に遺棄されたと想定される。

川久保遺跡では古墳時代の竪穴住居跡が多数検出されている。鞴の羽口・鉄滓・鍛造剥片などの鍛冶関連遺物が複数の住居跡から検出され，成川式のなかでも笹貫式の新段階の出土が主体だが，東原式の甕や高坏も多く出土している。

益畑遺跡では東原～笹貫新段階期の成川式土器が出土した。５号竪穴住居跡からは，初期須恵器に比定される蓋杯や鉄製のU字型鍬先が発見されている。小牧遺跡の近隣では古墳時代の長期に渡って集落が存在していたことが窺える。

（5） 古代

古代の串良は大隅国串良郷に属していたと思われるがその国境・郡境については定かではなく，串良川流域においては，古代の遺物・遺構が発見されている遺跡が少ないこともあり，今後の文献・考古資料によるさらなる検証が待たれる。『小牧遺跡１』の中で本遺跡で掘立柱建物跡などの遺構と共に土師器・須恵器・墨書土器などの遺物が発見されたことは既に報告している。

旧輝北町（現:鹿屋市）の新田遺跡で古代の掘立柱建物跡が５軒検出されており，古代の土師器の坏･皿･椀･墨書土器・須恵器などが出土している。

川久保遺跡でも掘立柱建物跡や古道跡が検出され，須恵器や土師器などの古代の遺物が出土している。

（6） 中世以降

小牧遺跡の周辺には，北東に細山田城跡と北原城跡，南に霧島城跡が知られている。中世初期の串良は肝付氏の領土であり，串良町郷土史によると肝付氏初代兼俊の３男兼幸が北原氏を名乗り，細山田に開いたのが北原城である。近年の発掘調査では村落跡も各地で発見されている。

川久保遺跡Ｂ地点では，３軒の掘立柱建物跡の検出が報告される。

永吉天神段遺跡では糸切り底の土師器の坏･皿や瓦器･瓦質土器，東播系須恵器，白磁・青磁・染付などの中世の遺物が多数出土している。

（7）近世以降

近世以降の大隅地方については，今後の発掘資料の増加が待たれる状況である。小牧遺跡の周辺においては，天神段遺跡で，畠畝状遺構や薩摩焼などが発見されている。永吉天神段遺跡では，薩摩焼や肥前系染付などが出土し道跡や寛永通宝を副葬した墓坑５基が検出されている。細山田段遺跡でも，近代まで続く溝状遺構や古道が検出されている。

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	備考
1	小牧遺跡	鹿屋市串良町細山田小牧	台地	旧石器，縄文，弥生，古墳，古代，中世	本報告書
2	遠見ヶ丘遺跡	曽於郡大崎町野方立小野	台地	中世	
3	立小野Ａ・Ｂ遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地	縄文	
4	立小野遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地	縄文（後），弥生	
5	高松遺跡	鹿屋市串良町細山田高松	台地	弥生	
6	二子塚Ａ遺跡	曽於郡大崎町野方二子塚	台地	旧石器，縄文（早・晩） 弥生，古墳	平成11年度本調査
7	二子塚Ｂ遺跡	曽於郡大崎町持留二子塚	台地	縄文，弥生	
8	二子塚Ｃ遺跡	曽於郡大崎町持留二子塚	台地	弥生（中・後）	
9	大佐土原遺跡	曽於郡大崎町野方大佐土原	山復緩斜面	弥生（中）	
10	佐土原遺跡	曽於郡大崎町野方4715－2	台地	縄文，古墳	
11	杁山城跡	曽於郡大崎町持留	台地	弥生，古墳，中世	別称「山ノ城」，推定
12	川上神社遺跡	曽於郡大崎町持留中持留	扇状地	縄文（後）	
13	持留牧遺跡	曽於郡大崎町持留牧・東尾ノ鼻	台地	縄文，古墳	平成９年度農政分布調査
14	茶ノ木遺跡	曽於郡大崎町持留1406－2	台地	古墳	
15	細山田段遺跡 （旧:京の塚遺跡）	曽於郡大崎町持留細山田段	台地	縄文（早～晩）	平成25 ～ 27年度本調査
16	細山田段遺跡	曽於郡大崎町持留下原 鹿屋市串良町細山田下中京の塚	台地	縄文（後・晩） 弥生（前），古墳	平成８年度農政分布， 平成11年度農政分布で拡大
17	京の塚古墳	鹿屋市串良町細山田下中京の塚	台地	古墳	平成14 ～ 15年年度本調査
18	益畑遺跡	鹿屋市串良町細山田益畑	台地	縄文，弥生	
19	霧島城跡	鹿屋市串良町細山田下中	丘陵	中世	
20	ホンドンガマ遺跡	鹿屋市串良町細山田下中	洞窟	縄文	シラス洞窟で崩壊しつつある
21	町田堀遺跡	鹿屋市串良町細山田アタゴ山	台地	弥生，古墳	平成25 ～ 28年度本調査
22	川久保遺跡	鹿屋市串良町細山田川久保	河岸段丘	旧石器，縄文，弥生， 古墳古代，中世，近世	平成26 ～ 30年度本調査
23	北原古墳群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	古墳	
24	北原墓地逆修古石塔群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	中世（鎌倉末）	
25	北原城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世（南北朝）	
26	細山田城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世	
27	生栗巣遺跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	台地	弥生	
28	牧山遺跡	鹿屋市串良町細山田牧山	台地	弥生，古墳	平成25 ～ 29年度本調査
29	入部堀遺跡	鹿屋市串良町細山田入部堀	台地	弥生，古墳	
30	新堀遺跡	鹿屋市串良町細山田新堀	台地	縄文	
31	是ヶ迫遺跡	鹿屋市串良町細山田是ヶ迫	台地	縄文，弥生	
32	瓜々良蒔遺跡	鹿屋市串良町有里瓜々良蒔	台地	弥生	平成12年度本調査
33	熊ヶ鼻遺跡	鹿屋市串良町有里熊ヶ鼻	台地	縄文，弥生	
34	杁場遺跡	鹿屋市串良町有里杁場	台地	弥生	
35	永田堀遺跡	鹿屋市串良町有里永田堀	台地	弥生，古墳	
36	宮留古墳群	鹿屋市串良町有里	台地	古墳	
37	石塚遺跡	鹿屋市串良町有里石塚	台地	弥生	
38	石塚古墳	鹿屋市串良町有里石塚2169	台地	古墳	
39	牧内古墳	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	
40	下原遺跡	曽於郡大崎町持留	台地	縄文（後），弥生，古墳	
41	岩弘上古石塔	肝属郡東串良町岩弘上共同墓地	台地	中世	
42	上市ノ園古墳群	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
大崎町
鹿屋市
東串良町
0
1 km

第３図　周辺遺跡位置図

第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡

東九州自動車道の志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間には，表２に示すとおり26か所の遺跡が存在する。ここでは調査済み及び調査中の遺跡の概要を記載する。詳細については，各報告書等を参照していただきたい。

第２表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	見帰	志布志市 志布志町 志布志 台地上 標高約70m	H28年度 終了 H25・30年度に埋文センター調査（隣接地）	H30年度 刊行 Ｒ２年度 隣接地刊行予定	旧石器	—	ナイフ形石器，細石刃，使用痕剥片，磨石，叩石，敲石
					縄文早期	土坑	石坂式，押型文，下剥峯式，石鏃，磨石，石皿
					縄文前・中期	落とし穴，土坑	—
					縄文後・晩期	—	磨消縄文，丸尾式，西平式，中岳Ⅱ式，磨石，敲石
		縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代はナイフ形石器文化期及び細石刃文化期に比定される。縄文時代早期は，土器に比して石器の出土が極めて少ない。前～中期の落とし穴が２基検出されている。溝状遺構１号は時期不詳であるが縄文時代後期の可能性がある。					
2	宮ノ上	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約45m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
3	安良	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約30m	H28年度 H29年度 終了	H30年度 Ｒ元年度 刊行	縄文早・後期	土坑，集石	小牧３Ａ，西平式，丸尾式
					弥生中期	竪穴建物跡	山ノ口式
					古墳時代	竪穴建物跡，地下式横穴墓，溝状遺構	笹貫式，鉄鏃，鉄鐸，須恵器
					古代～中世	帯状硬化面，掘立柱建物跡，竪穴建物跡，土坑，土坑墓，柱穴他	土師器，須恵器，青磁，白磁，滑石製石鍋，炭化米塊
					近世	土坑，柱穴	—
		古墳時代後半期と中世を中心とした遺跡である。中世前半の炭化米塊は県内最古の事例として注目される。					
4	水神松	志布志市 志布志町 安楽 安楽川左岸 標高約３m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
5	安楽小牧Ｂ	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約50m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 Ｒ元年度 刊行	旧石器	—	ナイフ形石器，細石刃核，細石刃
					縄文草創期	集石	土器片，黒曜石剥片，磨石，敲石，石皿
					縄文早期	集石	吉田式，妙見・天道ヶ尾式，塞ノ神Ａ式，塞ノ神Ｂ式，苦浜式，耳栓，石鏃，磨石，異形石器
					弥生	—	弥生土器，石包丁
		起伏のある地形に立地し，縄文時代早期を中心に旧石器時代，縄文時代草創期も出土した複合遺跡である。縄文時代早期の集石は検出層によって構成礫の大きさに差が認められる。また，塞ノ神式土器の壺形土器や，耳栓，異形石器，円盤状石器等が出土している。古墳群として遺跡登録されているが，これまでの調査では痕跡を含め古墳は確認されていない。※遺跡ＧＩＳの変更に伴い，遺跡名を「小牧古墳群」から「安楽小牧Ｂ」に変更。					
6	次五	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約50m	H26年度 H27年度 終了 ※志布志市教育委員会調査	H29年度 刊行 ※志布志市教育委員会刊行	旧石器	—	畦原型細石刃核，細石刃，剥片
					縄文早期	落とし穴，連穴土坑，土坑，集石，磨石集積	前平式，加栗山式，吉田式，札ノ元Ⅶ類，石坂式，中原Ⅴ式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，手向山式，塞ノ神Ｂ式，打製・磨製石鏃，石錘，局部磨製石斧
		旧石器時代から縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代は，細石刃文化期の遺物が出土している。縄文時代早期前葉に該当する遺構や遺物が多く確認された。特に注目されるのは被熱破砕礫が多量に出土した点である。					
7	大代	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約40m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
8	木森	志布志市 有明町 野井倉 河岸段丘 標高約30m	H26年度 H30年度 終了		縄文早期	竪穴建物跡，集石，土器集中，連穴土坑，土坑	前平式，加栗山式，吉田式，石坂式，下剥峯式，押型文，石鏃，石匙，磨石，敲石
					縄文中・後期	—	春日式，凹線文系土器
					古墳～古代	—	須恵器
					中世	掘立柱建物跡，杭列状遺構	須恵器，土師器，青磁，白磁，滑石製石鍋片，鉄製品，鉄滓
		縄文時代早期と中世を中心とする遺跡である。遺構では縄文時代早期の竪穴建物跡，連穴土坑，集石，中世の掘立柱建物跡等が発見され，遺物では縄文時代早期の土器，石器，石匙，磨石・敲石の他，中・後期の土器，古墳～古代の須恵器，土師器，中世の青磁，白磁，滑石製石鍋片，鉄製品等が出土している。鬼界カルデラ噴火による液状化現象（噴砂跡）が確認されている。					
9	田尾下	志布志市 有明町 野井倉 菱田川右岸 標高約５m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
10	春日堀	志布志市 有明町 蓬原 河岸段丘 標高約30m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H30年度 R元年度 R２年度 作業中	縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，集石，土坑，土器集中，炭化物集中，落とし穴	前平式，加栗山式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，手向山式，塞ノ神式，打製石鏃，打製・環状石斧，トロトロ石器，磨石，台石，石皿，砥石，穿孔円礫
					弥生	竪穴建物跡	山ノ口式
					古墳～飛鳥	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，溝状遺構，土坑，棒状礫集積遺構	甕（東原式，笹貫式），壺，坩，高坏，須恵器高坏，棒状礫，磨製石鏃片
					古代～中世	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑墓，杭列跡，焼土跡	土師器
					近世	土坑，溝状遺構，古道，遺物集中	陶器，磁器
		縄文早期から中世を中心とする遺跡である。遺構は縄文時代早期の竪穴建物跡，連穴土坑，集石，落とし穴，弥生時代の竪穴建物跡，古墳・飛鳥時代の竪穴建物跡（焼失住居跡含む），掘立柱建物跡，溝状遺構，中世の掘立柱建物跡，堀跡が検出された。遺物は縄文時代早期の土器，打製石斧，環状石斧，トロトロ石器等をはじめ，弥生時代から中近世の遺物が出土している。また鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）の痕跡も確認されている。					
11	牧ノ上B	志布志市 有明町 野井倉 台地上 標高約47m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
12	稲荷堀	曽於郡 大崎町 菱田 台地上 標高約50m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
13	平良上C	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約40m	H26年度 H27年度 終了	H28年度 刊行	縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，集石，埋設土器，チップ集中	吉田式，石坂式，下剥峯式，押型文，平椿式，石鏃，石匙，打製・磨製石斧，扁平打製石斧，磨石，石皿，礫石器，石核
		縄文時代早期を中心とする遺跡である。遺構は竪穴建物跡，連穴土坑，集石，土坑が検出されている。遺物は，縄文時代早期の土器，石鏃，石匙，打製石斧，磨製石斧等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。					
14	宮脇	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約40m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 R元年度 刊行	旧石器	礫群	ナイフ形石器，三稜尖頭器，台形石器，細石器，石核，スクレイパー，掻器，使用痕剥片，磨石，叩石
					縄文早期	集石，土坑，土器集中	加栗山式，小牧３Ａ，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，平椿式，塞ノ神式，打製石鏃，磨石
					近世	—	薩摩焼，寛永通宝
		旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代では，石器製作に関連すると考えられる石核，フレーク，チップ等が出土している。縄文時代早期では，集石，土坑，土器集中，ピットと土器，石器等が出土している。鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象の噴砂跡も確認されている。					
15	堂園堀	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約45m	文化財課の試掘調査及び埋文センターの確認調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
16	荒園	曽於郡 大崎町 仮宿 台地縁辺部 標高約50m	H24年度 H25年度 H26年度 H30年度 終了 ※H24年度は 埋文センター調査	H28年度 （第１地点） 刊行 H30年度 R元年度 R２年度 （第２地点） （第３地点） 作業中	旧石器	—	畦原型細石核・細石刃，敲石
					縄文早期	集石，土坑，剥片・チップ集中	前平式，吉田式，加栗山式，下剥峯式，押型文，手向山式，平椿式，塞ノ神式，苦浜式，条痕文，壺形土器，石鏃，スクレイパー，石匙，耳栓，打製・磨製石斧，磨石，石皿
					弥生中期	竪穴建物跡，土坑	吉ヶ崎式，山ノ口式，磨製石鏃未製品，砥石
					古墳	竪穴建物跡	成川式，須恵器，砥石
					古代以前	片薬研堀溝状遺構	—
					中世	掘立柱建物跡，土坑，溝状遺構，帯状硬化面	土師器，東播系須恵器，備前焼，陶器，青磁，華南三彩
					近世以降	帯状硬化面	薩摩焼
		縄文時代早期から古墳時代を中心とする遺跡である。遺構は，縄文時代早期の集石，弥生時代・古墳時代の竪穴建物跡，古代以前の片薬研堀溝状遺構，中世の掘立柱建物跡等が検出され，遺物は縄文時代早期の土器，石器，弥生時代・古墳時代の土器，土師器，陶器，磁器等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。					

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
17	永吉天神段	曽於郡 大崎町 永吉 台地縁辺及び 河岸段丘 標高30 ～ 50m	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 終了 ※H24年度は 埋文センター調査	H27年度 （第1地点） 刊行 H28年度 (第2地点1) 刊行 H29年度 (第2地点2) 刊行 H30年度 （第3地点） 刊行 H31年度 (第2地点3) 刊行	旧石器	礫群，ブロック	尖頭器，ナイフ形石器，台形石器，剥片
					縄文早期	集石，土器埋設遺構	前平式，加栗山式，吉田式，手向山式，下剥峯式，押型文，平椿式，塞ノ神式，苦浜式，条痕文，石鏃，石匙，石斧，磨石，敲石，石皿
					縄文前期	—	曽畑式
					縄文後期	—	岩崎上層式，北久根山式，中岳Ⅱ式
					縄文晩期	竪穴建物跡，落とし穴，土坑	入佐式，黒川式，刻目突帯文，管玉，打製石斧
					弥生	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，円形周溝墓，土坑墓群，土坑	入来式，山ノ口式，黒髪式，鉄鏃，磨製石鏃，管玉
					古墳	竪穴建物跡，土坑	成川式，須恵器
					古代	掘立柱建物跡，土坑	須恵器，土師器
					中世	掘立柱建物跡，土坑墓，地下式坑，火葬土坑，土坑	白磁，青磁，土師器，瓦質土器，東播系須恵器，備前焼，常滑焼，湖州六花鏡，砥石，石塔，古銭
					近世	近世墓	薩摩焼，染付，寛永通宝，石臼
					時期不明	掘立柱建物跡	—
		旧石器時代から近世までの遺跡である。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群から，国内では最古級となる鉄鏃が出土した。中世では白磁，青磁，瓦質土器，東播系須恵器等が多量に出土した。また，地下式坑と呼ばれる中～近世の大型土坑も発見された。					
18	細山田段	曽於郡 大崎町 西持留 台地上 標高約95m	H25年度 H26年度 H27年度 終了	H26年度 H28年度 H30年度 R元年度 (1)刊行 R２年度 刊行	縄文早期	集石，埋設土器	吉田式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，中原式，押型文，平椿式，塞ノ神式，苦浜式，石京西式，打製石鏃，石匙，磨・敲石，石核
					縄文前期～中期初頭	土坑，土器集中	曽畑式，深浦式，大歳山式，鷹島式，船元式，打製石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，二次加工剥片，磨石，敲石，石皿，石核
					縄文後期	土坑	辛川式，丸尾式，西平式，中岳Ⅱ式，打製石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，磨・敲石，打製石斧，磨製石斧，石皿
					縄文晩期	—	入佐式，黒川式
					弥生前期	—	高橋式
					古墳	—	成川式
					近世以降	溝状遺構・古道	—
		縄文時代前期から中期初頭を中心に，縄文時代早期から近世までを含む遺跡である。縄文中期では170基を超える土坑が検出されたほか，在地系土器の深浦式土器，近畿地方の大歳山式土器や鷹島式土器，瀬戸内地方の船元式土器などが出土し，当時の遠隔地交流の一端が明らかとなった。					
19	小牧	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約60m	H27年度 H28年度 H29年度 終了	H30年度 R元年度 (1)刊行 R２年度 作業中	旧石器	—	細石刃
					縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，土坑，集石	前平式，吉田式，石坂式，下剥峯式，平椿式，条痕文，石匙，磨石，石皿
					縄文前期	—	曽畑式，深浦式，磨石
					縄文後期	竪穴建物跡，石皿立石遺構，伏甕，石斧集積遺構，集石，土坑	阿高式系，岩崎上層式，指宿式，市来式，石鏃，横刃型石器，打製石斧，磨石，石皿，大珠
					縄文晩期	—	入佐式，黒川式，刻目突帯文
					弥生中期	—	入来式，山ノ口式，砥石
					古墳	竪穴建物跡，礫集積，土器溜，土坑	東原式，辻堂原式，布留系土器，須恵器，鉄鏃，鉄製品，敲石，勾玉，軽石加工品
					古代	掘立柱建物跡，焼土跡，溝状遺構，土坑	土師器，須恵器，墨書土器，鉄器，土錘，焼塩土器，土製紡錘車
					中世以降	掘立柱建物跡，土坑，石組遺構，溝状遺構，杭列	土師器，東播系須恵器，白磁，青磁，墨書土器，石鍋，合子，鞴羽口，刀子，鉄製紡錘車，焙烙，古銭，薩摩焼
		旧石器時代から近世までの遺跡である。縄文時代早期前半から中葉の集落，後期の石皿遺構を伴う環状構造の集落とこれらに伴う遺物が特筆される。この他，古墳時代の花弁形住居跡を伴う集落や古代・中世の掘立柱建物跡群も発見されている。周辺の遺跡を含めて串良川沿岸における人間活動の変遷を追うことができる遺跡である。					

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
20	川久保	鹿屋市 串良町 細山田 河岸段丘 標高30 ～ 50m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H27年度 H29年度 H30年度 （C地点） 刊行 R元年度 R２年度 （A,B,D地点） (1)(2)刊行 作業中	旧石器	礫群	剥片尖頭器，ナイフ形石器，畝原型細石核
					縄文早期	竪穴建物跡，集石，土坑	岩本式，前平式，志風頭式，加栗山式，吉田式，倉園Ｂ式，石坂式，下剥峯式，押型文，塞ノ神式，苦浜式，轟Ａ式，石鏃，打製石斧，石皿
					縄文前期	集石	曽畑式，磨製石斧
					縄文後期	—	中岳式
					縄文晩期	集石	入佐式，黒川式，刻目突帯文
					弥生前期	—	高橋式
					弥生中期	竪穴建物跡	下城式，山ノ口式
					古墳	竪穴建物跡，鍛冶関連建物跡，竪穴状遺構，溝状遺構，道跡	成川式，鞴羽口，高坏脚転用鞴羽口，鉄鏃，鉄滓，勾玉，管玉
					古代	掘立柱建物跡	須恵器，土師器
					中世	掘立柱建物跡，溝状遺構，道跡	青磁，白磁，瓦器椀
		旧石器時代から中世までの遺跡である。特に古墳時代では，集落を構成する多数の竪穴建物跡や鍛冶関連遺物を伴う遺構が発見されているほか，専用の鞴の羽口も出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。					
21	町田堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約90m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 終了	H27年度 (1) 刊行 H29年度 (2) 刊行	縄文早期	集石	下剥峯式，平椿式
					縄文後期	竪穴建物跡，埋設土器，落とし穴，土坑，石斧集積遺構	中岳Ⅱ式，石刀，石鏃，打製・磨製石斧，ヒスイ製垂飾，小玉，勾玉，管玉
					縄文晩期	—	黒川式，刻目突帯文
					弥生中期	竪穴建物跡	入佐式，山ノ口式，土製勾玉
					古　墳	竪穴建物跡，地下式横穴墓，円形周溝墓，溝状遺構	成川式土器，人骨，鉄剣，鉄鏃，刀子，ヤリ鉋，異形石器
					古　代	焼土跡，道跡	土師器，須恵器
		縄文時代早期から古代までの遺跡である。古墳時代の地下式横穴墓が92基発見され，円形周溝を伴う例も初めて確認されている。立小野堀遺跡や下堀遺跡等と類似性が想定され，高塚墳と共存する志布志湾沿岸部の地下式横穴墓との比較が可能になり，大隅半島の古墳時代像解明に必須の遺跡である。このほか，縄文時代後期の竪穴建物跡から，檀原文を施す完全な石刀が出土している。					
22	牧山	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約110m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 終了	H28年度 (A地点1) 刊行 H30年度 R元年度 R２年度 （A地点2, B，C，D地点） 作業中	旧石器	—	剥片
					縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，土坑，集石，石器製作跡	吉田式，石坂式，下剥峯式，辻タイプ，桑ノ丸式，押型文，石鏃，石匙，スクレイパー，磨石
					縄文前期	埋設土器（轟式）	轟式，条痕文
					縄文後期	土坑，落とし穴状遺構，埋設土器，石器集中部	市来式，丸尾式，西平式，太郎迫式，三万田式，中岳Ⅱ式，打製・磨製石斧，磨石，剥片，石核，台石，石冠
					縄文晩期	土坑	入佐式，刻目突帯文
					弥生中期	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑	山ノ口式，打製・磨製石鏃，打製・磨製石斧，磨石，敲石，石皿，青銅鑿
					中・近世	古道跡	青磁，白磁，薩摩焼
		旧石器時代から中世にかけての遺跡である。特に，縄文時代後期の建物跡を構成していた可能性のある柱穴群が環状に発見されており注目される。また，同時期のものと考えられる複数の埋設土器と石冠が１点出土している。弥生時代中期の青銅製鑿の出土も特筆される。					
23	田原迫ノ上	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約120m	H22年度 H23年度 H24年度 H25年度 H26年度 H28年度 H30年度 終了 ※H22 ～ 24は埋文センター調査	H26年度 (1) 刊行 H27年度 H28年度 (2) 刊行 R元年度 (3) 作業中 ※H23 ～ 24は埋文センター調査	縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，集石，落とし穴，土坑，石器製作跡	前平式，吉田式，倉園Ｂ式，石坂式，下剥峯式，辻タイプ，桑ノ丸式，中原式，押型文，手向山式，平椿式，塞ノ神式，石槍，石鏃，石匙，磨石，敲石，石皿，打製石斧
					縄文後期	落とし穴，礫集積	指宿式，市来式，石鏃，磨石
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	竪穴建物跡，大型建物跡，掘立柱建物跡，円形・方形周溝	山ノ口式・中溝式，擬凹線文系壺，土製勾玉，鉄器，磨製石鏃，石匙，砥石，敲石，台石
					古墳時代以降	溝状遺構，畝状遺構	土師器碗，薩摩焼
		縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした遺跡である。弥生時代中期では，ベッド状遺構を伴う方形・円形の大型竪穴建物跡，棟持柱をもつ掘立柱建物跡２棟を含む建物跡群，柱穴列や円形・方形の周溝などが検出されており，大隅半島中央部における当該期の集落の様相を知る上で貴重な遺跡である。このほか，縄文時代早期の竪穴建物跡，連穴土坑などの遺構が多数発見されていることも注目される。					

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
24	立小野堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約125m	H22年度 H23年度 H24年度 H26年度 H30年度 終了 ※H22～24は埋文センター調査	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 (1) 刊行 R３年度以降 (2) 作業 ※H24は埋文埋文センター作業	縄文前・中期	―	深浦式
					縄文後期	―	指宿式，市来式，西平式
					弥生中期	―	山ノ口式
					古　墳	地下式横穴墓，土坑墓，溝状遺構	成川式，須恵器，鉄器（刀・剣・槍・鉾・刀子・鏃等），青銅鈴，人骨
					時期不詳	溝状遺構	―
		縄文時代前期から古墳時代までの遺跡である。特筆すべきは，古墳時代の地下式横穴墓が約200基発見されたことである。玄室内には鉄鏃や鉄剣等の鉄器，青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数残っていたほか，墓周辺から多量の土器や須恵器が出土した。青銅製鈴をはじめ，多種多様な副葬品を伴った地下式横穴墓群の発見は，南九州の古墳時代墓制の様相全体を解明していく上で貴重な資料である。					
25	十三塚	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 刊行 ※埋文センター作業	縄文早期	―	石坂式
					縄文後期	―	凹線文，市来式，三万田式
					縄文晩期	―	黒川式
					弥生中期	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑	山ノ口式，土製勾玉，打製・磨製石鏃，棒状敲具，鉄鏃
					古　墳	―	成川式
					中世～近世	道路状遺構	洪武通寶（加治木銭）
		弥生時代中期を中心とする遺跡である。花弁形・方形・円形を呈する竪穴建物跡が発見された。出土遺物等から，王子遺跡や前畑遺跡等と同時期の集落跡と考えられる。また，集石が竪穴建物跡内から発見されている。７号住居跡の埋土内から，松木薗遺跡や永吉天神段遺跡から出土した鉄鏃と類似する無茎の鉄鏃が出土した。					
26	石縊	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 刊行 ※埋文センター作業	縄文早期	集石，土坑	岩本式，前平式，志風頭式，石坂式，平栫式，貝殻条痕文，鎌石橋式，轟Ａ式，打製石鏃，磨石，敲石
					弥生中期	―	山ノ口式，須玖式
		縄文時代早期前半から早期末を中心とする遺跡である。鎌石橋式土器１個体と轟Ａ式土器が２個体出土し，両型式が同時期に存在した可能性を示唆する遺跡である。					



第４図　東九州自動車道関連（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）遺跡位置図

第Ⅲ章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法等，整理・報告書作成作業の方法について簡潔に述べる。

１　発掘調査の方法

小牧遺跡の発掘調査は，平成25年度と平成27年度に確認調査，平成27 ～ 29年度に本調査を実施した。調査対象表面積は19,200㎡，調査対象延面積は54,820㎡である。

調査区割り（グリッド）は，工事用基準杭「ＳＴＡ150（Ｘ＝－172321.776，Ｙ＝－5261.309)」と「ＳＴＡ151（Ｘ＝－172360.837，Ｙ＝－5353.362)」の延長線を中心に，10m間隔で西から東に向かって１・２・３…，南から北に向かってA・B・C…と設定した。このグリッドを基にして，Ａ－１区の左下を原点（０，０），縦軸をＸ，横軸をＹとし，遺構・遺物の測量作業を行うこととした。また，トータルステーションで測量作業を行う場合，公共座標に基づき基準点を設定した。

発掘調査は，重機で表土を除去した後，確認調査の結果に基づき，遺物包含層については人力で掘り下げを行った。無遺物層，火山灰の一次堆積層は，一部重機を用いて慎重に掘り下げた。

遺構は，移植ごて等の遺構調査に適した道具を用いて慎重に調査し，実測，写真撮影等を行った。

出土した遺物については，必要に応じて出土状況の写真撮影を行った後，トータルステーションを使用して取り上げを行った。遺構やまとまった遺物は，遺構の規模等に応じて縮尺１／10 ～ １／20で手測り実測で行った。本編に関わる地形測量は，Ⅷ層（サツマ火山灰層）上面で精査を行い実施した。

また，Ｘ層上面の地形測量を24区～ 41区で行った。

２　遺構の認定と検出方法

検出された遺構の認定と検出方法については，以下のとおりである。

（１）遺構の認定

検出面，埋土状況，規模等を総合的に調査し，調査担当者間で検討したうえで認定した。本編掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

竪穴建物跡・土坑・連穴土坑については，埋土や形状，遺物の出土など発掘調査担当で総合的に判断し，分類・認定・時期判断を行った。ただし，遺構の中には，検出面が該当時期の地層よりもかなり下位で検出されたものもあるが，埋土の堆積状況や色調・遺構内（埋土中のものも含む）遺物等から総合的に検討し，時期判断を行った。

集石については，時期を問わず概ね５個以上のものを集石と判断した。時期については，検出面や集石内外の出土遺物の種類等で総合的に検討し，判断した。各遺構は，検出された順に竪穴建物跡はＳH，連穴土坑はＲＥＮ，土坑はＳＫ，集石はＳＳ，石器集積はＳＵの略記号と番号を付した。

（２）遺構の検出方法

遺構の検出及び調査に際しては，可能な限り当時の生活面を把握することを目指した。しかしながら，小牧遺跡は，Ｖ層（アカホヤ火山灰層）やⅣ層が浸食により流出し堆積が不安定な箇所もあったため，遺構検出・遺構の切り合いや時期認定等に苦慮した。対策として，ミニトレンチの設定，攪乱部分の埋土除去等，遺構の個々の状況に応じた調査方法を検討し，可能な限り残存部の記録保存と時代特定を行った。

３　整理作業・報告書作成作業の方法及び内容

平成27 ～ 29年度は，本発掘調査と併せて（株）新和技術コンサルタントに業務を委託し，遺物の水洗・注記等の基礎整理作業と，接合作業を行った。

平成30年度は，基礎整理作業を（株）九州文化財研究所に委託し，本編掲載の一部石器について分類・選別・実測・トレースの作業を行った。

令和元年度は,「小牧遺跡１」の刊行作業を行いながら，発掘調査成果品の整理から行った。図面整理は，遺構実測図，遺物出土状況図，土層断面図等に分け，台帳と遺物の照合を行った。

遺物の分類・接合は，遺構内遺物と包含層遺物に分けた後，包含層出土土器については，土器の胎土や文様等で分類し，グリッドごと及びエリアを広げ接合する方法をとった。石器は，剥片石器と礫石器に分け，器種及び石材別に分類し一部を国際文化財（株）へ石器実測委託を行った。

令和２年度は，報告書刊行に向けて作業を行った。土器は，文様・胎土・器形等を基準に編年分類を行った。石器は，時期別・機種別に分類し，一部を（株）九州文化財研究所に実測委託を行った。遺物はこれら作業の後，文章・観察表・図版により特徴を記録した。遺構は，認定・分類したものを実測図や写真等を用い検出面・埋土の状況から再度検討しトレースを行い，調査図面の所見を参考に時期ごとに文章・観察表・図版にまとめて特徴を記録した。

第２節　層序

小牧遺跡は，串良町の北東部，串良川左岸の新調堀台地の南端に位置し，周囲を串良川やその支流の浸食を受けることで地形面が開析され，標高約65mの独立丘陵状となっている。調査区は東西に約400mあり，東側から西側へ緩やかに傾斜している。串良川に近い西側の地形は，雨水等による浸食を多く受けており，アカホヤ火山灰層やⅣ層の一部が流されて堆積が不安定な箇所もあった。そのため，縄文時代から古墳時代までの遺構・遺物が同じ包含層で検出されている。標準土層については，平成29年度の調査時に調査区中央から東側でⅣc層とⅣd層を設定できたことから，調査区の西側（１区～ 29区）と東側（30区～ 42区）で層位及び色調及び土壌の特徴が異なる。

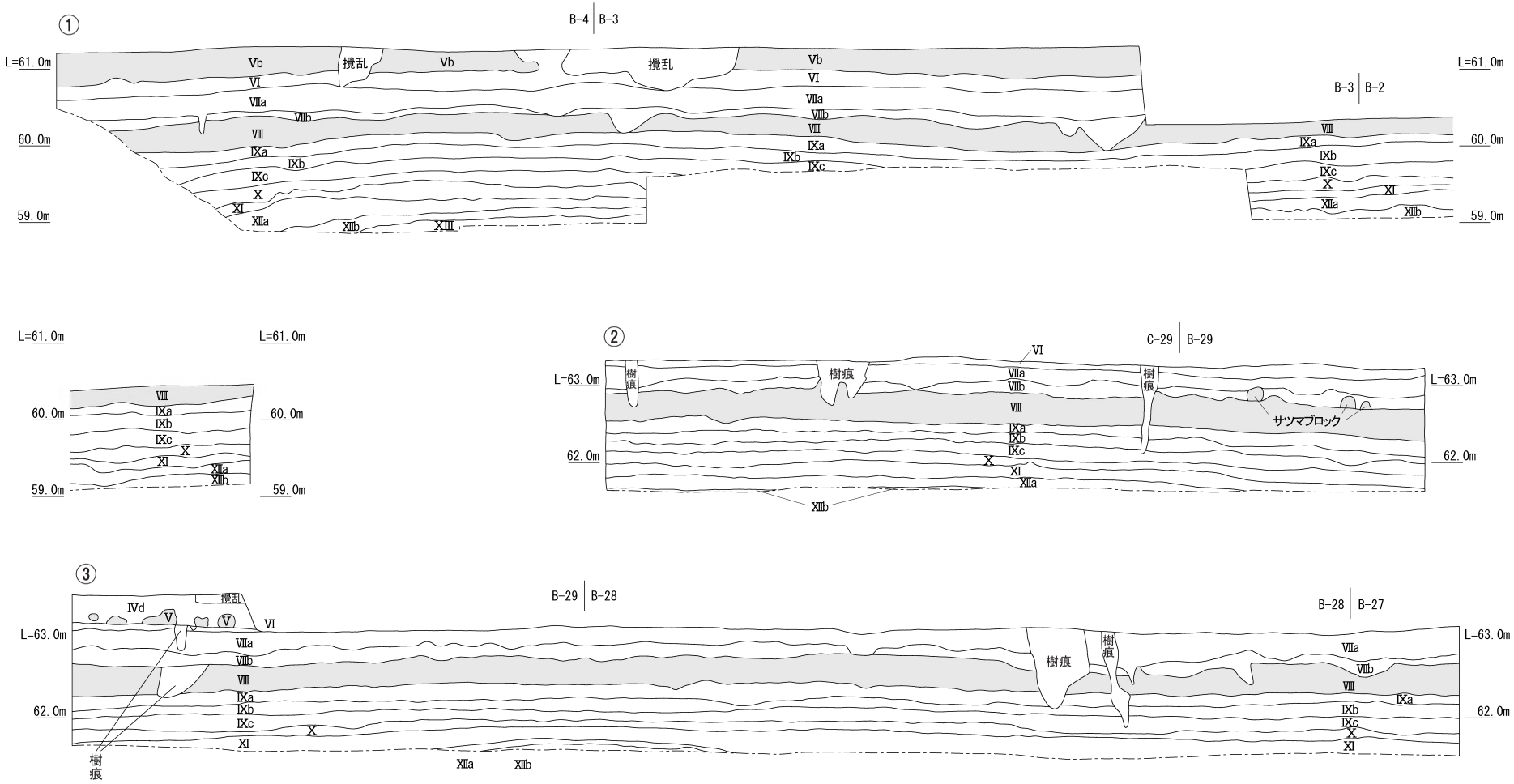
１区～ 29区

層位	色調等	特徴等	時代
Ⅰ層	表土	Ⅱ層との層界にＰ１火山灰層が堆積している。	
Ⅱ層	黒色土	細かい白色軽石を含む。耕作のためにほとんど残っていない。	
Ⅲ層	黒色土	部分的に残存する。1区～ 13区は古代から中世，14区以降は古代の包含層である。Ⅲ層を埋土とする遺構を古代Ⅱ期としている。	古代～中世
Ⅳa層	暗褐色土	縄文中期から古墳時代までの遺構・遺物を包含する。30区～ 42区では，上部に古代（９世紀）遺物を包含する。遺構埋土にわずかにⅣa層より暗い埋土を持つ遺構を古代Ⅰ期としている。縄文晩期～弥生時代については，堆積が薄く，層位的な上下関係の把握は困難である。	縄文前期～古墳
Ⅳb層	暗褐色土	池田降下軽石をまばらに含む。１区～ 13区までは，縄文時代後期から古墳時代までの遺物を包含するが，14区より東側は，縄文時代中期から後期の遺物を包含する。	
Ⅴa層	黄褐色土	池田火山灰の軽石やアカホヤ軽石の両方を含む。堆積の不安定な西側では，この上面まで遺物を含む。30区～ 42区では，Ⅳdとして設定。	
Ⅴb層	ｱｶﾎﾔ火山灰	アカホヤ火山灰。４区～ 10区かけて堆積が薄い。20区～ 42区では，Ⅴ層として設定。	
Ⅵ層	暗茶褐色土	塞ノ神式土器等を含む，縄文時代早期後葉の遺物包含層である。アカホヤの軽石，炭化物を含む。	縄文早期
Ⅶa層	黒褐色土	加栗山式土器等を含む，縄文時代早期前葉の遺物包含層である。層全体に，Ｐ13，黒色ブロック土をわずかに含む。	
Ⅶb層	青灰色土	薩摩火山灰が多く混在する。黒色ブロック土を含む。	
Ⅷ層	ｻﾂﾏ火山灰	一次堆積層が上下に浮遊している。	
Ⅸa層	濃茶褐色強粘質土	旧石器時代（細石刃）の包含層である。	旧石器時代（細石刃）
Ⅸb層	濃暗茶褐色強粘質土	粘性が強い。	
Ⅸc層	濃茶褐色強粘質土	Ⅸb層よりも暗い色調。旧石器時代の遺物を含むが，Ｘ層の遺物が混入した可能性がある。	旧石器時代
Ｘ層	茶褐色粘質土	層の上部に濁った層があり，そこから旧石器時代の遺物（三稜尖頭器）が出土する包含層である。	
Ⅺ層	黄色褐色粘質土	黒ずんでいて堅い。旧石器の包含層である。Ｐ17と思われる火山灰を少量含む。黒いハードローム層である。	
Ⅻa層	黄褐色粘質土	明るいソフトローム層で，Ｐ17と考えられる火山灰を所々に含む。	
Ⅻb層	黄褐色粘質土	旧石器の包含層黒いハードローム層で，黒ずんでいて堅い。Ｐ17の降下層。Ⅺ層やⅫa層に見られる赤色パミスは，Ｐ17が混入した可能性がある。	
ⅩⅢ層	二次シラス		

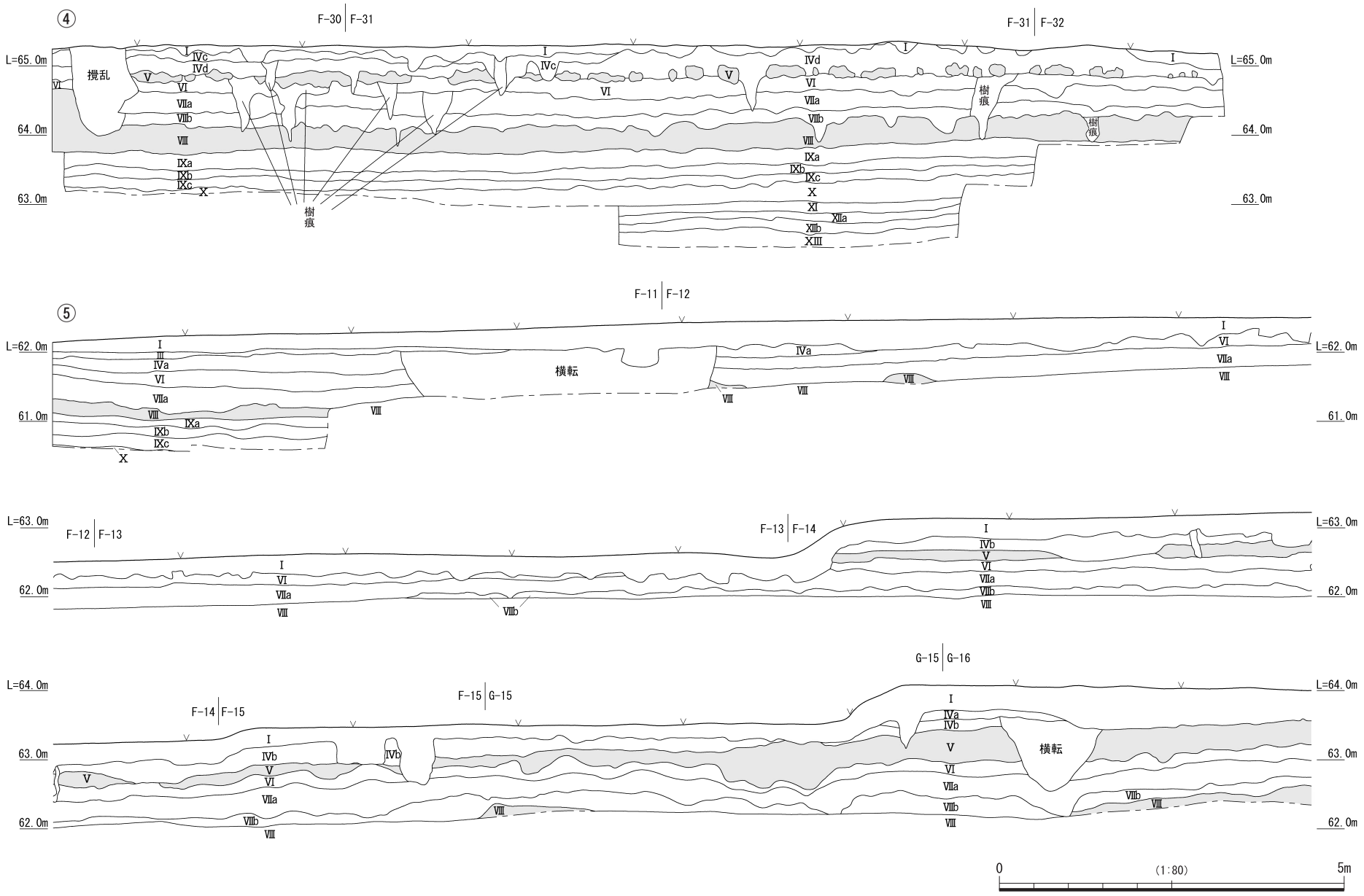
30区～ 42区

層位	色調等	特徴等	時代
Ⅰ層	表土		
Ⅱ層	黒色土		
Ⅲ層	黒色土	部分的に残存，下部に遺物を包含	古代（9世紀）以降
Ⅳa層	褐色土	上部に古代（９世紀）遺物を包含。縄文晩期～弥生時代については，堆積が薄く，層位的な上下関係の把握は困難である。	縄文後期～古代
Ⅳb層	暗褐色土		縄文中期～後期
Ⅳc層	黄橙色砂質土	池田火山灰･降下軽石がブロック状に堆積	縄文前期～中期
Ⅳd層	暗褐色土	弱い粘性有り	
Ⅴ層	ｱｶﾎﾔ火山灰		
Ⅵ層	黒褐色粘質土		縄文早期
Ⅶa層	灰褐色粘質土	Ｐ13含む	
Ⅶa’層	にぶい黄褐色砂質土	23～ 41区の南側斜面に堆積	
Ⅶb層	灰黄褐色粘質土	薩摩火山灰混じり	
Ⅷ層	ｻﾂﾏ火山灰		
Ⅸa層	灰黄褐色粘質土	細石刃	旧石器時代
Ⅸb層	褐灰色粘質土		
Ⅸc層	灰黄褐色粘質土	三稜尖頭器	
Ｘ層	明黄褐色粘質土		
Ⅺ層	褐灰色粘質土	槍先形尖頭器	
Ⅻa層	明黄褐色粘質土		
Ⅻb層	褐灰色粘質土		
ⅩⅢ層	二次シラス		

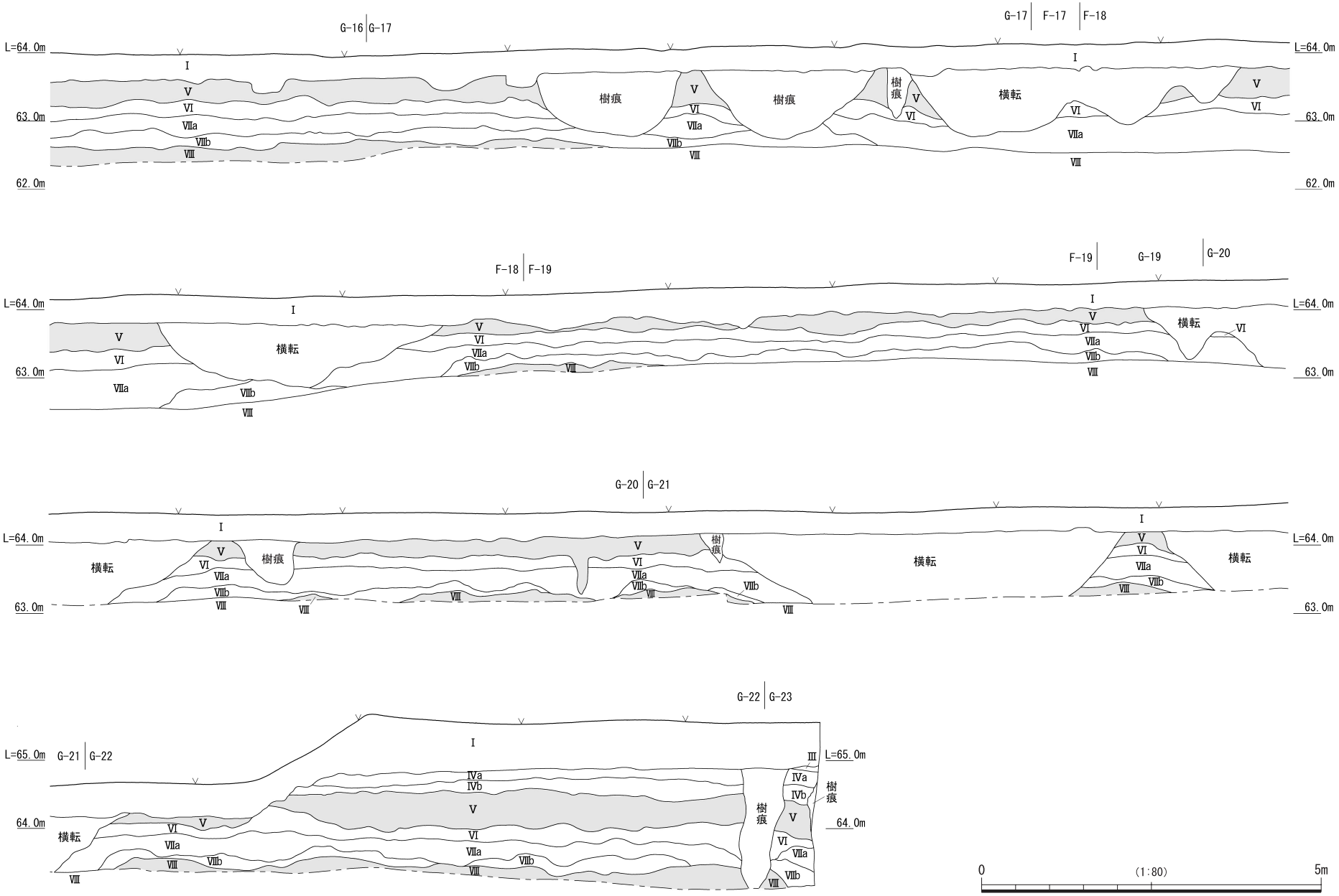
第５図　基本層序


①
B-4
B-3
L=61.0m
60.0m
59.0m
Vb
撹乱
VI
VIIa
VIIb
VIII
IXa
IXb
IXc
X
XI
XIIa
XIIb
XIII
B-2
②
C-29
B-29
L=63.0m
62.0m
樹痕
サツマブロック
③
B-28
B-27
IVd
V
撹乱
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43
G
F
E
D
C
B
A
0 (1 : 2500) 50m
0 (1:80) 5m
：当該土層実測箇所位置

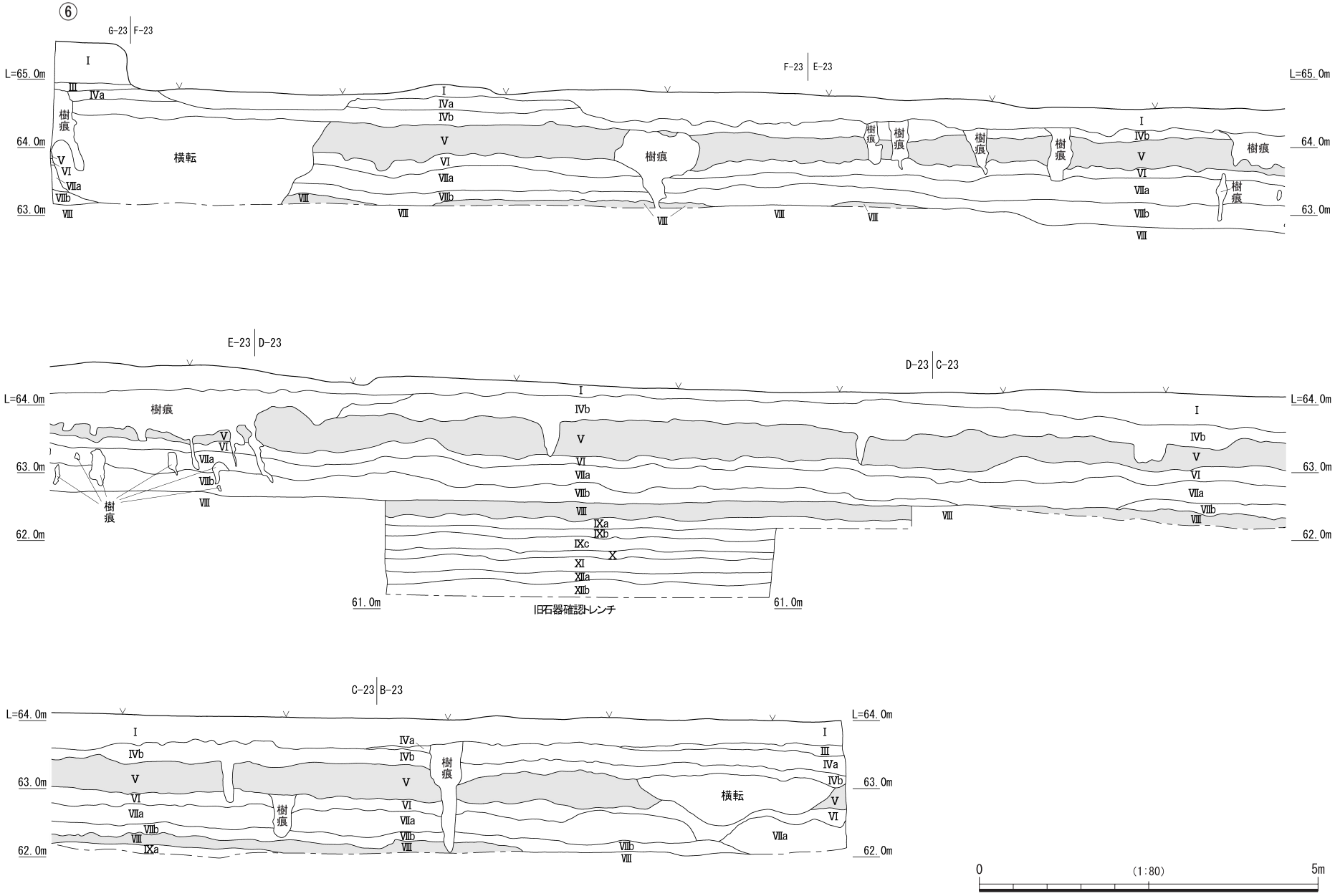
第６図　土層断面図（１）


④
F-30
F-31
F-32
L=65.0m
64.0m
63.0m
撹乱
樹痕
⑤
F-11
F-12
L=62.0m
61.0m
横転
F-12
F-13
L=63.0m
62.0m
F-13
F-14
F-14
F-15
F-15
G-15
G-16
L=64.0m
63.0m
62.0m
0
(1:80)
5m

第７図　土層断面図（２）


G-16
G-17
F-17
F-18
G-19
G-20
F-19
G-21
G-22
G-23
L=64.0m
L=65.0m
63.0m
62.0m
64.0m
I
II
III
IVa
IVb
V
VI
VIIa
VIIb
VIII
樹痕
横転
0
(1:80)
5m

第８図　土層断面図（３）


⑥
G-23
F-23
E-23
D-23
C-23
B-23
L=65.0m
L=64.0m
64.0m
63.0m
62.0m
61.0m
I
III
IVa
IVb
V
VI
VIIa
VIIb
VIII
IXa
IXb
IXc
X
XI
XIIa
XIIb
樹痕
横転
旧石器確認トレンチ
0
(1:80)
5m

第９図　土層断面図（４）

第Ⅳ章　調査の成果

第１節　旧石器時代の調査

１　調査の方法

旧石器時代の調査は，平成25年度・27年度の確認調査で若干の遺物が出土したが，旧石器時代の層に到達するまで現地表面から２ｍ以上あり，旧石器時代全体の層厚も約２ｍあったため調査が困難をきたし，旧石器時代の遺物の出土する範囲を特定できていなかった。また，串良川を隔てて所在する川久保遺跡で旧石器時代の遺物等の出土があることから，平成27年度以降の本発掘調査時に再度追加の下層確認調査を行い遺構・遺物の出土があった範囲について本調査を実施することとした。

調査は，Ⅷ層（薩摩火山灰層）までの調査を終了した後，地形等を考慮して38個のトレンチを設定して遺物の出土の有無を調べ，遺構・遺物の出土のあった箇所の周囲を必要に応じて拡張して本発掘調査を行った。

その結果，27区から31区にかけて３ヶ所のブロックを検出した以外遺構は検出されず，遺物の出土も少なかった。

検出したブロックは，Ⅻ～Ⅺ層にかけて槍先形尖頭器を主体とするもの，Ⅹ層～Ⅸ層でナイフ形石器・三稜尖頭器を主体とするもの，Ⅸ層で細石器を主体とするものである。第10・11図に出土の状況を示した。

この三つのブロックを下層から第Ⅰ文化層（Ⅻ～Ⅺ層），第Ⅱ文化層（Ⅹ～Ⅸ層），第Ⅲ文化層（Ⅸ層）と呼称して報告し，発掘調査時は調査の進捗に伴い検出した順番で番号を付したため，層順となっていないことから本報告では下層から順番に番号を付け直して報告する。新旧の対応は以下のとおりである。

新ブロック１（第Ⅰ文化層）→旧ブロック３
新ブロック２（第Ⅱ文化層）→旧ブロック１
新ブロック３（第Ⅲ文化層）→旧ブロック２

２　第Ⅰ文化層

（１）遺構

槍先形尖頭器を主体とするブロック１を検出したほか遺構等は検出されなかった。また，ブロック１内で４点の石器・剥片をまとめて置いたと考えられる剥片集中箇所１も出土した。

ブロック１（第11図）

Ｂ・Ｃ－27 ～ 29区で礫群を構成していたと考える安山岩の礫が数点とナイフ形石器，石器未成品，石器欠損品，剥片，微細剥片，ハンマー等石器製作にかかわる遺物が南北約10m×東西約17mの範囲で出土した。南側の調査区端まで遺物が出土していることから，ブロック１は，調査区外にも広がりを持つと考える。この箇所の遺物の出土層位がⅫｂ～Ⅺ層の三つの層にわたっているが，ブロック１以外での周辺の遺物の出土が希薄であるため，ブロック１の遺物が上層に浮いたものと考え，さらにS003，S012 ～ S014の石器の出土がⅫ層であることからブロック１の帰属する層はⅫ層と考える。

剥片集中箇所１（第10・11図）

掘込み等があることを考え慎重に調査したが確認できなかった。すべてがほぼ平坦な状態で，下位からの遺物の出土もなかったため，地面に直接置かれたものと考える。

４点の石器は，S003・S012が石器の天地が反して若干重なる形で検出し，S013・S014がこの２点より少し離れて不揃いな形で検出した。S003とS013が正面が上を向き，S012とS014が裏面が上を向いて検出した（図版２）。

（２）遺物（第12 ～ 17図　S001 ～ S034）

ブロック１

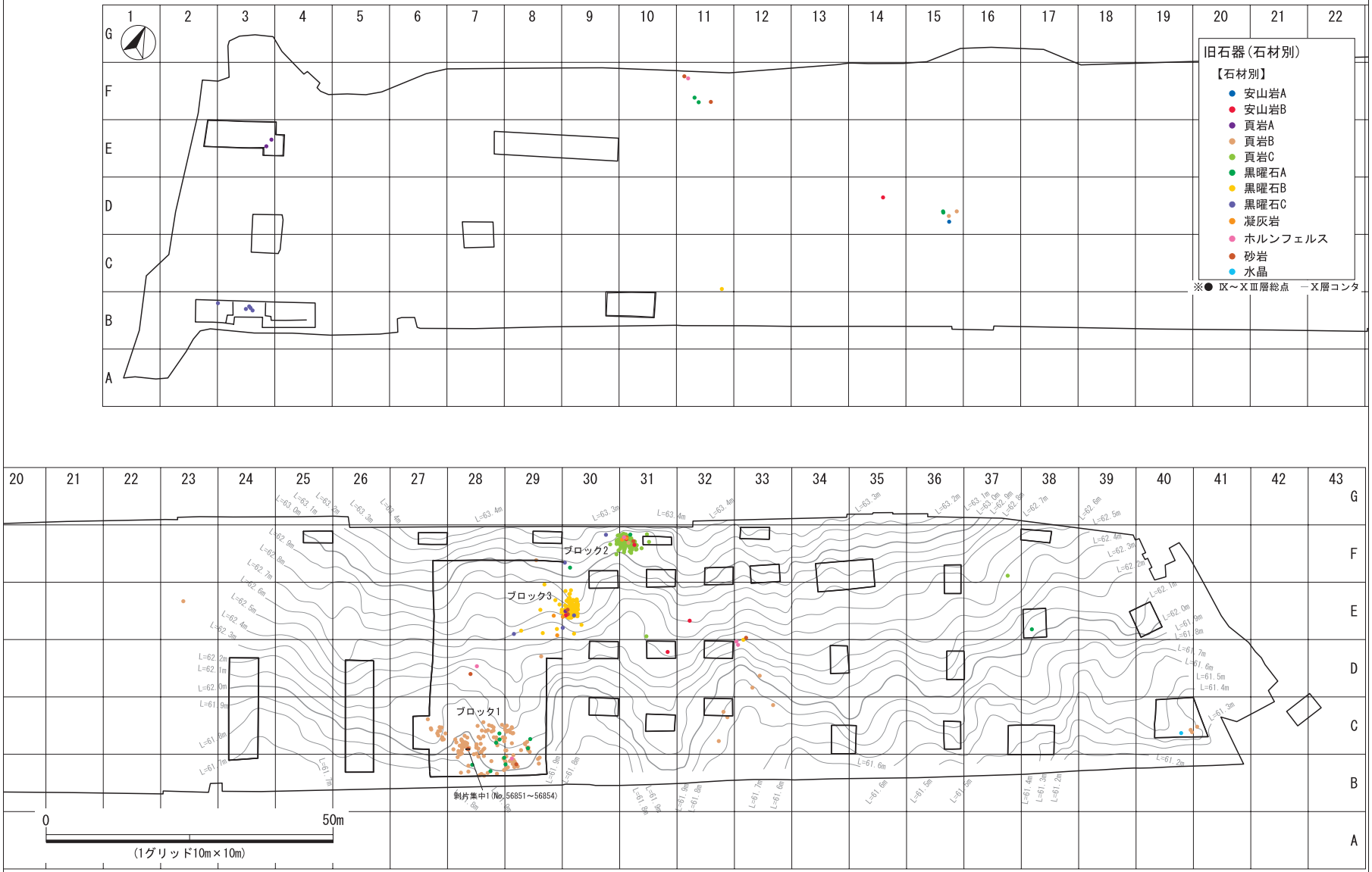
剥片集中箇所１からは，槍先形尖頭器を主体とする石器と素材剥片・微細剥片等が出土した。

石器の基質は黒色で青灰色の風化色で節理の多い頁岩を石材とする石器・剥片類を中心に出土しており，一連の剥離過程と製作工程を考察することが可能である。やや軟質な石材であり，いままで他の石器の石材としては適していないとされてきたが，共通の石材での剥片を利用する石器が存在することは，限られた資源の活用と労力の省力化として，ある意味で必然である。以下では槍先形尖頭器，ナイフ形石器・楔形石器・削器として説明するが，定型的な石器として成立するかどうかはさらに検討が必要である。石材は，S001・S032がホルンフェルス，S022・S024が三船産黒曜石，S034が砂岩である。他は当初に説明した頁岩である。

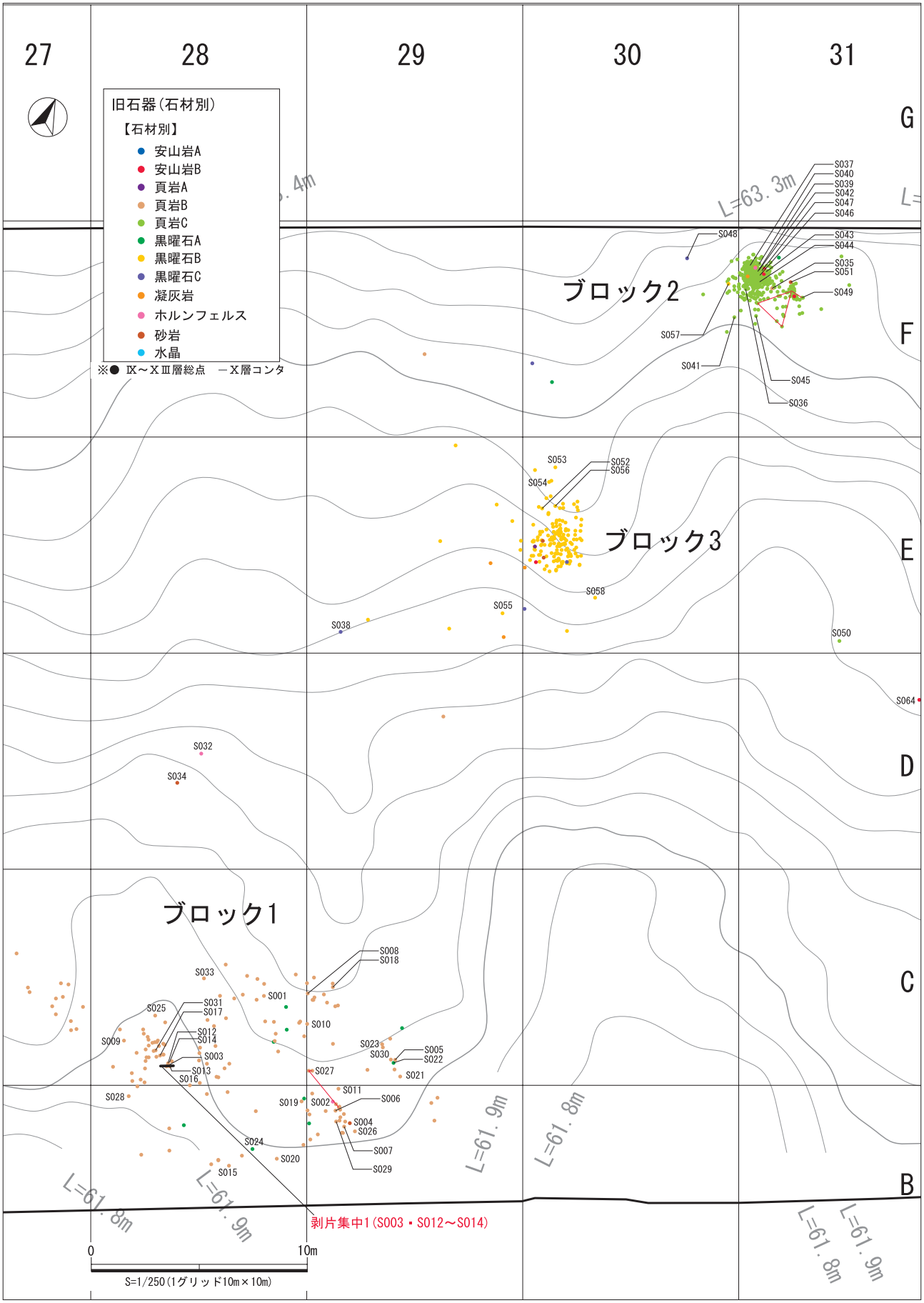
S001は剥片尖頭器で，基質が黒色で風化色が黄白色の節理の多いホルンフェルスを石材とする。縦長剥片を利用して，左側縁をブランティングして，基部に抉り状の整形剥離を行う。打点・打瘤は留置されている。取り上げ時に節理で三分した。基部の稜線が摩滅しているのが観察され，主要剥離面側には打瘤部と腹面に広く摩滅・輝斑[註1]がみられる。

S002 ～ S006は槍先形尖頭器[註2]である。S002は縦長剥片を素材とし，右側は剥片形状を生かしながら側縁は平坦剥離を行う。左側は背面側から急角度の剥離を入れ，打面側も厚さを減じるために，打面・打点を飛ばして整形剥離している。先端に刺突痕がある。基部側の稜線に摩滅痕がみられる。第18図にあるように左側縁側の基部と中位に円錐状の抉りと線状の抉りがみられる。中位の

※石材については，第29表『小牧遺跡石材分類表（P172）』を参照。



第10図　旧石器出土状況図（１）



第11図　旧石器出土状況図（2）

抉り部分の逆方向には剥離と顕著な摩滅痕跡が観察され，紐状のものでの結索痕跡の可能性を提起したい。以下いくつか同様の痕跡が観察される（→で第16図・第17図に呈示）。S003は，横長剥片を素材として，左側縁を急角度に整形剥離している。打面・打点は除かれている。背面側の稜部と腹面側の左側縁辺の下部と中位に摩滅痕が観察できる。第18図の写真に中位の円錐状の抉りがあり，同様の痕跡が３ヶ所にみられ，その反対側腹面には摩滅面が形成されている。S004は横長剥片を素材として，打面と打点を除去し，左側縁全体に急角度の整形剥離がなされる。基部は両側共に浅く抉られる。基部の両面の稜部と背面の稜の一部に摩滅痕がみられる。写真にあるように背面左側下位に円錐状の痕跡と右側に溝状の白くみえる痕跡があり，結索痕跡の可能性がある。さらに上位にもいくつか確認できる。S005は横長剥片を素材とし，右側を直線状に打面・打点除去しながら整形し，片側基部に抉り整形が見られる。先端を欠損した槍先形尖頭器と考えられる。中央稜部の中央と，主要剥離面側の打点側の厚いところと基部の一部に摩滅痕跡がみられる。S006は厚みのない剥片であるが，二側縁が整形剥離され，鋭い縁辺部をそのまま残すが先端が欠損する。基部の片側の抉りから尖頭器の可能性がある。主要剥離面側の身の厚い部分の稜部が摩滅して，左右縁辺に２ヶ所ずつ結索痕跡がみられる。

S007はやや横剥ぎの剥片であるが，打点・打瘤を除去して，一側縁に背面側からブランティングを施しており，先端部が折れたナイフ形石器である。腹面側の打瘤除去剥離の稜部に摩滅がみられる。

S008は先端部を使用した石器として，先端部を下位にしている。右側縁を急角度で整形して，鋭い先端部としている。

S009は縦長の素材縁辺をそのままに，基部にわずかに調整が行われる。右側縁に５ヶ所の鋸歯状のくり込み（円錐状の抉り）があり，基部の両側縁と背面の稜線に摩滅痕が見られる。折れているのは先端部と考えられる。結索痕とすれば片方が着柄部に埋入していることも考えられ，片刃の石器の可能性も考えられる。

S010は横長剥片を素材とし，打面と打点を除去して，そのところに抉りを作り，片側抉りの先端部欠損の槍先形尖頭器である。両側縁の整形は顕著ではない。基部側の稜線と腹面にわずかに摩滅痕がみられる。

S011は槍先形尖頭器の先端部とも考えられ，横長剥片を素材として，左側縁に整形剥離の痕跡がうかがわれる。腹面の稜に摩滅痕がみられる。

S012は，横長の目的剥片で，打面と打点を飛ばし，厚みを取った段階の剥片であろう。両面の稜部に摩滅痕がみられる。

S013も同様に横長剥片の腹面側の打面・打点を剥離している。両面の稜線や下位に摩滅痕がみられる。

S014は横長の素材剥片である。両面の稜部に摩滅痕がみられる。S012・S014からは，同一打面で同一方向から横長剥片を連続剥離したことが窺われる。また，S003に伴ってS012 ～ S014の剥片が出土しており，柳葉形石槍の目的剥片であることは明らかである。

S015は横長の剥片で，二次加工も顕著ではないことから素材剥片としたが，腹面の稜部に第19図の写真の線状痕を伴う摩耗痕跡があり，右側縁の鋭いエッジ部分が摩耗して面をなしている。また右側縁のエッジ部分には，微小剥離後に摩滅した痕跡がみられる。

S016は三角形の剥片であるが，背面の最も厚い部分の稜部と，腹面の広い光沢面があり，摩耗痕と考えられる。また，右側側縁のエッジも微小剥離後に摩耗により潰れている。S015は削器で，S016は槍先の可能性もある。

S017は横長剥片で折断部で，下位の両側縁が浅く抉られるように整形されている。槍先形尖頭器の基部の可能性がある。

S018は両側縁が整形されて，柳葉形の石槍の基部と考えられる。両面の稜部にわずかに摩滅痕がみられる。

S019は横剥ぎ剥片の底面側の節理面に，急角度で刃部と使用痕がある。その反対側のエッジはブランティングされており，削器とする。

S020は横長剥片で，背面左辺（剥片からすると折断部）に使用痕がみられる。反対側のエッジはブランティングされており，削器の可能性がある。稜部に摩滅痕が見られる。

S021は横長の剥片で，背面左側の側縁節理面の上にブランティングが入り，上辺に使用痕らしき剥離が見られる。削器であろう。

S022は気泡が多い三船産の黒曜石の剥片で，剥片形状のまま鋭いエッジに微細な剥離が見られる。使用痕剥片である。

S023は剥片の上下辺に複数回の剥離がみられ，楔形石器の可能性がある。

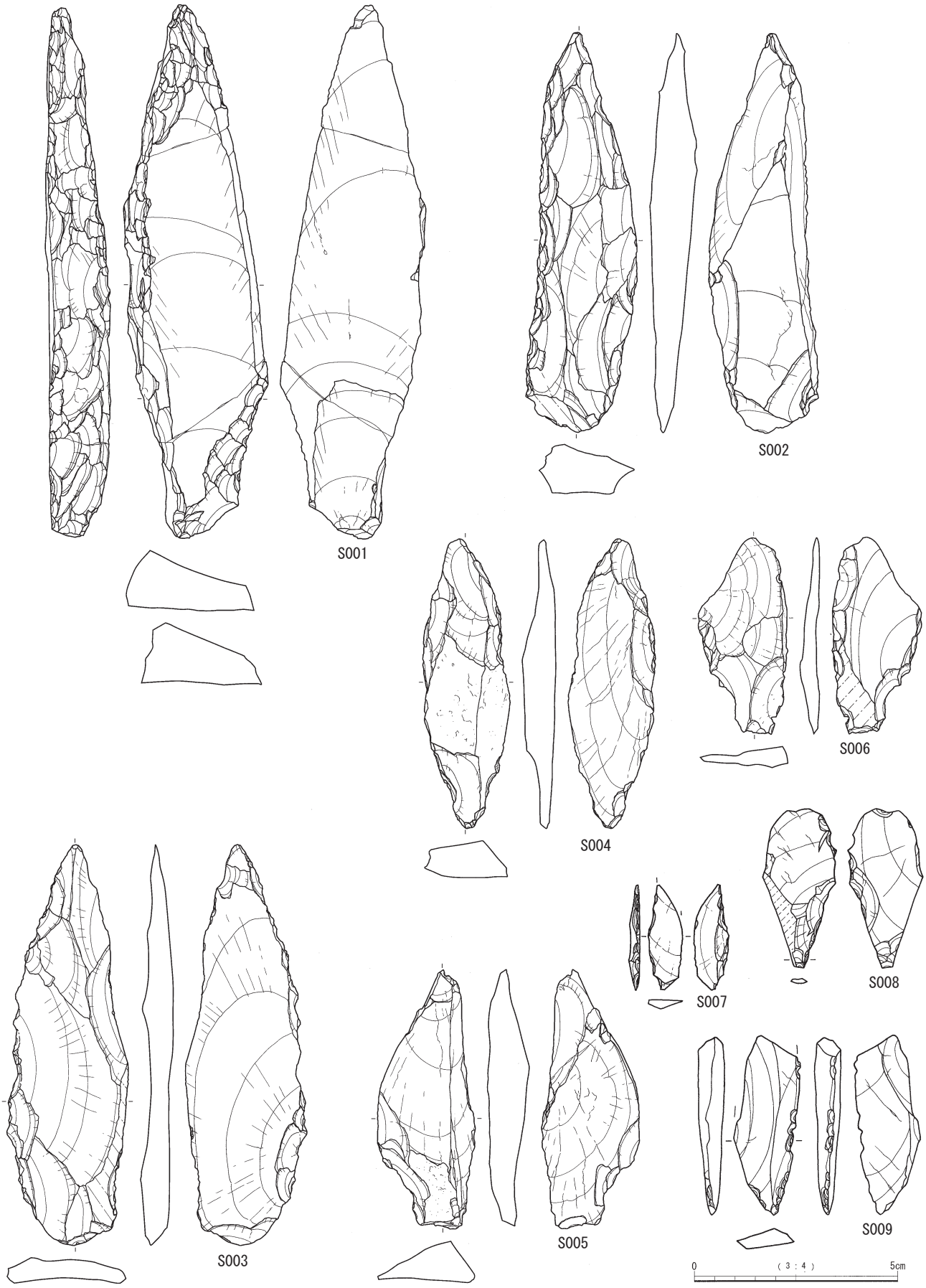
S024は三船産の黒曜石を剥片を素材として，下縁に急角度の刃部がつくられ，掻器である。

S025は横長剥片であるが，剥片形状のままで，背面の稜部と腹面の打瘤部と鋭い側縁に摩耗痕が見られる。下辺のエッジが摩滅により面をなしている。

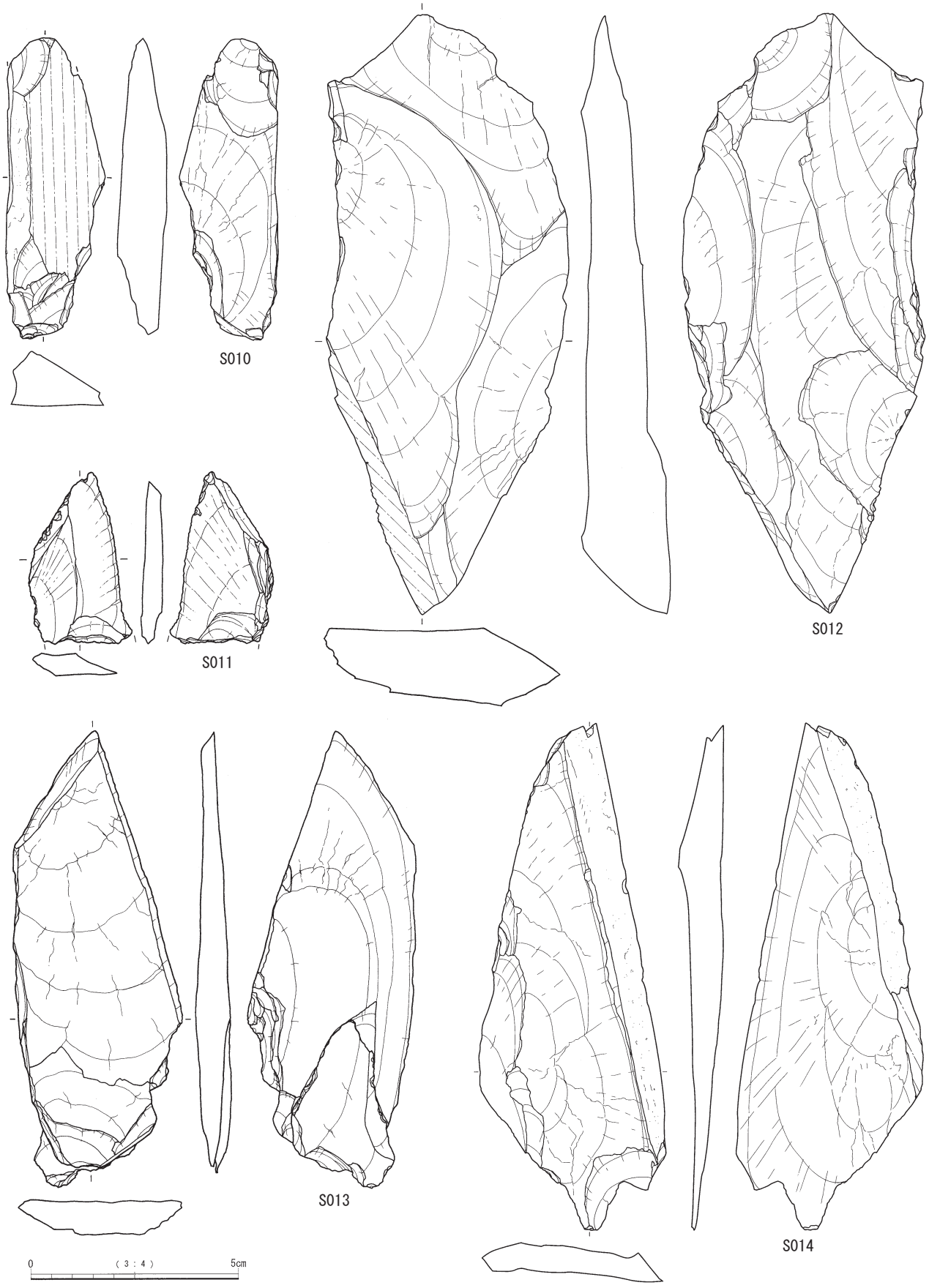
S026は横長剥片で腹面稜部と右側縁の刃部が摩耗で潰れている。削器の可能性がある。

S027は扁平な剥片であるが，腹面側の稜部と先端部と腹面側右側縁に摩耗痕がある。背部右側縁は，一部剥離がやや急角度であるが，平坦剥離で刃部として整形したものと判断した。削器と考えられる。

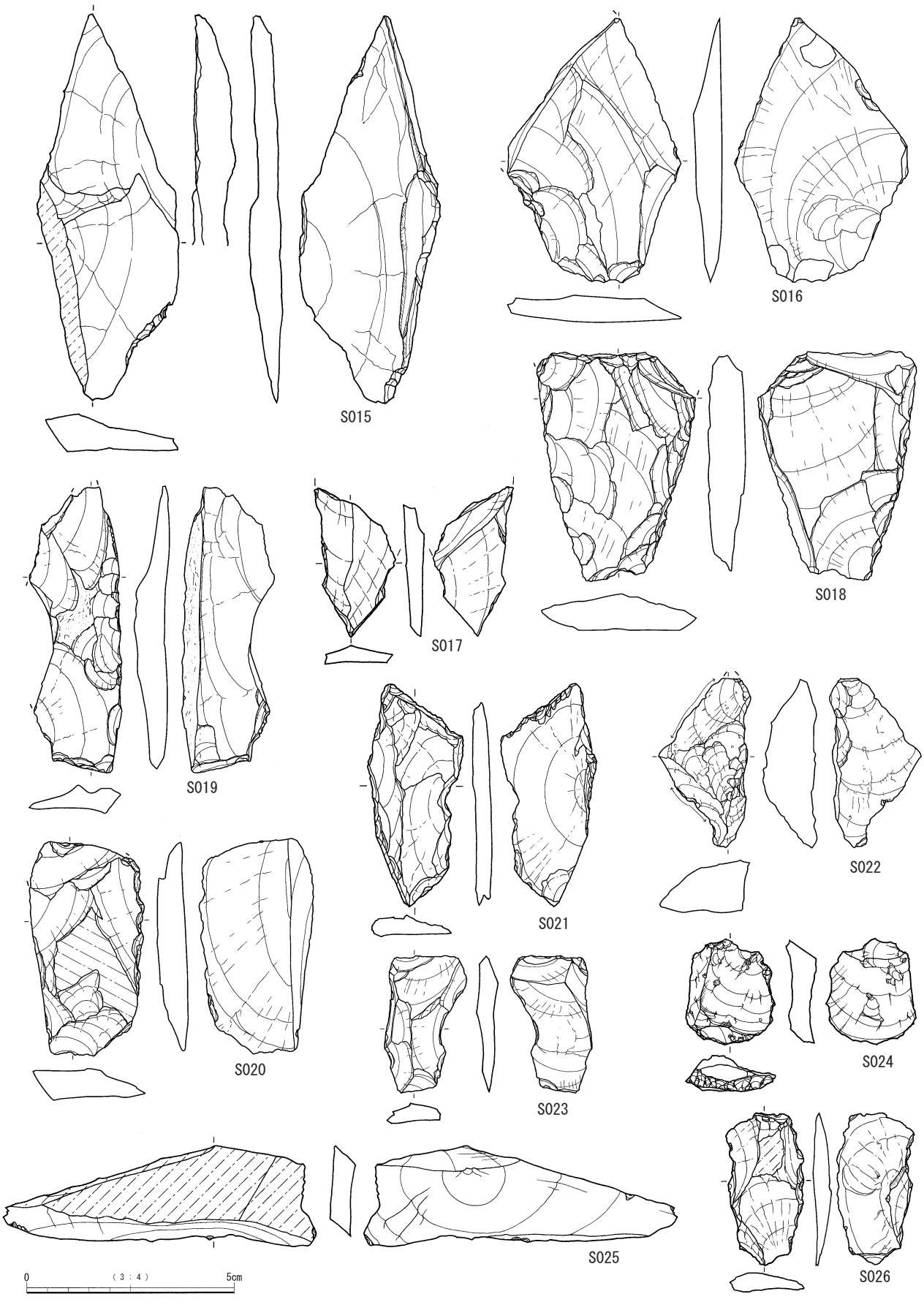
S028は横剥ぎの剥片，S029も横剥ぎの剥片であるが，左側縁に使用痕が見られる使用痕剥片である。



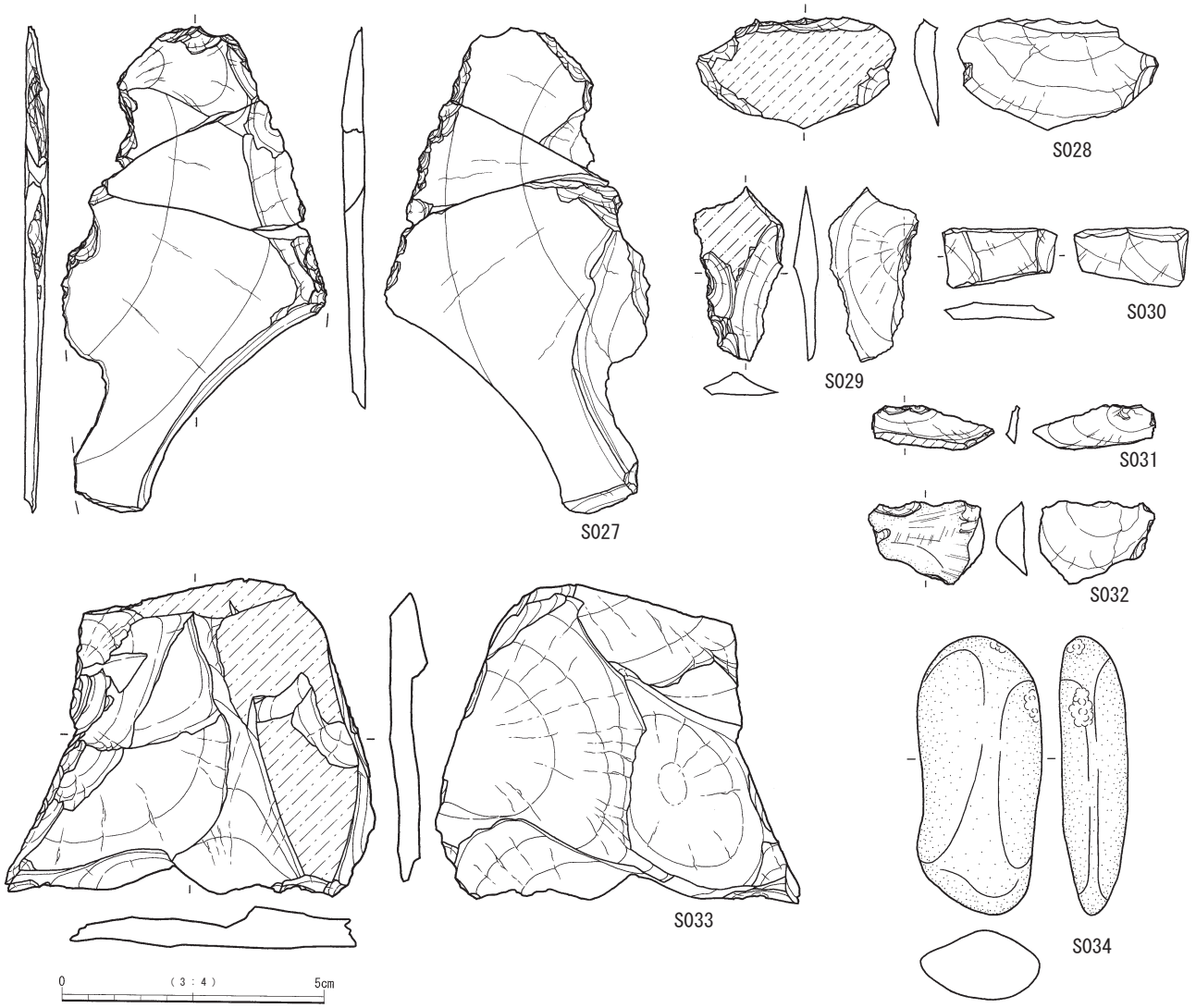
第12図　第Ⅰ文化層の石器（1）



第13図　第Ⅰ文化層の石器（2）



第14図　第Ⅰ文化層の石器（3）



第15図　第Ⅰ文化層の石器（４）

S030は剥片が折断されたものである。S031は横剥ぎの小剥片である。S032は礫面に擦痕がある。

S033は大きめの剥片であるが，節理に大きく影響されながら，剥離が行われている状況がうかがわれる。

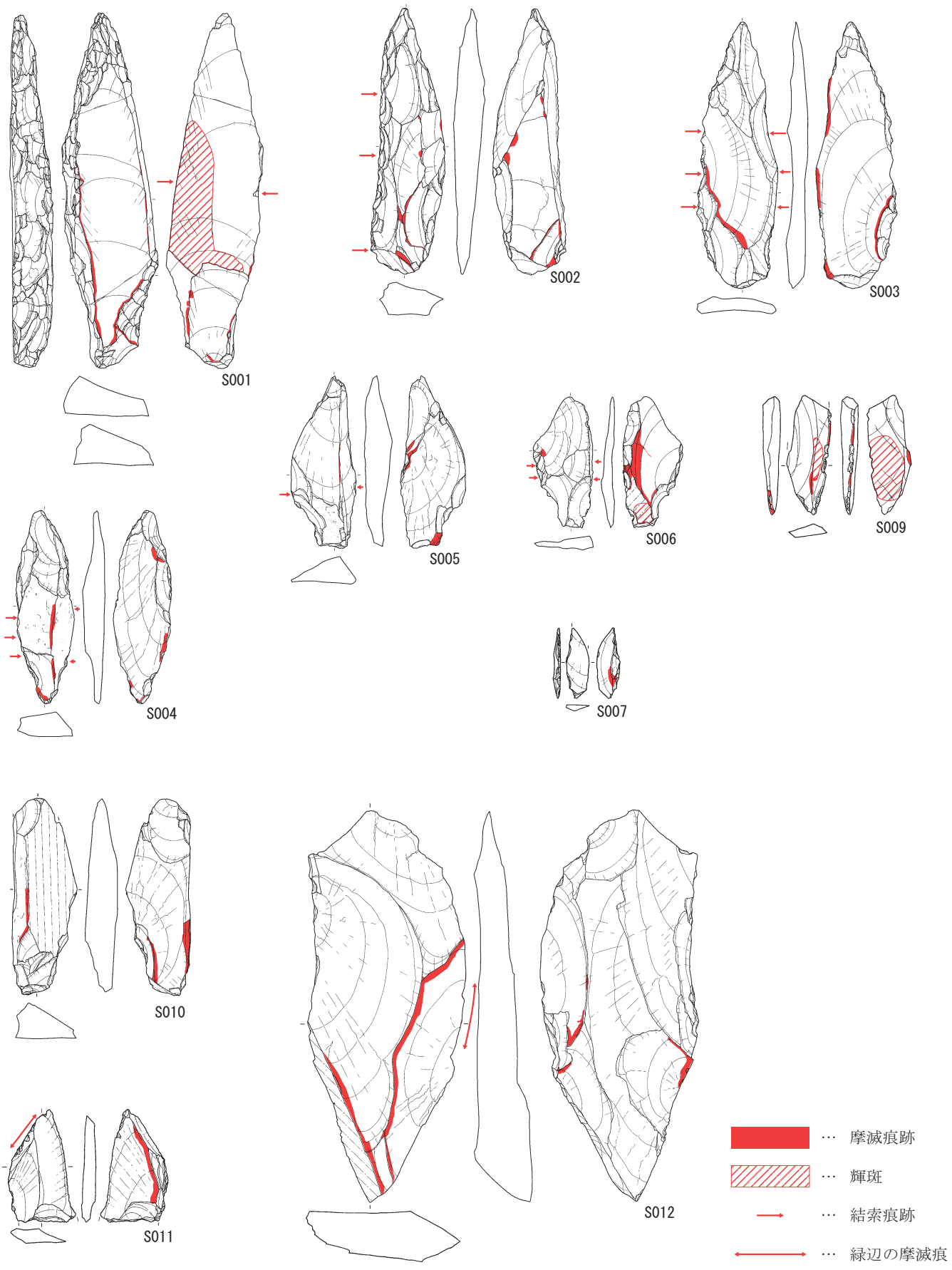
S034は砂岩の円礫で，先端と側面に打痕があり，ハンマーストーンと考えられる。

S003・S012～S014はまとまって出土しており，槍先形尖頭器の製作を目的に横剥ぎの剥片を剥出し，整形剥離を施していく。この過程で生じた剥片を利用して，槍先形尖頭器以外の側縁利用の石器や先端利用の石器を製作しているものと考えられる。

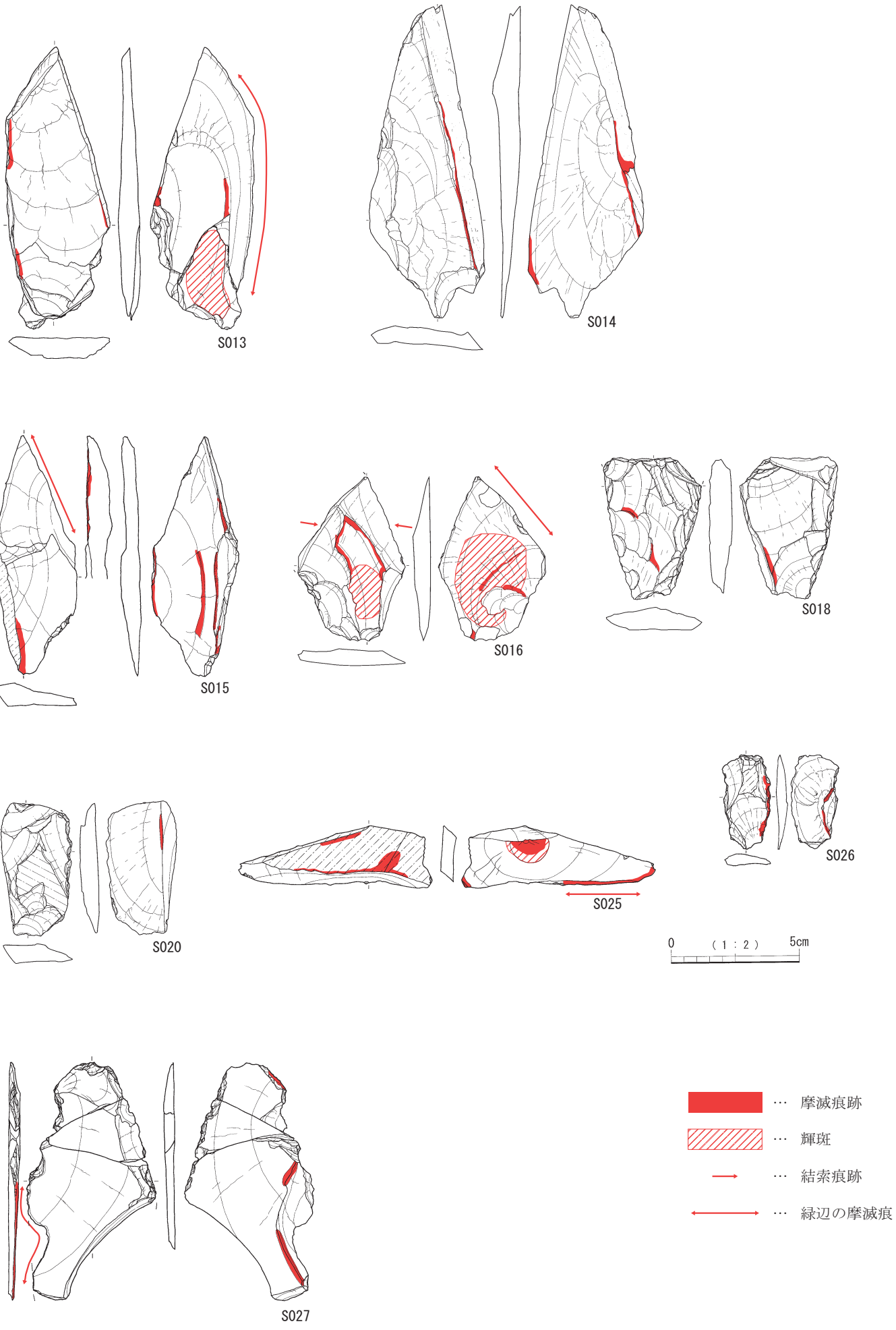
また，槍先形尖頭器は基部と判断される場所の稜部分に摩耗痕がみられ，削器としたものについては刃部と考えられる側縁と，稜部に摩耗が見られる。S015・S016・S026・S028のいずれも刃部と反対側の稜部に摩耗痕があり，また結索痕の可能性のある剥離（抉り）部分の存在から，これらは着柄の可能性を示す。S015・S016・S026は刃部も鈍ったように潰れているので，これらは使用によるものと考えられないだろうか。例えば大型獣の解体に際し，解体しやすいように長い柄を着装し，骨・軟骨等を解体し，刃部が鈍ってしまったと推測できないであろうか。

註１　着柄について御堂島氏らの研究により，着柄痕跡が形成された部位は，左右の側縁，基端縁，背・腹面の稜線やバルブ等の凸部，基端面であり，着柄によって輝斑が生じることや，併せて微小剥離痕跡・微小光沢面・線状痕跡等について実験結果が述べられている（御堂島2016）。このため用語はこれに準じたい。

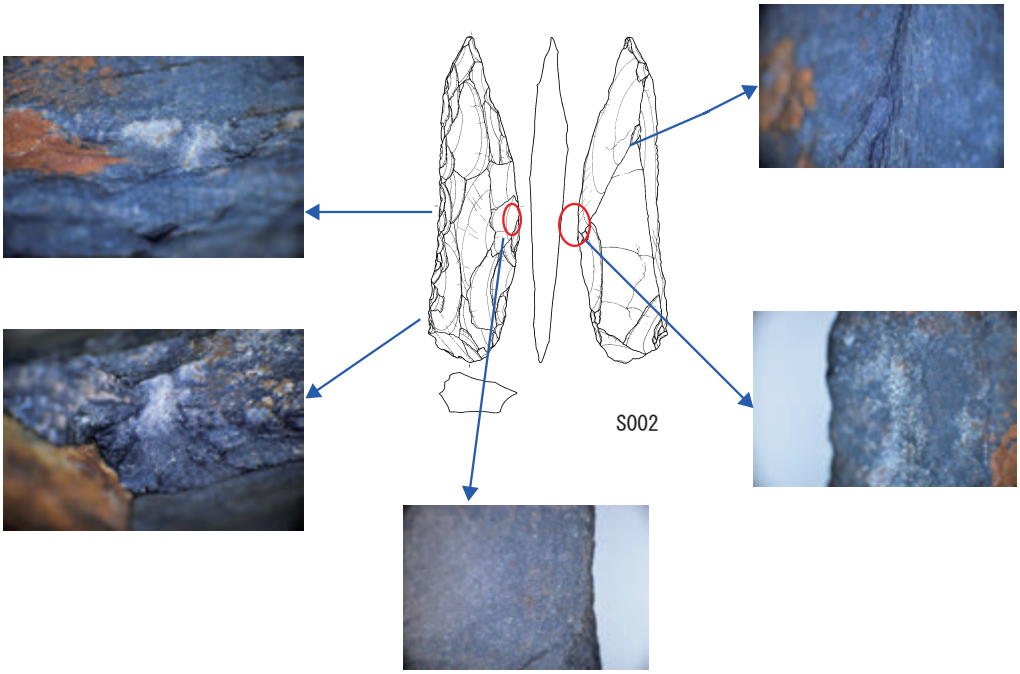
註２　槍先形尖頭器は両面加工を基本としており，平面形が木の葉形を呈している。ここでは，長野氏の定義（長野2003）により，ナイフ形石器ではなく，「小牧３Ａ型石槍」とし槍先形尖頭器とした。

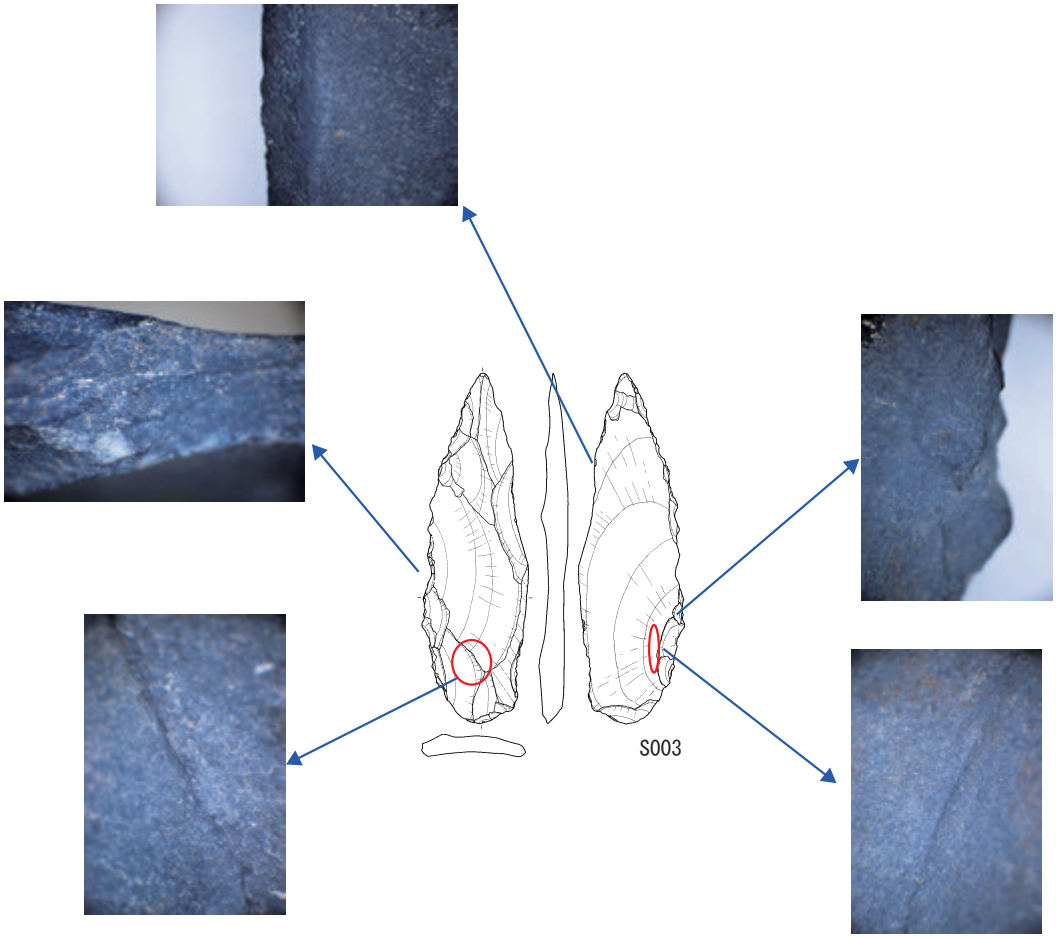


第16図　石器の摩滅痕跡等（1）



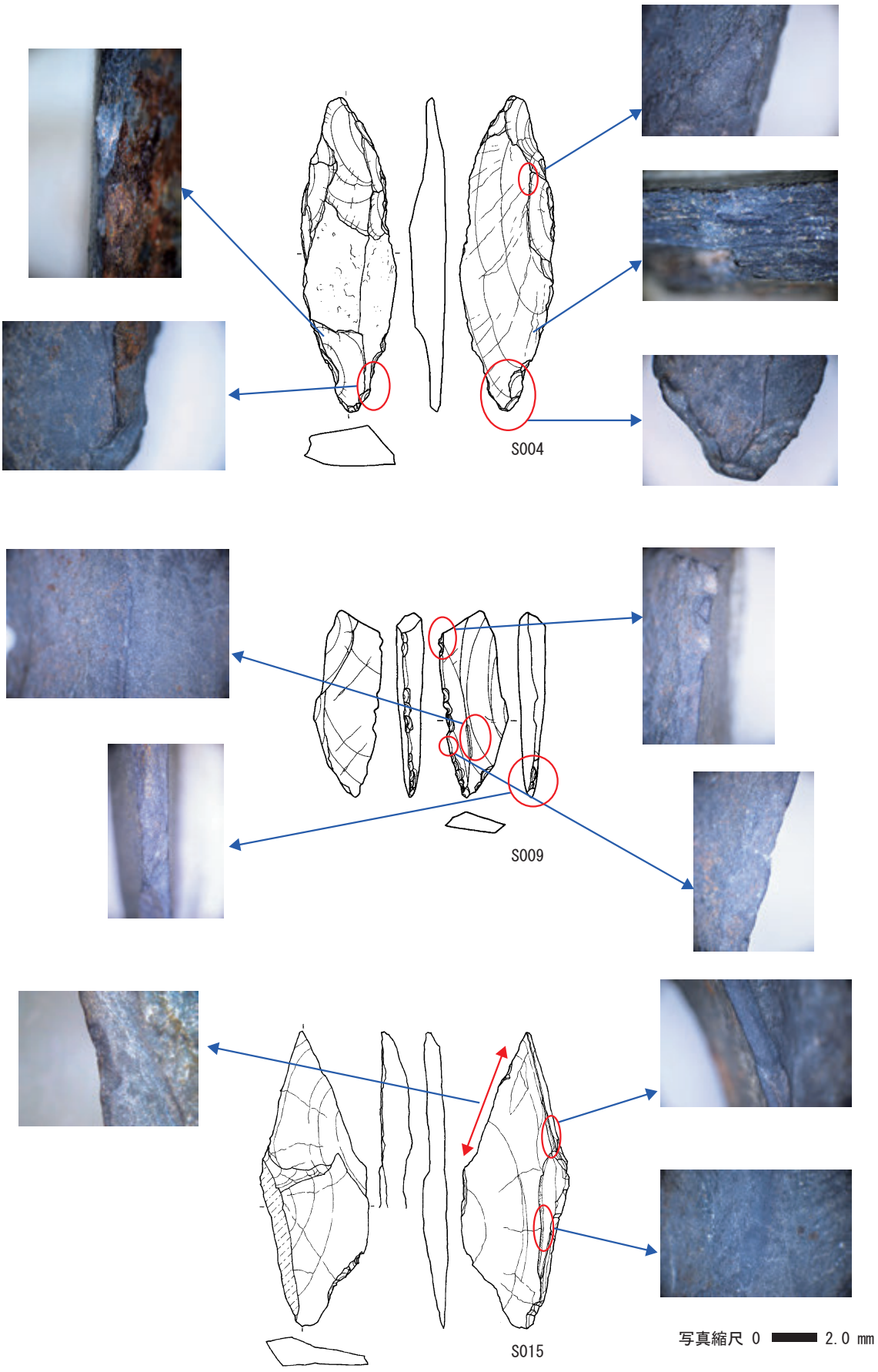
第17図　石器の摩滅痕跡等（2）



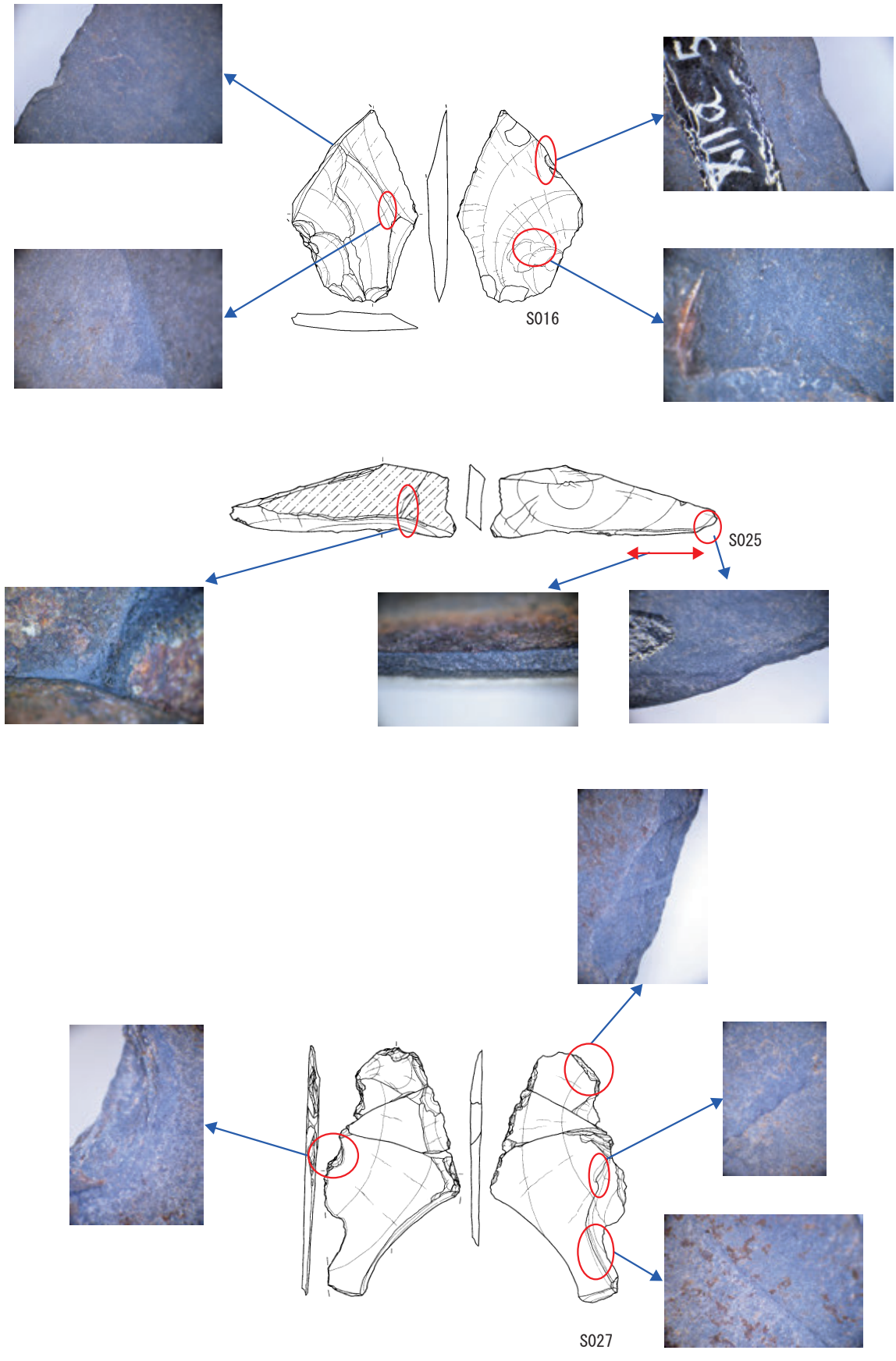


写真縮尺 0 2.0 mm

第18図　摩滅痕跡等写真（１）



第19図　摩滅痕跡等写真（2）



第20図　摩滅痕跡等写真（3）

第３表　石器観察表（第Ⅰ文化層出土）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層	ブロック名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	備考
12	S001	56708	C28	XIa	ブロック１	剥片尖頭器	131.70	36.00	14.80	65.02	ホルンフェルス	－	
	S002	56535	B29	XIIa	ブロック１	槍先形尖頭器	98.20	27.00	12.50	28.78	頁岩	頁岩Ｂ	鉄分付着
	S003	56853	C28	XIIb	ブロック１	槍先形尖頭器	99.00	30.00	6.50	19.78	頁岩	頁岩Ｂ	
	S004	56520	B29	XI	ブロック１	槍先形尖頭器	71.50	21.50	9.00	12.32	頁岩	頁岩Ｂ	鉄分付着
	S005	56630	C29	XI	ブロック１	槍先形尖頭器	64.00	24.00	10.50	13.29	頁岩	頁岩Ｂ	鉄分付着
	S006	56531	B29	XI	ブロック１	槍先形尖頭器	48.20	22.00	5.00	4.45	頁岩	頁岩Ｂ	鉄分付着
	S007	56523	B29	XI	ブロック１	ナイフ型石器	25.50	8.20	2.70	0.46	頁岩	頁岩Ｂ	
	S008	56662	C28	XI	ブロック１	先端使用石器	39.00	18.00	1.50	2.54	頁岩	頁岩Ｂ	
	S009	56794	C28	XIIa	ブロック１	先端使用石器	43.50	16.00	5.50	3.44	頁岩	頁岩Ｂ	
13	S010	56715	C28	XIa	ブロック１	槍先形尖頭器	73.00	24.00	13.00	22.00	頁岩	頁岩Ｂ	基部
	S011	56956	B29	XIIa	ブロック１	槍先形尖頭器	41.50	24.40	6.50	5.35	頁岩	頁岩Ｂ	先端
	S012	56852	C28	XIIb	ブロック１	素材剥片	144.50	57.60	19.00	144.90	頁岩	頁岩Ｂ	鉄分付着 S003と共に出土
	S013	－	－	－	ブロック１	接合資料	110.00	40.50	8.50	33.06	頁岩	頁岩Ｂ	
		56851	C28	XIIb	ブロック１	素材剥片	－	－	－	30.61			鉄分付着 柳葉形石槍の目的剥片か 接合　レイアウトNo.S013
		56850	C28	XIIb	ブロック１	素材剥片	－	－	－	2.45			
	S014	56854	C28	XIIb	ブロック１	素材剥片	122.00	45.00	9.50	46.59	頁岩	頁岩Ｂ	鉄分付着
14	S015	56973	B28	XIIa	ブロック１	削器	93.00	34.00	9.00	19.72	頁岩	頁岩Ｂ	
	S016	56596	B28	XIIa	ブロック１	槍先形尖頭器	64.00	41.90	7.00	14.78	頁岩	頁岩Ｂ	鉄分付着
	S017	56860	C28	IXb	ブロック１	槍先形尖頭器	36.00	19.00	4.40	3.71	頁岩	頁岩Ｂ	基部
	S018	56657	C29	XI	ブロック１	槍先形尖頭器	55.50	38.50	9.00	19.93	頁岩	頁岩Ｂ	基部　柳葉形
	S019	56553	B28	XI	ブロック１	削器	69.00	22.50	6.70	11.49	頁岩	頁岩Ｂ	鉄分付着
	S020	56561	B28	XI	ブロック１	削器	52.00	27.70	7.80	11.88	頁岩	頁岩Ｂ	鉄分付着
	S021	56627	C29	XI	ブロック１	削器	54.20	23.00	5.00	5.32	頁岩	頁岩Ｂ	
	S022	56629	C29	XI	ブロック１	二次加工剥片	41.00	22.20	12.70	7.61	黒曜石	黒曜石Ａ	
	S023	56634	C29	XI	ブロック１	楔形石器	33.20	19.70	4.70	3.29	頁岩	頁岩Ｂ	
	S024	56568	B28	XI	ブロック１	掻器	26.00	21.50	9.00	3.34	黒曜石	黒曜石Ａ	
	S025	56790	C28	XIIa	ブロック１	削器	24.00	75.00	6.00	12.11	頁岩	頁岩Ｂ	
	S026	56519	B29	XI	ブロック１	削器	37.00	18.40	4.60	3.05	頁岩	頁岩Ｂ	
15	S027	－	－	－	ブロック１	接合資料	92.50	50.50	4.80	17.50	頁岩	頁岩Ｂ	
		56530	B29	XIIa	ブロック１	削器	－	－	－	10.99	頁岩	頁岩Ｂ	
		56622	C29	XI	ブロック１	削器	－	－	－	2.81	頁岩	頁岩Ｂ	接合　レイアウトNo.S027
		56623	C29	XI	ブロック１	削器	－	－	－	3.70	頁岩	頁岩Ｂ	
	S028	56583	B28	XI	ブロック１	剥片	21.00	38.50	0.45	3.35	頁岩	頁岩Ｂ	
	S029	56525	B29	XI	ブロック１	使用痕剥片	33.50	17.10	4.30	1.78	頁岩	頁岩Ｂ	
	S030	56633	C29	XI	ブロック１	剥片	11.00	22.00	3.00	0.89	頁岩	頁岩Ｂ	
	S031	56858	C28	XIIa	ブロック１	剥片	8.50	23.50	2.50	0.46	頁岩	頁岩Ｂ	
	S032	56989	D28	X	ブロック１	研磨礫片	16.00	22.00	6.00	2.07	ホルンフェルス	－	
	S033	56671	C28	XIIa	ブロック１	剥片	60.00	70.60	8.20	31.21	頁岩	頁岩Ｂ	
	S034	56987	D28	XIII	ブロック１	ハンマーストーン	50.85	24.00	13.50	22.70	砂岩	－	

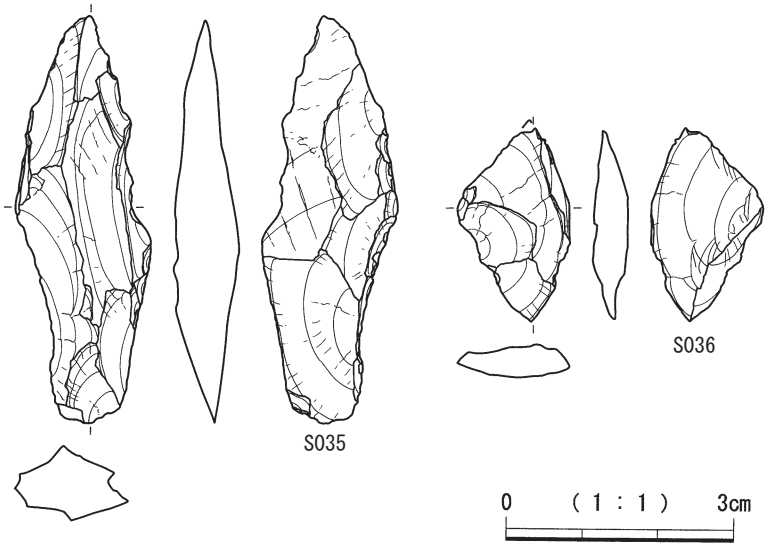
３　第Ⅱ文化層

第Ⅱ化層の調査では，ブロック１ヶ所を検出したほか，調査区全体の数か所のトレンチから少量の遺物の出土がみられた。

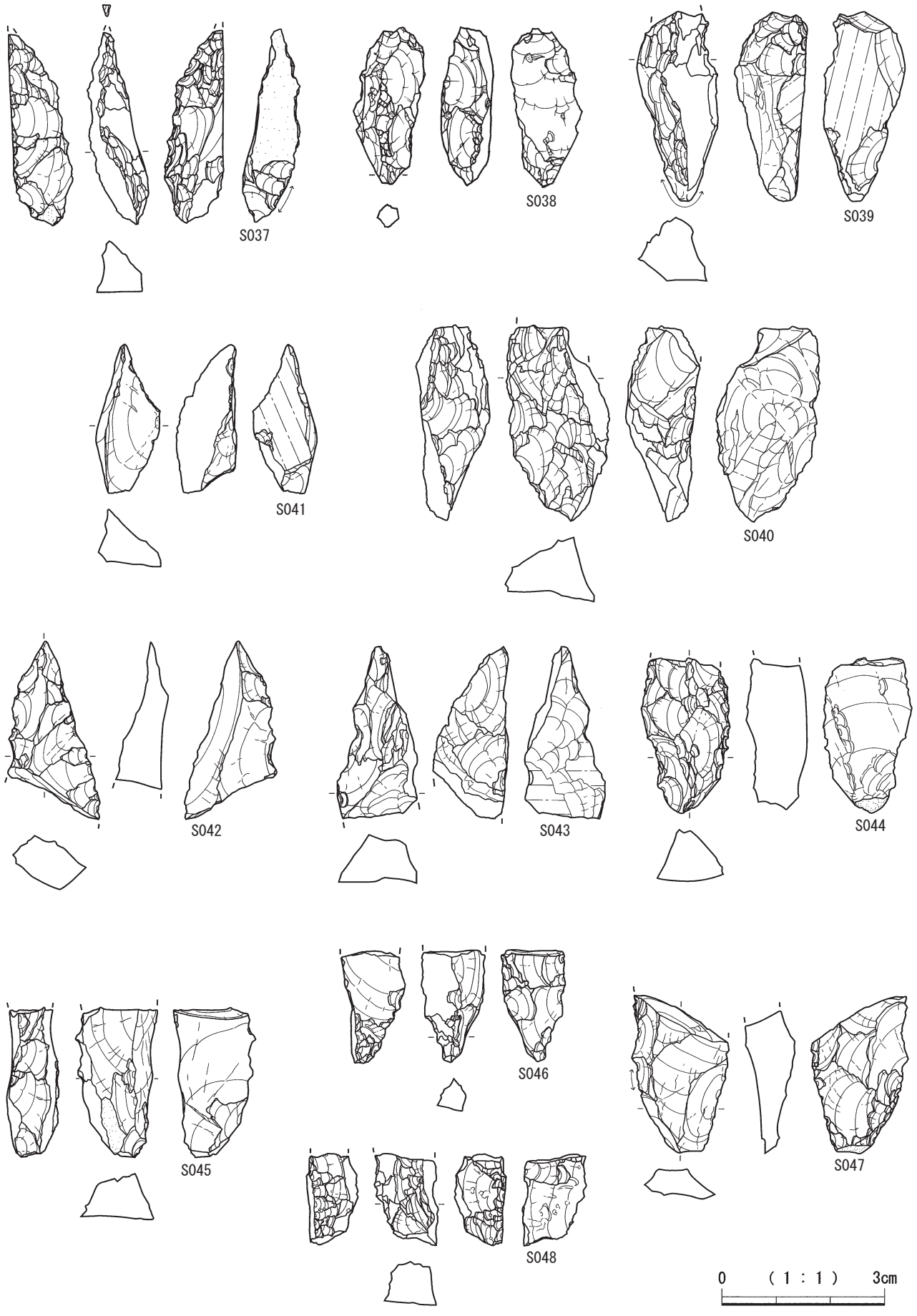
（１）遺構（第10・11図）

ブロック２

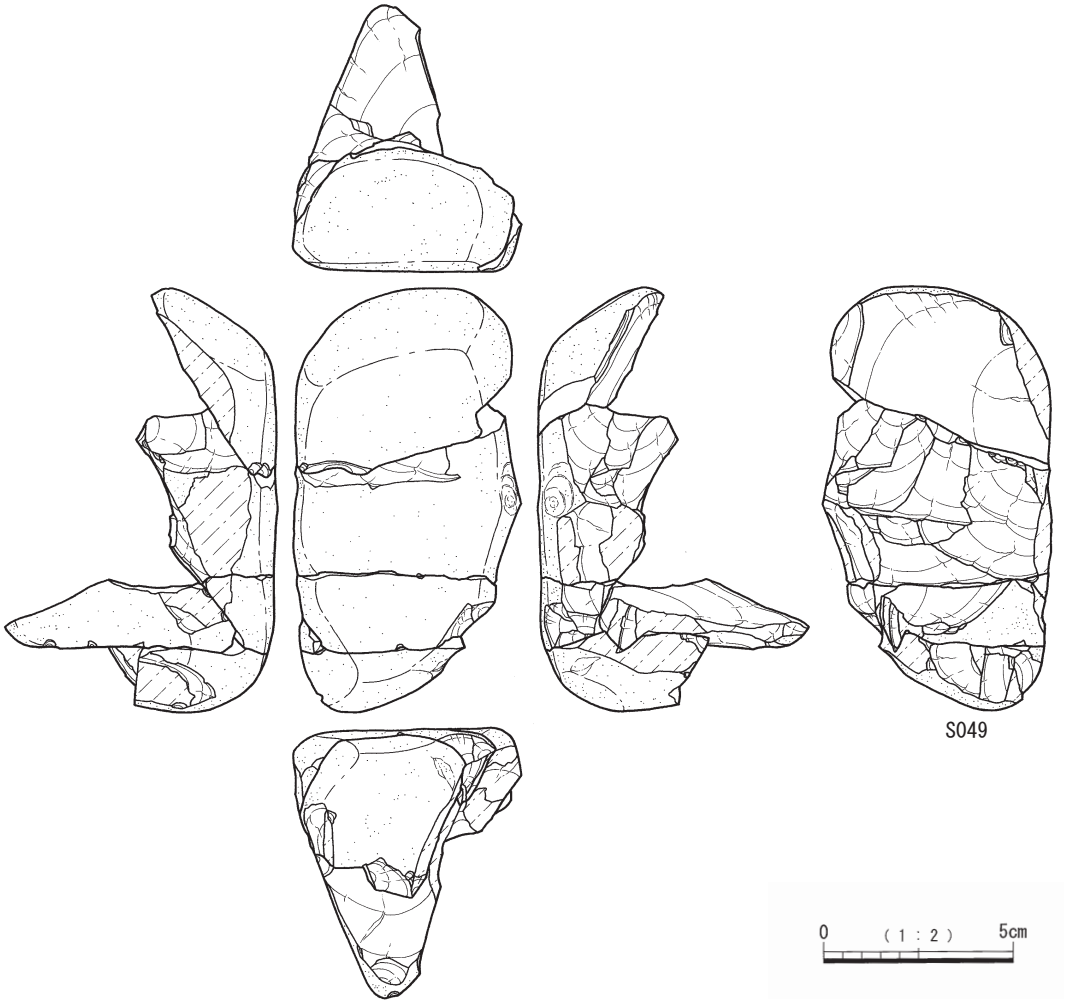
Ｆ－30・31区のＸ～Ⅸｂ層で三稜尖頭器・ナイフ形石器を伴うブロック２を検出した。石器，石器未成品，石器欠損品，剥片，微細剥片，石核，ハンマー等石器製作にかかわる遺物が東西方向に約５ｍ，南北方向に約４ｍにわたって出土した。礫群を構成していたと考えられる。礫の出土はなかった。遺物の出土層位がＸ～Ⅸｂ層の複数の層にわたっているが，ブロック２の遺物が現位置をとどめていないものと考え，遺物の出土が多いＸ層がブロック２の帰属する層と考える。

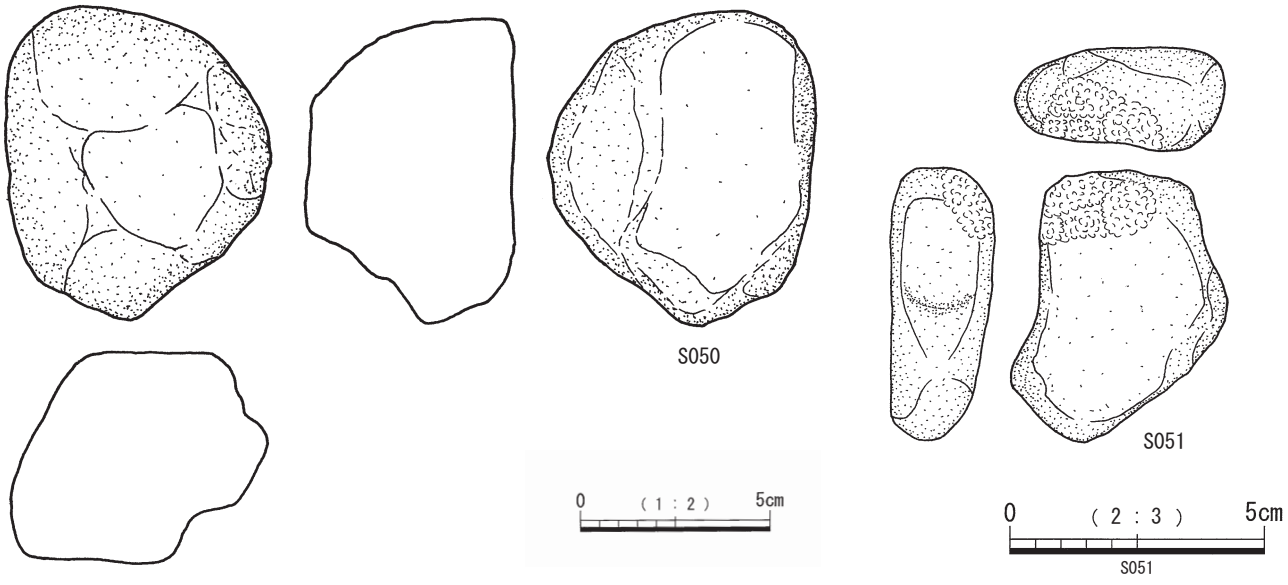


第21図　第Ⅱ文化層の石器（１）



第22図　第Ⅱ文化層の石器（2）





第23図　第Ⅱ文化層の石器（3）

（2）遺物（第21 ～ 23図　S035 ～ S051）

ブロック２からは，ナイフ形石器，三稜尖頭器，ハンマーと伴に打面調整・石器製作のための剝片，石器製作時の微細剥片・石核・原石などが出土している。

これらの素材となった岩石は，頁岩Ｃ類がほとんどである。その他は気泡の多い黒曜石である。剥片類についても同様で，黒曜石が数点ある以外は全て頁岩Ｃ類であり，ブロック２は頁岩Ｃ類の単一石材のブロックに近い。石器や剥片等に頁岩Ｃ類の中でも若干の違いがみられることから，用いた原石・石核は数個であったと考える。

S035は，頁岩Ｂ類の縦長剥片を素材とするナイフ形石器である。素材剥離時の打点は，残されていない。左側面に側縁加工が施され，微細な基部加工は施されていない。S037以降の石器との剥離の違いから，ナイフ形石器とした。

S036は，頁岩Ｃ類を素材とするナイフ形石器である。明瞭な側縁加工は施されず，少量の基部加工を施すのみの小型のナイフ形石器である。

S037 ～ S048は三稜尖頭器である。全て縦長の剥片で，主に頁岩Ｃ類を素材としているが，S038，S048は気泡の多いの黒曜石Ｃ類を素材としている。これらは，断面形状が三角形を呈するものばかりでなく，四角形状を呈するものも多いが，S037・S038・S040・S044が製作意図の基本形状であり，使用している石材が微細な節理が多いものであるため石材の特性により四角形状を呈していると考え三稜尖頭器と判断した。

S037は，ほぼ完全形で先端部をわずかに欠いている。背面に自然面が大きく残り，断面は四角形状をしており，基部・側縁に細かい加工が施される。ブロック２の三稜尖頭器では形状の良いものである。

S038 ～ S040は，先端部のみで下半部を欠くものである。

S039は背面に節理面をよく残し，S040は背面に剥離面をよく残している。

S040は節理面を若干残すものである。

S041 ～ S043は先端部のみのものである。

S041・S043が背面に節理面を残し，S042は背面にも大きな加工が施されている。

S044 ～ S048は下半部のみのものである。

S044・S045・S047は背面に節理面・剥離面をよく残し，S046・S047は背面に大きな剥離が入るものである。

また，S042・S047は背面の剥離からS035のようなナイフ形石器の可能性もある。

S049は，ブロック２内の剥片が接合した資料である。第23図で正面とした礫上部から剥離を行い，縦長の剥片を剥離していった工程が分かる資料である。

ブロック２からは，多くの調整剥片や微細剥片が出土し，全点について接合を試みたが，接合するものはS049の１点のみであった。

S050は，ブロック２の周辺で出土した。頁岩Ｃ類の原石で縦約8.2cm×横約7.5cm×高さ約5.5㎝を測る。S049に比べると丸みを帯びている。持ち込んだものの石質が悪いため破棄された可能性がある。

第４表　石器観察表（第Ⅱ文化層出土）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層	ブロック名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	備考
21	S035	102273	F31	X上	ブロック２	ナイフ形石器	53.50	17.70	10.00	5.93	頁岩	頁岩B	
	S036	102189	F31	Ⅸc	ブロック２	ナイフ形石器	25.50	14.70	4.50	1.56	頁岩	頁岩C	
22	S037	102404	F31	X上	ブロック２	三稜尖頭器	35.20	11.00	11.00	3.16	頁岩	頁岩C	
	S038	56477	E29	Ⅸ	ブロック２	三稜尖頭器	28.00	13.50	10.00	2.79	黒曜石	黒曜石C	
	S039	102689	F31	X上	ブロック２	三稜尖頭器	35.00	15.00	13.50	5.52	頁岩	頁岩C	
	S040	102262	F31	X上	ブロック２	三稜尖頭器	36.00	19.00	14.00	8.45	頁岩	頁岩C	
	S041	102159	F30	Ⅸb	ブロック２	三稜尖頭器	27.20	11.70	10.50	2.57	頁岩	頁岩C	
	S042	102602	F30	X上	ブロック２	三稜尖頭器	32.50	17.00	9.70	3.21	頁岩	頁岩C	
	S043	102265	F31	X上	ブロック２	三稜尖頭器	31.50	14.70	14.00	4.98	頁岩	頁岩C	
	S044	102232	F31	Ⅸc	ブロック２	三稜尖頭器	28.50	16.20	11.50	5.30	頁岩	頁岩C	
	S045	102246	F31	Ⅸc	ブロック２	三稜尖頭器	27.50	15.00	10.00	4.53	頁岩	頁岩C	
	S046	102456	F32	X	ブロック２	三稜尖頭器	20.50	11.50	10.09	2.19	頁岩	頁岩C	
	S047	102228	F31	Ⅸc	ブロック２	三稜尖頭器	29.00	17.50	9.50	4.09	頁岩	頁岩C	
	S048	102171	F30	Ⅸc	ブロック２	三稜尖頭器	17.00	12.00	10.00	1.93	黒曜石	黒曜石C	
	S049	102242	F11	Ⅸc	ブロック２	石核	112.20	60.00	71.60	290.70	頁岩	頁岩C	５点接合資料
		102279											
		102287											
		102391											
		102435											
	S050	105243	E31	Ⅸb	ブロック２	原石	82.00	75.00	55.00	406.00	頁岩	頁岩C	
	S051	102432	F31	X	ブロック２	ハンマー	55.00	42.50	20.00	68.42	砂岩	砂岩	

S051は，砂岩製のハンマーである。上位左側に敲打痕が良く残る。S051以外にはハンマーは出土していない。

その他，図化しなかった遺物の一部を図版41下段に示した。自然面や節理面が多く残る剥片が多かった。うち左下のものは三稜尖頭器の加工途中に破損したものである可能性がある。

これらの遺物の観察から，ブロック２は数個の原石を持ち込み，素材を剥離し，微細加工を施して三稜尖頭器を主に製作したものであり，石器製作時に破損したものや石器製作に不向きであった剥片はブロック２に残していったものであると考えられる。

４　第Ⅲ文化層

第Ⅲ文化層の調査では，ブロック１ヶ所を検出したほか，調査区全体の数ヶ所のトレンチから少量の遺物の出土がみられた。

（１）遺構（第10・11図）

ブロック３

Ｅ－30区Ⅸ層で細石刃核を伴うブロック３を検出した。

細石刃核４点，掻器１点，ブランク１点と伴に細石器を剥離した後の剥片，剥離後細石器を作出しなかった剥片，打面調整剥片，石器製作時の微細剥片・石核が出土している。（Ｐ40写真１，図版42）

これらの石器の素材となった岩石は，黒曜石Ｂ類がほとんどである。

（２）遺物（第24図・25図　S052 ～ S058）

ブロック３からは，S052 ～ S055の４点の細石刃核が出土した。S052 ～ S054は表面の光沢が鈍く不純物が少ない黒曜石Ｂ類であり，S055は風化により表面が褐色を帯びる黒曜石Ｂ類である。S052・S053には側面に自然面・節理面が残るが，S054・S055はいずれも自然面や節理面を残していない。４点全てが上面から見て略四角形を呈するように加工を施して成形した後，細石器を剥離している。

S052とS053は細石器の剥離が多く，正面形が四角形状・側面形が三角形状を呈している。

また，S052の下部は節理面で割れており，S053は厚みのある剥片素材の上面に後方と横方向からの剥離による打面成形が行われている。

S054とS055は，比較的細石器の剥離が少なく，側面形状が略四角形状を呈している。

S054は打面調整等は施されず，細石器の剥離面は丸みを帯びた逆正三角形状を呈している。

S055は厚みのある剥片素材に打面を正面側からの剥離により作出し，打面端部への再調整を加え，下縁調整を施している。

S056は，下部を使用している可能性がある剥片である。黒曜石Ｂ類を素材としている。

S057は，掻器の可能性がある剥片である。黒曜石Ｂ類を素材としている。

S058はブランクである。黒曜石Ｂ類を素材としており，上面形が略四角形を呈するように剥離が施されている。正面は自然面を残し，楔形に近い形状で上面には横方向からの剥離が加えられ，下部に下縁調整が施されている。

Ｐ40写真１にその他の剥片類や細石器を割り採った後の残片と考えられる剥片類を示している。

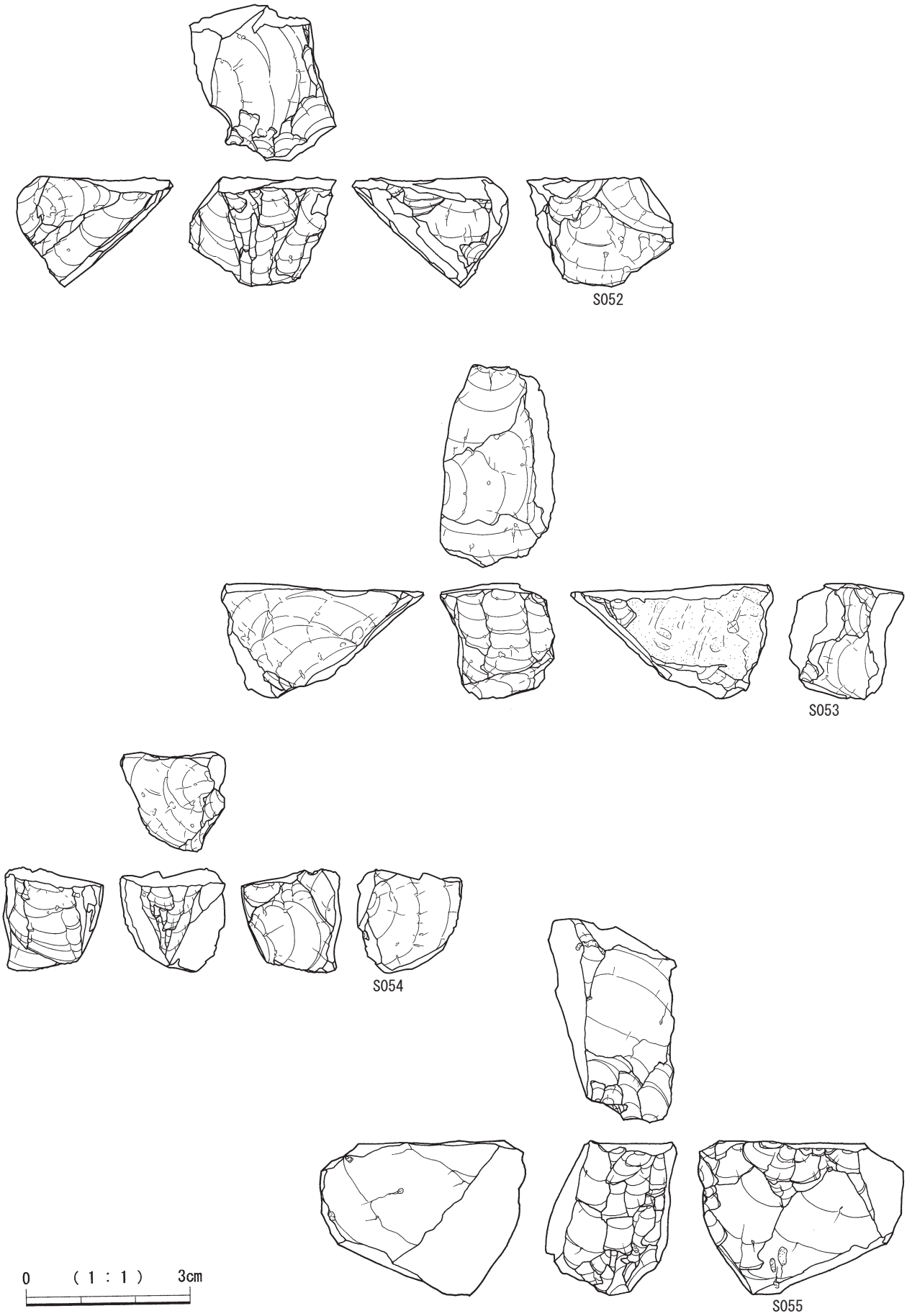
剥片や石核には自然面が残るものが多くみられた。

これらの遺物の観察から，ブロック３は数個の原石または石核を持ち込み，細石刃核を作成し，細石器を主に製作したものであり，石器製作時に破損したものや石器製作に不向きであった剥片はブロック３に残していったものであると考えられる。しかし，S054・S055はまだ細石器の剥離が可能であると考えられ，S056・S057はまだ十分使用可能なものである。

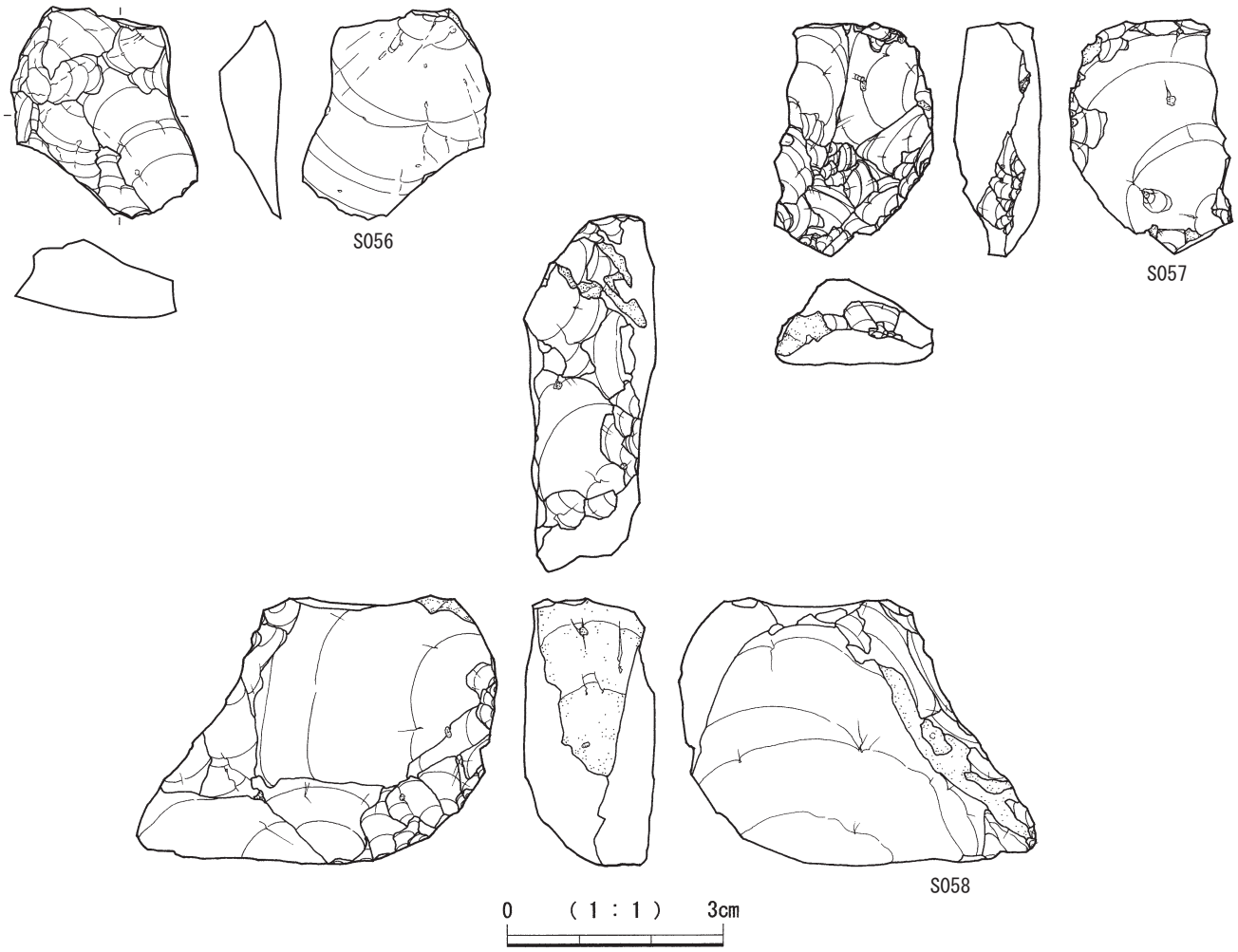
小牧遺跡と串良川を挟んで対岸に所在する川久保遺跡の細石器文化期の細石刃核の形状を比較すると，小牧遺跡は一つのブロックから出土した４点と後述する１点の接合資料の合計５点のみで上記したものあるが，川久保遺跡では畦原型の細石刃核が出土していることから，小牧遺跡と川久保遺跡で川を挟んで異なる細石刃核が出土している。

第５表　石器観察表（第Ⅲ文化層出土）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層	ブロック名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	備考
24	S052	105367	E30	Ⅸa	ブロック３	細石刃核	20.00	27.00	29.00	12.08	黒曜石	黒曜石Ｂ	
	S053	105343	E30	Ⅸa	ブロック３	細石刃核	21.00	21.00	37.50	15.30	黒曜石	黒曜石Ｂ	
	S054	105341	E30	Ⅸa	ブロック３	細石刃核	19.00	19.00	18.00	6.67	黒曜石	黒曜石Ｂ	打面再生を行う
	S055	56473	E29	Ⅸ	ブロック３	細石刃核	28.00	24.00	37.50	24.32	黒曜石	黒曜石Ｂ	
25	S056	105337	E30	Ⅸa	ブロック３	剥片	29.00	26.00	11.00	7.02	黒曜石	黒曜石Ｂ	
	S057	102158	F30	Ⅸb	ブロック３	掻器	32.00	22.00	12.00	7.25	黒曜石	黒曜石Ｂ	
	S058	105240	E32	Ⅸb	ブロック３	ブランク	37.00	18.00	50.00	32.04	黒曜石	黒曜石Ｂ	



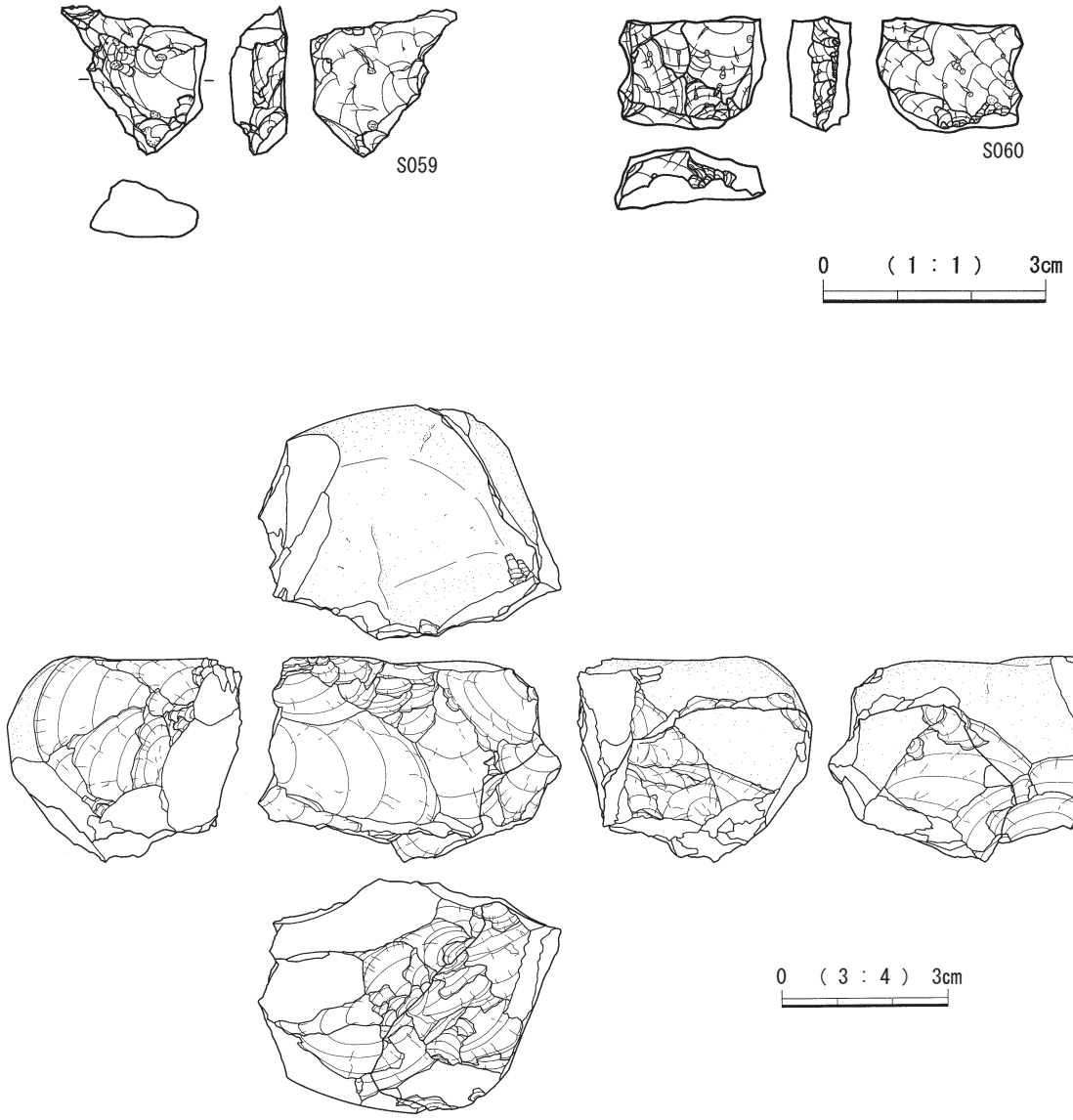
第24図　第Ⅲ文化層の石器（1）



第25図　第Ⅲ文化層の石器（2）



写真1　第Ⅲ文化層の非掲載遺物



第26図　旧石器時代その他の石器（１）

５　その他の遺物（第26・27図　S059 ～ S064）

１の調査の方法でも記したが，旧石器時代の調査はⅧ層（薩摩火山灰層）までの調査を終了した後，地形等を考慮してトレンチを設定して遺物の出土の有無を調べ，遺構・遺物の出土のあった箇所の周囲を必要に応じて拡張して本発掘調査を行った。その結果，ブロック１～３以外にもいくつかのトレンチから旧石器時代の遺物の出土があった。

S059はＢ－３区のⅨa層で出土した黒曜石Ｃ類を素材とするナイフ型石器である。基部と側縁に背面から加工を施している。

S060は，Ｄ－33区のトレンチで出土した黒曜石Ｂ類を素材とする掻器の可能性もある。四角形に整える加工が施されている。

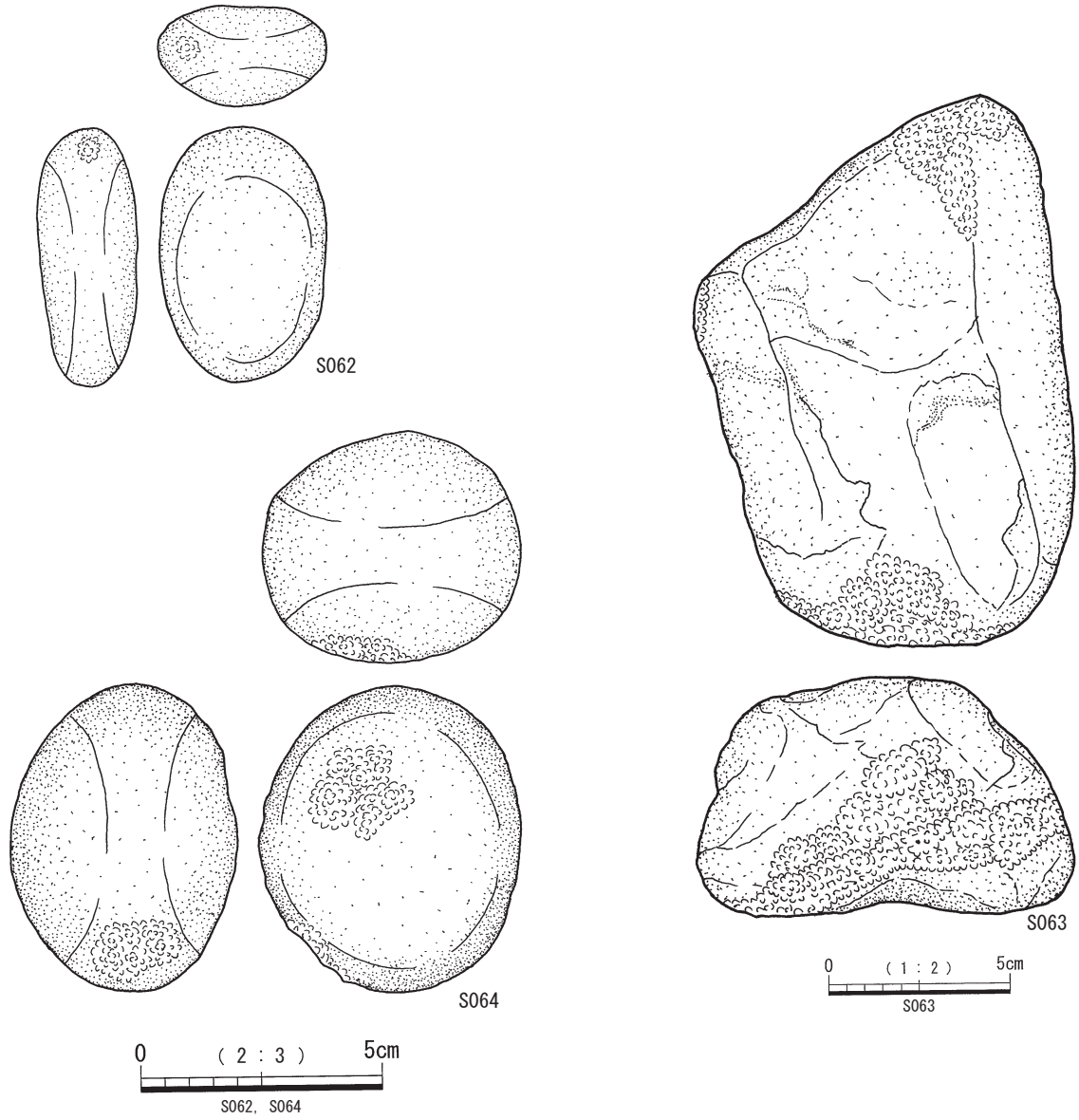
S061は，Ｅ－２・３区のトレンチで出土したオリーブ色を呈する頁岩Ａ類の接合資料である。すぐ近くに同一石材の剥片も出土したが接合しなかった。S061もS052～S055と同様の形状の細石刃核の作成を目的としたと考えるが，細石器の剥離は行われておらず，製作に失敗し放棄したものである可能性がある。

S062は，Ｅ－32区のトレンチで出土した安山岩を素材とするハンマーである。扁平な形状の自然石を未加工で利用しており，上部に僅かに敲打の痕跡が観察できる。

S063は，Ｅ－33区のトレンチで出土した砂岩を素材とする敲石である。大型で不定形な自然石を未加工で利用しており，この石材の中で細い箇所である下面や側面でよく敲打している。

S064は，Ｄ－31区のトレンチで出土した安山岩を素材とする敲石もしくはハンマーと考えられるものである。球形に近い形状の自然石を未加工で利用しており，正面上部と側面下部に強い敲打痕が観察できる。

これらのほか，時期不詳の黒曜石や頁岩等の剥片が出土しているが，図化しなかった。



第27図　旧石器時代その他の石器（２）

第６表　石器観察表（旧石器時代のその他の石器）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層	ブロック名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	備考
26	S059	52929	B3	Ⅸa	－	ナイフ形石器	20.00	20.00	8.00	2.13	黒曜石	黒曜石C	
	S060	105245	D33	Ⅸb	－	二次加工剥片	15.50	20.00	9.00	2.66	黒曜石	黒曜石B	掻器の可能性あり
	S061	53492 53494	E2･3	Ⅸc	－	石核	37.00	55.00	42.30	93.80	頁岩	頁岩A	２点接合資料
27	S062	105241	E32	Ⅸb	－	ハンマー	53.50	34.50	19.50	50.30	安山岩	安山岩B	
	S063	105246	E33	Ⅸc	－	敲石	152.00	105.00	66.00	1304.00	砂岩	－	
	S064	105235	D31	Ⅸb	－	敲石	65.00	54.50	47.50	230.00	安山岩	安山岩B	

第２節　縄文時代早期の調査

１　調査の方法

縄文時代早期の遺構・遺物はⅥ層とⅦ層から出土する。Ⅵ層は，アカホヤ火山灰直下の層で，Ⅶ層は薩摩火山灰直上の層である。Ⅵ層とⅦ層の分層は，土層堆積が良好でない調査地点もあり，難しい判断を強いられた。遺構の帰属時期については，検出面を基本としながらも，遺構埋土のパミス混入状況や色調等でも決定し，遺物は出土層を基本としながら型式も考慮し，帰属時期の決定を行った。また，整理作業・報告書作成作業時に，発掘調査の所見や写真，周囲の遺物出土状況からも吟味し，総合的に判断を行った遺構・遺物もある。

本報告書では，Ⅶ層が早期前葉段階の遺物を包含する文化層で，Ⅵ層が早期中葉～後葉の遺物を包含する文化層である。そのため，Ⅶ層とⅥ層の成果を分けて報告する。

遺構の実測については，個々の検出状況の写真撮影後，各遺構を手実測した。実測の方法は，長軸を設定し，長軸に対して直交する短軸を設定後，長軸方向のベルトを残しながら行った。

出土遺物は，グリッド毎にトータルステーションで取り上げ，出土地点の記録を行った。

２　Ⅶ層の遺構

遺構検出面は，土色が明瞭に変化する薩摩火山灰上面での検出がほとんどであり，本来の生活面での検出はほとんどできなかった。

Ⅶ層の遺構については，総合的に判断して最終的には，竪穴建物跡38基，連穴土坑７基，土坑21基，集石32基，石器集積２基を検出した。

これらの遺構は，Ⅰ類土器からⅨ類土器の時期の遺構と考えられる。

（１）竪穴建物跡（第37 ～ 69図）

Ⅶ層の竪穴建物跡は，遺構が単独に検出されたものや，他の遺構と重複するが全形を想定できるものを含め38基であった。尚，竪穴建物跡は記号SHで表記し，１から38番まで番号を振ってある。

遺構の記載順番は、西側のグリッド番号が小さい方から、また南から北側への順で記載している。

本報告書では，下記に示すように竪穴建物跡の各部分に名称を付し，遺構の詳細を報告した。

長　軸：検出面で，竪穴建物跡のほぼ中央を通り，長さが一番長い部分。
短　軸：長軸の中心を通り直交する部分。
深　さ：長軸ないし短軸でその竪穴建物跡の一番深い部分。

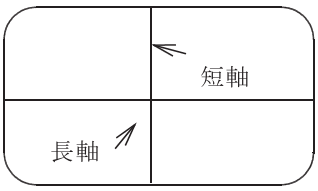


図１　竪穴建物跡の各部名称

検出状況

単独で検出された竪穴建物跡は32基であった。その他，SH21とSH22，SH23とSH24，SH27とSH28は切り合って検出された。SH21・22は連穴土坑の可能性のある土坑18と切り合っている。SH ９は集石１が重なり合っているが，層位差が約20cmあり，同じⅦ層検出でも時間的な差があるものと思われる。

表１　竪穴建物跡の検出層と基数

検出層	基数
Ⅶ層	6
Ⅷ層	32

竪穴建物跡の多くが　Ⅷ層（薩摩火山灰）上面で検出されており，そのため掘り込みの深さが非常に浅い竪穴建物跡もある。

形　状

竪穴建物跡の形状を把握するため，長軸と短軸から長短比を算出し，下記のように平面の形状を類型化した。

長　短　比：短軸÷長軸
隅 丸 方 形：長短比が0.7から１で数値が１に近いほど方形に近い。
隅丸長方形：長短比が0.7未満で，数値が小さいほど横長に広がる。
楕　円　形：長短比が0.7から１で，形状が円形に近い。
不　定　形：平面形状が隅丸方形や隅丸長方形，楕円形に属さないが全体の形状が分かる遺構

表２　竪穴建物跡の形状

形　状	基　数
隅丸方形	17
隅丸長方形	11
楕　円	4
不定形	4
不　明	2

検出面の形状は表２からも分かるとおり，隅丸長方形と隅丸方形が28基，楕円形４基，不定形４基，不明２基

であった。しかし，どの竪穴建物跡も床面に柱穴痕と思われるピット及び炉跡は検出されておらず，竪穴建物跡の全体的な構造の解明には至らなかった。

規　模

小牧遺跡Ⅶ層・Ⅷ層検出の早期前葉の竪穴建物跡規模について，下記に示す。

表３　竪穴建物跡の長軸と短軸の最大・最小・平均値

	長軸（cm）	短軸（cm）
平均値	252.6	197.6
最大値	431.0	322.0
最小値	162.0	161.0

尚，面積については，検出面での平面プランであり，形状により面積算出方法を下記のように変えた。

隅丸長方形・隅丸方形：長軸×短軸

楕円形：楕円形の面積を求める公式を適用して（長軸／２×短軸／２×π）で算出

表４　竪穴建物跡の検出面の最大・最小・平均値

	面積（㎡）
平均値	4.88
最大値	11.62
最小値	2.59

平均面積が約５㎡に対して，11.6㎡のSH12は小牧遺跡の竪穴建物跡の中では大型の竪穴建物跡といえよう。13区から19区にかけて，隅丸長方形の比較的大きな竪穴建物跡が見られる。

形状については，ほとんどが隅丸方形ないし隅丸長方形であるが，SH１，SH11，SH17，SH25は楕円形を呈するⅧ層検出遺構である。この形状の違いについては，類別の土器分布状況から考察しても判明できなかった。Ⅵ類とⅢ類との関係が推察されるが，明確な評価は得られなかった。ただ，Ⅵ類の分布域と重なるSH15は，^{14}C測定で8830±30の値が出ている。

分　布

東西方向に約400m広がる小牧遺跡では，Ⅶ層検出の竪穴建物跡が38基検出されたが，３基以上接近して検出された箇所が５ヶ所ある。東側からＡ～Ｃ－１・２区，Ｃ～Ｆ－２～４区，Ｅ・Ｆ－８・９区，Ｅ・Ｆ－13・14区，Ｅ・Ｆ－16・17区である。西側の串良川側左岸に近い箇所には約半数の竪穴建物跡が集中している。縄文早期の集落としては大規模集落であるが，土器型式からも分かるように，時期的な差があったものと考えられる。20区のSH38だけがぽつんと離れており，それより東側では竪穴建物跡は検出されなかった。

本遺跡で検出された竪穴建物跡を，西側のグリッド番号の若い順さらに南側からアルファベッド順に報告する。

竪穴建物跡１号（第37図）

検出状況

SH １は，Ａ－１区の串良川左岸沿いの台地縁辺部において検出された。検出面は，Ⅶ層であった。

形状と規模

平面プランは，楕円形で，長軸は2.90m，短軸が2.16mを測る。長短比は0.74，深さ約22cm，遺構の推定面積は4.91㎡であった。中規模の浅い遺構である。遺跡内で一番標高の高い平坦面に立地し，樹痕も多く，遺構南東の西側は一部樹痕に切られている。

埋土

埋土は，ほぼ１枚で，基本層Ⅶ層に若干のP13黄色パミスが混ざる。東西方向の壁際にⅦ層類似の埋土が若干堆積する。

出土遺物

遺物は出土していない。

竪穴建物跡２号（第37図）

検出状況

SH ２は，Ｃ－１・２区の串良川左岸沿いの台地縁辺部において検出された。検出面は，Ⅶb層下部であった。遺構の段掘等の有無を確認したが，検出できなかった。

形状と規模

平面プランは，隅丸方形で，長軸は1.97m，短軸が1.96mを測る。長短比は0.99，深さ約13㎝，遺構の推定面積は3.86㎡であった。

深さが余りにも浅く，Ⅶｂ層での検出のため上部からの掘り込みがあったと推定される。床は，薩摩火山灰層上面で止まっている。

埋土

埋土は，Ⅶ層のにぶい黄褐色土を基本とした１枚のみである。埋土中に炭化物がわずかに検出された。

出土遺物

遺物は出土していない。

竪穴建物跡３号（第38図）

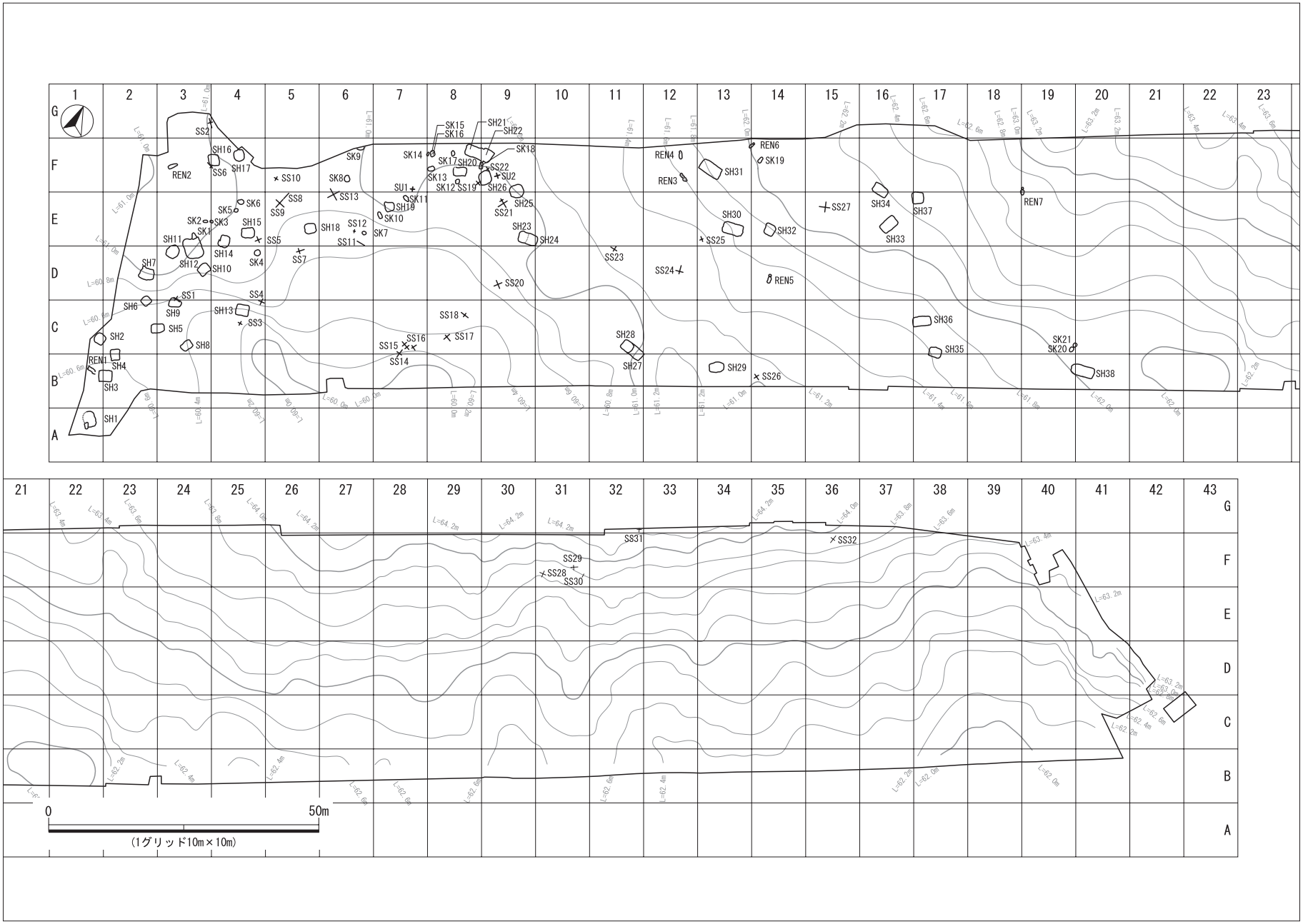
検出状況

SH ３は，調査区西端微高地から南西へごく緩く傾斜するB－１・２区において検出された。検出面は，Ⅷ層上面であった。

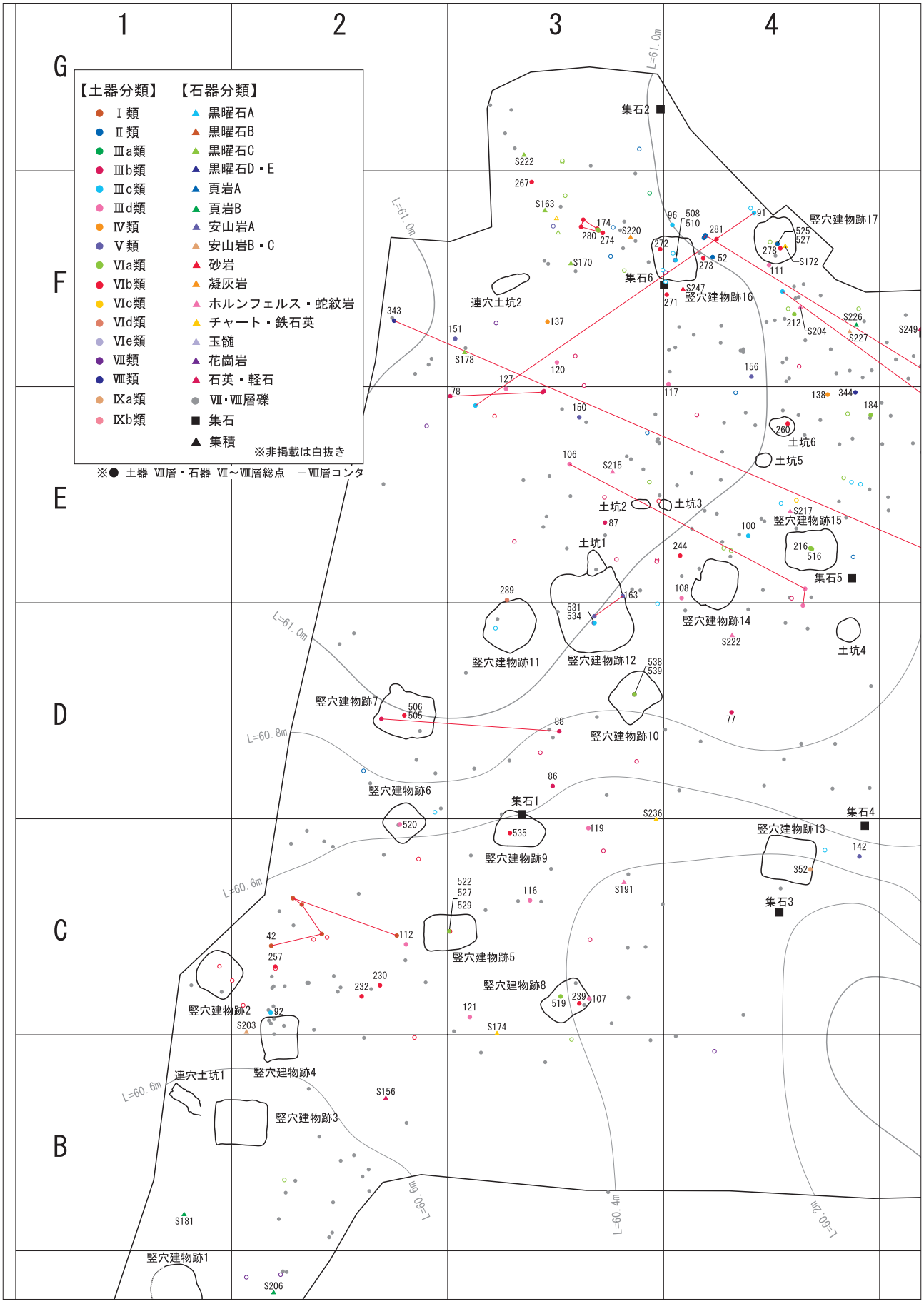
形状と規模

平面プランは，隅丸方形で，長軸は2.42m，短軸が2.04mを測る。長短比は0.84，深さ約27cm，遺構の推定面積は4.94㎡であった。

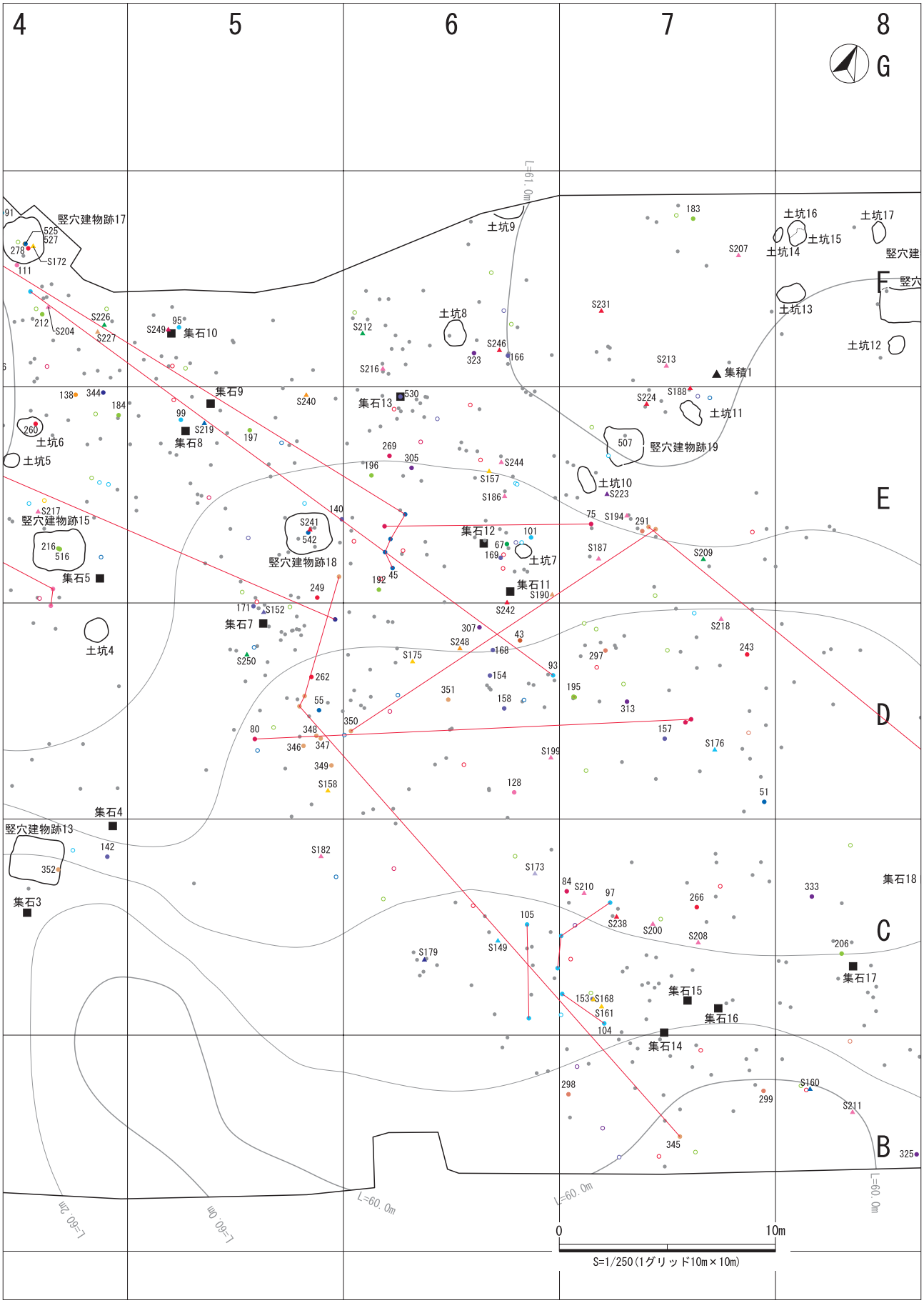
床面約半分程の範囲で粗密はあるが，硬化面を確認し



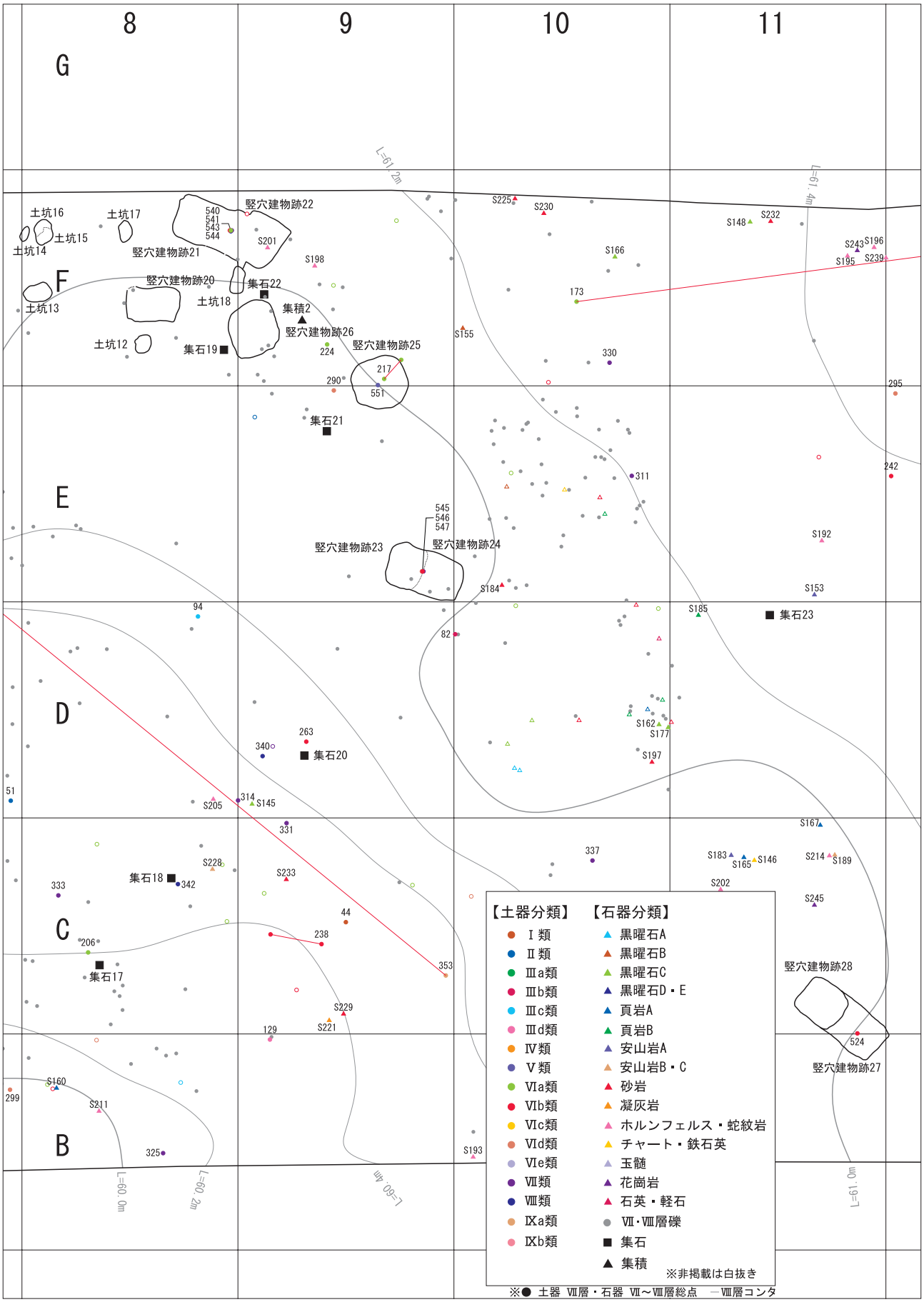
第28図　Ⅶ層遺構配置図



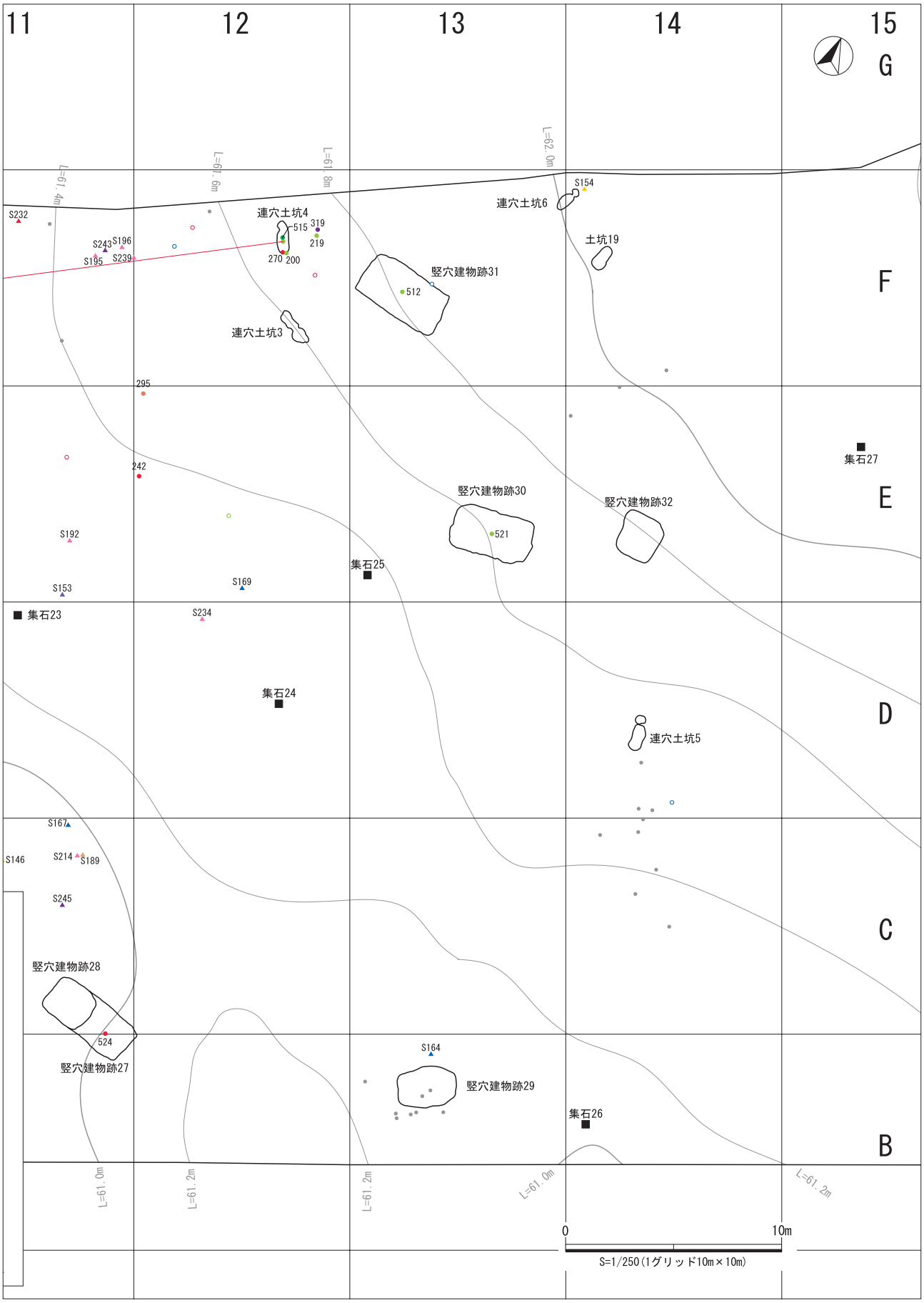
第29図　Ⅶ層遺物出土状況図（1）



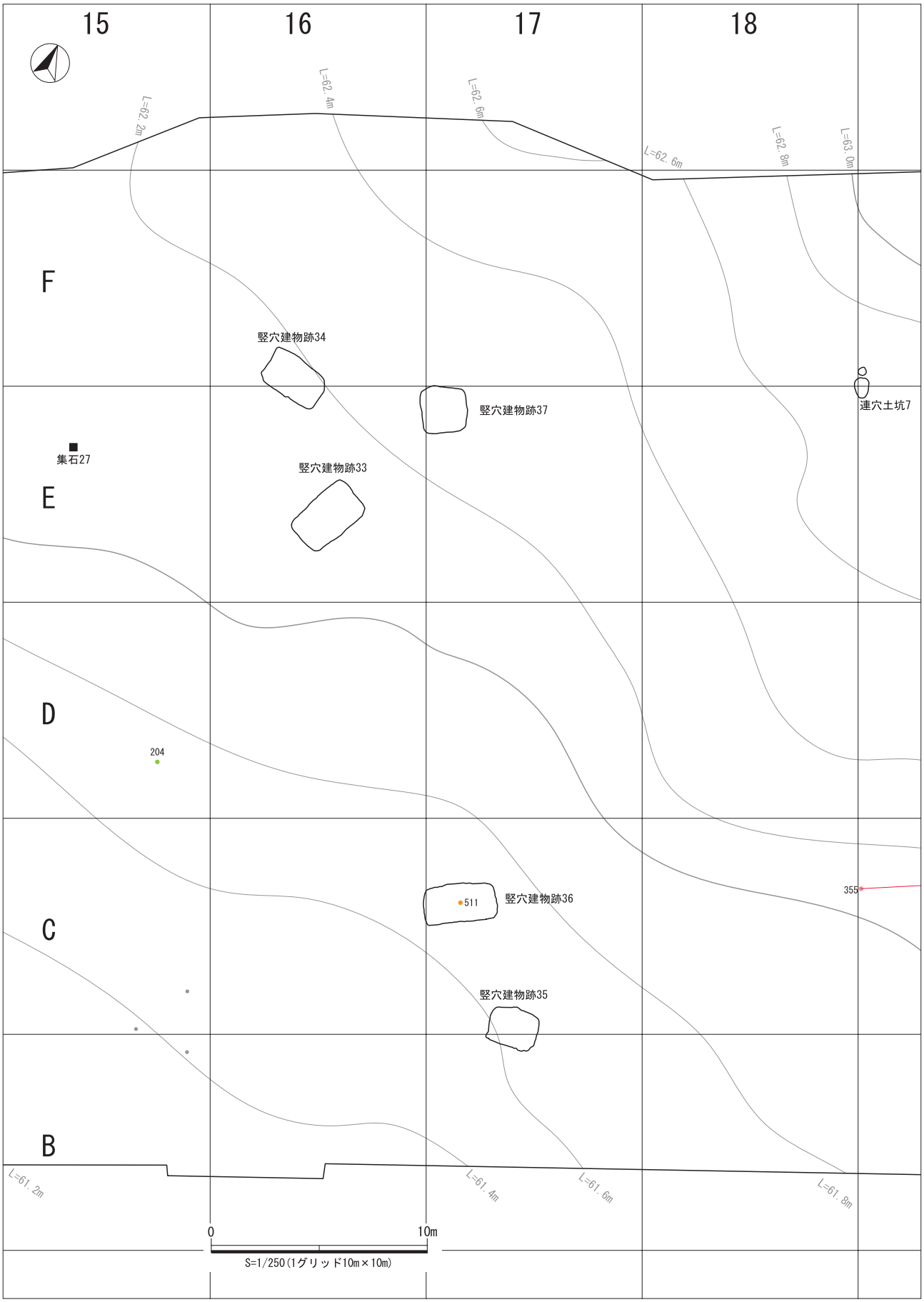
第30図　Ⅶ層遺物出土状況図（2）



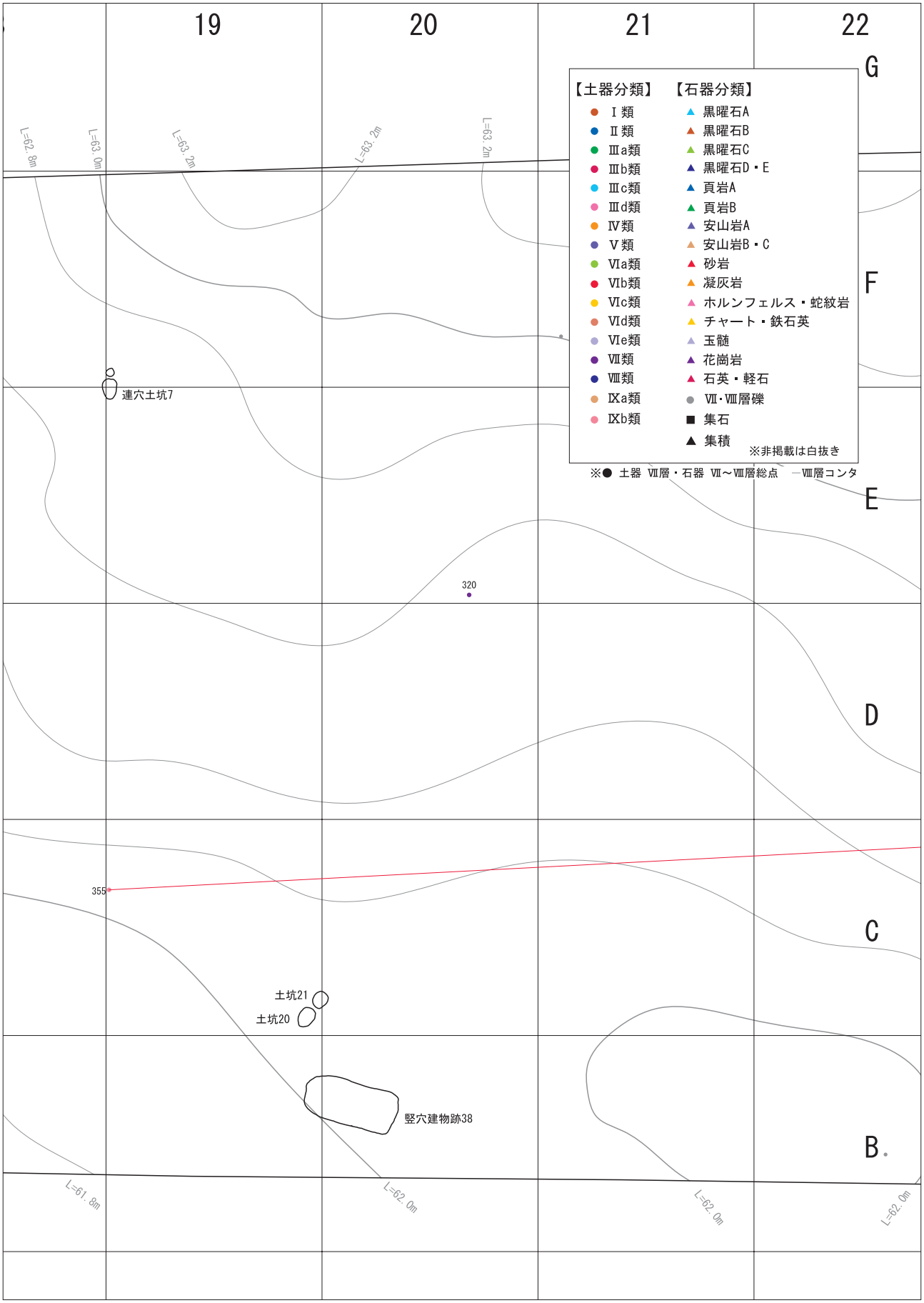
第31図　Ⅷ層遺物出土状況図（3）



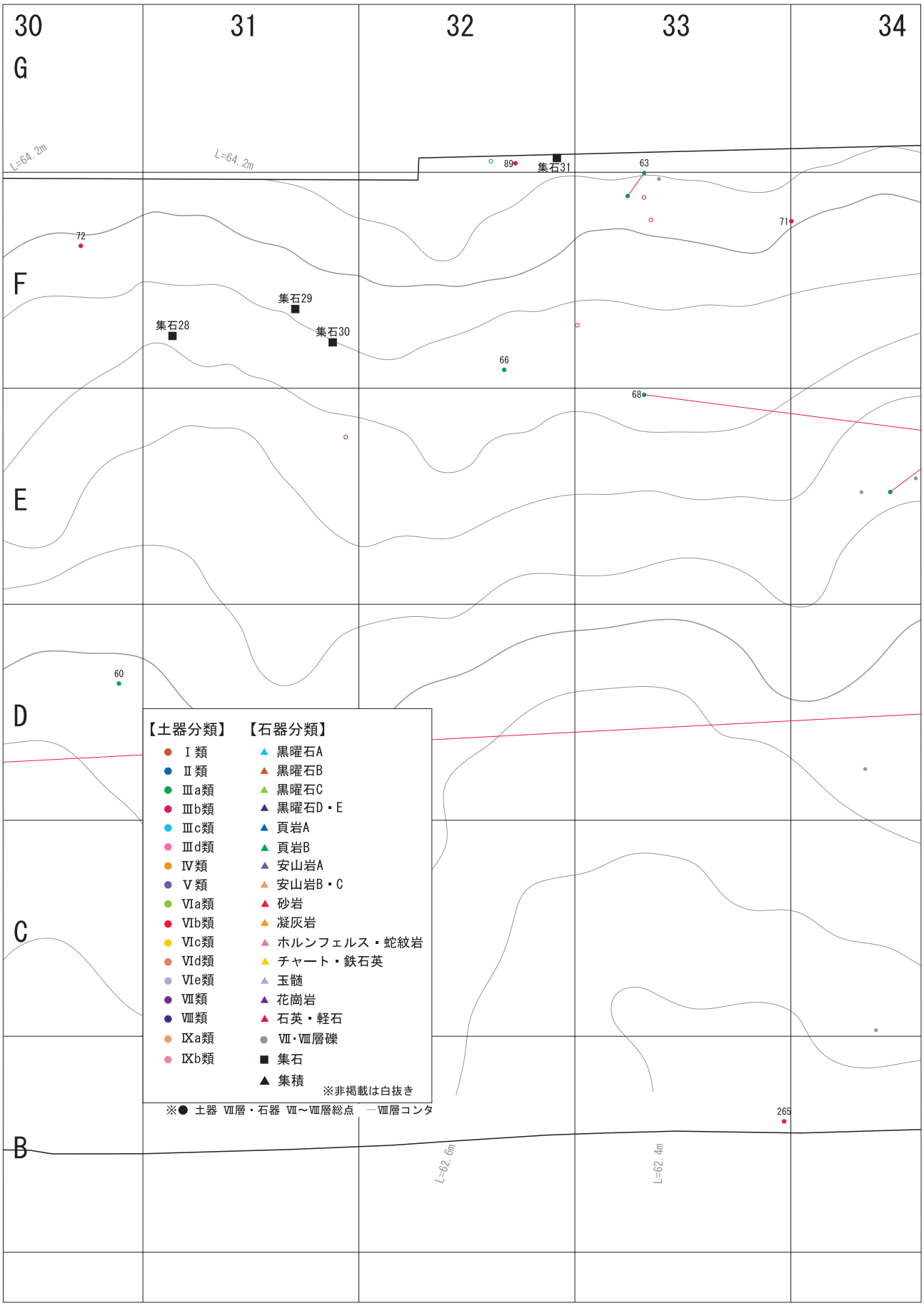
第32図　Ⅶ層遺物出土状況図（4）



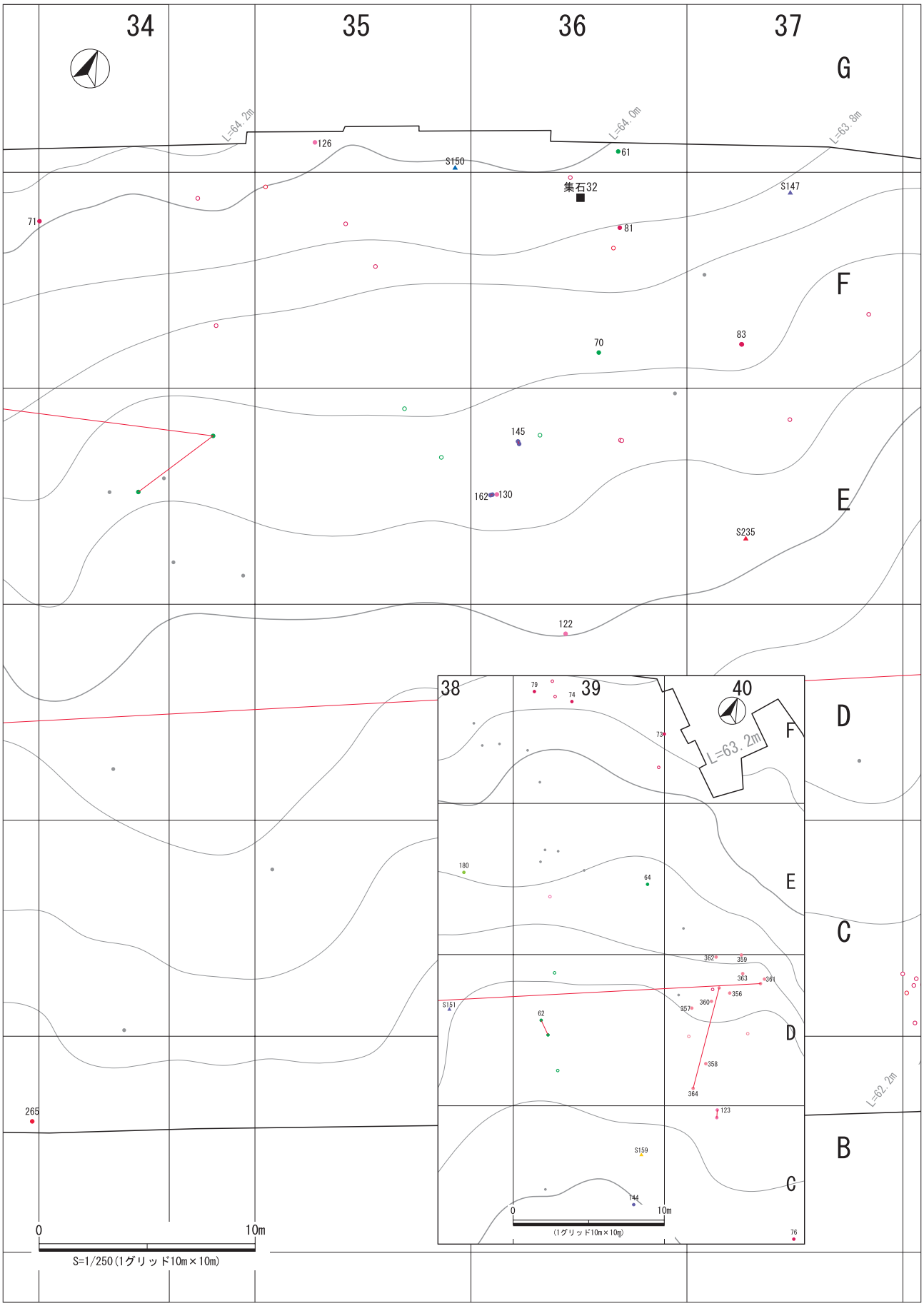
第33図　Ⅶ層遺物出土状況図（５）



第34図　Ⅶ層遺物出土状況図（6）



第35図　Ⅶ層遺物出土状況図（7）



第36図　Ⅶ層遺物出土状況図（8）

た。炉跡については確認できなかった。全体的な形状は，H27・28年度発見の早期竪穴建物跡と類似。遺物をほとんど伴わない点も類似する。

埋土

埋土は，３枚から成り，P13の黄色パミスを若干含んだⅦ層が主体である。床上面にやや軟質のP13を極わずか含む埋土が堆積する。硬化面は埋土②が踏みつけられてできたように粗密に広がる。

出土遺物

検出面より上で磨敲石の破片３点が出土している。竪穴建物跡が検出面より上から掘り込まれていたと考えると，竪穴建物跡に関連した遺物と推察される。その他，床面付近より磨敲石２点が出土した。S066 ～ S067は安山岩製の磨敲石である。S065は球形であり，弱い敲打の痕と明瞭な磨面が部分的に確認できる。使用頻度は少なく，被熱の痕跡はみられない。S066は被熱破砕片である。裏面は残存部の中心が強い磨りにより窪み，破砕後に使用している可能性がある。S067は床直上から出土したもので，円盤状である。縁辺部を特に使用しており，かすかに被熱の痕跡が窺える。

竪穴建物跡４号（第39図）

検出状況

SH ４は，B・C－２区において検出された。SH2とSH3に隣接する。検出面は，Ⅷ層上面であった。

形状と規模

平面プランは，隅丸方形で，長軸は1.97m，短軸が1.68mを測る。長短比は0.85，深さ約42cm，遺構の推定面積は3.31㎡であった。小規模ではあるが，深さのある遺構である。

埋土

埋土の主体は，黒色土に５㎜以下の黄色パミスと２㎜以下の白色石粒を多く含む。

出土遺物

遺物は出土していない。

竪穴建物跡５号（第39図）

検出状況

SH ５は，C－2・3区において検出された。検出面は，Ⅶb層下部からⅧ層上面であった。

形状と規模

平面プランは，隅丸長方形で，長軸は2.41m，短軸が1.63mを測る。長短比は0.68，深さ40cm，遺構の推定面積は3.93㎡であった。

埋土

埋土は，３枚で黒色土に５㎜以下の黄色パミス，１㎜以下の白色石粒含む。下部に薩摩火山灰ブロック混じる。

出土遺物

検出面から土器３点と石器１点が出土した。１は，縦位ないし斜位に貝殻刺突文が施される。Ⅵｂ類に分類される。２は，斜位の貝殻刺突文が施される。Ⅵa類と思われる。３は，底部近くの胴部で縦位の短沈線が深く施される。胎土に金雲母が確認できる。型式不明である。

石器は，１点が出土した。S068は被熱破砕した砂岩製の磨石片である。

竪穴建物跡６号（第40図）

検出状況

SH ６は，C・D－２区において検出された。検出面は，Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは，隅丸方形で，長軸は1.62m，短軸が1.60測る。長短比は0.99，深さ40cm，遺構の推定面積は2.59㎡であった。規模は小さいながら，深さのある竪穴建物跡である。

埋土

埋土は１枚で，硬質で粘質のある黒色土を基本とし，５㎜以下の黄色のパミスと１㎜以下の白色石粒が多く混じる。

出土遺物

埋土中から土器口縁部１点が出土した。４は，口唇部にキザミを施し，口縁部外面に横位貝殻刺突文を２条巡らす。その下に楔形貼付突帯を貼り付け，両側は縦位の貝殻刺突文が施される。Ⅲd類の119・120と類似する。

竪穴建物跡７号（第41図）

検出状況

SH ７は，D－２区において検出された。検出面は，Ⅷ層であった。

形状と規模

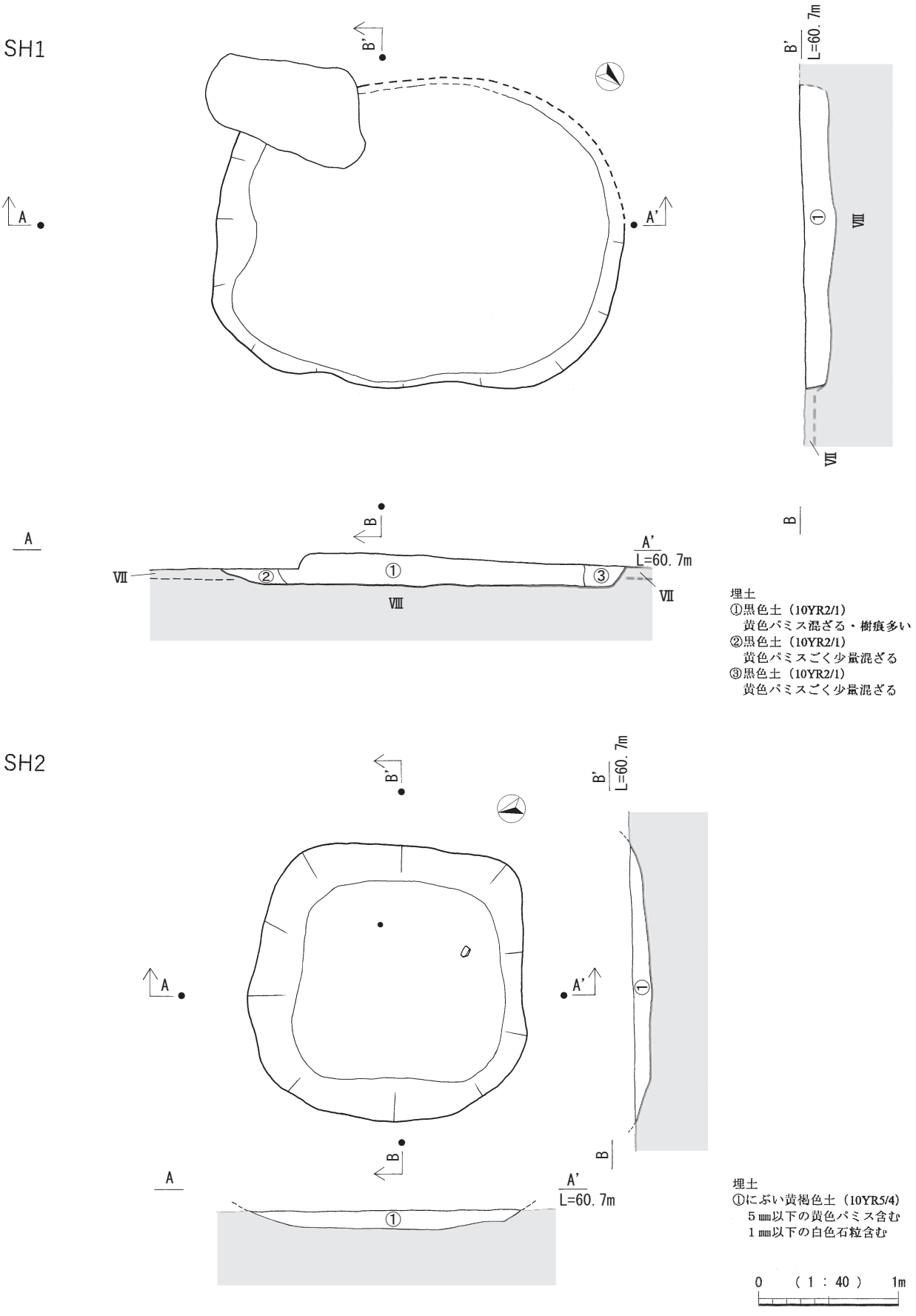
平面プランは，隅丸方形と考えられる。長軸は2.58m，短軸が2.14mを測る。長短比は0.83，深さ32cm，遺構の推定面積は5.52㎡であった。南西側及び北西側には段堀を施し，テラス状のエリアを設けている。北西側のテラスはピットも１基検出された。南西側にはテラスに接してピットが１基検出されている。

埋土

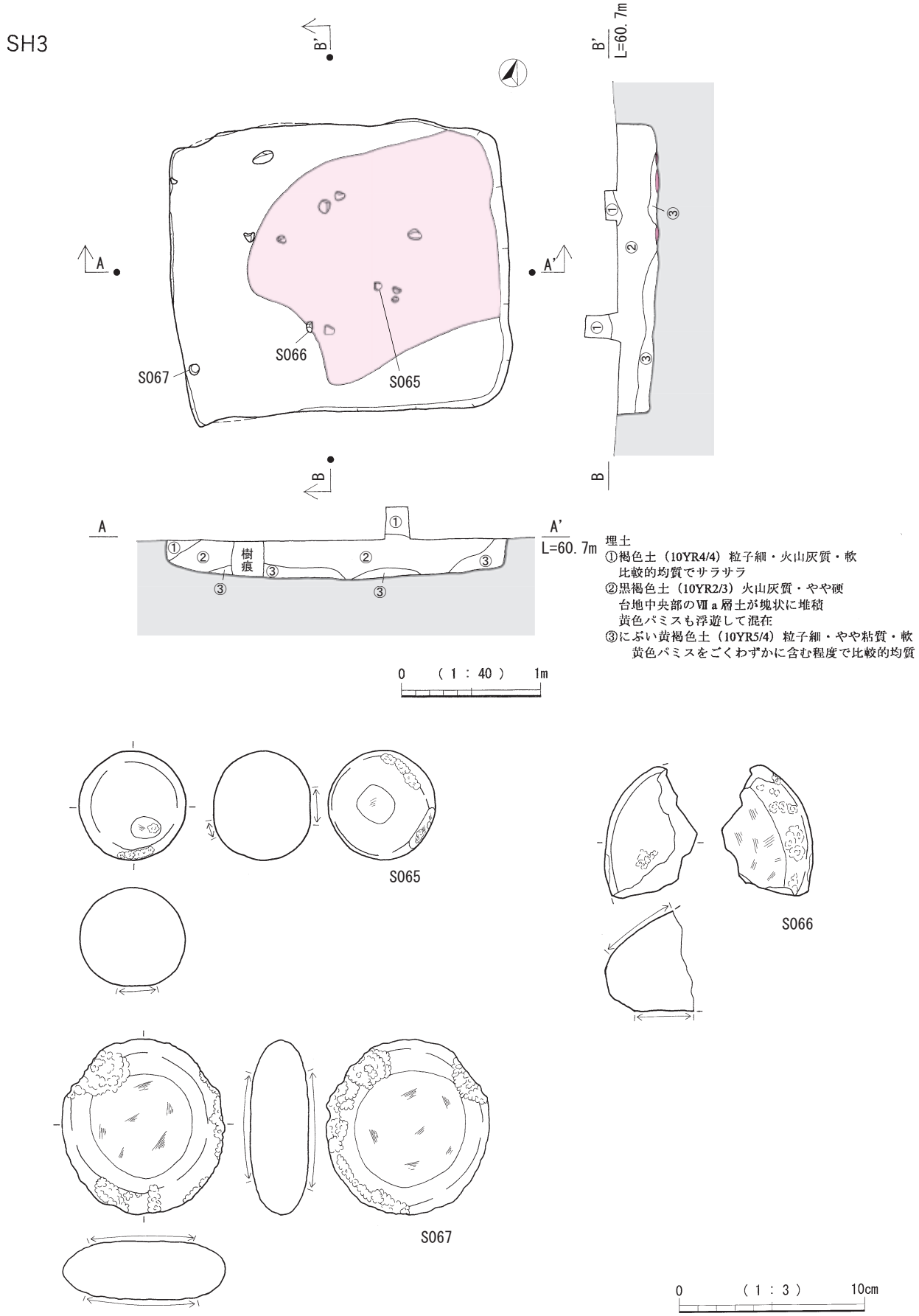
埋土は１枚で，硬質で粘質のある黒色土を基本とし，５㎜以下の黄色のパミスと１㎜以下の白色石粒が多く混じる。

出土遺物

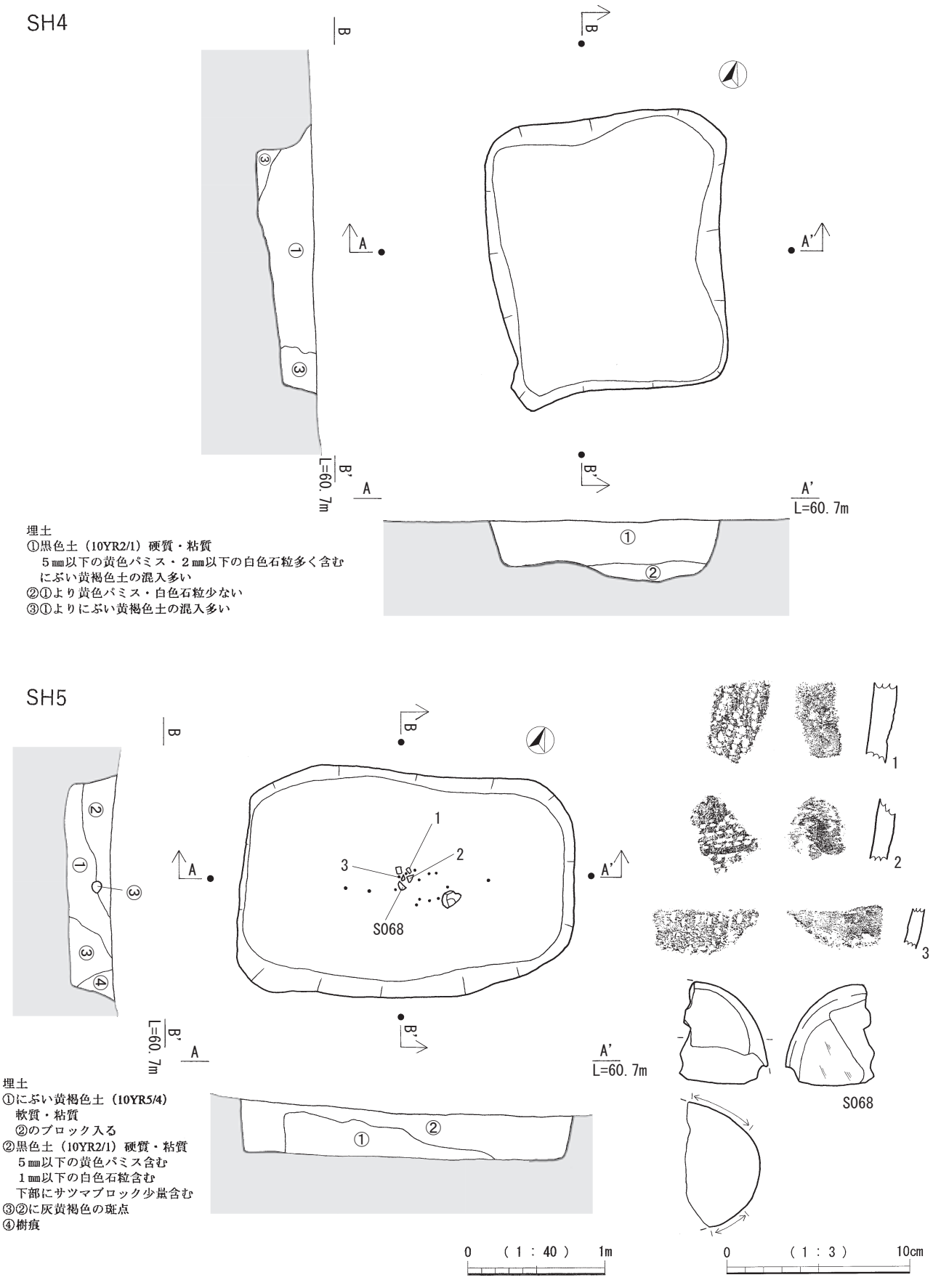
埋土中から土器２点と石器２点が出土した。その他図化しなかったが，土器底部小片とOBチップ各１点が出土した。５は，外面は縦「Ｖ」字状に貝殻刺突文が施され，内面は丁寧なナデ調整されている。竪穴建物跡内の



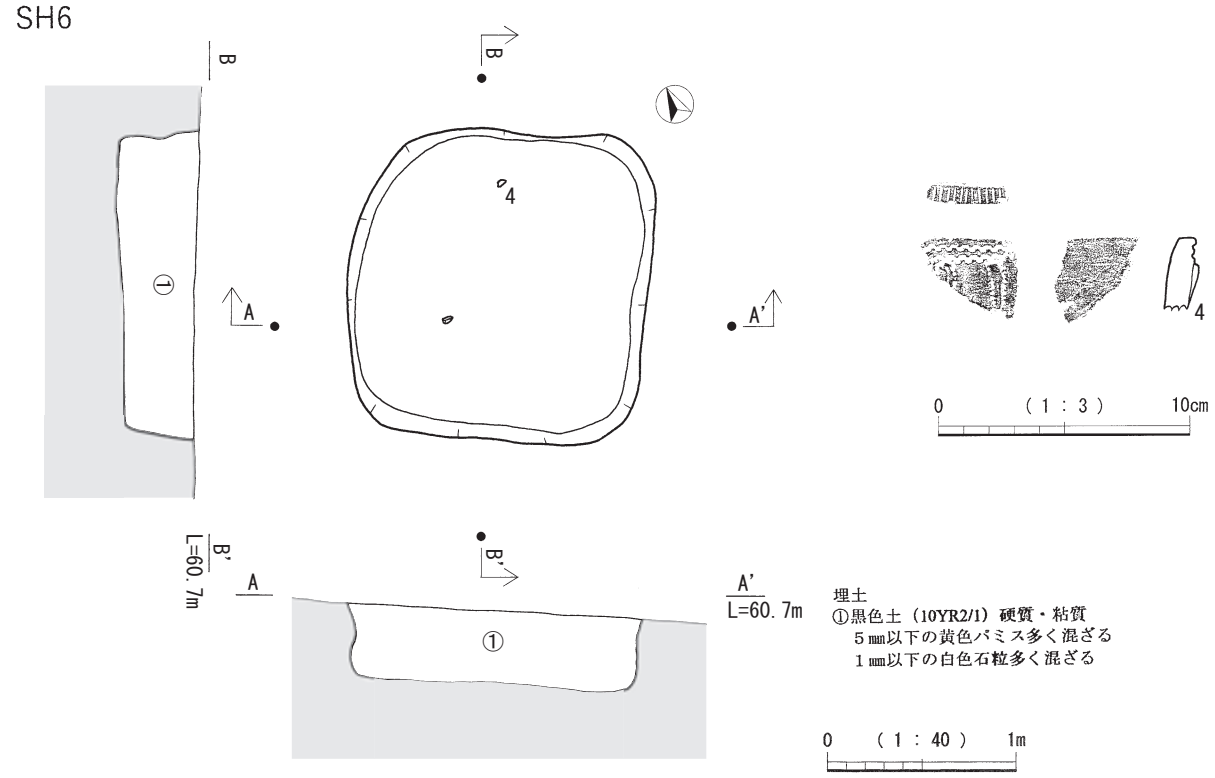
第37図　竪穴建物跡１号・竪穴建物跡２号



第38図　竪穴建物跡３号・出土遺物



第39図　竪穴建物跡４号・竪穴建物跡５号・出土遺物



第40図　竪穴建物跡６号・出土遺物

土器と隣接のD－１区包含層土器が接合した資料である。Ⅵｂ類に分類される。６は型式不明の底部で，丁寧にナデ調整されている。

石器は，２点出土した。S069は安山岩製の磨敲石である。歪な楕円状の礫を使用している。裏面はよく磨られており，タールが付着している。S070は砂岩製の石錘である。磨石としても使用される。

竪穴建物跡８号（第42図）

検出状況

SH ８は，C－3区において検出された。検出面は，Ⅷ層上面であった。

形状と規模

平面プランは，不定形で，長軸は2.12m，短軸が2.06ｍを測る。長短比は0.97，深さ38㎝，遺構の推定面積は4.37㎡であった。北西側は段掘を施し，テラス状のエリアを設けている。

埋土

埋土の主体は，黒色土に５㎜以下の黄色パミスや１㎜以下の白色石粒を多く含む。

出土遺物

埋土中から土器１点が出土した。７は，斜位の貝殻刺突文を施す。Ⅵa類に分類される。

竪穴建物跡９号（第43図）

検出状況

SH ９は，C・D－３区において検出された。検出面は，Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは，隅丸方形で，長軸は2.25m，短軸が1.68ｍを測る。長短比は0.75，深さ42㎝，遺構の推定面積は3.78㎡であった。H25年の12トレンチで，南東側が切られている。Ⅸ層上面まで掘られており，Ⅸ層が出土したため掘り止めた感じがある。

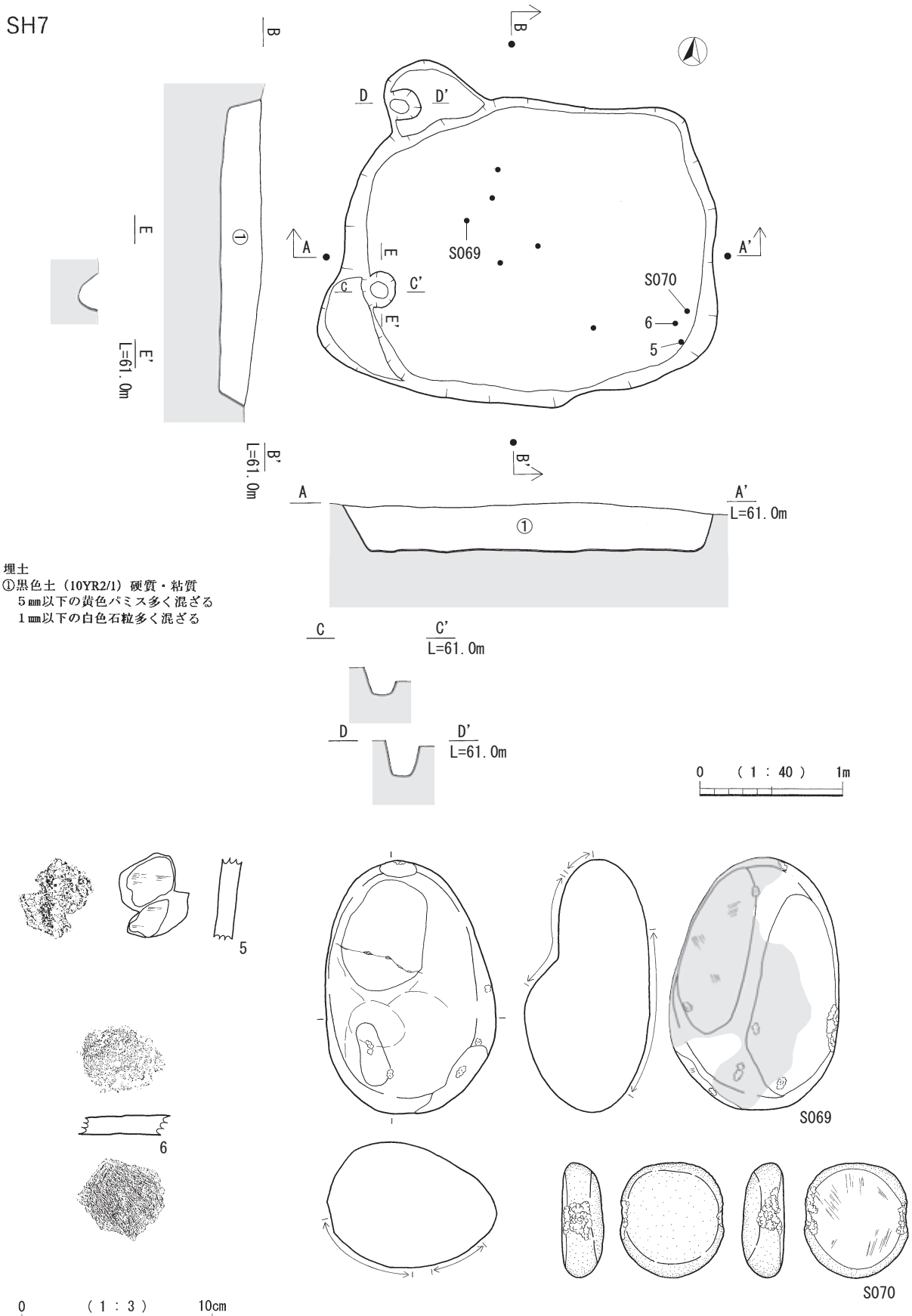
埋土

埋土の主体は，黒褐色土で１cm以下の黄色パミスと２㎜以下の白色石粒多く混じる。

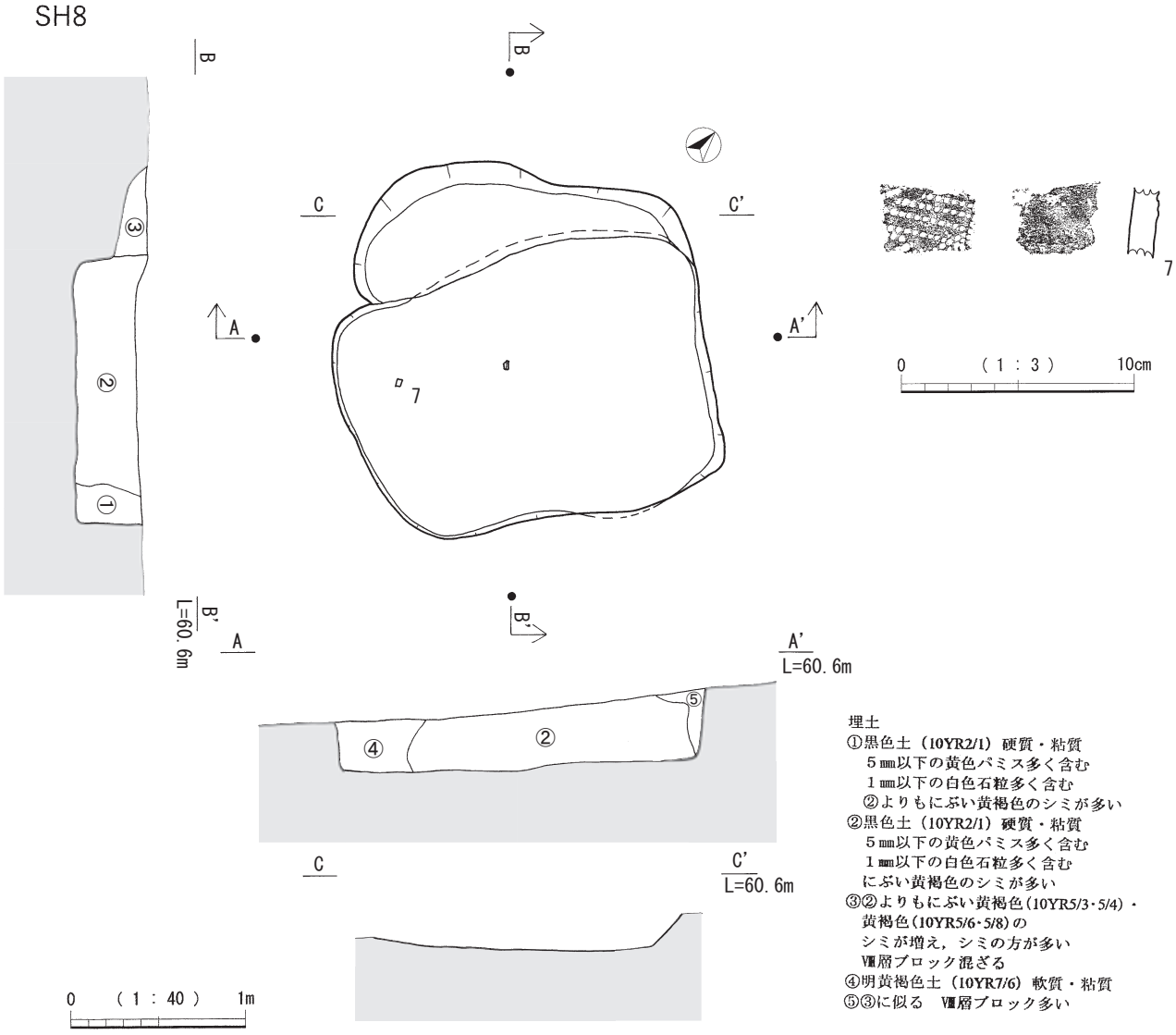
出土遺物

埋土中から土器２点と石器２点が出土した。土器１点は胴部小片のため図化しなかった。８は，底部からほぼ真っ直ぐに立ち上がり，底部は平底を呈する。胴部下位に縦位の貝殻条痕を施し，その上部には縦位の貝殻刺突文を密に施す。胎土に金雲母が確認できる。Ⅵｂ類に分類される。

石器は３点出土したが，チャート製の剥片１点は図化しなかった。S071は多孔質の安山岩製の磨敲石で，円盤状である。比較的小型であり，よく使用されている。



第41図　竪穴建物跡７号・出土遺物



第42図　竪穴建物跡８号・出土遺物

被熱の痕跡はみられない。S072はホルンフェルス製の被熱破砕した磨石片である。

竪穴建物跡10号（第44図）

検出状況

SH10は，D－３区において検出された。検出面は，Ⅷ層上面であった。

形状と規模

平面プランは，隅丸方形で，長軸は2.11m，短軸が1.76mを測る。長短比は0.83，深さ40cm，遺構の推定面積は3.71㎡であった。

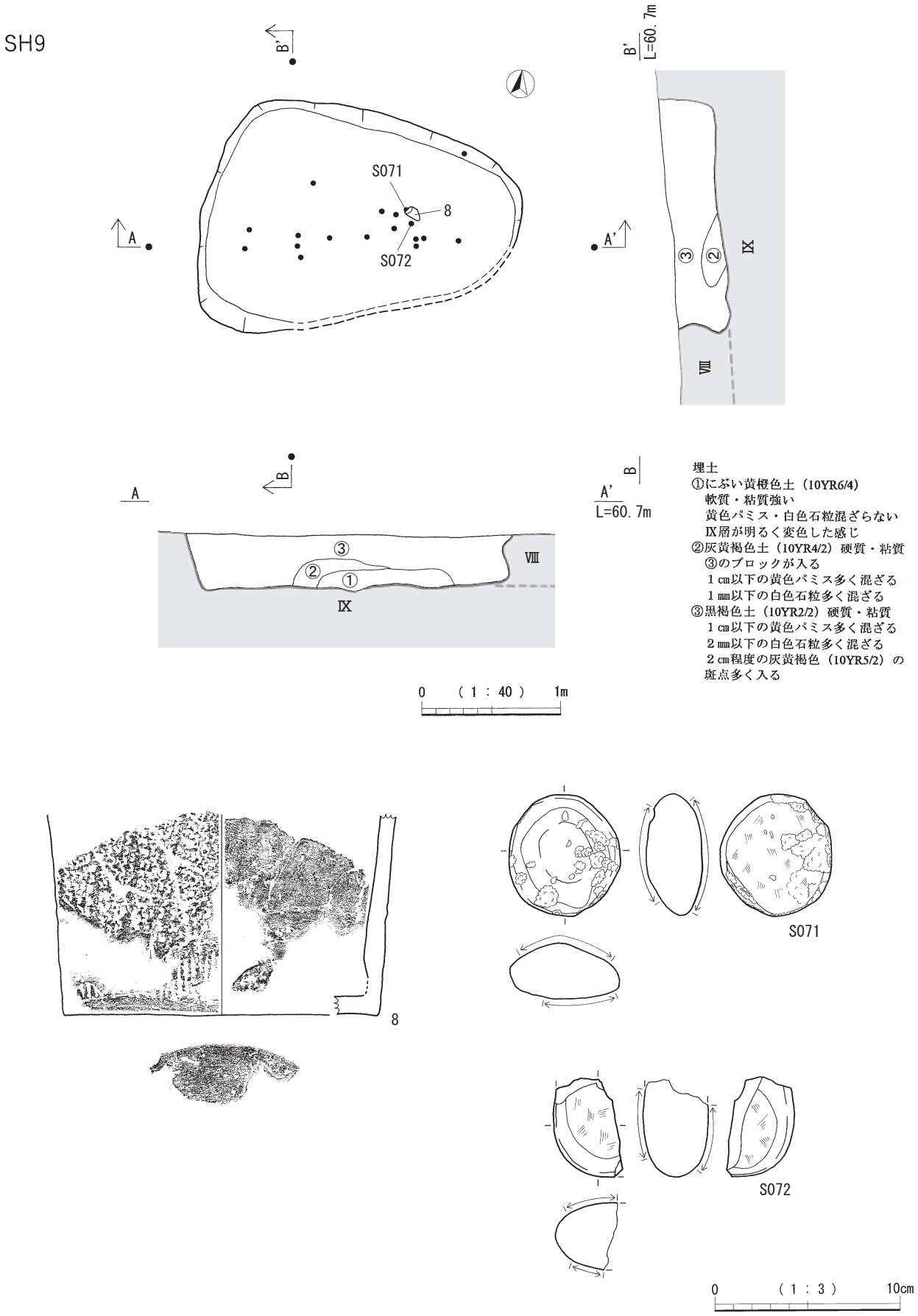
埋土

埋土の主体は，黒色土で５㎜以下の黄色パミスと１㎜以下の白色石粒を多く含む。

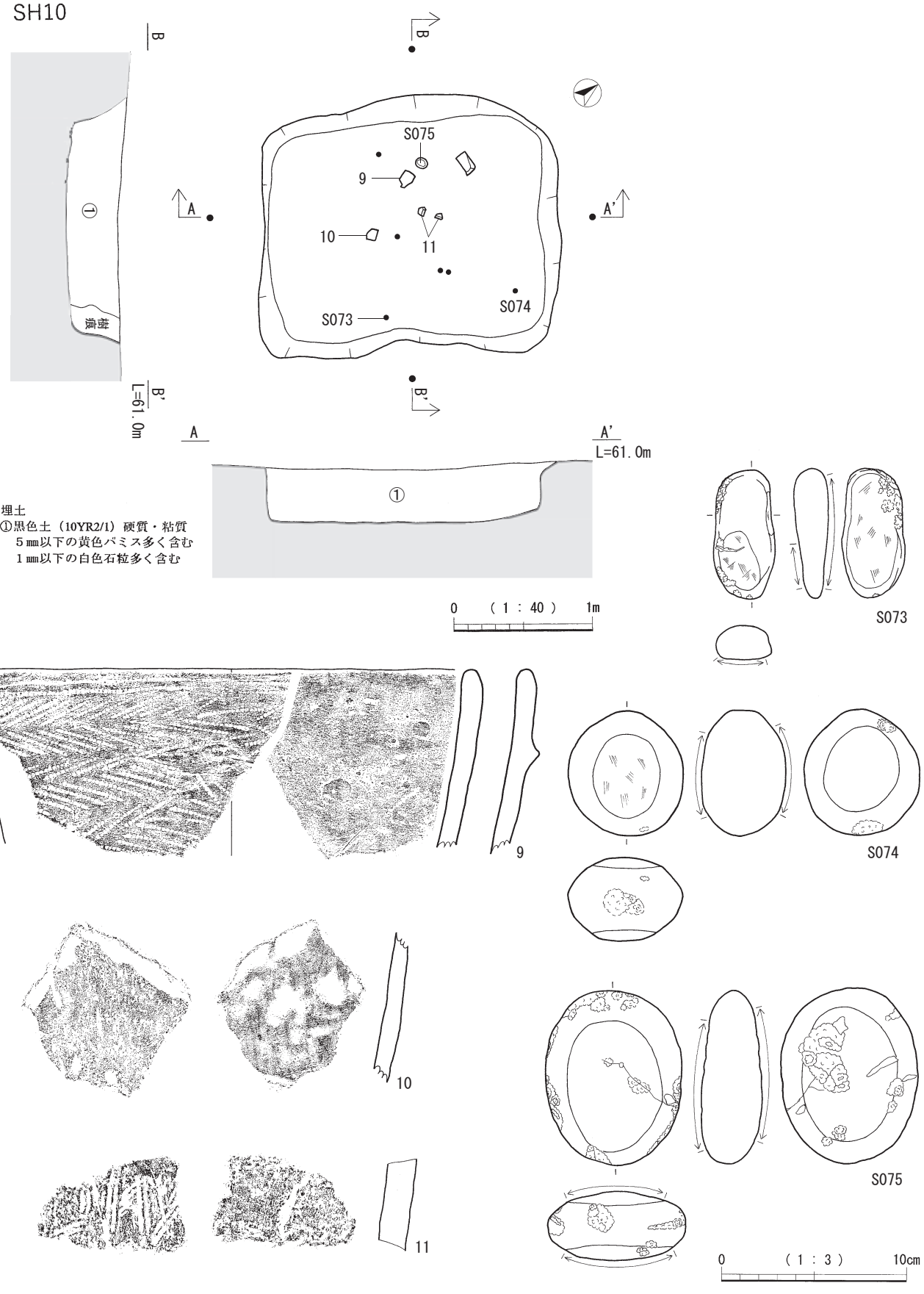
出土遺物

埋土中から土器３点と石器３点が出土した。９は，口縁部をやや肥厚させ，ゆるやかに内湾する土器である。口唇部は丸みを帯び，口唇直下に２条の貝殻刺突文を巡らす。口縁部には横位の瘤状突起を貼り付け，その上から「Ｚ」字状の貝殻刺突文を密に施す。Ⅵa類に分類される。10は，内外面ともに丁寧にナデ調整されている。胎土に角閃石が目立つ無紋の胴部である。11は遺構内で接合した資料の胴部で，貝殻腹縁部による短い条痕文を鋸歯状に施す。器壁はやや厚めである。Ⅶa類に分類される。

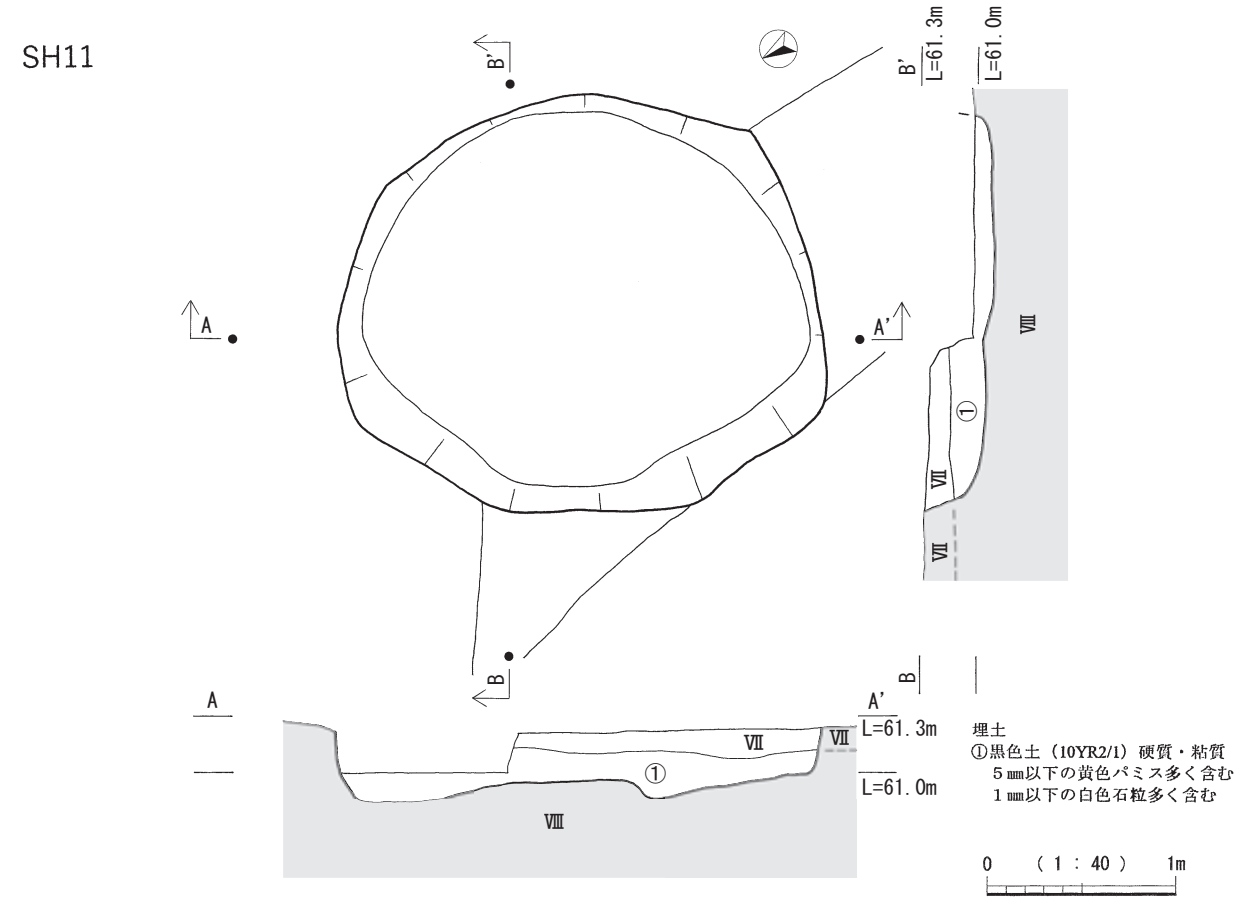
石器は３点出土した。S073～S075は磨敲石である。S073は，砂岩製の小形の楕円状のもので，断面形は扁平である。下面と左側面に敲打痕がみられ，裏面は全面



第43図　竪穴建物跡９号・出土遺物



第44図　竪穴建物跡10号・出土遺物



第45図　竪穴建物跡11号

がよく磨られている。S074は安山岩製の小形の円形で所々に深い敲打痕がみられる。正面の磨面は明瞭である。S075は，多孔質の安山岩製の楕円状のもので，断面形は扁平である。全面的に敲打痕が多く残り，正面・背面は弱く磨られている。３点共に被熱の痕跡はない。

竪穴建物跡11号（第45図）

検出状況

SH11は，D・E－３区において検出された。検出面は，Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは，楕円形で，長軸は2.53m，短軸が2.07ｍを測る。長短比は0.82，深さ36㎝，遺構の推定面積は4.11㎡であった。

埋土

埋土の主体は，黒色土で５㎜以下の黄色のパミスと１㎜以下の白色石粒を多く含む。

出土遺物

埋土中からOBチップ１点が出土したが図化しなかった。

竪穴建物跡12号（第46・47図）

検出状況

SH12は，D・E－３区において検出された。検出面は，Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは，不定形で，長軸は3.61ｍ，短軸が3.22ｍを測る。長短比は0.89，深さ40㎝，遺構の推定面積は11.62㎡であった。不定形で大規模な遺構である。竪穴建物跡の北側をSK1が切っている。検出状況から，SH12に伴う土坑ではないと推測される。また，埋土状況より２基の遺構は時間的な差は余りないものと思われる。

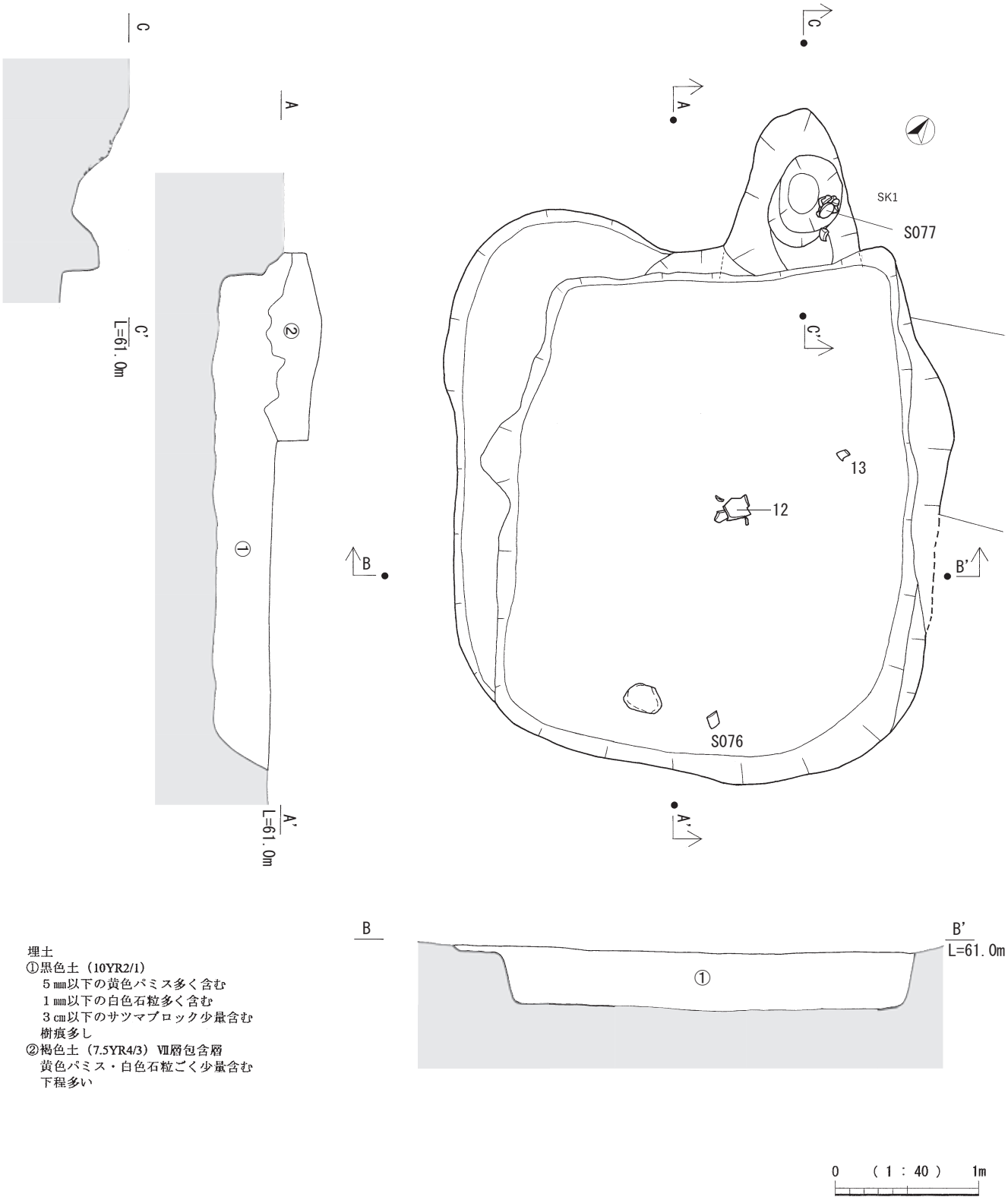
埋土

埋土の主体は，黒色土で２㎝以下の薩摩火山灰ブロック少量を含む。樹痕が多い

出土遺物

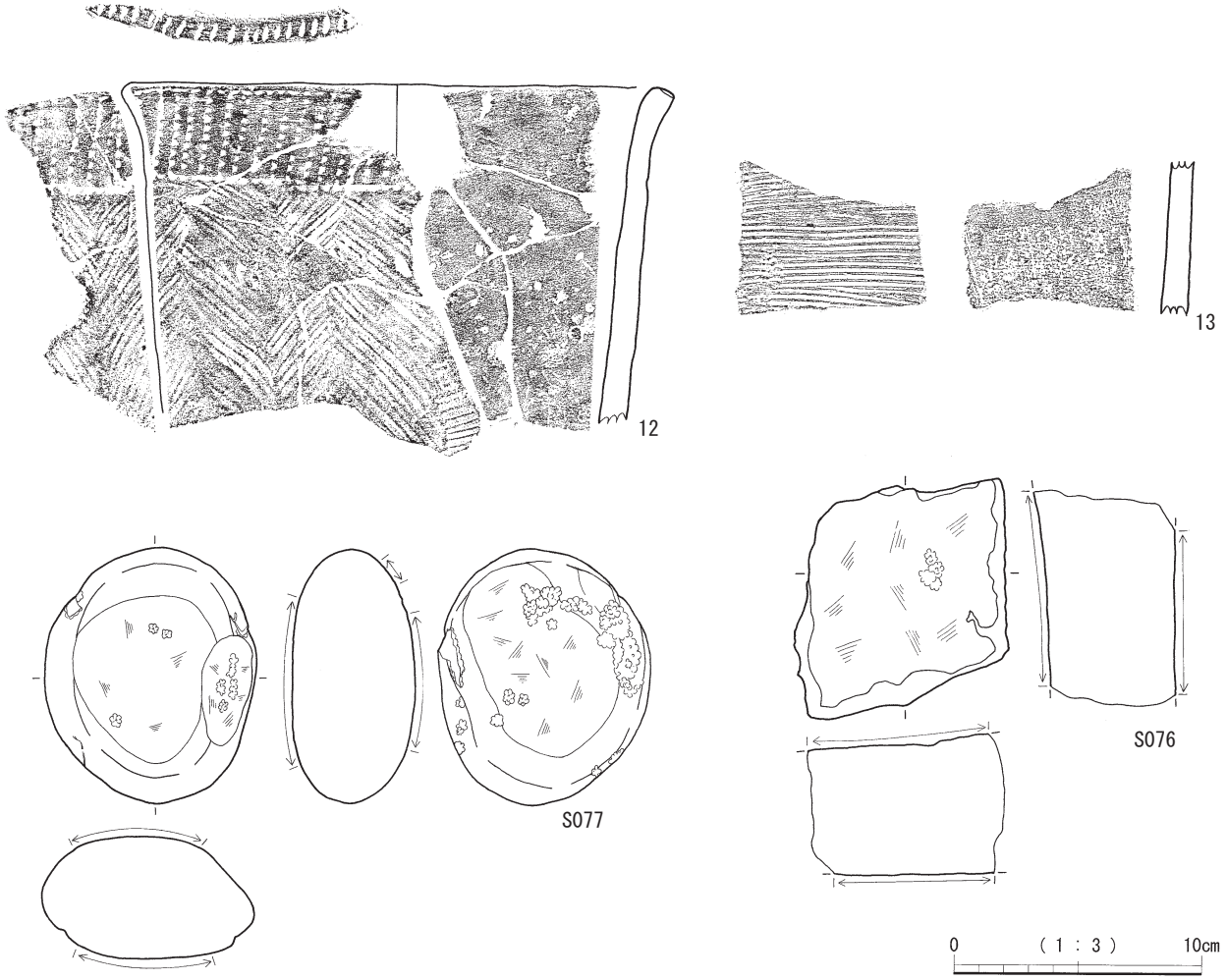
埋土中から土器２点と石器２点が出土した。12は口唇部を平坦整形し，ヘラ状工具によりキザミを施す。口唇直下と胴部文様帯の境に横位の貝殻刺突文を１条ずつ巡らせ，その間を斜位の貝殻刺突文で埋めて口縁部文様帯を構成する。胴部は綾杉状に貝殻条痕文が施されている。

SH12



埋土
①黒色土（10YR2/1）
5㎜以下の黄色パミス多く含む
1㎜以下の白色石粒多く含む
3㎝以下のサツマブロック少量含む
樹痕多し
②褐色土（7.5YR4/3）Ⅶ層包含層
黄色パミス・白色石粒ごく少量含む
下程多い

第46図　竪穴建物跡12号



第47図　竪穴建物跡12号出土遺物

Ⅴ類に分類される。13は胴部で，丁寧なナデ調整された後に横位の貝殻条痕文が密に施されている。Ⅲc類に分類される。

石器は２点出土した。S076は凝灰岩製の被熱破砕した石皿片である。両面共によく使用されている。S077は安山岩製の磨敲石であり，楕円状である。縁辺部には数カ所深いワレがみられ，風化しているものの敲打によるものと考えられる。被熱の痕跡はない。

竪穴建物跡13号（第48図）

検出状況

SH13は，C－４区において検出された。検出面は，Ⅶ層であった。

形状と規模

平面プランは，隅丸方形で，長軸は2.36m，短軸が1.98mを測る。長短比は0.84，深さ34cm，遺構の推定面積は4.67㎡であった。Ⅸ層上面で掘り止めている。

埋土

埋土の主体は，黒色土で黄色パミスと白色石粒が多く混じる。３㎜以下の薩摩火山灰も少量含む。

出土遺物

大型の石器１点が出土した。S078は安山岩製の石皿の完形品で床着に近い状態で出土した。表面が使用面であり，中央部から下位が特に大きく窪み，黒く変色している。下面には掻き出し口が形成されている。正面の上部の側面近くには敲打痕が多く残る。赤化やヒビ割れが確認できるため，熱を受けている可能性がある。

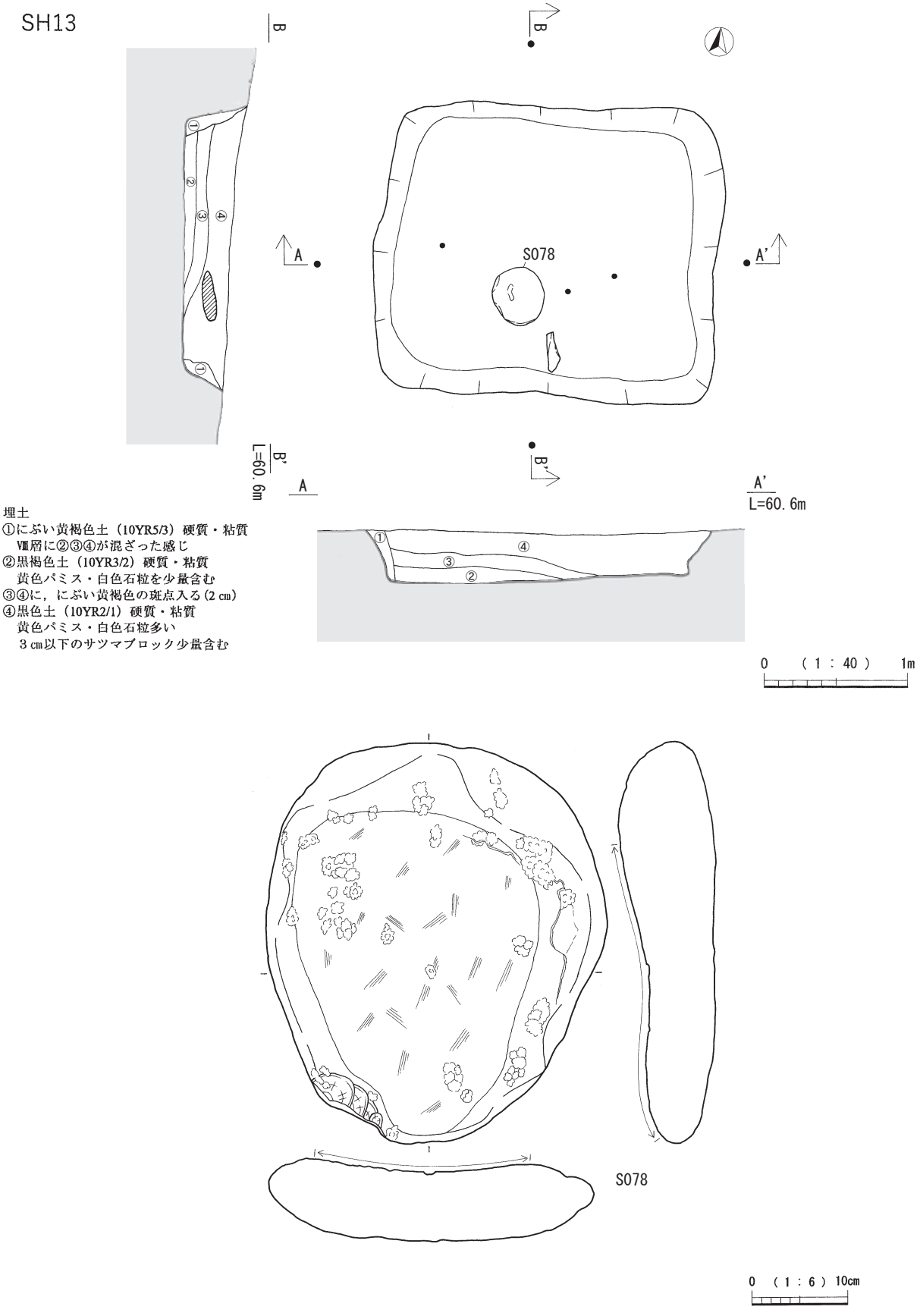
竪穴建物跡14号（第49図）

検出状況

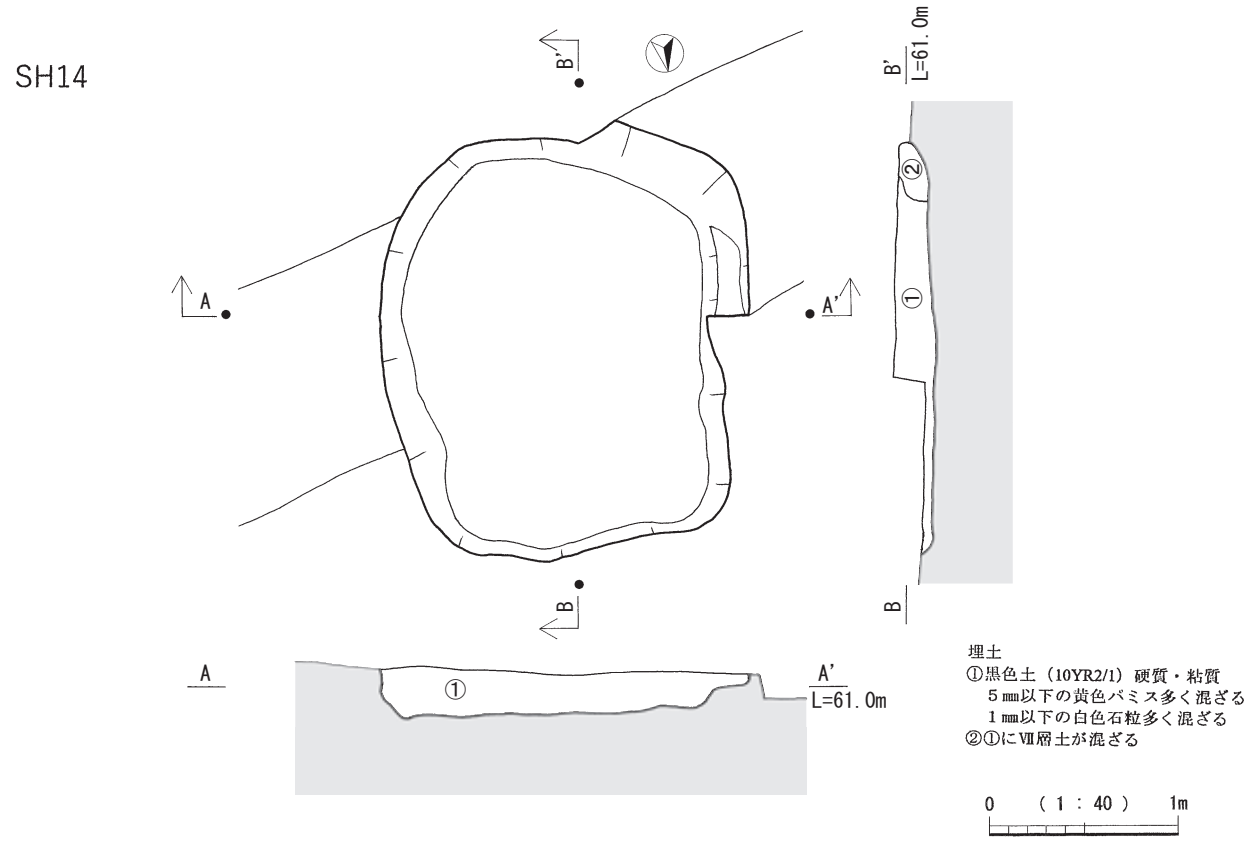
SH14は，D・E－４区において検出された。検出面は，Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは，不定形で，長軸は2.18m，短軸が1.94



第48図　竪穴建物跡13号・出土遺物



第49図　竪穴建物跡14号

mを測る。長短比は0.89，深さ24cm，遺構の推定面積は4.23㎡であった。不定形の小規模の浅い竪穴建物跡である。土層ベルトを残して調査した。ベルトに半分ほどかかったが，段掘の有無は，確認できなかった。Ⅷ層中で掘り止めている。

埋土

埋土の主体は，黒色土に黄色パミスと白色石粒が混ざる。周辺のⅦ層よりも多い。

出土遺物

遺物は出土していない。

竪穴建物跡15号（第50図）

検出状況

SH15は，E－４区において検出された。検出面はⅧ層であった。

形状と規模

平面プランは，隅丸方形で，長軸は2.37m，短軸が1.82mを測る。長短比は0.77，深さ30cm，遺構の推定面積は4.31㎡であった。隅丸方形の小規模な竪穴建物跡である。

埋土

埋土の主体は，黄色パミスと白色石粒を多く含んだ黒色土である。

出土遺物

埋土中から土器１点と石器３点が出土した。14は口縁部で，わずかに内湾する。口唇部は平坦にナデ調整される。口縁部には縦の瘤状突起が貼り付けられた後，横位の貝殻刺突文が施される。Ⅵa類と思われる。

S079・S080は安山岩製の磨敲石の破片である。S080は埋土の下位から出土した。ともに敲打の痕跡はあるもののその頻度は少ないと考えられる。人為的に半裁した可能性もある。S081は安山岩製の磨敲石であり，歪な楕円状である。正面中央部の敲打は深く擦れており，凹石としての使用も考えられる。裏面はよく磨られる。３点共に被熱の痕跡はない。図化しなかったが，型式不明土器小片３点，磨石と思われる破片１点が出土した。

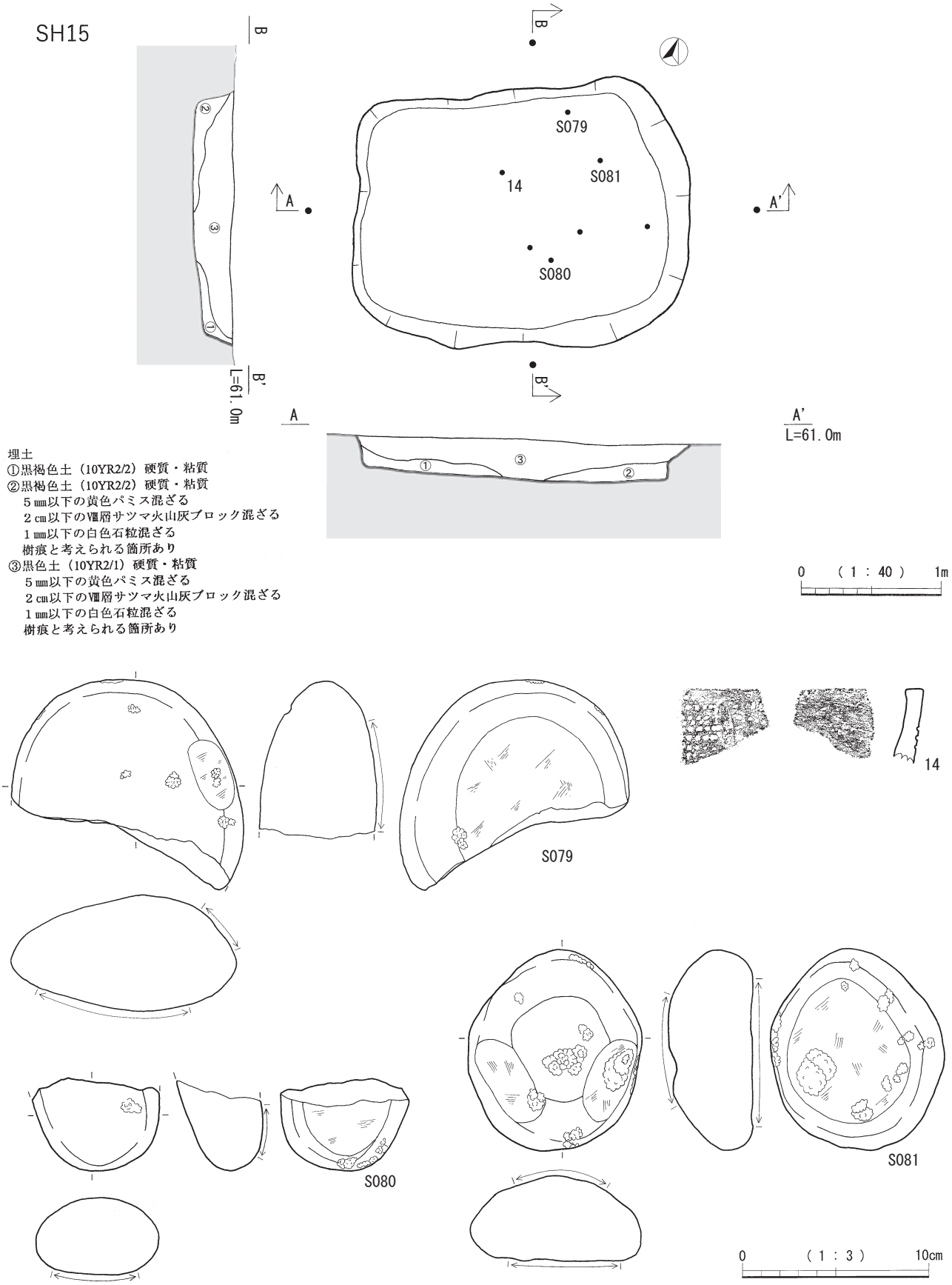
竪穴建物跡16号（第51図）

検出状況

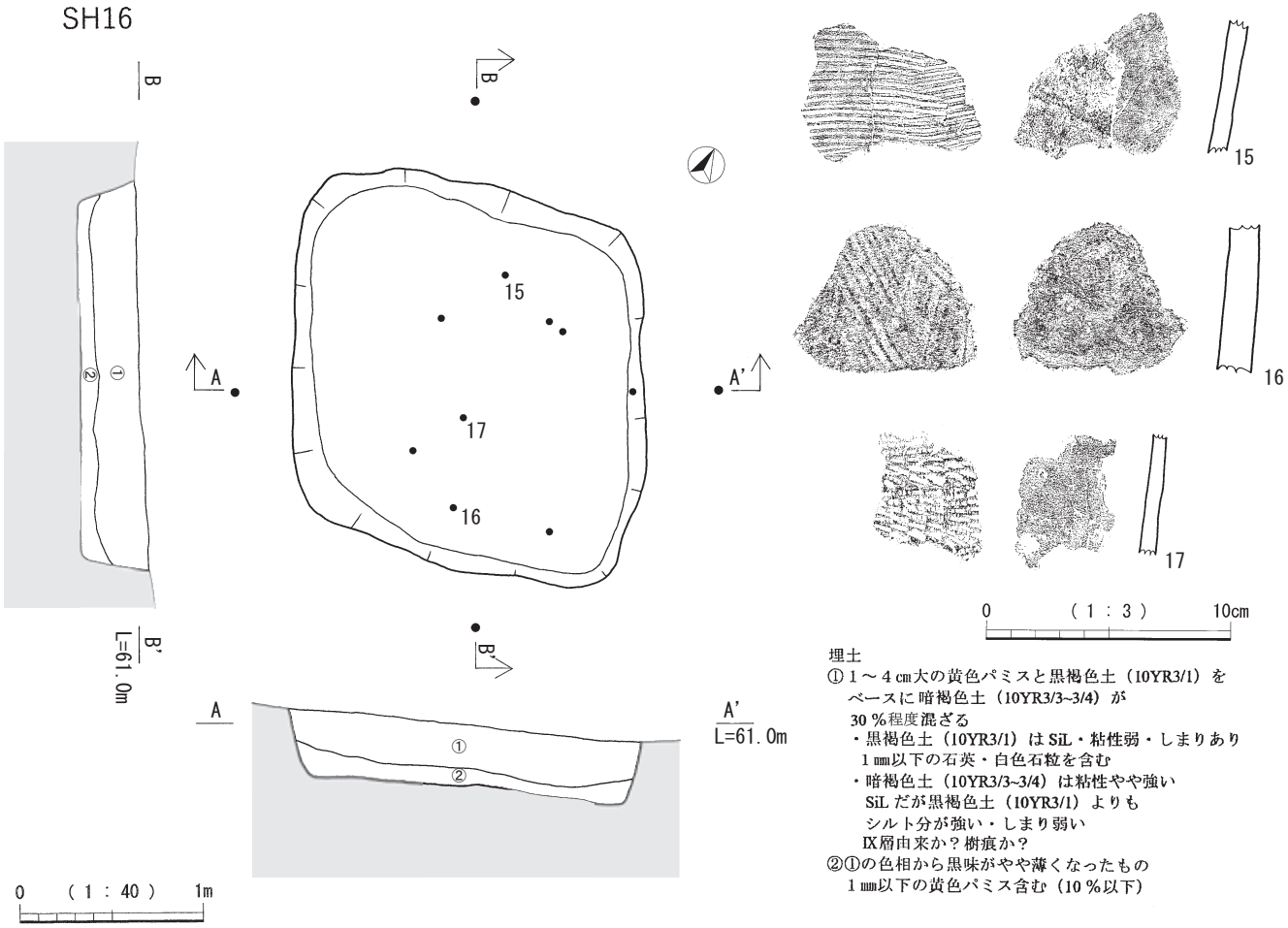
SH16は，F－３・４区において検出された。検出面は，ⅦbからⅧ層上面であった。

形状と規模

平面プランは，菱形に近い隅丸方形で，長軸は2.09m，短軸が1.91mを測る。長短比は0.91，深さ34cm，遺構の推定面積は3.99㎡で，小規模の遺構である。Ⅷ層土を壁面とし，底面をⅨ層上面とする。底面は，全体的に東側に傾斜し，焼土や施設等は見られなかった。また，検出面周辺にピットは発見されなかった。



第50図　竪穴建物跡15号・出土遺物



第51図　竪穴建物跡16号・出土遺物

埋土

埋土の主体は，黒褐色土で黄色パミスと白色石粒を若干含む。

出土遺物

土中から土器３点が出土した。15はSH17出土の土器と接合した資料である。胴部は丁寧にナデ調整された後に横位の貝殻条痕文が密に施される。内面もナデ調整されている。Ⅲc類に分類される。16は，胴部に綾杉状の貝殻条痕文が施される。内面はナデ調整され，煤が付着している。やや厚みのある土器である。Ⅴ類に分類される。17は，貝殻腹縁部を押圧ぎみに羽状に施す。内面は丁寧にナデ調整されている。一見短沈線の様に見えてⅥeタイプのようであるが，ここでは分類をⅥaとした。

竪穴建物跡17号（第52図）

検出状況

SH17は，Ｆ－４区において検出された。検出面は，Ⅷ層上面であった。

形状と規模

平面プランは，楕円形で，長軸は2.17m，短軸が2.16mを測る。長短比は0.99，深さ30㎝，遺構の推定面積は3.68㎡であった。楕円形で小規模の竪穴建物跡である。

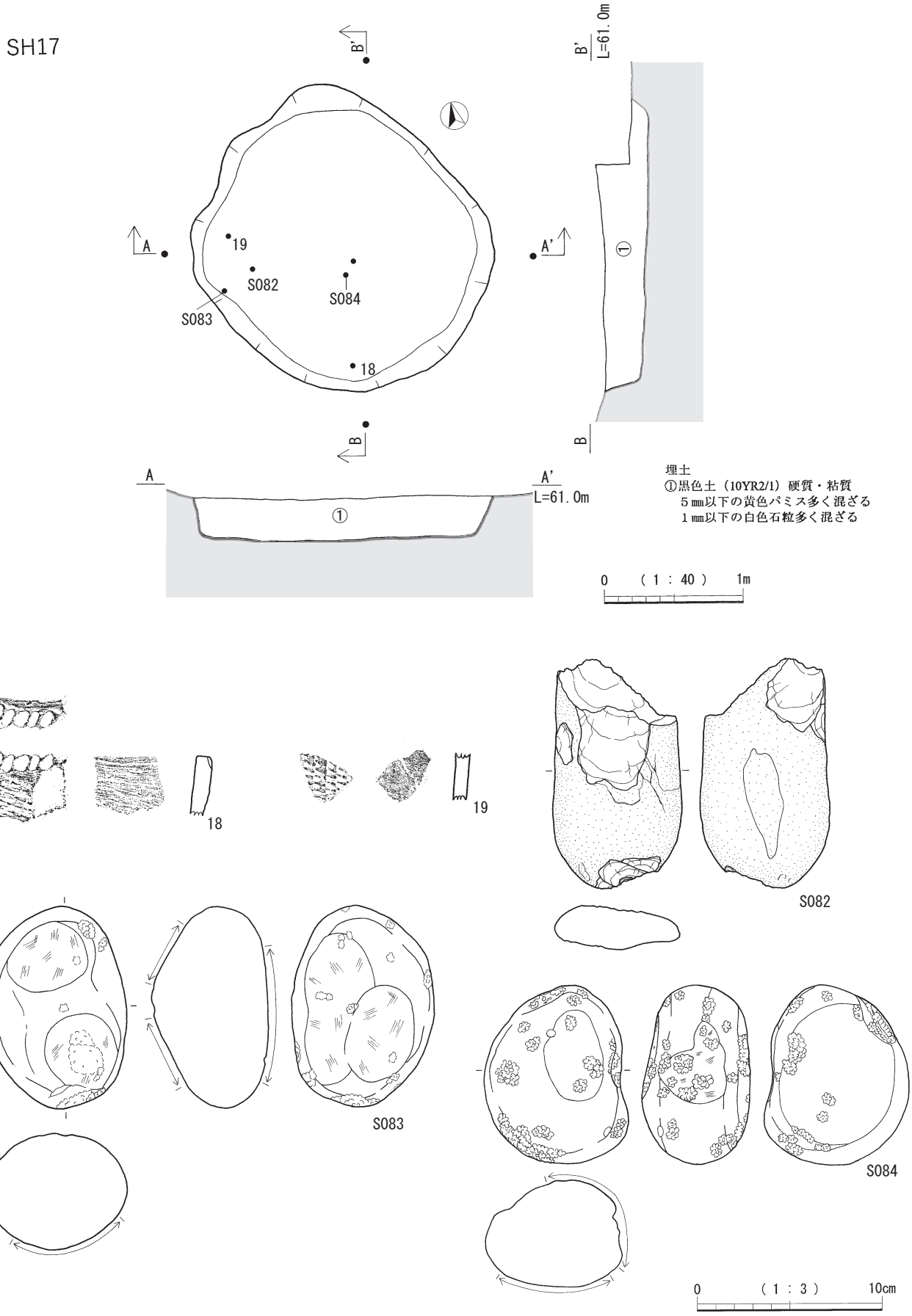
埋土

埋土は，硬質で粘質のある黒色土を基本とし，５㎜以下の黄色のパミスと１㎜以下の白色石粒が多く混じる。炭化物は確認できなかった。

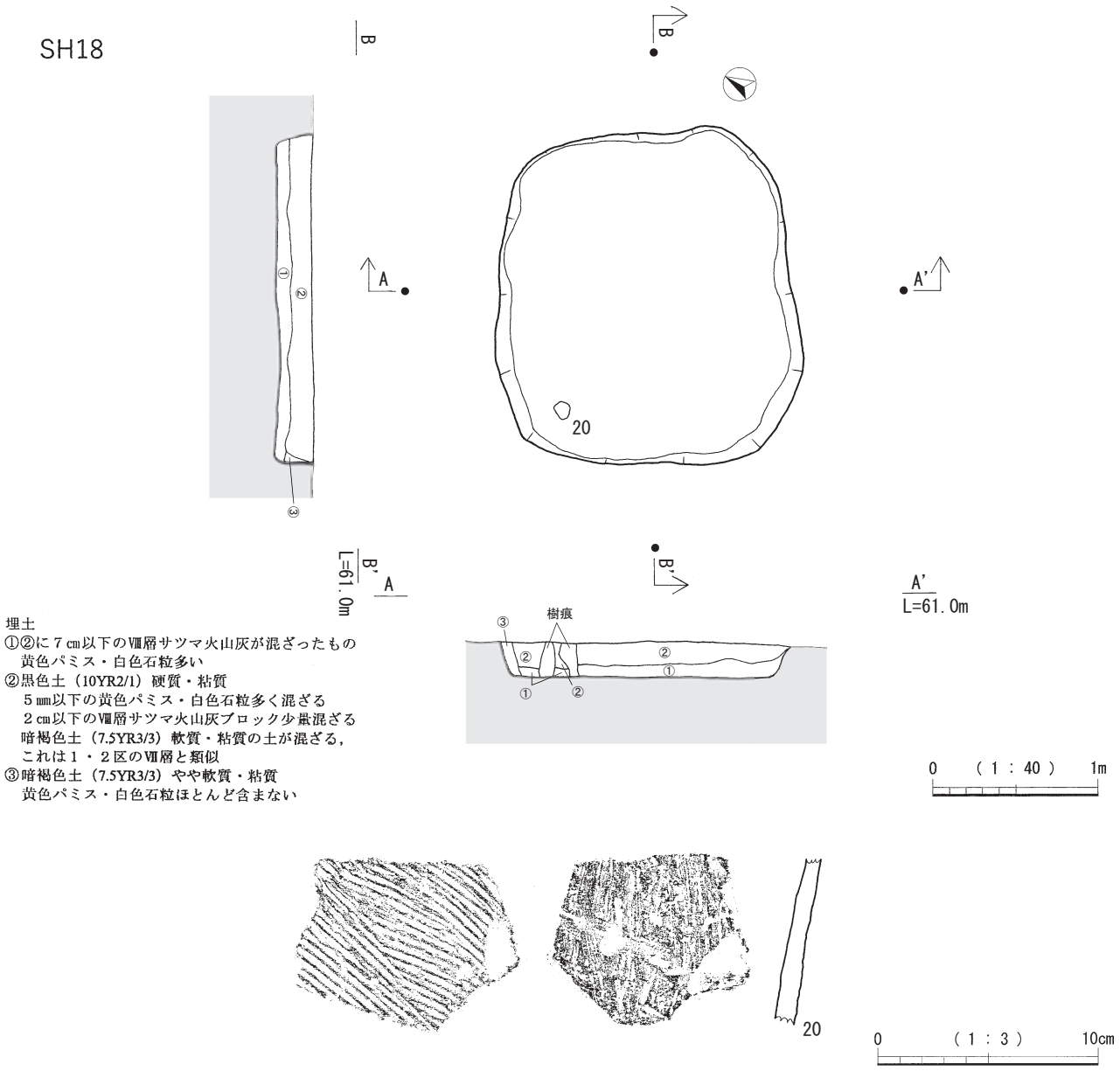
出土遺物

埋土中から２点の土器と３点の石器が出土した。18は口縁部で，平坦にナデ調整された口唇部外面にキザミが施され，その下位に貝殻条痕文が斜位に施される。内面はケズリの調整が認められる。Ⅱ類に分類される。19は胴部小片で，貝殻腹縁部による押引文が施されている。Ⅳ類に分類される。

石器は３点出土した。S082は，ホルンフェルス製の石斧である。表面の風化が著しい。S083・S084は歪な楕円形の安山岩製の磨敲石である。正面は特によく使用されている。S084は多孔質の石材であり，側面の敲打痕は深い。ともに被熱の痕跡はない。



第52図　竪穴建物跡17号・出土遺物



第53図　竪穴建物跡18号・出土遺物

竪穴建物跡18号（第53図）

検出状況

SH18は，E－５区において検出された。検出面は，Ⅷ層上面であった。

形状と規模

平面プランは，隅丸方形で，長軸は2.02m，短軸が1.80mを測る。長短比は0.89，深さ22㎝，遺構の推定面積は3.64㎡であった。Ⅸ層上面またはⅧ層最下部で掘り止めている。隅丸方形で小規模の深さの浅い竪穴建物跡である。

埋土

埋土は北西側が樹痕で層が乱れているため，基本的には黄色パミスと白色石粒が多く混ざる黒色土と薩摩火山灰が混ざった黒色土から成る。

出土遺物

埋土中から１点の土器が出土した。20は胴部で，斜位の貝殻条痕文が施され，内面はケズリの調整が認められる。Ⅱ類土器に分類される。

竪穴建物跡19号（第54図）

検出状況

SH19は，E－７区において検出された。検出面は，Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは，不定形で，長軸は1.72m，短軸が1.67mを測る。長短比は0.97，深さ20㎝，遺構の推定面積は2.87㎡であった。遺構の東側は試掘トレンチで切られている。

不定形で小規模の浅い竪穴建物跡である。

埋土

埋土の主体は，黒色土で５㎜以下の黄色のパミスと１㎜以下の白色石粒を多く含む。

出土遺物

埋土中から土器１点が出土した。21は，小口状工具と思われる施文具で条痕文を施している。器壁はやや薄めで，内面は丁寧にナデ調整されている。後・晩期の土器と思われる。型式は不明である。

竪穴建物跡20号（第54図）

検出状況

SH20は，Ｆ－８区において検出された。検出面は，Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは，隅丸長方形で，長軸は2.48m，短軸が1.61ｍを測る。長短比は0.65，深さ30㎝，遺構の推定面積は3.99㎡であった。隅丸長方形で中規模の竪穴建物跡である。Ⅸ層上部で掘り止めている。

埋土

埋土の主体は，黒色土で黄色のパミスと白色石粒が多く包まれる。１～６区の竪穴建物跡と比較した場合でも，粒が大きく，量も多く含む。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

竪穴建物跡21号・22号（第55・56図）

検出状況

SH21・22は，Ｆ－８・9区において検出された。検出面は，Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは，複数の遺構が切り合っており不明である。検出面からの深さは42㎝である。SH21・22は切り合っているが，形状や断面の土層からさらに２ないし３基の竪穴建物跡が重複していた可能性もある。ここでは，とりあえず平面形状から２基として報告する。また南西側には竪穴建物跡の壁面を利用した連穴土坑と思われるようなSK18が竪穴建物跡を切っている。南側には古墳時代のSK231もSH21を一部切っており，遺構が複雑に絡み合った竪穴建物跡である。

SK18については，土坑編で再掲し，SK231については，報告書「小牧遺跡４　古墳時代編」で掲載することにする。

埋土

埋土は断面観察から竪穴建物跡が複数からんだ状況が窺える。主体は暗褐色土である。

出土遺物

SH21・22の埋土中から土器４点が出土した。22は口縁部近くの胴部で，縦に瘤状突起を貼り付けた後，縦位の貝殻刺突文を施し，その下位には横位の貝殻刺突文を密に施す。包含層出土の181と同一個体と思われる。Ⅵaに分類される。23は，３条の横位貝殻刺突文を挟んで，「Ｚ」字状に貝殻刺突文を密に施す。Ⅵaに分類される。24は，口縁部がやや肥厚し内湾する土器で，波状口縁を呈する。口唇は丁寧にナデられ，口縁部には横位の貝殻刺突文を３条施し，その下位には鋸歯状の沈線文が施される。Ⅶa類に分類される。25は，横位の貝殻条痕文を施す胴部小片で，色調が淡黄色を呈する。胎土に角閃石を多く含む。Ⅷ類に分類され，包含層出土の土器と同一個体と思われる。

石器は５点出土した。S085・S086は床直上で検出された遺物である。ともに安山岩製である。S085は，磨敲石片であり，裏面は非常によく磨られる。被熱破砕したものと思われ，割れ口も薄く赤化していることから，破砕後も熱を受けた可能性がある。S086は非常によく使用された磨敲石で、被熱破砕後した後も割れ口を敲いて繰り返し使用した状況が窺える。

S087 ～ S089はすべて床直上で検出された遺物であり，S087・S088は被熱破砕した安山岩製の磨敲石片である。S088は上面先端部が特に使用されており，ハンマーとして使用したことも考えられる。S089は，舟形の軽石加工品である。わずかに赤色顔料が付着することから着色されていた可能性がある。

竪穴建物跡23号・24号（第57図）

検出状況

SH23・24は，Ｅ－９・10区において検出された。検出面は，Ⅷ層であった。

形状と規模

全体の平面プランからは一つの竪穴建物跡に見えるが，東西方向の断面観察から，④⑤の埋土を②③が切っている状況が分かる。この断面形状から，2基の竪穴建物跡が重複していると判断した。東側の竪穴建物跡をSH23，西側の竪穴建物跡をSH24とする。SH23の平面プランは隅丸長方形で，長軸は1.88＋αm，短軸が2.06ｍを測る。深さ40㎝であった。SH24の平面プランは 隅丸方形で，長軸は2.00m，短軸が1.66ｍを測る。長短比は0.83，深さ36㎝，遺構の推定面積は3.32㎡であった。

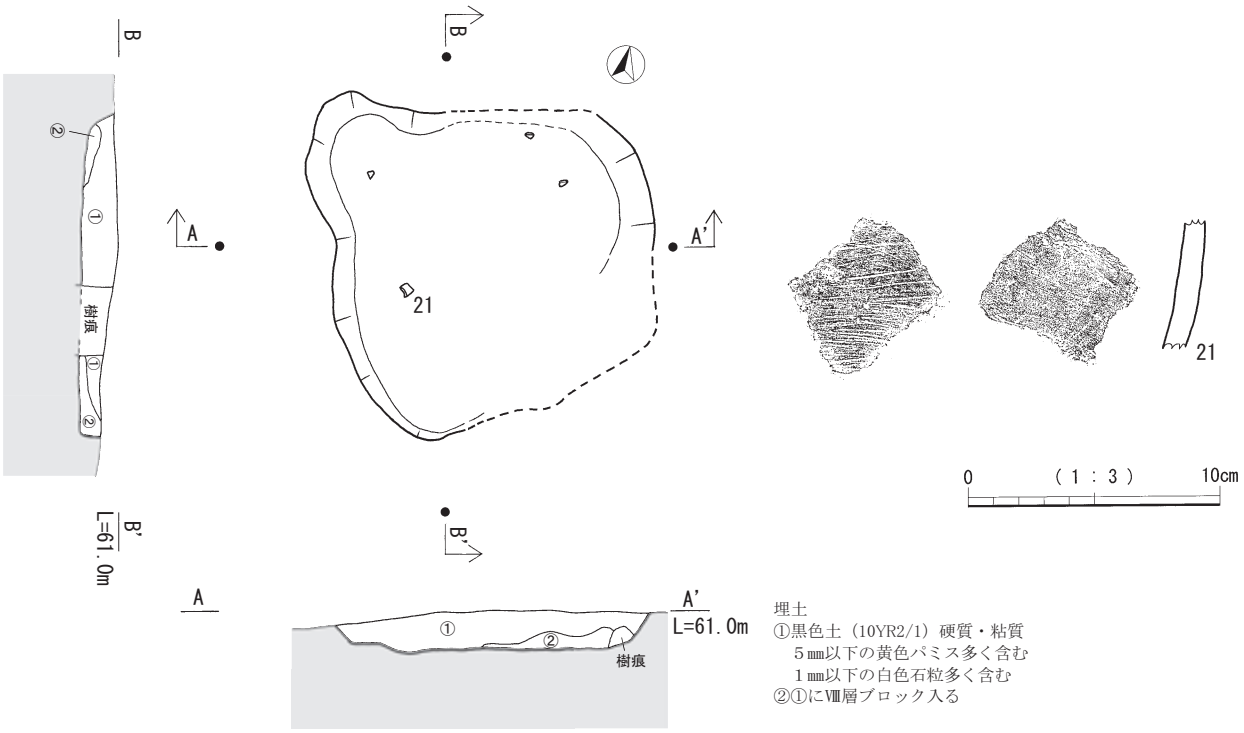
埋土

埋土の主体は，黒色土で，遺構埋土の違いは，黄色パミスや白色石粒の混入状況及び色調で区分した。

出土遺物

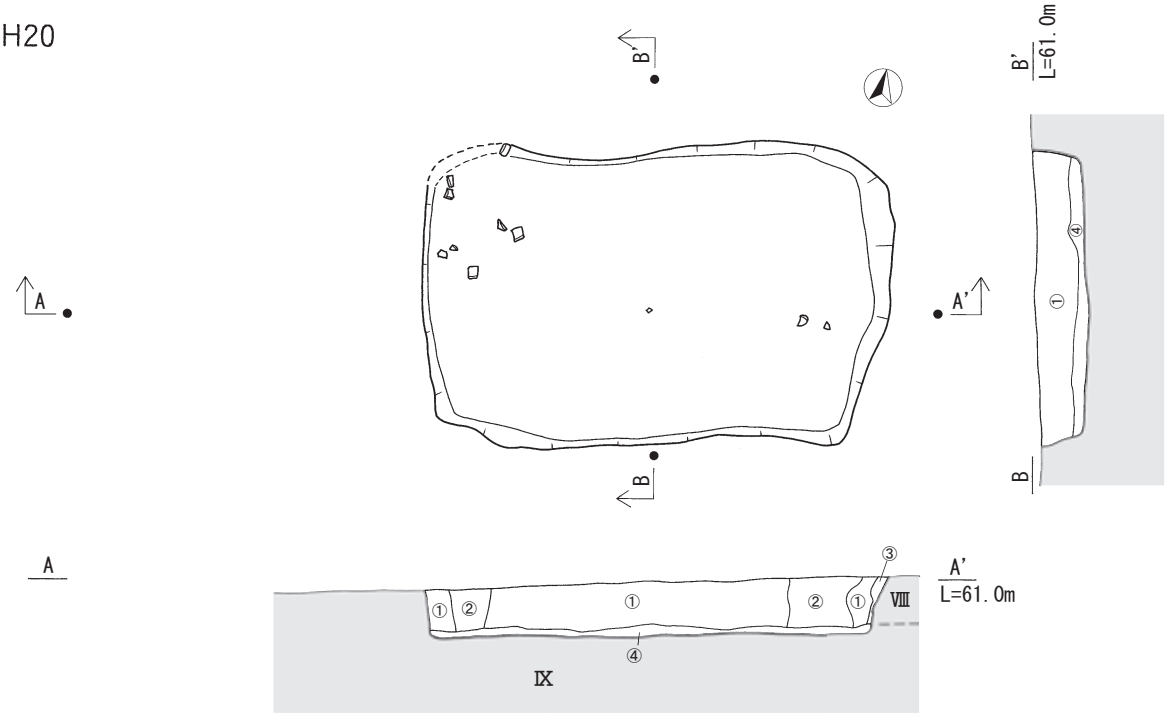
埋土中からは，土器６点が出土した。26は，包含層出土の土器と接合した資料である。貝殻腹縁部による鋸歯状の条痕文を施す。器壁はやや厚い。Ⅶa類に分類される。27・28は，縦位の貝殻刺突文が施される胴部片で，器壁

SH19



埋土
①黒色土（10YR2/1）硬質・粘質
　5㎜以下の黄色パミス多く含む
　1㎜以下の白色石粒多く含む
②①にⅧ層ブロック入る

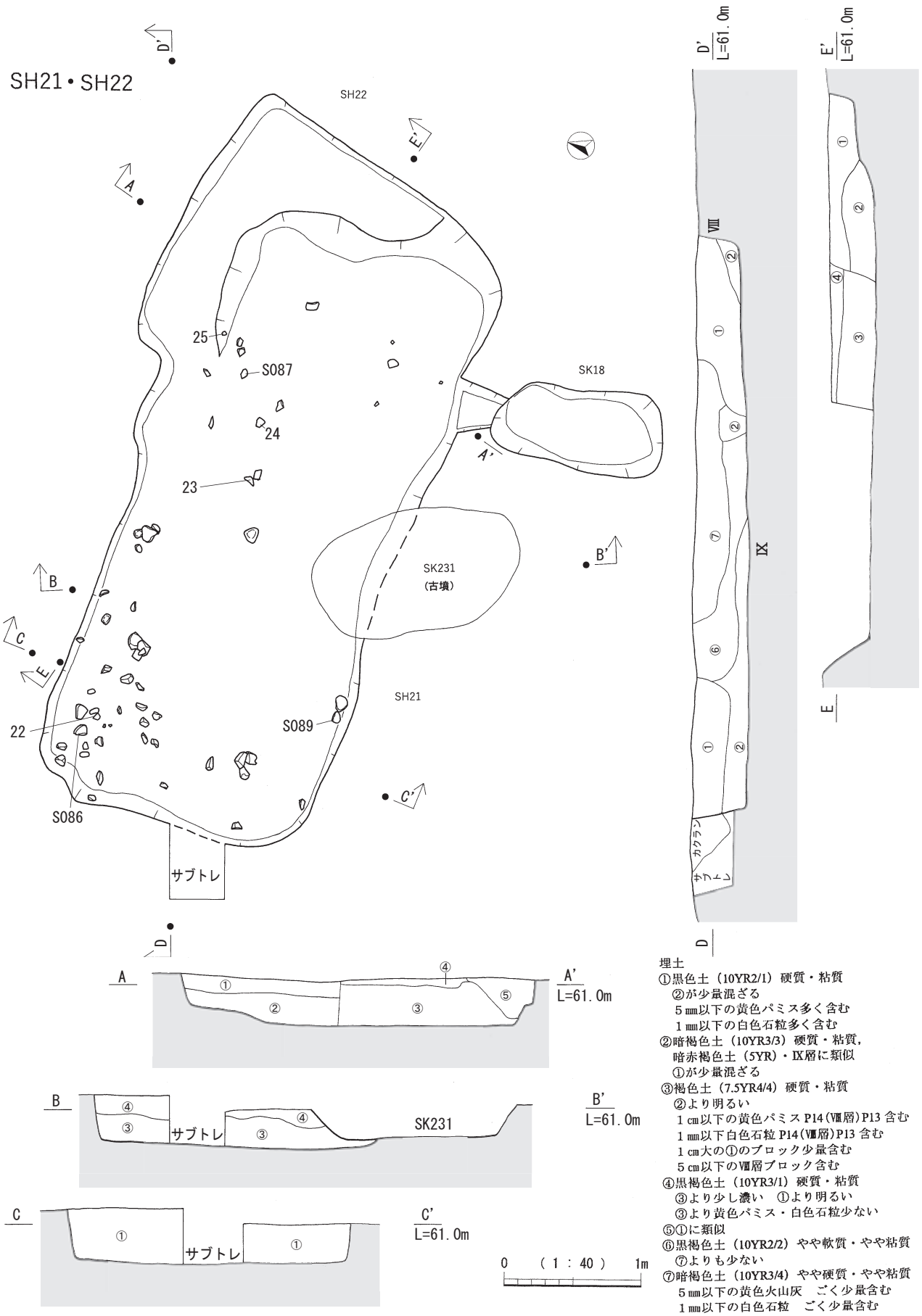
SH20



埋土
①黒色土（10YR2/1）硬質・粘質
　5㎜以下の黄色パミス・1㎜以下の白色石粒多く含む
②樹痕
③にぶい橙色土（2.5YR6/3）①とⅧ層が混ざる，硬質・粘質弱い
　5㎜以下の黄色パミス・1㎜以下の白色石粒多く混ざる
　P13'・P14判断つかない
④暗褐色土（10YR3/3）やや硬い・粘質強い
　①とⅨ層混ざる

0 （1：40） 1m

第54図　竪穴建物跡19号・出土遺物・竪穴建物跡20号



埋土
①黒色土（10YR2/1）硬質・粘質
②が少量混ざる
5㎜以下の黄色パミス多く含む
1㎜以下の白色石粒多く含む
②暗褐色土（10YR3/3）硬質・粘質，
暗赤褐色土（5YR）・Ⅸ層に類似
①が少量混ざる
③褐色土（7.5YR4/4）硬質・粘質
②より明るい
1㎝以下の黄色パミス P14(Ⅷ層)P13 含む
1㎜以下白色石粒 P14(Ⅷ層)P13 含む
1㎝大の①のブロック少量含む
5㎝以下のⅧ層ブロック含む
④黒褐色土（10YR3/1）硬質・粘質
③より少し濃い ①より明るい
③より黄色パミス・白色石粒少ない
⑤①に類似
⑥黒褐色土（10YR2/2）やや軟質・やや粘質
⑦よりも少ない
⑦暗褐色土（10YR3/4）やや硬質・やや粘質
5㎜以下の黄色火山灰 ごく少量含む
1㎜以下の白色石粒 ごく少量含む

第55図　竪穴建物跡21号・22号

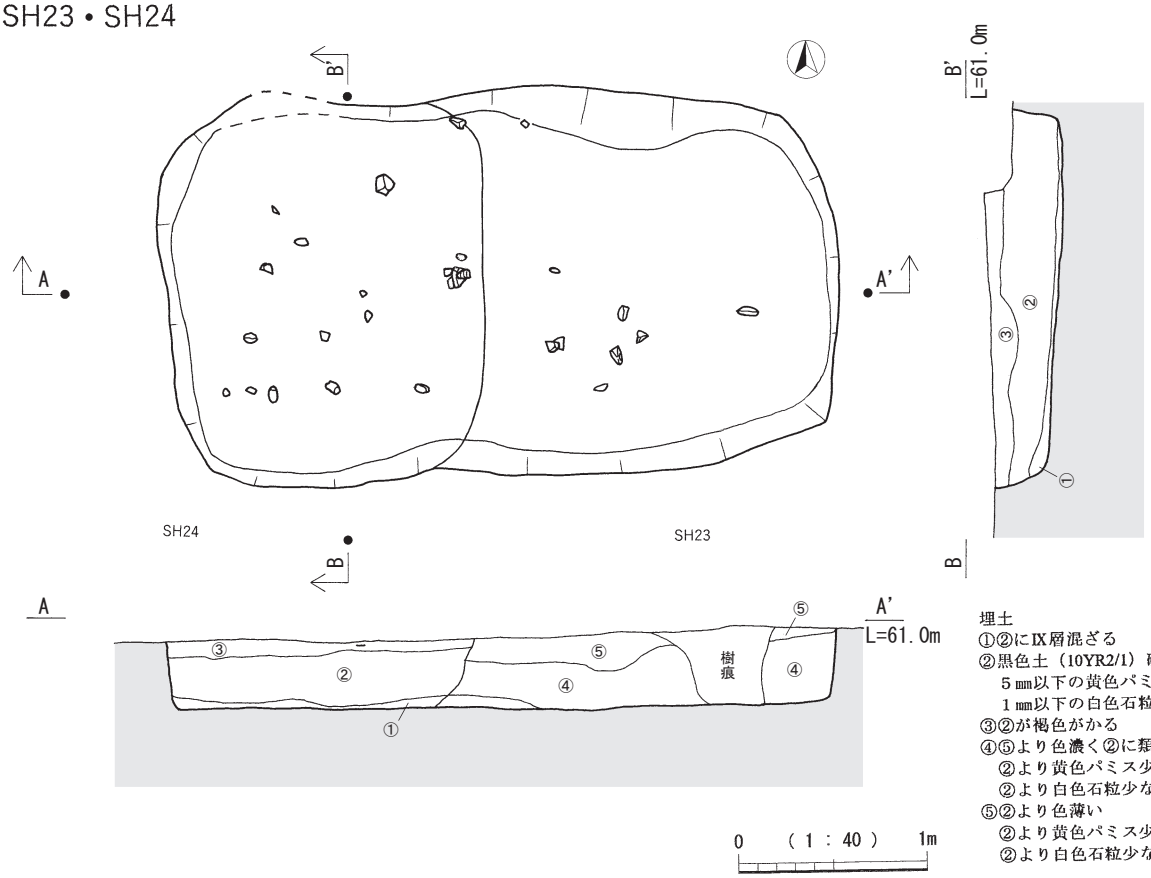


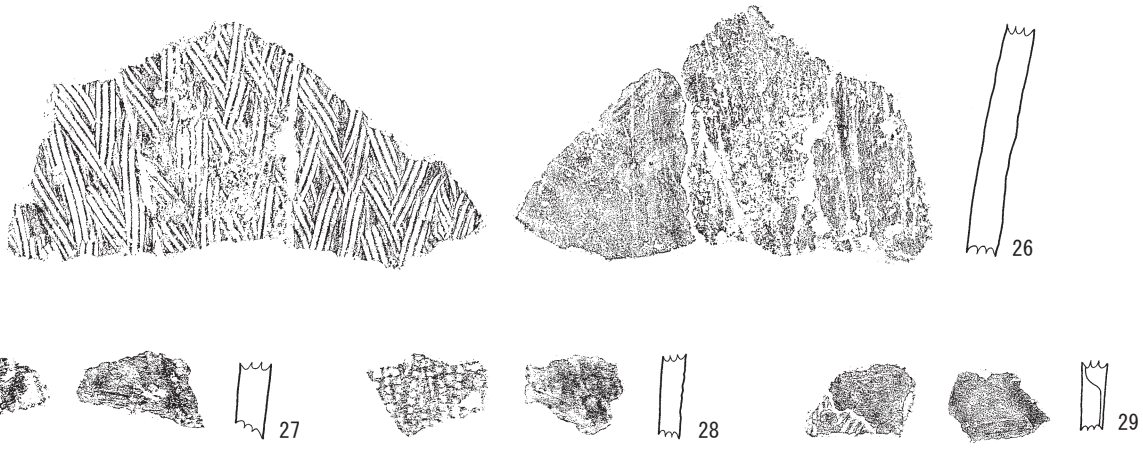
第56図　竪穴建物跡21号・22号出土遺物

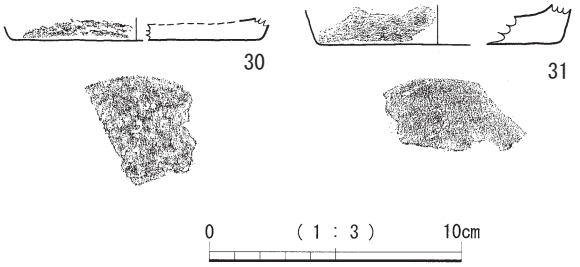
はやや厚い。Ⅵｂ類に分類される。29は，土器制作中に施文を施してからひび割等のトラブルがあり，化粧土を上から施し，補強したような様相を呈する。丁寧にナデ調整された化粧土の下から，Ⅶ類に似た斜位の条痕が確認される。30・31は，型式不明の底部である。丁寧にナデて調整されている。

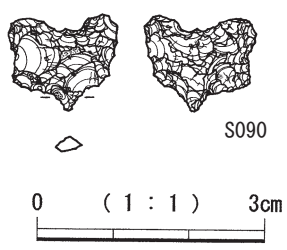
石器は，１点出土した。S090は，黒曜石Ｃ類の石鏃の欠損品を再加工したものである。先端の折断部分に両側から調整剥離を施し，尖端部を作り石錐に加工しようとした可能性がある。

SH23・SH24









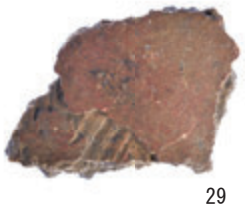
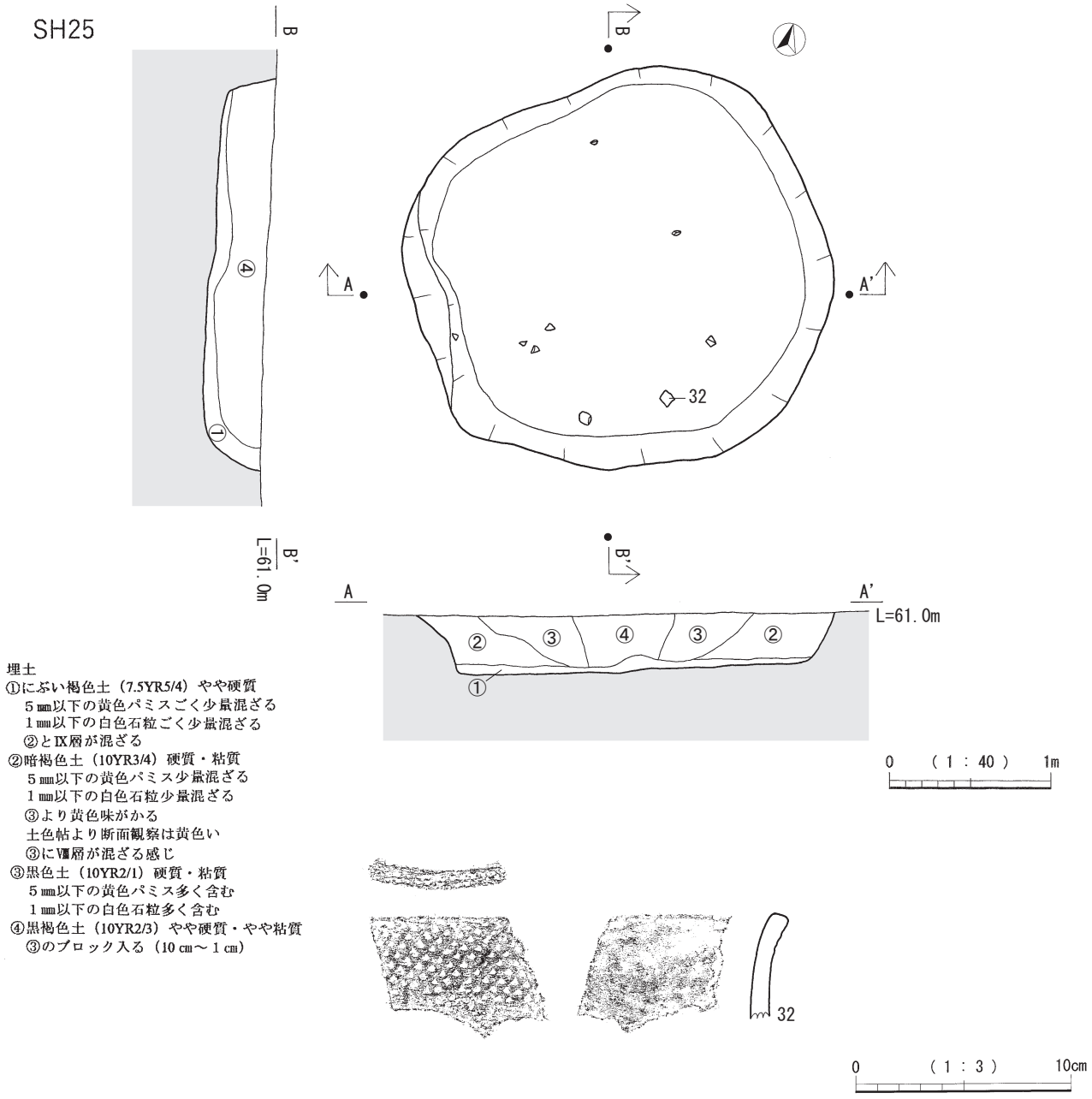


写真２　No.29土器外面

第57図　竪穴建物跡23号・24号・出土遺物



第58図　竪穴建物跡25号・出土遺物

竪穴建物跡25号（第58図）

検出状況

SH25は，E・F－9区において検出された。検出面は，Ⅷ層上面であった。

形状と規模

平面プランは，楕円形で，長軸は2.60m，短軸が2.40mを測る。長短比は0.92，深さ34㎝，遺構の推定面積は4.90㎡であった。

埋土

埋土の主体は，黒褐色土で黄色パミスや白色石粒の混入状況，色調等でさらに分層した。

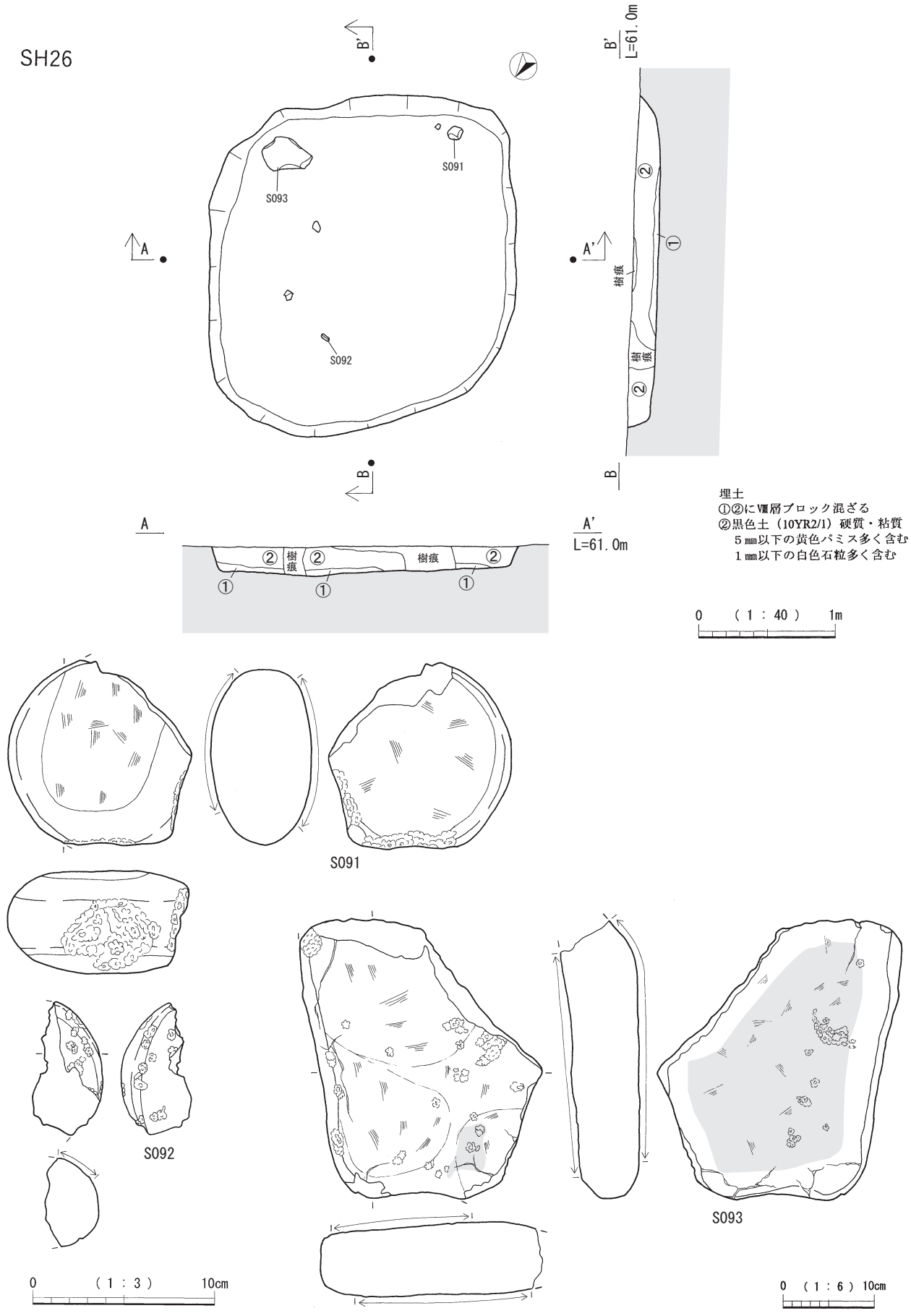
出土遺物

床面から土器1点が出土した。32は口縁部で，口縁部はやや外反し，丸みを帯びた口唇部には貝殻刺突文が施される。口縁部には斜位の貝殻刺突文が施される。Ⅴ類に分類される。

竪穴建物跡26号（第59図）

検出状況

SH26は，F－8・9区において検出された。検出面は，



第59図　竪穴建物跡26号・出土遺物

Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは，隅丸方形で，長軸は2.44m，短軸が2.24mを測る。長短比は0.92，深さ20㎝，遺構の推定面積は5.47㎡であった。

埋土

埋土の主体は，樹痕が入り乱れてはいるが，黄色パミス，白色石粒混入の黒色土である。

出土遺物

埋土中から４点の遺物が出土し，うち石器３点を図化した。

S091は安山岩製の円形の磨敲石であり，下面の敲打は深く，正面・背面はよく磨られている。S092は，凝灰岩製の被熱破砕した磨敲石片である。S093は安山岩製の石皿片であり，正面・背面共に使用されており正面の方がその頻度が高いと思われる。裏面は変色しており，被熱の痕跡が残る。

竪穴建物跡27号・28号（第60・61図）

検出状況

SH27・28は，B・C－11区において検出された。検出面は，Ⅷ層であった。Ⅷ層上面精査中に発見された。

形状と規模

全体の平面プランからは一つの竪穴建物跡に見えるが，東西方向の断面観察から，④⑧の埋土をⓒ・ⓕが切っている状況が分かる。また，床面も中央付近で段差があり，竪穴建物跡を拡張したのではなく，2基の竪穴建物跡が重複していると判断した。

東側のSH27は，隅丸長方形で，長軸は，2.20m＋α，短軸が1.94mを測る。深さは48㎝である。

西側のSH28は，隅丸方形で，長軸は2.25m，短軸が1.90mを測る。長短比は0.84，深さ50㎝，遺構の推定面積は4.28㎡であった。SH28は床面直上に炭化物細粒が散在していた。２基の竪穴建物跡では，柱穴・炉等は発見できなかった。

埋土

SH28は，埋土は中央部に土坑と樹痕が入り込んでいるため，堆積状況に乱れがある。南北方向の断面で見る限りでは４枚の埋土が確認できる。

SH27は東西方向の断面からは４枚の埋土がレンズ状堆積している様子が窺える。

出土遺物

重複した２基の竪穴建物跡から土器１点と石器４点が出土した。33は，外面に貝殻刺突文を「Ｖ」字状に施し，内面は丁寧なナデ調整がなされている。Ⅵｂ類に分類される。

SH28では，サブトレンチ北側床面直上でチップ等が集中して発見された。S094はチャート製の石鏃未製品である。側縁部には表裏から調整剥離を施しているものの，製作途中で大きく剥がれ落ちたことにより製品化を断念したと思われる。S095は，ホルンフェルス製の打製石斧（Ⅲ類）の基部である。S096・S097は，安山岩製の磨敲石である。S096は円形で側面を一周弱く敲打している。正面・裏面は強く磨られており，薄く煤が付着する。S097は楕円形でよく使用されている。薄く赤化しており，熱を受けた可能性がある。

竪穴建物跡29号（第62図）

検出状況

SH29は，B－13区において検出された。Ⅷ層上面精査中に発見され，検出面は，Ⅷ層上面であった。

形状と規模

平面プランは，隅丸長方形で，長軸は2.64m，短軸が1.86mを測る。長短比は0.70，深さ41㎝，遺構の推定面積は4.91㎡であった。中央部に深さ５㎝程度の浅い掘り込みも確認されたが，焼土や炭化物は検出できなかった。

SH29は，他の早期遺構よりも標高の低い位置に所在し，小牧遺跡では大型で深さの深いタイプとなる。南西に下る緩傾斜面に形成されていた。床面は，Ⅸ層であった。

埋土

埋土は樹痕で乱れているが，火山灰質で硬質の黒褐色土を基本とし，黄色パミス粒をわずかに含む。

出土遺物

遺構検出面上部から２点の石器が出土した。15㎝程の磨敲石２点で，竪穴建物跡廃棄時に埋納された可能性もある。S098・S099はともに楕円形の安山岩製の磨敲石であり，ともに側面全周を弱く敲いている。S098の正面・裏面は強く磨られており，稜を形成している。裏面には薄く煤が付着し，左側面にわずかに赤色顔料が付着する。S099は楕円状ではあるが，意図的に四角く角をつけている可能性がある。

竪穴建物跡30号（第63図）

検出状況

SH30は，E－13区において検出された。検出面は，Ⅶ層掘り下げ後，Ⅷ層上面精査中に発見された。

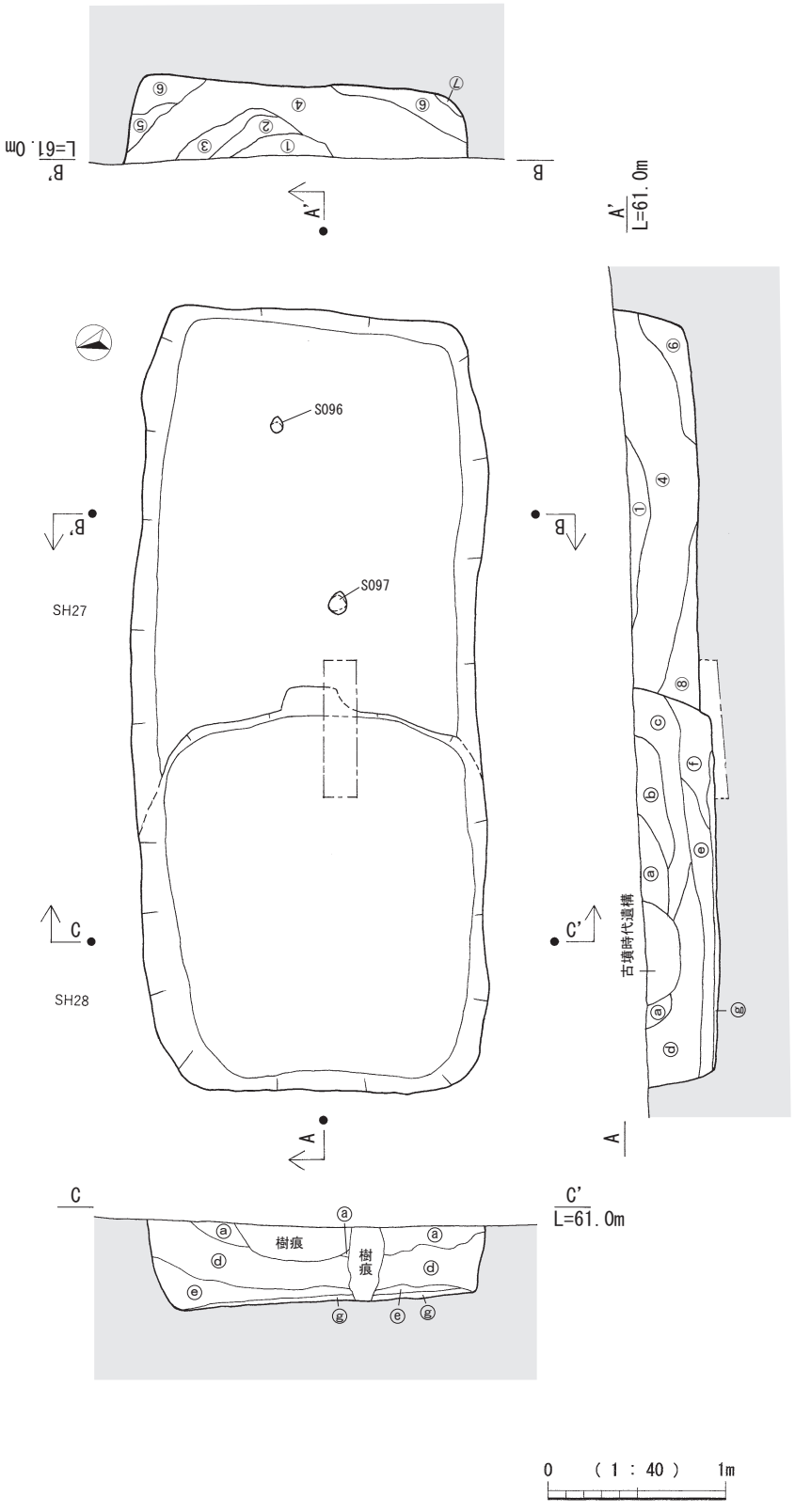
形状と規模

平面プランは，隅丸長方形で，長軸は3.75m，短軸が2.05mを測る。長短比は0.55，深さ45㎝，遺構の推定面積は7.69㎡であった。隅丸長方形の竪穴建物跡では，規模の大きい深さのある遺構である。

遺構内には，炉，柱穴，炭化物等確認できなかった。床面は，Ⅸ層上面である。

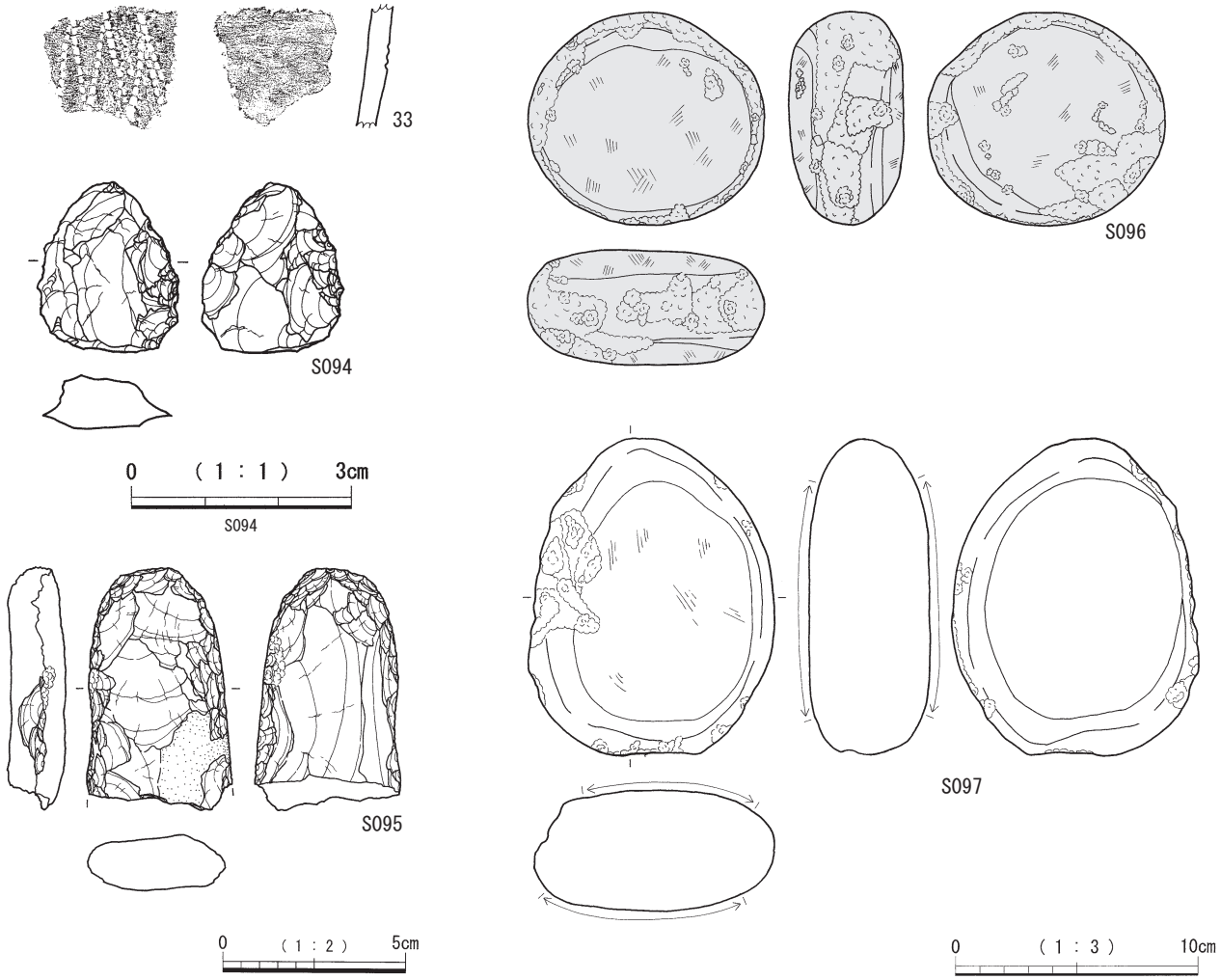
埋土

埋土の主体は，Ⅶa層の質感に類似した黒褐色土を基本とする。



埋土
①暗褐色土（10YR3/3）
やや粘性あり・火山灰質
白色パミス微粒含む
黄色パミス微粒ごくわずかに含む
炭化物微粒ごくわずかに含む
Ⅵ層に類似する
②暗褐色土（10YR3/3）
やや粘性あり・火山灰質
Ⅶａ層小土塊がパッチ状に入る
③暗褐色土（10YR3/3）
やや粘性あり・火山灰質
白色パミス微粒含む
黄色パミス細粒わずかに含む
炭化物微粒ごくわずかに含む
④黒褐色土（10YR2/3）
やや粘性あり・火山灰質
Ⅶａ層土塊含む
Ⅷ層硬化層の
小土塊ごくわずかに含む
⑤黒褐色土（10YR2/2）
やや粘性あり・火山灰質
白色パミス微粒含む
黄色パミス細粒わずかに含む
⑥黒褐色土（10YR2/2）
やや硬くしまる・火山灰質
Ⅶａ層土塊に④の土塊が混ざる
⑦にぶい黄褐色土（10YR4/3）
強粘質
パミス等含まず
⑧④に似る
④よりⅦａ層土塊の量が少ない
ⓐ黒褐色土（10YR2/2）
Ⅶａ層に似る
Ⅶａ層よりややほぐれている
黄色パミス微粒含む
白色パミス微粒含む
黄色パミス粒わずかに含む
白色パミス粒わずかに含む
ⓑ黒褐色土（10YR2/2）
特徴は①に似る
①よりもパミスが濃集して
パッチ状になっている
Ⓒ黒褐色土（10YR2/3）
粒子粗・火山灰質・しまる
白色パミス微粒多く含む
黄色パミス微粒含む
黄色パミス粒含む
炭化物微粒ごくわずかに含む
Ⅷ層硬化層の小土塊
ごくわずかに含む
ⓓ黒褐色土（10YR2/2）
Ⅶａ層よりややほぐれる
パミス等の入りはⒸに類似
パミス等全体に量が少ない
黄色パミス粒をわずかに含む
ⓔ黒褐色土（10YR2/2）
粒子粗・火山灰質・やや軟質
白色パミス微粒多く含む
黄色パミス粒わずかに含む
ⓕ褐色土（10YR4/6）
粒子粗・火山灰質・やや軟質
白色パミス微粒多く含む
黄色パミス細粒ごくわずかに含む
炭化物微粒わずかに含む
ⓖにぶい黄褐色土（10YR5/4）
粒子粗・火山灰質・やや軟質
白色パミス微粒多く含む
Ⅶａ層小土塊パッチ状に入るが
レンズ状にややつぶれている

第60図　竪穴建物跡27号・28号



第61図　竪穴建物跡27号・28号出土遺物

出土遺物

埋土中から土器２点が出土した。34は口縁部でやや肥厚して内湾し，口縁部外面に斜位の貝殻刺突文を施す。Ⅵa類土器と思われる。35は型式不明の底部で，丁寧にナデ調整されている。

石器は３点出土した。S100は砂岩製の磨敲石である。S100は，破片ではあるが，現状の形に破砕した後も，右側面上部の割れ口を敲打に使用している。S101・S102は被熱破砕した磨石片であり，ともに薄く煤が付着する。SH30から出土した石器にはすべて被熱の痕跡がみられる。

竪穴建物跡31号（第64図）

検出状況

SH31は，F－13区において検出された。平成27年度下層確認トレンチ調査にて発見された。検出面は，Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは，隅丸長方形で，長軸は4.11m，短軸が2.23mを測る。長短比は0.54，深さ35cm，遺構の推定面積は9.17㎡であった。隅丸長方形の竪穴建物跡では，規模の大きい遺構である。

遺構内にピット，炉跡等の関連遺構は発見できなかった。

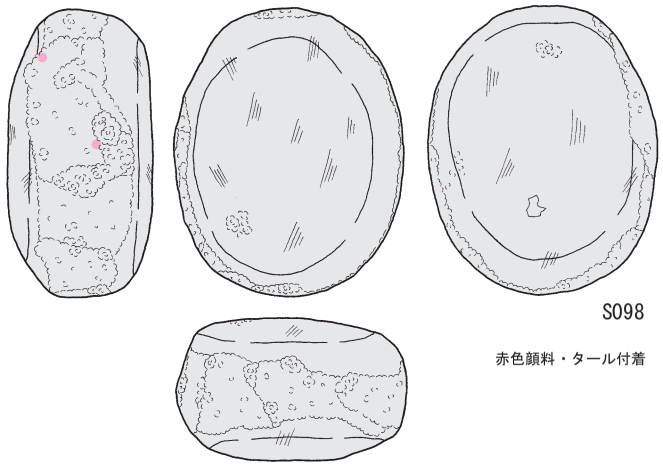
埋土

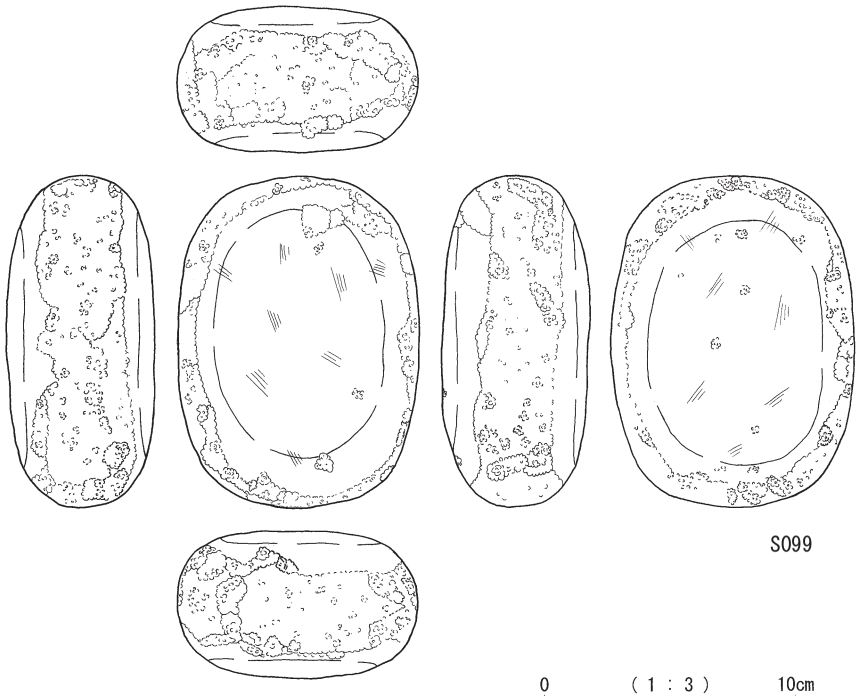
埋土の主体は，粒子が粗く火山灰質のしまった黒褐色土で，白色パミスや黄色パミスの微粒を多く含む。炭化物細粒もわずかに含む。

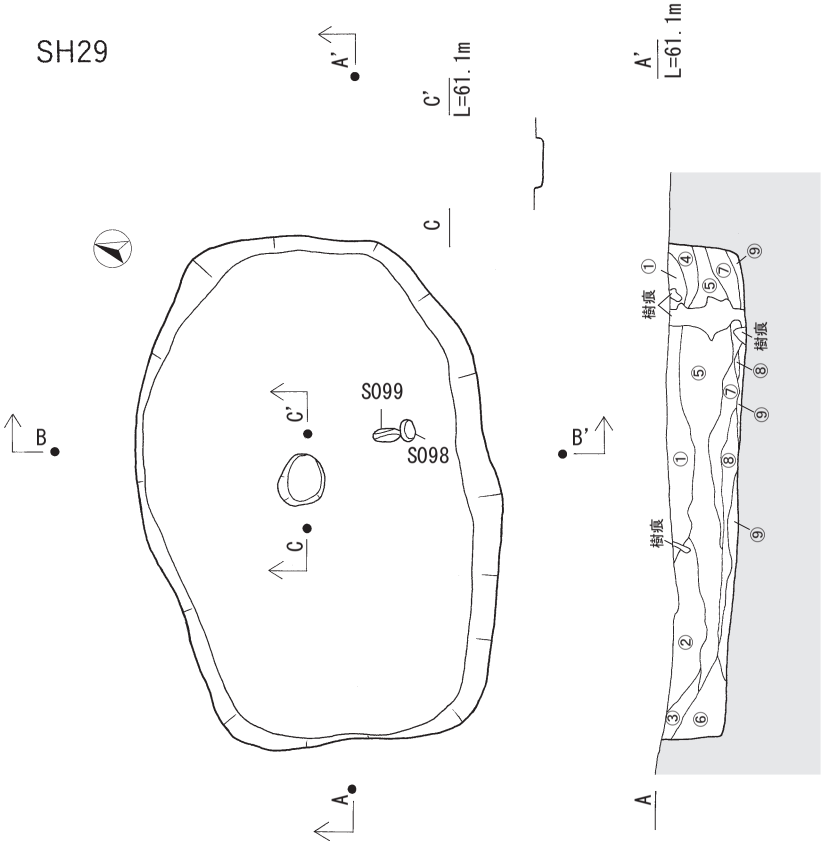
出土遺物

埋土中から，土器１点が出土した。36は，斜位に貝殻刺突文が施されており，「Z」字状に貝殻刺突文を施すⅥa類の土器と思われる。

石器は５点出土した。S103は凝灰岩製の小型の円形の磨敲石である。S104・S105・S106は安山岩製の磨敲石であり，S106は多孔質な石材である。S104は四角の形状の自然礫を使用したもので，使用頻度は少ない。S105・S106は，特に敲石としてよく使用されている。S107は，砂岩製の石錘である。板状の形状で，角は丸



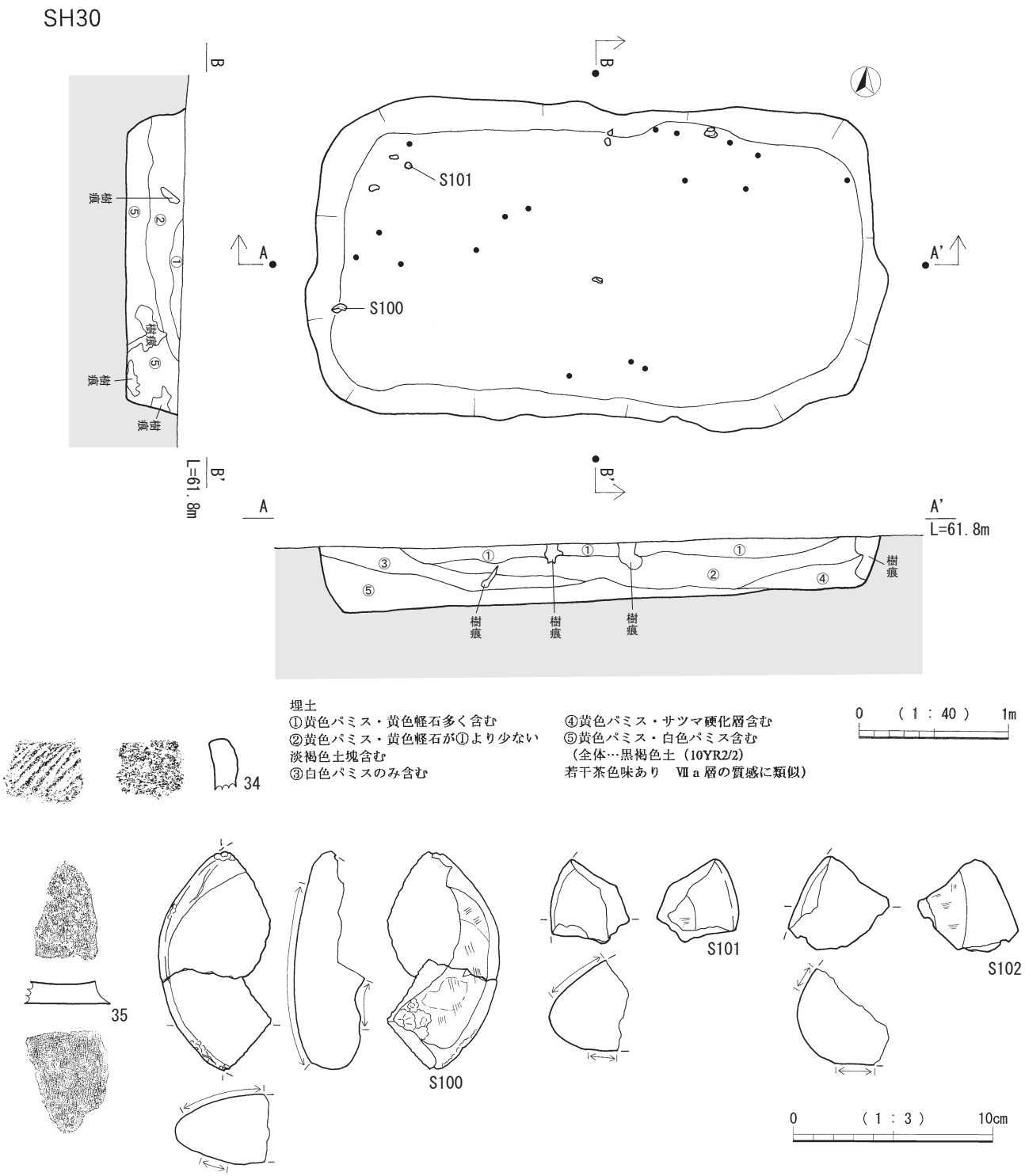




埋土
①黒褐色土（7.5YR3/2）火山灰質・硬質
　黄色パミス・白色パミス微粒多く含む
②褐色土（10YR4/4）火山灰質・やや硬質
　黄色パミス粒含む
　黄色パミス・白色パミス微粒極めて多く含む
③にぶい黄褐色土（10YR4/3）
　②に似る　②と比べ黄色パミスなし
④暗褐色土（7.5YR3/4）　①に似る
⑤黒褐色土（10YR2/3）
　黄色・白色パミス微粒多く含む
⑥にぶい黄褐色土（10YR4/3）
⑦暗褐色土（7.5YR3/4）
⑧黒褐色土（10YR2/2）硬質
　火山灰質と砂質の互層構造
　白色パミス微粒多く含む
⑨褐色土（7.5YR4/3）やや軟質・粘土質
　黄色パミス・白色パミスの微粒含む
⑩黒褐色土（10YR2/3）火山灰質・硬質
　白色パミス微粒多く含む
　黄色パミス細粒ごくわずかに含む
⑪黒褐色土（10YR2/3）
　⑩に似る　⑩より黄色パミス粒多く含む

0 (1 : 3) 10cm

第62図　竪穴建物跡29号・出土遺物



第63図　竪穴建物跡30号・出土遺物

みを帯びる。短径部を打ち掻いて制作している。表面が特に滑らかであることから，正面の上半分は磨られている可能性があるものの擦痕は不明瞭である。左側面には敲打のあとも確認できる。S106にのみ被熱の痕跡が確認できる。

竪穴建物跡32号（第65図）

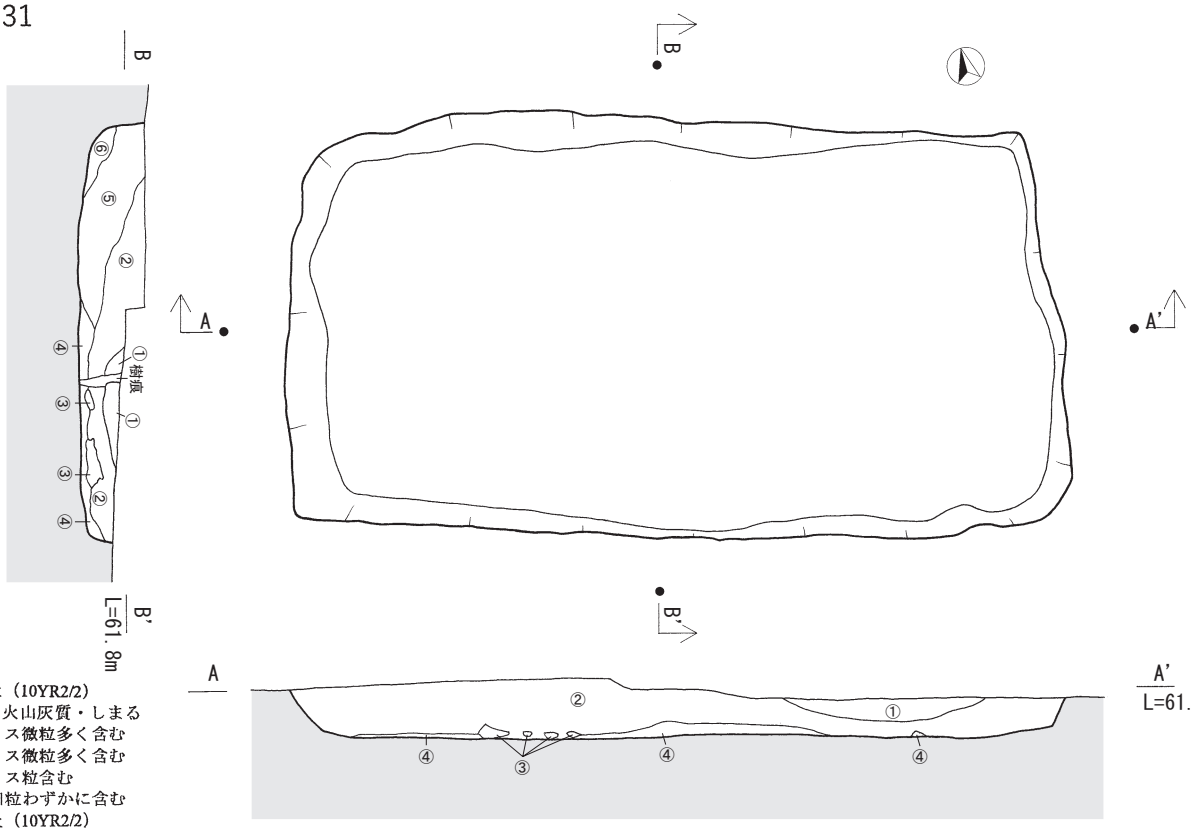
検出状況

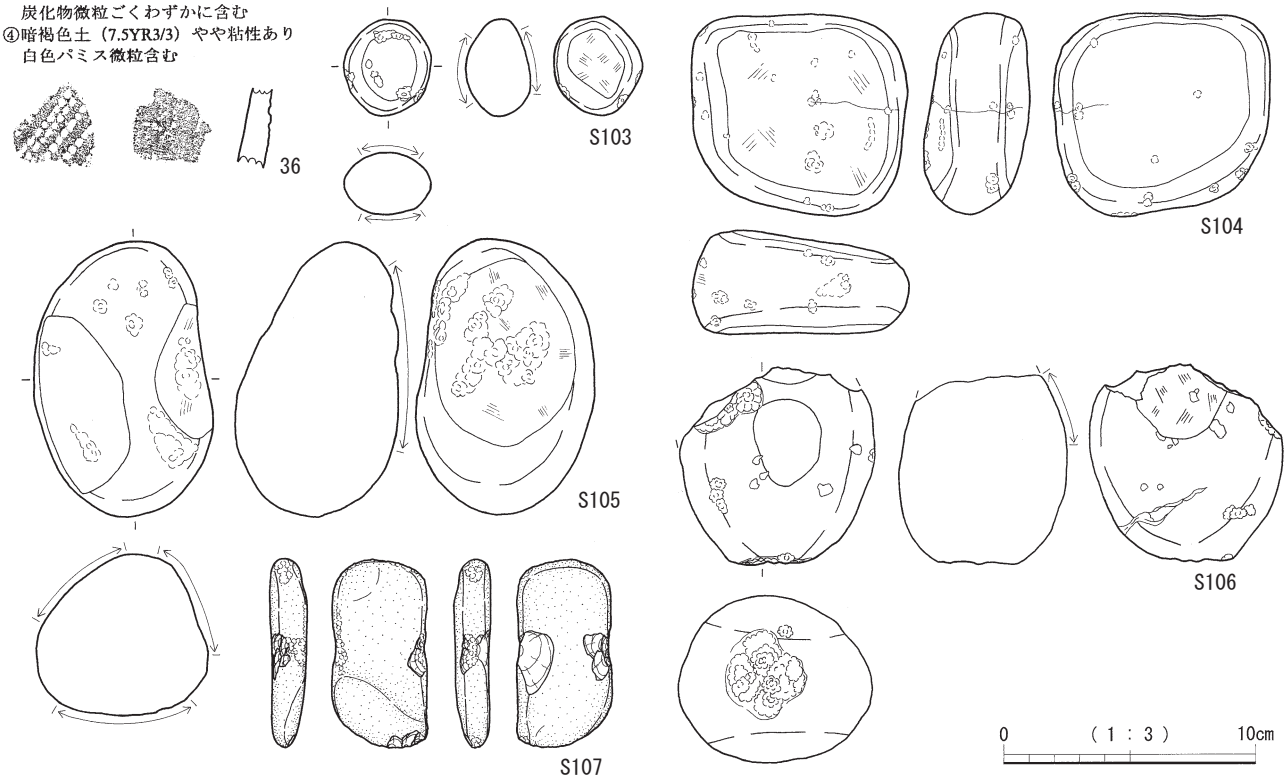
SH32は，E－14区において検出された。検出面は，Ⅶ層下面で発見され，Ⅶa層が落ち込んでいた。

形状と規模

平面プランは，隅丸方形で，長軸は2.02m，短軸が1.84

SH31





第64図　竪穴建物跡31号・出土遺物

mを測る。長短比は0.91，深さ37㎝，遺構の推定面積は3.72 ㎡であった。

竪穴建物跡内にピット，炉跡等の関連遺構は発見できなかった。床面は，Ⅸ層上面であった。

埋土

埋土の主体は，黒褐色土を基本とし，白色パミスや黄色パミス細粒を多く含む。

出土遺物

埋土中から遺物は出土していない。

竪穴建物跡33号（第65図）

検出状況

SH33は，E－16区において検出された。検出面は，Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは，隅丸長方形で，長軸は3.22m，短軸が2.05mを測る。長短比は0.64，深さ40㎝，遺構の推定面積は6.60㎡であった。

遺構内にピット，炉跡等の関連遺構は発見できなかった。床は，Ⅸ層上面であった。

埋土

埋土の主体は，粒子が粗くしまった黒褐色土を基本とし，黄色軽石をわずかに含む。

出土遺物

埋土中から遺物は出土していない。

竪穴建物跡34号（第66図）

検出状況

SH34は，E・F－16区において検出された。Ⅶ層掘り下げ後，Ⅷ層上面精査中に発見され，検出面は，Ⅷ層であった。

形状と規模

平面プランは，隅丸長方形で，長軸は2.87m，短軸 1.80mを測る。長短比は0.63，深さ46㎝，遺構の推定面積は5.17㎡であった。

周辺にはピット状のしみはあったが，形状が不安定で，竪穴建物跡に伴うと思われるものを特定できなかった。遺構内にピット，炉跡等は発見できなかった。

埋土

埋土の主体は，黒褐色土でⅦa層の特徴をもつ。黄色パミス，白色パミスの細粒を部分的に多く含む。

出土遺物

埋土中から土器胴部片が出土したが，小片のため掲載していない。

竪穴建物跡35号（第66図）

検出状況

SH35は，B・C－17区において検出された。検出面は，Ⅷ層上面であった。

形状と規模

平面プランは，隅丸方形で，長軸は2.28m，短軸が1.77mを測る。長短比は0.78，深さ32㎝，遺構の推定面積は4.04㎡であった。

竪穴建物跡内にピット，炉跡等の関連遺構は発見できなかった。床面は，Ⅸ層上面であった。

埋土

埋土の主体は，全体的にはⅦa層の特徴に類似した黒褐色土を基本とし，黄色軽石や黄色パミス，白色パミスをわずかに含む。

出土遺物

埋土中から出土した遺物は，小片につき，時期特定にいたらなかった。

竪穴建物跡36号（第67図）

検出状況

SH36は，C－17区において検出された。検出面は，Ⅷ層上面であった。

形状と規模

平面プランは，隅丸長方形で長軸は3.39m，短軸が1.75mを測る。長短比は0.52，深さ72㎝，遺構の推定面積は5.93㎡であった。

壁は垂直に近く，底はⅨ層下部に達する。壁はやや抉れており，掘り具の跡なのか縦筋も少し残っていた。早期竪穴建物跡の中では検出面からの深さが一番深い。平均深度の２倍程度もある。

埋土

埋土は，自然堆積状を呈する。硬質の黒褐色土を基本とし，黄色パミスや白色石粒を含む。

出土遺物

埋土中から土器１点が出土した。37は，レモン形を呈する土器である。横位に貝殻条痕が施され，一部押引文も確認される。屈曲が強く角筒土器の様相を呈するが，包含層から同一個体と思われるレモン形土器が出土していることからⅣ類に分類した。掲載資料は包含層の土器と接合した資料である。

竪穴建物跡37号（第68図）

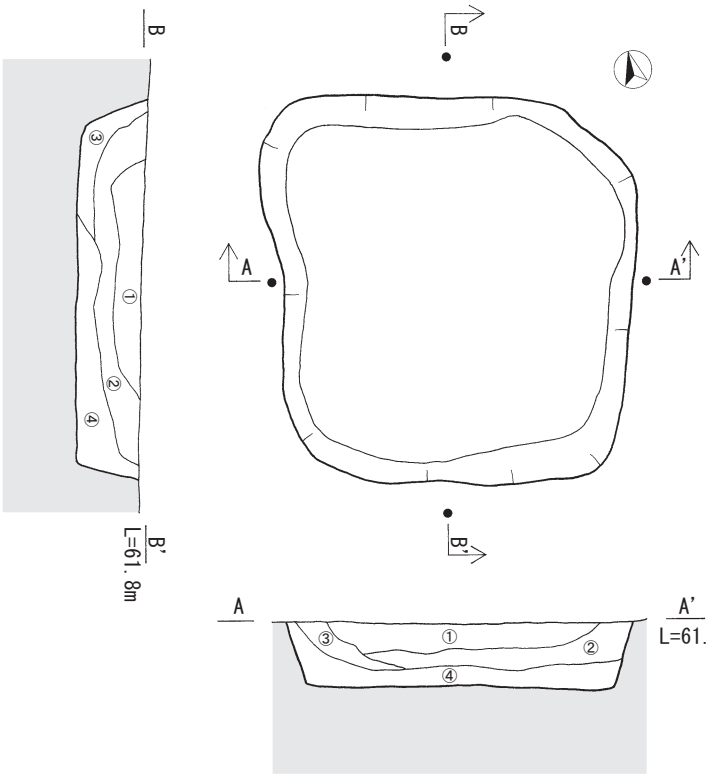
検出状況

SH37は，E－17区において検出された。検出面は，Ⅷ層上面であった。床面は，Ⅸ層上面であった。

形状と規模

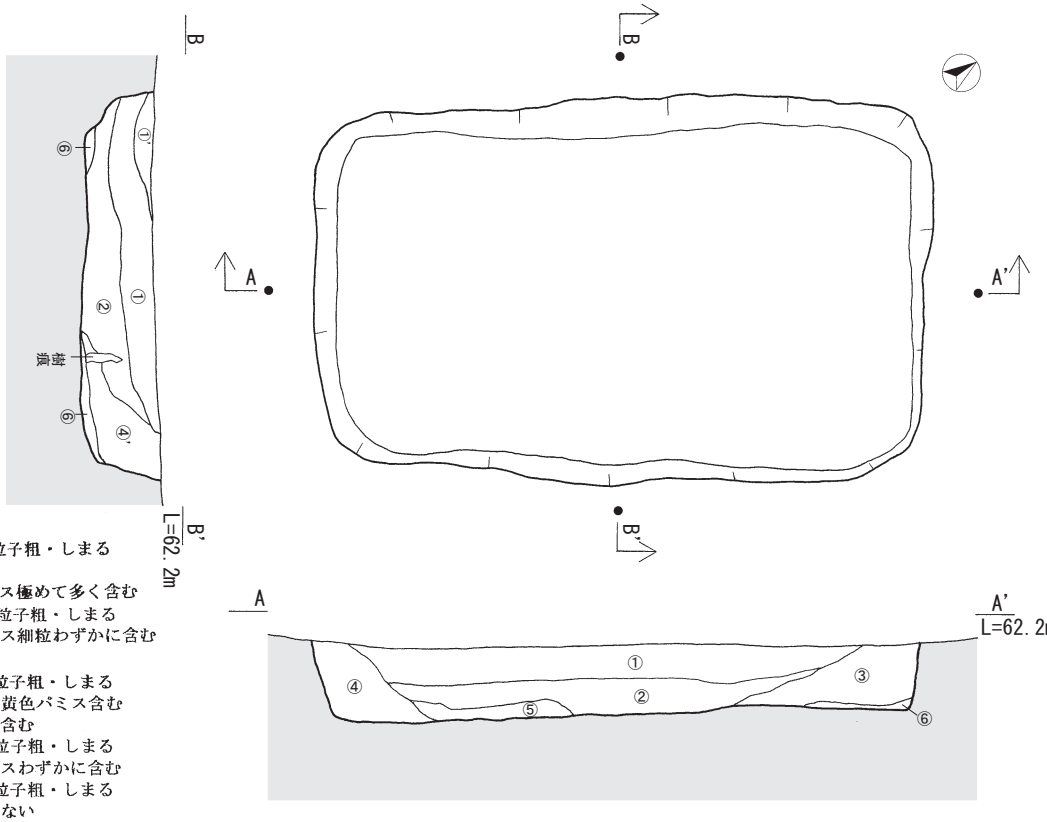
平面プランは，隅丸方形で，長軸は2.11m，短軸が2.10mを測る。長短比は0.99，深さ30㎝，遺構の推定面積は4.43㎡であった。南側は段堀りされ，何らかの構造があった可能性もある。遺構内には，ピット・炉跡等は検出されなかった。

SH32



埋土
①黒褐色土（10YR2/2）
　黄色パミス・白色パミス細粒多く含む
　黄色パミス粒含む
②黒褐色土（10YR2/3）
　①より白色パミス細粒少ない
③黒褐色土（10YR2/3）
　①②より黄色パミス・白色パミス細粒少ない
　サツマ硬化層ブロックわずかに含む
③暗褐色土（10YR3/4）やや粘性あり
　黄色パミス粒・黄色パミス細粒含む
　サツマ硬化層ブロックわずかに含む
④サツマ硬化層ブロック含む
　一次軽石の土塊わずかに含む

SH33

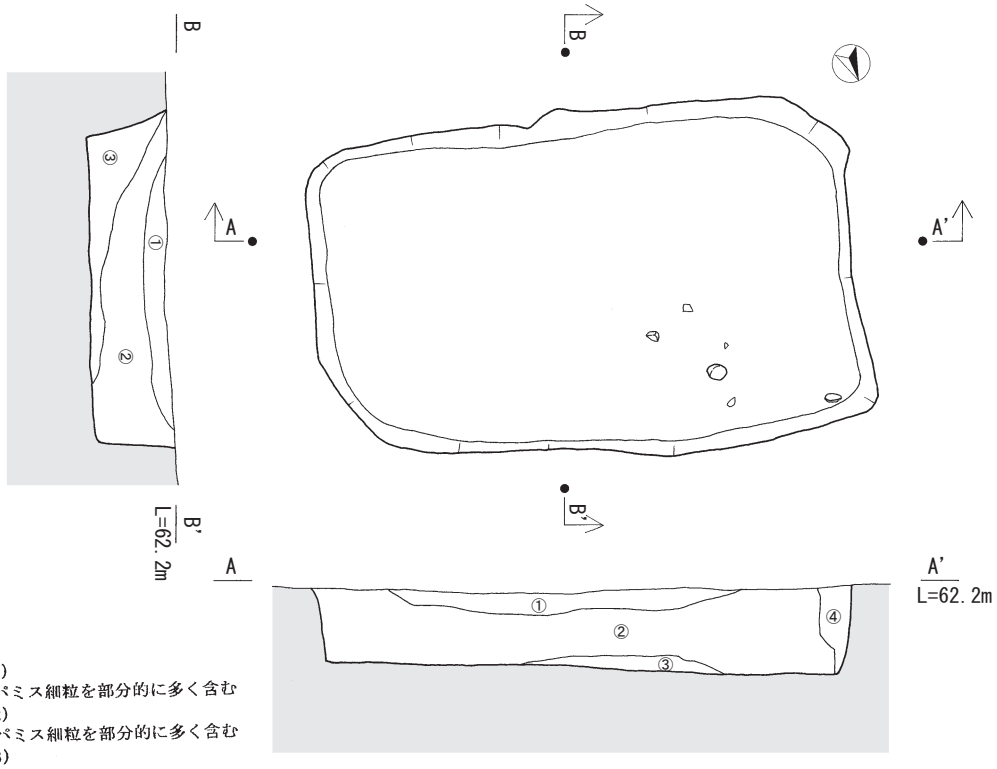


埋土
①黒褐色土（10YR2/2）粒子粗・しまる
　黄色軽石わずかに含む
　黄色パミス・白色パミス極めて多く含む
①黒褐色土（10YR2/3）粒子粗・しまる
　黄色パミス・白色パミス細粒わずかに含む
　黄色軽石含まず
②黒褐色土（10YR2/2）粒子粗・しまる
　白色パミス濃集土塊・黄色パミス含む
　黄色軽石ごくわずかに含む
③黒褐色土（10YR2/2）粒子粗・しまる
　黄色パミス・白色パミスわずかに含む
④黒褐色土（10YR2/2）粒子粗・しまる
　②に似るが黄色軽石少ない
④黒褐色土（10YR3/2）粒子粗・しまる
　黄色パミス・白色パミスわずかに含む
　サツマ硬化層の小土塊わずかに含む
⑤暗赤褐色土（5YR3/3）粘性あり
　黄色軽石含む
⑥暗赤褐色土（5YR3/3）粘質土
　Ⅶａ層の小土塊を含む

0　（1：40）　1m

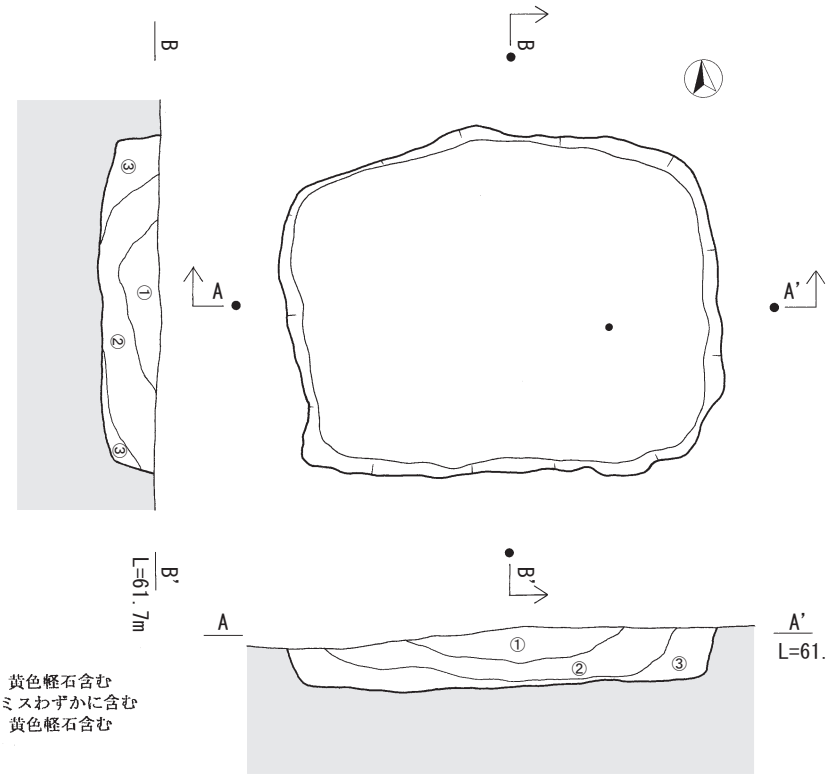
第65図　竪穴建物跡32号・竪穴建物跡33号

SH34



埋土
①黒褐色土（10YR2/3）
　黄色パミス・白色パミス細粒を部分的に多く含む
②黒褐色土（10YR2/2）
　黄色パミス・白色パミス細粒を部分的に多く含む
③黒褐色土（10YR2/3）
　①②よりパミス少ない
　サツマ硬化層の小土塊わずかに含む
④サツマ硬化層の流れ込み

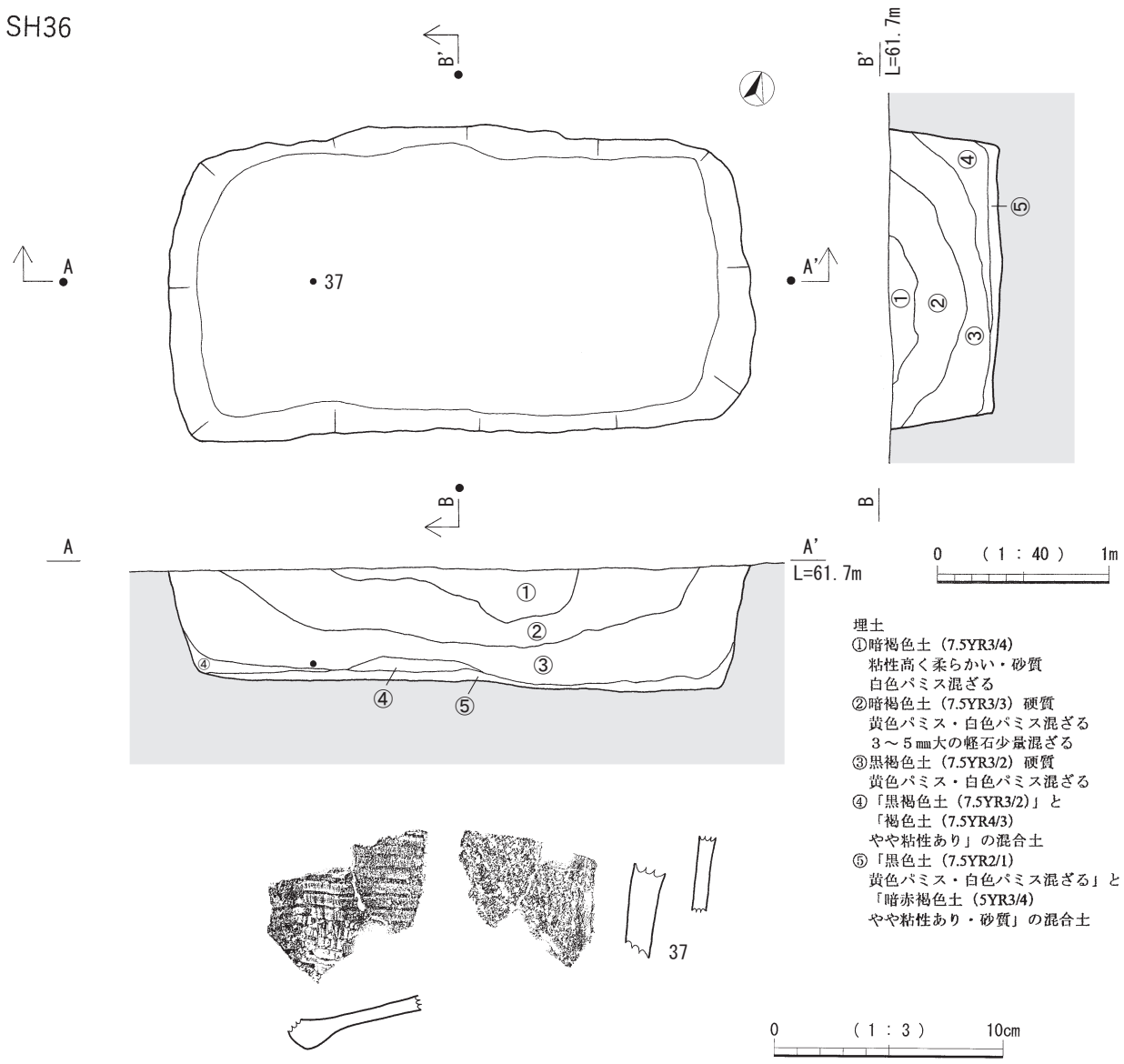
SH35



埋土
①黒褐色土（10YR2/3）黄色軽石含む
　黄色パミス・白色パミスわずかに含む
②黒褐色土（10YR2/2）黄色軽石含む
　白色パミス多く含む
③黒褐色土（10YR2/2）
　黄色パミス・白色パミスわずかに含む
　黄色軽石なし

0　（1：40）　1m

第66図　竪穴建物跡34号・竪穴建物跡35号



第67図　竪穴建物跡36号・出土遺物

埋土

埋土の主体は，硬く砂質の黒褐色土が基本で，黄色パミス，白色パミスを多く含む。ごくわずかに炭化物も散見される。

出土遺物

埋土中から遺物は出土していない。

竪穴建物跡38号（第69図）

検出状況

SH38は，B－19・20区において検出された。検出面はⅧ層であった。Ⅶ層掘り上げ後，Ⅷ層上面で発見された。

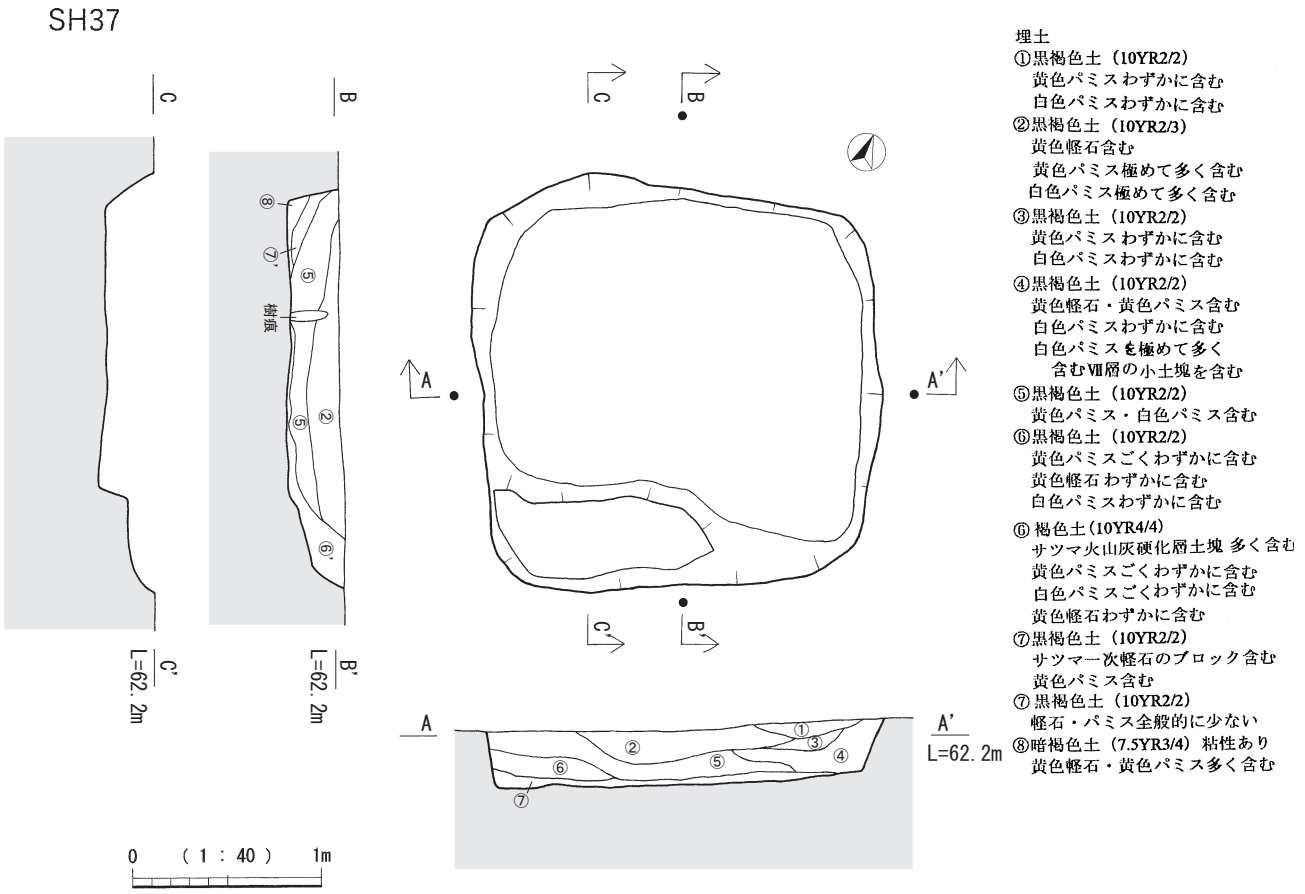
形状と規模

平面プランは，隅丸長方形で，長軸は4.31m，短軸が1.98mを測る。長短比は0.46，深さ50㎝，遺構の推定面積は8.53㎡であった。

竪穴建物跡内に，ピット・炉跡等は検出されなかった。周辺にも，竪穴建物跡に伴うと特定できるピットはなかった。

埋土

埋土の主体は，全体的にはⅦa層の特徴に類似した黒褐色土を基本とし，黄色パミスや黄色軽石，白色パミスを多く含む。



第68図　竪穴建物跡37号

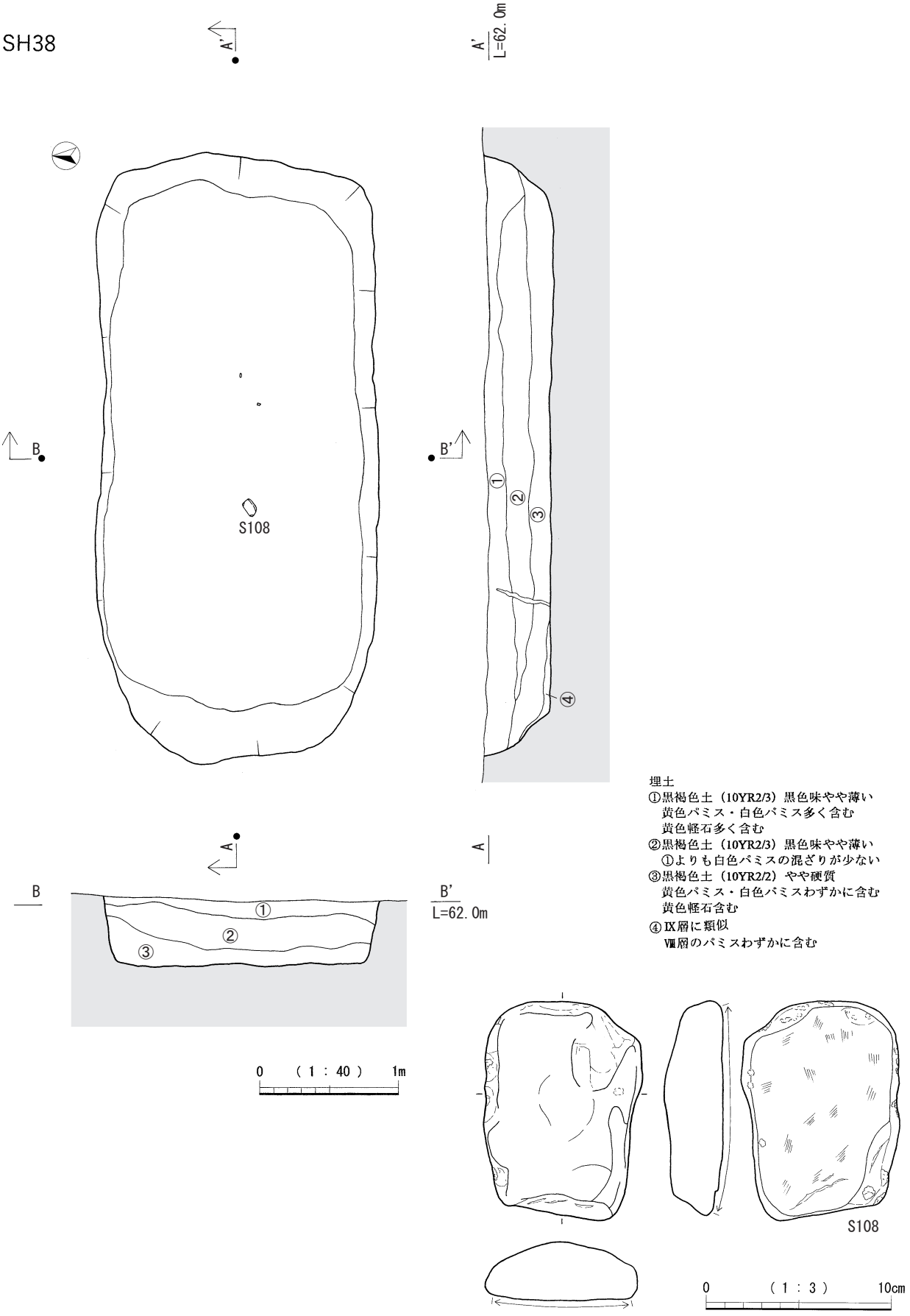
出土遺物

埋土中から出土した遺物は，４点であった。土器は，小片で時期の特定はできなかった。

石器は３点出土し，内１点を掲載した。S108は，ホルンフェルス製の磨製石器である。正面は，滑らかで光沢をもつが，擦痕は不明瞭である。裏面はよく磨られる。側面には所々に敲打痕が確認できる。被熱の痕跡はみられない。

第７表　竪穴建物跡一覧表（1）

挿図番号	遺構名	検出区	検出層	平面プラン	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	面積(㎡)	長短比	柱穴	炉跡	遺物	備考
37	SH1	A－1	Ⅶ	楕円形	2.90	2.16	22	4.92	0.74	－	無	無	
	SH2	C－1・2	Ⅶ	隅丸方形	1.97	1.96	13	3.86	0.99	－	無	無	
38	SH3	B－1・2	Ⅷ	隅丸方形	2.42	2.04	27	4.94	0.84	－	無	有	
39	SH4	B・C－2	Ⅷ	隅丸方形	1.97	1.68	42	3.31	0.85	－	無	無	
	SH5	C－2・3	Ⅶ	隅丸長方形	2.41	1.63	40	3.93	0.68	－	無	有	
40	SH6	C・D－2	Ⅷ	隅丸方形	1.62	1.60	40	2.59	0.99	－	無	有	
41	SH7	D－2	Ⅷ	隅丸方形	2.58	2.14	32	5.52	0.83	－	無	有	
42	SH8	C－3	Ⅷ	不定形	2.12	2.06	38	4.37	0.97	－	無	有	
43	SH9	C・D－3	Ⅷ	隅丸方形	2.25	1.68	42	3.78	0.75	－	無	有	
44	SH10	D－3	Ⅷ	隅丸方形	2.11	1.76	40	3.71	0.83	－	無	有	
45	SH11	D・E－3	Ⅷ	楕円形	2.53	2.07	36	4.11	0.82	－	無	有	
46	SH12	D・E－3	Ⅷ	不定形	3.61	3.22	40	11.62	0.89	－	無	有	
48	SH13	C－4	Ⅶ	隅丸方形	2.36	1.98	34	4.67	0.84	－	無	有	
49	SH14	D・E－4	Ⅷ	不定形	2.18	1.94	24	4.23	0.89	－	無	無	
50	SH15	E－4	Ⅷ	隅丸方形	2.37	1.82	30	4.31	0.77	－	無	有	
51	SH16	F－3・4	Ⅶ	隅丸方形	2.09	1.91	34	3.99	0.91	－	無	有	
52	SH17	F－4	Ⅷ	楕円形	2.17	2.16	30	3.68	0.99	－	無	有	
53	SH18	E－5	Ⅷ	隅丸方形	2.02	1.80	22	3.64	0.89	－	無	有	
54	SH19	E－7	Ⅷ	不定形	1.72	1.67	20	2.87	0.97	－	無	有	
	SH20	F－8	Ⅷ	隅丸長方形	2.48	1.61	30	3.99	0.65	－	無	無	



第69図　竪穴建物跡38号・出土遺物

第8表　竪穴建物跡一覧表（2）

挿図番号	遺構名	検出区	検出層	平面プラン	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	面積(㎡)	長短比	柱穴	炉跡	遺物	備考
55	SH21	F－8・9	Ⅷ	不明	－	2.08	42	－	－	－	無	有	切り合い
	SH22	F－8・9	Ⅷ	不明	－	2.50	34	－	－	－	無	有	切り合い
57	SH23	E－9・10	Ⅷ	隅丸長方形	1.88＋α	2.06	40	－	－	－	無	有	切り合い
	SH24	E－9・10	Ⅷ	隅丸方形	2.00	1.66	36	3.32	0.83	－	無	有	切り合い
58	SH25	E・F－9	Ⅷ	楕円形	2.60	2.40	34	4.90	0.92	－	無	有	
59	SH26	F－8・9	Ⅷ	隅丸方形	2.44	2.24	20	5.47	0.92	－	無	有	
60	SH27	B・C－11	Ⅷ	隅丸長方形	2.20＋α	1.94	48	－	－	－	無	有	切り合い
	SH28	B・C－11	Ⅷ	隅丸方形	2.25	1.90	50	4.28	0.84	－	無	有	切り合い
62	SH29	B－13	Ⅷ	隅丸長方形	2.64	1.86	41	4.91	0.70	－	無	有	石器
63	SH30	E－13	Ⅷ	隅丸長方形	3.75	2.05	45	7.69	0.55	－	無	有	土器，石器
64	SH31	F－13	Ⅷ	隅丸長方形	4.11	2.23	35	9.17	0.54	－	無	有	土器，石器
65	SH32	E－14	Ⅶ	隅丸方形	2.02	1.84	37	3.72	0.91	－	無	無	
	SH33	E－16	Ⅷ	隅丸長方形	3.22	2.05	40	6.60	0.64	－	無	無	
66	SH34	E・F－16	Ⅷ	隅丸長方形	2.87	1.80	46	5.17	0.63	－	無	有	土器，石器
	SH35	B・C－17	Ⅷ	隅丸方形	2.28	1.77	32	4.04	0.78	－	無	有	土器
67	SH36	C－17	Ⅷ	隅丸長方形	3.39	1.75	72	5.93	0.52	－	無	有	土器
68	SH37	E－17	Ⅷ	隅丸方形	2.11	2.10	30	4.43	0.99	－	無	無	
69	SH38	B－19・20	Ⅷ	隅丸長方形	4.31	1.98	50	8.53	0.46	－	無	有	土器，石器

※規模を示す数値には、想定値を含む

第9表　土器観察表（竪穴建物跡出土）

挿図番号	掲載番号	器種	部位	類別	出土区	遺構名	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号	備考
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他			
39	1	深鉢	胴	Ⅵb	C－2・3	SH5	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	○	○		金雲母	良好		
	2	深鉢	胴	Ⅵa	C－2・3	SH5	貝殻刺突	ナデ	7.5YR4/3褐	7.5YR4/3褐	○	○		金雲母	不良		
	3	深鉢	胴	不明	C－2・3	SH5	短沈線	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/3にぶい黄褐	○	△	○	金雲母	普通		
40	4	深鉢	口縁	Ⅲd	C・D－2	SH6	貝殻刺突・楔形貼付・キザミ	ナデ	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	△		○		良好		
41	5	深鉢	胴	Ⅵb	D－2	SH7	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	5YR4/3にぶい赤褐	○	○	○	金雲母	普通		
	6	深鉢	底	ⅩⅣ	D－2	SH7	ナデ	ヘラミガキ	5YR4/4にぶい赤褐	10YR5/2灰黄褐	○	○		金雲母	良好		
42	7	深鉢	胴	Ⅵa	C－3	SH8	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR6/3にぶい黄橙	○	△	△	金雲母	普通		
43	8	深鉢	胴部～底部	Ⅵb	C・D－3	SH9	貝殻刺突・貝殻条痕	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	10YR4/2灰黄褐	○			金雲母	普通		
44	9	深鉢	口縁	Ⅵa	D－3	SH10	貝殻刺突・瘤状突起	ナデ	5YR4/3にぶい赤	5YR5/6明赤褐	◎	○	○		普通		
	10	深鉢	胴	不明	D－3	SH10	ナデ	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	7.5YR4/2灰褐	○	○	◎		良好		
	11	深鉢	胴	Ⅶa	D－3	SH10	貝殻条痕	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR3/3暗褐	○	○		金雲母	普通		
47	12	深鉢	口縁～胴部	Ⅴ	D・E－3	SH12	貝殻刺突・貝殻条痕・キザミ	ヨコナデ	7.5YR4/3褐	5YR6/6橙	○	△	○		普通		
	13	深鉢	胴	Ⅲc	D・E－3	SH12	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR4/6赤褐		○	○		良好		
50	14	深鉢	口縁	Ⅵa	E－4	SH15	貝殻刺突・瘤状突起	ナデ	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	△	△	○		良好		
51	15	深鉢	胴	Ⅲc	F－3・4	SH16	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	7.5YR3/2黒褐	○	○			良好		
	16	深鉢	胴	Ⅴ	F－3・4	SH16	貝殻条痕	ナデ	5YR4/3にぶい赤褐	2.5YR3/2暗赤褐	○	○			良好		内面煤付着
	17	深鉢	胴	Ⅵa	F－3・4	SH16	貝殻押圧	ナデ	10YR5/2灰黄褐	10YR3/2黒褐	○	△		金雲母	普通		
52	18	深鉢	口縁	Ⅱ	F－4	SH17	貝殻条痕・キザミ	貝殻条痕	2.5Y5/3黄褐	2.5Y6/3にぶい黄	△				良好		
	19	深鉢	胴	Ⅳ	F－4	SH17	貝殻押引	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	△	△	○		良好		
53	20	深鉢	胴	Ⅱ	E－5	SH18	貝殻条痕	ケズリ	5YR4/6褐	10YR6/3にぶい黄橙	○	△	◎		普通		
54	21	深鉢	胴	不明	E－7	SH19	条痕	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	○		○	金雲母	良好		
56	22	深鉢	胴	Ⅵa	F－8・9	SH21・22	貝殻刺突・瘤状突起	ナデ	10YR4/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	○	○	△	金雲母	普通		
	23	深鉢	胴	Ⅵa	F－8・9	SH21・22	貝殻刺突	ナデ	7.5YR7/6橙	10YR5/2灰黄褐	○	○	○	金雲母	良好		
	24	深鉢	口縁	Ⅶa	F－8・9	SH21・22	貝殻刺突・沈線文	ナデ	10YR4/2灰黄褐	10YR4/2灰黄褐	○	△	△	金雲母多い	普通		
	25	深鉢	胴	Ⅷ	F－8・9	SH21・22	貝殻条痕	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR7/4にぶい黄橙	○		◎		良好		煤付着
57	26	深鉢	胴	Ⅶa	E－9・10	SH23・24	貝殻条痕	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	10YR4/3にぶい黄褐	○	○	○		普通	25190 54948	
	27	深鉢	胴	Ⅵd	E－9・10	SH23・24	貝殻刺突	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐	10YR5/3にぶい黄褐	△			金雲母	良好		
	28	深鉢	胴	Ⅵb	E－9・10	SH23・24	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/1褐灰	△	△		金雲母	普通		
	29	深鉢	胴	不明	E－9・10	SH23・24	条痕・ナデ	ナデ	5YR4/3にぶい赤褐	10YR4/2灰黄褐	○	△	○	金雲母	良好		
	30	深鉢	底	ⅩⅣ	E－9・10	SH23・24	ナデ	－	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR5/4にぶい褐	○	○	○		良好		
	31	深鉢	底	ⅩⅣ	E－9・10	SH23・24	ヘラナデ	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	△	○	○	金雲母	良好		
58	32	深鉢	口縁	Ⅴ	E・F－9	SH25	貝殻刺突	ナデ	7.5YR3/4暗褐	7.5YR3/2黒褐	○	△	△		普通		
61	33	深鉢	胴	Ⅵb	B・C－11	SH27・28	貝殻刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR3/2黒褐	○	△	△		良好		
63	34	深鉢	口縁	Ⅵa	E－13	SH30	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR3/2黒褐	○	○	○	金雲母	不良		
	35	深鉢	底	ⅩⅣ	E－13	SH30	ナデ	ナデ	2.5Y4/4オリーブ褐	10YR5/3にぶい黄褐	○	○	○	金雲母	良好	20900	
64	36	深鉢	胴	Ⅵa	F－13	SH31	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	2.5Y6/3にぶい黄	○	○		金雲母	普通	24570	
67	37	深鉢	胴	Ⅳ	C－17	SH36	貝殻条痕・押引・貝殻押引	ケズリ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	△	○	△		良好	19329	

第10表　石器観察表（竪穴建物跡出土）

挿図番号	掲載番号	遺構名	取上番号	出土区	層	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	器種	分類	石材	石材分類	備考
38	S065	SH－3	SH35－11	B1·2	Ⅶ	60.0	58.0	53.0	254.90	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
	S066	SH－3	SH35－4	B1·2	Ⅶ	70.0	48.0	54.0	195.10	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
	S067	SH－3	SH35－14	B1	床直	93.0	87.0	31.0	339.00	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
39	S068	SH－5	SH45－18	C2·3	埋土	56.0	48.0	68.0	175.50	磨石	－	砂岩	－	
41	S069	SH－7	SH38－7	D2	埋土	132.0	89.0	66.0	1005.50	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
	S070	SH－7	SH38－4	D2	埋土	60.5	54.5	22.0	110.40	石錘	－	安山岩	安山岩B	
43	S071	SH－9	SH49－8	C·D3	埋土	65.0	60.0	30.0	150.20	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
	S072	SH－9	SH49－7	C·D3	埋土	52.0	35.0	35.0	87.00	磨石	－	ホルンフェルス	－	
44	S073	SH－10	SH52－7	D3	埋土①	70.0	33.0	18.0	58.80	磨敲石	－	砂岩	－	
	S074	SH－10	SH52－4	D3	埋土①	67.5	62.0	44.0	271.10	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
	S075	SH－10	SH52－10	D3	埋土①	96.0	74.0	33.0	321.00	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
47	S076	SH－12	SH48－1	D3	埋土下	94.0	86.0	56.0	688.00	石皿	－	凝灰岩	－	
	S077	SH－12	SH48－11	D3	埋土１	102.0	85.0	49.0	593.50	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
48	S078	SH－13	SH42－1	C4	埋土	427.0	362.0	104.0	16000.00	石皿	－	安山岩	安山岩B	完形
50	S079	SH－15	SH43－4	E4	埋土上	112.0	122.0	61.0	934.50	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
	S080	SH－15	SH43－7	E4	埋土下	48.0	66.0	41.0	175.10	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
	S081	SH－15	SH43－3	E4	埋土上	106.0	92.0	46.0	601.00	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
52	S082	SH－17	SH40－2	F4	埋土	123.5	70.0	24.2	271.40	石斧	－	ホルンフェルス	－	
	S083	SH－17	SH40－3	F4	埋土	108.0	76.0	62.0	683.50	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
	S084	SH－17	SH40－5	F4	埋土	95.0	78.0	57.0	548.50	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
56	S085	SH－21	SH65	F8·9	床直	50.0	43.0	38.0	123.00	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
	S086	SH－22	SH64	F8·9	床直	80.0	80.0	69.0	566.50	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
	S087	SH－22	SH64	F8·9	床着	66.0	92.0	56.0	312.00	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
	S088	SH－22	SH64	F8·9	床着	118.0	78.0	51.0	619.50	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
	S089	SH－22	SH64	F8·9	床着	87.0	52.5	47.5	38.80	軽石製品	－	軽石	－	舟形・赤色顔料
57	S090	SH-23·24	SH60	E9·10	Ⅷ	12.5	14.5	2.5	0.50	石鏃	－	黒曜石	黒曜石C	欠損品，石錐へ転用
59	S091	SH－26	SH63	F8·9	埋土	100.0	101.0	56.0	809.00	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
	S092	SH－26	SH63	F8·9	埋土	72.0	39.0	48.0	102.80	磨敲石	－	凝灰岩	－	
	S093	SH－26	SH63	F8·9	埋土	309.0	269.0	87.0	6340.00	石皿	－	安山岩	安山岩B	完形
61	S094	SH－27	SH28	C11	－	23.0	20.0	7.5	3.79	石鏃	－	チャート	－	未製品
	S095	SH－27	SH28	－	－	66.5	40.0	16.5	61.50	打製石斧	Ⅲ	ホルンフェルス	－	基部
	S096	SH－27	25828	B11	－	87.0	97.0	47.0	617.50	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
	S097	SH－27	25827	C11	－	130.0	101.0	50.0	1026.50	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
62	S098	SH－29	21555	B13	－	114.0	90.0	57.0	965.00	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	赤色顔料
	S099	SH－29	21556	B13	埋土	131.0	95.0	58.0	1243.00	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
63	S100	SH－30	21014	E13	埋土	108.0	55.0	36.0	228.60	磨敲石	－	砂岩	－	
	S101	SH－30	21012	E13	埋土	45.0	40.0	45.0	60.70	磨石	－	凝灰岩	－	
	S102	SH－30	SH20	E13	埋土	48.0	51.0	47.0	71.40	磨石	－	凝灰岩	－	
64	S103	SH－31	24568	F13	－	39.0	35.0	25.0	34.90	磨敲石	－	凝灰岩	－	
	S104	SH－31	24794	F13	－	81.0	86.0	41.0	407.00	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
	S105	SH－31	24569	F13	－	110.0	69.0	65.0	585.50	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
	S106	SH－31	24571	F13	－	76.0	76.0	66.0	481.50	磨敲石	－	安山岩	安山岩B	
	S107	SH－31	24572	F13	－	74.5	38.0	15.0	65.10	石錘	－	砂岩	－	
69	S108	SH－38	21049	B20	埋土	118.0	86.0	32.0	475.00	磨製石器	－	ホルンフェルス	－	

（2）連穴土坑（第70 ～ 74図）

本遺跡では，２つの土坑が地中トンネルで繋がっている土坑を連穴土坑として扱った。中には，トンネル部分が崩落するなどして明確に形を成さないものもあるが，形状や検出状況などから連穴土坑と判断した。

Ⅶ層検出の連穴土坑は，７基検出された。SH22を切っているSK18は，竪穴建物跡の壁面を利用した連穴土坑の可能性も推察されるが，土坑として扱いここでは掲載しない。REN ３は，東側に土坑があり，一連の連穴土坑にみえるが，上から掘り込まれたと思われる時期の違う土坑である。

連穴土坑と他遺構との関係は，竪穴建物跡から１m以内が１基，１m～５m以内が３基，５m以上10m未満が２基，10m以上が１基であった。連穴土坑の向きには規則性は見出せず，小さな土坑部分を地形レベルの高い方にほとんどが設定している。連穴土坑の向きを決める時には，設置場所の地形に左右されるものと思われる。

縄文時代早期前葉の大集落遺跡である上野原遺跡では，竪穴住居跡，連穴土坑，集石といった組み合わせが見られるが，本遺跡では，竪穴建物跡や集石に比べて連穴土坑の数が少ない。

本報告書では，「田原迫ノ上遺跡」報告書を参考に，連穴土坑の各部分の名称を下記のように付けた。

小穴部：連穴土坑の小さい方の土坑で，煙出し部分と考えられる。
主穴部：連穴土坑の大きな方の土坑で，火焚き部分と考えられる。
トンネル：小さな土坑と大きな土坑が地中で繋がっている空間部分のこと。
ブリッジ：トンネル部の上の部分のこと。
全　長：ブリッジ部分を含む，主穴部外端から小穴部分の外端までの長さ。
全　幅：連穴土坑の最大幅のこと。
深　度：連穴土坑の最深部のこと。
推定面積：全長と全幅から楕円形の求積公式を適用して算出した面積のこと。

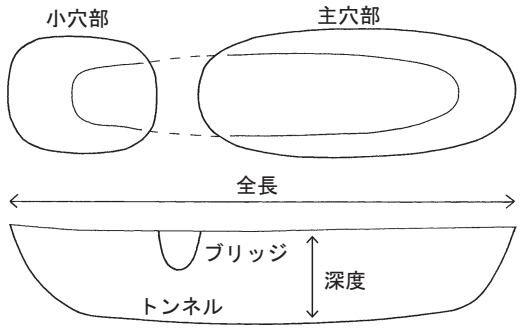


図１　連穴土坑の各部名称

連穴土坑１号（第70図）

検出状況

REN １は，Ｂ－１区の串良川左岸に面したSH ３の西側で検出された。全長1.63m，全幅0.62m，深度38cm，推定面積0.79㎡を測る。長短比は，0.38であった。連穴部分のブリッジは崩れたと思われる。床面に赤変部等被熱痕跡を確認できなかった。小穴部分は，東側のSH ３方向に向けられ，竪穴建物跡まで約90cmの距離である。

集石は近くにないが，西側にあった可能性もある。

埋土

埋土は，黄色パミスや白色石粒を含む黒褐色土のⅦ層が基本で，竪穴建物跡の埋土と同じである。薩摩火山灰上面まで掘り込んでいる。

出土遺物

出土していない。

連穴土坑２号（第71図）

検出状況

REN ２は，土坑と連穴土坑の切り合いでなく，連穴土坑に樹痕が入り，ブリッジ部分が落ちた連穴土坑と判断した。Ｆ－２・３区で検出さ，全長1.79m，全幅0.65m，深度32cm，推定面積0.91㎡を測る。長短比は，0.36であった。床面に赤変部等被熱痕跡を確認できなかった。

微高地の一番高い部分に作られ，小穴部分は，北東方向の約5.7m離れたSH16に向けられれている。

北側2.5mと西側２mにそれぞれ集石もあり，遺構が多いエリアである。

埋土

埋土は，硬質で粘性のある黒色土を基本に，５㎜以下の黄色のパミスと１㎜以下の白色石粒が多く含む。

出土遺物

出土していない。

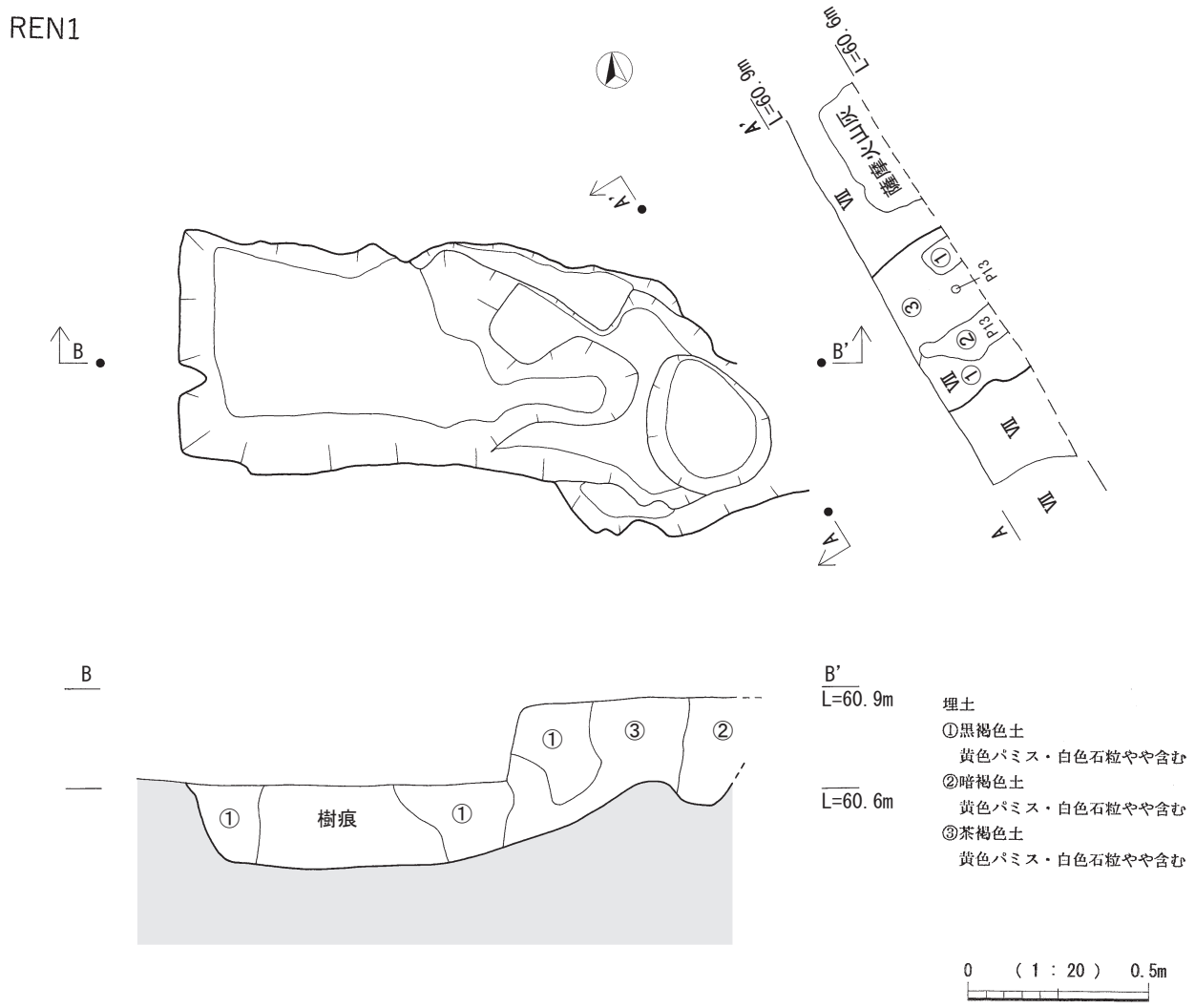
連穴土坑３号（第72図）

検出状況

REN ３は，Ｆ－12区で検出された。全長1.81m，全幅0.64m，深度35cm，推定面積は0.91㎡を測る。長短比は0.35であった。連穴部分のブリッジは崩れたと思われる。床面に赤変部等被熱痕跡を確認できなかった。検出当初，東側にSK81（縄文後期）があり，連穴土坑の一部として調査したが，連穴部がトンネルで繋がっていないことが判明し，大型の花崗岩の石皿があることから，別の土坑と認定した。

小穴部分は，南西方向のSH30に向けられ，竪穴建物跡まで約10.7mの距離である。遺構の北側約3.2mの所にSH30もある。

集石は周辺に検出されなかった。



第70図　連穴土坑１号

埋土

埋土は，黒褐色土を基本に，黄色パミス，白色石粒を含む。

出土遺物

出土していない。

連穴土坑４号（第72図）

検出状況

REN ４は，F－12区のⅧ層上面で検出された。全長1.51m，全幅0.55m，深度40cm，推定面積は，0.65㎡を測る。長短比は，0.36であった。連穴部分のブリッジは崩れたと思われる。床面に赤変部等被熱痕跡を確認できなかった。

小穴部分は，北西方向の微高地側に向けられている。東側2.3mの所にSH31，南東側2.5mの所にREN ５があるが，周辺に集石は検出されていない。

埋土

埋土は，黒褐色土を基本に，黄色パミス，白色パミスを含む。炭化物が僅かに散在している。

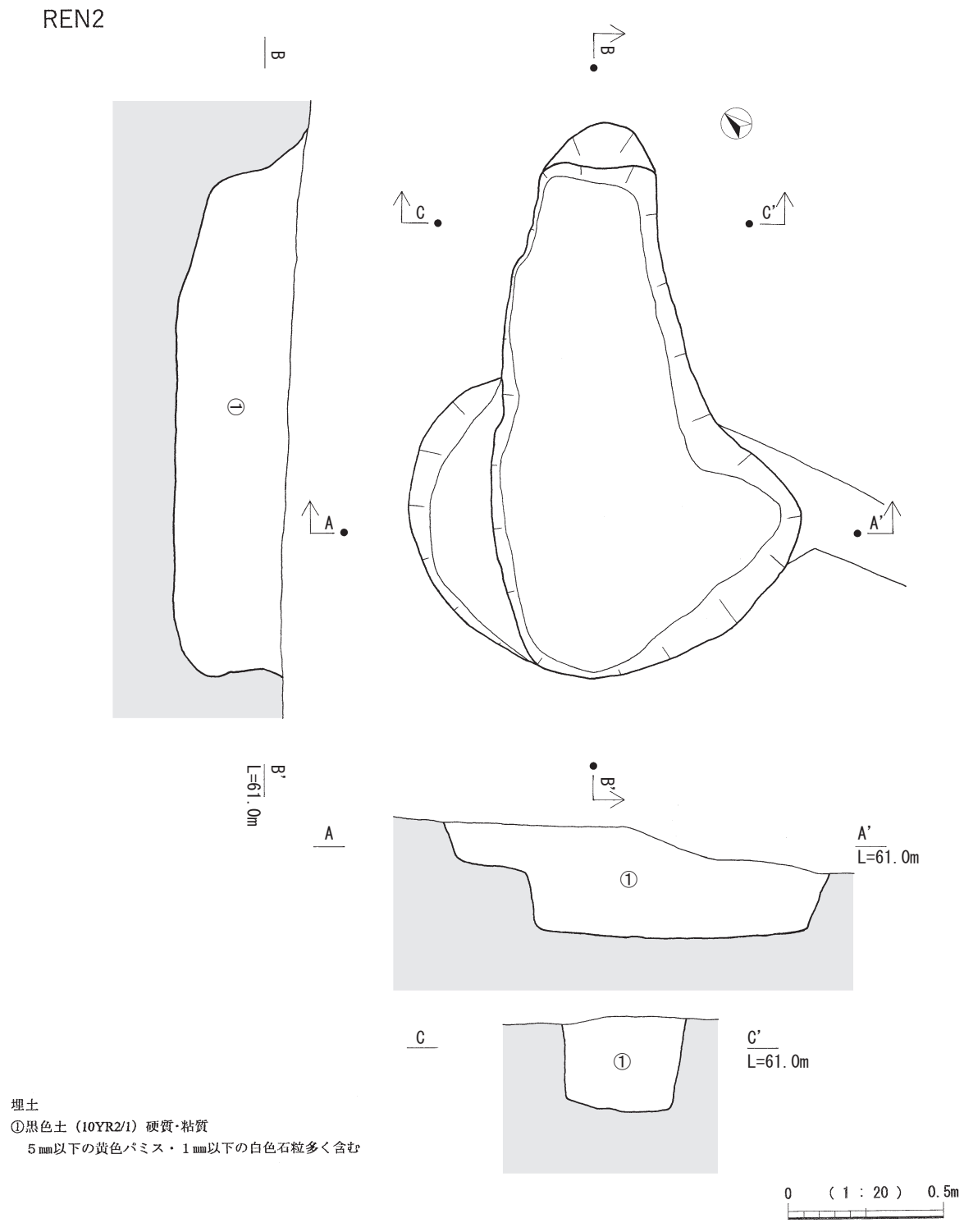
出土遺物

埋土中より土器１点が出土した。38は，斜位の貝殻条痕文の上から縦位の貝殻刺突文を施している。Ⅲa類に分類される。

連穴土坑５号（第73図）

検出状況

REN ５は，D－14区の旧石器確認トレンチ２の西南隅に薩摩火山灰層（Ⅷ層）を除去した段階で検出された。全長1.64m，全幅0.6m，深度17cm，推定面積は，0.77㎡を測る。長短比は，0.37であった。小穴部側底面の傾斜が顕著であるが，トンネル部及び床面に赤変部等被熱痕跡を確認できなかった。



第71図　連穴土坑２号

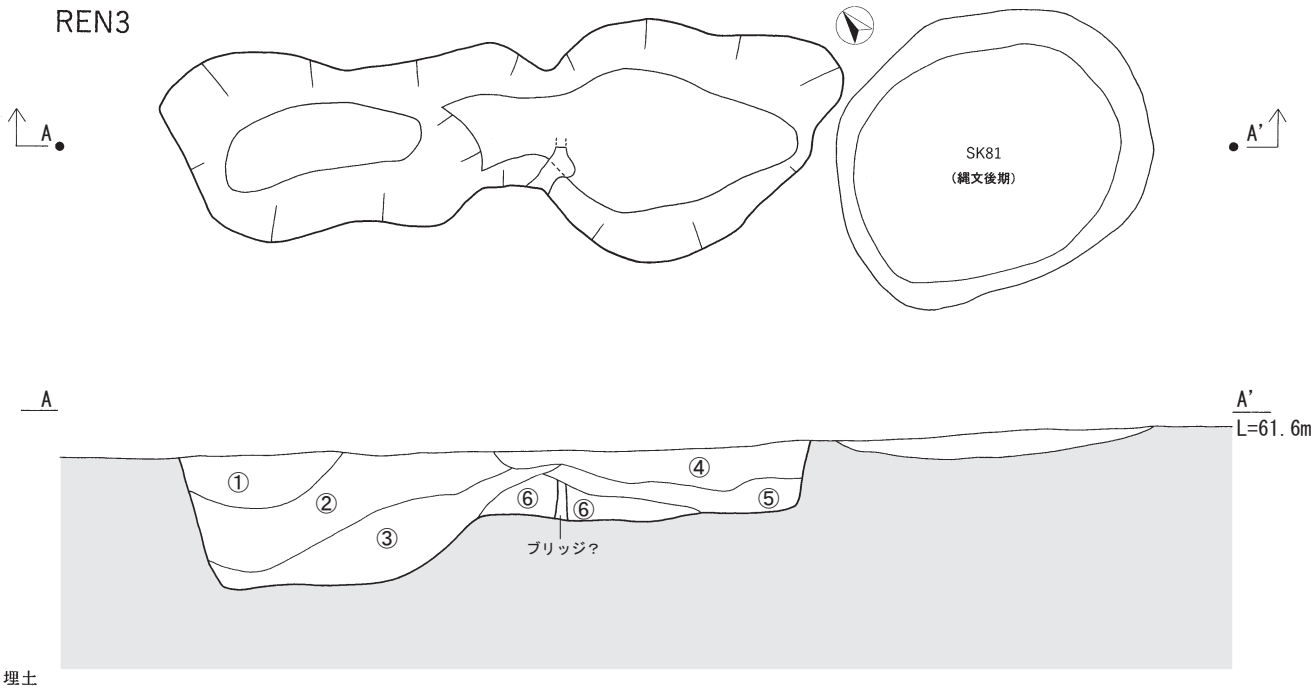
小穴部分を北北西側の微高地に設定している。北東約7.5mの所にSH32，南西約7.5m及び北東12.5mの所にそれぞれ集石が検出されている。

埋土

埋土は，黒褐色土を基本に，黄色パミス，白色パミスを含む。埋土中には炭化物は検出されなかった。

出土遺物

出土していない。



埋土

①黒褐色土（10YR2/3）粒子粗・火山灰質・しまる
黄色パミス・白色パミス微粒わずかに含む
硬質土塊（Ⅶａ層的）含む

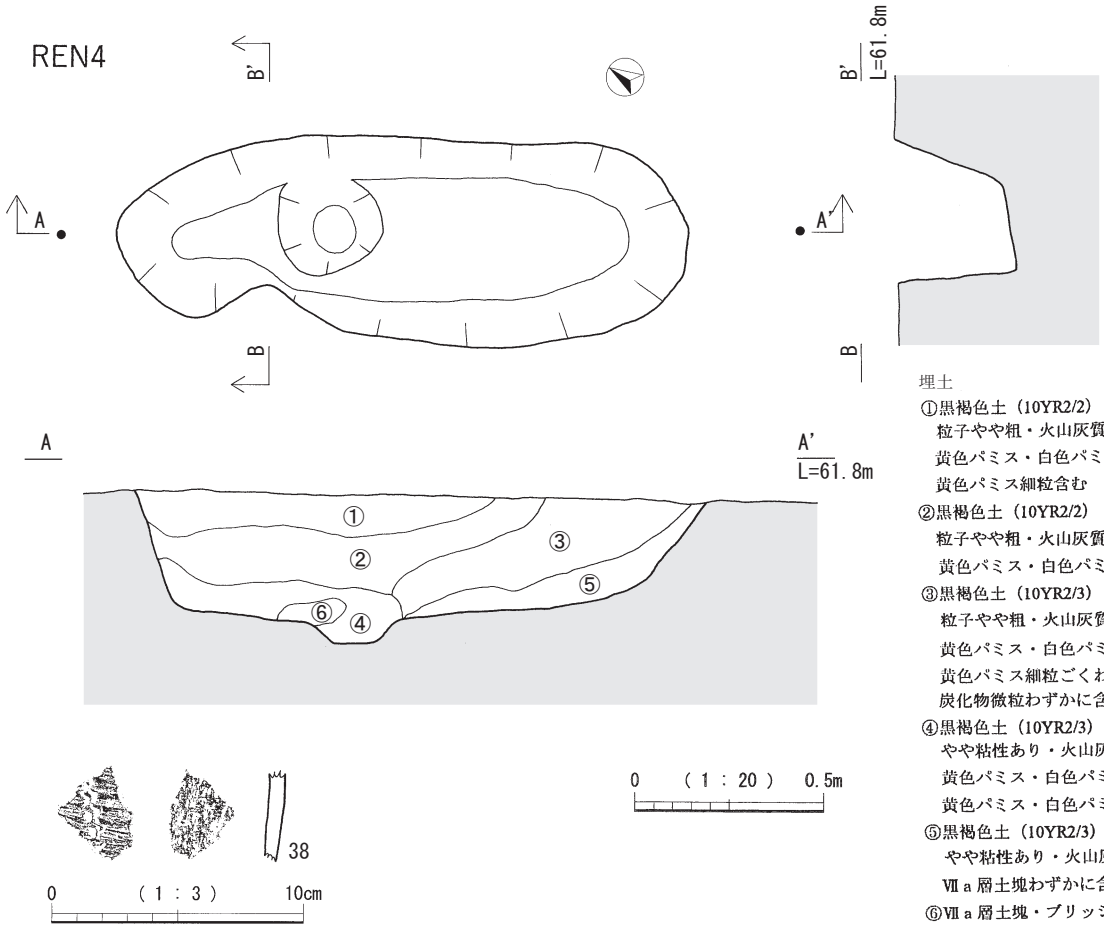
②黒褐色土（10YR2/2）粒子粗・火山灰質・しまる
白色パミス微粒わずかに含む
黄色パミス微粒・炭化物微粒ごくわずかに含む

③黒褐色土（7.5YR3/2）やや粘性あり・火山灰質・しまる
白色パミス微粒ごくわずかに含む
強粘質小土塊（Ⅸ層？）含む

④黒褐色土（10YR2/2）粒子粗・火山灰質・しまる
黄色パミス・白色パミス微粒含む
黄色パミス粒わずかに含む

⑤黒褐色土（10YR2/2）粒子粗・火山灰質・しまる
Ⅷ層降下軽石ブロック含む

⑥褐色土（7.5YR4/4）やや粘性あり・しまる
Ⅶａ層・Ⅸ層土塊含む



埋土

①黒褐色土（10YR2/2）
粒子やや粗・火山灰質・しまる
黄色パミス・白色パミス微粒多く含む
黄色パミス細粒含む

②黒褐色土（10YR2/2）
粒子やや粗・火山灰質・しまる
黄色パミス・白色パミス微粒含む

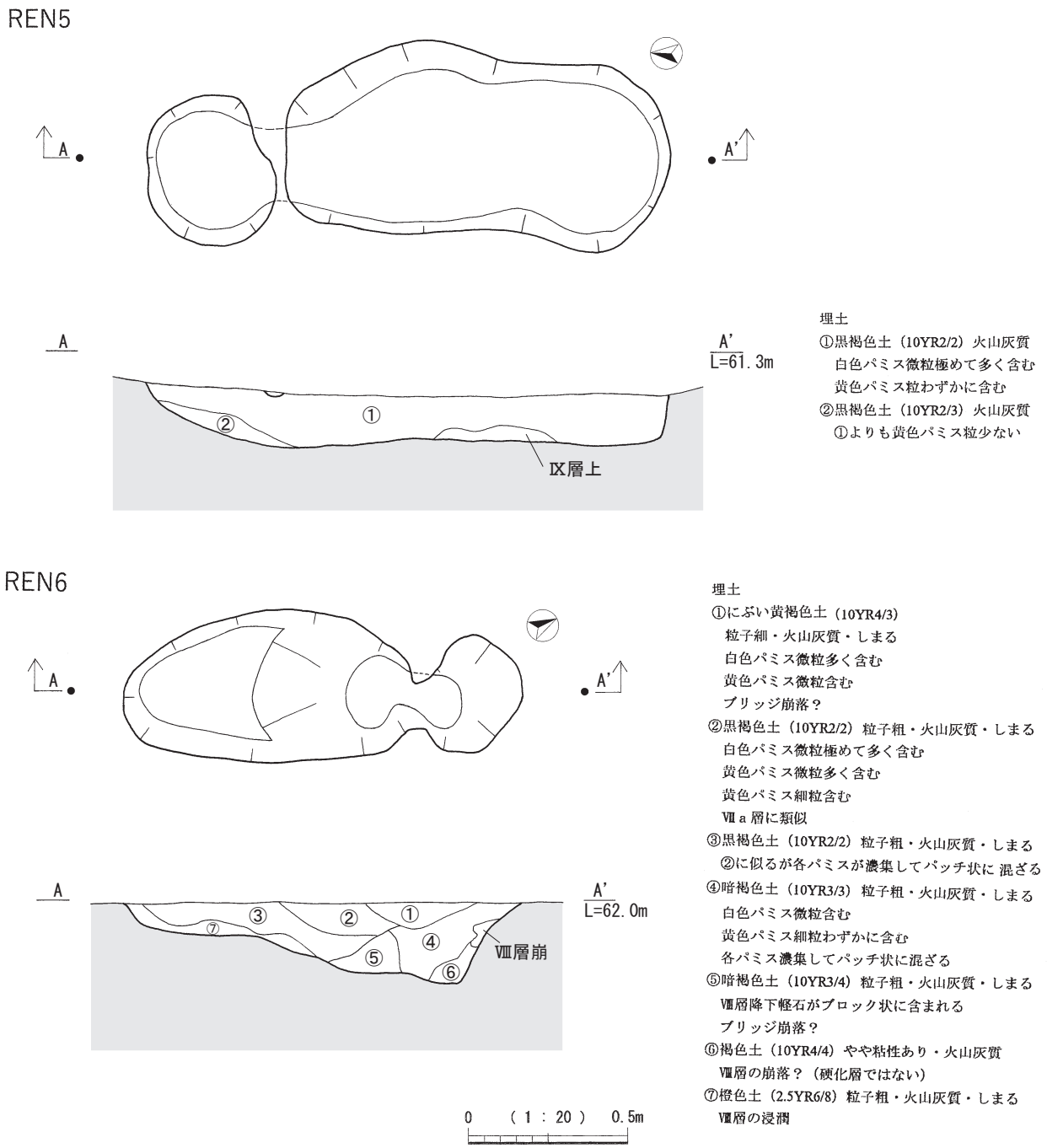
③黒褐色土（10YR2/3）
粒子やや粗・火山灰質・しまる
黄色パミス・白色パミス微粒わずかに含む
黄色パミス細粒ごくわずかに含む
炭化物微粒わずかに含む

④黒褐色土（10YR2/3）
やや粘性あり・火山灰質・しまる
黄色パミス・白色パミス微粒含む
黄色パミス・白色パミス粒わずかに含む

⑤黒褐色土（10YR2/3）
やや粘性あり・火山灰質・しまる
Ⅶａ層土塊わずかに含む

⑥Ⅶａ層土塊・ブリッジ崩落？

第72図　連穴土坑３号・連穴土坑４号



第73図　連穴土坑５号・連穴土坑６号

連穴土坑６号（第73図）

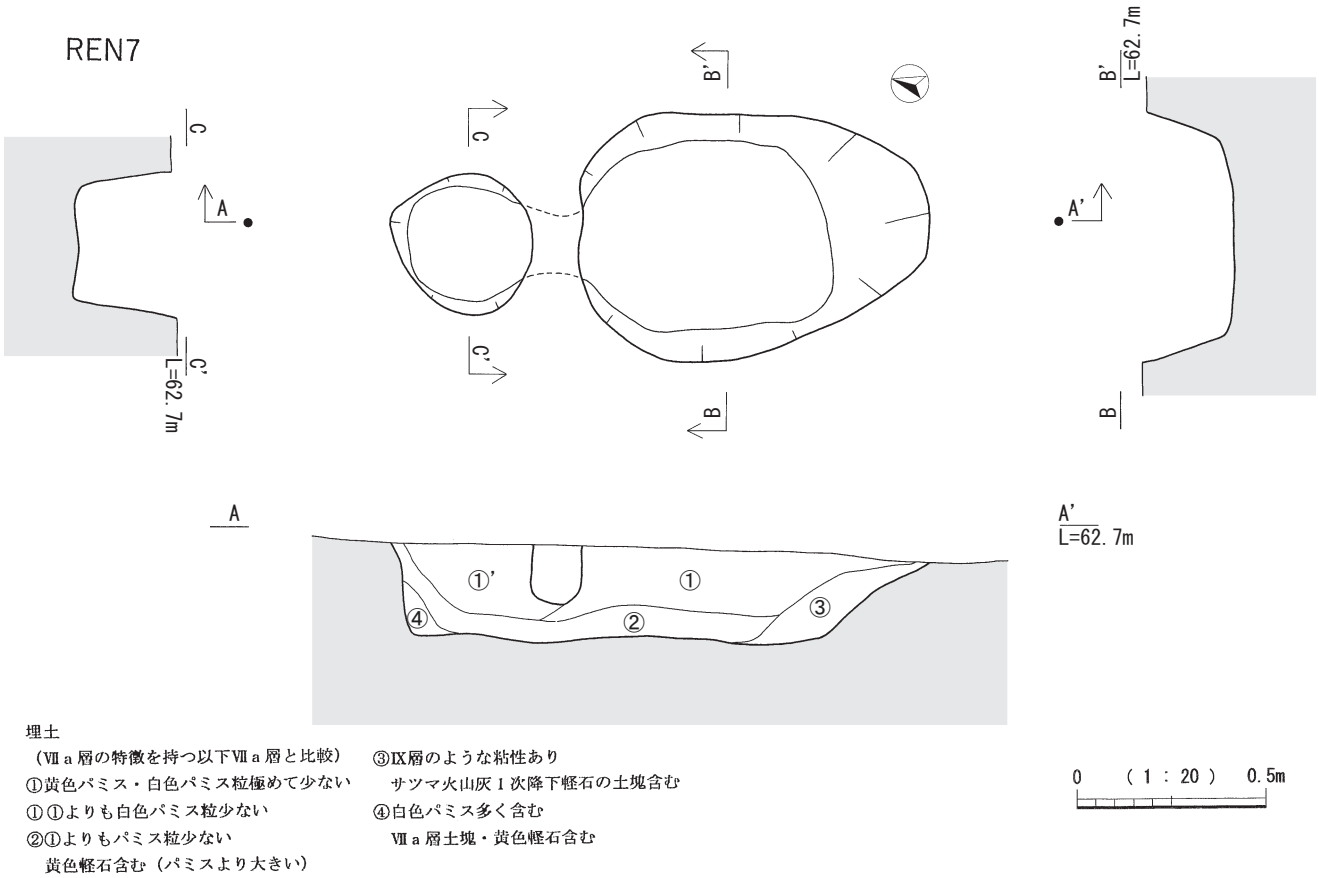
検出状況

REN ６は，F－13，14区のⅧ層上面で検出された。全長1.25m，全幅0.48m，深度25cm，推定面積は，0.47㎡を測る。長短比は，0.38であった。連穴部分のブリッジは崩れたと思われる。床面に赤変部等被熱痕跡を確認できなかった。

小穴部分を北東の微高地方向に設定している。連穴土坑の南西約７ｍの所にSH31があるが，集石は検出されていない。

埋土

埋土は，黒褐色土を基本に，黄色パミス，白色パミスを含む。全体的に炭化物の微粒，細粒をごくわずかに含む。



第74図　連穴土坑７号

出土遺物

出土していない。

連穴土坑７号（第74図）

検出状況

REN 7は，E・F－18・19区のⅧ層上面で検出された。全長1.43m，全幅0.65m，深度26cm，推定面積は，0.73㎡を測る。長短比は，0.45であった。ブリッジ部分は薩摩火山灰上面の硬化部分を利用している。トンネル部及び床面に赤変部等被熱痕跡を確認できなかった。

小穴部分を北西側の微高地に設定している。近くの竪穴建物跡や集石までは約20m離れており，単独で遺構が存在するような状況である。

埋土

黒褐色土を基本に，黄色パミス，白色パミスを多く含む。

出土遺物

出土していない。

第11表　連穴土坑一覧表

挿図番号	遺構名	検出区	全長(m)	全幅(m)	深度(cm)	面積(㎡)	長短比	炭化物	遺物	備考
70	REN1	B－1	1.63	0.62	38	0.79	0.38	－	－	
71	REN2	F－2・3	1.79	0.65	32	0.91	0.36	－	－	
72	REN3	F－12	1.81	0.64	35	0.91	0.35	－	－	
	REN4	F－12	1.51	0.55	4	0.65	0.36	－	有	
73	REN5	D－14	1.64	0.6	17	0.77	0.37	－	－	
	REN6	F－13・14	1.25	0.48	25	0.47	0.38	△	－	
74	REN7	E・F－18・19	1.43	0.65	26	0.73	0.45	－	－	

第12表　土器観察表（連穴土坑出土）

挿図番号	掲載番号	器種	部位	分類	出土区	遺構名	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号	備考
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他			
72	38	深鉢	胴	Ⅲa	F－12	REN4	貝殻条痕・貝殻刺突	ケズリ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/3にぶい黄褐	○	△	△		良好		

（３）土坑（第75 ～ 84図）

Ⅶ層の土坑は，21基検出された。Ⅵ層段階での土坑は確認できなかった。21基の土坑の内，SK15・16は，埋土状況等から２基の土坑の重複と判断した。SH12・SH22に絡んでいるSK １・SK18は再度掲載した。

本報告書では，土坑の各部分の名称を下記のように付し，形状や規模を表記した。土坑は楕円形に近い形状が多いため，推定面積は楕円求積の公式を当てはめて算出した。また，平面プランの形状を楕円率より５タイプに分類した。

長　軸：検出面で，土坑のほぼ中心を通り，遺構の一番長い部分の長さ。
短　軸：長軸に直角に交わり，長軸をほぼ２等分する軸の長さ。
深　度：遺構の断面で最も深い部分の長さ。
推定面積：楕円形の面積を求める公式を適用して（長軸／２×短軸／２×π）で算出
楕円率：（短軸÷長軸）で算出（０＜楕円率≧１）
楕円率を元に下記のように土坑を分類した。

タイプⅠ：長楕円　（楕円率＜0.5）
タイプⅡ：楕円　　（0.5≦楕円率＜0.8）
タイプⅢ：円形　　（0.8≦楕円率）
タイプⅣ：不定形
タイプⅤ：不明

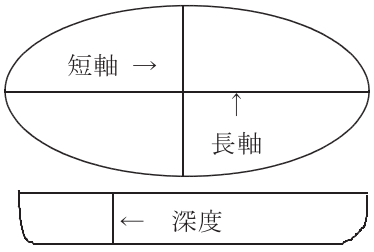


図１　土坑各部の名称

土坑１号（第75図）

検出状況

SK １は，E－3区のⅧ層上面で検出された。長軸0.55＋αm，短軸0.46m，深度37cm，推定面積は不明である。SH12の北側を一部切っており、遺構の南側の状況は不明である。平面形状から不定形の土坑とした。SH12との関連については、検出状況等より竪穴建物跡に関連する遺構ではないと判断した。埋土が似ていることより，SH12が廃棄された後に時間をさほど置かずに作られた土坑と思われる。

分類：タイプⅣ

埋土

埋土は，黒褐色土を基本に、黄色パミス、白色石粒をわずかに含む。SH12の埋土と似ている。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑２号（第76図）

検出状況

SK ２は，E－３区のⅧ層上面で検出された。長軸0.85m，短軸0.42m，深度13cm，推定面積0.28㎡を測る。楕円率0.49の長楕円形である。東側約0.5mの所にSK ３があり，連穴土坑の可能性も視野に入れながら調査を行ったが，地中のトンネル部分がなく，繋がっていないことが判明した。

分類：タイプⅠ

埋土

埋土は，硬質の黒色土を基本に，５㎜以下の黄色パミスと１㎜以下の白色石粒を多く含む。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑３号（第76図）

検出状況

SK ３は，E－３・４区のⅧ層上面で検出された。長軸0.61m，短軸0.48m，深度31cm，推定面積0.23㎡を測る。楕円率0.79の楕円である。

土坑南東側約2.8mの所にSH14がある。

分類：タイプⅡ

埋土

埋土は１枚で，黒色土を基本に，５㎜以下の黄色パミスと１㎜以下の白色石粒を多く含む。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑４号（第76図）

検出状況

SK ４は，D－4区のⅧ層上面で検出された。長軸1.16m，短軸1.05m，深度19cm，推定面積0.96㎡を測る。楕円率0.91の円形である。

土坑北側2.5m以内にSH15とSS ５がある。

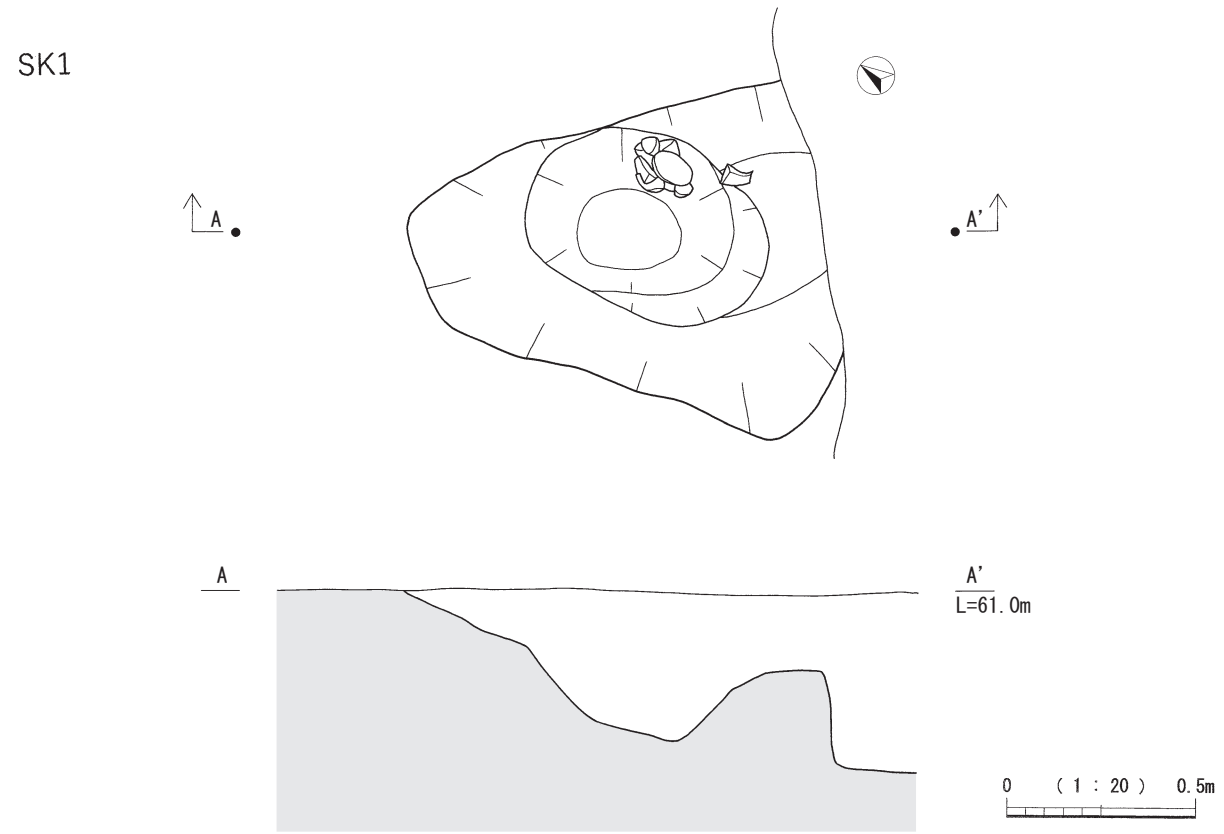
分類：タイプⅢ

埋土

埋土は１枚で，硬質の黒褐色土を基本に，５㎜以下の黄色パミスと１㎜以下の白色石粒を多く含む。

出土遺物

遺物は出土していない。



第75図　土坑１号

土坑５号（第77図）

検出状況

SK ５は，E－４区のⅧ層上面で検出された。長軸0.72m，短軸0.63m，深度16cm，推定面積0.36㎡を測る。楕円率0.88の円形である。

土坑の南東側約3.2mの所にSH14，北側約1.2mの所にSK ６がある。

分類：タイプⅢ

埋土

埋土は１枚で，黒色土を基本に，５㎜以下の黄色パミスと１㎜以下の白色石粒を多く含む。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑６（第77図）

検出状況

SK ６は，E－４区のⅧ層上面で検出された。長軸1.18m，短軸0.90m，深度40cm，推定面積0.83㎡を測る。楕円率0.76の楕円である。

SK ５と隣接している。

分類：タイプⅡ

埋土

埋土は３枚から成るが，他遺構の埋土状況を鑑みると，②の黒色土を基本とした，５㎜以下の黄色パミスと１㎜以下の白色石粒を多く含む埋土が基本と思われる。

出土遺物

石器１点が出土した。S109は安山岩製の被熱破砕した磨石片である。正面・裏面ともによく使用されており，裏面の縁辺部は特に強く擦られ，面を形成している。

土坑７号（第78図）

検出状況

SK ７は，E－６区のⅧ層上面で検出された。長軸0.75m，短軸0.65m，深度10cm，推定面積0.38㎡を測る。楕円率0.87の円形であった。

土坑の西側と南側約1.5mの所にSS ５とSS11がある。

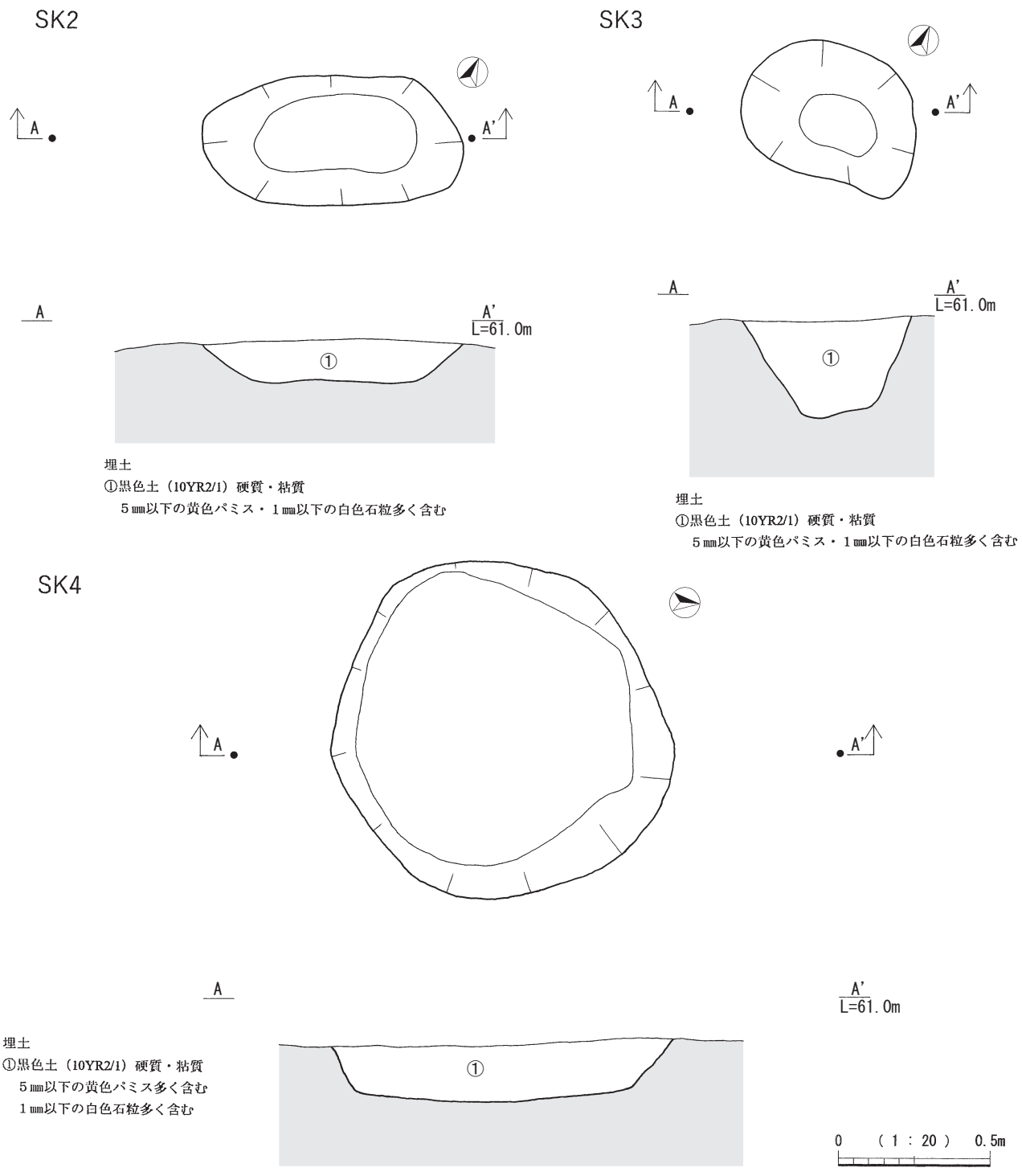
分類：タイプⅢ

埋土

埋土は黒色土を基本に，５㎜以下の黄色パミスと１㎜以下の白色石粒を多く含む。一部Ⅷ層のブロックが混じる。

出土遺物

遺物は出土していない。



第76図　土坑２号～４号

土坑８号（第78図）

検出状況

SK８は，F－６区のⅧ層上面で検出された。長軸1.20m，短軸1.00m，深度15cm，推定面積0.94㎡を測る。楕円率0.83の円形である。

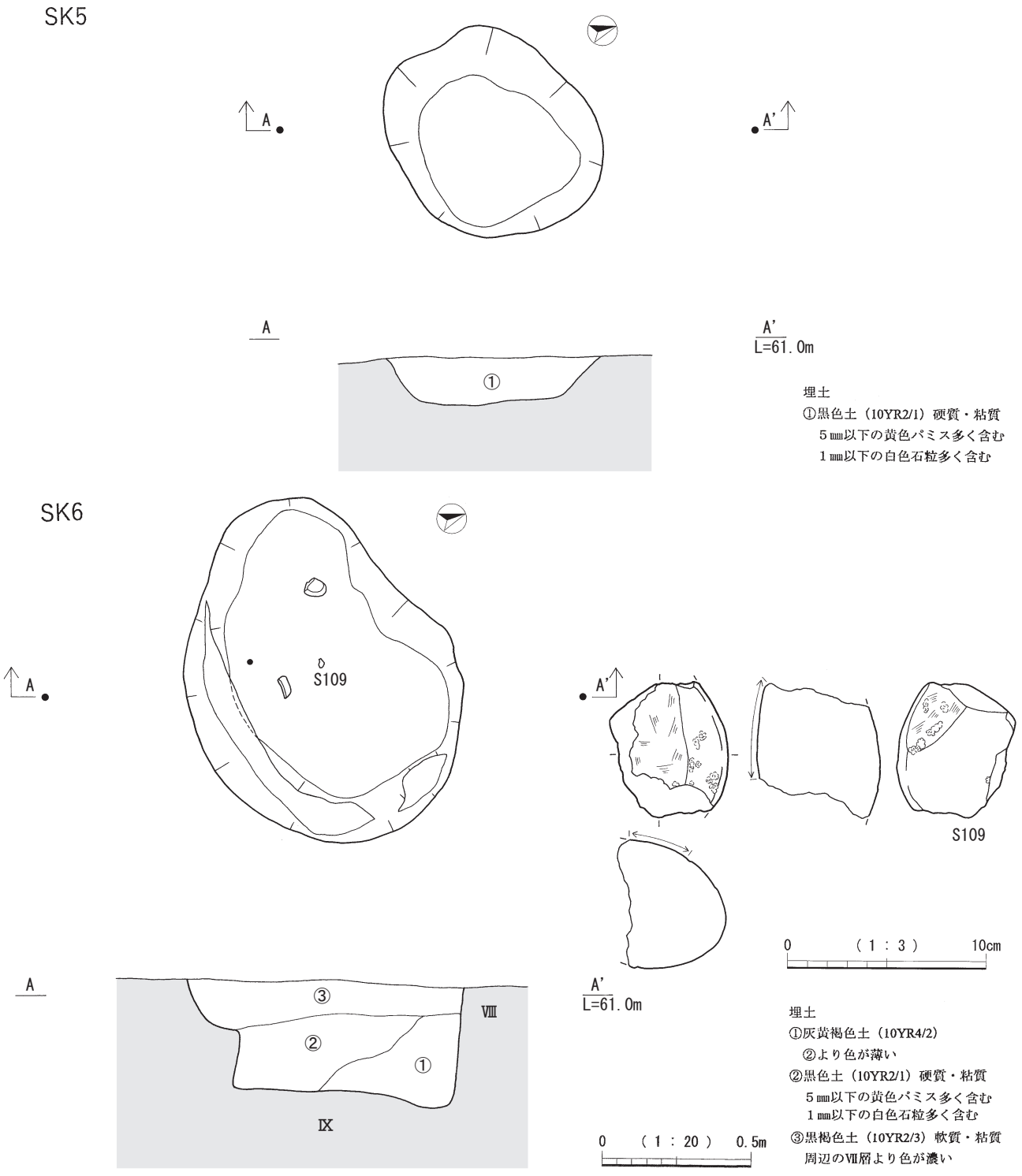
分類：タイプⅢ

埋土

埋土は２枚からなる。黄色パミスや白色石粒を多く含む。

出土遺物

遺物は出土していない。



第77図　土坑５号・土坑６号・出土遺物

土坑９号（第79図）

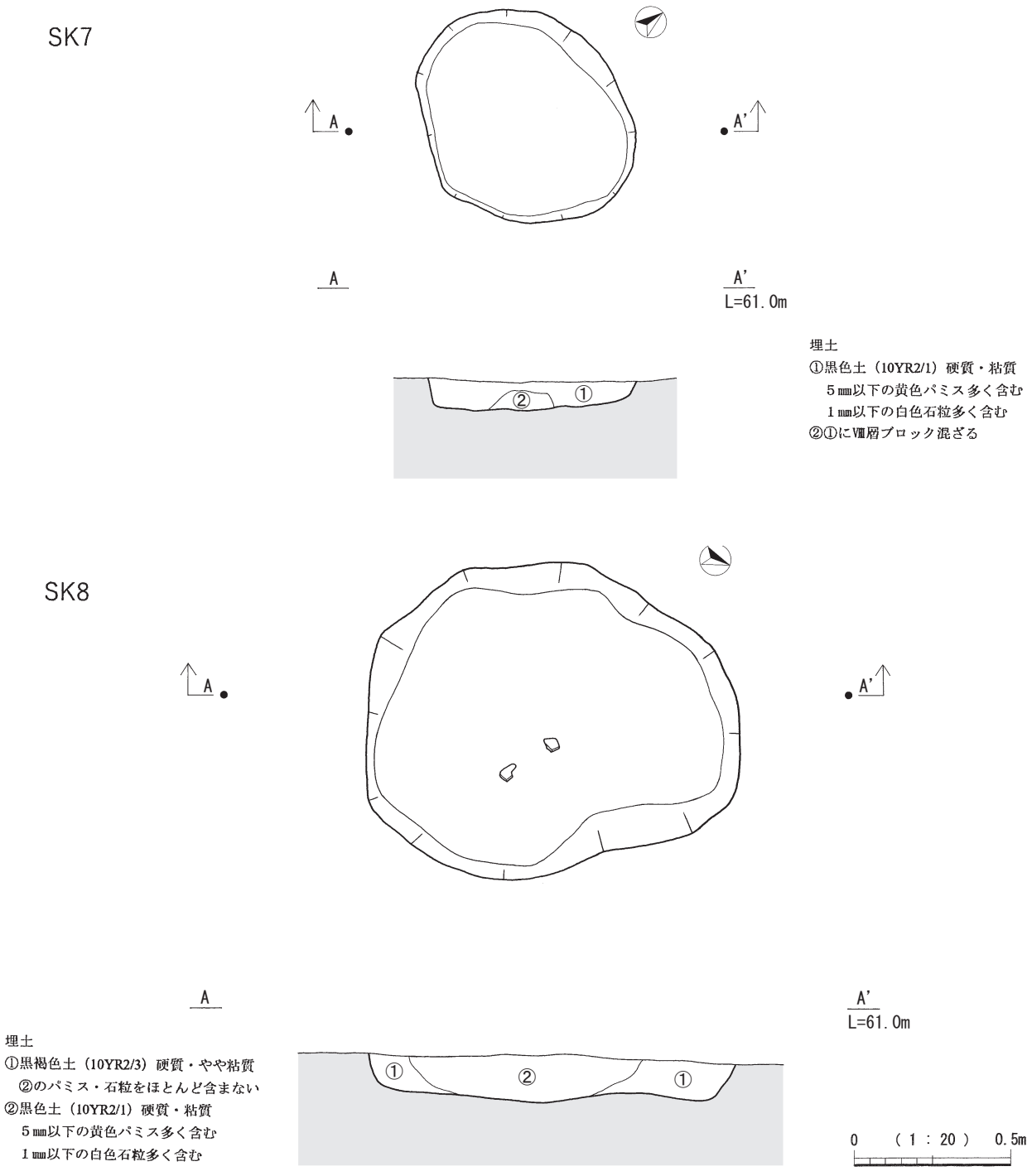
検出状況

SK ９は，F－６区のⅧ層上面で検出された。半分以上は調査範囲外に遺構が広がるものと推察される。長軸，短軸，推定面積は不明である。楕円率は分からないが，長楕円と思われる。SK ９の断面は，グリッド壁の断面を反映させた。

分類：タイプⅤ

埋土

埋土は，５㎜以下の黄色パミスと１㎜以下の白色石粒を多く含む黒色土が基本である。



第78図　土坑７号・土坑８号

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑10号（第79図）

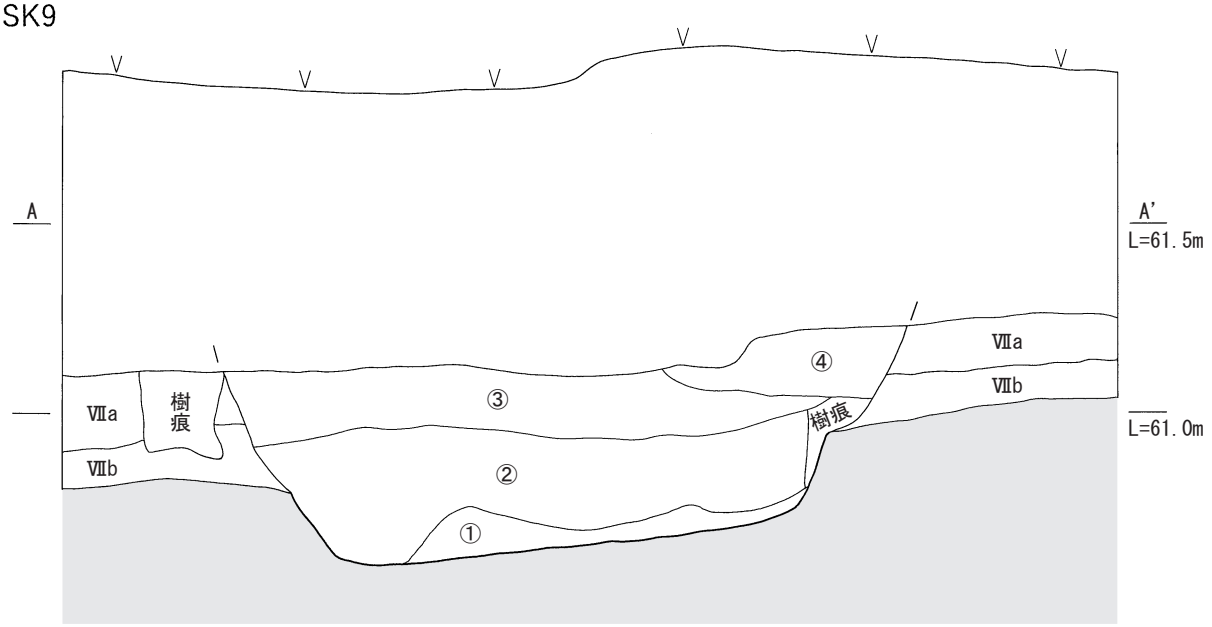
検出状況

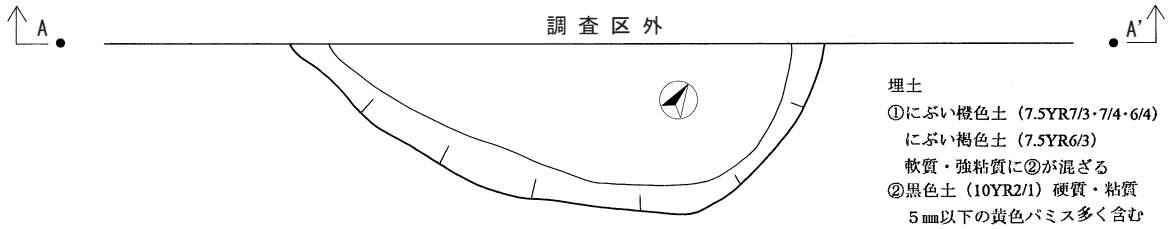
SK10は，E－７区のⅧ層上面で検出された。長軸1.27m，短軸0.64m，深度36cm，推定面積0.64㎡を測る。楕円率0.50の長楕円である。

底面は，土坑北側にさらに掘り込みがあり，靴底型の形状をなす。

土坑の北東約1.8mの所にSH19がある。

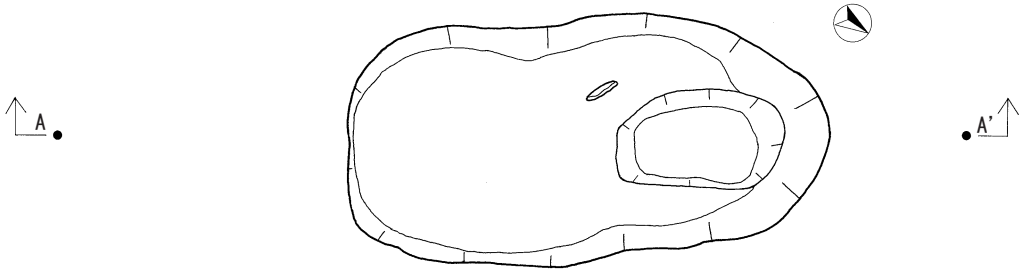
SK9

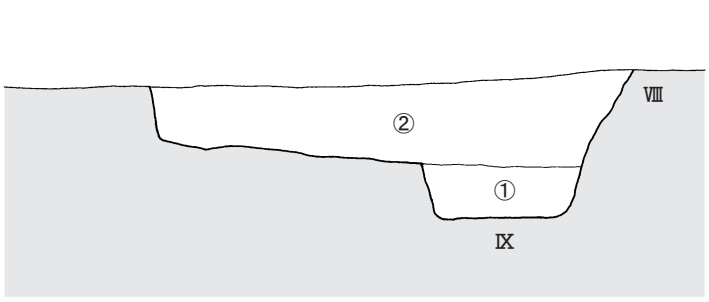




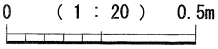
埋土
①にぶい橙色土（7.5YR7/3・7/4・6/4）
　にぶい褐色土（7.5YR6/3）
　軟質・強粘質に②が混ざる
②黒色土（10YR2/1）硬質・粘質
　５㎜以下の黄色パミス多く含む
　１㎜以下の白色石粒多く含む
　その他のⅦ層の遺構よりも樹痕により
　壊されている部分が多い
③ほぼⅦａ層　Ⅶａ層よりも少し黒い
④褐色土（10YR4/4~7.5YR4/4）硬質・弱砂質
　Ⅶａ層とⅦｂ層が混ざる層

SK10

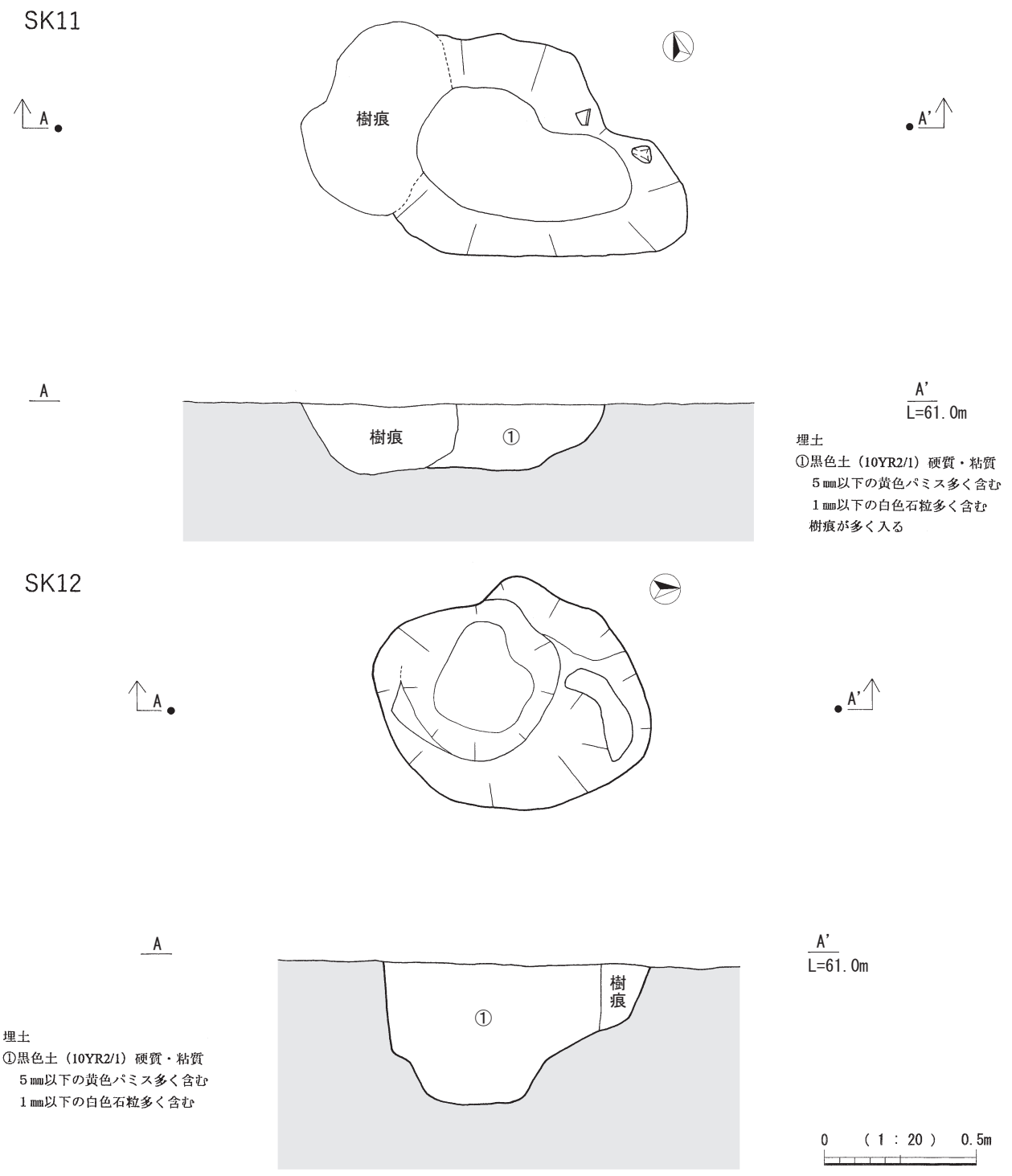




埋土
①黒色土（10YR2/1）硬質・粘質
　５㎜以下の黄色パミス多く含む
　１㎜以下の白色石粒多く含む
　Ⅷ層サツマ火山灰ブロックが入る
②黒色土（10YR2/1）硬質・粘質
　５㎜以下の黄色パミス多く含む
　１㎜以下の白色石粒多く含む



第79図　土坑９号・土坑10号



第80図　土坑11号・土坑12号

分類：タイプⅠ

埋土

埋土は２枚からなるが，５㎜以下の黄色パミスと１㎜以下の白色石粒を多く含む黒色土が基本である。

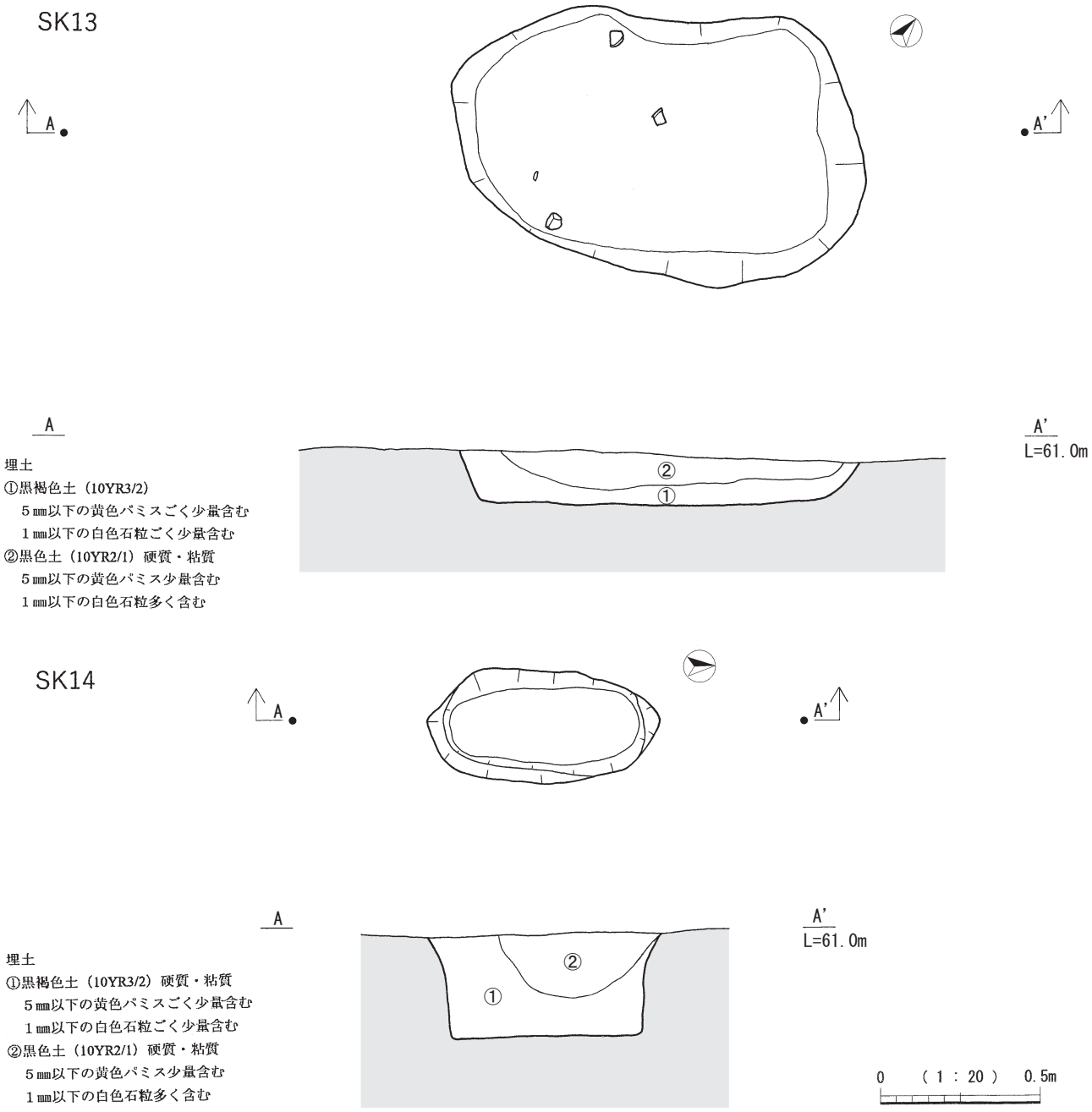
出土遺物

遺物は出土していない。

土坑11号（第80図）

検出状況

SK11は，Ｅ－７区のⅧ層上面で検出された。樹痕が長軸側の一部を切っている。長軸0.92＋αｍ，短軸0.78m，深度22cmを測る。推定面積及び楕円率は不明で，不定形土坑とした。



第81図　土坑13号・土坑14号

土坑の北側約1.8mの所にSU 1がある。

分類：タイプⅣ

埋土

樹痕で切られているが，埋土は1枚と思われる。他土坑と同じ5㎜以下の黄色パミスと1㎜以下の白色石粒を多く含む黒色土が基本である。

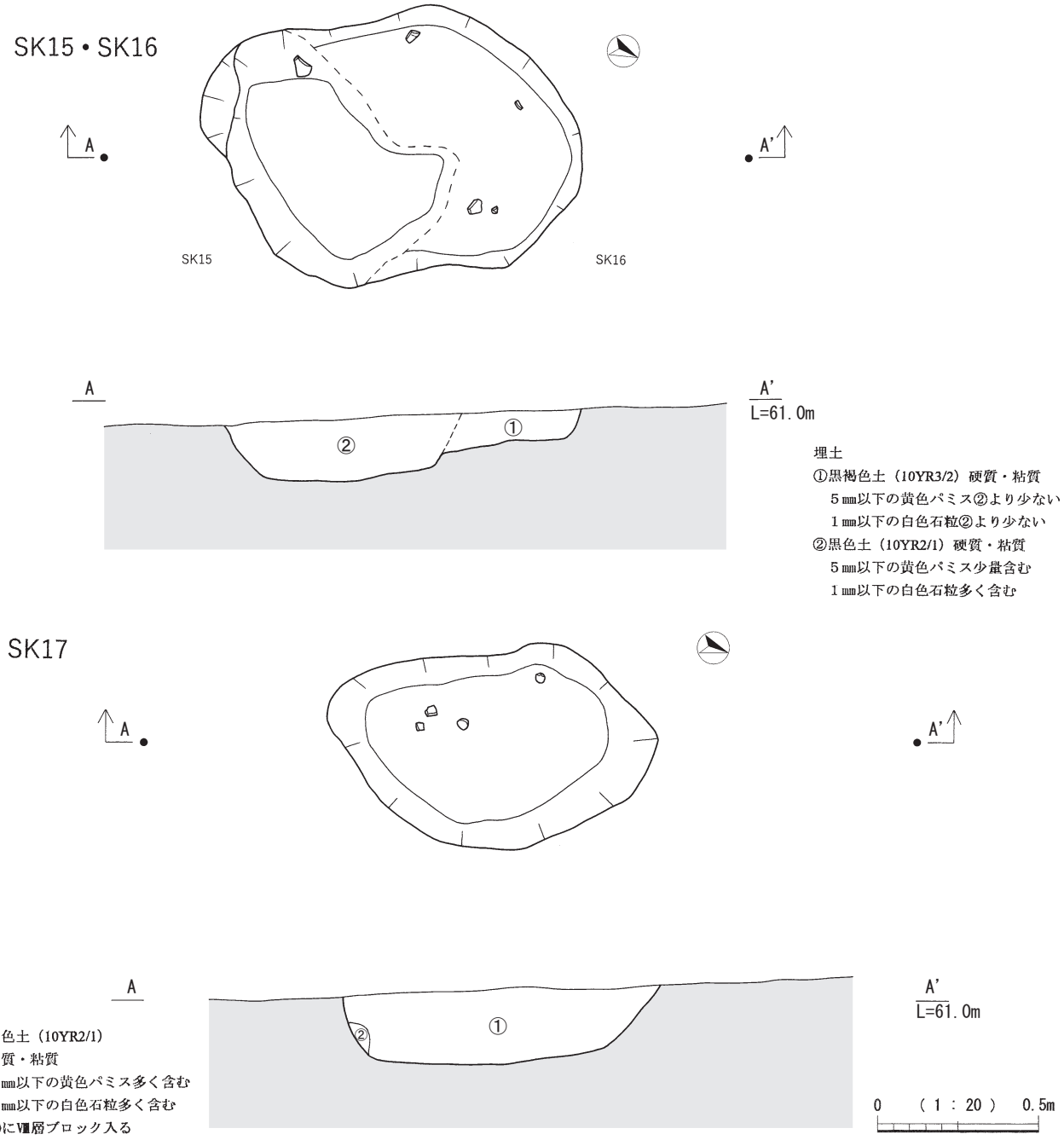
出土遺物

遺物は出土していない。

土坑12号（第80図）

検出状況

SK12は，F－8区のⅧ層上面で検出された。長軸0.93m，短軸0.72m，深度46cm，推定面積0.53㎡を測る。土坑の南半分は柱穴状の凹みを持つ，楕円率0.77の楕円である。土坑の北側約1.20mの所にSH20がある。



第82図　土坑15号～17号

分類：タイプⅡ

埋土

埋土は１枚で，５㎜以下の黄色パミスと１㎜以下の白色石粒を多く含む黒色土が基本である。

遺物

遺物は出土していない。

土坑13号（第81図）

検出状況

SK13は，Ｆ－７・８区のⅧ層上面で検出された。長軸1.32m，短軸0.78m，深度15cm，推定面積0.81㎡を測る。楕円率0.59の楕円である。

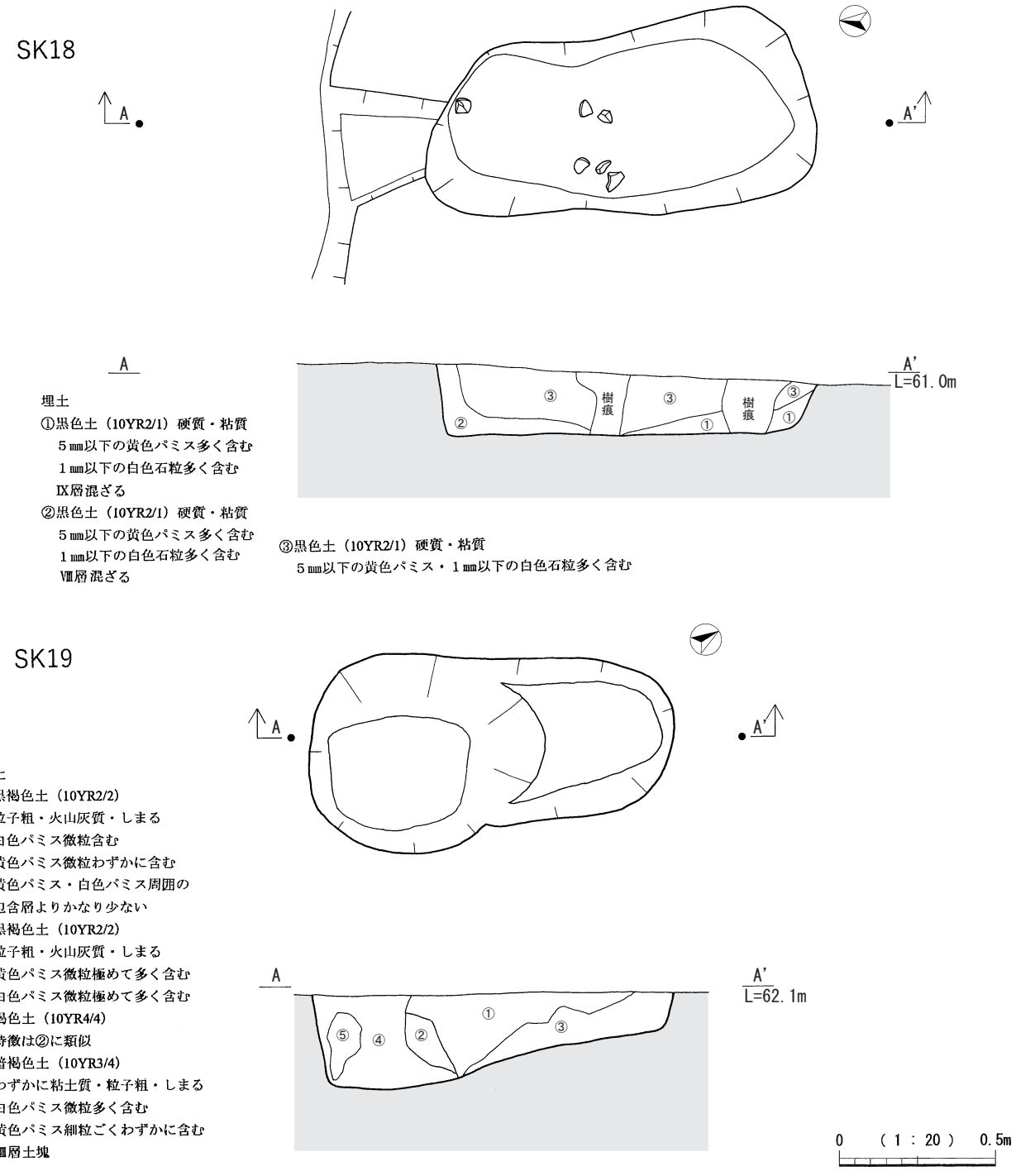
分類：タイプⅡ

埋土

埋土は２枚で，５㎜以下の黄色パミスと１㎜以下の白色石粒を多く含む黒色土と，黄色パミス，白色石粒をごく少量含む層からなる。

出土遺物

遺物は出土していない。



第83図　土坑18号・土坑19号

土坑14号（第81図）

検出状況

SK14は，F－7・8区のⅧ層上面で検出された。長軸0.72m，短軸0.35m，深度31cm，推定面積0.20㎡を測る。底面からほぼ垂直に立ち上がる。楕円率0.49の長楕円である。土坑の東側約0.5mの所にSK15・SK16がある。

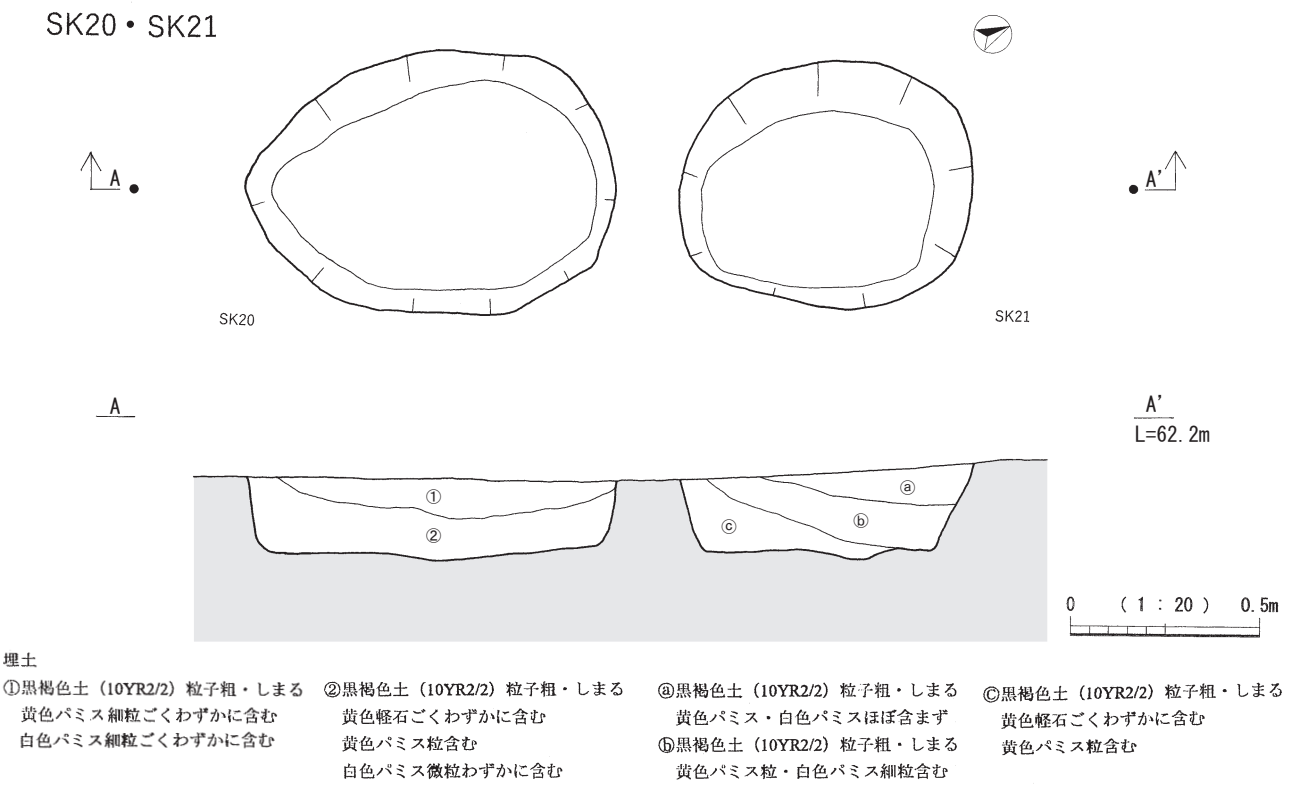
分類：タイプⅠ

埋土

埋土は2枚で，埋土①は黄色パミス，白色石粒をごく少量含む黒褐色土である。②は5㎜以下の黄色パミス少量，1㎜以下の白色石粒を多く含む黒色土である。SK13～16の埋土状況に似ている。

出土遺物

遺物は出土していない。



第84図　土坑20号・土坑21号

土坑15号・16号（第82図）

検出状況

SK15・16は，F－８区のⅧ層上面で検出された。当初平面プランから１基の土坑として調査したが，断面形状や完掘状況より，２基の土坑の切り合いと判断した。先後関係については，東側の土坑が西側の土坑を切っている状況が推察される。

東側のSK15は，長軸0.9m，短軸0.48m，深度18cm，推定面積0.34㎡を測る。楕円率0.53の長楕円である。

西側のSK16は，長軸0.40＋α m，短軸0.80m，深度12cmで，推定面積及び楕円率は不明である。

分類：タイプⅣ・Ⅴ

埋土

埋土は，どちらも１枚で，東側のSK15は５㎜以下の黄色パミス少量，１㎜以下の白色石粒を多く含む黒色土である。西側のSK16は，黄色パミス，白色石粒を少量含む黒褐色土である。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑17号（第82図）

検出状況

SK17は，F－８区のⅧ層上面で検出された。長軸1.02m，短軸0.61m，深度24cm，推定面積は，0.49㎡を測る。楕円率0.60の楕円である。土坑の東側約　0.8mの所にSH21がある。

分類：タイプⅡ

埋土

埋土は1枚で，５㎜以下の黄色パミスと１㎜以下の白色石粒を多く含む黒色土である。樹痕のため一部Ⅷ層が入る。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑18号（第83図）

検出状況

SK18は，F－８・９区のⅧ層上面で検出された。長軸1.21m，短軸0.6m，深度23cm，推定面積は，0.57㎡を測る。楕円率0.50の長楕円である。床面よりほぼ垂直に立ち上がる。土坑の北側にSH22があり，隣接していたため竪穴建物跡の壁面を利用した連穴土坑の可能性もある。

連穴土坑であれば，近くに集石もあり，集落遺跡での３点セットが揃うことになる。しかし，連穴土坑として検証ができないため，ここでは土坑として扱った。このエリアは竪穴建物跡，集石，連穴土坑が多い場所でもある。

分類：タイプⅠ

埋土

埋土は３枚で，埋土③の５㎜以下の黄色パミス，１㎜以下の白色石粒を多く含む黒色土が基本である。樹痕の影響で，Ⅷ層やⅨ層も入り込んでいる。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑19号（第83図）

検出状況

SK19は，F－14区のⅧ層上面で検出された。長軸1.16m，短軸0.53m，深度30cm，推定面積0.48㎡を測る。楕円率0.46の長楕円である。北側壁面は垂直に近い状況で床面へ掘り込まれ，南側へ下方傾斜し，最深部でⅨ層に達する。南側壁面では，垂直に近い状態で立ち上がり，靴底型に近い形状を呈する。そのため，小形ではあるが，連穴土坑を想定して調査を行ったが，床面に被熱痕跡やトンネル部分を見いだせず，土坑として扱った。

分類：タイプⅠ

埋土

埋土は５枚からなる。全体的に炭化物微粒をごくわずかに含む。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑20号（第84図）

検出状況

SK20は，C－19区のⅧ層上面で検出された。長軸0.98m，短軸0.67m，深度21cm，推定面積0.52㎡を測る。楕円率0.68の楕円である。隣接してSK21があり，連穴土坑の可能性も想定して調査を行ったが，トンネル部分での繋がりがなく，別々の独立した遺構と判断した。ほぼ垂直に近い状態で掘り込まれている。２m以内にSH38がある。

分類：タイプⅡ

埋土

埋土は２枚で，粒子の粗い黒褐色硬質土層を基本に，黄色パミス・白色パミス細粒をごくわずかに含む。

出土遺物

遺物は出土していない。

土坑21号（第84図）

検出状況

SK21は，C－19・20区のⅧ層上面でSK20とともに検出された。長軸0.77m，短軸0.64m，深度23cm，推定面積0.39㎡を測る。楕円率0.83の円形である。

分類：タイプⅢ

埋土

埋土は３枚であるが，SK20と同様，粒子の粗い黒褐色硬質土層を基本に，黄色パミス・白色パミス細粒ごくわずかに含む。床面付近には，Ⅸ層のしみこみがある。

出土遺物

遺物は出土していない。

第13表　土坑一覧表

挿図番号	遺構名	検出区	タイプ	長軸(m)	短軸(m)	面積(㎡)	楕円率	深度(cm)	炭化物	遺物	備考
75	SK1	E－3	Ⅳ	0.55＋α	0.46	－	－	37	－	－	SH12に掲載
76	SK2	E－3	Ⅰ	0.85	0.42	0.28	0.49	13	－	－	
	SK3	E－3･4	Ⅱ	0.61	0.48	0.23	0.79	31	－	－	
	SK4	D－4	Ⅲ	1.16	1.05	0.96	0.91	19	－	－	
77	SK5	E－4	Ⅲ	0.72	0.63	0.36	0.88	16	－	－	
	SK6	E－4	Ⅱ	1.18	0.9	0.83	0.76	40	－	○	
78	SK7	E－6	Ⅲ	0.75	0.65	0.38	0.87	10	－	－	
	SK8	F－6	Ⅲ	1.2	1	0.94	0.83	15	－	－	
79	SK9	F－6	Ⅴ	－	－	－	－	－	－	－	調査区外へ広がり詳細不明
	SK10	E－7	Ⅰ	1.27	0.64	0.64	0.50	36	－	－	
80	SK11	E－7	Ⅳ	0.92＋α	0.78	－	－	22	－	－	樹痕に切られている。
	SK12	F－8	Ⅱ	0.93	0.72	0.53	0.77	46	－	－	
81	SK13	F－7･8	Ⅱ	1.32	0.78	0.81	0.59	15	－	－	
	SK14	F－7･8	Ⅰ	0.72	0.35	0.20	0.49	31	－	－	
82	SK15	F－8	Ⅳ	0.9	0.48	0.34	0.53	18	－	－	２基と判断
	SK16	F－8	Ⅴ	0.4＋α	0.8	－	－	12	－	－	
	SK17	F－8	Ⅱ	1.02	0.61	0.49	0.60	24	－	－	
83	SK18	F－8･9	Ⅰ	1.21	0.6	0.57	0.50	23	－	－	SH21･22に掲載
	SK19	F－14	Ⅰ	1.16	0.53	0.48	0.46	30	○	－	
84	SK20	C－19	Ⅱ	0.98	0.67	0.52	0.68	21	－	－	
	SK21	C－19･20	Ⅲ	0.77	0.64	0.39	0.83	23	－	－	

第14表　石器観察表（土坑出土）

挿図番号	掲載番号	遺構番号	取上番号	出土区	層	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	器種	分類	石材	石材分類	備考
77	S109	SK 6	SK201－4	E－4	－	68.00	59.00	64.00	297.30	磨石	－	安山岩	安山岩B	

（4）Ⅶ層集石（第85 ～ 108図）

集石は，Ⅶ層中で32基が検出された。

本報告書では，集石の詳細を下記のような名称を示して掲載した。

総礫数：個々の集石を構成している石器を含めた礫の総数。

長　軸：集石を構成する礫の端から端までの最大幅の長さのこと。または，掘り込み部の端から端までの長さ。

短　軸：長軸に対して直角に交わり，集石を構成する礫の端から端までの最小幅の長さのこと。または，長軸に直交する掘り込み部の端から端までの長さ。

また，集石を堀り込みの有無，散密の状況で下記のように分類した。

タイプⅠ：構成礫の明確な集中部及び掘り込み部のないもの。（散石状態）

タイプⅡ：構成礫の明確な集中部があり，掘り込み部のないもの。

タイプⅢ：構成礫の明確な集中部があり，掘り込み部を伴うもの。

タイプⅣ：構成礫の明確な集中部は無いが，掘り込み部が若干確認できるもの。

表１　タイプ別基数

タイプ	基数
Ⅰ	13
Ⅱ	15
Ⅲ	2
Ⅳ	2

集石１号（第86図）

分　類：タイプⅡ

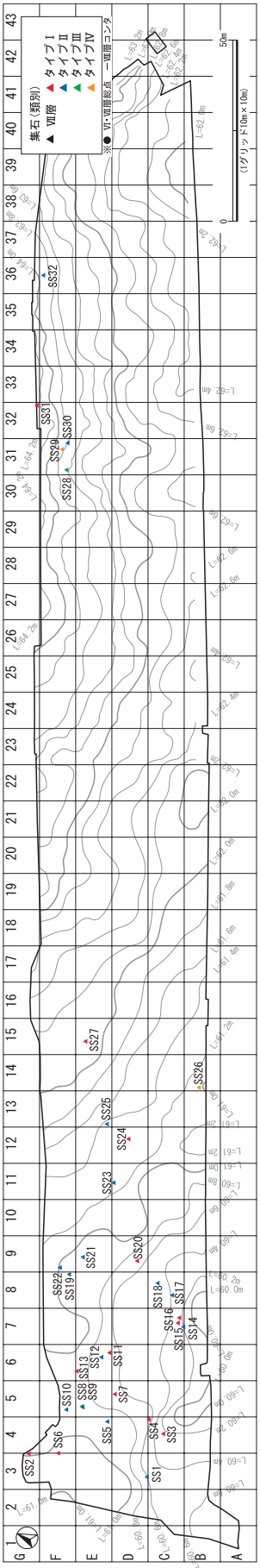
検出状況

SS １は，C・D－３区のⅦ層で検出された。まとまりがあるが，掘り込みはない。石を組んだような様相も窺える。礫は被熱を受け赤変しているものが多い。一部タールや煤のついた礫もある。焼土や炭化物は確認できなかった。

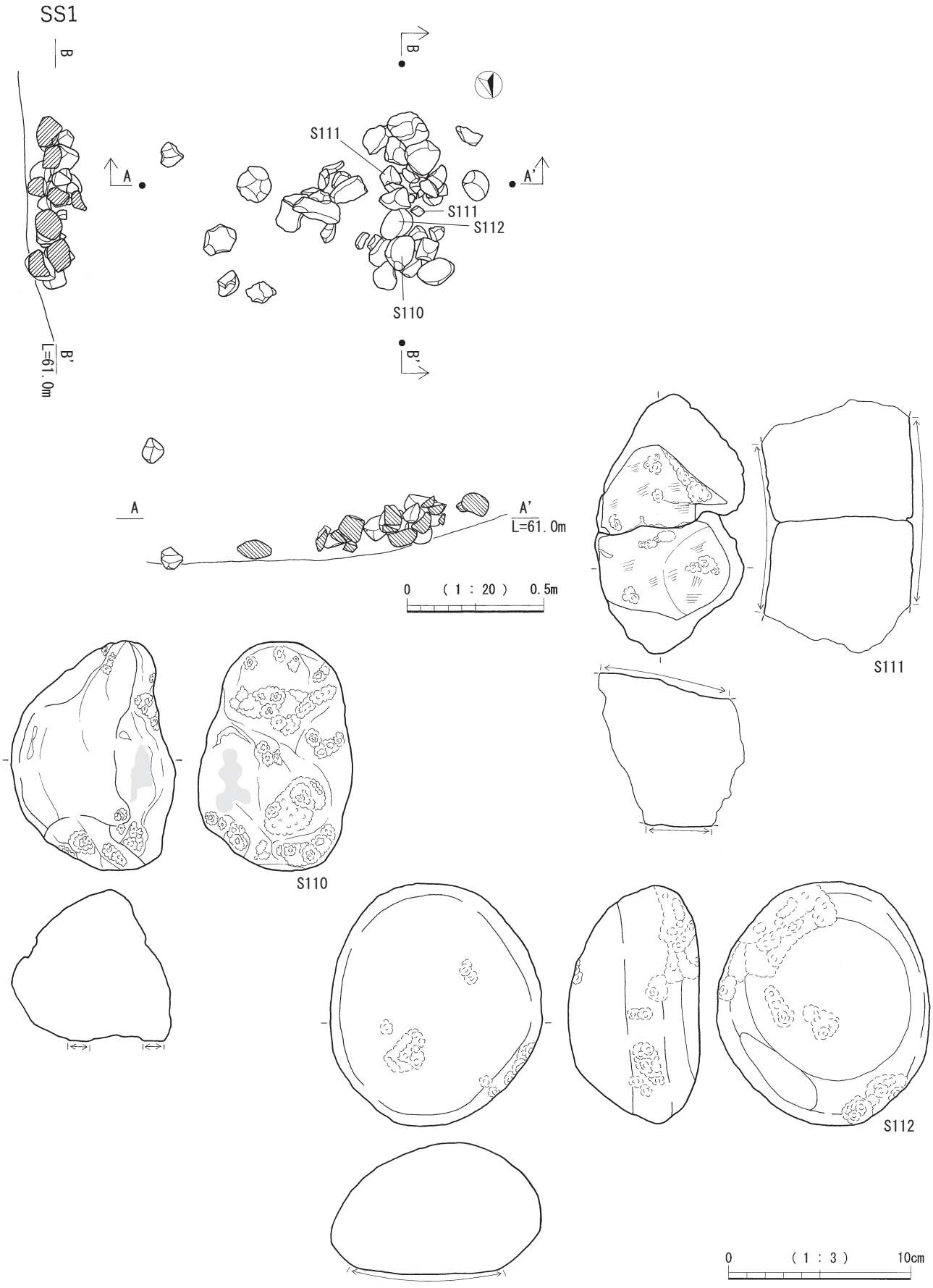
この集石の下約20cmの所から縄文早期のSH ９が検出されたが，竪穴建物跡との関連はないと思われる。

規　模

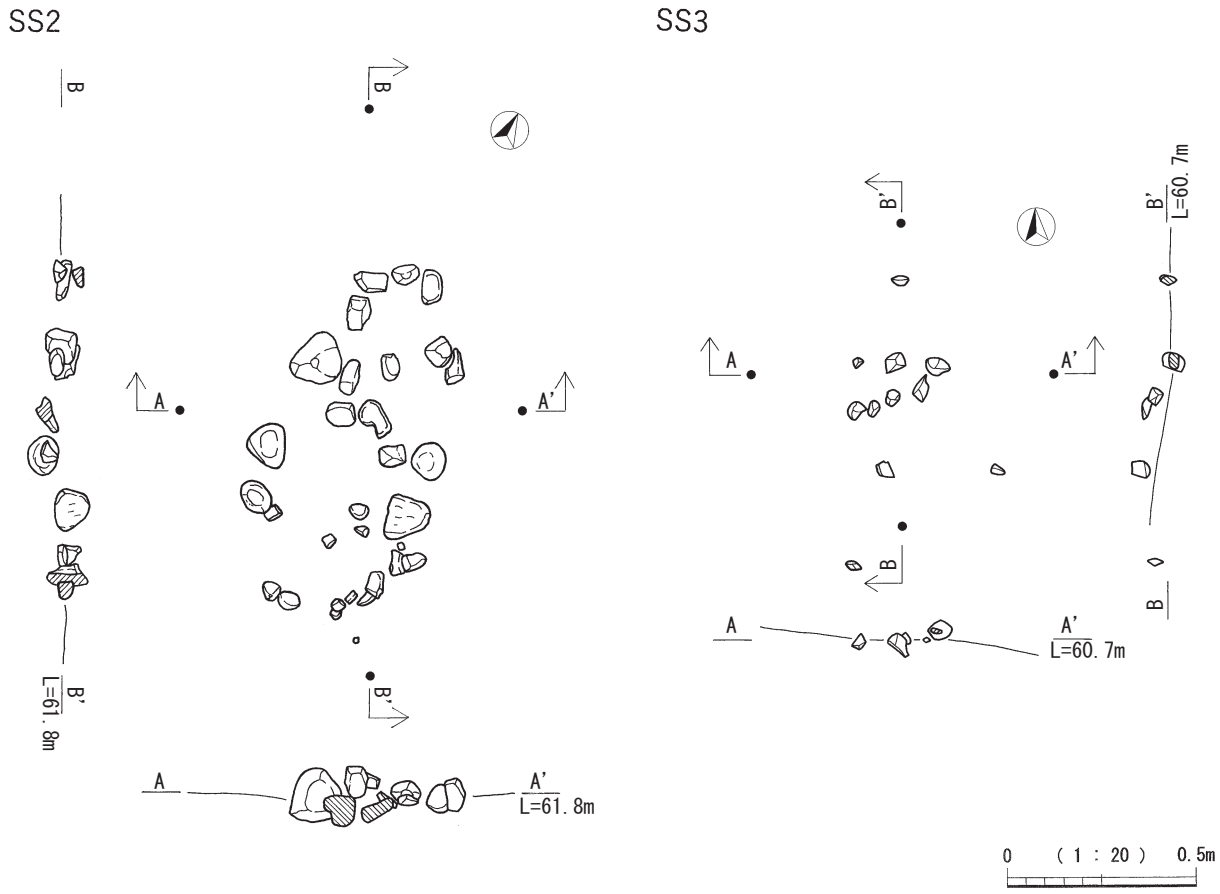
構成礫数は49個で，１個平均の重さが582gであった。10cm以上の礫が多い。礫は，長軸1.28m，短軸1.26mの範囲に広がる。



第85図　Ⅶ層集石分布図



第86図　集石１号・出土遺物



第87図　集石２号・集石３号

出土遺物

３点の石器が出土した。S110は凝灰岩製であり，風化が著しいものの敲打痕が確認できる。裏面を上にした状況で出土していて，タールが付着している状況から左側に熱源があったことが想定できる。S111は凝灰岩製の石皿片である。２点の接合資料であり，集石内の離れた位置で出土している。正面・裏面ともに磨面を有する。断面にも赤化が確認できるため，破砕したあとも集石の礫として使用したと推測できる。S112は，多孔質な安山岩製の磨敲石である。薄く赤化しており，被熱の痕跡が窺える。

集石２号（第87図）

分　類：タイプⅠ

検出状況

SS２は，G－３・４区のⅧ層上面で検出された。ややまとまり感はあるが，散石とした。焼土は検出されなかった。掘り込みはなし。

規　模

構成礫数は25個で，１個平均の重さが476gであった。礫は，長軸1.00m，短軸0.52mの範囲に広がる。拳大の礫が多い。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石３号（第87図）

分　類：タイプⅠ

検出状況

SS3は，C－４区で検出された。堆積状況が悪く，Ⅵ層かⅦ層か判断しがたいが，他遺構の状況等からⅦ層段階とした。北側約2.0mの所にSH13がある。破砕した角礫が多い。

規　模

構成礫数は11個で，１個平均の重さが91gであった。礫は，長軸0.78m，短軸0.41mの範囲に広がる。

出土遺物

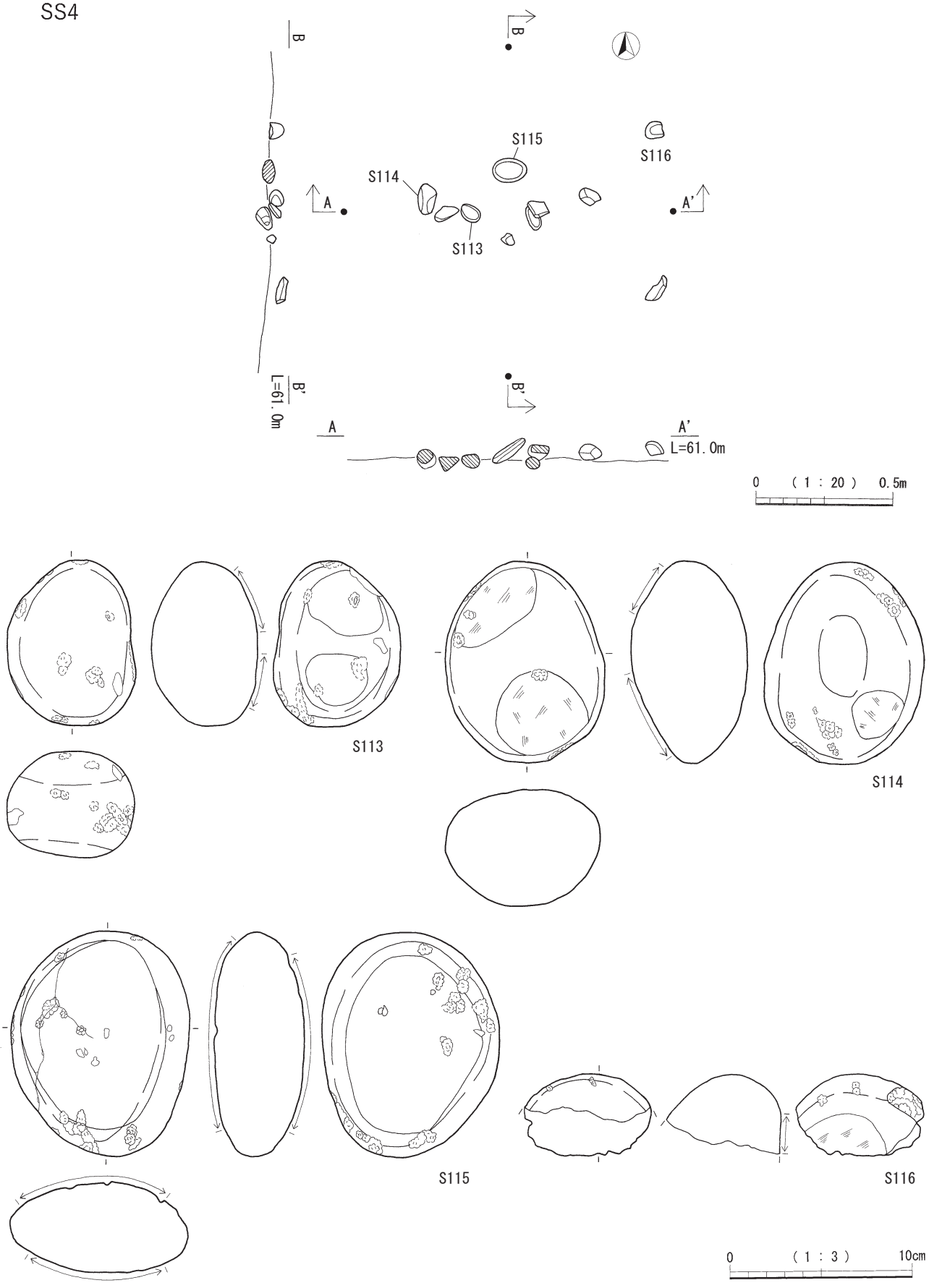
遺物は出土しなかった。

集石４号（第88図）

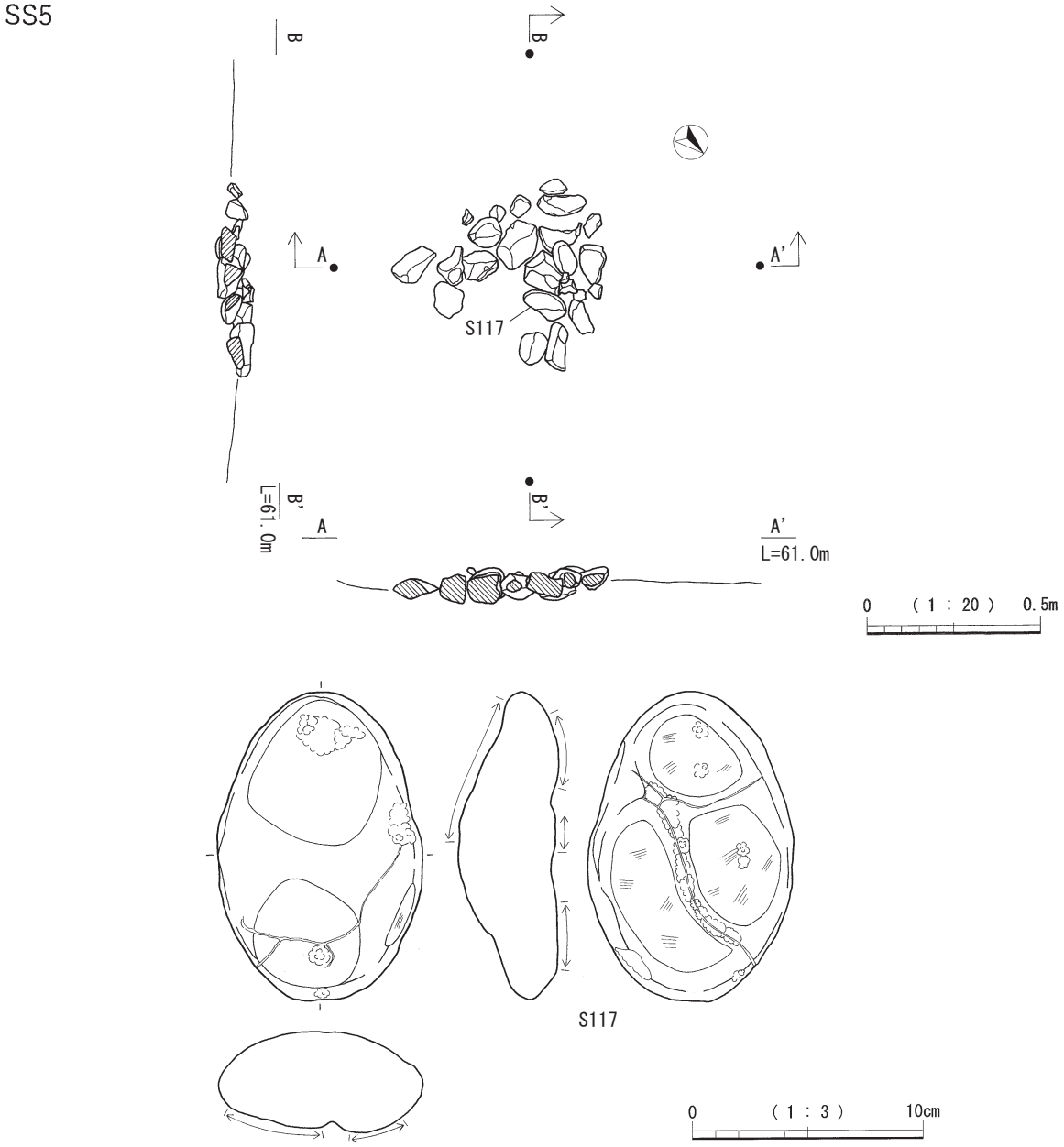
分　類：タイプⅠ

検出状況

SS ４は，C・D－４区で検出された。Ⅵ層かⅦ層か判断しがたいが，土の状況からⅦ層特有の黄色パミスや白色石粒が混入していることからⅦ層検出と判断した。掘



第88図　集石４号・出土遺物



第89図　集石５号・出土遺物

り込みは検出されなかった。南側約2.5mの所にSH13がある。

規　模

構成礫数は10個で，１個平均の重さが338gであった。礫は，長軸0.92m，短軸0.65mの範囲に広がる。

出土遺物

４点の石器が出土した。S113 ～ S116は安山岩製の磨敲石である。S113・S114は楕円形で，部分的に強く磨ることで不定形な形状となっている。これらに比熱の痕跡は確認できない。S115は被熱により，全体的に赤化やヒビ割れが確認できる。S116は被熱破砕した磨石片である。

集石５号（第89図）

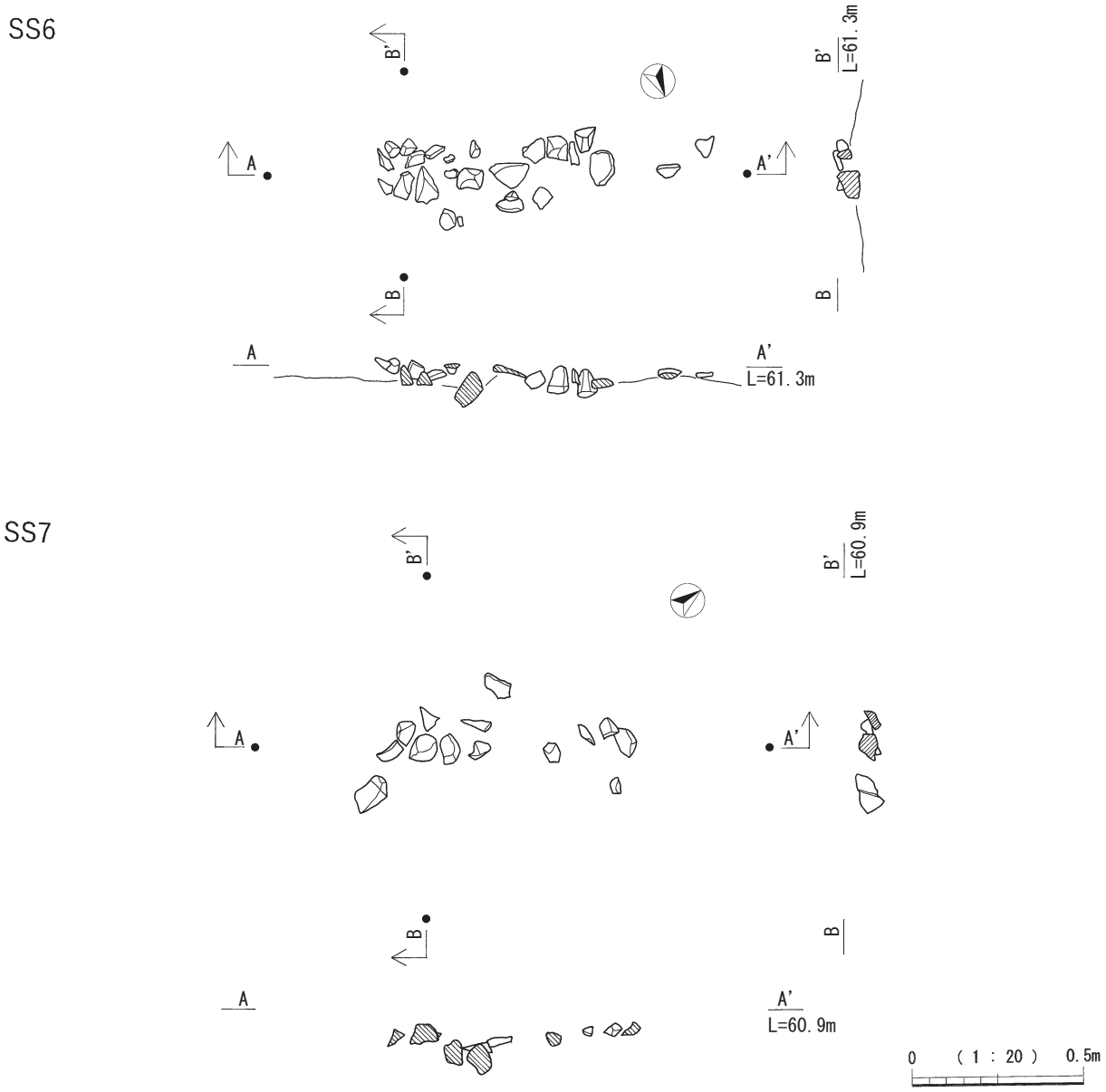
分　類：タイプⅡ

検出状況

SS５は，E－4区のⅧ層上面で検出された。西側約1.2mの所にSH15がある。ほとんどの礫が被熱し，破砕している。タールや煤付着の礫が多い。炭化物も少量点在する。

規　模

構成礫数は25個で，１個平均の重さが383gであった。礫は，長軸0.62m，短軸0.56mの範囲に広がる。



第90図　集石６号・集石７号

出土遺物

１点の石器が出土した。S117はホルンフェルス製の磨敲石である。いびつな楕円形である。裏面は良く磨られている。被熱による変色やヒビ割れが確認できる。

集石６号（第90図）

分　類：タイプⅠ

検出状況

SS ６は，F－３・４区のⅦ層で検出された。SH16と重なっているが，垂直レベルでは約20cmの差が有る。竪穴建物跡との関連は薄いと思われる。ほとんどの礫が被熱し，破砕している。

規　模

構成礫数は23個で，１個平均の重さが189gであった。礫は，長軸0.99m，短軸0.30mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

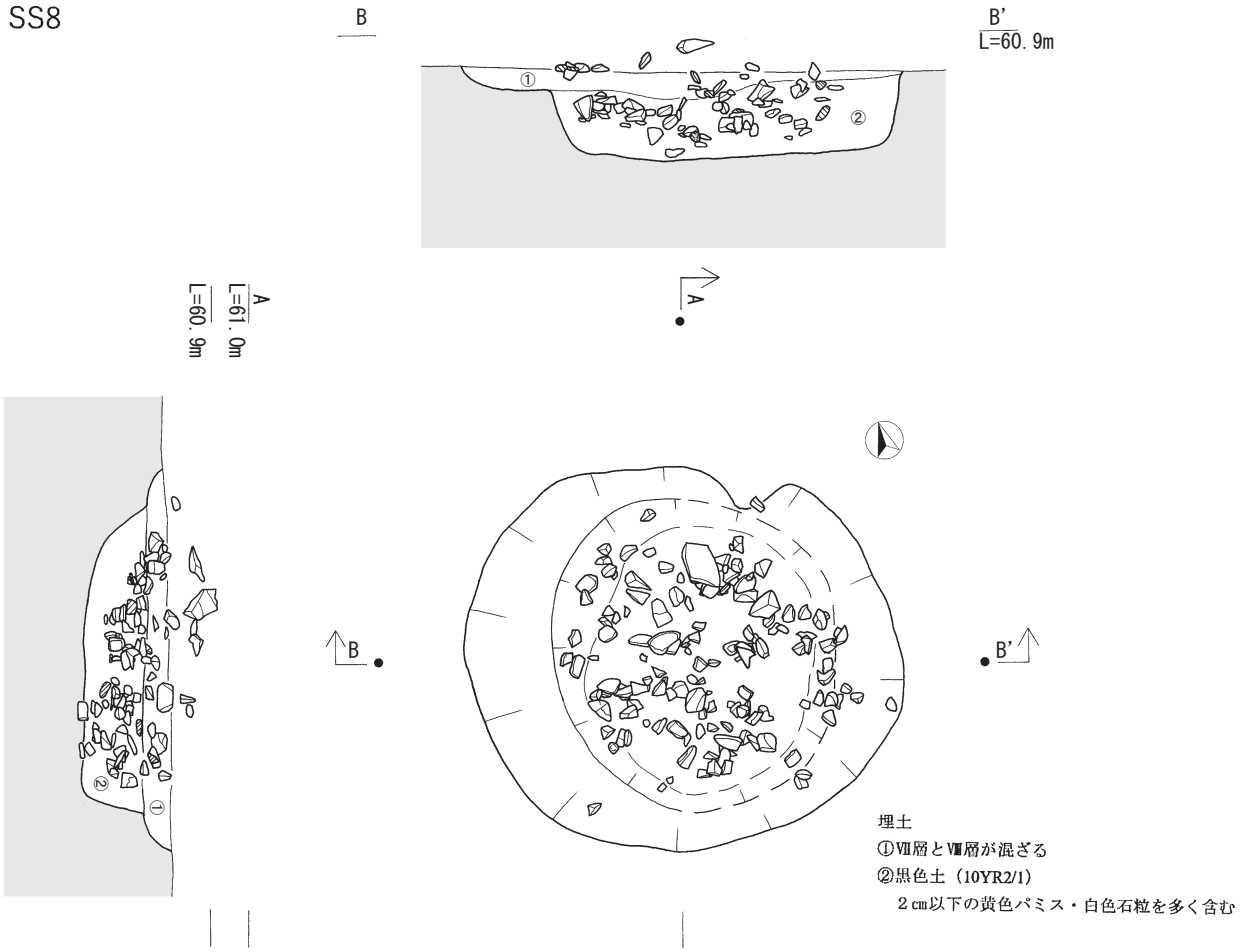
集石７号（第90図）

分　類：タイプⅠ

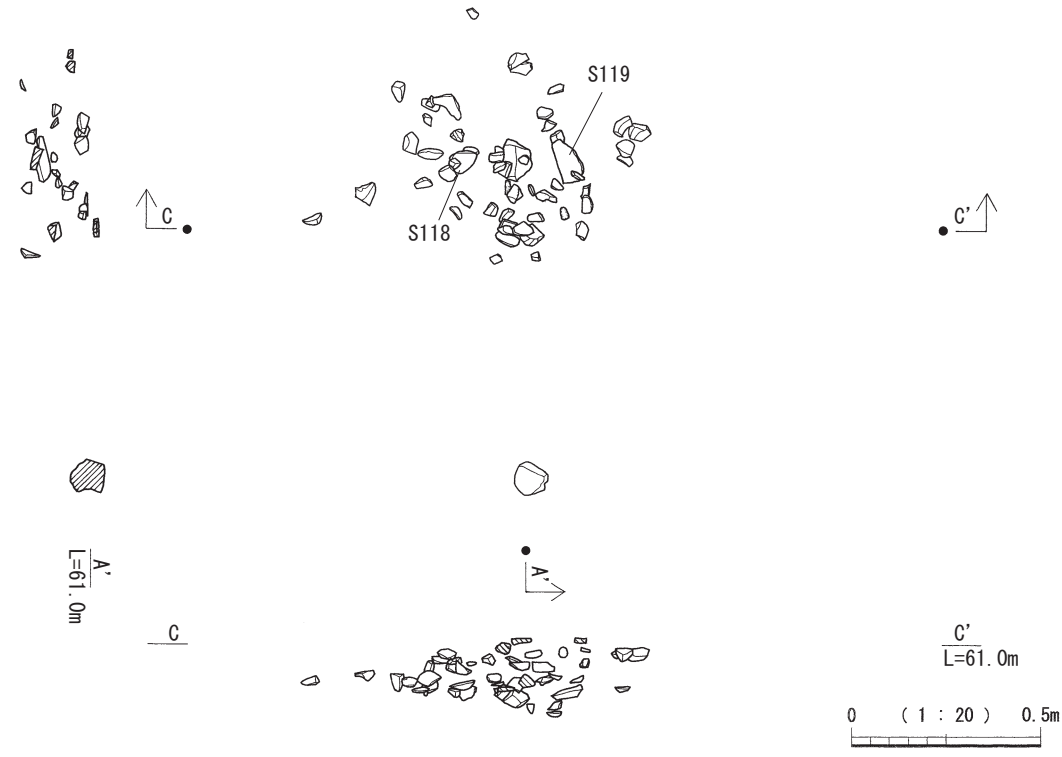
検出状況

SS ７は，D－５区のⅦ層下面で検出された。掘り込みを検出できず。凹地に礫が流れ込んだような状況である。礫は，ほぼ被熱を受けている。周辺から，炭化物は

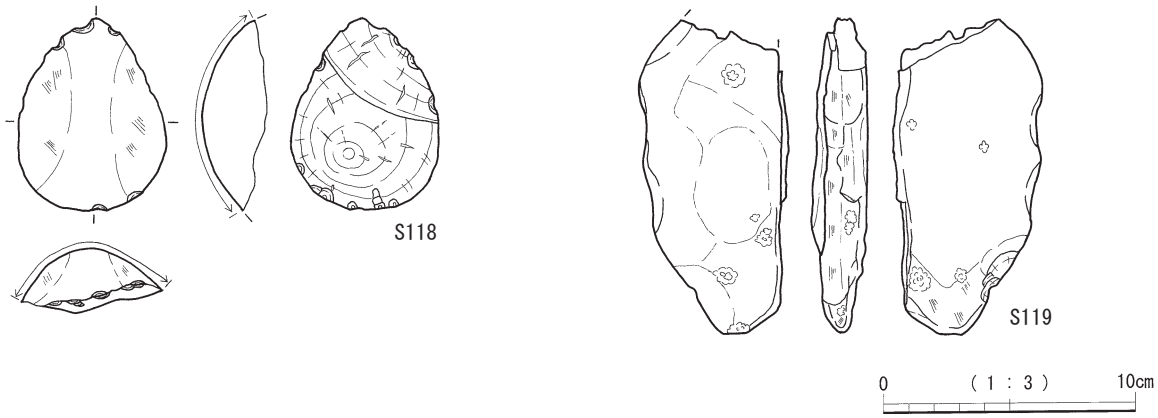
SS8



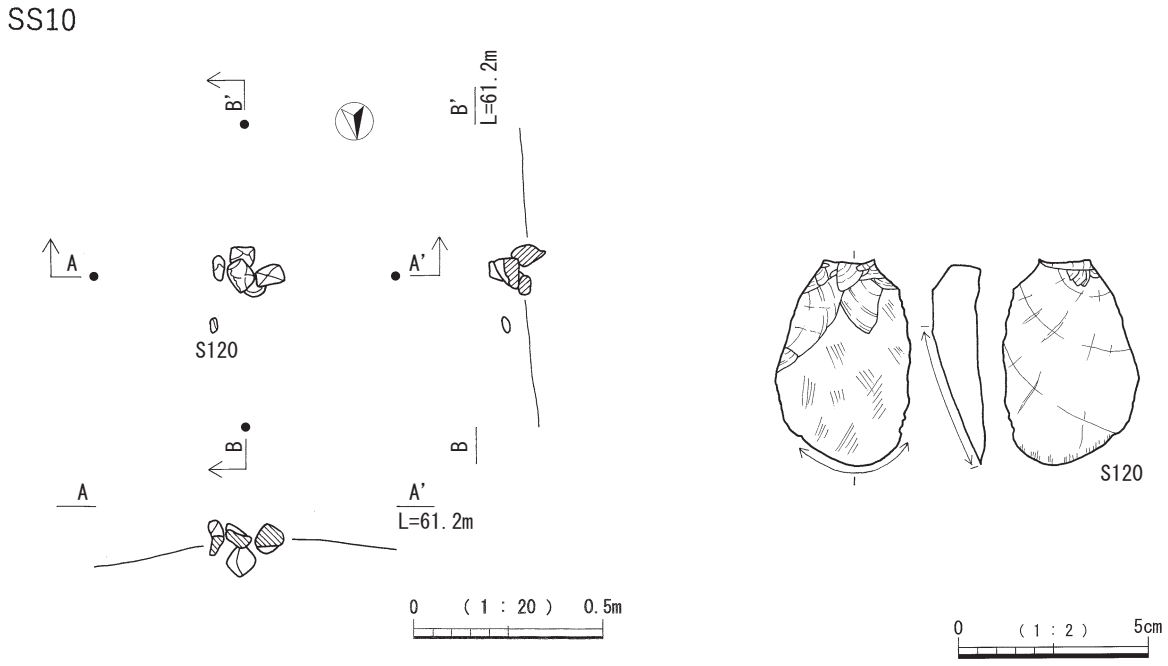
SS9



第91図　集石８号・集石９号



第92図　集石９号出土遺物



第93図　集石10号・出土遺物

検出できなかった。

規　模

構成礫数は13個で，１個平均の重さが213gであった。礫は，長軸0.82m，短軸0.40mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石８号（第91図）

分　類：タイプⅢ

検出状況

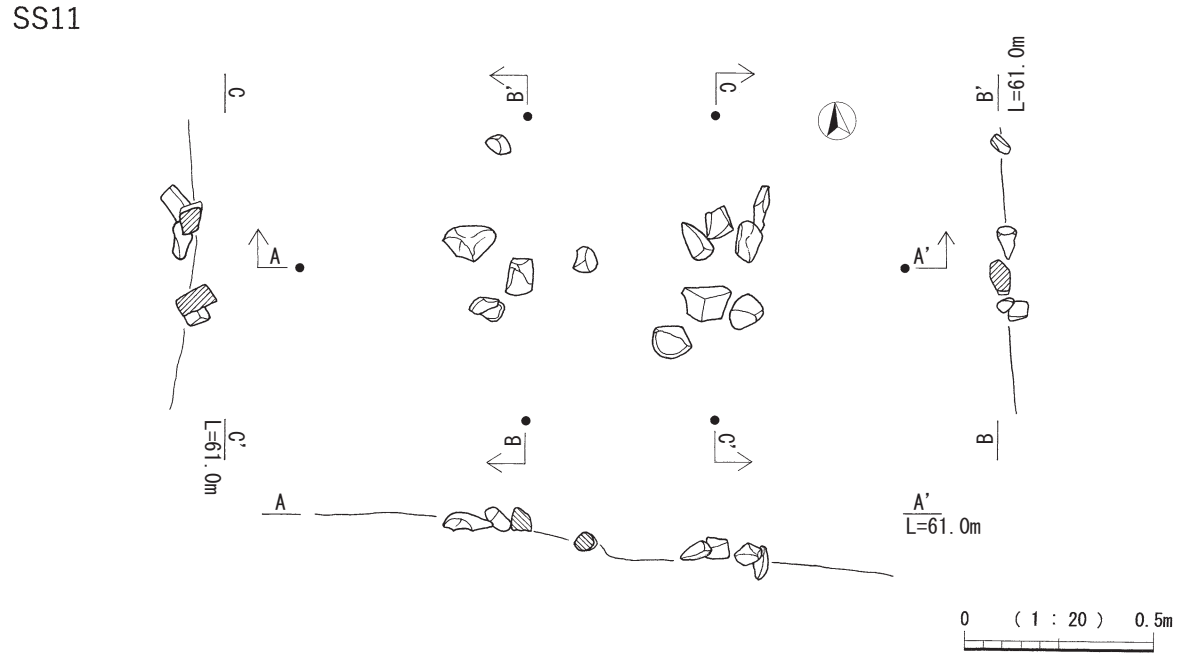
SS８は，E－５区のⅧ層で検出された。当初，円形の土坑として調査した。その後，まとまった礫の出土があったため，集石と判断した。SS９が隣接し，SS８とのセット関係であることも考えられ，南北方向軸は一緒に設定した。

SS８は礫を熱して使用しており，ここから掻きだされた礫がSS９を構成した可能性もある。

埋土は，②が黒色土で軟質である。Ⅶ層が，黒色を呈した感じである。②に入る黄色パミスは，径１～２㎝のものがあり，竪穴建物跡等の他遺構埋土中のものより大きいため，人為的に埋められたものと推測する。土坑として利用された後，集石として再利用された可能性もある。炭化物の年代測定値は，11,170 ～ 10,786calBPを示す。

規　模

構成礫数は145個で，１個平均の重さが48gであった。礫は，長軸0.89m，短軸0.85mの範囲に広がる。掘り込



第94図　集石11号

みの深さは24cmである。小さめの角礫が多い。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石９号（第91・92図）

分　類：タイプⅡ

検出状況

SS ９は，Ｅ－５区のⅦ層で検出された。被熱を受け破砕した小さな礫が集中しているが，掘り込みは検出されなかった。隣接してSS ８がある。

規　模

構成礫数は56個で，１個平均の重さが56gであった。礫は，長軸1.29m，短軸0.93mの範囲に広がる。

出土遺物

２点の石器が出土した。S118・S119はホルンフェルス製である。S118は使用痕剥片であり，被熱破砕した磨石の転用品であると考えられる。下面と両側面に僅かに調整剥離が施されており，縁辺部が擦れている。S119は異形の磨敲石である。正面・裏面も滑らかに擦られている可能性があるが，擦痕は不明瞭である。右側面は明瞭に擦られている。所々に敲打痕が確認できるが，敲打具としての使用頻度は低いものと推測できる。

集石10号（第93図）

分　類：タイプⅡ

検出状況

SS10は，Ｆ－５区のⅦ層で検出された。当初，石器の集積かと思われたが，石器ではなく個数も少ないことから，集石として扱った。ほとんどが被熱しているが，焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規　模

構成礫数は６個で，１個平均の重さが311gであった。礫は，長軸0.22m，短軸0.20mの範囲に広がっている。

出土遺物

１点の石器が出土した。S120は礫の集中部から僅かに離れた位置で出土した。ホルンフェルス製の使用痕剥片である。下面先端部は特に裏面が擦れており，上面は打ち掻いてあり，意図的に持ち手を形成している可能性もある。

集石11号（第94図）

分　類：タイプⅠ

検出状況

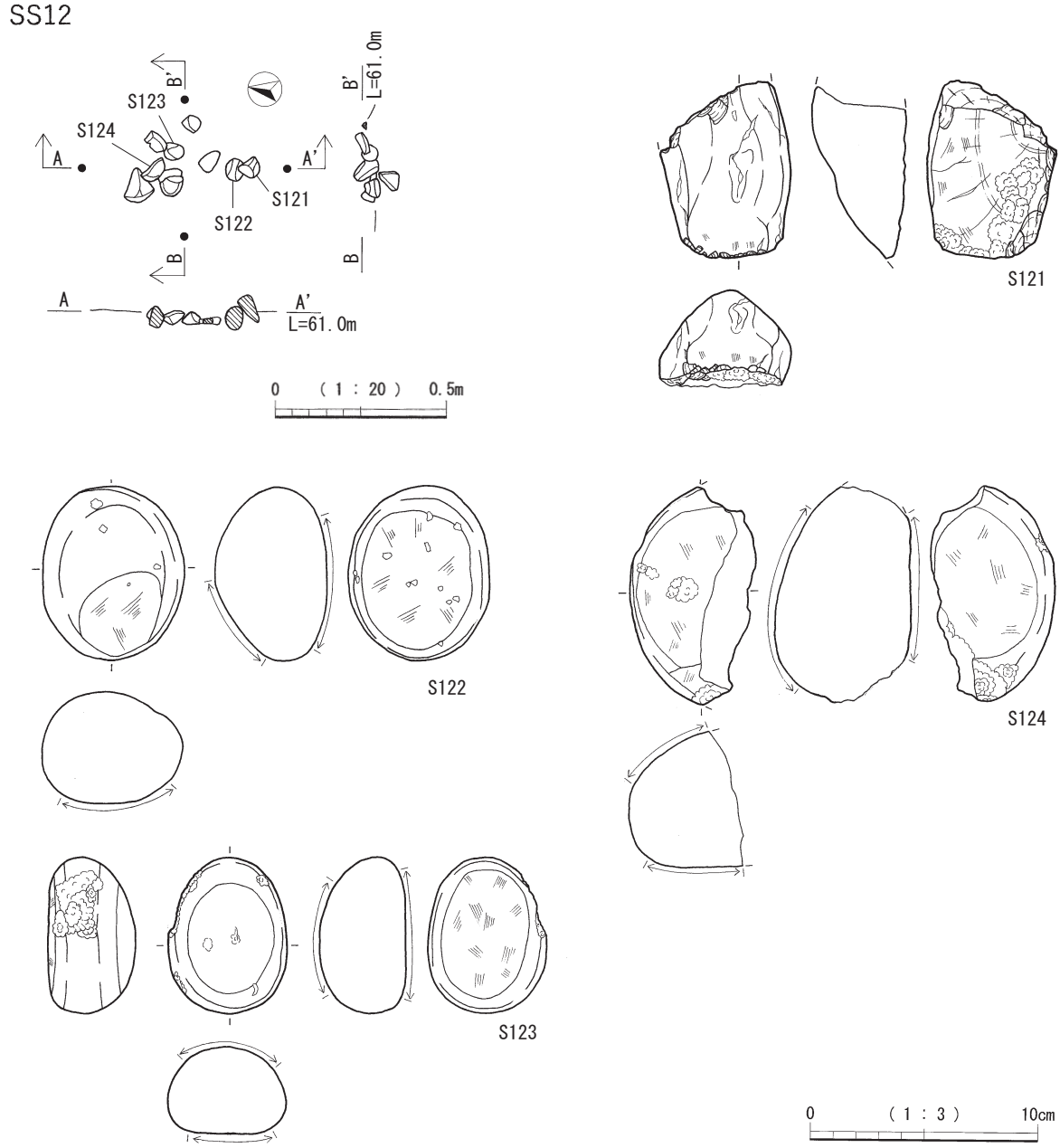
SS11は，Ｅ－６区のⅦ層で検出された。礫は10cm程度の物がほとんどで，被熱している。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。北側約1.5mの所にSK ７がある。

規　模

構成礫数は13個で，１個平均の重さが417gであった。礫は，長軸0.87m，短軸0.58mの範囲にまとまっている。

出土遺物

遺物は出土しなかった。



第95図　集石12号・出土遺物

集石12号（第95図）

分　類：タイプⅡ

検出状況

SS12は，E－６区のⅦ層で検出された。5cm程度の円礫が多く，被熱している。ほとんどが安山岩であるが，花崗岩も１個使われている。掘り込みはなし。東側約1.5ｍの所にSK ７がある。

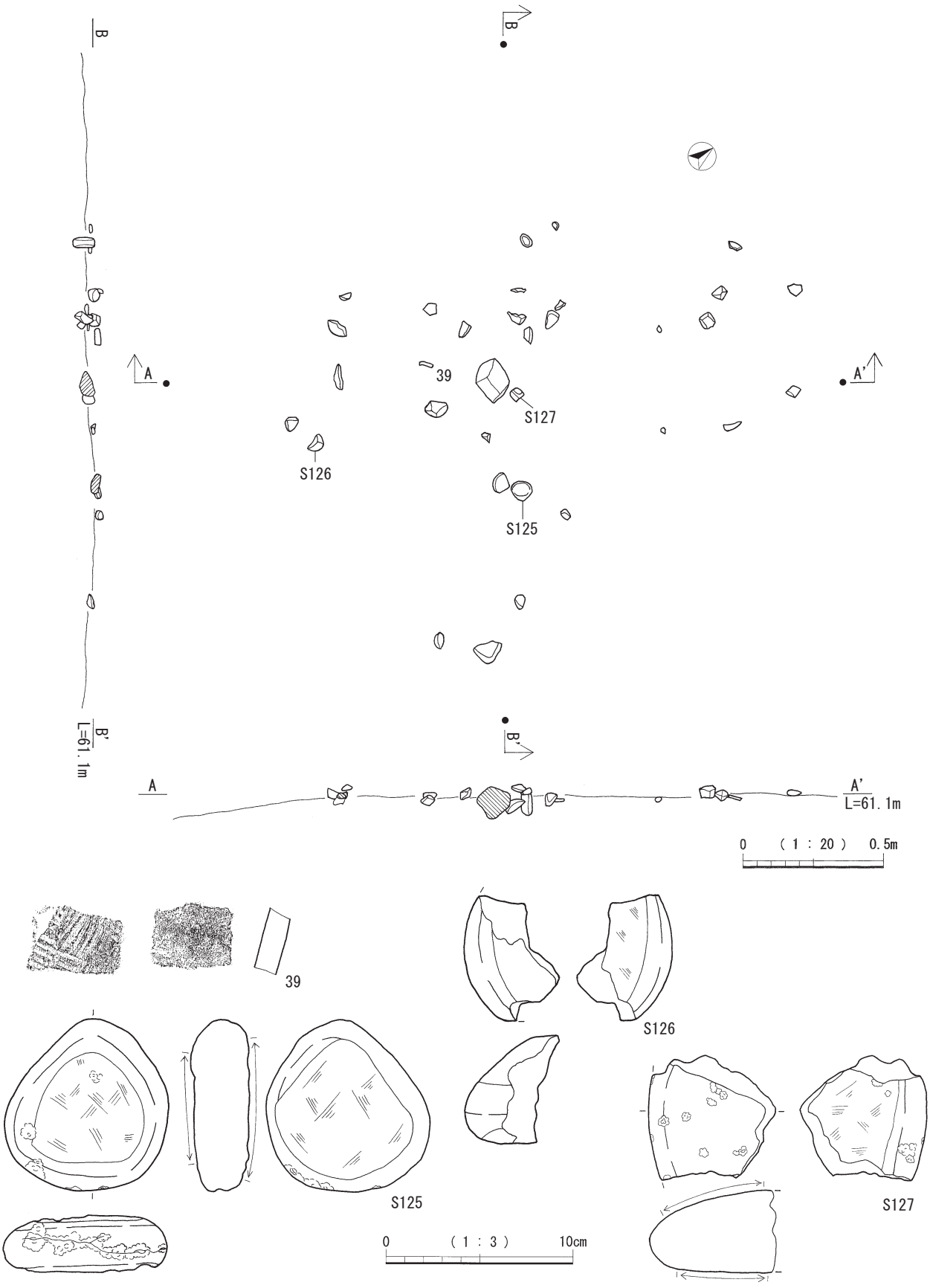
規　模

構成礫数は10個で，１個平均の重さが237gであった。礫は，長軸0.39m，短軸0.25mの範囲にまとまっている。

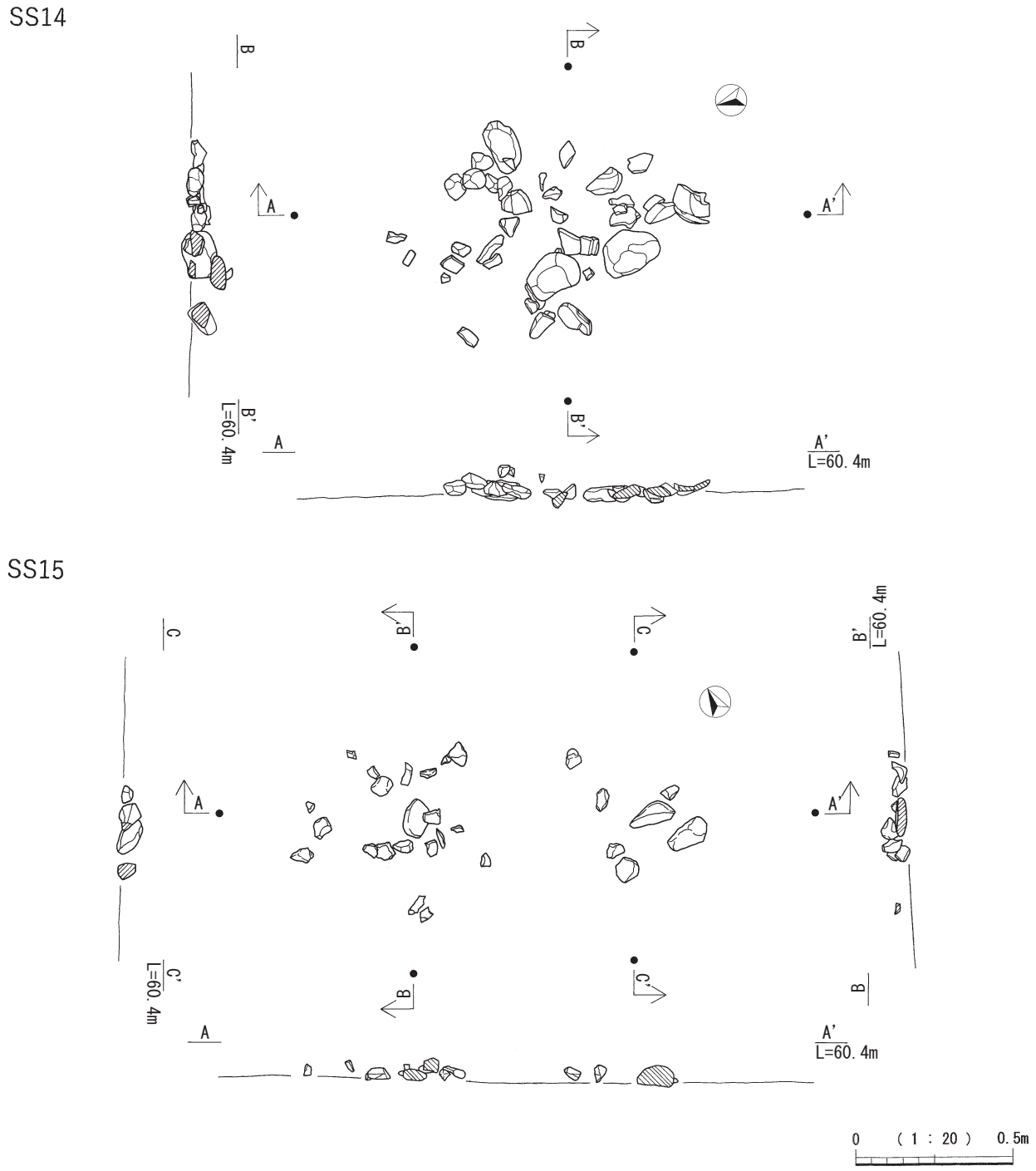
出土遺物

４点の石器が出土した。S121はホルンフェルス製の礫器である。裏面には剥離面を残し，下面と左側面に調整剥離が施される。先端部は敲打により潰れており，石斧の様に使用したものと推測できる。S122 ～ S124は安山岩製である。S122は小型の磨石である。使用頻度はごく少ない。S123は小型の磨敲石であり，特に裏面がよく使用されている。S124は被熱破砕した磨敲石片である。裏面はよく使用されている。

SS13



第96図　集石13号・出土遺物



第97図　集石14号・集石15号

集石13号（第96図）

分　類：タイプⅠ

検出状況

SS13は，E・F－６区のⅦ層で検出された。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

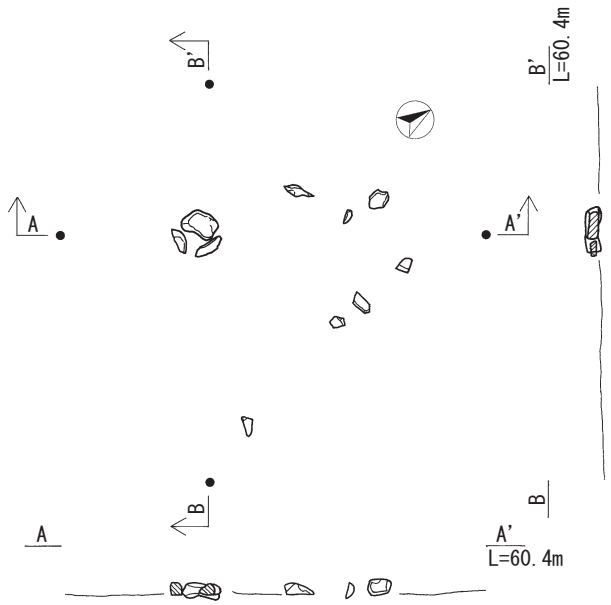
規　模

構成礫数は33個で，１個平均の重さが213gであった。礫は，長軸1.83m，短軸1.57mの範囲にまとまっている。

出土遺物

遺構内より土器１点，石器３点が出土した。39は，綾杉状の貝殻条痕文を施す，やや厚めの器壁を呈する胴部である。Ⅴ類に分類される。S125 ～ S127は安山岩製である。S125・S126は多孔質の石材である。S125は磨敲石で歪な形状の平坦な礫を使用している。下面には深い

SS16

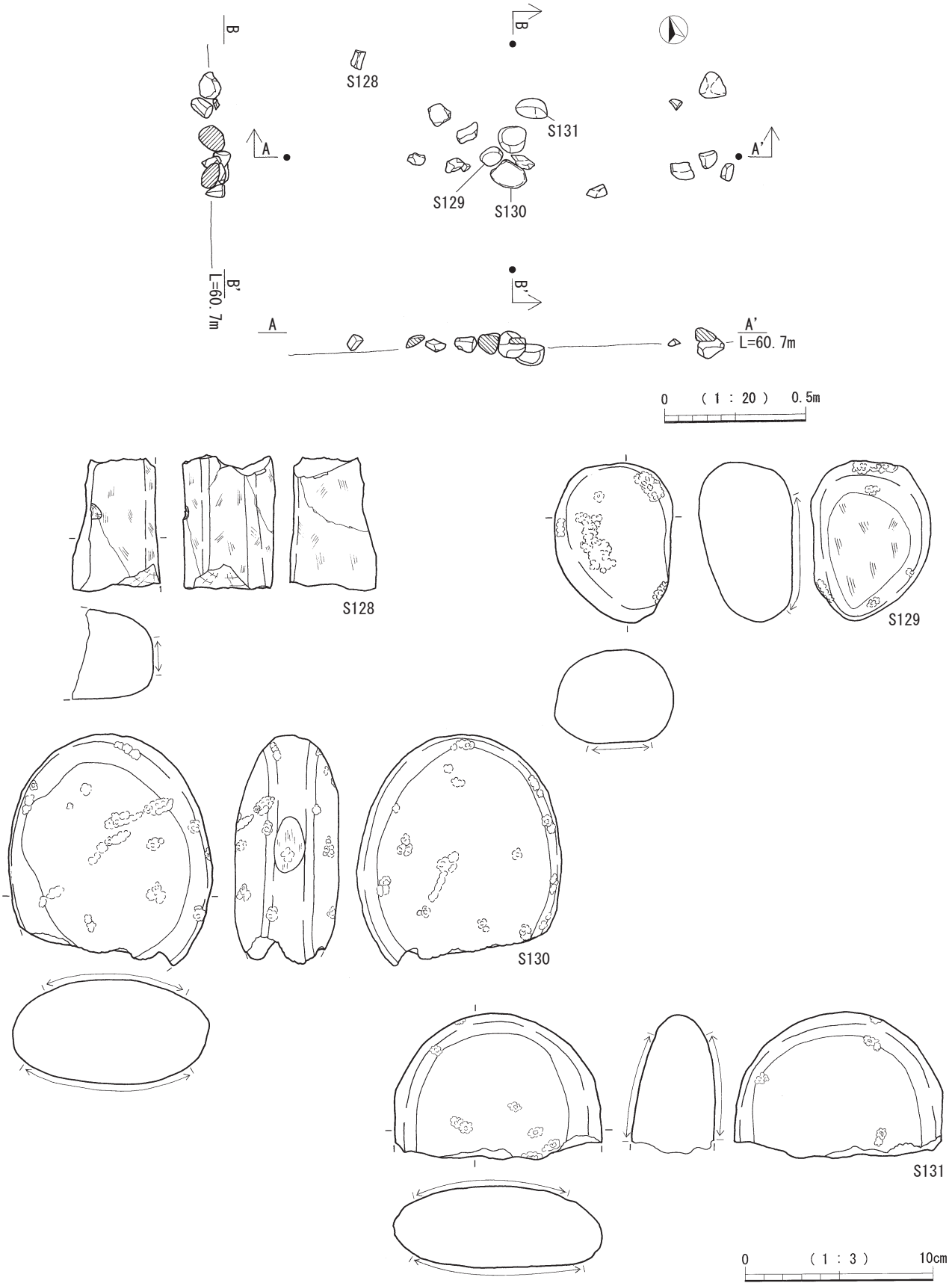


SS17



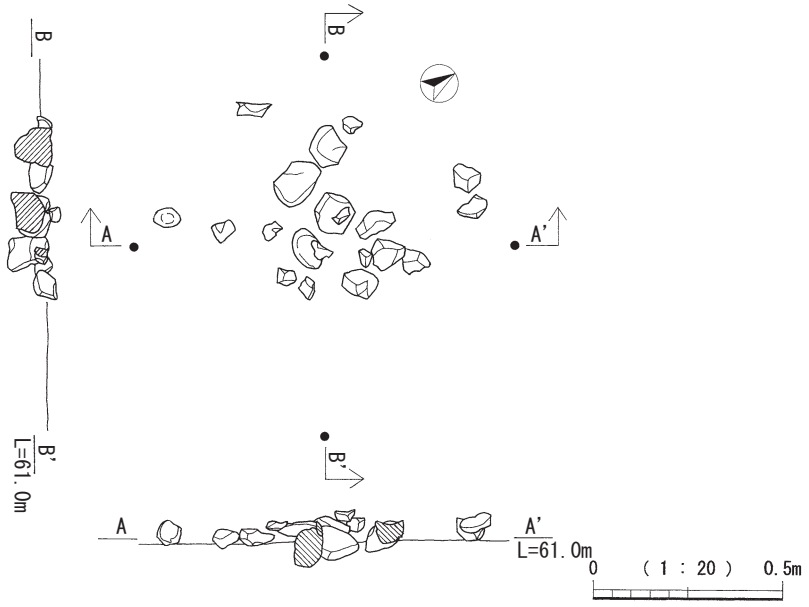
第98図　集石16号・集石17号

SS18



第99図　集石18号・出土遺物

SS19



第100図　集石19号

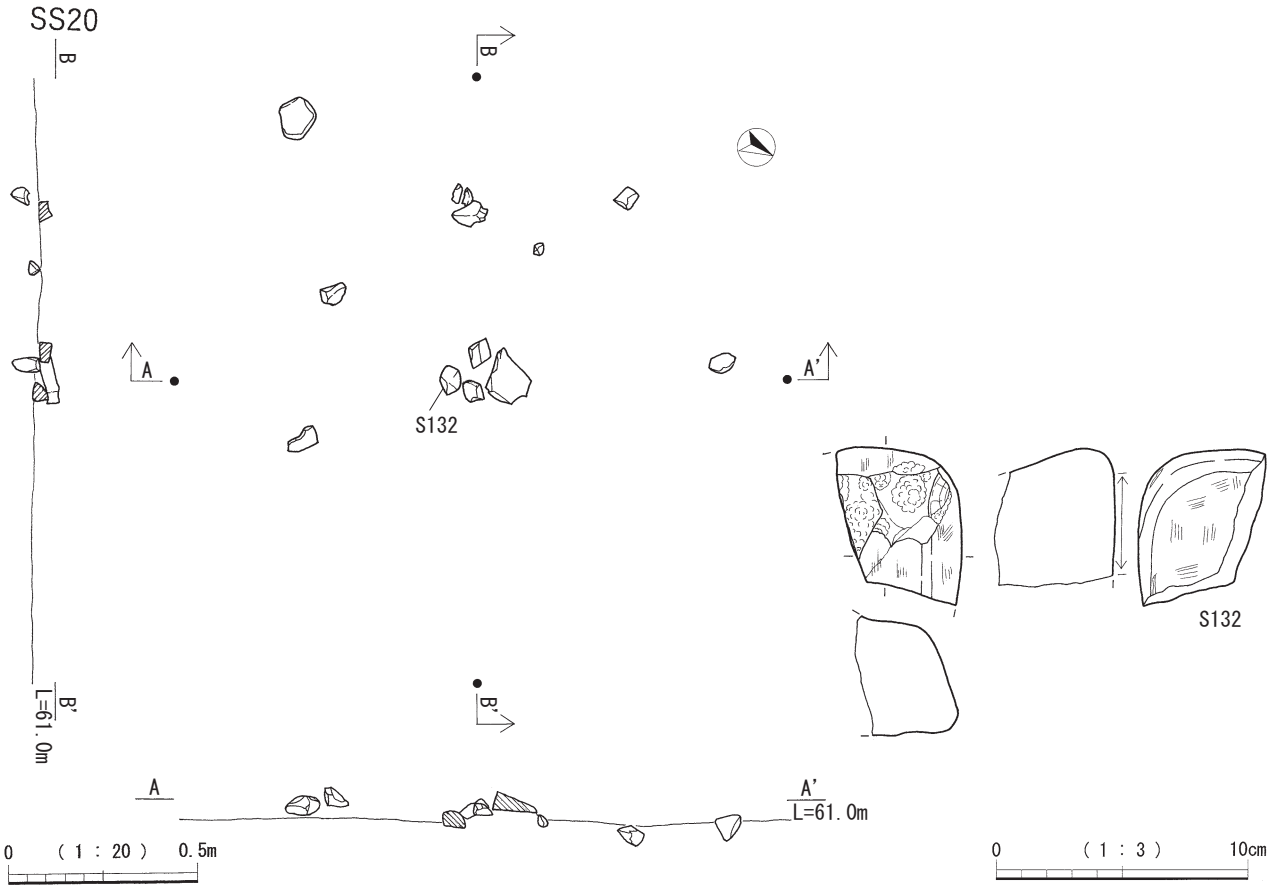
敲打痕が残る。被熱の痕跡は確認できない。S126・S127は被熱破砕しており，S126は磨石片，S127は磨敲石片である。

集石14号（第97図）
分　類：タイプⅡ
検出状況
SS14は，C－７区のⅦ層で検出された。平坦面に被熱を受けた礫で構成される。幼児の頭大の礫（砂岩）を用いている特徴がある。他の礫は，被熱のためか割れが目立つ。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。
規　模
構成礫数は41個で，１個平均の重さが312gであった。礫は，長軸1.03m，短軸0.72mの範囲にまとまっている。
出土遺物
遺物は出土しなかった。

集石15号（第97図）
分　類：タイプⅠ
検出状況
SS15は，C－７区のⅦ層で検出された。南東側へ緩やかに傾斜する所に集石があり，東側の散礫は，ばらけたものと思われる。ほとんどが被熱し破砕している。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。南と北東にSS14・SS16が近接する。
規　模
構成礫数は28個で，１個平均の重さが161gであった。礫は，長軸1.33m，短軸0.57mの範囲に広がっている。
出土遺物
遺物は出土しなかった。

集石16号（第98図）
分　類：タイプⅠ
検出状況
SS16は，C－７区のⅦ層で検出された。ほぼ平坦面に散らばり，被熱を受けた小礫で構成されている。SS15の端から約75cmの所にあり，SS15がばらけた可能性もある。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。
規　模
構成礫数は10個で，１個平均の重さが81gであった。礫は，長軸0.69m，短軸0.65mの範囲に広がっている。
出土遺物
遺物は出土しなかった。

集石17号（第98図）
分　類：タイプⅡ
検出状況
SS17は，C－８区のⅧ層上面で検出された。中心部と思われる箇所に，約25cm大と約15cm大の大きな礫がある。大きな礫を囲むように拳大の礫が広がる。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。
規　模
構成礫数は67個で，１個平均の重さが149gであった。礫は，長軸1.16m，短軸0.95mの範囲に広がっている。
出土遺物
遺物は出土しなかった。



第101図　集石20号・出土遺物

集石18号（第99図）

分　類：タイプⅡ

検出状況

SS18は，C－８区のⅦ層で検出された。拳より大きめの礫を中心に，5cm大の礫が広がる。全部の石が被熱している。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規　模

構成礫数は17個で，１個平均の重さが314gであった。礫は，長軸1.16m，短軸0.45mの範囲に広がっている。

出土遺物

石器４点が出土した。S128は，礫の集中部から約20cm離れた位置で出土した。ホルンフェルス製の磨石である。被熱による赤化が確認できる。礫器を人為的に割って集石の構成礫として転用している可能性もある。S129～S131は安山岩製の磨敲石である。すべてに被熱の痕跡が確認できる。S131は人為的に半裁した可能性もある。

集石19号（第100図）

分　類：タイプⅡ

検出状況

SS19は，F－８区のⅦ層で検出された。拳大以上の大きめの礫が多く使われている。ほとんどが被熱している。隣接してSH26がある。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規　模

構成礫数は20個で，１個平均の重さが390gであった。礫は，長軸0.88m，短軸0.52mの範囲に広がっている。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石20号（第101図）

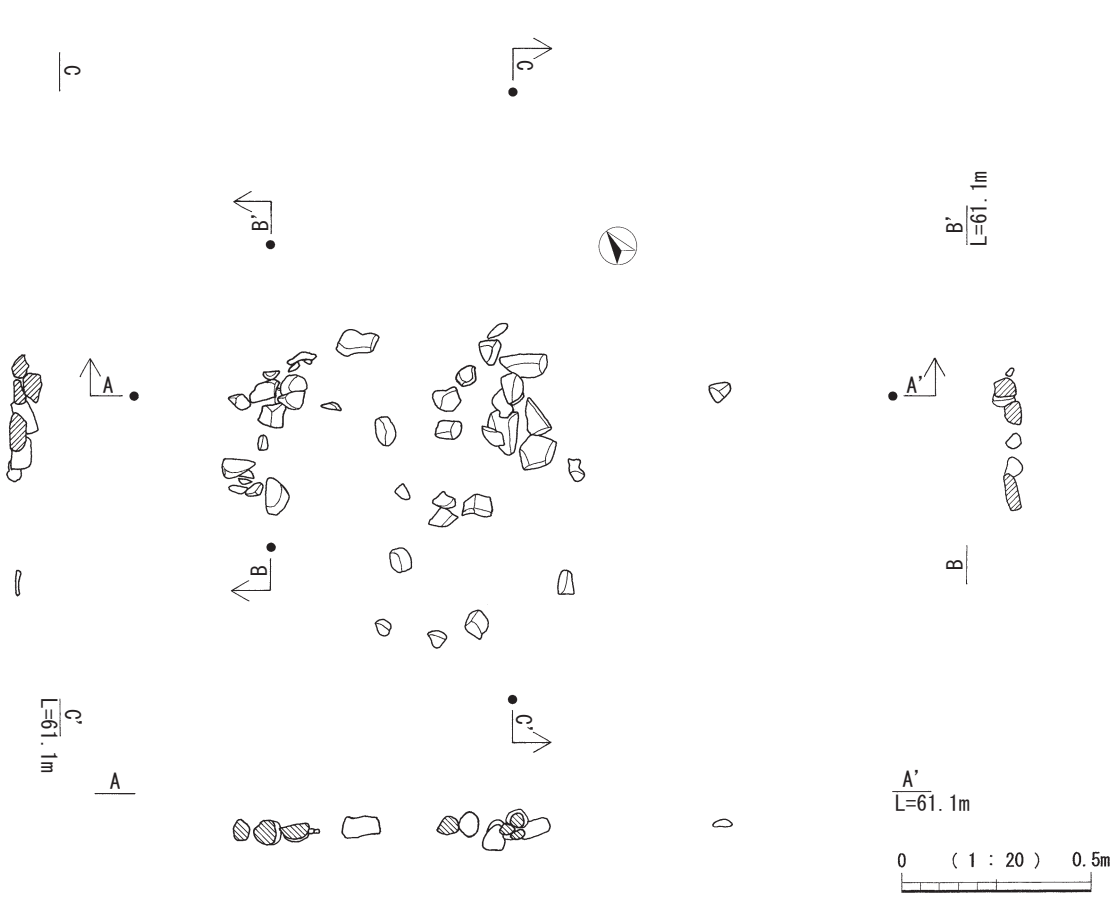
分　類：タイプⅠ

検出状況

SS20は，D－９区のⅦa層で検出された。角礫が多く，ほとんどが被熱している。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規　模

構成礫数は13個で，１個平均の重さが241gであった。礫は，長軸1.20m，短軸0.95mの範囲に広がっている。



第102図　集石21号

出土遺物

石器1点が出土した。S132は砂岩製の磨敲石片である。角の部分は敲打に使用されている。被熱により薄く赤化している。残存部が少なく全体形は不明ではあるが，石皿の破片である可能性もある。

集石21号（第102図）

分　類：タイプⅡ

検出状況

SS21は，E－９区のⅦ層で検出された。拳大の礫を中心とした箇所と拳大のまとまり２ヶ所から成る。ほとんどの礫が被熱している。北東側約２mの所にSH25がある。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規　模

構成礫数は44個で，１個平均の重さが147gであった。礫は，長軸1.35m，短軸0.85mの範囲に広がっている。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石22号（第103図）

分　類：タイプⅡ

検出状況

SS22は，F－９区のⅦ層で検出された。拳大の礫が多く使われている。４割近くが被熱している。
焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。
SH26に隣接している。

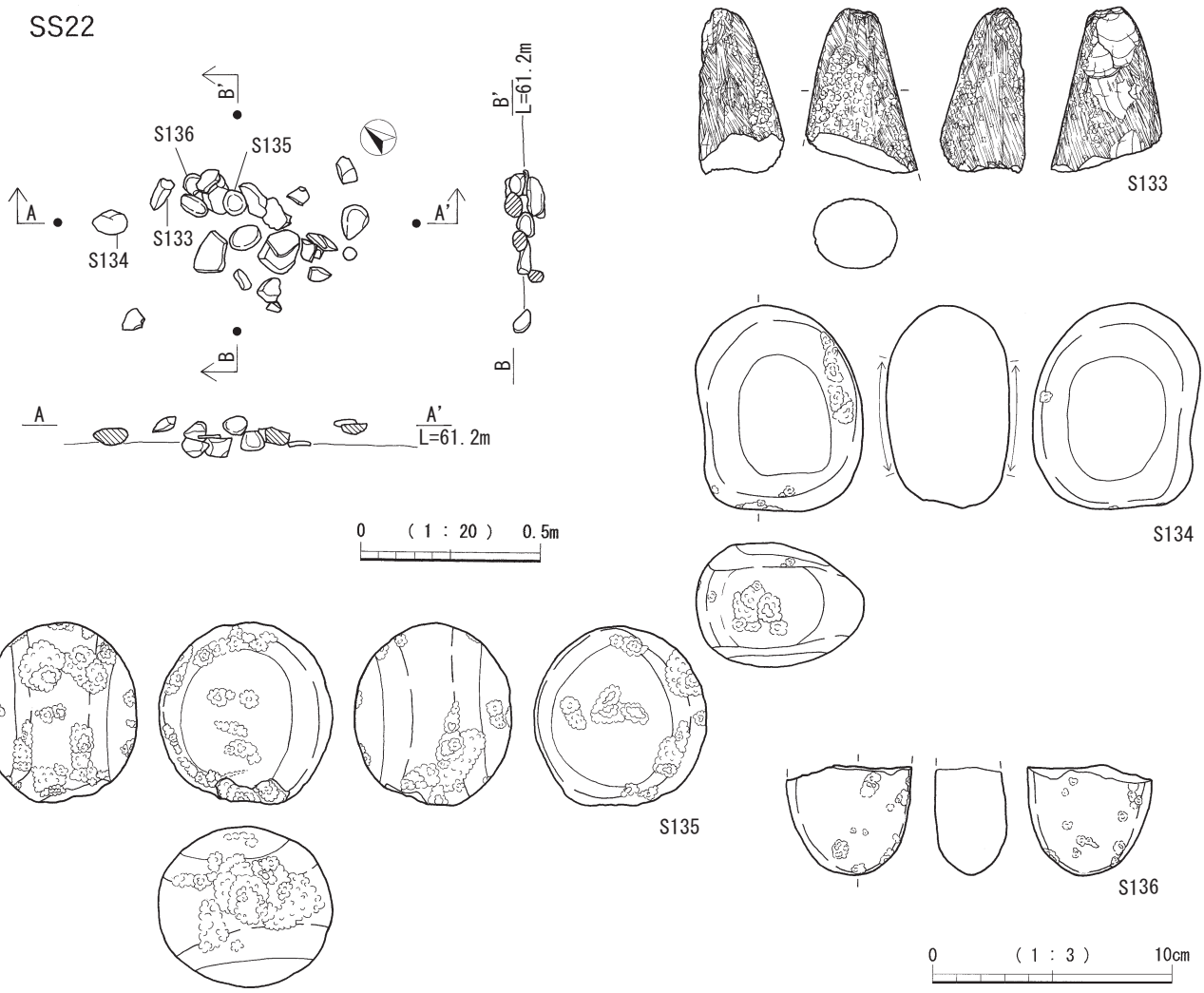
規　模

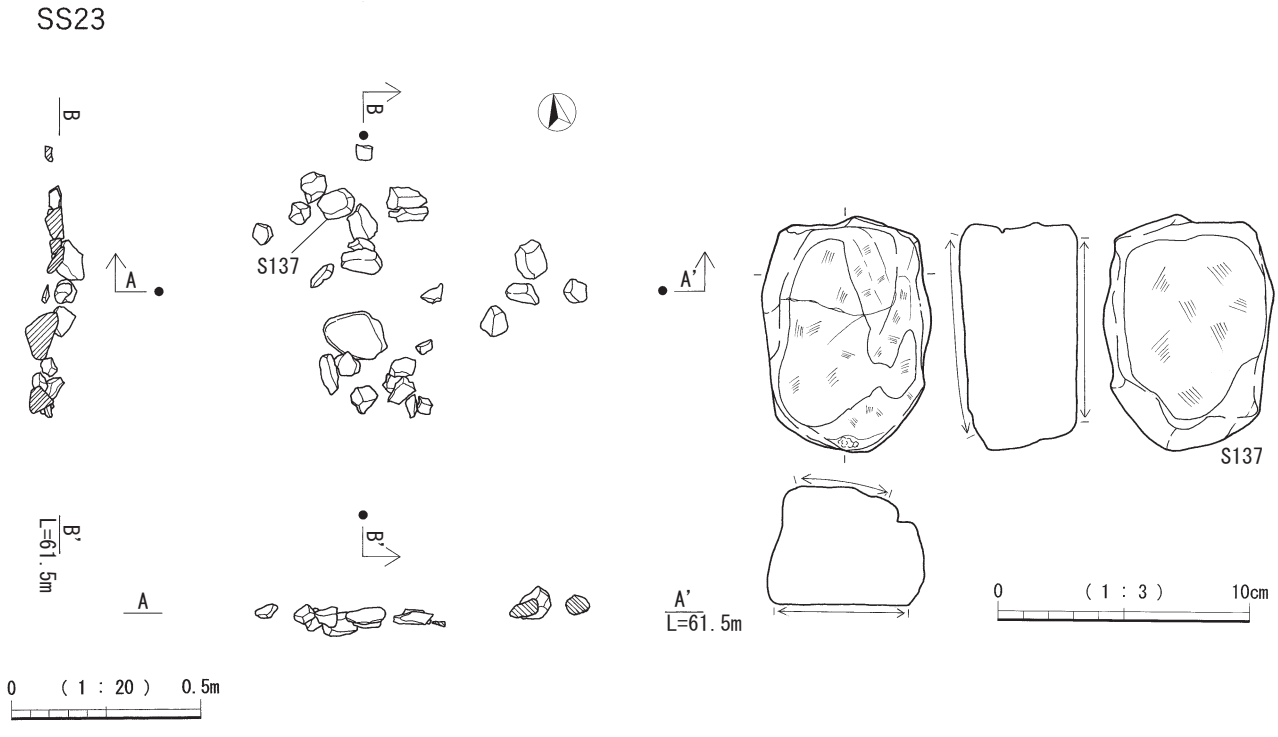
構成礫数は17個で，１個平均の重さが214gであった。礫は，長軸0.75m，短軸0.48mの範囲に広がっている。

出土遺物

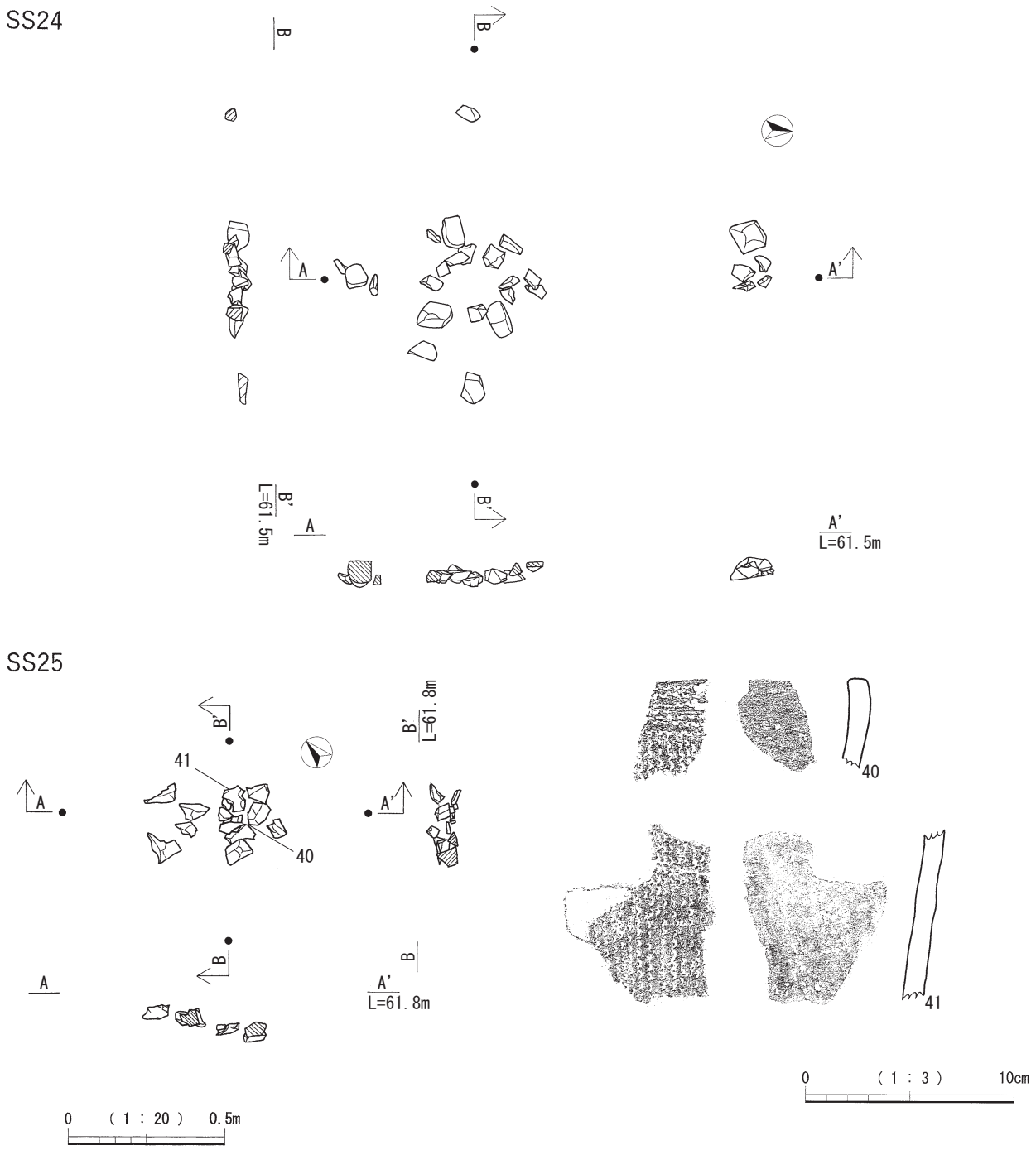
石器４点が出土した。S133はホルンフェルス製の磨製石斧の基部であり，厚みをもつ大型のタイプで，断面系に丸みがあるものである。本遺跡ではⅠ－a類に分類している。敲打により形を整えた痕跡を残す。S134～S136は安山岩製の磨敲石である。S134は不定形な楕円状で，S135は球状で下面をよく敲打している。S136は人為的に半裁している可能性のあるもので，使用頻度は少ないものと考えられる。

すべて被熱の痕跡は確認できない。





第103図　集石22号・出土遺物・集石23号・出土遺物



第104図　集石24号・集石25号・出土遺物

集石23号（第103図）

分　類：タイプⅡ

検出状況

SS23は，D－11区のⅦb層で検出された。礫のまとまりが２箇所あるが，密集はしていない。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規　模

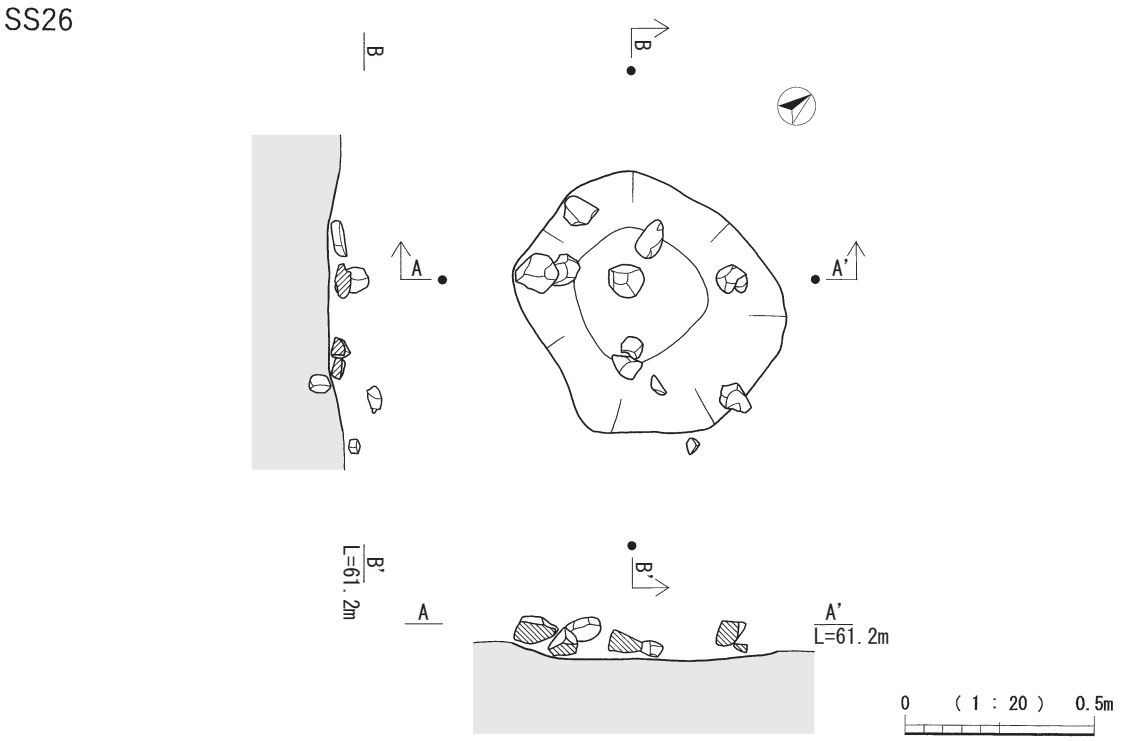
構成礫数は26個で，１個平均の重さが242gであった。礫は，長軸0.89m，短軸0.72mの範囲に広がる。

出土遺物

石器１点が出土した。S137は安山岩製で，正面・裏面に磨面を持つ石皿片であり風化が著しい。右側面は被熱により薄く変色する。

集石24号（第104図）

分　類：タイプⅠ



第105図　集石26号

検出状況

SS24は，D－12区のⅦa層で検出された。中央部に礫はなく，環状に配置した様相が窺える。礫の重なりもほとんどなく，散石タイプとした。礫は被熱しているが，焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。北側のひとかたまりも一連の集石として図化した。

規　模

構成礫数は27個で，１個平均の重さが202gであった。礫は，長軸1.39m，短軸0.94mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石25号（第104図）

分　類：タイプⅡ

検出状況

SS25は，E－13区のⅦa層上面で検出された。5cm大の角礫が集中している。被熱し赤みを帯びている。焼土痕等は検出されなかった。炭化物はごくわずかあるが，掘り込みはなし。

規　模

構成礫数は９個で，１個平均の重さが199gであった。礫は，長軸0.40m，短軸0.25mの範囲に広がる。

出土遺物

遺構内より土器２点が出土した。40・41は同一個体と思われる。口縁部は若干肥厚するとともにやや内湾する器形で，口縁部下には縦位の貝殻刺突文が密に施される。Ⅵｂ類に分類される。

集石26号（第105図）

分　類：タイプⅣ

検出状況

SS26は，B－14区のⅦb層掘り下げ中に発見された。礫は散石状態であるが，浅い掘り込みがある。全ての礫に被熱による赤変が明瞭に確認でき，礫も破砕している。周囲の土に炭化物，赤変の痕跡は確認できなかった。

規　模

構成礫数は12個で，１個平均の重さが338gであった。礫は，長軸0.71m，短軸0.68mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

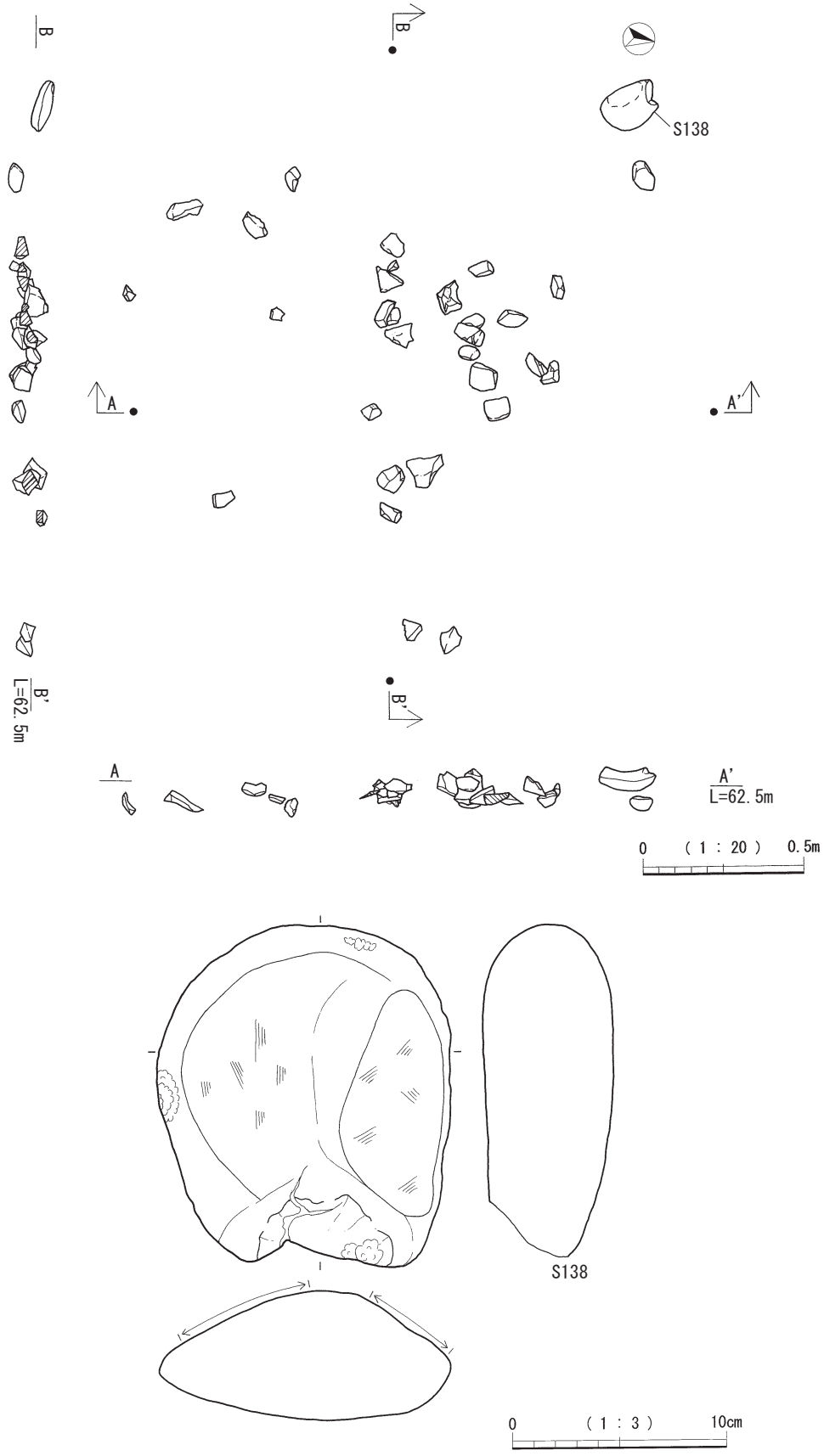
集石27号（第106図）

分　類：タイプⅠ

検出状況

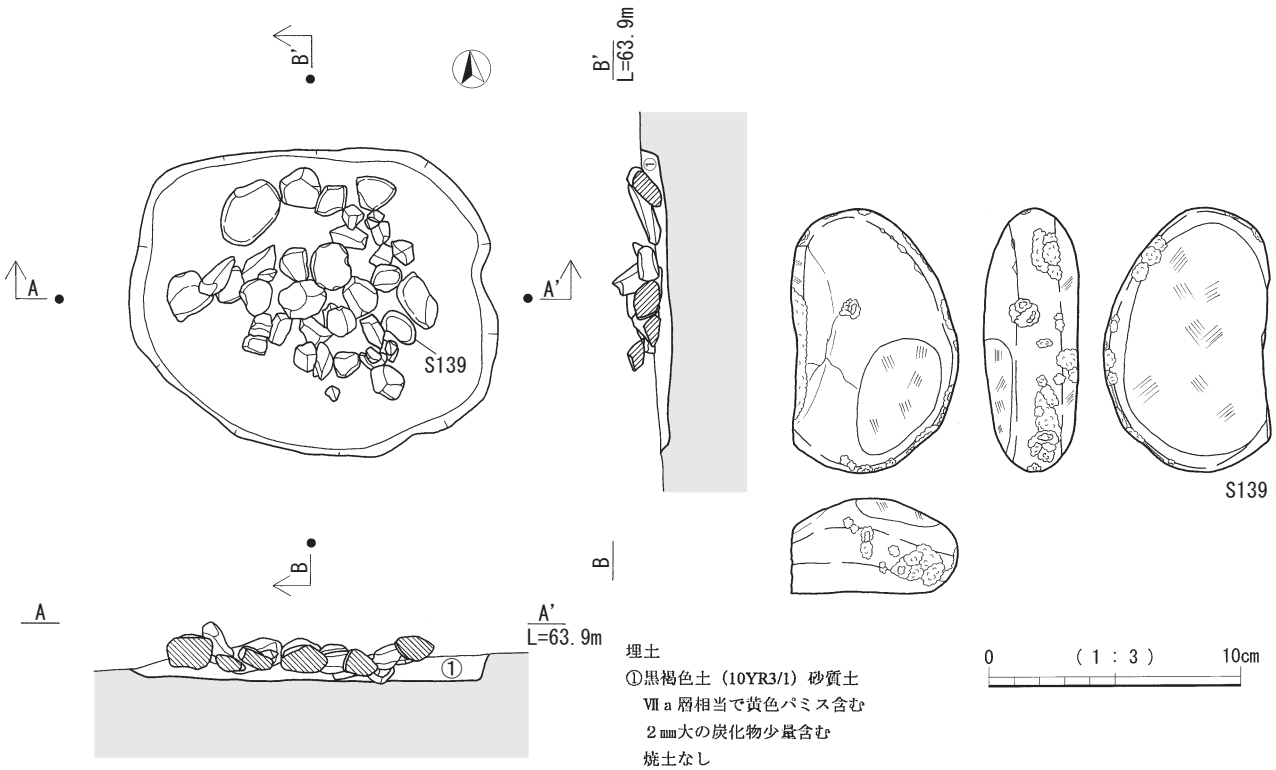
SS27は，E－15区のⅥ層掘り下げ後，Ⅶa層に入ったあたりで検出された。砂岩を中心に構成されており，ホルンフェルスを含めた堆積岩はすべて被熱し赤変している。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

SS27



第106図　集石27号・出土遺物

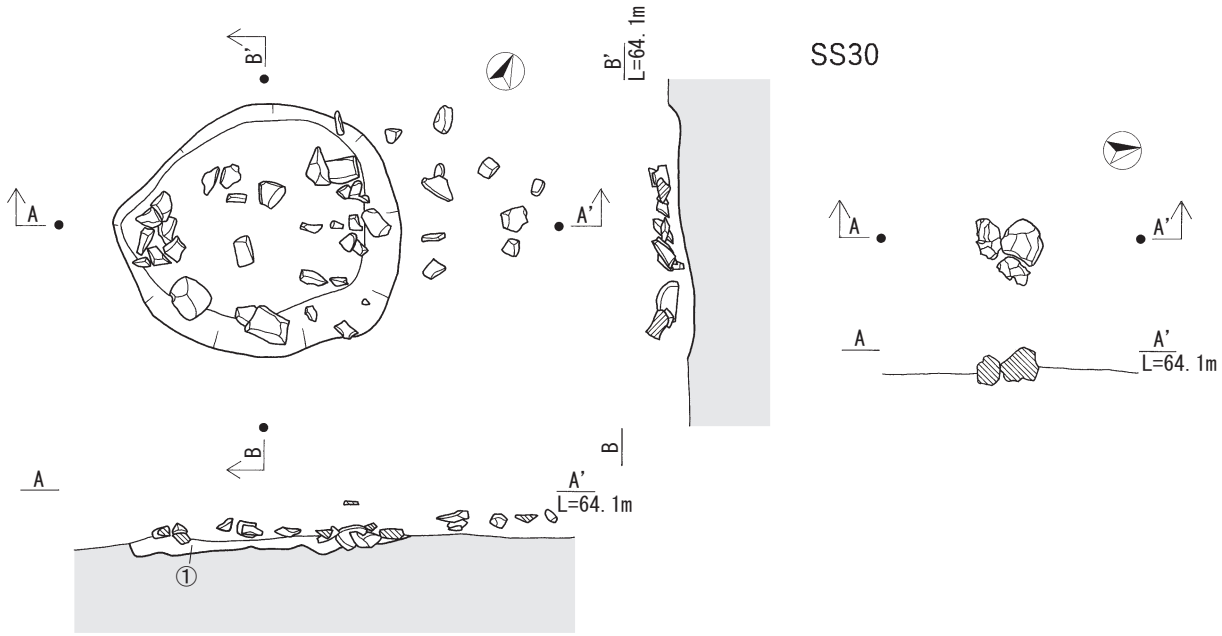
SS28



埋土
①黒褐色土（10YR3/1）砂質土
Ⅶa層相当で黄色パミス含む
2㎜大の炭化物少量含む
焼土なし

0 （1：3） 10cm

SS29

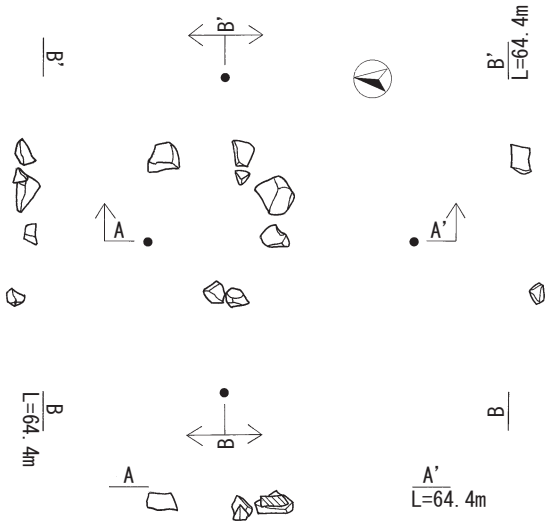


埋土
①黒褐色土（10YR3/2）
黄色パミスの硬質ブロック混ざる
炭化物片微量混ざる

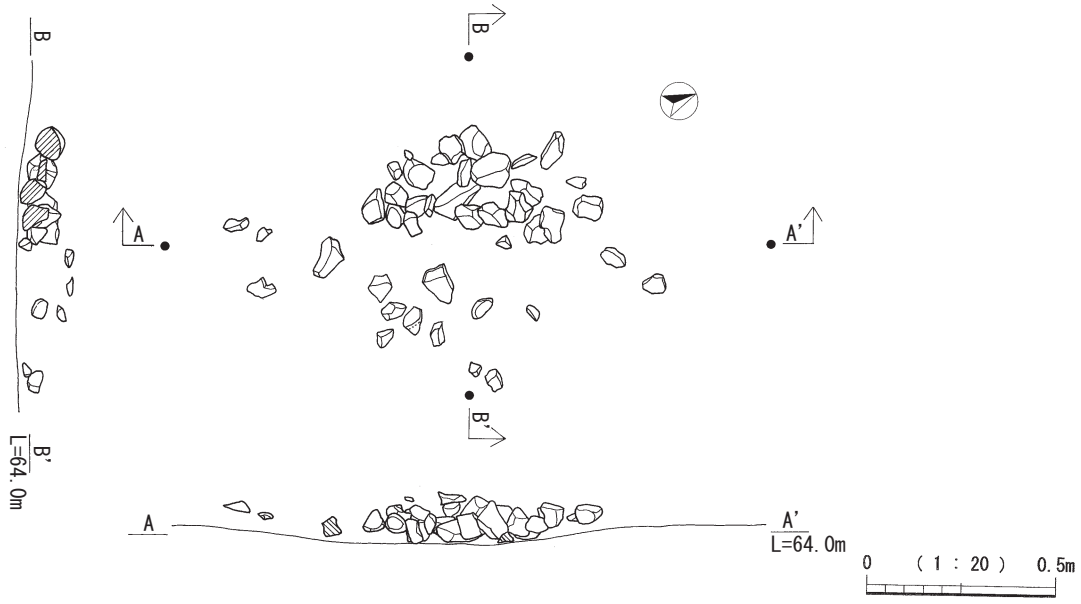
0 （1：20） 0.5m

第107図　集石28号・出土遺物・集石29号・集石30号

SS31



SS32



第108図　集石31号・集石32号

規　模

構成礫数は30個で，１個平均の重さが251gであった。礫は，長軸1.79m，短軸1.66mの範囲に広がる。

出土遺物

石器１点が出土した。S138は凝灰岩製で，大型の磨敲石である。下面には割口にも敲打痕を確認できる。風化が著しく判然とはしないが，下面は打ち掻いている可能性もある。裏面は自然面である。

集石28号（第107図）

分　類：タイプⅢ

検出状況

SS28は，Ｆ－31区のⅦb層で検出された。拳大の礫で構成され，浅い掘り込みがある。

埋土は黒褐色の砂質土（Ⅶ層相当）で，P13含む２㎜大の炭化物少量含む。焼土痕は検出されなかった。

規　模

構成礫数は41個で，１個平均の重さが373gであった。礫は，長軸0.72m，短軸0.62mの範囲に広がる。掘り込みの深さは約５cmである。

出土遺物

石器１点が出土した。S139は砂岩製の磨敲石で，不定型な楕円状の形状である。左側面の欠けは，敲打の繰り返しによる潰れである可能性が高い。正面・裏面・左側面は強く擦られている。薄く変色しており，被熱によるものと考えられる。

集石29号（第107図）

分　類：タイプⅣ

検出状況

SS29は，F－31区のⅦb層で検出された。砂岩を多く使用している。浅い掘り込みはあるが，礫は集中していない。埋土は黒褐色の砂質土で，P13の硬質ブロック混じる　炭化物片も微量に混じる。

規　模

構成礫数は39個で，１個平均の重さが123gであった。礫は，長軸1.09m，短軸0.63mの範囲に広がる。掘り込みの深さは約５cmである。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石30号（第107図）

分　類：タイプⅡ

検出状況

SS30は，F－31区のⅦb層で検出された。10cm程度の礫３個から成り，掘り込みはない。一番大きな礫が安山岩で，他は破砕したホルンフェルスである。被熱を受けた痕跡は見られない。礫は３個であるが，集中しているためタイプⅡとした。

規　模

構成礫数は3個で，１個平均の重さが677gであった。礫は，長軸0.18m，短軸0.18mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石31号（第108図）

分　類：タイプⅠ

検出状況

SS31は，G－32区のⅦa層で検出された。環状に配されたように見える調査区外へ広がっている可能性もある。壁際の土層断面からは掘り込みがあったように見える。平面プランはP13の集まりから想定した。

規　模

構成礫数は７個で，１個平均の重さが248gであった。礫は，長軸0.44m，短軸0.39mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石32号（第108図）

分　類：タイプⅡ

検出状況

SS32は，F－36区のⅦa層で検出された。拳大の礫が集中し，浅い掘り込みがあるようにも見えるが，はっきりしない。この集石の40m周辺に遺構がなく，単独で存在している。北側の調査区外に遺構がある可能性もある。

規　模

構成礫数は43個で，１個平均の重さが177gであった。礫は，長軸1.18m，短軸0.70mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

第15表　集石（Ⅶ層）一覧表（1）

挿図番号	遺構名	検出区	検出層	タイプ	長軸(m)	短軸(m)	堀込	構成礫の内容数（個）								一個あたりの重量(g)	備考
								総数	安山岩	砂岩	頁岩	花崗岩	凝灰岩	ホルンフェルス	軽石		
86	SS1	C･D－3	Ⅶ	Ⅱ	1.28	1.26	無	49	49	0	0	0	0	0	0	582	
87	SS2	G－3･4	Ⅶ	Ⅰ	1.00	0.52	無	25	2	0	15	0	8	0	0	476	
	SS3	C－4	Ⅶ	Ⅰ	0.78	0.41	無	11	—	—	—	—	—	—	—	91	
88	SS4	C･D－4	Ⅶ	Ⅰ	0.92	0.65	無	10	—	—	—	—	—	—	—	338	
89	SS5	E－4	Ⅶ	Ⅱ	0.62	0.56	無	25	24	1	0	0	0	0	0	383	
90	SS6	F－3･4	Ⅶ	Ⅰ	0.99	0.30	無	23	23	0	0	0	0	0	0	189	
	SS7	D－5	Ⅶ	Ⅰ	0.82	0.40	無	13	6	1	1	0	1	4	0	213	
91	SS8	E－5	Ⅶ	Ⅲ	0.89	0.85	有	145	—	—	—	—	—	—	—	48	
	SS9	E－5	Ⅶ	Ⅱ	1.29	0.93	無	56	51	4	0	0	0	0	1	56	
93	SS10	F－5	Ⅶ	Ⅱ	0.22	0.20	無	6	6	0	0	0	0	0	0	311	
94	SS11	E－6	Ⅶ	Ⅰ	0.87	0.58	無	13	13	0	0	0	0	0	0	417	
95	SS12	E－6	Ⅶ	Ⅱ	0.39	0.25	無	10	9	0	0	1	0	0	0	237	
96	SS13	E･F－6	Ⅶ	Ⅰ	1.83	1.57	無	33	—	—	—	—	—	—	—	213	
97	SS14	C－7	Ⅶ	Ⅱ	1.03	0.72	無	41	35	6	0	0	0	0	0	312	
	SS15	C－7	Ⅶ	Ⅰ	1.33	0.57	無	28	28	0	0	0	0	0	0	161	

第16表　集石（Ⅶ層）一覧表（2）

挿図番号	遺構名	検出区	検出層	タイプ	長軸(m)	短軸(m)	堀込	構成礫の内容数（個）								一個あたりの重量(g)	備考
								総数	安山岩	砂岩	頁岩	花崗岩	凝灰岩	ホルンフェルス	軽石		
98	SS16	C－7	Ⅶ	Ⅰ	0.69	0.65	無	10	—	—	—	—	—	—	—	81	
	SS17	C－8	Ⅶ	Ⅰ	1.16	0.95	無	67	—	—	—	—	—	—	—	149	
99	SS18	C－8	Ⅶ	Ⅰ	1.16	0.45	無	17	16	0	0	0	0	1	0	314	
100	SS19	F－8	Ⅶ	Ⅱ	0.88	0.52	無	20	0	0	0	0	0	20	0	390	
101	SS20	D－9	Ⅶa	Ⅰ	1.20	0.95	無	13	4	4	0	0	0	5	0	241	
102	SS21	E－9	Ⅶ	Ⅰ	1.35	0.85	無	44	44	0	0	0	0	0	0	147	
103	SS22	F－9	Ⅶ	Ⅱ	0.75	0.48	無	17	13	0	1	2	0	1	0	214	
	SS23	D－11	Ⅶb	Ⅱ	0.89	0.72	無	26	16	1	5	0	1	3	0	242	
104	SS24	D－12	Ⅶa	Ⅰ	1.39	0.94	無	27	4	21	0	0	2	0	0	202	
	SS25	E－13	Ⅶa	Ⅱ	0.40	0.25	無	9	4	4	0	0	0	1	0	199	
105	SS26	B－14	Ⅶb	Ⅳ	0.71	0.68	有	12	5	5	1	0	0	1	0	338	
106	SS27	E－15	Ⅶa	Ⅰ	1.79	1.66	無	30	2	25	0	0	1	2	0	251	
107	SS28	F－31	Ⅶb	Ⅲ	0.72	0.62	有	41	6	15	10	0	10	0	0	373	
	SS29	F－31	Ⅶb	Ⅳ	1.09	0.63	有	39	0	36	0	0	3	0	0	123	
	SS30	F－31	Ⅶb	Ⅱ	0.18	0.18	無	3	1	0	0	0	0	2	0	677	
108	SS31	G－32	Ⅶa	Ⅰ	0.44	0.39	無	7	3	0	3	0	1	0	0	248	
	SS32	F－36	Ⅶa	Ⅱ	1.18	0.70	無	43	29	6	8	0	0	0	0	177	

第17表　土器観察表（集石Ⅶ層出土）

挿図番号	掲載番号	器種	部位	類別	出土区	層位	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
96	39	深鉢	胴	Ⅴ	E·F－6	SS13	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	7.5YR4/2灰褐	○	△	△		良好	
104	40	深鉢	口縁	Ⅵb	E－13	SS25	貝殻刺突	ナデ	7.5YR3/2黒褐	7.5YR4/3褐	△	○	△	金雲母	良好	20983
	41	深鉢	胴	Ⅵb	E－13	SS25	貝殻刺突	ナデ	10YR4/3にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	○	△	△	金雲母	良好	20586

第18表　石器観察表（集石Ⅶ層出土）

挿図番号	掲載番号	遺構	取上番号	出土区	層	器種	分類	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	備考
86	S110	SS1	SS1－17	C·D3	Ⅶ	磨敲石	－	125.0	89.0	83.0	700.00	凝灰岩	－	
	S111	SS1	SS1－20·21	C·D3	Ⅶ	石皿	－	141.0	81.0	85.0	871.50	凝灰岩	－	
	S112	SS1	SS1－18	C·D3	Ⅶ	磨敲石	－	132.0	115.0	72.0	1455.50	安山岩	安山岩B	
88	S113	SS4	SS4－4	C4	Ⅶ	磨敲石	－	90.0	67.0	58.0	464.10	安山岩	安山岩B	
	S114	SS4	SS4－2	C4	Ⅶ	磨敲石	－	110.0	86.0	64.0	790.50	安山岩	安山岩B	
	S115	SS4	SS4－1	C4	Ⅶ	磨敲石	－	124.0	97.0	50.0	681.00	安山岩	安山岩B	
	S116	SS4	SS4－9	C4	Ⅶ	磨敲石	－	44.0	69.0	61.0	200.00	安山岩	安山岩B	
89	S117	SS5	SS5－10	E6	Ⅷ	磨敲石	－	132.0	87.0	42.0	608.00	ホルンフェルス	－	
92	S118	SS9	SS8－46	E5	Ⅶ	二次加工・使用痕剥片	－	76.0	58.0	26.0	102.80	ホルンフェルス	－	磨石転用品
	S119	SS9	SS8－53	E5	Ⅶ	磨敲石	－	124.0	59.0	12.0	186.60	ホルンフェルス	－	異形
93	S120	SS10	SS6－6	F5	Ⅶ	二次加工・使用痕剥片	－	55.0	36.0	15.0	26.80	ホルンフェルス	－	
95	S121	SS12	SS12－1	E6	Ⅶ	礫器	－	76.0	57.0	42.0	203.40	ホルンフェルス	－	
	S122	SS12	SS12－2	E6	Ⅶ	磨石	－	76.0	61.0	49.0	174.70	安山岩	安山岩B	
	S123	SS12	SS12－8	E6	Ⅶ	磨敲石	－	68.0	52.0	49.0	207.70	安山岩	安山岩B	
	S124	SS12	SS12－4	E6	Ⅶ	磨敲石	－	94.0	51.0	59.0	268.00	安山岩	安山岩B	
96	S125	SS13	SS13－28	E·F6	Ⅶ	磨敲石	－	91.0	87.0	31.0	317.00	安山岩	安山岩B	
	S126	SS13	SS13－24	E·F6	Ⅶ	磨石	－	66.0	50.0	57.0	129.60	安山岩	安山岩B	
	S127	SS13	SS13－19	E·F6	Ⅶ	磨敲石	－	65.0	67.0	45.0	252.90	安山岩	安山岩B	
99	S128	SS18	SS18－4	C8	Ⅶ	磨石	－	71.0	45.0	47.0	230.60	ホルンフェルス	－	
	S129	SS18	SS18－7	C8	Ⅶ	磨敲石	－	84.0	62.0	49.0	292.00	安山岩	安山岩B	
	S130	SS18	SS18－8	C8	Ⅶ	磨敲石	－	121.0	108.0	55.0	893.50	安山岩	安山岩B	
	S131	SS18	SS18－15	C8	Ⅶ	磨敲石	－	75.0	110.0	43.0	512.50	安山岩	安山岩B	
101	S132	SS20	SS20－4	D9	Ⅶa	磨敲石	－	62.0	50.0	48.0	201.50	砂岩	－	
103	S133	SS22	SS22－23	F9	Ⅶ	磨製石斧	I-a	68.5	46.5	35.5	118.60	ホルンフェルス	－	基部
	S134	SS22	SS22－24	F9	Ⅶ	磨敲石	－	85.0	70.0	52.0	419.50	安山岩	安山岩B	
	S135	SS22	SS22－18	F9	Ⅶ	磨敲石	－	75.0	71.0	65.0	45.60	安山岩	安山岩B	
	S136	SS22	SS22－22	F9	Ⅶ	磨敲石	－	45.0	52.0	30.0	99.90	安山岩	安山岩B	
	S137	SS23	25115	D11	Ⅶb	石皿	－	93.0	67.0	47.0	512.00	安山岩	安山岩B	
106	S138	SS27	19750	E15	Ⅶa	磨敲石	－	152.0	135.0	59.0	1765.00	凝灰岩	－	
107	S139	SS28	105227	F31	Ⅶb	磨敲石	－	104.0	65.0	38.0	374.50	砂岩	－	

（５）石器集積（第109・110図）

磨敲石器等の石器が集まっている遺構を石器集積として取り扱った。被熱したような石器もあり，礫も混ざっているため集石として使用された可能性もあるが，ここでは石器集積とし掲載した。

石器集積は，調査区西端部の崖から内陸部に約70～80mの位置のⅦ層から，２基が検出された。このエリアでは，調査区の北側に竪穴建物跡や，土坑・集石などが集中して検出されている。石器集積１号は土坑が集中する位置で，石器集積２号は竪穴建物跡に囲まれた位置で，それぞれ検出された。

石器集積１号（第109図）

Ｆ－７区Ⅶ層で検出した。西から東に向かって緩やかに傾斜する場所に位置する。周辺ではSK11・SK13などが検出されている。４個の磨敲石が密集して出土した。そのうち３点を図化した。

S140 は凝灰岩製の小型の棒状の磨敲石である。上面・下面ともによく使用されている。

S141 はホルンフェルス製の敲石である。上面・下面ともに打ち掻いて成形した後に，敲打具として頻用したものと推測できる。

S142 は砂岩製の磨敲石片である。本来は円形であったものと思われる。人為的に割っている可能性もある。

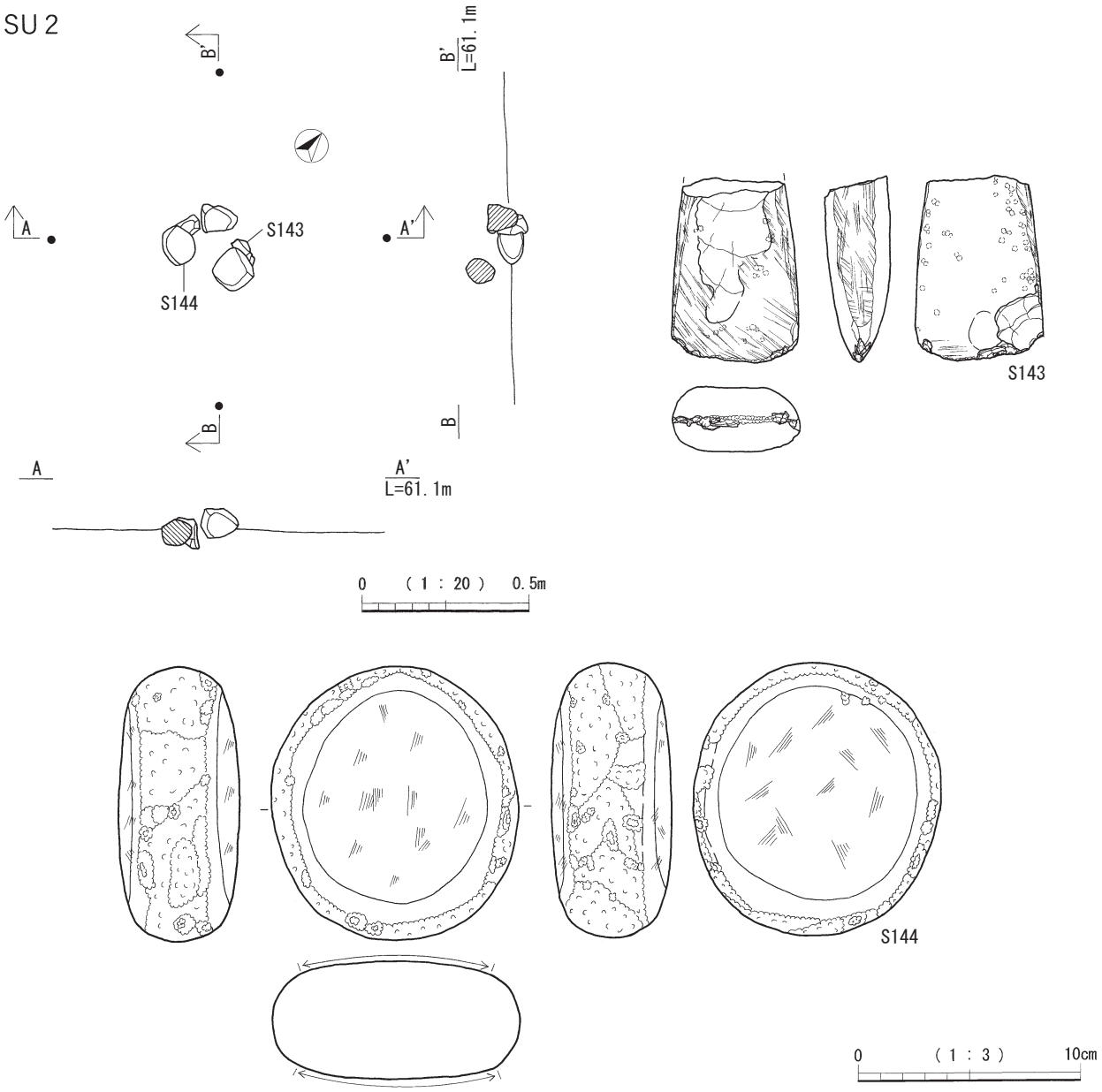
３点ともに被熱の痕跡はみられない。

石器集積２号（第110図）

Ｆ－９区Ⅶ層で検出された。周辺にはSH21・22・25・26が検出されている。石器を含む礫５個が密集して出土した。周囲の礫の出土状況とは明らかに異なったことか



第109図　石器集積１号・出土遺物



第110図　石器集積２号・出土遺物

ら石器集積として掲載した。遺物は石斧が１点と磨敲石が２点であり，そのうち２点を図化した。

S143 はホルンフェルス製の磨製石斧（断面形が定角：本遺跡ではⅠ－ｂ類として分類）の両刃の刃部である。

S144は砂岩製の石鹸形の形状の磨敲石である。被熱による赤化が確認できる。薄く煤が付着する。

第19表　石器観察表（石器集積Ⅶ層出土）

挿図番号	掲載番号	遺構番号	取上番号	出土区	層	器種	分類	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	備考
109	S140	SU－1	IBS22－1	F8	Ⅶ	磨敲石	－	90.0	65.0	62.0	394.00	凝灰岩	－	－
	S141	SU－1	IBS22－2	F7	Ⅶ	敲石	－	97.5	75.0	86.5	974.00	ホルンフェルス	－	－
	S142	SU－1	IBS22－3	F7	Ⅶ	磨敲石	－	105.0	48.0	62.0	267.90	砂岩	－	－
110	S143	SU－2	IBS23－2	F10	－	磨製石斧	I-b	82.5	57.0	29.0	217.00	ホルンフェルス	－	－
	S144	SU－2	IBS23－5	F9	－	磨敲石	－	122.0	110.0	54.0	1103.00	砂岩	－	－

３　Ⅶ層の遺物

（１）土器（第111 ～ 143図）

小牧遺跡Ⅶ・Ⅷ層出土の縄文早期土器は，Ⅵ類が最も多く，次いでⅢ類土器が多い。Ⅷ層は薩摩火山灰層なので，Ⅷ層出土の遺物は原位置を留めていない可能性が大である。Ⅶ層からは，同型式の土器が大量に出土するという傾向にはなく，出土量は少ないが，多くの型式の土器が出土した。

Ⅰ類からⅨ類がⅦ層・Ⅷ層出土の土器である。

Ⅰ類土器（第112図42 ～ 44）

Ⅰ類土器は，平底の底部から口縁部に向かいやや外傾する深鉢形を基本とする。口唇端部には貝殻殻頂部による押圧文ないしヘラ状工具によるキザミを施す。胴部はナデ調整が施される土器である。

42は，口唇外面端部に貝殻殻頂部を押圧し，外面が高く，内面が低くなるように整形されている。断面は片刃石斧状の三角形を呈する。口縁部には貝殻刺突文を３条巡らせ，胴部は入念にナデて仕上げている。内面は縦位ないし斜位の貝殻条痕文がわずかに確認できる。

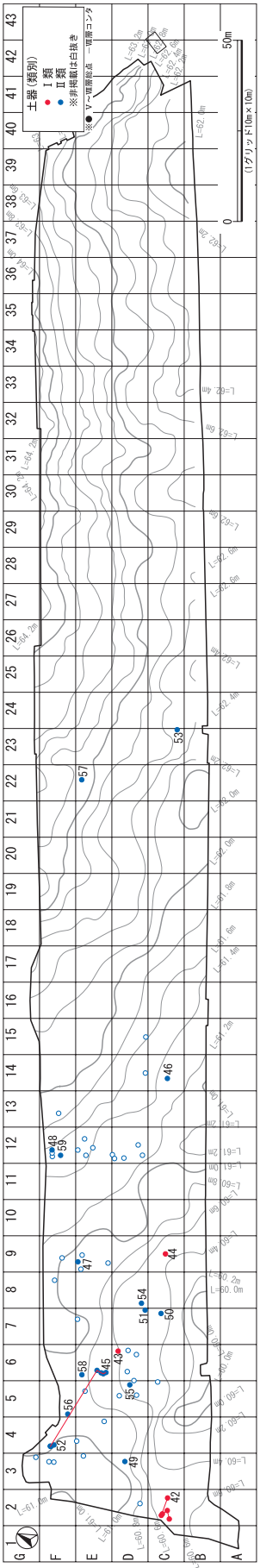
43はやや外傾する深鉢形の口縁部で，口唇外部にはヘラ状工具によるキザミを施す。口縁部には１条の沈線を施し，内外面ともに丁寧にナデ調整されている。器形及び器面調整からここに分類した。

44は42の底部と思われる。接地面は丁寧にナデて仕上げている。内面は剥落している。

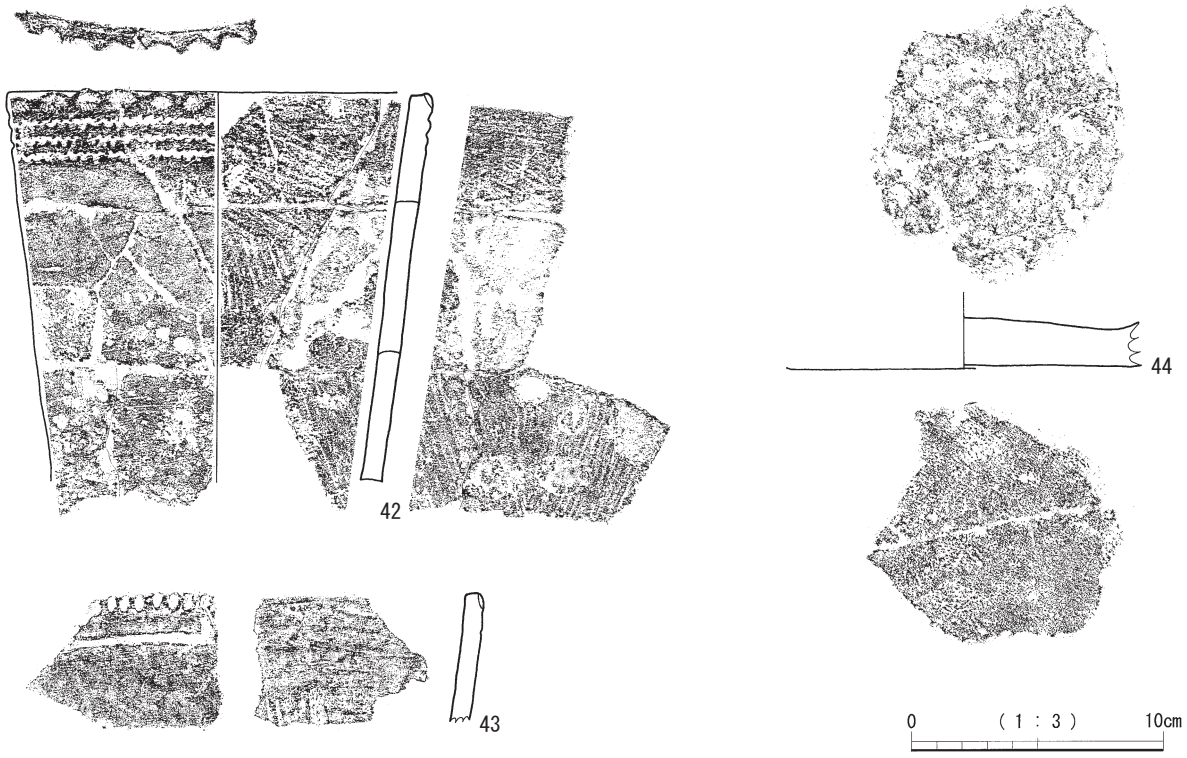
Ⅱ類土器（第113図45 ～ 59）

平底の底部から口縁部に向かい緩やかに外傾する深鉢形の器形で，外面の口縁部上端や，口縁部上端から口唇部にかけて貝殻やヘラ状工具を用いて刺突文を施す。その下位に底部付近まで斜位や横位の貝殻腹縁を用いた貝殻条痕の調整が施される。内面は貝殻条痕調整や，ヘラ状工具によるナデ調整などが施される。

45 ～ 52は口縁部である。45は，若干口縁部文様帯を肥厚させ，丸みを帯びた口唇部外端にヘラ状工具によるキザミを巡らせる。その下位に斜位の貝殻条痕調整が施されている。内面は貝殻条痕調整後ナデ調整が施されている。46は，口縁部上端に縦位の棒状工具による押圧文を巡らせる。その下位に横位の貝殻条痕調整が施される。内面はナデ調整が施されている。47も同様であるが，内面にヘラ状工具痕が認められる。48は，口唇部にキザミが施され，その下位に横位の貝殻条痕文が施されている。49は，口唇部外端にヘラ状工具によるキザミを施し，口唇部が断面三角形状を呈する。その下位に横位の貝殻条痕文を施す。51は，口縁部付近を若干肥厚させている。口縁部外端には貝殻腹縁の押圧文が施され，その下位に横位の貝殻条痕文が巡る。52は，口唇部外端に貝殻によ



第111図　Ⅰ・Ⅱ類土器分布図



第112図　Ⅰ類土器

るキザミを施し，下位に横位の貝殻条痕文を６条施す。その下位には，２条の横位貝殻刺突文が確認出来る。

53 ～ 57は胴部である。横位ないし斜位の貝殻条痕調整が施されている。

58と59は，底部である。58は底部からの立ち上がりに縦のキザミが施されている。

Ⅲ類土器（第116 ～ 122図）

Ⅲ類土器は，平底の底部から口縁部に向かいやや外傾する深鉢形や円筒形，レモン形を呈するものがある。口縁部下に楔形貼付突帯を施すものもある。胴部全面には貝殻刺突文を施す。

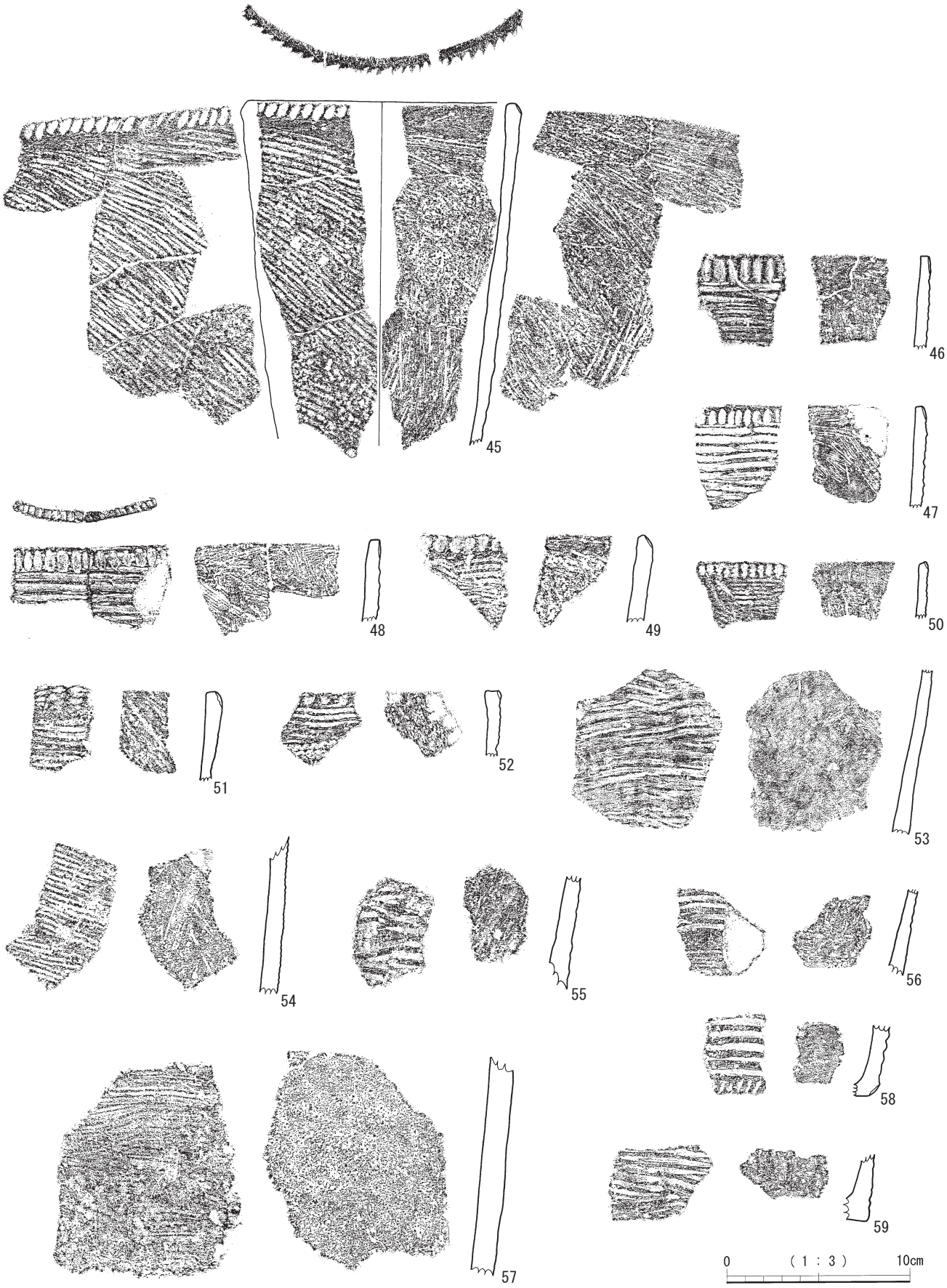
Ⅲa類土器（第116図60 ～ 70）

Ⅲa類土器は，二重施文を施す。横位の貝殻条痕文の上から縦位ないし斜位に貝殻刺突文を施し，胴部文様が構成される。

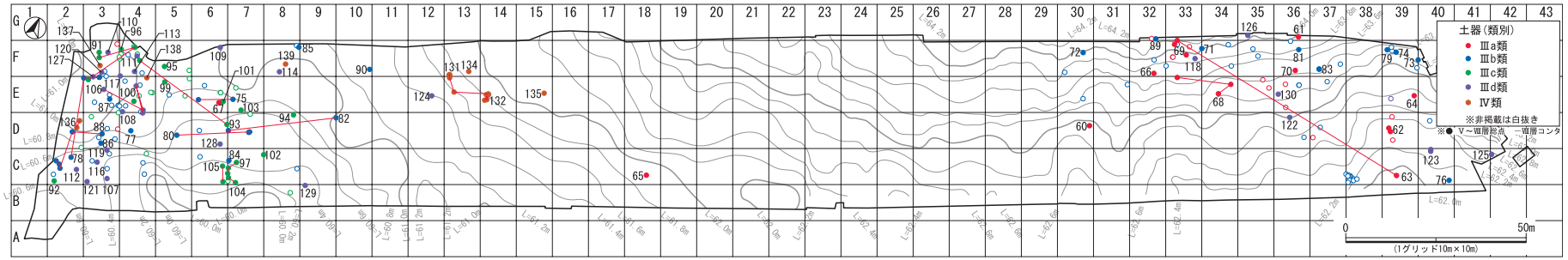
60は，口唇部にキザミを施し，口縁部に横位の貝殻刺突を３条巡らす。その下位に楔形貼付突帯を施す。土器内面に赤色顔料を施したような痕跡が確認出来るが，塗布したものか，胎土自体の赤色物質かの区別は，分析の結果はっきりしなかった。61 ～ 70は胴部である。61は，口縁部に近い胴部で，楔形貼付突帯を施す。斜位の貝殻条痕文の上から縦位の貝殻刺突を行う。全体的に赤みがかっている。63は，横位の貝殻条痕文の上から縦位の貝殻刺突文を施す。60同様に赤色顔料のような痕跡が確認できる。64は他の土器に比べ器壁が厚く，横位の貝殻条痕文が鮮明である。68は斜位の貝殻条痕文がわずかに確認出来る。69・70は，縦位の貝殻刺突文を密に施すⅢb類と類似しているが，横位の貝殻条痕文がわずかに確認できるため，ここに掲載した。器壁が共に薄い土器である。

第20表　土器観察表（Ⅰ類）

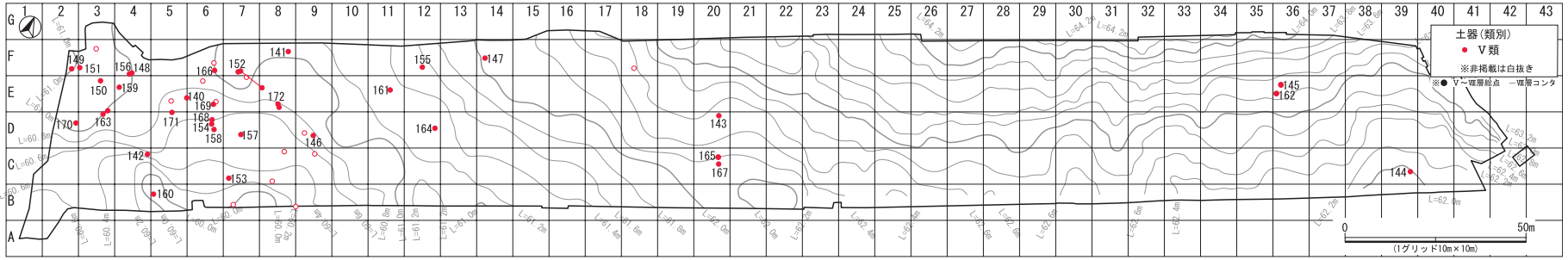
挿図番号	掲載番号	器種	部位	類別	出土区	層位	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
112	42	深鉢	口縁	Ⅰ	C2	Ⅶ	貝殻刺突，ナデ	貝殻条痕	2.5Y7/3浅黄	2.5Y6/3にぶい黄	○	○	○	金雲母	良好	52234，52405 52233，52204 52404，52201
	43	深鉢	口縁	Ⅰ	D6	Ⅶ	キザミ，沈線	ナデ	5YR6/6橙	10YR5/4にぶい黄褐	○	○		金雲母	良好	51930
	44	深鉢	底	Ⅰ	C9	Ⅶ	ナデ	－	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄	○	○	○		良好	53824



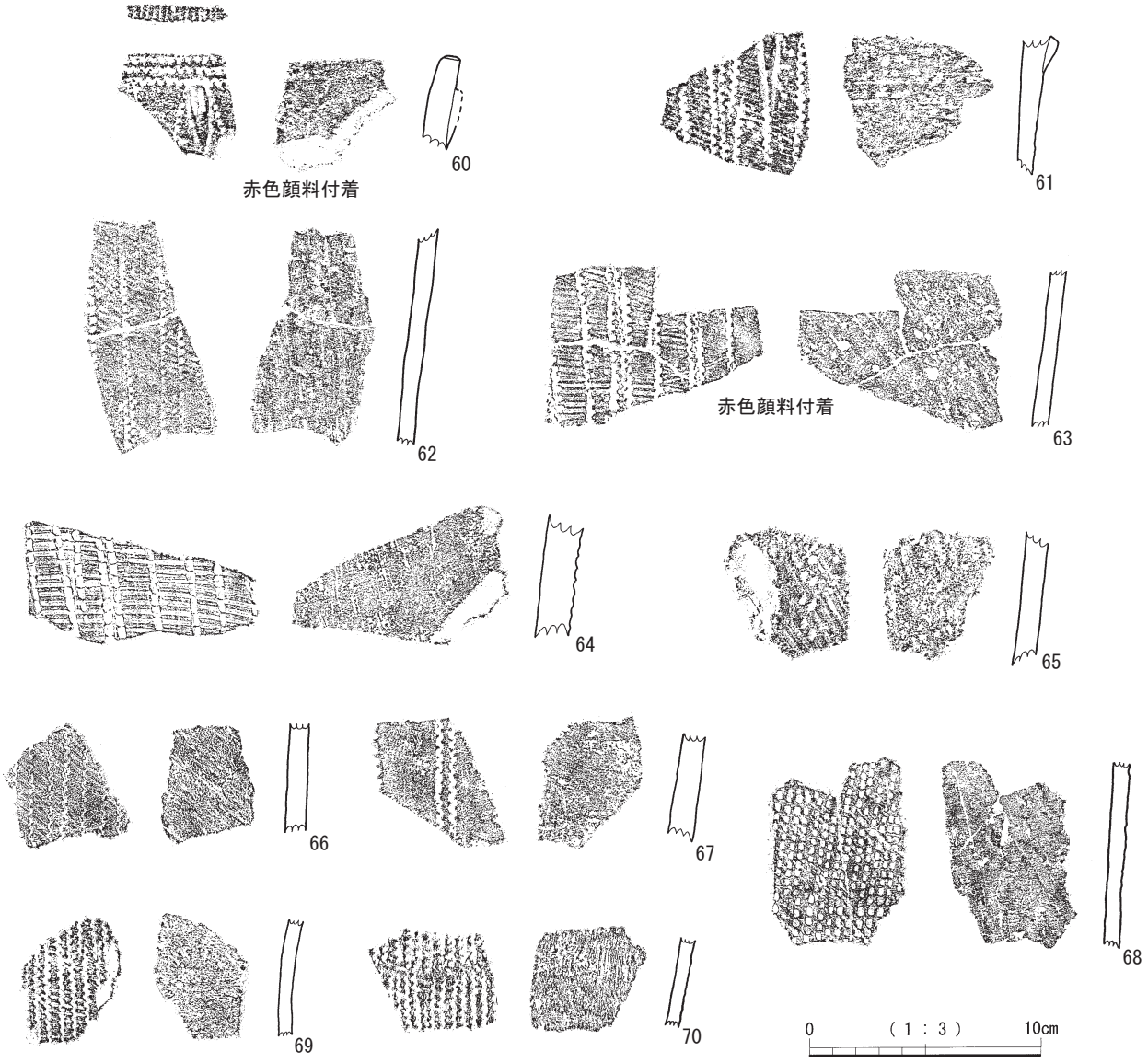
第113図　Ⅱ類土器



第114図　Ⅲ・Ⅳ類土器分布図



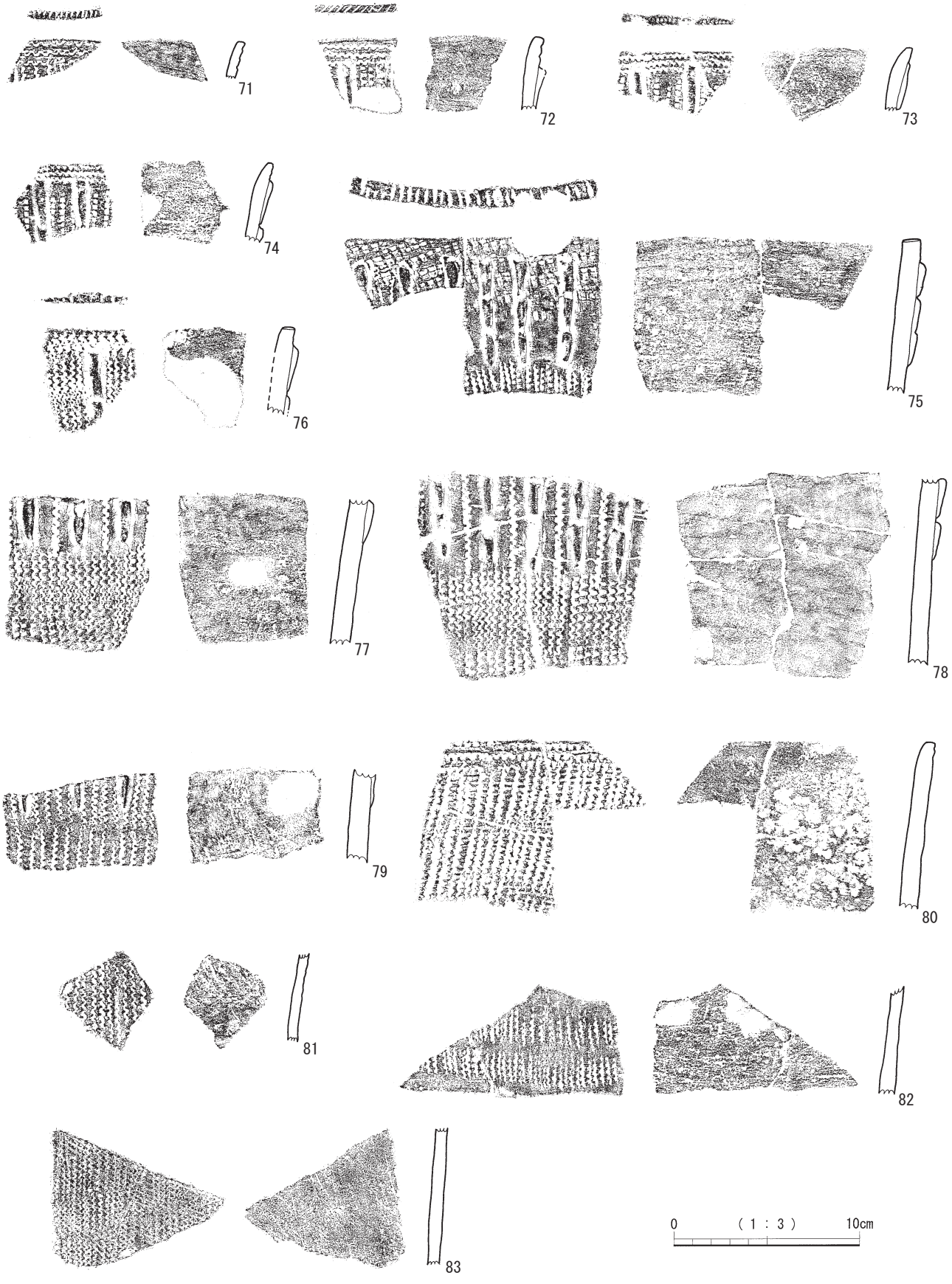
第115図　V類土器分布図



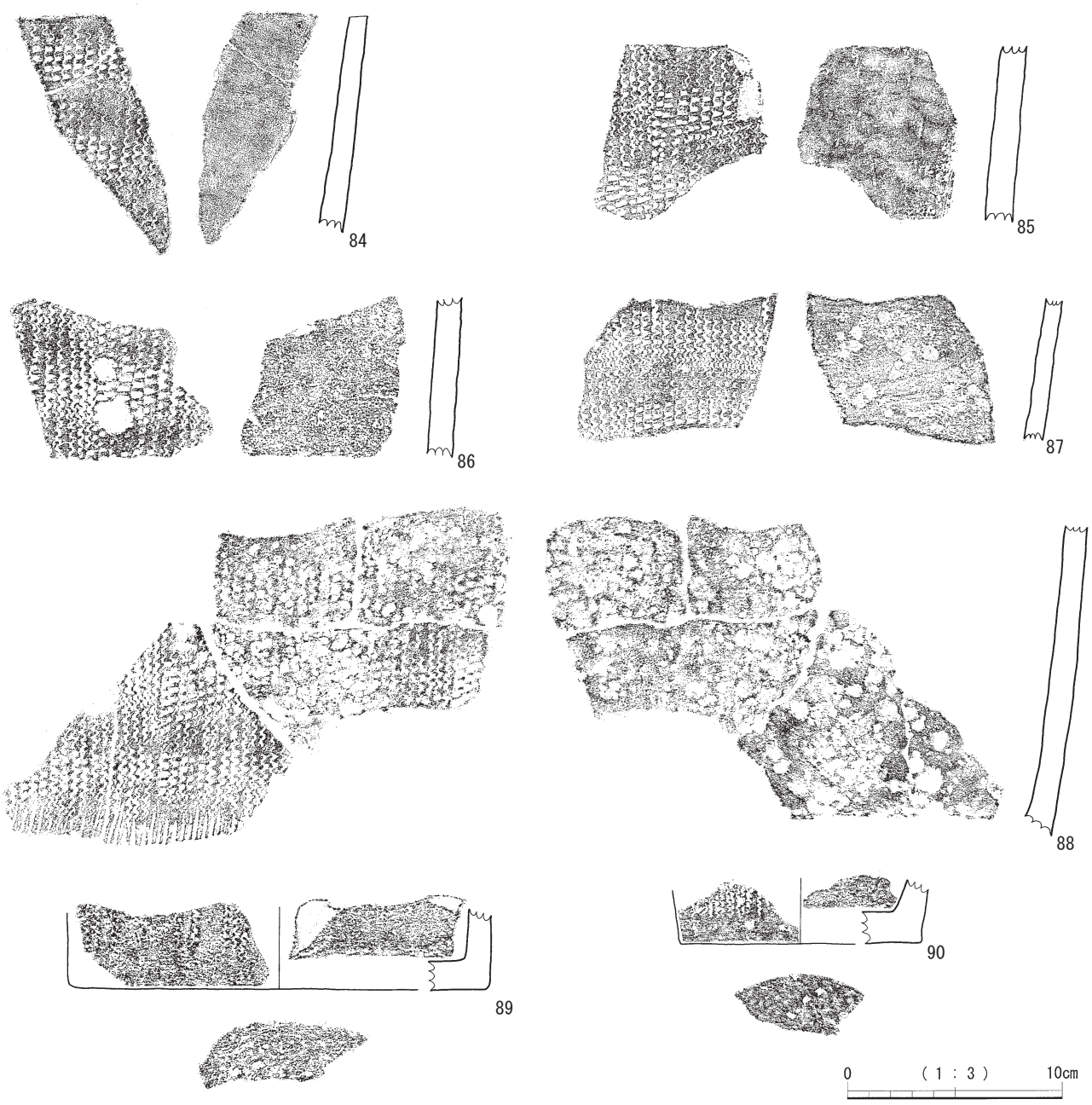
第116図　Ⅲa類土器

第21表　土器観察表（Ⅱ類）

挿図番号	掲載番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
113	45	深鉢	口縁	Ⅱ	F4 E6	Ⅶ	貝殻条痕，キザミ	貝殻条痕，ナデ	5YR6/6橙	10YR8/4浅黄橙	◎	○	○		良好	53106，52843，52842 53220，52880，52305 52307
	46	深鉢	口縁	Ⅱ	C14	Ⅵ	貝殻条痕，押圧文	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	○	△	○		良好	19287
	47	深鉢	口縁	Ⅱ	E9	Ⅵ	貝殻条痕，押圧文	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR5/4にぶい褐	○	△	○		良好	48893
	48	深鉢	口縁	Ⅱ	F12	Ⅳa	貝殻条痕，キザミ	工具ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	○	△	○		良好	23914
	49	深鉢	口縁	Ⅱ	D3	Ⅵ	貝殻条痕，キザミ	工具ナデ	10YR6/6明黄褐	10YR6/3にぶい黄橙	○			金雲母，白粒	良好	51538
	50	深鉢	口縁	Ⅱ	C7	Ⅳb	貝殻条痕，押圧文	ナデ	5YR5/6明赤褐	7.5YR5/4にぶい褐	○	△	○		良好	48240
	51	深鉢	口縁	Ⅱ	D7	Ⅶ	貝殻条痕，押圧文	工具ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR5/4にぶい褐	○	△	◎		良好	53699
	52	深鉢	口縁	Ⅱ	F4	Ⅶ	貝殻条痕，貝殻刺突	ナデ	2.5YR8/2灰白	10YR7/4にぶい黄橙		△	○		良好	52850
	53	深鉢	胴	Ⅱ	C23	Ⅵ	貝殻条痕	ナデ	7.5YR7/6橙	7.5YR6/6橙	○	△	○		良好	56456
	54	深鉢	胴	Ⅱ	D8	Ⅵ	貝殻条痕	工具ナデ	5YR6/6橙	7.5YR4/4褐	○	△	○		良好	53704
	55	深鉢	胴	Ⅱ	D5	Ⅶ	貝殻条痕	工具ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	10YR7/4にぶい黄橙	◎				良好	52548
	56	深鉢	胴	Ⅱ	F6	Ⅳb	貝殻条痕	工具ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	△	○	○	金雲母，白粒	良好	45525
	57	深鉢	胴	Ⅱ	E22	Ⅵ	貝殻条痕	ナデ	7.5YR6/6橙	10YR6/4にぶい黄橙	○	○	◎		良好	20055
	58	深鉢	底	Ⅱ	E6	Ⅳb	貝殻条痕	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR6/4にぶい黄橙	△			金雲母，白粒	良好	47493
	59	深鉢	底	Ⅱ	F12	Ⅳb	貝殻条痕	工具ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	7.5YR6/6橙	○	○			良好	14299



第117図　Ⅲb類土器（1）

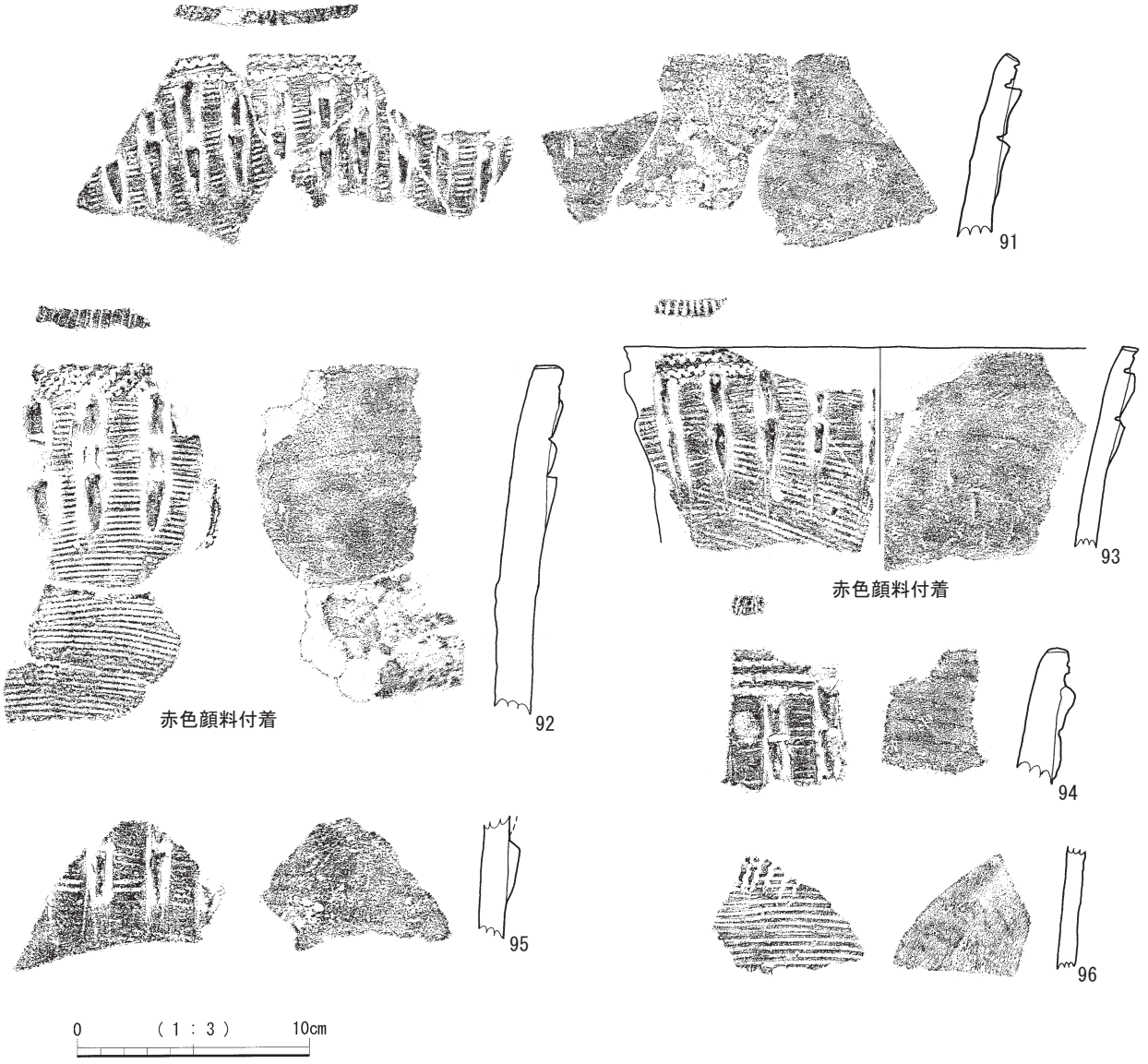


第118図　Ⅲb類土器（2）

Ⅲｂ類土器（第117・118図71 ～ 90）

Ⅲｂ類は，縦位の貝殻刺突文を全面に密に施す。口縁部に横位の貝殻刺突文を２ないし３条巡らし，その下位に縦位の貝殻刺突文を施す。

71 ～ 76は楔形貼付突帯を施す土器の口縁部である。71は口縁部で口唇部にキザミを施し，口縁部に横位の貝殻刺突文を３条巡らす。その下に縦位の貝殻刺突文を施す。楔形貼付突帯はかろうじて確認することができる。内面は丁寧なナデ仕上げがなされている。75はバケツ状の器形を呈し，平坦な口唇部にヘラ状工具によるキザミを施す。口縁部下に横位の貝殻刺突文を施した後，楔形貼付突帯を３列巡らしている。楔形貼付突帯は，稜を形成するため，ヘラ状工具により押し切って形を整えている。その下には縦位の貝殻刺突文を密に施す。77 ～ 79は楔形貼付突帯を施す口縁部付近の土器である。80は楔形貼付突帯を有しない土器である。口唇部は平坦面で，キザミを施さない。口縁部下には横位の貝殻刺突文を２条巡らせ，その下位に縦位の貝殻刺突文を密に施す。内面はナデ調整されているが，表面の剥落が著しい。81から88は胴部である。縦位の貝殻刺突文が密に施されてい



第119図　Ⅲc類土器（1）

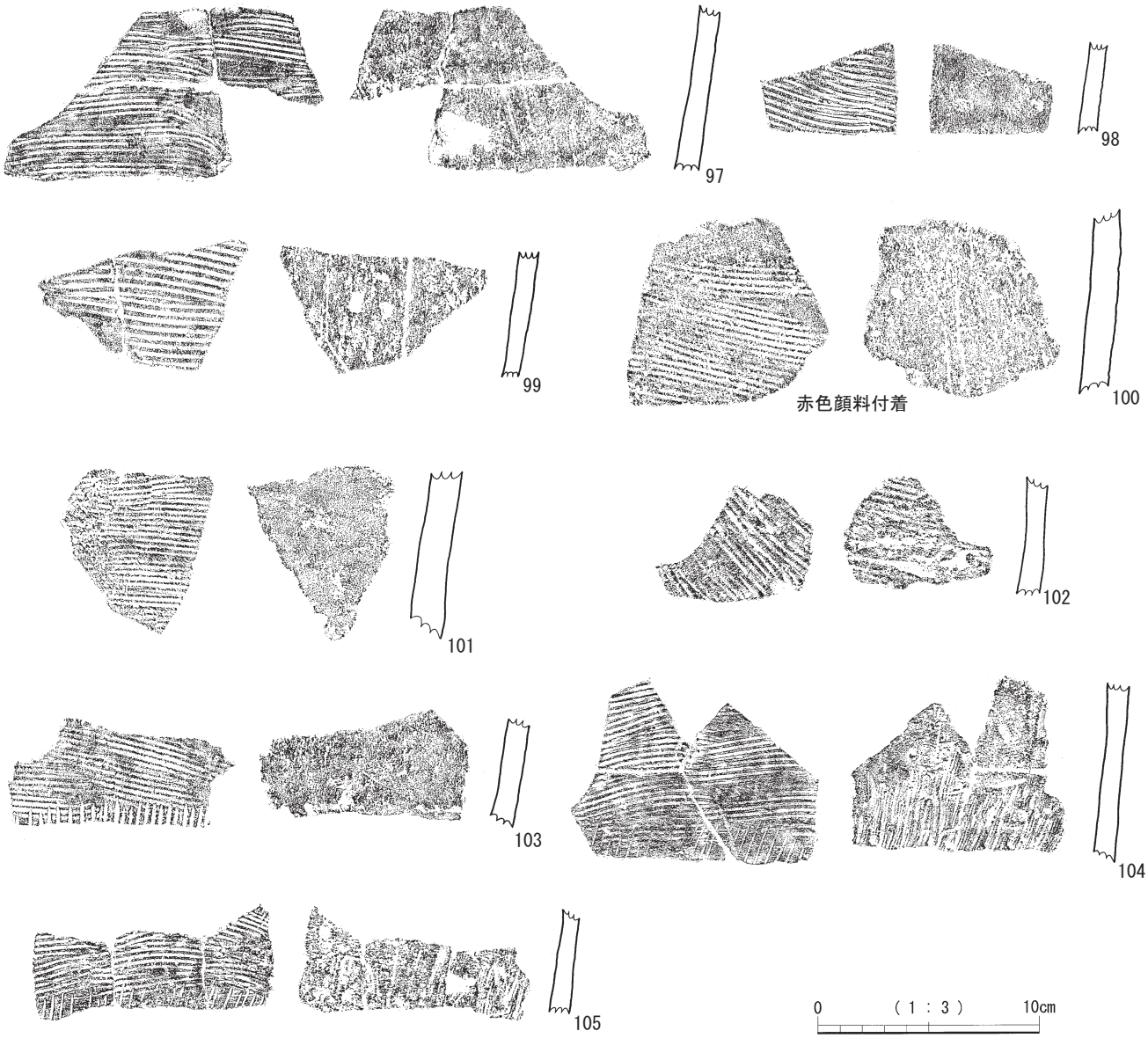
る。85はⅣ類土器に近いが，明確な横方向の押引文になっていないため，このグループに入れた。89・90は底部である。89は底部からほぼ垂直に立ち上がる。底部近くまで縦位の貝殻刺突文が確認出来る。90は，平底の底部で内外面ともに丁寧にナデ調整されている。胴部下位には，縦位の貝殻刺突文を密に施す。

Ⅲｃ類土器（第119・120図91 ～ 105）

Ⅲｃ類は，胴部に貝殻刺突文を施さない土器である。91 ～ 94は口縁部である。バケツ状の器形を成し，平坦な口唇部にはキザミを施す。口縁部には横位の貝殻刺突文を２ないし３条施し，その下位に横位の貝殻条痕文を施す。その上から厚みのある楔形貼付突帯を２列貼り付けている。内面は丁寧にナデ調整されている。92は，口縁部に斜位の貝殻刺突文を巡らし，その下位に横位の貝殻条痕文を施している。横位の貝殻条痕文の上から棒状に近い楔形貼付突帯を３列貼り付けている。棒状楔形貼付突帯は，全体的に形や長さが不規則で作りが雑である。土器内外面にうっすらと赤色顔料を塗ったような痕跡が認められるが，60同様の分析結果である。

93は，やや外傾する器形で，平坦な口唇部にはキザミが施される。口縁部には，横位の貝殻刺突文が２条巡らされ，その下位に横位ないし斜位の貝殻条痕文が施される。口縁部下には，２列の楔形貼付突帯を貼り付けている。土器内面はナデ調整され，全体的に赤色顔料を施したように赤みがかっているが，60同様の分析結果である。95と96は口縁部に近い胴部で，95は楔形貼付突帯が施されている。96は，斜位の貝殻刺突文が施され，その下位に横位の貝殻条痕文がシャープに施されている。

97 ～ 102は胴部で，横位の貝殻条痕文がシャープに施



第120図　Ⅲc類土器（2）

されている。100は，内外面に赤色顔料の施したような痕跡が確認できるが，60他土器と同様の分析結果である。

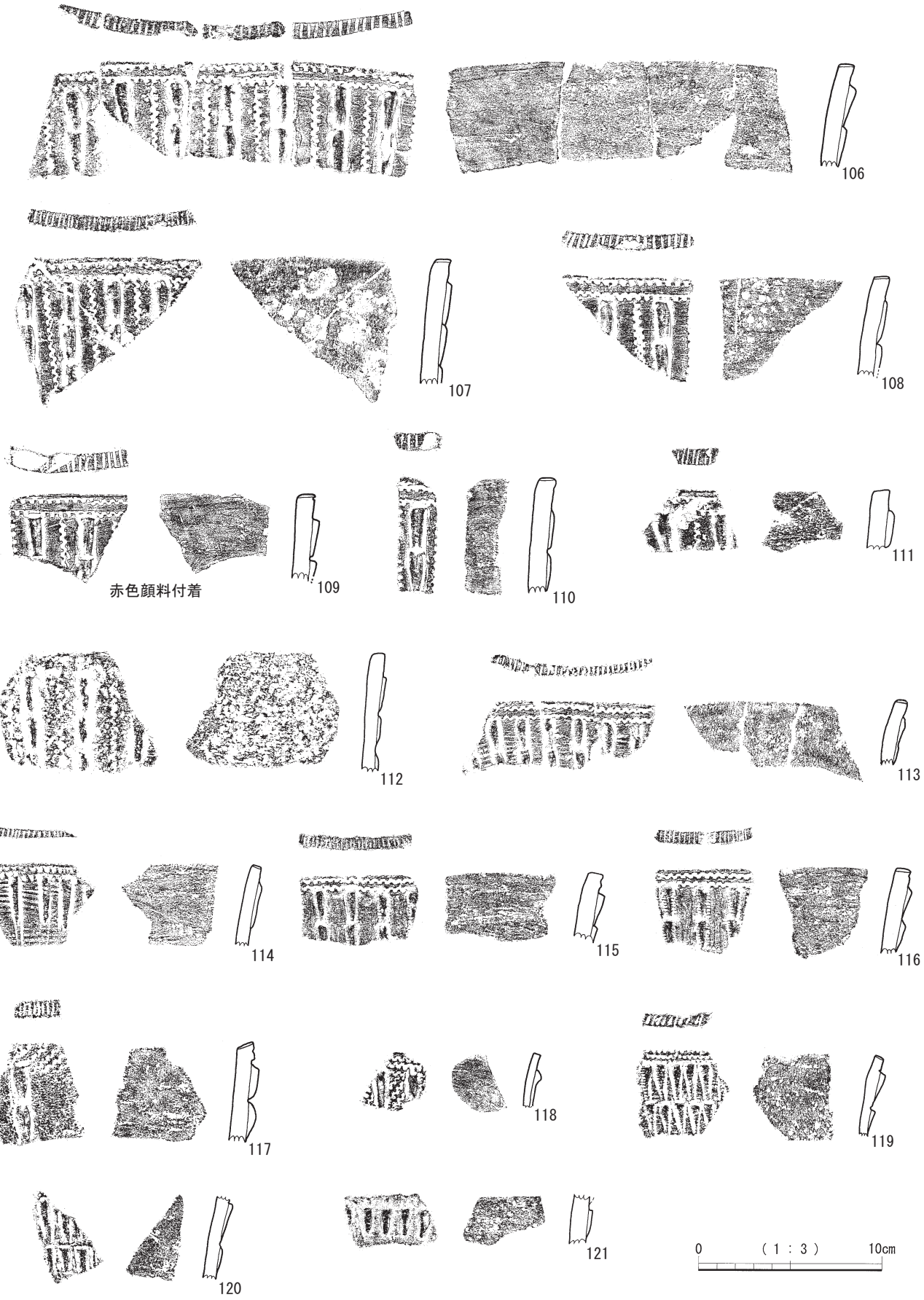
103～105は底部付近である。底部からの立ち上がり部分に，縦位ないし斜位の浅いキザミが施される。

Ⅲd類土器（第121・122図106～130）

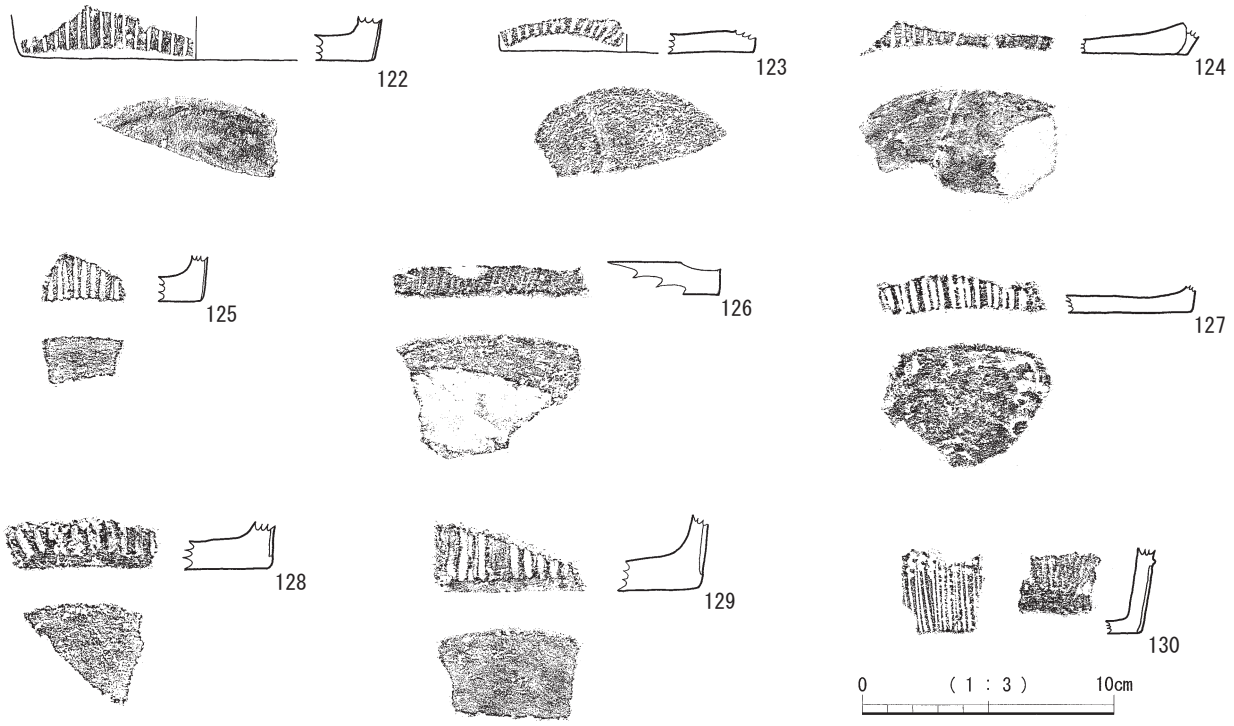
Ⅲd類は，胴部欠損のため分類できなかったものや底部を掲載した。

106～119は口縁部である。平坦な口唇部にキザミを施し，口縁部上端に横位の貝殻刺突文を２条程巡らせる。斜位の貝殻刺突文を施すものもある。その下位に楔形貼付突帯を等間隔で２ないし３列貼り付ける。

106は，楔形貼付突帯の間に縦位の貝殻刺突文を施す。109は，平坦な口唇部にキザミを施し，口縁部直下に２条の横位貝殻刺突文を巡らせる。その下位に楔形貼付突帯を２列貼り付けている。楔形貼付突帯間には，縦位の貝殻刺突文を１列施す。土器内面には，赤色顔料をうすく塗ったような痕跡が確認される。土器表面には煤が若干付着している。113と114は，施文形態がⅢc類と似ている。口縁部直下の横位貝殻刺突文の下位に横位の貝殻条痕文を施し，その上から楔形貼付突帯を貼り付けている。Ⅲc類の可能性もあるが，胴部文様が不明のためここに掲載した。器壁は薄く，楔形貼付突帯は細くシャープである。



第121図　Ⅲd類土器（1）



第122図　Ⅲd類土器（2）

115・116は口唇部にキザミを施し，口縁部には横位の貝殻刺突文を施す。その下位に楔形貼付突帯を施す。

117は口唇部が内傾し，ヘラ状工具によりキザミを施す。口縁部は斜位の貝殻刺突文を施し，その上から棒状に近い楔形貼付突帯を施す。外面は煤が全面に付着している。

118は，口唇部のキザミを施し，口縁部上端に横位の貝殻刺突文を２条巡らせる。その下位に斜位の貝殻刺突文を施した後から，楔形貼付突帯を貼り付けている。内面は丁寧にナデ調整されている。器壁は非常に薄い。

119は，口唇部にキザミを施し，口縁部上端に１条の貝殻刺突文を巡らせる。その下位にシャープな楔形貼付突帯を密に２列貼り付けている。内面はナデ調整されている。器壁はとても薄い。

120と121は口縁部に近い胴部小片である。２列の楔形貼付突帯が確認できる。

122 ～ 130は底部である。平底の底部から立ち上がり部分に，ナデ調整を施した上から縦位の沈線文や細沈線文が施されている。

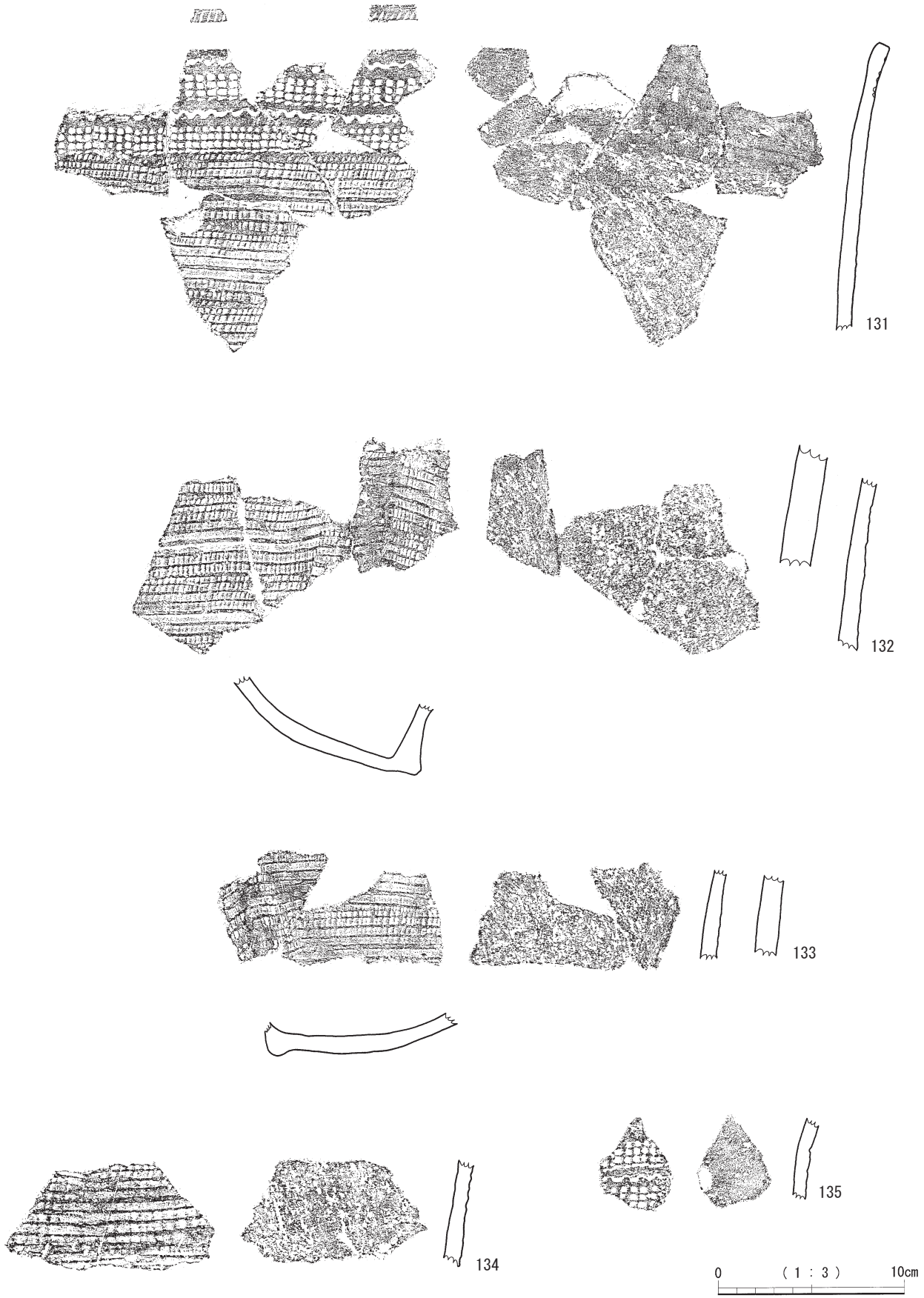
Ⅳ類土器（第123・124図131 ～ 139）

Ⅳ類は，口縁部が緩やかに外反する円筒形の土器を基本とし，胴部に貝殻押引文を施す。レモン形を呈するものもある。

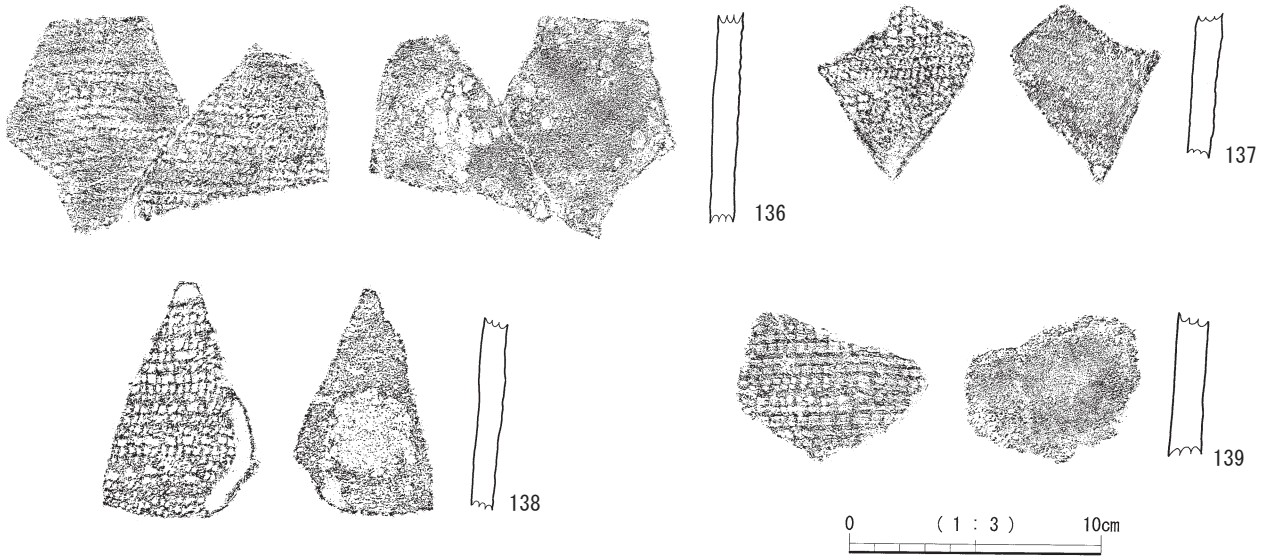
131 ～ 135は同一個体と思われる口縁部から胴部である。また，胴部の形態が屈曲部分から弧を描くように伸びている事から，レモン形を呈する土器と判断した。口縁部が外反し，直線的な胴部へと至る。口唇部は平坦で貝殻によると思われるキザミが施されている。口縁部は

第22表　土器観察表（Ⅲa類）

挿図番号	掲載番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
116	60	深鉢	口縁	Ⅲa	F38	Ⅶa	貝殻条痕，刺突，楔	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	5YR6/6橙	○	○		黒雲母	良好	104906
	61	深鉢	胴	Ⅲa	G36	Ⅶa	貝殻条痕，刺突，楔	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	○	○	○		良好	102312
	62	深鉢	胴	Ⅲa	D39	Ⅶa	貝殻条痕，刺突	工具ナデ	7.5YR6/6橙	5YR6/6橙	◎	△	◎		良好	104870，104871
	63	深鉢	胴	Ⅲa	F33 C39	Ⅳa Ⅶa	貝殻条痕，刺突	工具ナデ	7.5YR6/6橙	10YR6/6明黄褐	○	○	○	黒雲母	良好	102014，101993 102011
	64	深鉢	胴	Ⅲa	E39	Ⅶa	貝殻条痕，刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	◎	○	○		良好	104851
	65	深鉢	胴	Ⅲa	F12	Ⅳb	貝殻条痕，刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	5YR5/6明赤褐	△	△		金雲母，白粒	良好	20276
	66	深鉢	胴	Ⅲa	F32	Ⅶa	貝殻条痕，刺突	工具ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	◎	△	◎		良好	105112
	67	深鉢	胴	Ⅲa	E6	Ⅶ	貝殻条痕，刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐	10YR5/4にぶい黄褐	◎	△	◎		良好	54955
	68	深鉢	胴	Ⅲa	E33 E34	Ⅶa	貝殻条痕　刺突	ナデ	5YR6/4にぶい橙	5YR6/4にぶい橙	◎	○	◎		良好	105121，105003 104999
	69	深鉢	胴	Ⅲa	F33	Ⅵ	貝殻刺突文	ナデ	5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	○	○	○		良好	105262
	70	深鉢	胴	Ⅲa	F36	Ⅶa	貝殻刺突文	ナデ	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	○	○	○		良好	104923



第123図　Ⅳ類土器（1）



第124図　Ⅳ類土器（2）

縦位の貝殻刺突文を上下に挟むように横位の貝殻刺突文を施す。その下位には縦位の貝殻刺突文を巡らせる。胴部は，横方向の貝殻押引文である。胎土に小礫を多く含んでいるが，丁寧なナデが施されている。外面も施文の前に丁寧なナデが施されている。

136 ～ 139は，貝殻押引文を施す胴部である。136は煤の付着が確認される。

Ⅴ類土器（第125 ～ 127図140 ～ 127）

Ⅴ類は，口縁部が外反または外傾する円筒形の土器を基本とする。口縁部は平縁または山形口縁もある。口縁部下には横位ないし斜位の貝殻刺突文を施し，胴部には綾杉状を基本とする貝殻条痕文を施す。

140 ～ 151は口縁部が外反する土器の口縁部と胴部である。140・141は口唇部に貝殻刺突文を施し，口縁部には斜位の貝殻刺突文を巡らせる。140はその下位に横位

第23表　土器観察表（Ⅲb類）

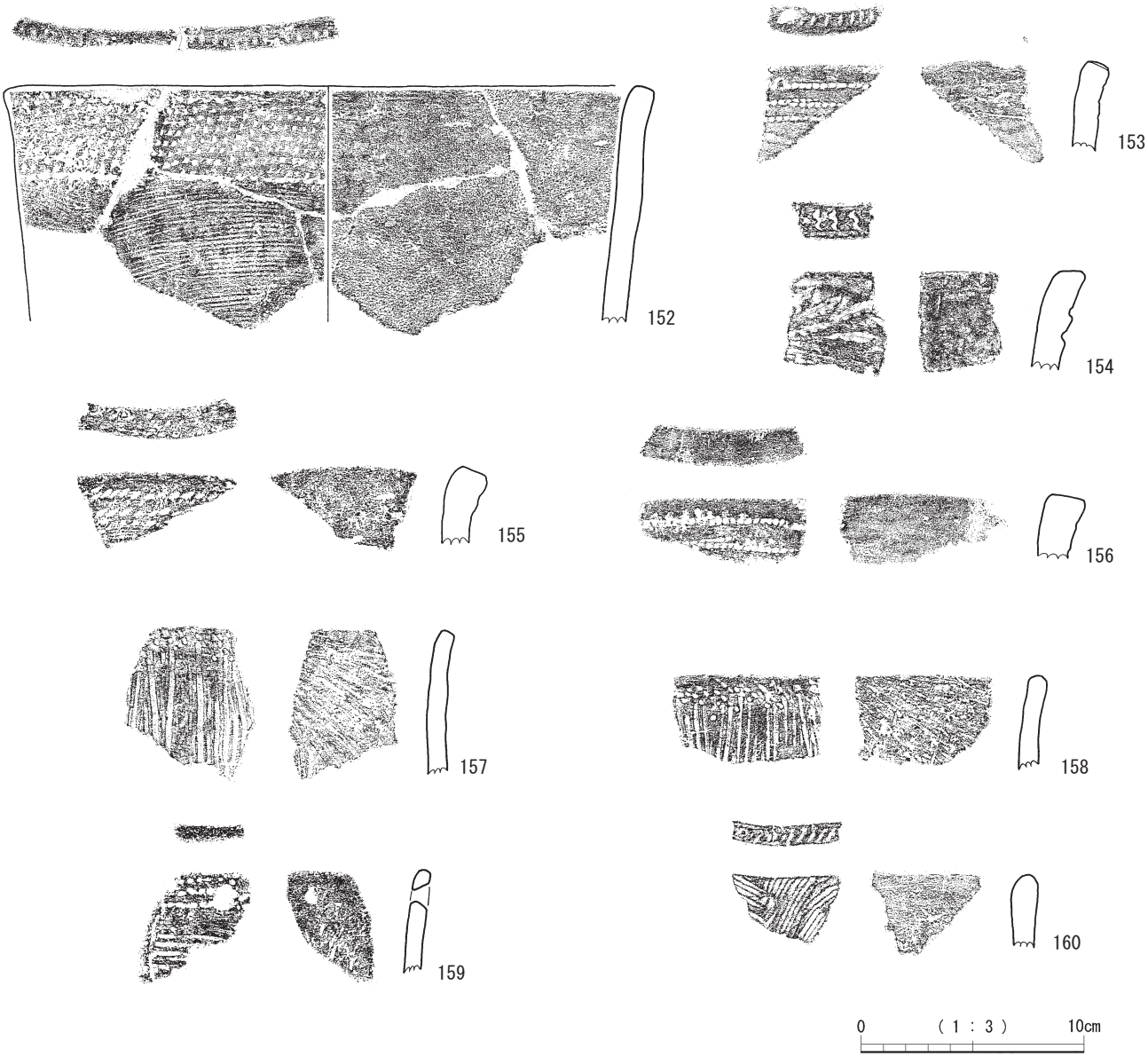
挿図番号	掲載番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
117	71	深鉢	口縁	Ⅲb	F34	Ⅶa	貝殻刺突，楔	ナデ	10YR5/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	○	○	○		良好	102017
	72	深鉢	口縁	Ⅲb	F30	Ⅶa	貝殻刺突，楔	ナデ	10YR7/3にぶい黄褐	10YR6/4にぶい黄橙	◎	○	◎		良好	101584
	73	深鉢	口縁	Ⅲb	F39	Ⅶa	貝殻刺突，楔	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	◎		○		良好	101951
	74	深鉢	口縁	Ⅲb	F39	Ⅶa	貝殻刺突，楔	ナデ	2.5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	◎		○		良好	101950
	75	深鉢	口縁	Ⅲb	E6	Ⅶ	貝殻刺突，楔	ナデ	5YR5/6明赤褐	2.5YR5/8明赤褐	◎	△	○		良好	52878
	76	深鉢	口縁	Ⅲb	C40	Ⅶa	貝殻刺突，楔	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	○		○		良好	104829
	77	深鉢	胴	Ⅲb	D4	Ⅶ	貝殻刺突，楔	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	○		○		良好	52275
	78	深鉢	胴	Ⅲb	C2 E3	Ⅶ	貝殻刺突，楔	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	○	○	◎		良好	50488，52733 52745，52746
	79	深鉢	胴	Ⅲb	F39	Ⅶa	貝殻刺突，楔	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	○		○		良好	102308
	80	深鉢	口縁	Ⅲb	D5 D7	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/6明褐	5YR5/6明赤褐	○		○		良好	52539，52917 52918
	81	深鉢	胴	Ⅲb	F36	Ⅶa	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	○	○	△	金雲母，白粒	良好	102313
	82	深鉢	胴	Ⅲb	D6 D7	Ⅶb	貝殻刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	5YR5/6明赤褐	○		○		良好	49170，53408
	83	深鉢	胴	Ⅲb	F37	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	5YR5/4にぶい赤	5YR5/4にぶい赤褐	◎	△	○		良好	104993，104997
118	84	深鉢	胴	Ⅲb	C7	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐	○		○		良好	53636
	85	深鉢	胴	Ⅲb	F8	Ⅳa	貝殻刺突	ナデ	2.5YR5/6明赤褐	5YR4/6赤褐	○		○		良好	23619
	86	深鉢	胴	Ⅲb	D4	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	5YR5/6明赤褐	○	○	○		良好	52445
	87	深鉢	胴	Ⅲb	E3	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	○		○		良好	52684
	88	深鉢	胴	Ⅲb	D2 D3 C2	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	2.5YR5/8明赤褐	○		○		良好	50505，50507 50510，52582 52589
	89	深鉢	底	Ⅲb	G32	Ⅶa	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR4/6赤褐	○		○		良好	102019
	90	深鉢	底	Ⅲb	F10	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	10YR6/4にぶい黄橙	○		○	白粒	良好	35014

第24表　土器観察表（Ⅲc ～Ⅳ類）

挿図番号	掲載番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
119	91	深鉢	口縁	Ⅲc	E3 E4 F3	Ⅶ	貝殻条痕，刺突，楔	ナデ	2.5YR6/6橙	2.5YR5/8明赤褐	○	○	○		良好	52738，51728 50271，50278
	92	深鉢	口縁	Ⅲc	C2,C4	Ⅶ	貝殻条痕，刺突，楔	ナデ	5YR4/8赤褐	5YR4/8赤褐	○	○	◎	黒雲母，白粒	良好	52391，91675
	93	深鉢	口縁	Ⅲc	D6,F4	Ⅶ	貝殻条痕，刺突，楔	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	5YR4/8赤褐	○	○	○	黒雲母，白粒	良好	52923，50856
	94	深鉢	口縁	Ⅲc	E4	Ⅶ	貝殻条痕，刺突，楔	ナデ	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	◎		○		良好	51260
	95	深鉢	胴	Ⅲc	F5	Ⅶ	貝殻条痕，楔	ナデ	7.5YR5/6明褐	7.5YR6/6橙	○		○		良好	49759
	96	深鉢	胴	Ⅲc	F4	Ⅶ	貝殻条痕，刺突	ナデ	7.5YR5/6明褐	5YR5/6明赤褐	○		○		良好	52837
120	97	深鉢	胴	Ⅲc	C6 C7	Ⅶa Ⅶb	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	○		○		良好	54157，54156 53999
	98	深鉢	胴	Ⅲc	C23	表土	貝殻条痕	ナデ	7.5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐	○	△	○		良好	表土
	99	深鉢	胴	Ⅲc	E5	Ⅶ	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	7.5YR4/3褐	○		○		良好	51298
	100	深鉢	胴	Ⅲc	E4	Ⅶ	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	10YR7/4にぶい黄橙	○	○	○	白粒	良好	51262
	101	深鉢	胴	Ⅲc	E6	Ⅶ	貝殻条痕	ナデ	5YR4/4にぶい赤褐	5YR4/4にぶい赤褐	○		○		良好	52949
	102	深鉢	胴	Ⅲc	C7	Ⅴb	貝殻条痕	貝殻条痕	5YR5/6明赤褐	5YR4/6赤褐	○	△		白粒	良好	48647
	103	深鉢	胴	Ⅲc	E7	Ⅵ	貝殻条痕	ナデ	5YR4/8赤褐	5YR4/8赤褐	○	○	○		良好	49197
	104	深鉢	胴	Ⅲc	C1,2 C6 C7	Ⅶ Ⅶb	貝殻条痕	ナデ	5YR4/6赤褐	5YR5/6明赤褐	○		○		良好	54283，54320 SD36－1
	105	深鉢	胴	Ⅲc	C6	Ⅶb	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	△	○	○		良好	54154，54281 54148
121	106	深鉢	口縁	Ⅲd	D4 E3 E4	Ⅵ Ⅶa	貝殻刺突，楔	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	5YR5/6明赤褐	◎		○		良好	52092，52648 51279，50151
	107	深鉢	口縁	Ⅲd	C3	Ⅶ	貝殻刺突，楔	ナデ	7.5YR6/6橙	5YR5/8明赤褐	○		○		良好	51999
	108	深鉢	口縁	Ⅲd	E4	Ⅶ	貝殻刺突，楔	ナデ	5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐	○	○	○		良好	52335
	109	深鉢	口縁	Ⅲd	F6	Ⅵ	貝殻刺突，楔	ナデ	7.5YR6/6橙	5YR6/6橙	○		○	白粒	良好	47510
	110	深鉢	口縁	Ⅲd	F3	Ⅵ	貝殻刺突，楔	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	○		○		良好	50258
	111	深鉢	口縁	Ⅲd	F4	Ⅶ	貝殻刺突，楔	ナデ	5 YR6/6橙	5YR6/6橙	○	△	○		良好	51724
	112	深鉢	口縁	Ⅲd	C2	Ⅵ	貝殻刺突，楔	ナデ	7.5YR5/6明褐	5YR4/8赤褐	○		○		良好	52202
	113	深鉢	口縁	Ⅲd	F4	Ⅵ	貝殻条痕，刺突，楔	ナデ	7.5YR6/6橙	5YR4/8赤褐	◎	△	△		良好	50817
	114	深鉢	口縁	Ⅲd	F8	Ⅳb	貝殻条痕，刺突，楔	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	10YR5/4にぶい黄褐	○	○	○		良好	30806
	115	深鉢	口縁	Ⅲd	C23	表土	貝殻刺突，楔	ナデ	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	○		○		良好	表土
	116	深鉢	口縁	Ⅲd	C3	Ⅶ	貝殻刺突，楔	ナデ	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	○		○		良好	52257
	117	深鉢	口縁	Ⅲd	F4	Ⅶ	貝殻刺突，楔	ナデ	7.5YR3/2黒褐	7.5YR6/4にぶい橙	○	○	○		良好	51744
	118	深鉢	口縁	Ⅲd	F33	Ⅵ	貝殻刺突，楔	ナデ	5YR6/8橙	5YR6/6橙	○		○		良好	105264
	119	深鉢	口縁	Ⅲd	C3	Ⅶ	貝殻条痕，刺突，楔	ナデ	2.5YR5/6明赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	○	○		金雲母	良好	52421
	120	深鉢	胴	Ⅲd	F3	Ⅶ	ナデ，楔	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	7.5YR6/4にぶい橙	○		○		良好	52770
	121	深鉢	胴	Ⅲd	C3	Ⅶ	ナデ，楔	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	○	○	○		良好	51990
122	122	深鉢	底	Ⅲd	D36	Ⅶa	縦位沈線	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	○	○	○		良好	104952
	123	深鉢	底	Ⅲd	C40	Ⅶa	縦位沈線	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR7/6橙	○		○		良好	104831，104832
	124	深鉢	底	Ⅲd	E12	Ⅵ	縦位沈線	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	○	○	○		良好	25075
	125	深鉢	底	Ⅲd	C42	Ⅳa	縦位沈線	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	5YR6/6橙	○	○	○		良好	105132
	126	深鉢	底	Ⅲd	G35	Ⅶa	縦位沈線		10YR7/6明黄褐	7.5YR7/6橙	○	○	○		良好	102083
	127	深鉢	底	Ⅲd	E3	Ⅶ	縦位沈線	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	○	○	○	赤粒	良好	52744
	128	深鉢	底	Ⅲd	D6	Ⅶb	縦位沈線	ナデ	7.5YR5/3にぶい褐	5YR5/4にぶい赤褐	○	○		金雲母，白粒，赤粒	良好	54165
	129	深鉢	底	Ⅲd	B8	Ⅶ	縦位沈線	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	5YR5/4にぶい赤褐	○	○		金雲母，白粒，赤粒	良好	53806
	130	深鉢	底	Ⅲd	E36	Ⅶa	貝殻刺突，条痕	ナデ	10YR8/4浅黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	△	△	△		良好	105012
123	131	深鉢	口縁	Ⅳ	E13 E14 F13	Ⅵ	貝殻刺突，押引	ケズリ　ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	△	△	△	金雲母，白粒，赤粒	良好	19587，19591，16031 16032，16038， 16039，19658
	132	深鉢	胴	Ⅳ	E14	Ⅵ	押引	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	△	△	△	金雲母，白粒，赤粒	良好	17225，17227，19659 19662
	133	深鉢	胴	Ⅳ	9T	Ⅵ	押引	ケズリ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	△	△	△	金雲母，白粒，赤粒	良好	9T8，9T21
	134	深鉢	胴	Ⅳ	F13	Ⅵ	押引	ケズリ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR4/4褐	△	△		白 粒，赤粒	良好	19583
	135	深鉢	胴	Ⅳ	E15	Ⅵ	貝殻刺突，押引	ナデ	10YR6/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐	△	△		白粒	良好	17466
124	136	深鉢	胴	Ⅳ	D2	Ⅵ	押引	ナデ	10YR7/6明黄褐	5YR6/6橙	○	○	○	赤粒	良好	50639，50597
	137	深鉢	胴	Ⅳ	F3	Ⅶ	押引	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	5YR5/6明赤褐	○		○		良好	53132
	138	深鉢	胴	Ⅳ	E4	Ⅶ	押引	ナデ	10YR7/6明黄褐	5YR5/6明赤褐	○	○	○		良好	51603
	139	深鉢	胴	Ⅳ	F8	Ⅳb	押引	ナデ	5YR6/8橙	10YR3/3暗褐	◎	○	○	白粒，赤粒	良好	30769



第125図　V類土器（1）



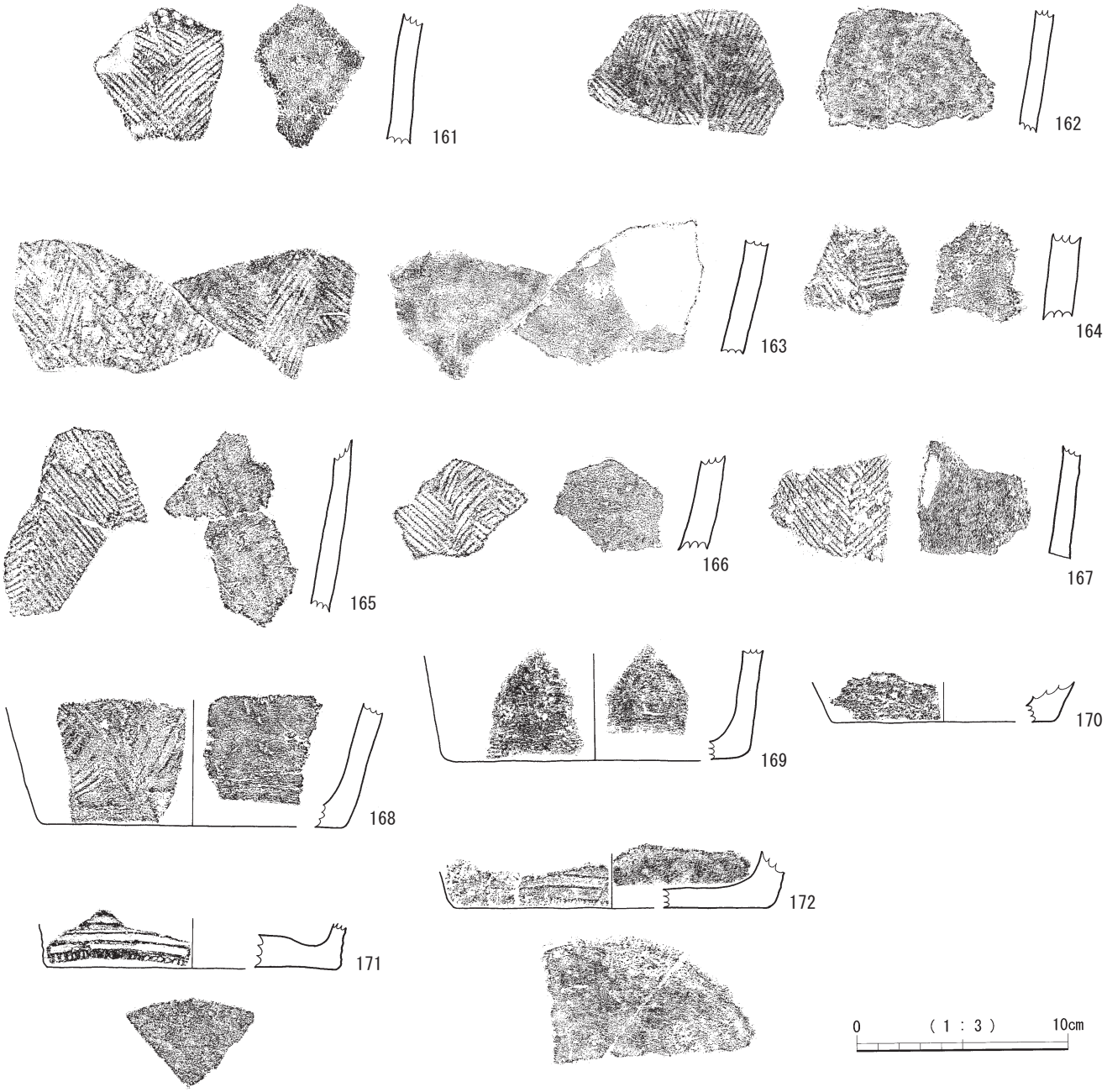
第126図　Ⅴ類土器（2）

の貝殻刺突文を２条施す。胴部には綾杉状の貝殻条痕文を施す。142は，口唇部は舌状を呈し，口縁部には３条の貝殻刺突文を施す。胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施される。内面は丁寧なナデが認められる。胎土に小礫を多く含む。143は，横位に近い斜位の貝殻刺突文を施す。その下位には横位の貝殻刺突文が巡るが，貝殻刺突文同士が丁寧に重なっていない。胴部には，縦位の貝殻条痕が施されるが，口縁部文様と斬り合っている。内面は丁寧なナデが認められる。144は，口縁部が外反し，口唇部は丸みをおびる。口縁部に短い斜位の貝殻刺突文を施し，その下位には横位の貝殻刺突文が巡る。胴部は，横位の貝殻条痕文である。内面は横位の丁寧なナデが施されている。145は，口縁がやや山形状を呈し，口唇部にキザミを施す。口縁部には横位の貝殻刺突文を４条巡らせ，その下の胴部には綾杉状の貝殻条痕文を施す。内面は丁寧なナデが認められる。

146は，口縁部をやや肥厚させ，口唇部内端にキザミを施す。口縁部には横位の貝殻刺突文を２条巡らせ，その下位に斜位の貝殻刺突文を巡らせる。胴部には，綾杉状の貝殻条痕文を施す。内面は丁寧なナデが確認される。

148は，山形口縁を呈し，口縁部は肥厚する。丸みを帯びた口唇部にはキザミを施す。口縁部には横位の貝殻刺突文を山形に２条巡らせ，その下位に斜位の貝殻刺突文を施す。胴部はかろうじて斜位の貝殻条痕文が認められる。

149・150は共に山形口縁を呈する。149は口縁部には



第127図　Ⅴ類土器（3）

２条の貝殻刺突文を施す。151は150と同一個体と思われる胴部である。丁寧なナデ調整の後施文している。

152～160は，やや外傾する器形の口縁部である。

152は平口縁の口唇部にキザミを施し，口縁部には斜位の貝殻刺突文を挟むように上下に横位の貝殻刺突文を施す。胴部には，浅めの綾杉状貝殻条痕文を施す。内面は丁寧なナデが認められる。胎土に小礫を多く含む。153は，口唇部にキザミを施し，口縁部には横位の貝殻刺突文を施す。内面は丁寧な工具ナデが認められる。154は，口唇部に貝殻殻頂部押圧を巡らせる。口縁部には貝殻刺突文を深く施文している。内面は丁寧なナデが確認される。口縁部内外面に若干の煤が認められる。155は，やや外傾する器形で，口縁部は肥厚している。口唇部外端には，ヘラ状工具によるキザミが確認できる。口縁部は，ヘラ状工具による斜位の短沈線が３条巡らされる。156は，口縁部が肥厚し，口唇部は平坦にナデ調整されている。口縁部は横位の貝殻刺突文が２条巡る。内面は丁寧なナデが確認できる。157・158は，口唇外端まで貝殻刺突文を斜位に施し，その下位に縦位の貝殻条痕文を鮮明に施す。内面はケズリが行われている。159は，

口縁部に３条の貝殻刺突文を横位に巡らせ，その下位に横位の貝殻条痕文を施す。口縁部上部に両側より穿孔した補修孔が認められる。160は，丁寧にナデ調整された口唇部にキザミを施し，口唇部外端より綾杉状の貝殻条痕文を施す。内面は丁寧なナデが認められる。

161 ～ 167は綾杉状の貝殻条痕文を施す胴部である。

168 ～ 172は，Ⅴ類の底部である。171は底部外端部にキザミを施し，胴部下位には幅約３㎜の幅広沈線を４条施す。底部内面は，中心部へ向かい肥厚する。172は，底部外端部にキザミを施し，胴部下位には幅約４㎜の幅広沈線を３条巡らせる。

Ⅵ類土器（第129 ～ 137図）

Ⅵ類土器は，口縁部が緩やかに内湾または直行する器形で，口唇部にいくに従い器壁が厚くなるものがある。口縁部は平縁もあるが，山形を有するものもある。口唇部は平坦面を有する。

Ⅵa類土器（第129 ～ 131図173 ～ 228）

Ⅵa類は，口縁部に横位の貝殻刺突文を施し，胴部には貝殻条痕による「Z」字状の貝殻刺突文を施す。口縁部下に縦位または横位の瘤状突起が付くものもある。

173 ～ 199は口縁部である。173は，Ⅵ類土器の中で最も大きな破片資料である。口縁部で緩やかに内湾し，口唇部は丁寧なナデが認められる。口縁部には約10条位の貝殻刺突文を横位に施し，その下に「Z」字状に貝殻刺突文を密に行う。口縁部上端には貝殻刺突文を一部ナデ消した箇所が認められる。内面は丁寧なヘラナデが確認される。174は，口縁部で緩やかに内湾し，口唇部は丁寧なナデが認められる。口縁部文様帯には，区画するように縦位の貝殻刺突文を短めに施し，その間を埋めるように横位の貝殻刺突文を10条施す。一部は縦位の貝殻刺突文を切っている。その下位には斜位の貝殻刺突文を施す。内面は丁寧なナデが確認される。177は，緩やかに内湾し，口唇部は丁寧なナデが確認される。口縁部には短い瘤状突起が貼り付けられているが，１段目の突起は間隔が開いて貼り付けられる。２段目は等間隔に貼り付けている。その後口縁部上端より横位の貝殻刺突文を10条程度施すが，瘤状突起の上にも施文を行う。胴部には斜位の貝殻刺突文を施す。内面は丁寧なヘラナデが確認される。183は，口縁部に補修孔と思われる穿孔が施されているが，貫通していない。187は，口縁部がやや肥

第25表　土器観察表（Ⅴ類）

挿図番号	掲載番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
125	140	深鉢	口縁	Ⅴ	E5	Ⅶ	貝殻刺突，条痕	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	7.5YR3/2黒褐	○	○	○		良好	52313
	141	深鉢	口縁	Ⅴ	F2	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR4/3褐	○	○	○		良好	48951
	142	深鉢	口縁	Ⅴ	C4	Ⅶ	貝殻刺突，条痕	ナデ	2.5Y5/3黄褐	10YR5/3にぶい黄褐		○		金雲母，白粒	良好	52026
	143	深鉢	口縁	Ⅴ	D21	Ⅵ	貝殻刺突，条痕	ナデ	10YR7/6明黄褐	10YR7/4にぶい黄橙	○	○	○		良好	19905
	144	深鉢	口縁	Ⅴ	C39	Ⅶ	貝殻刺突，条痕	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/2灰黄褐	△	△		金雲母，白粒	良好	104878
	145	深鉢	口縁	Ⅴ	E36	Ⅶa	貝殻刺突，条痕	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐	7.5YR5/4にぶい褐	○	○	△		良好	105009，105010
	146	深鉢	口縁	Ⅴ	D9	Ⅵ	貝殻刺突，条痕	ナデ	7.5YR4/3褐	5YR4/4にぶい赤褐	○	○	○	白粒	良好	47777
	147	深鉢	口縁	Ⅴ	F14	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	10YR7/6明黄褐	5YR6/6橙	○	○	○		良好	24920
	148	深鉢	口縁	Ⅴ	F4	Ⅵ	貝殻刺突，条痕	ナデ	7.5YR7/6橙	10YR6/4にぶい黄橙	○	○	○	白粒，赤粒	良好	50818
	149	深鉢	口縁	Ⅴ	F2	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	5YR5/4にぶい赤褐	○	○	○		良好	50335
	150	深鉢	口縁	Ⅴ	E3	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	7.5YR7/6橙	○	○			良好	52654
	151	深鉢	胴	Ⅴ	F3	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR5/4にぶい褐	○	○		白粒	良好	51800
126	152	深鉢	口縁	Ⅴ	F7，E8	Ⅳb Ⅵ	貝殻刺突，条痕	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	△	○		金雲母，白粒	良好	45133，46827，47410
	153	深鉢	口縁	Ⅴ	C7	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	△		○	金雲母	良好	54255
	154	深鉢	口縁	Ⅴ	D6	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	5YR4/3にぶい赤褐	10YR4/3にぶい黄褐	○	○	○	赤粒	良好	52874
	155	深鉢	口縁	Ⅴ	F12	Ⅵ	刺突(ヘラ状工具)	ナデ	7.5YR7/6橙	10YR7/4にぶい黄橙	○	○	○	白粒	良好	20884
	156	深鉢	口縁	Ⅴ	F4	Ⅶa	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	○	○	○		良好	51709
	157	深鉢	口縁	Ⅴ	D7	Ⅶb	貝殻刺突，条痕	ケズリ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/2灰黄褐	○	△	△	金雲母，白粒	良好	54811
	158	深鉢	口縁	Ⅴ	D6	Ⅶ	貝殻刺突，条痕	ケズリ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/2灰黄褐	○	○	△	金雲母，白粒	良好	52886
	159	深鉢	口縁	Ⅴ	E4	Ⅵ	貝殻刺突，条痕	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	△	△		金雲母	良好	51221
	160	深鉢	口縁	Ⅴ	B5	Ⅳb	貝殻条痕	ナデ	5YR6/6橙	10YR5/3にぶい黄褐	○		△		良好	45550
127	161	深鉢	胴	Ⅴ	E11	Ⅵ	貝殻条痕，刺突	ナデ	10YR7/3にぶい黄褐	7.5YR5/4にぶい褐	○	○	○	白粒，赤粒	良好	24896
	162	深鉢	胴	Ⅴ	E36	Ⅶa	貝殻条痕	ナデ	5YR6/6橙	7.5YR4/2灰褐	○	○	○		良好	105013，105014
	163	深鉢	胴	Ⅴ	C3，E3	Ⅶ	貝殻条痕	ナデ	2.5YR5/6明赤褐	7.5YR5/6明褐	○				良好	52673，53186
	164	深鉢	胴	Ⅴ	D12	Ⅵ	貝殻条痕	ナデ	7.5YR4/6褐	10YR4/3にぶい黄褐	○	○	○	白粒，赤粒	良好	25087
	165	深鉢	胴	Ⅴ	C20	Ⅵ	貝殻条痕	ナデ	5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	○	○	○		良好	19894，19895
	166	深鉢	胴	Ⅴ	F6	Ⅶ	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR4/4にぶい赤褐	○	○	○		良好	50991
	167	深鉢	胴	Ⅴ	C30	Ⅵ	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	10YR4/2灰黄褐	○	○	○		良好	19893
	168	深鉢	底	Ⅴ	D6	Ⅶ	貝殻条痕	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	○	○	○	赤粒	良好	51937
	169	深鉢	底	Ⅴ	E6	Ⅶ	貝殻条痕	ナデ	7.5YR7/6橙	10YR8/6黄橙	○	○	○		良好	54761
	170	深鉢	底	Ⅴ	D2	Ⅳb	ナデ	－	10YR7/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	△	○		金雲母，白粒	良好	46909
	171	深鉢	底	Ⅴ	D5	Ⅶ	貝殻条痕	ナデ	7.5YR7/6橙	5YR6/6橙	△	△		白粒，赤粒	良好	52564
	172	深鉢	底	Ⅴ	E8	Ⅳb Ⅵ	貝殻条痕	ナデ	7.5YR7/6橙	10YR7/6明黄褐	○	○	○	白粒，赤粒	良好	28476，49071

厚し，内湾する。口唇部は丁寧にナデ調整されている。口縁部には横位の貝殻刺突文を３条巡らせる。その下位に斜位の沈線が確認できる。口縁部の状況からここに分類した。188はやや内湾する口縁部で，瘤状の突起を持ち，この瘤状突起を境に方形状に器形が屈曲する。瘤状突起部分がやや高くなり，山形口縁状を呈する。文様は口縁部に横位の貝殻刺突文，胴部に「Z」字状の貝殻刺突文を施す。189・190は，188と同様，瘤状突起を持ち，この箇所で器形が屈曲する。189の内面は丁寧にヘラナデされ，口縁部付近に植物の圧痕が確認された。191は，口縁部に横位の貝殻刺突文を施さず，斜位の貝殻刺突文とその下位に「Z」字状の貝殻刺突文を施す。195は，口縁部がやや肥厚し，若干波状口縁の様相を呈する。口唇部は平坦面を呈し，丁寧にナデ調整されている。口縁部には横位の貝殻刺突文を２条巡らせ，その下位に「Z」字状の貝殻刺突文を施す。内面は丁寧にナデ調整され，口縁部付近に堅果類等の果皮片の圧痕が確認できる。199は，口唇部が舌状を呈する。口縁部下に横位の瘤状突起を貼り付けた後，横位の貝殻刺突文を施す。

200 ～ 223は胴部である。201は，口縁部に近い胴部で，縦位の瘤状突起が確認できる。202 ～ 204は，横位の瘤状突起が貼り付けられている。瘤状突起の上から貝殻刺突文が施される。

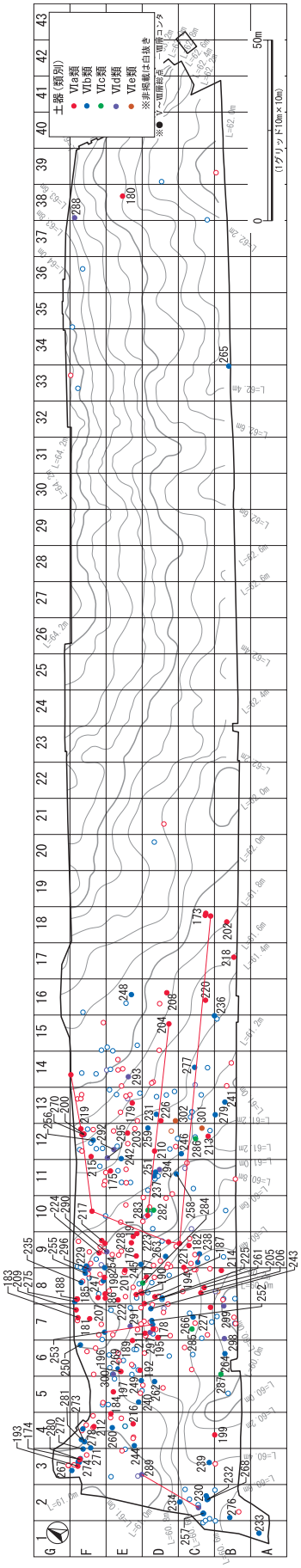
224 ～ 228は底部である。胴部下部まで貝殻刺突文を施す。

Ⅵb類土器（第132 ～ 134図229 ～ 281）

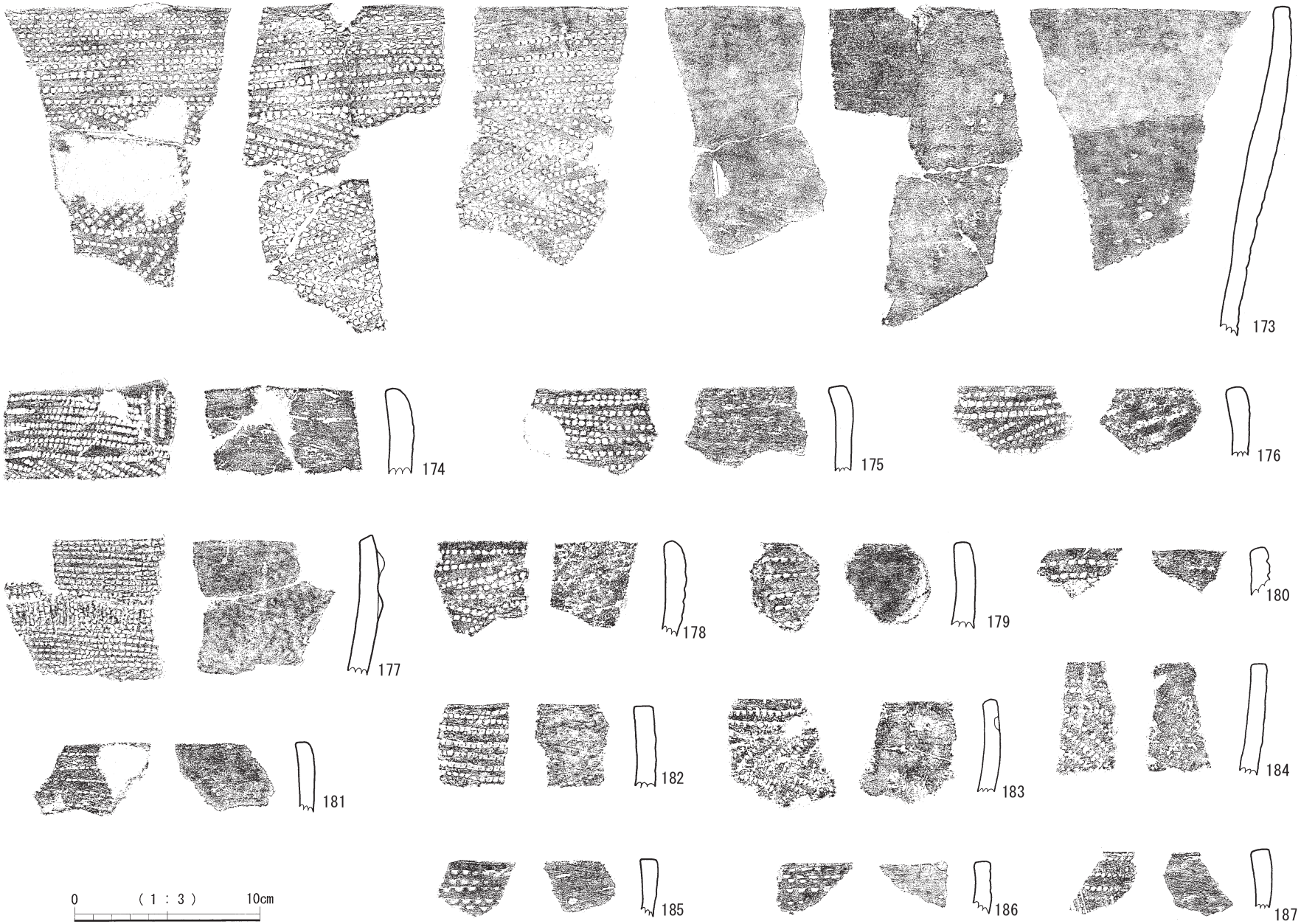
Ⅵb類は，胴部の施文が縦位ないし「V」字状の貝殻刺突文を施す。

229 ～ 248は口縁部である。229は口縁部で内湾し，口唇部は平坦にナデ調整されている。口縁部は，横位の貝殻刺突文を３条施巡らせ，その下位に縦位の貝殻刺突文を密に施す。内面はナデが認められる。230は，胎土に金雲母が認められる。233は口縁部下に横位の瘤状突起を貼り付けている。238は，口唇部をナデて平坦に仕上げている。口縁部は斜位の貝殻刺突文を施し，それを上下に挟むように横位の貝殻刺突文を施す。胴部には縦位ないし斜位の貝殻刺突文を密に施す。内面は丁寧にナデ調整されている。239は，緩やかに外傾し，口縁部上位でやや内湾する波状口縁の土器である。口縁部には横位の貝殻刺突文を巡らせ，胴部には縦位ないし斜位の貝殻刺突文を施す。242は，内外面を丁寧にナデ調整し，口縁部には横位，胴部には鋸歯状に貝殻刺突文を施す。245は，内外面を丁寧にナデ調整し，口縁部に瘤状突起を貼り付けている。246は，口縁部の横位貝殻刺突文を斜位の刺突文が一部切っている。内外面ともに丁寧にナデ調整がされ，胎土には金雲母が確認できる。

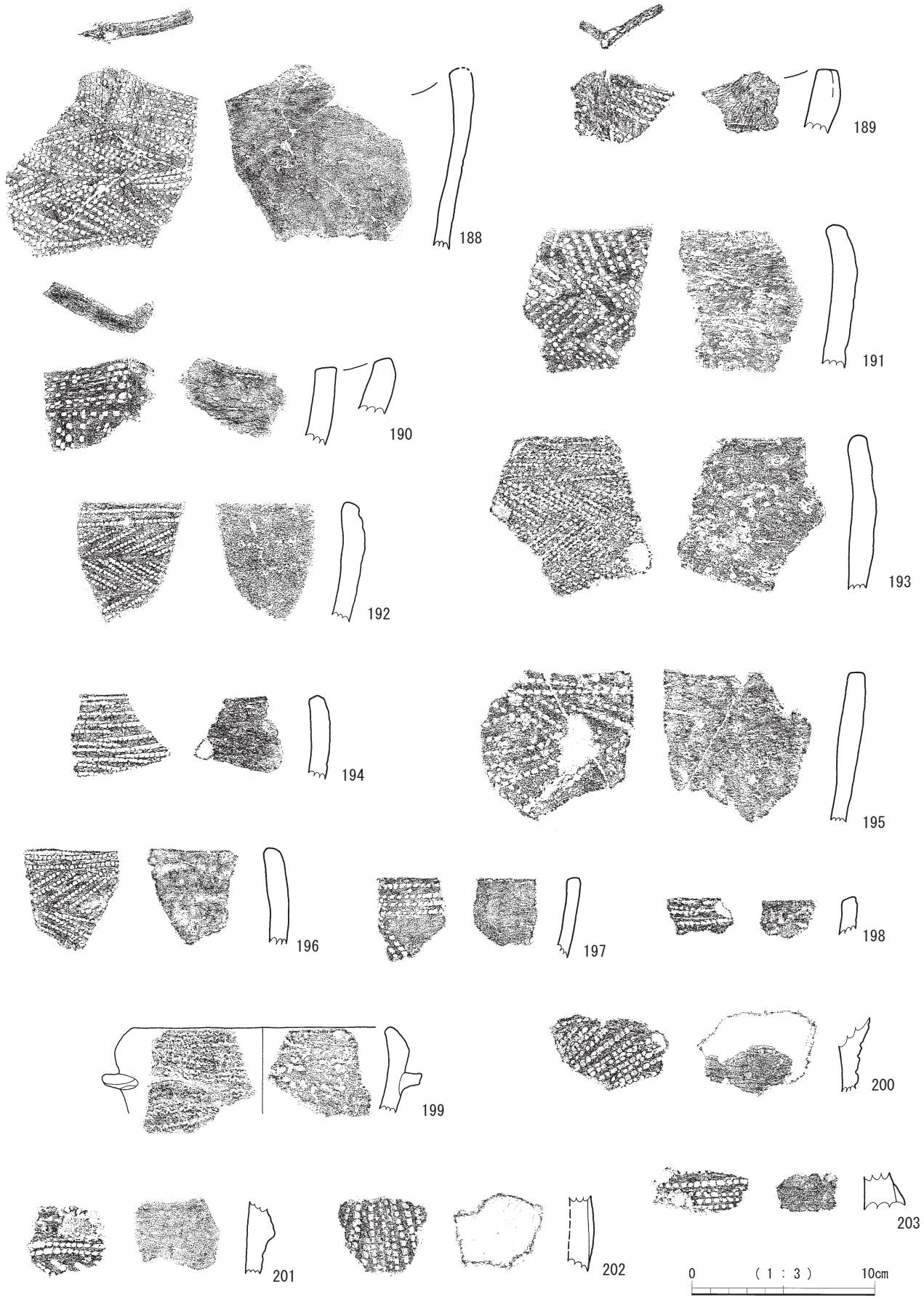
249 ～ 267は胴部である。249は，横位の貝殻刺突文の



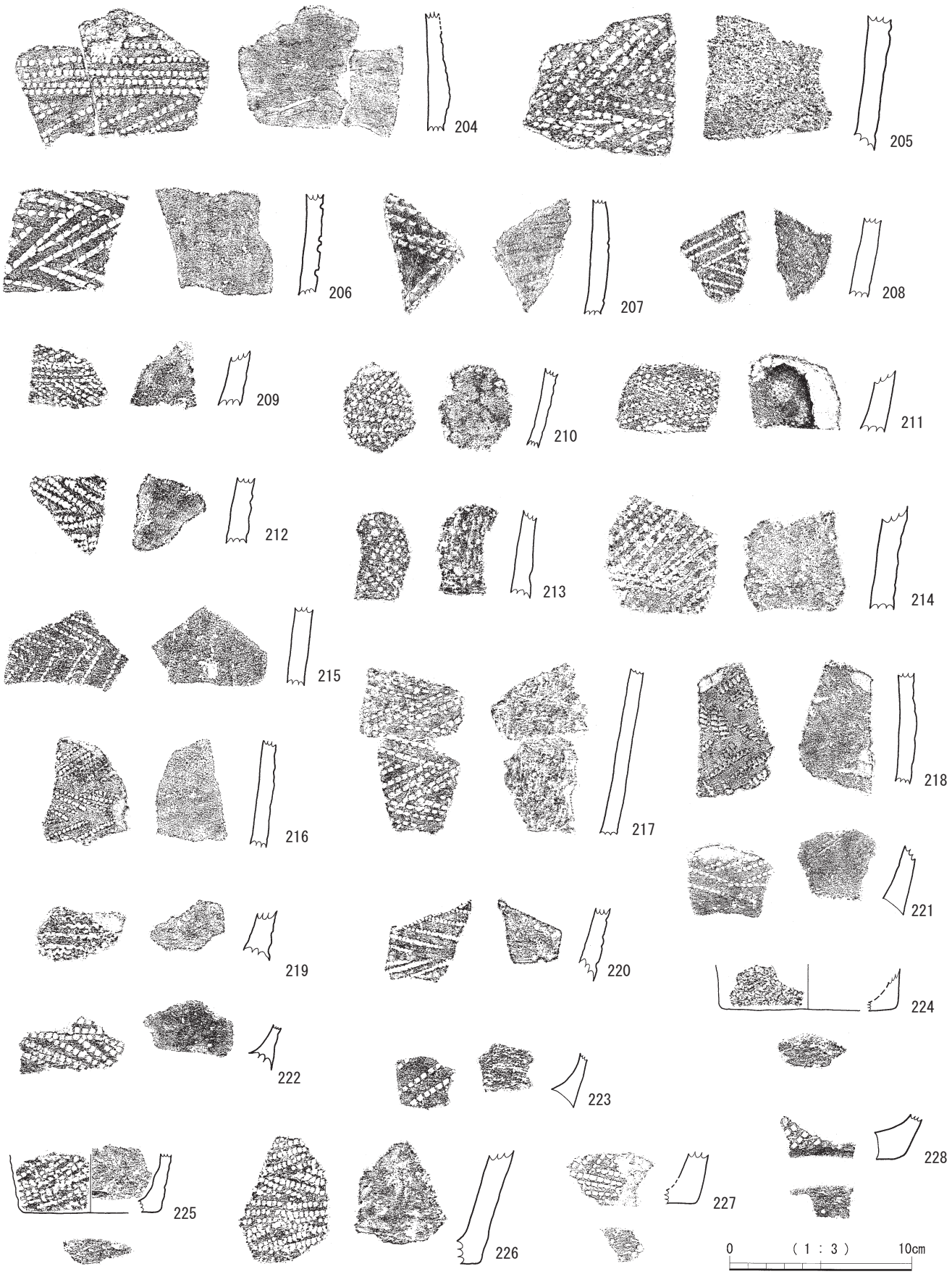
第128図　Ⅵ類土器分布図



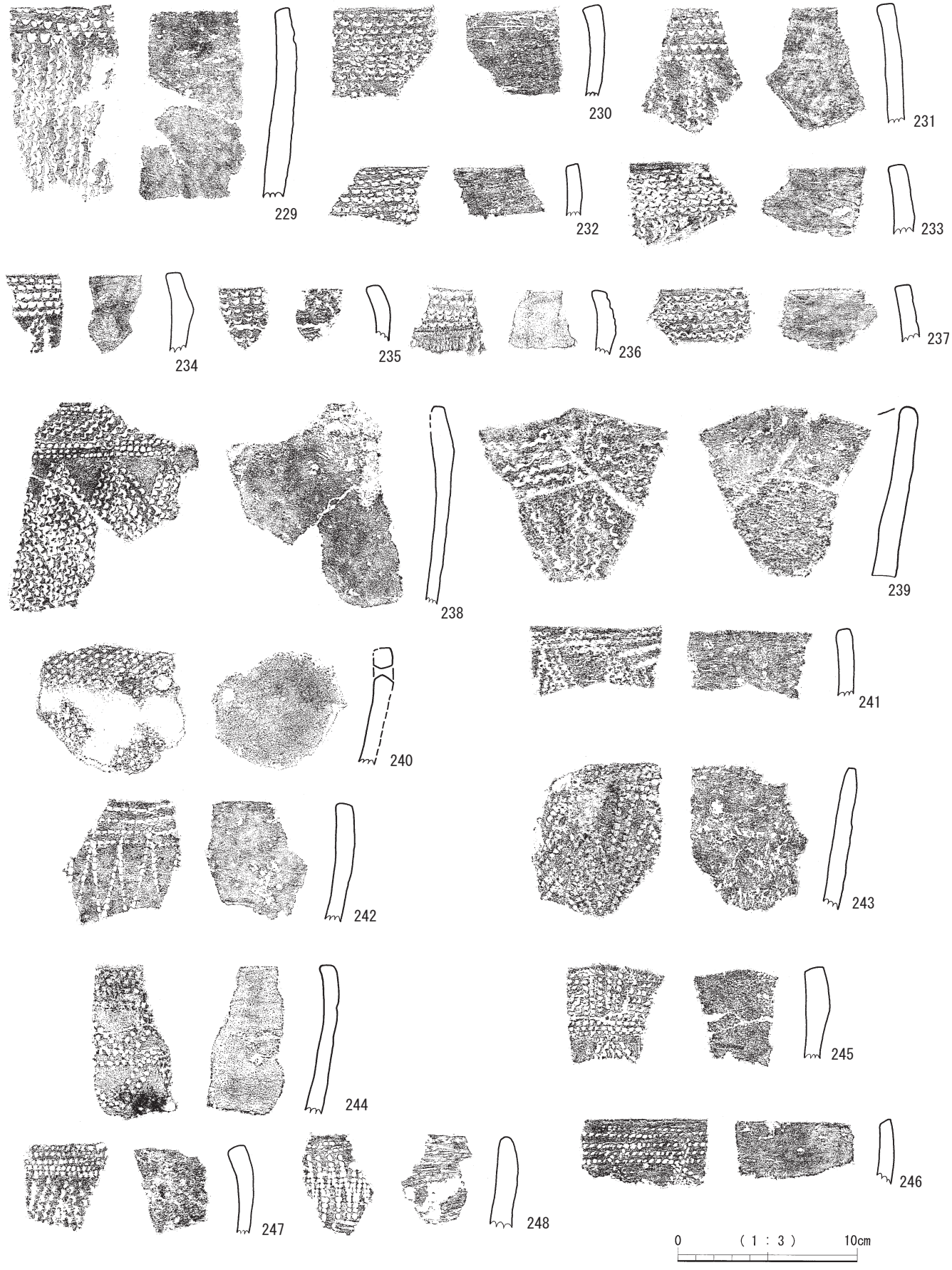
第129図　Ⅵa類土器（1）



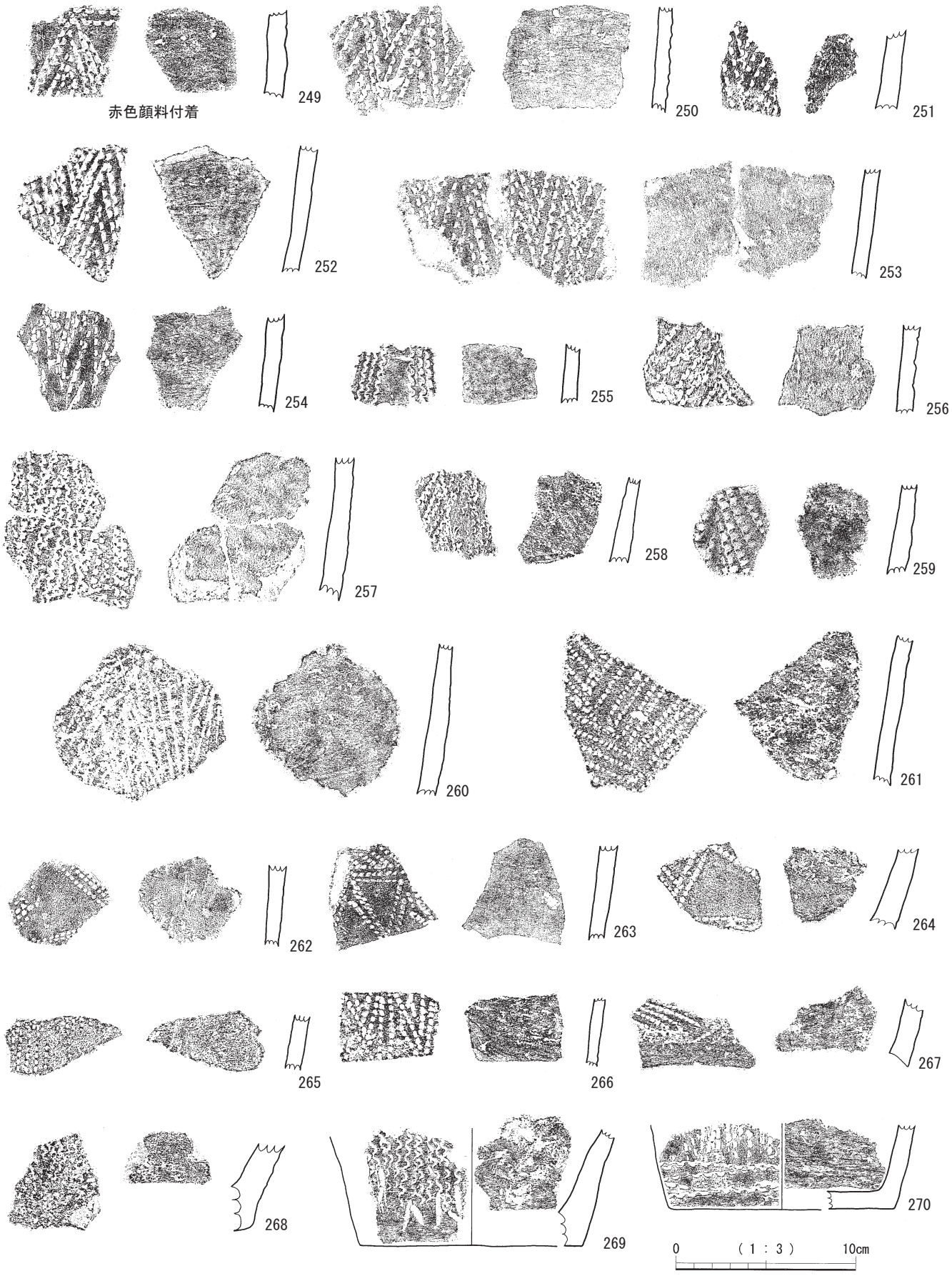
第130図　Ⅵa類土器（2）



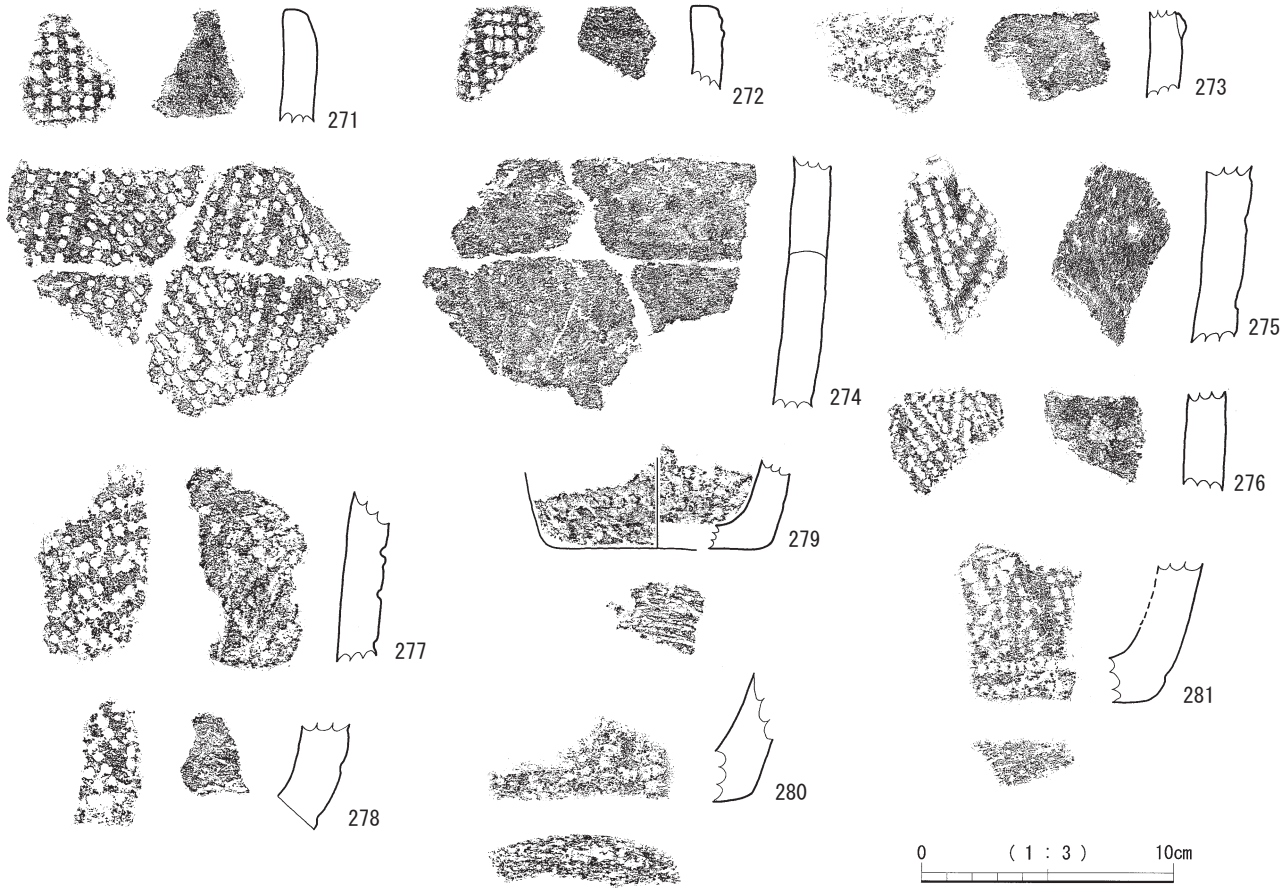
第131図　Ⅵa類土器（3）



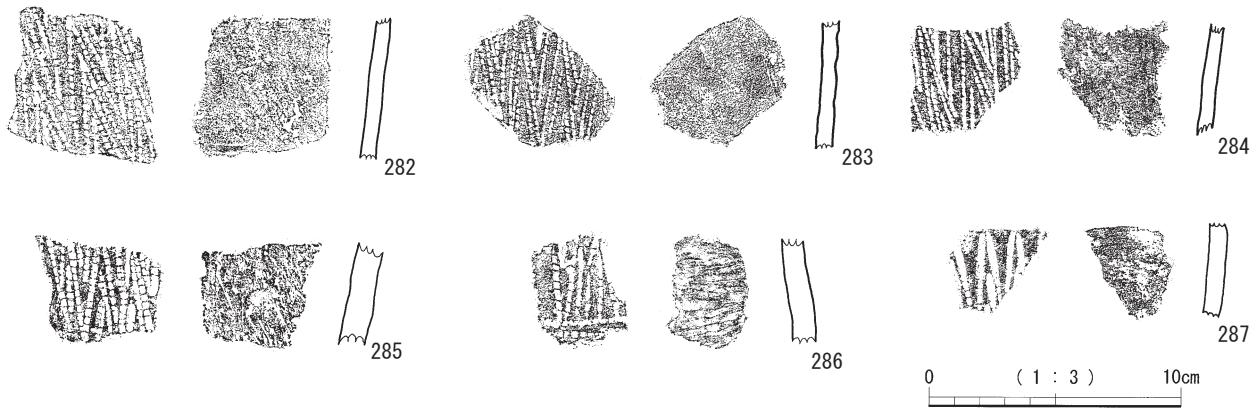
第132図　Ⅵb類土器（1）



第133図　Ⅵb類土器（2）



第134図　Ⅵb類土器（3）

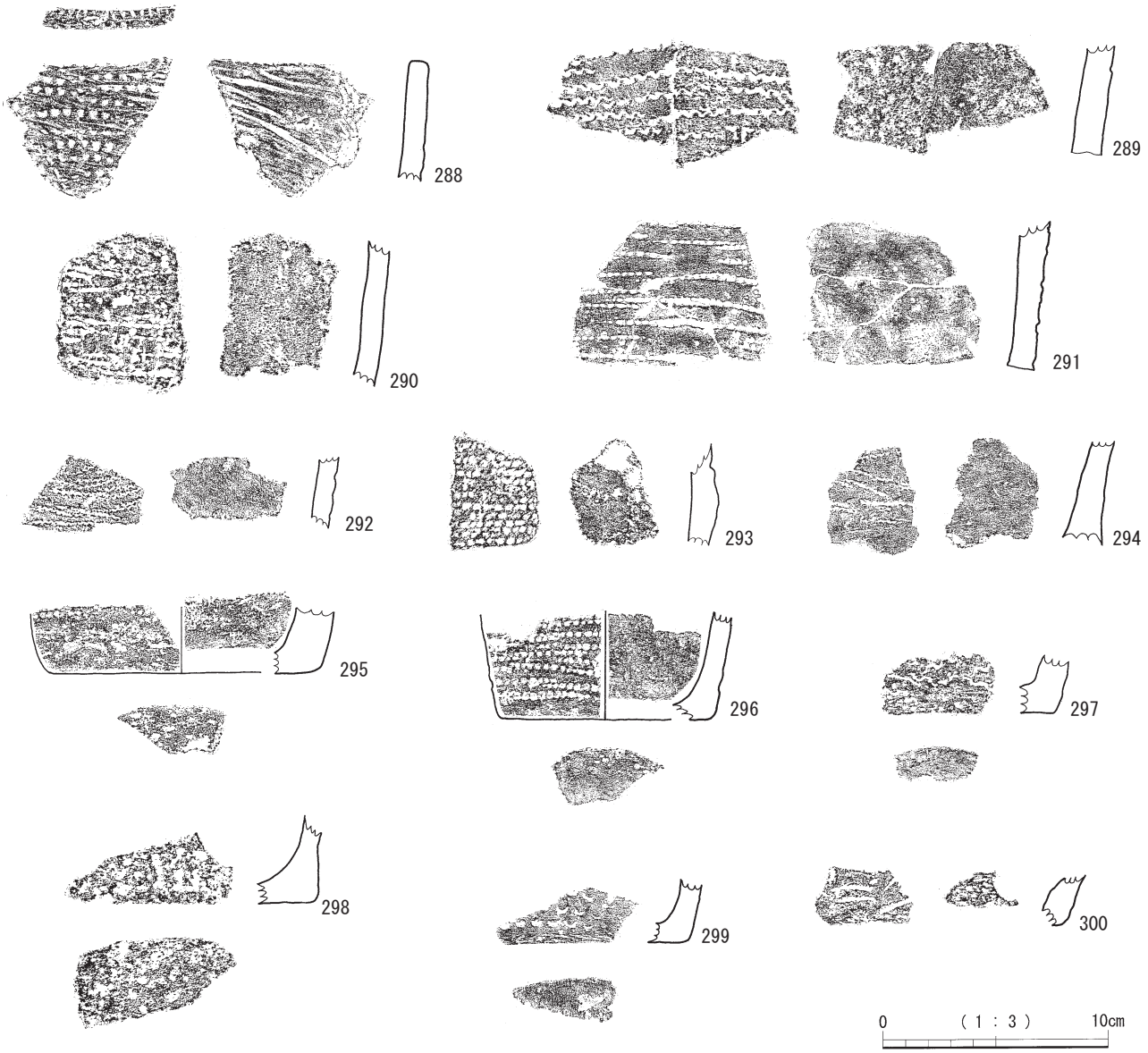


第135図　Ⅵc類土器

下位に「V」字状の貝殻刺突文を施す。土器内面に，赤色顔料を施したような痕跡が認められるが，分析の結果はⅢ類土器と同様である。255は，左右の貝殻刺突文が異なる。２種類の貝殻で施文したものと思われる。260は，全面に貝殻刺突文を施す。267は底部付近の胴部である。

268 ～ 270は底部である。268は胴部下位にかろうじて貝殻刺突文が確認できる。269は，底部下位に不規則な沈線を施し，その上に縦位の貝殻刺突文が密に施される。胎土に金雲母が認められる。270は内外面ともに丁寧にヘラナデされ，外面底部付近には横位の貝殻刺突文を数条施し，その上部に縦位の貝殻刺突文を施す。接地面は薄く煤が全面に付着している。胎土に金雲母が確認される。

271 ～ 281はⅥbの類に入るが，土器の厚みが１cm以上あるぼてっとして，赤みがかった重量感のある土器をまとめて掲載した。施文形態はⅥb類と同様であるが，貝殻刺突文が大型である。同一個体と思われる資料である。



第136図　Ⅵd類土器

Ⅵc類土器（第135図282 ～ 287）

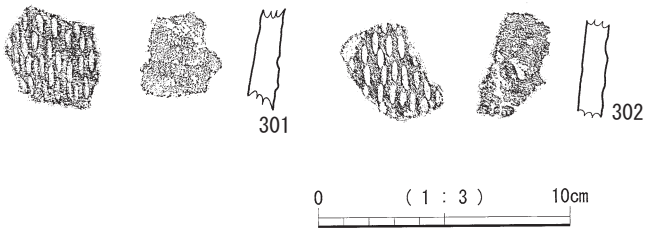
Ⅵc類は，Ⅵb類と施文形態は同じであるが，鋭角な「V」字状の貝殻刺突文をシャープに密に施す。282 ～ 287は同一個体と思われる。器壁も非常に薄い。

Ⅵd類土器（第136図288 ～ 300）

Ⅵd類は，横位ないし不規則な貝殻刺突文を施す土器で，Ⅵa類・Ⅵb類に比べ出土数が少ない。

288は，やや外傾する口縁部で，口唇部両端部にキザミが施される。胴部には整然としない横位貝殻刺突文が施される。290は，かろうじて横位の貝殻刺突文を密に施していることが確認できる。294は底部付近の胴部で，横位ないし斜位の短い貝殻刺突文を不規則に施している。

295 ～ 300は底部である。胴部下位まで横位ないし斜位の貝殻刺突文が施されている。300は，沈線が施されているが，蛤などの放射肋のない貝で，浅く刺突したように思われる。



第137図　Ⅵe類土器

Ⅵe類土器（第137図301・302）

Ⅵe類は，胴部に貝殻刺突文ではなくヘラ状工具による短沈線を施す土器である。出土数は非常に少なく，全部で５点出土し内２点図化した。

301・302は同一個体と思われる胴部である。縦位に短い沈線を施している。内面は丁寧にナデ調整され，胎土に金雲母が確認できる。

Ⅶ類土器（第139・140図）

Ⅶ類土器は，口縁部が直行ないし内湾する器形で，口唇部は平坦なものや内傾するものがある。文様は貝殻腹縁を引いて条線により短沈線様を呈するものや，櫛状工具により条線を施すものがある。条線文と斜位の貝殻刺突文が施される土器もここに分類した。また，瘤状突起を貼り付けたものもある。Ⅵ類土器と類似する点が多い土器である。

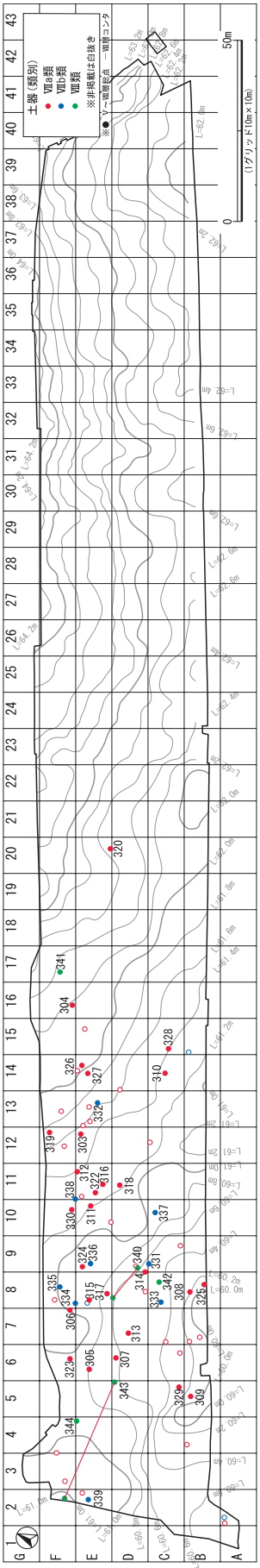
Ⅶa類土器（第139図303 ～ 330）

Ⅶa類は，口縁部に横位の貝殻刺突文や沈線を数条巡らせ，胴部に鋸歯状の条線文を施す。流水文の土器もここに分類した。

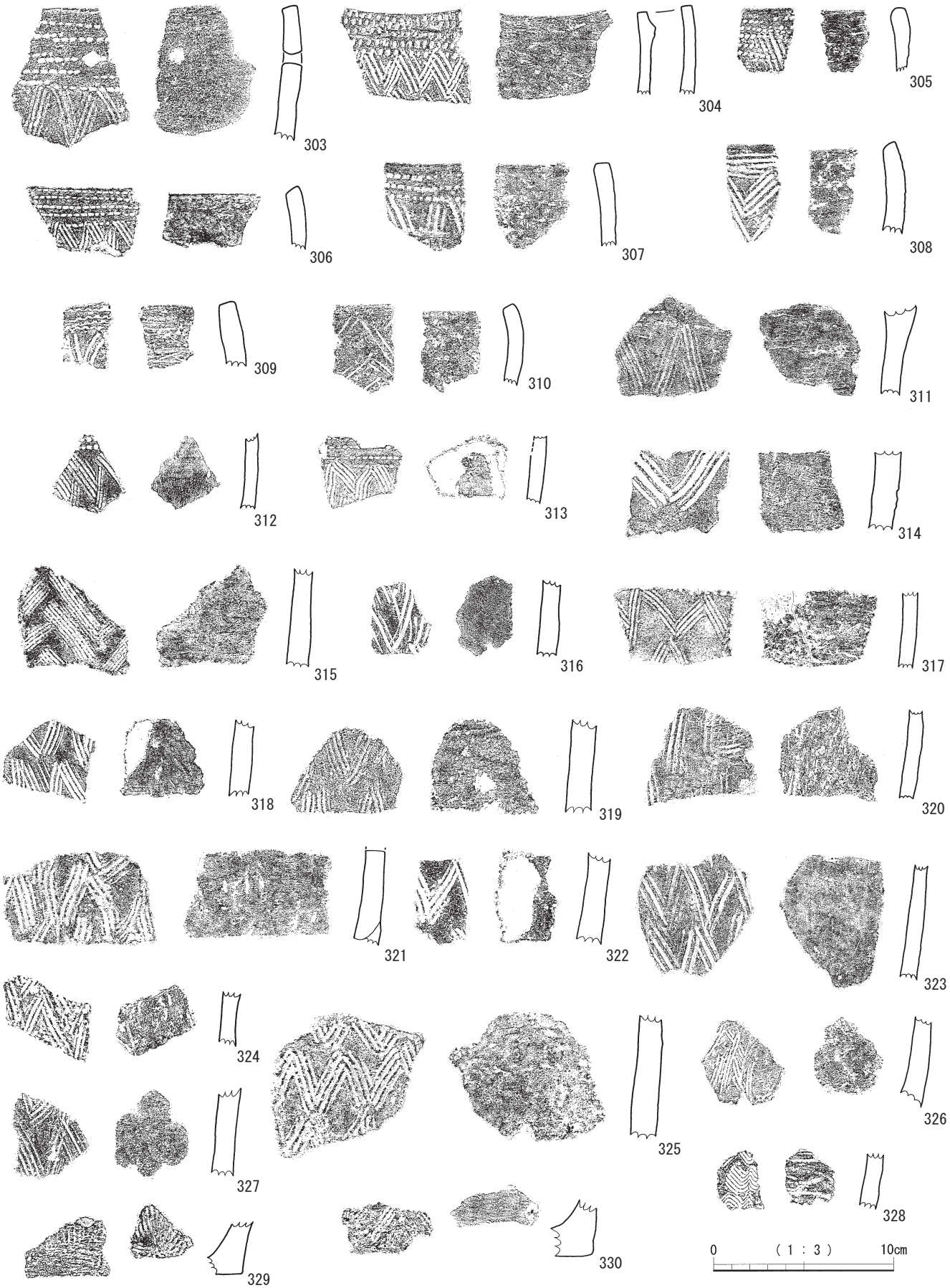
303 ～ 310は口縁部である。303は，緩やかに内湾し，口唇部は丁寧にナデ調整されている。口縁部には５条の横位貝殻刺突文が巡らされ，その下位に鋸歯状の条線文が施される。円形の補修孔が内外面より穿孔されている。内面は丁寧にナデ調整がなされている。304は，緩やかに内湾し，波状口縁を呈する。口唇部は丁寧にナデ調整がなされている。口縁部に横位の瘤状突起を貼り付け，その上から横位の貝殻刺突文を施す。その下位に鋸歯状の条線文が施される。内面は丁寧にナデ調整がなされている。305は，口縁部に横位の貝殻刺突文を７条程施す。その下位の胴部文様は，口縁部の横位貝殻刺突文を一部切るように施文されている。310は，口縁部で内湾し，口唇部が内傾する。口縁部にはヘラ状工具により横位の沈線を浅く巡らせる。その下位に櫛状工具により鋸歯状の沈線を施す。

311 ～ 328は胴部である。311は口縁部に近い胴部で，上部に瘤状突起が施され，その下位に鋸歯状の条線文を施す。胎土に金雲母が認められる。315は，４条を一単位とした短沈線を鋸歯状に施す。326は，沈線が不規則になり，鋸歯状の文様が崩れている。内面はナデ調整されている。328は，短い流水文が施されている。内面は丁寧にナデ調整される。流水文の土器はこれ１点のみである。

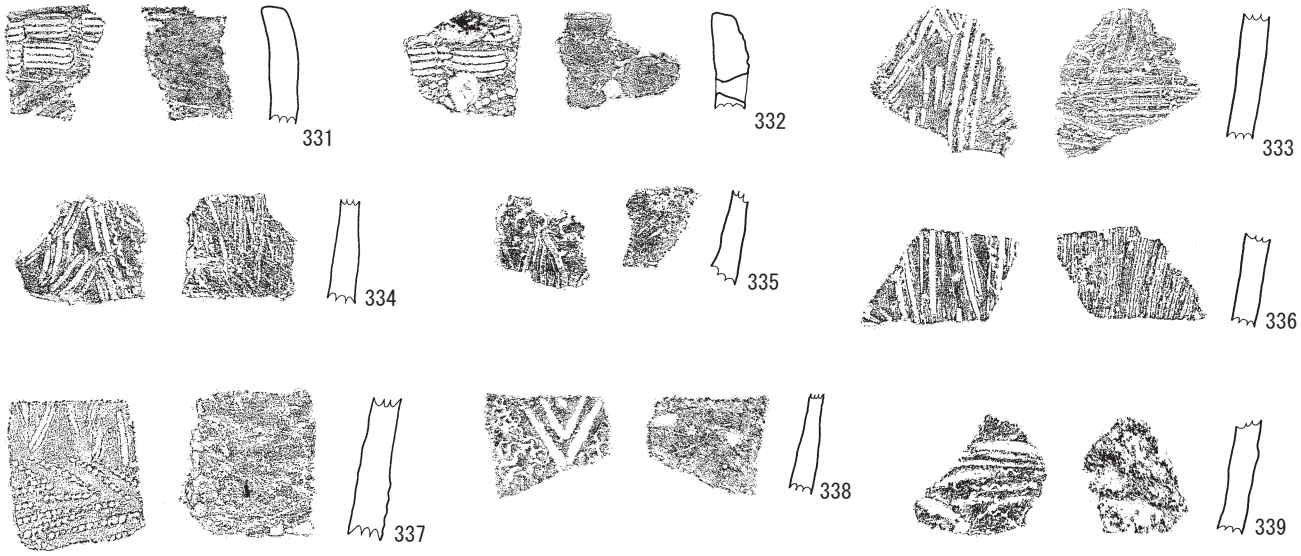
329・330は底部である。胴部下位まで条線が施されている。



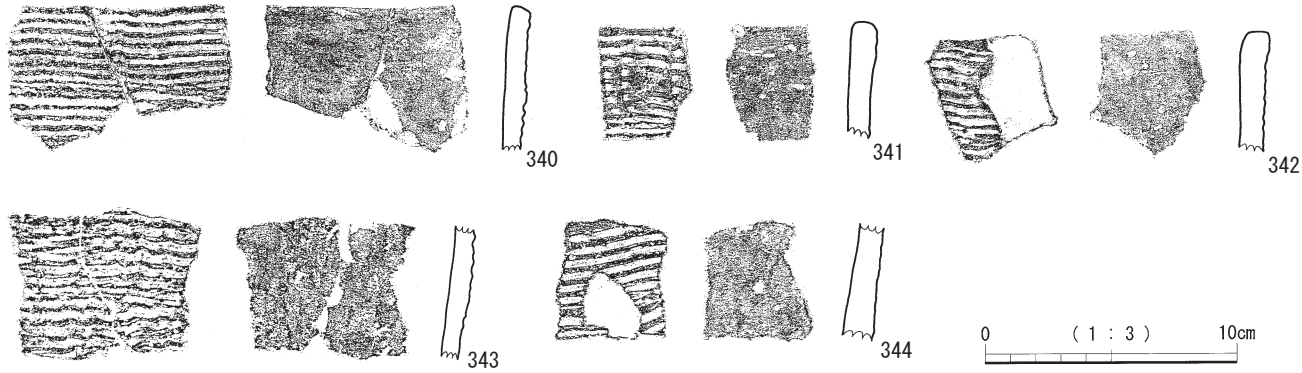
第138図　Ⅶ・Ⅷ類土器分布図


303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
0
(1 : 3)
10cm

第139図　Ⅶa類土器



第140図　Ⅶb類土器



第141図　Ⅷ類土器

Ⅶb類土器（第140図331 ～ 339）

Ⅶb類は，胴部に短沈線様の条線文と貝殻刺突文を施す土器である。Ⅵ類の土器に良く似ている。

331・332は口縁部である。口縁部で内湾し，口縁部には短条線を２条施す。その下位に斜位の貝殻刺突文を施す。口唇部および内面は丁寧にナデ調整されている。332は，円形の補修孔が両面より穿孔されている。331・332は同一個体と思われる。

333 ～ 339は胴部である。鋸歯状ないし不規則な条線文と貝殻刺突文が施される。337の貝殻刺突文の施文方法は，Ⅵa類と非常に良く似ている。Ⅶ類土器とⅥ類土器との関係が伺える。

Ⅷ類土器（第141図340 ～ 344）

Ⅷ類土器は，本遺跡から底部は出土していないが，一般的に底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる円筒形の土器である。横位の貝殻条痕文を小波状に施文する。小片のため明確な単位等は不明だが，６条程度が１つの単位となって施文される土器である。色調が淡黄色で，胎土に角閃石を含む。

340 ～ 342は口縁部である。340は，口唇部がやや丸みを帯び，わずかに外傾する。内面は丁寧にナデ調整されている。341は，口縁部が若干肥厚気味で，口唇部は丸みを帯びる。342は大部分が剥落している。口唇部は平坦である。

343・344は，口縁部下半から胴部上半にかけての資料である。横位または斜位の貝殻条痕文を小波状に施文する。内面は丁寧にナデが施されている。

Ⅸ類土器（第143図）

Ⅸ類は，器面に押型文を施す土器である。

出土地点から、山形押型文土器と楕円押型文土器を区分することができた。山形押型文土器の出土地点はE－５・６区を中心としている。これに対して，楕円押型文土器は主にD－40区を中心に出土している。山形押型文土器とは300m以上離れている。どちらも出土量は多くない。

山形押型文土器、楕円押型文土器ともに底部が出土し

ていないため、全体の器形は不明である。

Ⅸa類土器（第143図345 ～ 354）

器形は緩やかに開き、口縁部は直口する平口縁の土器である。横位ないし斜位の山形押型文を緻密に施し、口唇部及び口縁付近の内側にも施文を施している。器面は丁寧にナデ調整され、胎土、焼成ともに良好な土器である。

345 ～ 348は、口縁部である。山形押型文を横位に施し、口唇及び口縁部内面にも同様に施文している。器形は平口縁で口縁部は直口する。内面は丁寧にナデ調整されている。

349 ～ 351は口縁部に近い胴部である。丁寧にナデ調整後，横位の山形押型文が内外面に施されている。

352 ～ 354は胴部である。丁寧にナデ調整後，山形押型文が施文されている。354は施文具を一回転して土器面から離す時押圧が弱まったのか，施文が明瞭でない部分が縦状に確認される。

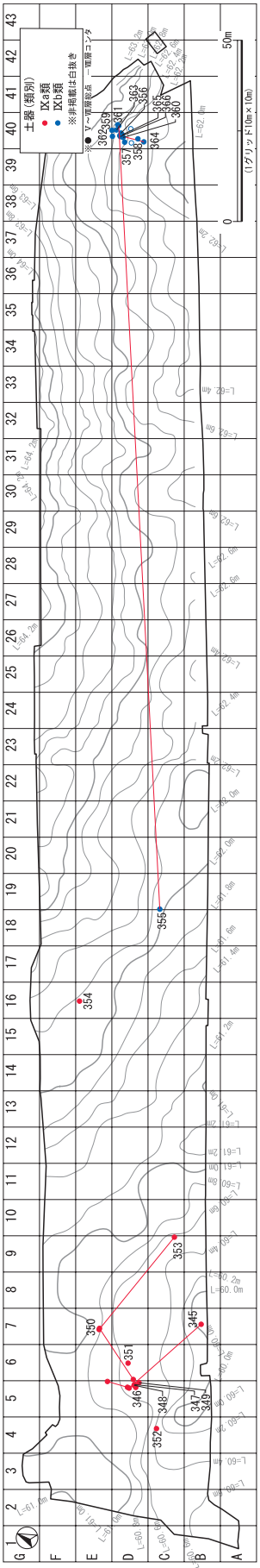
Ⅸｂ類土器（第143図355 ～ 366）

器形は緩やかに外傾し、口縁部は直口する。口唇部はナデ調整され一部山形押型文が残る。器内面は貝殻条痕文の調整痕が残る。胎土、焼成ともに良好な土器である。

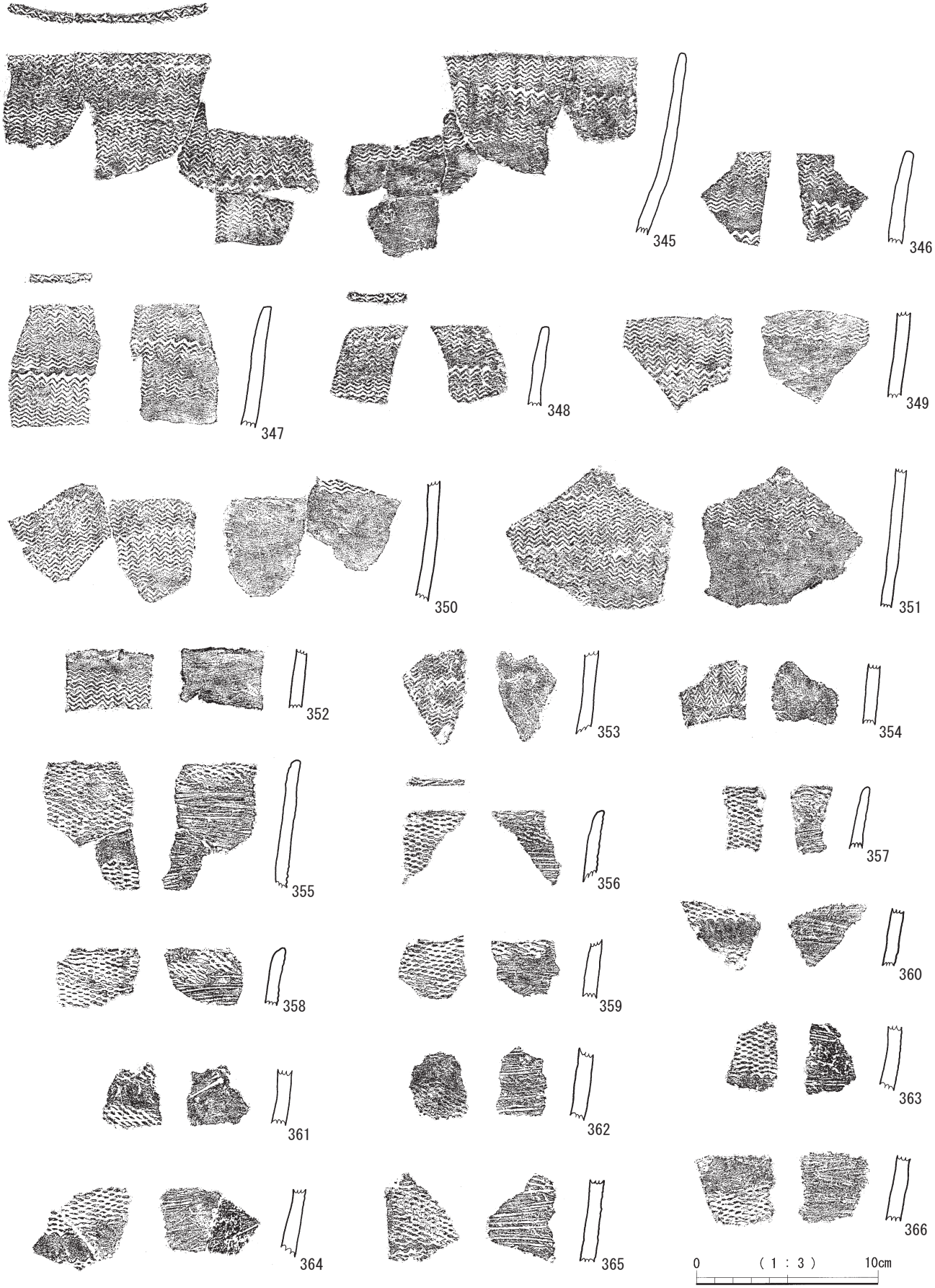
355 ～ 358は口縁部である。口縁部から胴部にかけて横位または斜位に全面的に楕円押型文を施す。口唇部及び口縁部付近の内面にも横位の楕円押型文を施す。内面の施文部下位は貝殻条痕により器面調整されている。

359 ～ 366は胴部である。359は，口縁部に近い胴部で，口縁部付近内面にも横位の楕円押型文を施している。

360 ～ 366は，横位ないし斜位に楕円押型文を施し，内面は貝殻条痕により器面調整されている。



第142図　Ⅸ類土器分布図



第143図　Ⅸa類・Ⅸb類土器

第26表　土器観察表（Ⅵa～Ⅵb類）

挿図番号	掲載番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
129	173	深鉢	口縁	Ⅵa	C9 C18 D9 F10 F12 F14	Ⅳb Ⅵ Ⅶa Ⅶb	貝殻刺突	ナデ	2.5Y5/3黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	○	○	○	金雲母, 白粒	良好	20593，20594，20595 34808，48752，54645 24205，24928
	174	深鉢	口縁	Ⅵa	F3	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐	○	○	○		良好	52821，53125
	175	深鉢	口縁	Ⅵa	E11	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	2.5Y4/2暗灰黄	7.5YR4/4褐	○	○		雲母, 白粒, 赤粒	良好	24892
	176	深鉢	口縁	Ⅵa	E9	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	2.5Y4/2暗灰黄	10YR5/4にぶい黄褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	46653
	177	深鉢	口縁	Ⅵa	D9	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/2灰黄褐	○	○	○	白粒	良好	49254
	178	深鉢	口縁	Ⅵa	C8	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/3にぶい黄褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	53568
	179	深鉢	口縁	Ⅵa	E13	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	7.5YR4/6褐	○	○		雲母, 白粒, 赤粒	良好	19621
	180	深鉢	口縁	Ⅵa	B39	Ⅶa	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5／3にぶい褐	7.5YR5/2灰褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	104913
	181	深鉢	口縁	Ⅵa	E7	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR3/3暗褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	47423
	182	深鉢	口縁	Ⅵa	C9	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	5YR2/1黒褐	5YR4/6赤褐	○	○	○	雲母, 白粒, 赤粒	良好	48747
	183	深鉢	口縁	Ⅵa	F7	Ⅶb	貝殻刺突	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	○	○		金雲母, 白粒	良好	53259
	184	深鉢	口縁	Ⅵa	E4	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	2.5Y5/2暗灰黄	○	○		金雲母, 白粒	良好	51282
	185	深鉢	口縁	Ⅵa	F8	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	46538
	186	深鉢	口縁	Ⅵa	F8	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	○	○	○	金雲母, 白粒	良好	49010
	187	深鉢	口縁	Ⅵa	E8	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	○				良好	31005
130	188	深鉢	口縁	Ⅵa	F8	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	10YR4/2灰黄褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	44152，48833，49035
	189	深鉢	口縁	Ⅵa	E6	Ⅳb	貝殻刺突	工具ナデ	10YR1/3黒褐	7.5YR2/1赤黒	△	△			良好	30870
	190	深鉢	口縁	Ⅵa	E8	Ⅳa	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	△		△	白粒, 赤粒	良好	22011
	191	深鉢	口縁	Ⅵa	E9	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR7/6橙	10YR5/3にぶい黄褐	○	○	○	白粒, 赤粒	良好	48861
	192	深鉢	口縁	Ⅵa	E6	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐	7.5YR6/6橙	○	○	○	白粒	良好	51332
	193	深鉢	口縁	Ⅵa	F3	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	○	○		金雲母, 白粒	良好	50255
	194	深鉢	口縁	Ⅵa	D8	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	○	○		雲母, 白粒, 赤粒	良好	48575
	195	深鉢	口縁	Ⅵa	D7	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	○	○	○		良好	52890，52921
	196	深鉢	口縁	Ⅵa	E6	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR4/3褐	5YR5/4にぶい赤褐	○	○	○		良好	51495
	197	深鉢	口縁	Ⅵa	E5	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	○	△	○	金雲母, 白粒	良好	51313
	198	深鉢	口縁	Ⅵa	F3	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	10YR4/2灰黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	43004
	199	深鉢	口縁	Ⅵa	D9	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	○	○	○		良好	43387
	200	深鉢	胴	Ⅵa	F12	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	7.5YR4/3褐	△	△		金雲母	良好	24207
	201	深鉢	胴	Ⅵa	E8	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR5/4にぶい黄褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	28461
	202	深鉢	胴	Ⅵa	B18	Ⅵ	貝殻刺突	—	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	○	○		金雲母	良好	20637
	203	深鉢	胴	Ⅵa	E12	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR7.3にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	○	○		金雲母, 白粒	良好	19557
131	204	深鉢	胴	Ⅵa	D15 D10	Ⅳb Ⅶa	貝殻刺突	ナデ	10YR4/2灰黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	○	○		金雲母	良好	21051，27862
	205	深鉢	胴	Ⅵa	C8	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	10YR5/3にぶい黄褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	54208
	206	深鉢	胴	Ⅵa	C8	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/3にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	○	○		雲母, 白粒, 赤粒	良好	53750
	207	深鉢	胴	Ⅵa	F8	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	△	○		金雲母, 白粒	良好	30789
	208	深鉢	胴	Ⅵb	D16	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	7.5YR6/6橙	○			金雲母	良好	7042
	209	深鉢	胴	Ⅵa	F7	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	2.5Y5/2暗灰黄	○	○		金雲母	良好	47418
	210	深鉢	胴	Ⅵa	D12	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR4/2灰黄褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	22268
	211	深鉢	胴	Ⅵa	D6	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR5/4にぶい褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	49174
	212	深鉢	胴	Ⅵa	F4	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	5YR4/3にぶい赤褐	10YR3/2黒褐	○	○	○	赤粒	良好	50861
	213	深鉢	胴	Ⅵa	C12	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	10YR5/3にぶい黄褐	○		○	赤粒	良好	24506
	214	深鉢	胴	Ⅵa	B8	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR6/6橙	○	○		金雲母, 白粒	良好	53802
	215	深鉢	胴	Ⅵa	F12	Ⅳa	貝殻刺突	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR4/2灰黄褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	6006
	216	深鉢	胴	Ⅵa	E4	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	5YR4/3にぶい赤褐	5YR 6 /6橙	○	○	○			52094
	217	深鉢	胴	Ⅵa	F9	Ⅶb	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	10YR3/3暗褐	○		○	白粒	良好	54559，54561
	218	深鉢	胴	Ⅵa	B17 E4	Ⅳb Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	2.5Y6/3にぶい黄	10YR6/4にぶい黄橙	○	○		白粒, 赤粒	良好	9519，52094
	219	深鉢	胴	Ⅵa	F12	Ⅶb	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	10YR4/2灰黄褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	24211
	220	深鉢	胴	Ⅵa	C16	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	7.5YR7/6橙	10YR7/4にぶい黄橙	○	○		赤粒	良好	8481
	221	深鉢	胴	Ⅵa	C9	Ⅴa	貝殻刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR3/2黒褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	48331
	222	深鉢	胴	Ⅵa	E8	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	10YR3/2黒褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	49063
	223	深鉢	胴	Ⅵa	E9	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	34862
	224	深鉢	底	Ⅵa	F9	Ⅶb	貝殻刺突	—	7.5YR4/2灰褐	5YR5/4にぶい赤褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	54565
	225	深鉢	底	Ⅵa	D8	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	10YR3/2暗褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	31003
	226	深鉢	底	Ⅵa	D13	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	10YR4/2灰黄褐	△	△		雲母, 白粒, 赤粒	良好	25088
	227	深鉢	底	Ⅵa	C7	Ⅳa	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐	7.5YR5/4にぶい褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	21743
	228	深鉢	底	Ⅵa	E9	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	7.5YR5/4にぶい褐	△	△		金雲母	良好	34874
132	229	深鉢	口縁	Ⅵb	F8 F9	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	5YR5/4にぶい赤褐	△	△		雲母, 白粒, 赤粒	良好	26106，28425
	230	深鉢	口縁	Ⅵb	C2	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR4/2灰黄褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	52204
	231	深鉢	口縁	Ⅵb	D13	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	2.5Y6/3にぶい黄	10YR6/4にぶい黄橙	○	○		白粒	良好	25098
	232	深鉢	口縁	Ⅵb	C2	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	○			金雲母	良好	52207
	233	深鉢	口縁	Ⅵb	A1	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	5YR4/4にぶい赤褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	53155
	234	深鉢	口縁	Ⅵb	C2	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐	5YR4/4にぶい赤褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	50491

第27表　土器観察表（Ⅵb ～Ⅵd類）

挿図番号	掲載番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
132	235	深鉢	口縁	Ⅵb	F8	Ⅳa	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	△	△		金雲母, 白粒, 赤粒	良好	23594
	236	深鉢	口縁	Ⅵb	C15	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	5YR5/6明赤褐	○		○	金雲母, 白粒	良好	19263
	237	深鉢	口縁	Ⅵb	D11	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	10YR4/2灰黄褐	10YR3/2黒褐	○		○		良好	23341
	238	深鉢	口縁	Ⅵb	C9	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	7.5YR4/3褐	○	○	○	白粒	良好	53821, 53973
	239	深鉢	口縁	Ⅵb	C3	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	2.5YR5/6明赤褐色	5YR6/2灰褐色	◎		○		良好	51997
	240	深鉢	口縁	Ⅵb	D11	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	2.5Y4/4オリーブ褐	10YR5/4にぶい黄褐	△			金雲母, 白粒, 赤粒	良好	46349
	241	深鉢	口縁	Ⅵb	B13	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR7/6橙	10YR5/3にぶい黄褐	○	○			良好	19350
	242	深鉢	口縁	Ⅵb	E12	Ⅶa	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	7.5YR5/3にぶい褐	○	○	○		良好	25080
	243	深鉢	口縁	Ⅵb	D7	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR4/6褐	5YR4/6赤褐	○		○	金雲母, 白粒	良好	52920
	244	深鉢	口縁	Ⅵb	E4	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	10YR4/2灰黄褐	10YR4/3にぶい黄褐	△			金雲母	良好	52341
	245	深鉢	口縁	Ⅵb	E9	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	5YR4/3にぶい赤褐	○	○		白粒, 赤粒	良好	34877
	246	深鉢	口縁	Ⅵb	C12	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	○	○		金雲母, 白粒	良好	25136
	247	深鉢	口縁	Ⅵb	F8	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	43001
	248	深鉢	口縁	Ⅵb	E16	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐	5YR4/3にぶい赤褐	○		○		良好	19692
133	249	深鉢	胴	Ⅵb	E5	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	○	○		金雲母, 白粒	良好	51335
	250	深鉢	胴	Ⅵb	F6	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	○	○	○	金雲母, 白粒	良好	45145
	251	深鉢	胴	Ⅵb	D11	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/2灰黄褐	△	△		白粒, 赤粒	良好	25194
	252	深鉢	胴	Ⅵb	D7	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	2.5Y6/2灰黄	10YR5/4にぶい黄褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	49181
	253	深鉢	胴	Ⅵb	D7 F7	Ⅳb Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	○	○		金雲母, 白粒	良好	36670, 45138
	254	深鉢	胴	Ⅵb	F9	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	5YR5/6明赤褐	○	○	○	白粒	良好	48926
	255	深鉢	胴	Ⅵb	F8	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	10YR5/3にぶい黄褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	48948
	256	深鉢	胴	Ⅵb	F12	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	10YR3/3暗褐	○		○		良好	20877
	257	深鉢	胴	Ⅵb	C2	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	△	△		金雲母, 白粒	良好	52398
	258	深鉢	胴	Ⅵb	C13	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	10YR6/4にぶい黄橙	○	○	○		良好	24833
	259	深鉢	胴	Ⅵb	D12	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	2.5Y4/2暗灰黄	△	△	△	白粒, 赤粒	良好	25243
	260	深鉢	胴	Ⅵb	E4	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐	10YR5/4にぶい黄褐	○	○	○	金雲母, 白粒	良好	52485
	261	深鉢	胴	Ⅵb	D8	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR4/3褐	△	△	△	金雲母, 白粒	良好	45205
	262	深鉢	胴	Ⅵb	D5	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	2.5Y5/2暗灰黄	○	○		金雲母, 白粒	良好	51667
	263	深鉢	胴	Ⅵb	D9	Ⅶb	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	54807
	264	深鉢	胴	Ⅵb	B6	Ⅳa	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	23363
	265	深鉢	胴	Ⅵb	E33	Ⅶa	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	5YR6/6橙	○	○	○		良好	104912
	266	深鉢	胴	Ⅵb	C7	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	2.5Y5/3黄褐	○			金雲母, 白粒	良好	53651
	267	深鉢	胴	Ⅵb	F3	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR7/6橙	○	○		金雲母, 白粒	良好	53117
	268	深鉢	底	Ⅵb	C2	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	10YR4/2灰黄褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	50527
	269	深鉢	底	Ⅵb	E6	Ⅶ	貝殻刺突, 沈線	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR4/3褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	52132
	270	深鉢	底	Ⅵb	F12	Ⅶa	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	2.5Y5/2暗灰黄	○	○		金雲母, 白粒	良好	24208
134	271	深鉢	口縁	Ⅵb	F4	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	2.5YR5/6明赤褐	7.5YR6/6橙	○	○	○		良好	53111
	272	深鉢	口縁	Ⅵb	F3	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	10YR5/6黄褐	7.5YR6/6橙	○	△	○		良好	52811
	273	深鉢	胴	Ⅵb	F4	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/6明褐	○	○	○		良好	51733
	274	深鉢	胴	Ⅵb	F3	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	2.5YR4/4にぶい赤褐	2.5YR4/6赤褐	○	△			良好	52820, 53822 53124, 53200
	275	深鉢	胴	Ⅵb	F8	Ⅳa	貝殻刺突	ナデ	5YR4/8赤褐	10YR5/4にぶい黄褐	◎	○	○		良好	24127
	276	深鉢	胴	Ⅵb	D2	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	7.5YR4/3褐	○			金雲母	良好	49424
	277	深鉢	胴	Ⅵb	C14	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	2.5YR5/6明赤褐	7.5YR4/6褐	○	○	○		良好	19293
	278	深鉢	底	Ⅵb	F4	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	2.5YR4/6赤褐	10YR3/1黒褐	○	○	○		良好	50854
	279	深鉢	底	Ⅵb	B13	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	5YR4/8赤褐	5YR4/8赤褐	○	○			良好	19385
	280	深鉢	底	Ⅵb	F3	Ⅶa	貝殻刺突	ナデ	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR2/2極暗赤褐	◎	○			良好	53125
	281	深鉢	底	Ⅵb	F4	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐	7.5YR4/6褐	○	○			良好	51732
135	282	深鉢	胴	Ⅵc	D10	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/2灰黄褐	△	△		金雲母, 白粒, 赤粒	良好	28123
	283	深鉢	胴	Ⅵc	D10	Ⅳa	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	10YR3/2黒褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	23069
	284	深鉢	胴	Ⅵc	D8	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	7.5YR4/3褐	10YR3/2黒褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	28478
	285	深鉢	胴	Ⅵc	C7	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	10YR4/2灰黄褐	○	○	○	金雲母	良好	54244
	286	深鉢	胴	Ⅵc	C12	Ⅵ	貝殻刺突		5YR5/6明赤褐	5YR3/3暗赤褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	24779
	287	深鉢	胴	Ⅵc	B6	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	7.5YR4/3褐	7.5YR4/2灰褐	○	○		白粒	良好	38115
136	288	深鉢	口縁	Ⅵd	F38	Ⅳb	貝殻刺突	条痕	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	○	○	○	金雲母	良好	101576
	289	深鉢	胴	Ⅵd	C2･3	Ⅵ Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	2.5YR5/6明赤褐	10YR7/3にぶい黄橙	○	○		金雲母, 白粒	良好	52623, 50511
	290	深鉢	胴	Ⅵd	E9	Ⅶb	貝殻刺突	ナデ	7.5YR6/6橙	10YR5/2灰黄褐	○	○	○	金雲母, 白粒	良好	53270
	291	深鉢	胴	Ⅵd	E7	Ⅶ	貝殻刺突	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	2.5Y5/3黄褐	○	○	△	金雲母, 白粒	良好	51431
	292	深鉢	胴	Ⅵd	E12	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐	10YR5/3にぶい黄褐	○	○	○	金雲母, 白粒	良好	18314
	293	深鉢	胴	Ⅵd	E14	Ⅵ	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR4/4にぶい赤褐	○	○	○	金雲母, 白粒	良好	17226
	294	深鉢	胴	Ⅵd	D11	Ⅵ	貝殻刺突	条痕	10YR6/3にぶい黄橙	2.5Y4/2暗灰黄	△	△		金雲母, 白粒, 赤粒	良好	25199
	295	深鉢	底	Ⅵd	E12	Ⅶa	貝殻刺突	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/3にぶい黄褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	25081
	296	深鉢	底	Ⅵd	F8	Ⅳb	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐	10YR4/2灰黄褐	○	○	○	金雲母, 白粒	良好	47388
	297	深鉢	底	Ⅵd	D7	Ⅶb	貝殻刺突	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR3/3暗赤褐	△	△		金雲母, 白粒, 赤粒	良好	53448
	298	深鉢	底	Ⅵd	B7	Ⅶb	貝殻刺突	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	○	○		金雲母, 白粒	良好	54169
	299	深鉢	底	Ⅵd	B7	Ⅶb	貝殻刺突	ナデ	5YR6/6橙	7.5YR4/3褐	○	○	△	金雲母, 白粒	良好	54299
	300	深鉢	底	Ⅵd	E6	Ⅳb	条痕	ナデ	10YR4/6褐	10YR5/3にぶい黄褐	○	○	○	白粒	良好	47495

第28表　土器観察表（Ⅵe ～Ⅸb類）

挿図番号	掲載番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
137	301	深鉢	胴	Ⅵe	C12	Ⅵ	短沈線	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	24851
	302	深鉢	胴	Ⅵe	D13	Ⅵ	短沈線	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	24615
139	303	深鉢	口縁	Ⅶa	E14	Ⅵ	貝殻刺突，条線	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/4にぶい黄褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	19571
	304	深鉢	口縁	Ⅶa	F16	Ⅳa	貝殻刺突，条線	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR4/3にぶい黄褐	△	△	○	金雲母	良好	17402
	305	深鉢	口縁	Ⅶa	E6	Ⅶ	貝殻刺突，条線	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR6/4にぶい黄橙	○	○	○		良好	51488
	306	深鉢	口縁	Ⅶa	F7	Ⅵ	貝殻刺突，条線	ナデ	5YR4/4にぶい赤褐	5YR4/4にぶい赤褐	△	△	○	金雲母, 白粒	良好	45110
	307	深鉢	口縁	Ⅶa	D6	Ⅶ	貝殻刺突，条線	ナデ	10YR5/2灰黄褐	10YR4/2灰黄褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	52875
	308	深鉢	口縁	Ⅶa	B8	Ⅳa	条線	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	5YR5/6明赤褐	△	△	△	金雲母, 白粒	良好	54328
	309	深鉢	口縁	Ⅶa	B5	Ⅳb	貝殻刺突，条線	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR7/6明黄褐	○	○	○		良好	45575
	310	深鉢	口縁	Ⅶa	C14	Ⅵ	沈線	ナデ	7.5YR3/1黒褐	7.5YR5/4にぶい褐	○	○	○	白粒	良好	19294
	311	深鉢	胴	Ⅶa	E10	Ⅶb	貝殻刺突，条線	ナデ	10YR4/2灰黄褐	5YR5/6明赤褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	53333
	312	深鉢	胴	Ⅶa	E11	Ⅳa	貝殻刺突，条線	ナデ	7.5YR4/2灰褐	10YR3/2黒褐	△	△		金雲母	良好	5472
	313	深鉢	胴	Ⅶa	D7	Ⅶb	貝殻刺突，条線	ナデ	10YR4/2灰黄褐	5YR2/3暗赤褐	○	△		金雲母, 白粒	良好	53457
	314	深鉢	胴	Ⅶa	D9	Ⅶ	条線	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	10YR4/2灰黄褐	△	○		金雲母, 白粒	良好	53968
	315	深鉢	胴	Ⅶa	E8	Ⅵ	短沈線	ナデ	5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐	○	○			良好	46537
	316	深鉢	胴	Ⅶa	E11	Ⅳa	条線	ナデ	7.5YR6/6橙	10YR4/2灰黄褐	○	○	○	白粒	良好	5468
	317	深鉢	胴	Ⅶa	E8	Ⅵ	条線	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	△	○		金雲母, 白粒	良好	53549
	318	深鉢	胴	Ⅶa	D11	Ⅵ	条線	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR3/1黒褐	△	△		金雲母, 白粒	良好	25041
	319	深鉢	胴	Ⅶa	F12	Ⅳa	条線	ナデ	7.5YR5/3にぶい褐	7.5YR4/2灰褐	△	○		金雲母, 白粒	良好	23965
	320	深鉢	胴	Ⅶa	E20	Ⅶb	条線	ナデ	7.5YR6/6橙	2.5Y5/3黄褐	○	○	○		良好	20272
	321	深鉢	胴	Ⅶa	－	Ⅵ	条線	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	7.5YR5/4にぶい褐	△	○		金雲母, 白粒	良好	4T埋土
	322	深鉢	胴	Ⅶa	E11	Ⅳa	条線	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	10YR4/3にぶい黄褐	△	○		金雲母, 白粒	良好	5454
	323	深鉢	胴	Ⅶa	F6	Ⅶ	条線	ナデ	10YR4/2灰黄褐	10YR3/2黒褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	49659
	324	深鉢	胴	Ⅶa	E9	Ⅵ	条線	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	48908
	325	深鉢	胴	Ⅶa	B8	Ⅶb	条線	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	7.5YR5/4にぶい褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	55017
	326	深鉢	胴	Ⅶa	E14	Ⅵ	条線	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR4/2灰黄褐	○	○			良好	17203
	327	深鉢	胴	Ⅶa	E14	Ⅵ	条線	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	10YR5/2灰黄褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	17212
	328	深鉢	胴	Ⅶa	C15	Ⅳb	条線・流水文	ナデ	5YR4/4にぶい赤褐	7.5YR4/3褐	△	○		金雲母, 白粒	良好	14156
	329	深鉢	底	Ⅶa	C5	Ⅳb	条線	ナデ	5YR6/6橙	10YR6/4にぶい黄橙	△	○		金雲母, 白粒	良好	32903
	330	深鉢	底	Ⅶa	F10	Ⅶb	条線	ナデ	7.5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐	○	○			良好	54591
140	331	深鉢	口縁	Ⅶb	C9	Ⅶ	貝殻刺突，条線	ナデ	10YR4/2灰黄褐	10YR3/2黒褐	△	○		金雲母, 白粒	良好	53828
	332	深鉢	口縁	Ⅶb	E13	Ⅵ	貝殻刺突，条線	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	○	○		金雲母, 白粒	良好	17237
	333	深鉢	胴	Ⅶb	C8	Ⅶ	貝殻刺突，条線	工具ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	○	○		白粒, 赤粒	良好	53757
	334	深鉢	胴	Ⅶb	F8	Ⅳb	貝殻刺突，条線	ケズリ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR4/2灰黄褐	○	○	○		良好	31016
	335	深鉢	胴	Ⅶb	F8	Ⅳa	貝殻刺突，条線	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐色	7.5YR4/3褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	24119
	336	深鉢	胴	Ⅶb	E9	Ⅳb	貝殻刺突，条線	工具ナデ	5YR6/6橙	5YR6/4にぶい橙	○	○			良好	46654
	337	深鉢	胴	Ⅶb	C10	Ⅶ	貝殻刺突，条線	ナデ	5YR5/6明赤褐	7.5YR5/6明褐	○	○			良好	53857
	338	深鉢	胴	Ⅶb	F11	Ⅳa	貝殻刺突，条線	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	○	○	○		良好	44046
	339	深鉢	胴	Ⅶb	E2	Ⅳb	貝殻刺突，条線	ナデ	2.5YR4/4にぶい赤褐色	5YR4/6赤褐色	○	○		金雲母, 白粒	良好	42923
141	340	深鉢	口縁	Ⅷ	D9 D8	Ⅳb Ⅶb	貝殻条痕	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	△	△	○		良好	47751，53979
	341	深鉢	口縁	Ⅷ	F17	Ⅵ	貝殻条痕	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	○	△	◎		良好	17399
	342	深鉢	口縁	Ⅷ	C8	Ⅶ	貝殻条痕	ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	○	△	○		良好	54879
	343	深鉢	胴	Ⅷ	B3	Ⅶ	貝殻条痕	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	○	△	◎		良好	51366，52164
	344	深鉢	口縁	Ⅷ	E4	Ⅶ	貝殻条痕	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	○	△	◎		良好	51283
143	345	深鉢	口縁	Ⅸa	E5 B7 D5	Ⅶ	押型	押型，ﾅﾃ	10YR6/2灰黄褐色	10YR6/2灰黄褐色	△	△		黒雲母	良好	51895，52331 52550，54843
	346	深鉢	口縁	Ⅸa	D5	Ⅶ	押型，ナデ	押型	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3にぶい黄橙色	△	△		黒雲母	良好	52032
	347	深鉢	口縁	Ⅸa	D5	Ⅶ	押型	押型，ﾅﾃﾞ	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3にぶい黄橙色	△	△		黒雲母	良好	52546
	348	深鉢	口縁	Ⅸa	D5	Ⅶ	押型，ナデ	押型	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3にぶい黄橙色	△	△		黒雲母	良好	52545
	349	深鉢	胴	Ⅸa	D5	Ⅶ	押型	押型，ﾅﾃﾞ	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3にぶい黄橙色	△	△		黒雲母	良好	51192
	350	深鉢	胴	Ⅸa	E7	Ⅶ	押型	ナデ	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3にぶい黄橙色	○	△		黒雲母	良好	49495
	351	深鉢	胴	Ⅸa	D6	Ⅶ	押型	押型，ﾅﾃﾞ	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3にぶい黄橙色	△	△		黒雲母	良好	52867
	352	深鉢	胴	Ⅸa	C4	Ⅶ	押型，ナデ	ナデ	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3にぶい黄橙色	△	△		黒雲母	良好	52025
	353	深鉢	胴	Ⅸa	E7	Ⅶ	押型	ナデ	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/3にぶい黄橙色	△	△		黒雲母	良好	49500
	354	深鉢	胴	Ⅸa	E16	Ⅵ	押型	ナデ	5YR5/6明赤褐色	5YR5/4にぶい赤褐色	△	△		黒雲母	良好	17405
	355	深鉢	口縁	Ⅸb	D40	Ⅶa	押型，ヘラナデ	押型，ヘラナデ	2.5YR5/6明赤褐色	2.5YR5/6明赤褐色	△	○		黒雲母	良好	104838，104916
	356	深鉢	口縁	Ⅸb	D40	Ⅶa	押型	条痕，押型	10R4/3赤褐色	10R4/3赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104840
	357	深鉢	口縁	Ⅸb	D40	Ⅶa	押型	条痕，ﾅﾃﾞ	10R5/6赤色	10R5/6赤色	△	△		黒雲母	良好	104844
	358	深鉢	口縁	Ⅸb	D40	Ⅶa	押型	条痕，押型	10R4/6赤色	10R5/3赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104834
	359	深鉢	胴	Ⅸb	D40	Ⅶa	押型	押型，ヘラナデ	10R4/4赤褐色	10R5/6赤色	△	△		黒雲母	良好	104914
	360	深鉢	胴	Ⅸb	D40	Ⅶa	押型，ナデ	ヘラナデ	2.5YR5/6明赤褐色	2.5YR4/4にぶい赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104843
	361	深鉢	胴	Ⅸb	D40	Ⅶa	押型，ナデ	ナデ	10R5/4赤褐色	10R5/4赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104839
	362	深鉢	胴	Ⅸb	D40	Ⅶa	押型，ナデ	条痕	10R5/4赤褐色	10R5/4赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104847
	363	深鉢	胴	Ⅸb	D40	Ⅶa	押型，ナデ	条痕	10R4/3赤褐色	10R5/4赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104913
	364	深鉢	胴	Ⅸb	D40	Ⅶa	押型，ナデ	ナデ	10R5/6赤色	10R5/4赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104833，104841
	365	深鉢	胴	Ⅸb	D40	Ⅵ	押型	条痕	10R5/6赤色	10R4/2灰赤色	△	○		黒雲母	良好	104816
	366	深鉢	胴	Ⅸb	D40	Ⅵ	押型，ナデ	条痕，ナデ	10R4/4赤褐色	10R5/4赤褐色	△	△		黒雲母	良好	104815

（2）石器

縄文時代早期石器の概要

縄文時代早期の包含層出土の石器については，器種により層位的な出土状況の違いと形態差がみられることから，Ⅶ層，Ⅵ層に分けて掲載している。相対的に出土数の少なかったⅤ層及びⅧ層の出土石器は，縄文時代早期の土器の出土状況から判断して同時期の遺物として，それぞれⅦ層とⅥ層に含めて掲載している。

石器や剥片は調査区西端部の崖近くから14区付近で集中的に出土しており，本遺跡の縄文時代早期の竪穴建物跡や土坑・集石等の遺構の分布の状況とほぼ重なる。このほかのエリアでは点在的に出土している。 遺物の中での石器の取り上げ点数は1,438点で，このうち334点を掲載している。

本遺跡では，安山岩Ｃ類と頁岩Ｂ類の２種類の石材の剥片が多数出土している。これに使用される頁岩Ｂ類には岩石中の鉄分がわずかに錆のように付着している。最大長約10cm程度の掌に納まる大きさのものが殆どである。その中から微細な調整剥離が施されていたり，縁辺に使用による明瞭な擦れが確認できるものを選別して掲載している。総じて使用の痕跡は軽微で，用途も不明だが今後の考証が必要である。Ⅶ層掲載遺物S189・S190とⅥ層掲載遺物S324 ～ S330・S333がこれに該当する。

石斧の分類について

掲載した遺物の中で，石斧をⅠ～Ⅳ類に分類した。Ⅰ類はさらにa，b類に細分した。この分類はⅦ層・Ⅵ層出土石斧に共通して用いている。

Ⅰ類：磨製石斧のうち基部に厚みのあるもの。小型のものも数点みられるが，大型のものが多く出土している。刃部のみ残存するものや，欠損後に磨敲石として転用されているものも推定可能なものはここに分類した。

Ⅰ－a類：断面が楕円形であり頭部の細いもの。いわゆる乳棒状磨製石斧。表面に製作時の敲打痕を残し，両刃である。

Ⅰ－b類：両側縁が研磨され，断面が隅丸長方形であるもの。いわゆる定角式磨製石斧。刃部は基本的に丸みのある両刃である。

Ⅱ類：磨製石斧のうち基部の厚みが薄いもの。Ⅰ類と比較すると小型のものが多く出土している。製作方法としては，両面研磨のものと，片面研磨で裏面に剥離面をそのまま残すものとがみられ，形態も短冊形のものと，バチ形のものがみられる。

Ⅲ類：片面を研磨した石斧であり，裏面は剥離面を残し，打製で仕上げている。形態もバチ形のものと円形のものがみられる。基本的に片刃である。

Ⅳ類：打製石斧。小型のものが多く，欠損品が殆どである。一部に抉りのあるものもみられる。

石材の分類について

本遺跡出土の石器に使用される石材については，肉眼観察により，以下のように分類した。

第29表　小牧遺跡石材分類表

石材	分類	特徴
黒曜石	A類	黒色～飴色の基質で，１～２ｍｍ大の淡い灰色のガラス質の粒子，白色粒子を中心とした不純物を非常に多く含む。光沢があり，透光性はやや高い。三船。
	B類	黒色の基質でわずかに不純物を含む。光沢はにぶく，透光性は低いかほぼない。上牛鼻，平古場。
	C類	飴色の基質で，白色粒子や角閃石などの不純物をわずかに含む。A類・B類に比べ，光沢と透明感があり，透光性は高い。桑ノ木津留，日東，腰岳。
	D類	青みがかったグレーの基質で不純物は少ない。光沢はにぶく，透光性はほぼない。針尾などの西北九州系。
	E類	薄いグレーの基質で不純物は少ない。光沢は鈍く，透光性は低い。姫島。
頁岩	A類	粒子が細かく，珪質化しておりにぶい光沢がある。基質は灰色とオリーブ褐色のものがみられる。珪質頁岩。
	B類	粒子が細かく，均質である。不純物が少ない。鉄分が付着しているものも多数確認できる。本遺跡ではこの素材の剥片が多く出土しており，一部に加工・使用の痕跡がみられるが使用法は不明である。粘板岩質のものもみられる。
	C類	節理が発達したもの。旧石器時代に使用される。
安山岩	A類	不純物をわずかに含み，基質はざらついた質感を呈し，黒灰色～明灰色を呈するもの。
	B類	石英・長石を主体とした砂粒状の斑晶の混入が肉眼で確認できる。多孔質のものと緻密なものがみられる。本遺跡では礫石器類に使用される。
	C類	A・B類と比較すると淡い灰色の色調である。本遺跡ではこの素材の剥片が多く出土しており，一部に加工・使用の痕跡がみられるが使用法は不明である。輝石安山岩。
砂岩		粒子が細かく不純物が少ないものと，礫混じりのものとがみられ，比較的に軟質である。本遺跡では，砥石・礫石器類に使用される。
凝灰岩		クリーム色・ピンク色を呈するものが多い。異質岩片を含む粒子の大きいものもみられる。軟質である。
ホルンフェルス		粒子が比較的細かく，やや緻密である。硬質。橙色の微粒を含むものと，節理が発達したものとがみられる。泥岩～砂岩質のもの。
花崗岩		石英・長石・雲母の細粒結晶の集合体。国見山系のもの（結晶が大きく金雲母を多量に含む）と高隈山系のもの（結晶が小さく黒雲母を含む）とがみられる。本遺跡では礫石器類に使用される。
蛇紋岩		緑がかった黒色を呈し，非常に硬質。本遺跡では主に磨製石斧として用いられる。
軽石		
チャート		油脂光沢に富む。灰・緑・白・茶・黒・赤など色調は違うが一括した。剥片石器として使用される。
玉髄		基質が珪質分に富み，白色・灰色・黄褐色・赤色のマーブル状の色調を呈するもの。剥片石器として使用される。
鉄石英		玉髄のなかで，鮮やかな赤色を呈するもの。剥片石器として使用される。
石英		乳白色を呈する。円礫化したものが多いが，硬質なためわずかに角が残る。本報告では水晶化した透明なものも含む。

Ⅶ層出土石器（第145 ～ 156図S145 ～ S250）

Ⅶ層からは，総数724点の石器が出土した。その石材や各器種の点数はＰ188第32表に示している。器種ごとの点数は，石鏃22点（未製品３点を含む），小型で精製のスクレイパー３点，大型で粗製のスクレイパー４点，石錐１点，楔形石器４点，二次加工や使用痕跡のある剥片16点（うち黒曜石・チャート製などの小型のもの９点，頁岩Ｂ類・安山岩Ｃ類製などの大型のもの７点），磨製石斧27点，打製石斧６点，礫器56点，石錘９点，磨敲系石器170点，砥石４点，石核（残核を含む）６点，軽石加工品２点，異形石器１点，玦状耳飾１点である。

S145 ～ S164は石鏃である。S145 ～ S150は平基もしくは抉りが浅いタイプである。側縁部はやや外湾する。S145は黒曜石Ｃ類製の平基の小型三角形鏃である。基部は左右非対称である。S146はチャート製で基部は左右非対称であり、抉りのごく浅い二等辺三角形鏃である。S147は安山岩Ａ類製で平基で大型の二等辺三角形鏃である。S148 ～ S150は浅い抉りの二等辺三角形鏃である。S148は黒曜石Ｃ類製で右脚部を欠損する。側辺部は直線的で脚端部は丸みを帯びる。S149は黒曜石Ａ類製で左脚部と右脚端部を欠損する。側縁部は外湾する。S150は頁岩Ａ類製の縦長の形態で，脚端部は先細り側辺部は直線的である。

S151 ～ S154は山形の抉りをもつタイプである。S151・S152は安山岩Ａ類製で形態は正三角形である。S151は脚端部は先細り側縁部はわずかに外湾する。S152は深いＵ字状の抉りを持ち脚端部は丸い。先端部を欠損する。S153・S154は脚端部が尖り側縁部は大きく外湾する。二等辺三角形の形態である。表裏に大きな剥離面を残す。S153は安山岩Ａ類製で左脚部を欠損し，S154は赤色のチャート製で右脚部を欠損する。S155 ～ S161はＵ字状の抉りを持つタイプである。S155 ～ S158は脚端部に丸みを持ち側辺部が直線的なものである。S155は黒曜石Ｂ類製である。S156は石英製で両脚を欠損する。S157は灰色のチャート製でやや大型である。右脚部を欠損する。S158は鉄石英製で左脚部と先端部を欠損する。やや内湾気味に開いた脚部で縦長の形態である。脚端部は丸い。S159 ～ S161は縦長のプロポーションで抉りが深く，脚端部は平坦に成形される。S159は灰色のチャート製で側辺部は直線的である。S160は頁岩Ａ類製で脚端部は先細り、わずかに平坦な面を作る。側縁部は内湾気味で細身の印象である。左脚部を欠損する。S161は黒色のチャート製で，完形の大型品である。側縁部は直線的である。S162・S163は黒曜石Ｃ類製の未製品とみられる。S164はシルト質頁岩製で抉りはごく浅く先端部が極端に先細る形態である。風化が著しく剥離の状況の図化が難しかった。

S165は頁岩Ａ類製の緻密な造りの小型のスクレイパーである。横長の剥片を素材とし，下縁に刃部を形成する。S166は黒曜石Ｃ類製で縦長の剥片の形状をそのまま活かし，端部にわずかな調整剥離を加えることで石錐に加工したものである。錐部の断面は三角形状で先端部を欠損する。S167は頁岩Ａ類製の縦型のスクレイパーである。両側面に刃部を形成し，先端部は先細る。

S168 ～ S171は楔形石器である。S168は緑色のチャート製で，右側辺には裏表両面から剥離調整を行っている。S169は頁岩Ａ類製，S170は黒曜石Ｃ類製，S171は玉髄製である。

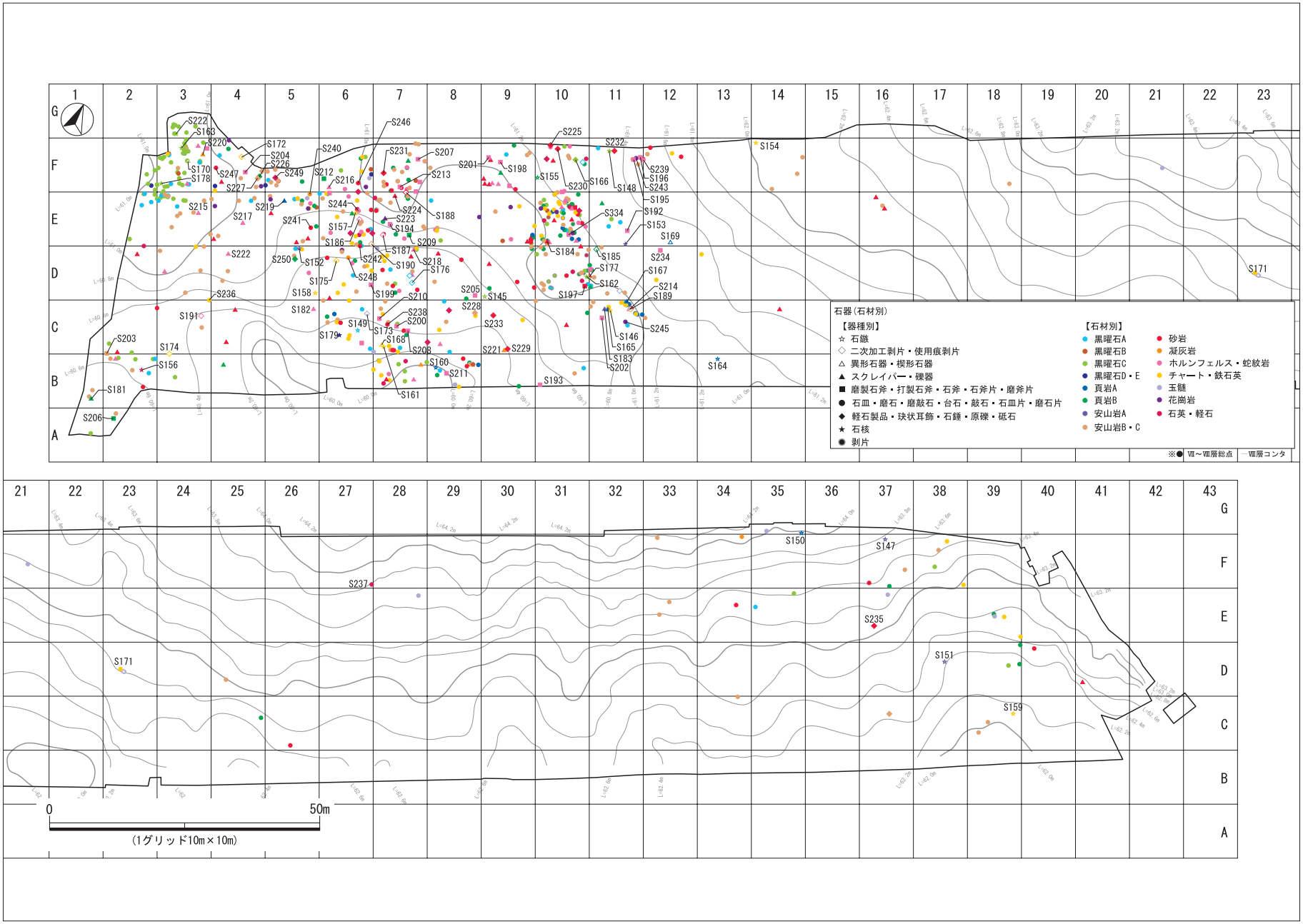
S172 ～ S176は緻密な石材製の小型の剥片を素材とする二次加工や使用痕のある剥片である。S172・S173は主に側辺に二次加工・使用痕を持つ剥片である。S172は灰色のチャート製で，側面に微細な剥離を施し，断面形は大きな凹みを有する。右側面は鋭い角を成しわずかに擦れており，ノッチドスクレイパーのような用途で使用された可能性もある。S173は玉髄製の剥片の側面に加工を施したものである。S174 ～ S176は主に下縁に二次加工を施したものである。S174は灰色のチャート製の剥片を使用している。S175は灰色のチャート製で下縁に表裏からの調整剥離が施される。上部は欠損している。S176は黒曜石Ａ類製で主に下辺に表裏からの調整剥離が施され，小型ではあるが，スクレイパーのように水平に揃った刃部を形成している。

S177は黒曜石Ｃ類製の半円状の異形石器である。非常に繊細な剥離を繰り返すことにより成形される。右側面中央部が軽く抉れる。

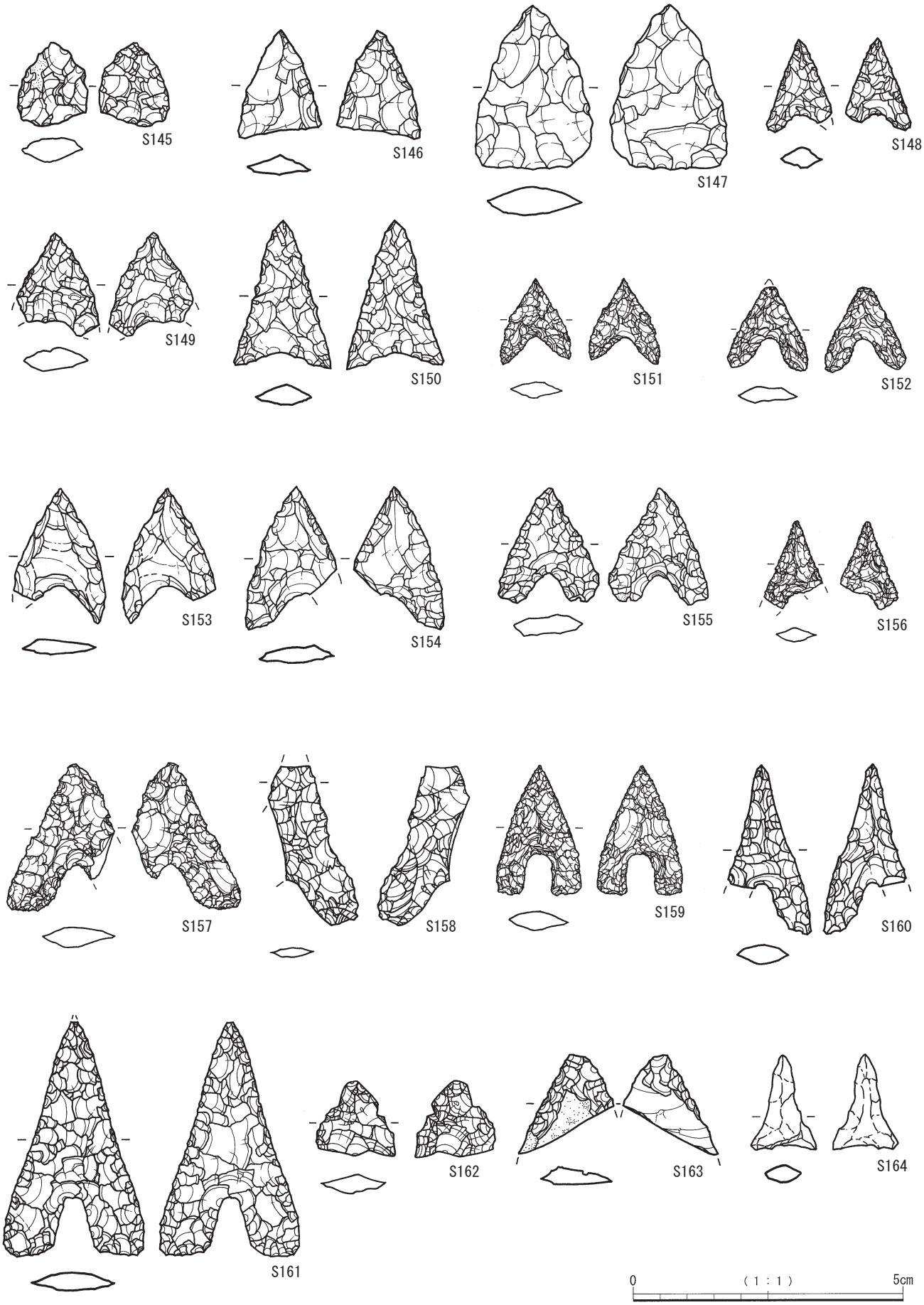
S178 ～ S180は石核である。S178は黒曜石Ｃ類製で打面はほぼ水平である。S179は黒曜石Ｅ類製でもとは裏面の左方向からの剥離が作業面であったが打面再生により正面側に縦方向の剥離を施したあと正面側を作業面としたものと推察される。S180は黒曜石Ｃ類製で打面転移を繰り返しながら剥片を剥離している。

S181 ～ S184は粗製のスクレイパー類である。S181は頁岩Ｂ類製で鉄分が付着する。横長の剥片を縦に使用し，両側面に刃部を形成している。左側面の刃部の調整はより丁寧であり，こちら側を機能部として製作・使用した可能性がある。S182はホルンフェルス製で正方形の形状である。素材の剥離の方向性と幅や厚みがS181と類似する。下面は階段状に剥離しており，楔として転用された可能性もある。S183は安山岩Ａ類製で円形状を呈するものである。右側面と下面に刃部を形成し，敲打痕も残る。正面には強い擦痕が確認できる。S184は硬質砂岩製で，横形の剥片を使用しており，下辺の刃部はよく使用されている。断面は三角形状である。

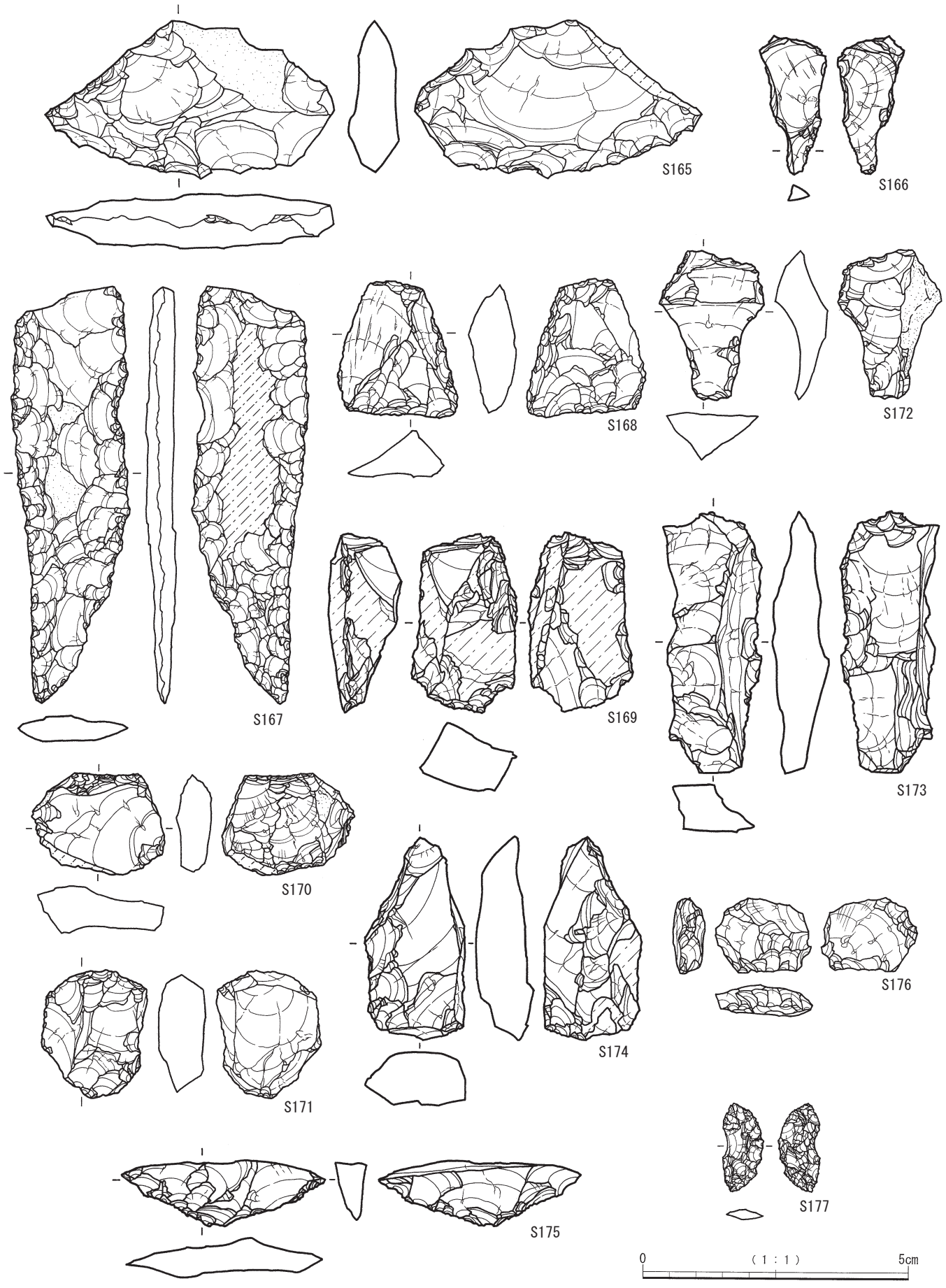
S185 ～ S191は二次加工・使用痕のある剥片のうち粗製の大型品である。S185は頁岩Ｂ類製で，S186はホルンフェルス製である。S185は主に下面を，S186は主に



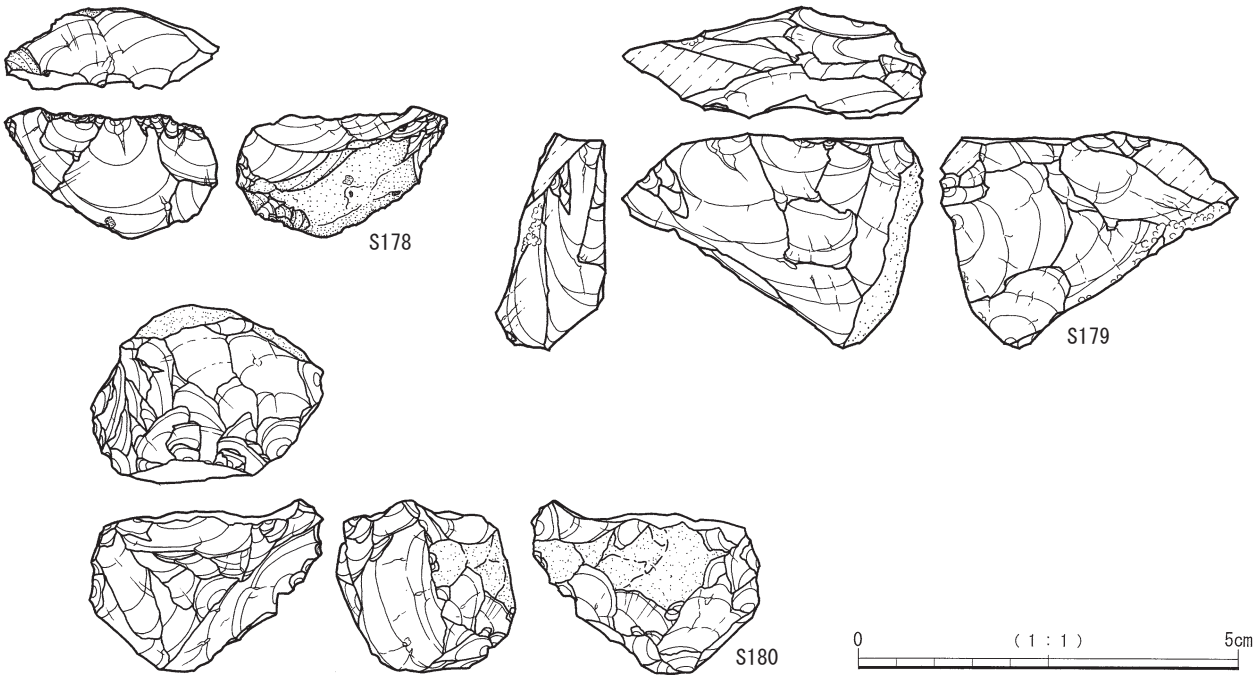
第144図　Ⅶ層石器出土状況図



第145図　Ⅶ層出土石器（1）



第146図　Ⅶ層出土石器（2）



第147図　Ⅶ層出土石器（3）

左側面に二次加工を施している。両方ともに上部が山形を呈するが意図的なものであるかは不明である。S187はホルンフェルス製で上縁・下縁には背面側からの調整剥離が施される。S188は砂岩製で扇型の板状の剥片で，下縁に連続した調整剥離を施す。S189・S190は安山岩Ｃ類製でともに被熱する。S189は縦長の剥片を使用しており，右側面に正面側からの調整剥離が施される。S190は丸みのある剥片で，意図的なものかは不明だが，被熱による破砕の可能性が裏面に残る。縁辺には使用による微細な剥離や擦れが確認できる。S191はホルンフェルス製で，裏面は自然面である。剥離面の縁辺に連続的な調整剥離を施す。

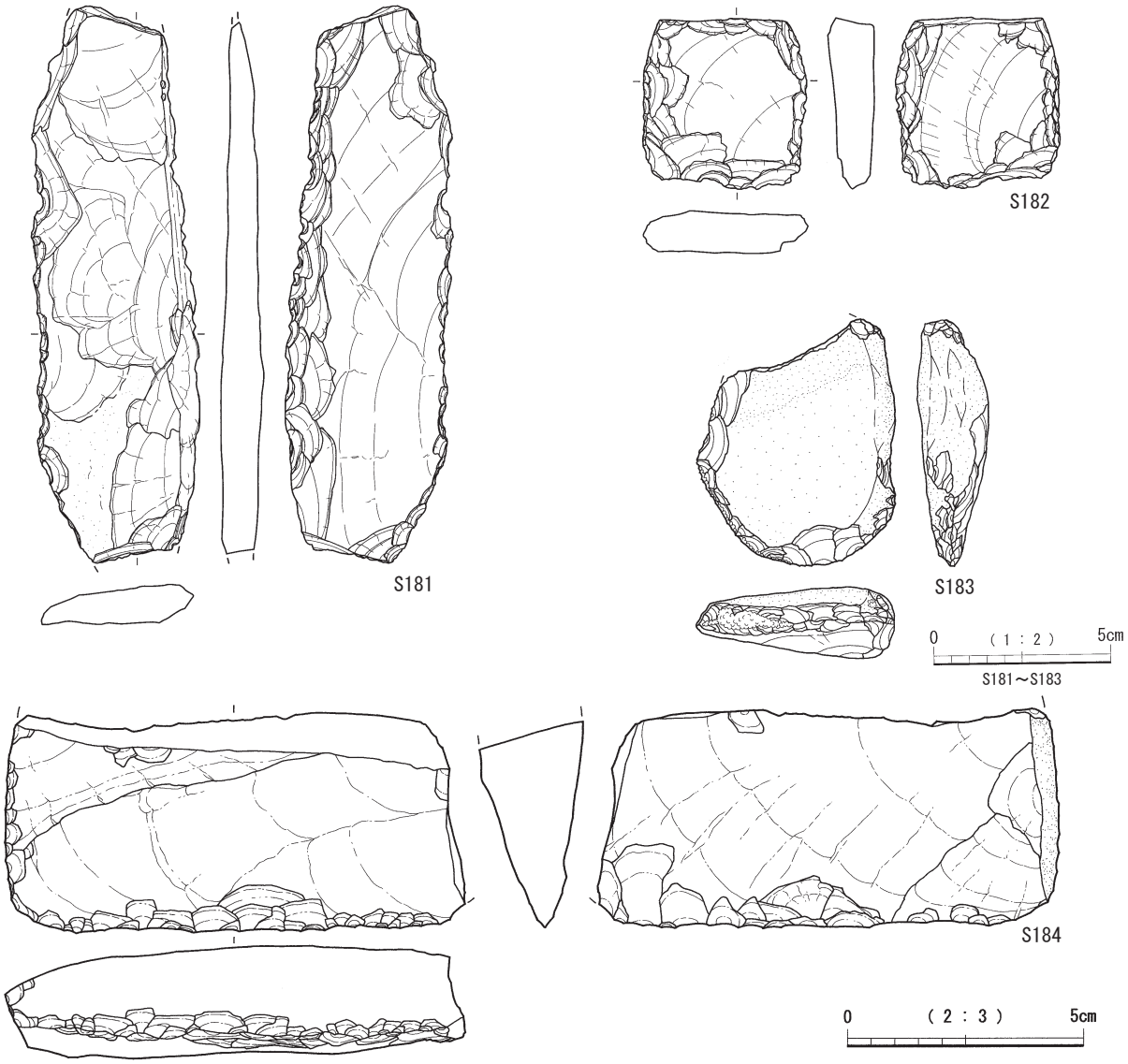
S192 ～ S202はⅠ類の磨製石斧である。S192 ～ S194は完形品で，S192・S193はⅠ－a類，S194はⅠ－b類に分類した。S192には使用による欠損はみられず両刃の刃部が欠けずに残存する。敲打による整形の跡は研磨により磨り消され，わずかに残すのみである。S193はホルンフェルス製で刃部は敲き潰れ，敲打具としても使用している。大型である。S194はホルンフェルス製で小型である。刃部の薄さはⅡ類とも共通するが，角張った断面形からⅠ－b類とした。S195はホルンフェルス製で，S196は蛇紋岩製のⅠ－b類の基部である。基部端部はともに平たく成形されている。S197 ～ S200は刃部である。S197は硬質の砂岩製，S198 ～ S200はホルンフェルス製である。形態的にはS197・S198はⅠ－a類で，S199・S200は側面を研磨により面取りし，やや片刃気味のⅠ－b類である。S200の上辺は欠損後に再加工が施されている。S201・S202はホルンフェルス製のⅠ－b類の基部を磨敲石に転用したものである。

S203 ～ S209はⅡ類に分類した磨製石斧で，小型のものが多い。S203は短冊型の完形品で先端部に向かってややすぼまる形態である。刃部の擦痕は斜方向に入り使用に依るものと考えられる。S204はホルンフェルス製の両頭のもので基部中心付近に最大幅を持つ楕円状の形態である。刃部にはS203と同様の擦痕が確認できる。S205 ～ S208は刃部である。短冊形の形態のものであると推測できる。S205はホルンフェルス製で，S206は頁岩Ｂ類製で偏平な断面形である。S207・S208はホルンフェルス製で断面形は中央部がわずかに盛り上がる。これらの刃部片には製作時についたと思われる擦痕のほかに垂直方向の擦痕が付き，使用痕であると考えられる。S209は頁岩Ｂ類製の基部である。端部は丸みを持って成形され断面形は三角形状である正面は丁寧に研磨されるが裏面には剥離痕をそのまま残す。

S210はホルンフェルス製の磨製石斧の刃部で形態的特徴からⅢ類に分類する。刃部に垂直方向の使用痕跡が確認できる。

S211 ～ S213はⅣ類の打製石斧である。S211はホルンフェルス製の刃部である。S212は頁岩Ｂ類製で欠損部の上面を二次的に加工していると思われる。S213はホルンフェルス製で下縁と左側面には細やかな剥離調整が施されるが，そのほかの部分には主要剥離面を残す。製作中途で廃棄した未製品である可能性が高い。

S214 ～ S224は礫器である。S214 ～ S217は縦長の形状のものである。すべてホルンフェルス製である。S215・S216の刃部は両面からの打撃で，S217の刃部は

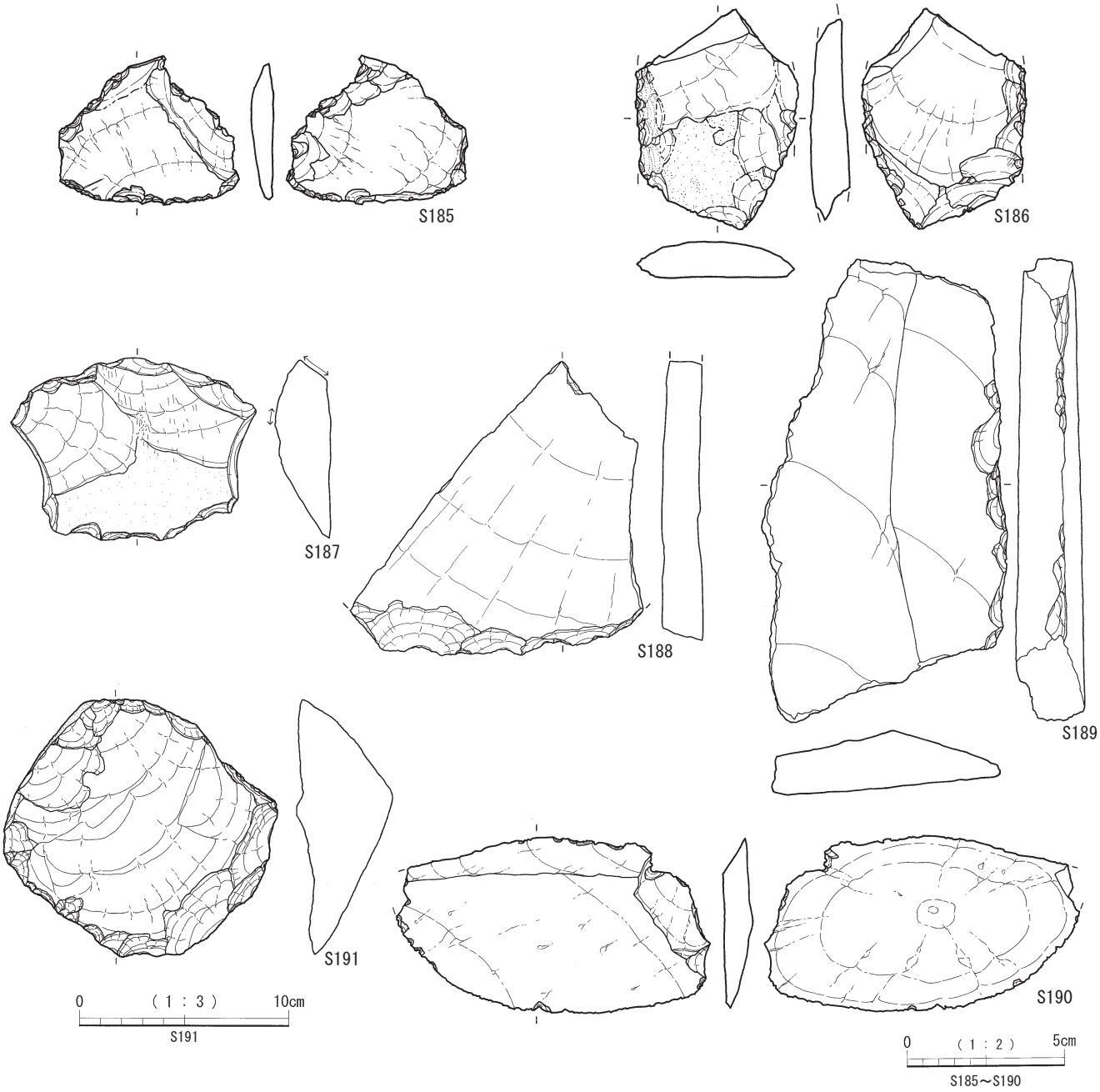


第148図　Ⅶ層出土石器（4）

片面からの打撃で形成される。S214は棒状の原礫の端部を打ち掻いて尖らせたものである。剥離痕が少ないことから使用頻度がごく少ないか，柔らかいものを対象として使用された可能性が窺える。S215・S216は石斧のような使用法であった可能性もある。S218は剥片を採った後の残核が礫器として再加工された可能性もある。また上面・下面に対峙する剥離やの階段状の剥離がみられることから，大型の楔として使用された可能性もある。

S219は頁岩Ａ類製で下面には片面からの打撃により刃部が形成される。さらに上縁には両側からの剥離による刃部の形成が施される。S220は凝灰岩製で，偏平な亜円礫を使用している。S221は凝灰岩製で，両面からの打撃により刃部を形成する。両側面には対極に抉りを作っており，石錘としても使用したか，装着のための造作である可能性もある。S222はホルンフェルス製で横長の形状である。打ち割った礫の形状を活かし，両側から細やかな調整剥離を施し刃部を形成する。S219～S222は持ち手部分から刃部までの長さが短く掻器のような使用方法が想定できる。S223は高隈山系とみられる花崗岩製で，下面に両面からの打撃で刃部を形成し，持ち手に向かってすぼまる形状である。持ち手は平坦に加工している。S224は砂岩製で丸い形状である。円礫を素材とし，上縁・右側縁・下縁に刃部を形成している。S223・S224は敲打具としても使用している。

S225～S233は石錘である。S226は頁岩Ｂ類製で，S227・S228は多孔質の安山岩Ｂ類製で，そのほかは砂岩製である。S225は楕円形の偏平礫の長軸の両極を打ち掻いて製作している。S226～S228は短軸の両極を打

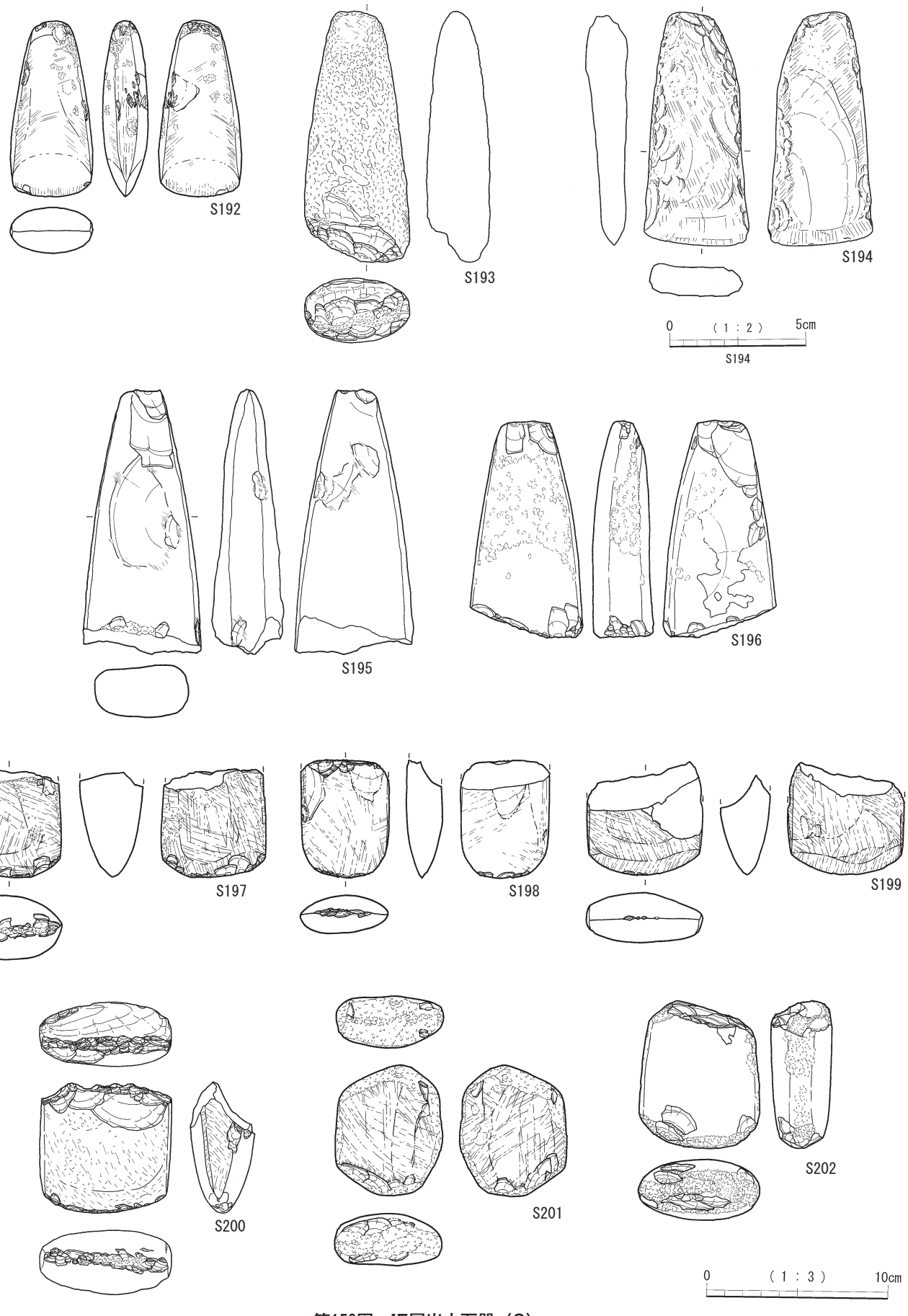


第149図　Ⅶ層出土石器（5）

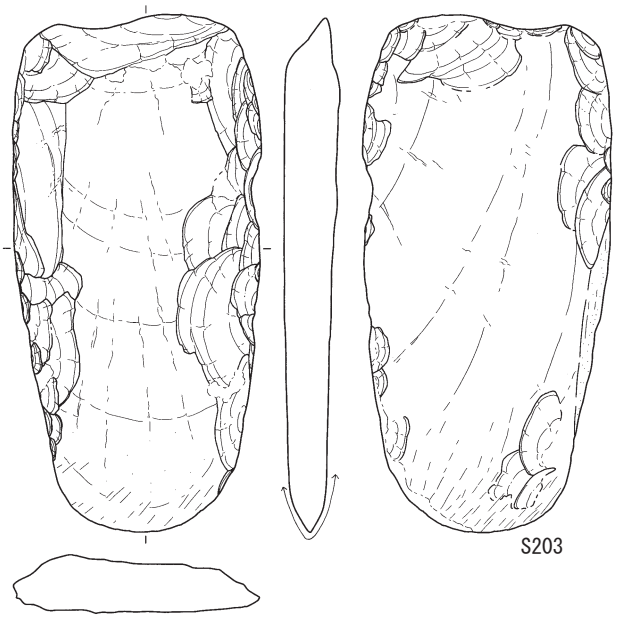
ち掻いて製作している。S229 ～ S233は不定形な形状の礫の長軸を打ち欠いて製作している。S230は上縁・下縁を平坦に成形した後に打ち掻いて製作している。S231は，ハート型の自然礫の形状を利用して製作したものであり，下面端部は敲打にも使用される。S232・S233は偏平な礫を使用しており下半部が残存する。

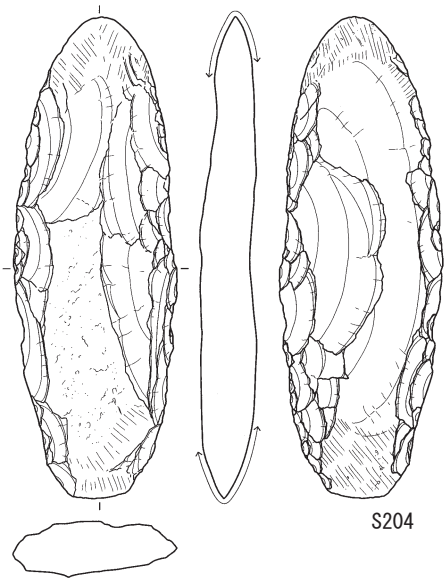
S234は磨製の石製品で，S235は砥石である。S234はホルンフェルス製の棒状の形態の小型品で，上面・下面は欠損している。原寸大で掲載している。両側面を擦っていて横断面は，右側面側が先細る三角形状である。左側面には８個の浅い溝が確認できる。用途は不明である。S235は，緻密で混入物の少ない砂岩を素材とし，その剥片の正面を砥面として使用している。偏平な板状の形態である。左側面と下面には二次加工を施す。右側面を欠損する。

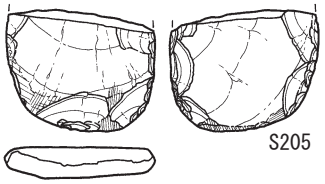
S236 ～ S245は磨敲石類である。S236 ～ S239は縦長のプロポーションで，主に敲石として使用されたものである。S236は緑色のチャート製で，三角形状である。上面や下面の角の部分を敲打に使用している。S237は石英製，S238は砂岩製であり，これらには磨面も確認できるが敲石としての使用が主であったと考えられる。S239はホルンフェルス製で左側面や下面を中心とした

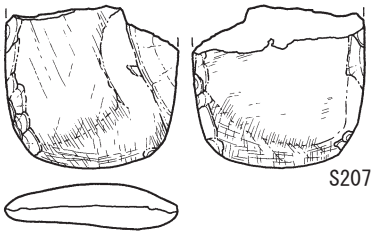


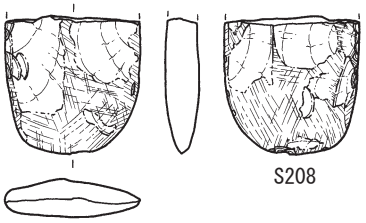
第150図　Ⅶ層出土石器（6）

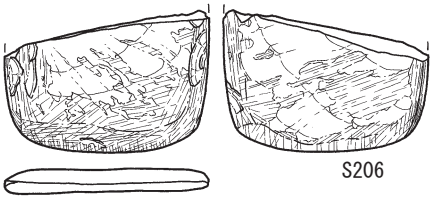


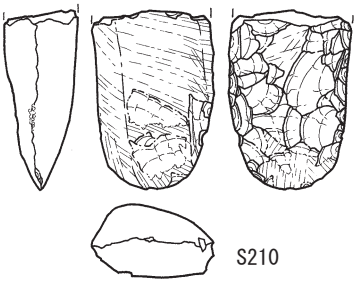


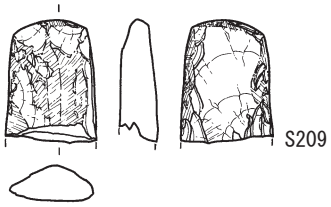




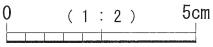


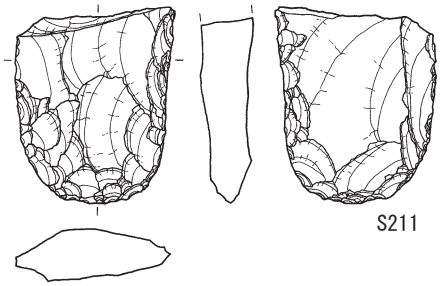


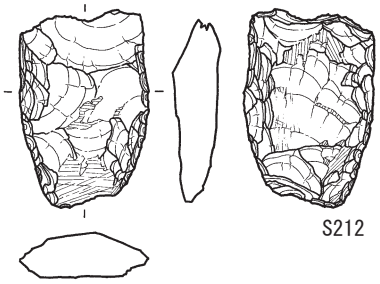


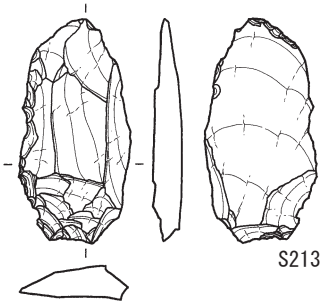


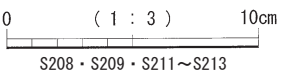
分類：S203～S209…Ⅱ類
S210……Ⅲ類
S211～S213…Ⅳ類



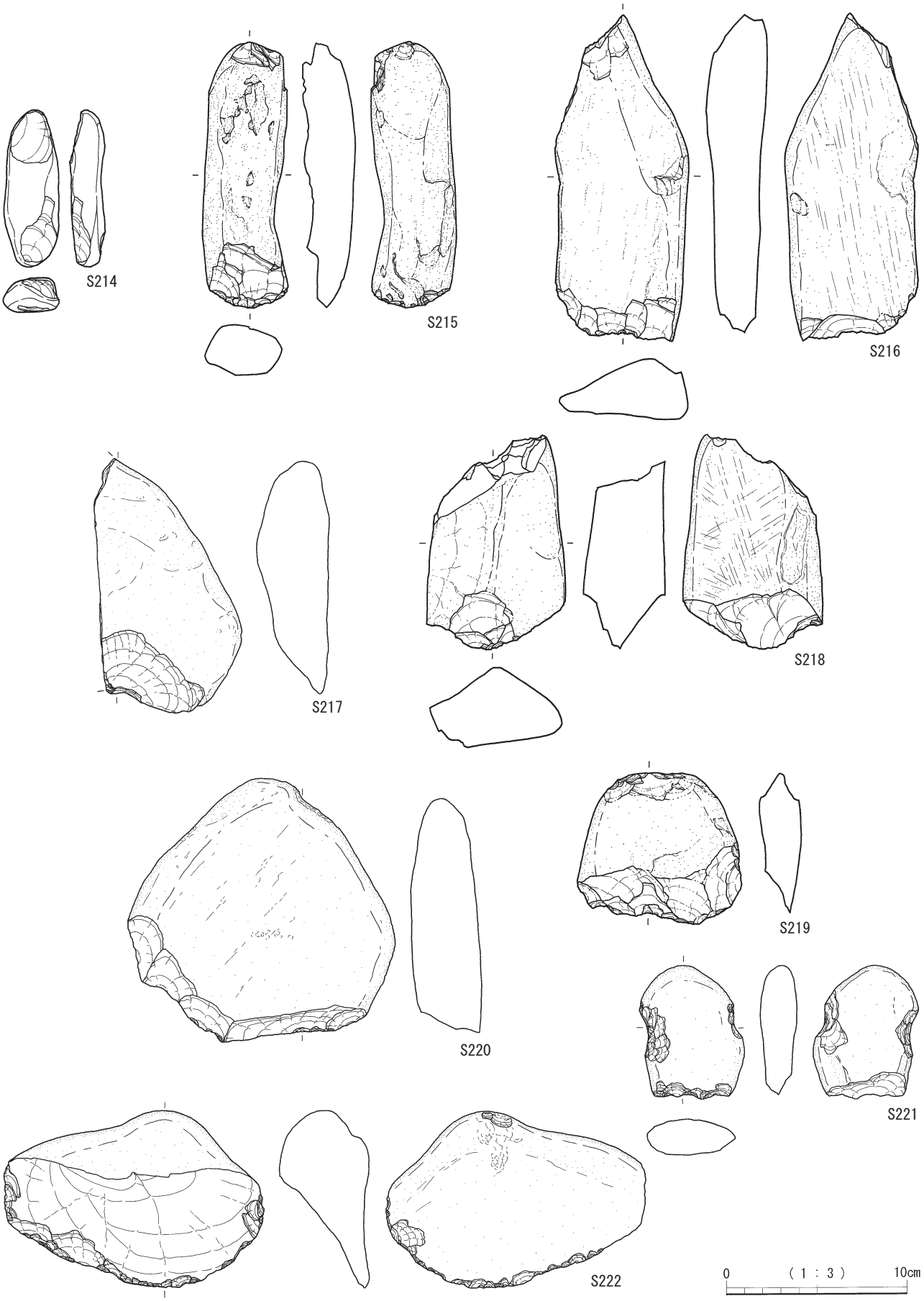








第151図　Ⅶ層出土石器（7）



第152図　Ⅶ層出土石器（8）



第153図　Ⅶ層出土石器（9）

数ヶ所に剥離痕がみられる。使用の頻度は低いと思われるものの石器などの硬い素材を対象物とした可能性が高い。S240は凝灰岩製で，上面・下面を強く磨っており方形状に成形されている。下面を一部欠損する。S241～S245は扁平な円形・楕円形状で，側面のほぼ全周に敲打痕や磨面がみられるものである。正面・背面の磨面は稜を形成する。S241・S242は砂岩製で，S243・S245は国見山系の花崗岩製である。S244はホルンフェルス製である。S241は，縦長のプロポーションで，平面形は四隅がわずかに角張る。S242～S245は円形のものである。S243は下面を欠損しており，割口を敲打に再使用している。

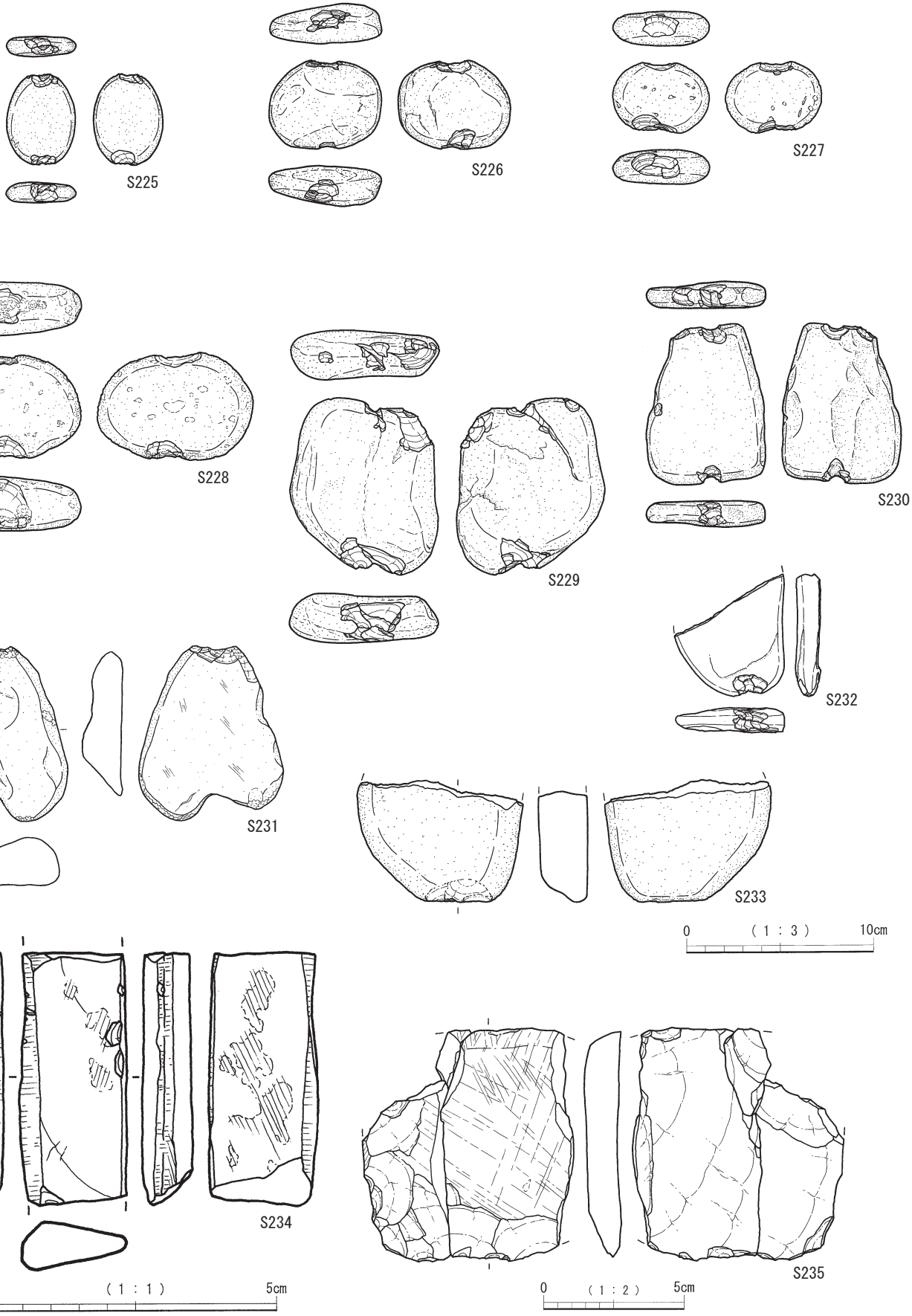
S246～S248は台石である。S246は礫混じりの砂岩製であり，板状の自然礫の形態をうまく利用して使用している。角の部分は敲打にも使用されている。S247は緻密で不純物の少ない砂岩製で表裏ともによく使用されており磨面は明瞭に凹む。下面には打ち掻きにより掻き出し口が作られている。S246と同様に角となる部分には敲打痕がみられる。S248は凝灰岩製で，正面・背面ともによく使用されているが裏面に平坦な磨面が形成される。上面には敲打痕と擦痕が確認でき，平らな面を持つ。下面は敲打に使用される。若干の赤化がみられるため被熱の可能性もある。３点ともに軽量の小型品であるために持ち運びに適したものであったことが窺える。

S249は軽石製品である。正面の形状は歪ではあるが逆三角形状である。中央部に浅い溝を２条形成する。下面からみると中央部が盛り上がる。側面は断面形が先細るように両側から面取りが施される。舟形の加工品である可能性もある。

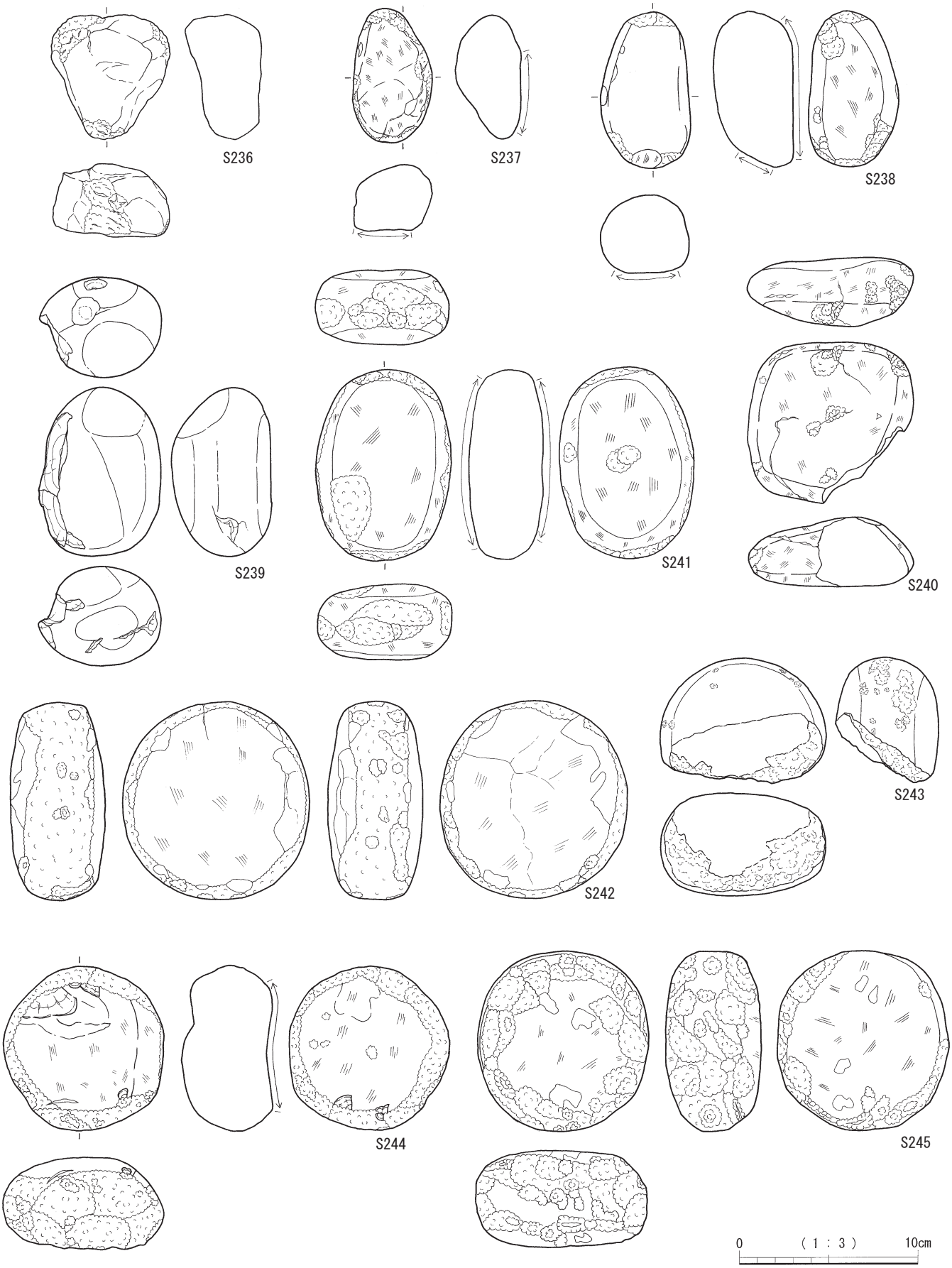
S250は黒く緻密な頁岩Ｂ類製の玦状耳飾片である。縦に長く角張った形状のもので，中央部付近で折れが生じている。断面形は偏平に整えられる。玦の内側には３つの穿孔が縦位に均等に施される。長軸のちょうど中心の孔が最も大きく孔径約３mmである。その上下の孔は孔径２mm程とやや小さい。穿孔は表裏の両側から施されている。



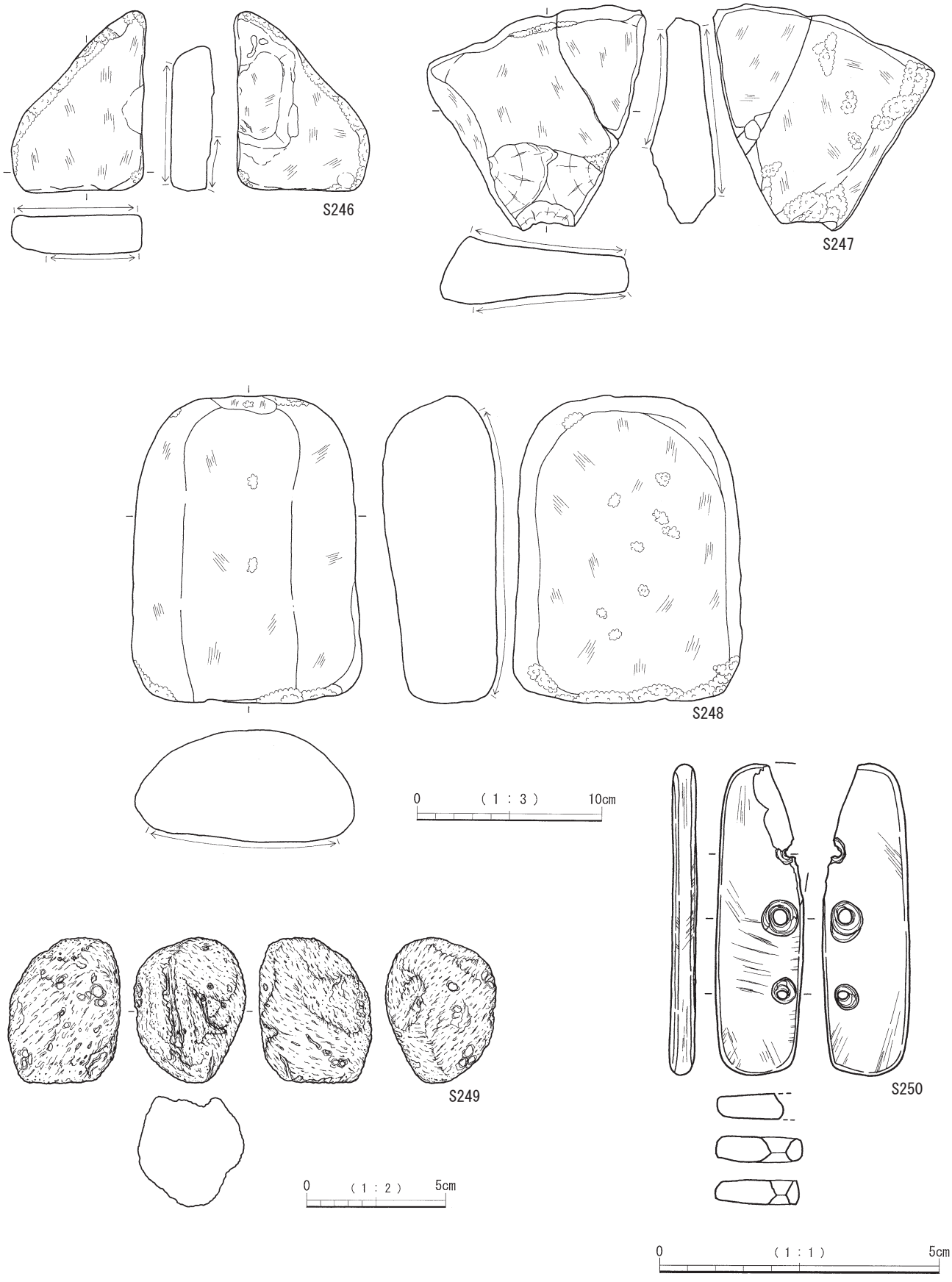
写真３　№Ｓ194出土状況



第154図　Ⅶ層出土石器（10）



第155図　Ⅶ層出土石器（11）



第156図　Ⅶ層出土石器（12）

第30表　石器観察表（Ⅶ層出土）（1）

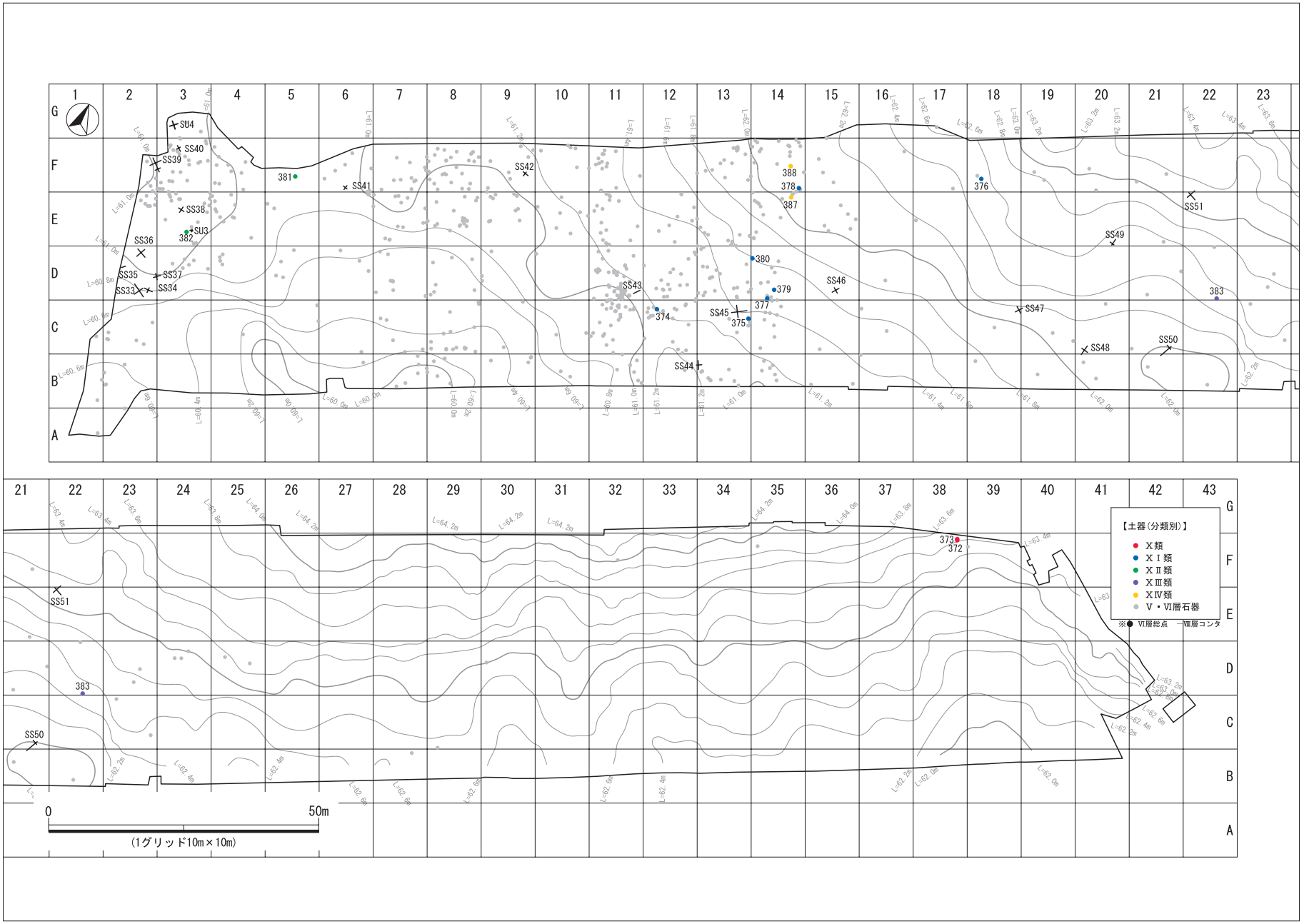
挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層	器種	分類	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	備考
145	S145	53975	D9	Ⅶa	石鏃	－	15.00	13.00	4.50	0.80	黒曜石	黒曜石C	
	S146	25382	C11	Ⅶb	石鏃	－	19.60	15.20	3.50	0.92	チャート	－	
	S147	102311	F37	Ⅶa	石鏃	－	30.30	21.70	5.80	3.68	安山岩	安山岩A	
	S148	24559	F11	Ⅶa	石鏃	－	16.70	11.80	4.00	0.43	黒曜石	黒曜石C	欠損品
	S149	54143	C6	Ⅶb	石鏃	－	19.00	15.00	4.50	1.00	黒曜石	黒曜石A	欠損品
	S150	102082	G35	Ⅶa	石鏃	－	26.90	17.90	4.00	1.30	頁岩	頁岩A	
	S151	104899	D38	Ⅶa	石鏃	－	16.00	13.50	3.00	0.34	安山岩	安山岩A	
	S152	51647	D5	Ⅶa	石鏃	－	16.00	15.00	3.10	0.42	安山岩	安山岩A	欠損品
	S153	25131	E11	Ⅶb	石鏃	－	24.80	17.20	3.00	0.89	安山岩	安山岩A	欠損品
	S154	24957	F14	Ⅶa	石鏃	－	26.00	16.90	3.50	1.05	チャート	－	欠損品
	S155	54432	F10	Ⅶa	石鏃	－	21.00	18.50	4.50	1.20	黒曜石	黒曜石B	
	S156	51984	B2	Ⅶa	石鏃	－	16.50	11.00	3.00	0.35	石英	－	欠損品
	S157	51462	E6	Ⅶa	石鏃	－	27.50	20.00	3.00	1.46	チャート	－	欠損品
	S158	51188	D5	Ⅶa	石鏃	－	29.00	16.50	1.50	1.25	鉄石英	－	欠損品
	S159	104877	C39	Ⅶa	石鏃	－	24.50	16.00	3.50	0.91	チャート	－	
	S160	54860	B8	Ⅶa	石鏃	－	31.00	15.50	4.00	1.10	頁岩	頁岩A	欠損品
	S161	54256	C7	Ⅶa	石鏃	－	43.20	25.80	4.00	3.30	チャート	－	
	S162	53878	D10	Ⅶa	石鏃	－	14.00	15.00	3.50	0.59	黒曜石	黒曜石C	未製品
	S163	53192	F3	Ⅶa	石鏃	－	18.50	17.00	3.00	0.70	黒曜石	黒曜石C	欠損品
	S164	22284	B13	Ⅶb	石鏃	－	17.50	12.00	3.30	0.26	頁岩	頁岩A	
146	S165	25365	C11	Ⅶb	スクレイパー	－	29.50	54.00	10.00	15.45	頁岩	頁岩A	
	S166	54643	F10	Ⅶb	石錐	－	26.00	19.90	6.40	1.40	黒曜石	黒曜石C	
	S167	25257	C11	Ⅶa	スクレイパー	－	78.00	22.00	5.80	8.37	頁岩	頁岩A	
	S168	54313	C7	Ⅶb	楔形石器	－	26.10	22.00	9.00	4.70	チャート	－	
	S169	25269	E12	Ⅶb	楔形石器	－	33.60	19.40	13.70	8.23	頁岩	頁岩A	
	S170	53191	F3	Ⅶa	楔形石器	－	19.30	25.10	8.70	4.00	黒曜石	黒曜石C	
	S171	56421	D23	Ⅶa	楔形石器	－	24.00	19.40	9.20	4.30	玉髄	－	
	S172	51693	F4	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	－	28.00	19.50	10.00	3.20	チャート	－	
	S173	51085	C6	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	－	49.10	17.80	10.40	8.60	玉髄	－	
	S174	51973	B3	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	－	38.00	18.80	10.00	8.50	チャート	－	
	S175	51950	D6	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	－	12.40	38.10	7.80	2.60	チャート	－	
	S176	53693	D7	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	－	14.00	18.00	6.00	1.60	黒曜石	黒曜石A	
	S177	53879	D10	Ⅶa	異形石器	－	16.50	7.50	2.00	0.25	黒曜石	黒曜石C	
147	S178	52761	F3	Ⅶa	石核	－	17.50	28.00	10.50	3.55	黒曜石	黒曜石C	
	S179	51095	C6	Ⅶa	石核	－	28.20	39.80	14.00	11.30	黒曜石	黒曜石E	
	S180	53578	G3	Ⅷ	石核	－	22.50	30.20	23.40	18.80	黒曜石	黒曜石C	
148	S181	53162	B1	Ⅶa	スクレイパー	－	158.00	47.50	11.20	100.05	頁岩	頁岩B	
	S182	51173	C5	Ⅶa	スクレイパー	－	48.50	46.10	12.00	47.54	ホルンフェルス	－	
	S183	25364	C11	Ⅶb	スクレイパー	－	69.50	55.80	20.10	86.70	安山岩	安山岩A	
	S184	54404	E10	Ⅶb	スクレイパー	－	46.00	97.00	24.00	133.10	砂岩	－	
149	S185	25043	D11	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	－	41.80	57.00	8.00	20.10	頁岩	頁岩B	
	S186	52943	E6	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	－	69.50	51.70	12.00	50.86	ホルンフェルス	－	
	S187	53229	E7	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	－	58.00	78.00	17.70	79.68	ホルンフェルス	－	
	S188	53234	E7	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	－	93.20	93.00	12.50	136.40	砂岩	－	
	S189	25369	C11	Ⅶb	二次加工・使用痕剥片	－	146.70	78.00	21.90	251.78	安山岩	安山岩C	
	S190	53482	E6	Ⅶb	二次加工・使用痕剥片	－	56.00	10.00	9.50	51.60	安山岩	安山岩C	
	S191	52013	C3	Ⅶa	二次加工・使用痕剥片	－	130.00	121.70	46.00	633.00	ホルンフェルス	－	
150	S192	23175	E11	Ⅶa	磨製石斧	I-a	96.00	44.80	24.90	153.03	ホルンフェルス	－	
	S193	54930	B10	Ⅶa	磨製石斧	I-a	137.70	57.20	35.00	380.50	ホルンフェルス	－	
	S194	52975	E7	Ⅶa	磨製石斧	I-b	86.20	38.20	12.20	67.10	ホルンフェルス	－	
	S195	23937	F11	Ⅶa	磨製石斧	I-b	145.00	65.00	40.00	452.82	ホルンフェルス	－	
	S196	23949	F11	Ⅶa	磨製石斧	I-b	118.50	61.50	33.20	354.40	蛇紋岩	－	
	S197	53886	D10	Ⅶa	磨製石斧	I-a	58.90	57.20	35.10	165.70	砂岩	－	
	S198	54123	F9	Ⅶa	磨製石斧	I-a	64.00	48.00	20.30	85.30	ホルンフェルス	－	
	S199	51207	D6	Ⅶa	磨製石斧	I-b	61.10	63.40	27.00	110.20	ホルンフェルス	－	
	S200	54816	C7	Ⅶa	磨製石斧	I-b	71.20	72.20	34.70	241.00	ホルンフェルス	－	
	S201	54429	F9	Ⅶb	磨製石斧	I-b	71.00	58.20	27.80	180.20	ホルンフェルス	－	風化　縁辺つぶれ
	S202	25381	C11	Ⅶa	磨製石斧	I-b	80.20	66.00	33.40	293.05	ホルンフェルス	－	
151	S203	52386	C2	Ⅶa	磨製石斧	Ⅱ	137.00	65.90	15.00	197.20	安山岩	安山岩B	
	S204	51699	F4	Ⅶa	磨製石斧	Ⅱ	128.00	41.60	14.70	104.09	ホルンフェルス	－	両頭タイプ
	S205	53716	D8	Ⅶa	磨製石斧	Ⅱ	31.00	39.20	8.00	13.90	ホルンフェルス	－	
	S206	53157	A2	Ⅶa	磨製石斧	Ⅱ	37.20	54.00	6.40	19.20	頁岩	頁岩B	
	S207	53037	F7	Ⅶa	磨製石斧	Ⅱ	42.70	45.60	12.00	30.30	ホルンフェルス	－	
	S208	53655	C7	Ⅶa	磨製石斧	Ⅱ	54.20	53.00	15.10	56.50	ホルンフェルス	－	
	S209	49482	E7	Ⅶa	磨製石斧	Ⅱ	47.90	35.90	15.20	35.50	頁岩	頁岩B	
	S210	53634	C7	Ⅶa	磨製石斧	Ⅲ	47.10	32.40	19.00	34.70	ホルンフェルス	－	
	S211	54326	B8	Ⅶa	打製石斧	Ⅳ	78.00	63.00	20.00	123.30	ホルンフェルス	－	刃部
	S212	53215	F6	Ⅶa	打製石斧	Ⅳ	77.30	50.50	20.00	88.40	頁岩	頁岩B	
	S213	53050	F7	Ⅶa	打製石斧	Ⅳ	88.00	43.80	13.00	51.50	ホルンフェルス	－	

第31表　石器観察表（Ⅶ層出土）（2）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層	器種	分類	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	備考
152	S214	25368	C11	Ⅶb	礫器	－	85.70	30.10	19.20	66.50	ホルンフェルス	－	
	S215	52366	E3	Ⅶa	礫器	－	145.60	46.00	29.30	266.60	ホルンフェルス	－	
	S216	54578	F6	Ⅶb	礫器	－	178.70	73.20	36.00	604.00	ホルンフェルス	－	
	S217	52101	E4	Ⅶa	礫器	－	139.00	81.00	39.00	472.50	ホルンフェルス	－	
	S218	52914	D7	Ⅶa	礫器	－	117.10	76.30	46.50	464.50	ホルンフェルス	－	
	S219	52139	E5	Ⅶa	礫器	－	82.30	90.00	26.00	234.00	頁岩	頁岩A	
	S220	53127	F3	Ⅶa	礫器	－	146.50	145.00	38.50	983.00	凝灰岩	－	
	S221	53817	C9	Ⅶa	礫器	－	73.30	57.30	20.00	107.20	凝灰岩	－	抉入石器の可能性
	S222	50178	D4	Ⅶa	礫器	－	96.50	142.00	49.00	606.50	ホルンフェルス	－	
153	S223	52971	E7	Ⅶa	礫器	－	117.30	72.40	38.20	400.10	花崗岩	－	高隈山系
	S224	49565	E7	Ⅶa	礫器	－	92.70	74.00	34.20	295.00	砂岩	－	
154	S225	54598	F10	Ⅶb	石錘	－	47.20	36.30	10.10	25.40	砂岩	－	
	S226	51672	F4	Ⅶa	石錘	－	46.50	59.00	21.00	76.70	頁岩	頁岩B	
	S227	51674	F4	Ⅶa	石錘	－	37.80	50.60	18.20	43.90	安山岩	安山岩B	
	S228	53772	C8	Ⅶa	石錘	－	56.80	82.00	28.80	189.20	安山岩	安山岩B	
	S229	53816	C9	Ⅶa	石錘	－	94.30	78.60	35.50	222.40	砂岩	－	
	S230	54782	F10	Ⅶa	石錘	－	84.40	62.50	13.00	112.50	砂岩	－	
	S231	53526	F7	Ⅶb	石錘	－	93.00	76.00	25.00	188.50	砂岩	－	
	S232	24204	F11	Ⅶb	石錘	－	58.00	64.80	13.10	55.53	砂岩	－	
	S233	53826	C9	Ⅶa	石錘	－	63.00	87.40	25.50	235.00	砂岩	－	
	S234	25271	D12	Ⅶb	磨製石器	－	44.80	18.90	9.20	12.27	ホルンフェルス	－	
	S235	104939	E37	Ⅶa	砥石	－	82.50	75.00	14.00	103.50	砂岩	－	
155	S236	52428	C3	Ⅶa	敲石	－	69.00	65.00	41.00	240.00	チャート	－	
	S237	56395	F27	Ⅶa	敲石	－	75.00	43.50	37.00	157.10	石英	－	
	S238	54003	C7	Ⅶa	敲石	－	87.00	50.00	45.00	286.50	砂岩	－	
	S239	23953	F12	Ⅶa	敲石	－	93.90	67.20	55.20	477.31	ホルンフェルス	－	
	S240	49682	E5	Ⅶa	磨敲石	－	90.00	92.00	38.00	444.50	凝灰岩	－	
	S241	52522	E5	Ⅶa	磨敲石	－	106.00	75.00	42.00	527.50	砂岩	－	
	S242	49096	E6	Ⅶa	磨敲石	－	110.00	104.00	53.00	941.00	砂岩	－	
	S243	23941	F11	Ⅶa	磨敲石	－	69.00	91.80	56.80	434.89	花崗岩	－	国見山系
	S244	52130	E6	Ⅶa	磨敲石	－	92.00	89.00	51.00	616.50	ホルンフェルス	－	
	S245	25378	C11	Ⅶa	磨敲石	－	100.00	95.00	53.00	826.50	花崗岩	－	国見山系
156	S246	49655	F6	Ⅶa	台石	－	96.00	73.00	22.00	269.80	砂岩	－	
	S247	52854	F4	Ⅶa	台石	－	137.00	117.00	37.00	469.50	砂岩	－	
	S248	51934	D6	Ⅶa	台石	－	164.00	124.00	60.00	1596.00	凝灰岩	－	
	S249	49756	F5	Ⅶa	軽石製品	－	52.50	40.00	40.50	19.06	軽石	－	舟形の可能性
	S250	51961	D5	Ⅶa	玦状耳飾	－	56.00	16.00	5.00	5.80	頁岩	頁岩B	

第32表　石器組成表（Ⅶ層）

	黒曜石A類	黒曜石B類	黒曜石C類	黒曜石D類	黒曜石E類	チャート	玉髄	頁岩A類	頁岩B類	頁岩C類	安山岩A類	安山岩B類	安山岩C類	ホルンフェルス	蛇紋岩	砂岩	凝灰岩	花崗岩	鉄石英	石英	軽石	計
打製石鏃（未製品含む）	1	1	5			6		3			4								1	1		22
磨製石鏃																						0
石匙																						0
石錐			2																			2
楔形石器			1			1	1	1														4
二次加工・使用痕剥片（精製）	3					3	2		1													9
二次加工・使用痕剥片（粗製）													2	5								7
スクレイパー（精製）								2	1													3
スクレイパー（粗製）											1			2		1						4
磨製石斧（小片含む）									3			1		21	1	3						29
打製石斧									1					4								5
礫器									1					20		31	3	1				56
石錘									1			3				7						11
砥石												1		1		2						4
石核（残核含む）		1	3		1	1																6
磨石・敲石・磨敲石・台石・石皿						1						100		12		32	6	15		4		170
剥片	46	8	91	4		64	12	15	54				49	16		14	1			8		382
玦状耳飾									1													1
異形石器			1																			1
軽石加工品																					2	2
原礫																				6		6
計	50	10	103	4	1	76	15	21	63	0	5	105	51	81	1	90	10	16	1	19	2	724



第157図　Ⅵ層遺構配置図及び土器出土状況図

４　Ⅵ層の遺構

Ⅵ層はアカホヤ火山灰層直下の層で，集石19基と石器集積２基が出土した。これらの遺構はＸ～Ⅻ類土器に関係する遺構と考えられる。

（１）集石（第159 ～ 182図）

Ⅵ層検出の集石は19基検出された。Ⅵ層集石もⅦ層検出の集石と同様に下記のようにタイプ別に分類した。掲載番号はⅦ層からの通し番号を記している。

総礫数：個々の集石を構成している石器を含めた礫の総数。
長　軸：集石を構成する礫の端から端までの最大幅のこと。または，掘り込み部の端から端までの長さ。
短　軸：長軸に対して直角に交わり，集石を構成する礫や掘り込み部の端から端までの最大幅のこと。

また，集石を掘り込みの有無，散密の状況で下記のように分類した。

タイプⅠ：構成礫の明確な集中部及び掘り込み部のないもの。（散石状態）
タイプⅡ：構成礫の明確な集中部があり，掘り込み部のないもの。
タイプⅢ：構成礫の明確な集中部があり，掘り込み部を伴うもの。
タイプⅣ：構成礫の明確な集中部は無いが，掘り込み部が若干確認できるもの。

表１　タイプ別基数

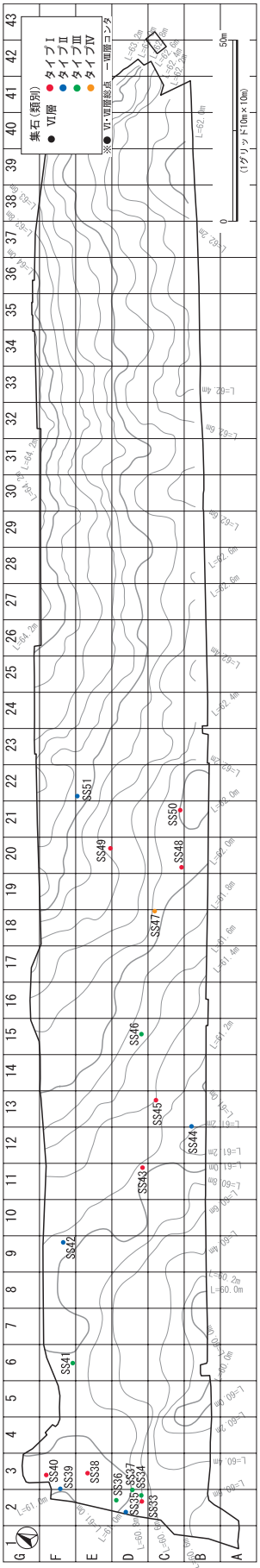
タイプ	基数
Ⅰ	8
Ⅱ	6
Ⅲ	5
Ⅳ	0

集石33号（第159図）
分　類：タイプⅠ
検出状況

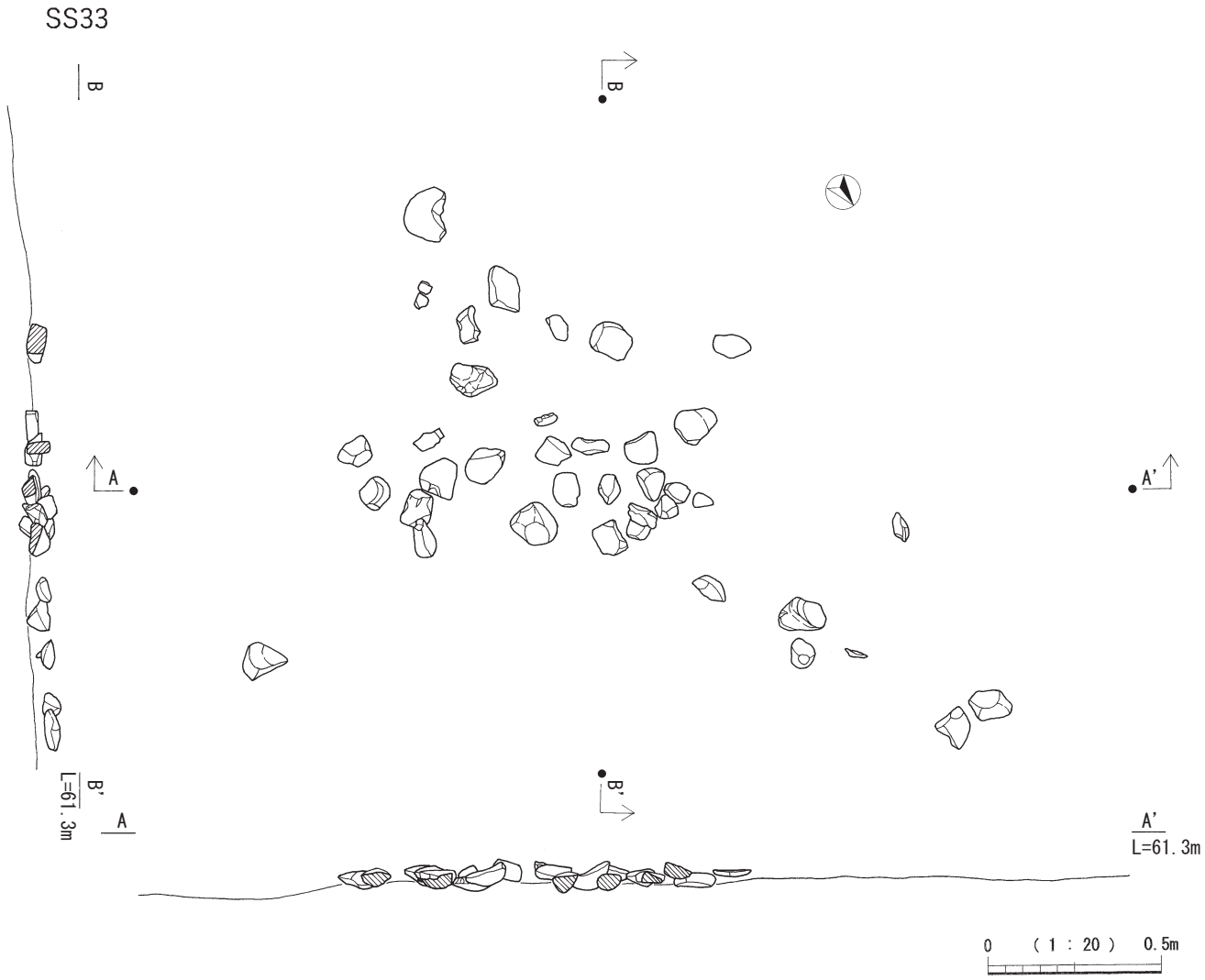
SS33は，Ｄ－２区のⅥ層で検出された。掘り込みはなく，散在している状況である。炭化物や被熱痕は確認できなかった。

規　模

構成礫数は39個で，１個平均の重さが367gである。10cmを超える大きな礫が多い。礫は，長軸2.23m，短軸1.62mの範囲に広がる。



第158図　Ⅵ層集石分布図



第159図　集石33号

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石34号（第160図）

分　類：タイプⅢ

検出状況

SS34は，D－２区のⅥ層で検出された。円礫が集中し，浅い掘り込みがある。被熱による破砕礫はなかった。ホルンフェルスが多い。炭化物は確認できず。

規　模

構成礫数は83個で，１個平均の重さが144gであった。拳大の礫が多い。礫は，長軸1.20m，短軸0.73mの範囲に広がる。掘り込みの深さは13cmである。

出土遺物

石器３点出土した。S251・S253は小型の磨敲石である。S251は砂岩製の歪な楕円形であり，被熱による赤化が確認できる。S252は多孔質の安山岩製で，僅かに敲打痕も残るが主に磨石として使用されたと考えられる。S253は円形であり，特に下面はよく磨られている。

集石35号（第161図）

分　類：タイプⅡ

検出状況

SS35は，D－２区のⅥ層で検出された。まとまりがあるが，掘り込みはなく，焼土や炭化物は確認できなかった。

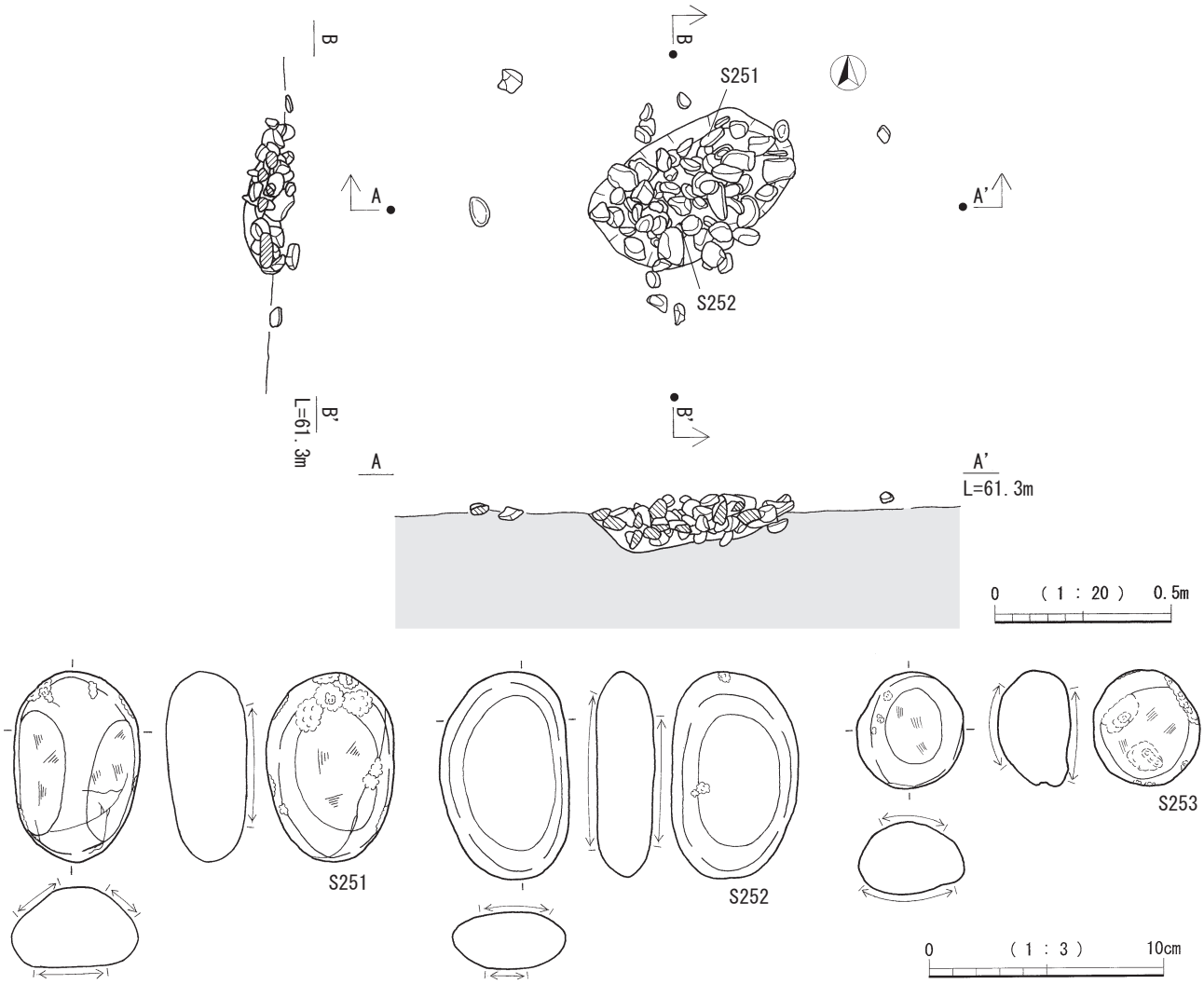
規　模

構成礫数は14個で，１個平均の重さが175gであった。10cm大の角礫が多い。礫は，長軸0.43m，短軸0.38mの範囲に広がる。

出土遺物

石器１点出土した。S254は構成礫の中央部で検出されている砂岩製の磨敲石である。正面の割口には敲打痕が

SS34



第160図　集石34号・出土遺物

確認できる。表面・裏面ともに明瞭な磨面を形成しており平たい形状であることから大型の石皿片を構成礫として転用している可能性も考えられる。赤化の範囲が断面にも及ぶことから破砕後に熱を受けていることが推測できる。

集石36号（第162・163図）

分　類：タイプⅢ

検出状況

SS36は，D－２区のⅥ層で検出された。掘り込みのある本体部分の西側に，礫を取り除いたようなまとまりがある。周辺にも円礫が散らばる。集石の下には黒褐色土の埋土があり，炭化物の小片が混ざる。長期に渡り使用された可能性もある。

規　模

構成礫数は71個で，１個平均の重さが246gであった。礫は，長軸1.70m，短軸1.56mの範囲に広がる。掘り込みの深さは13cmである。

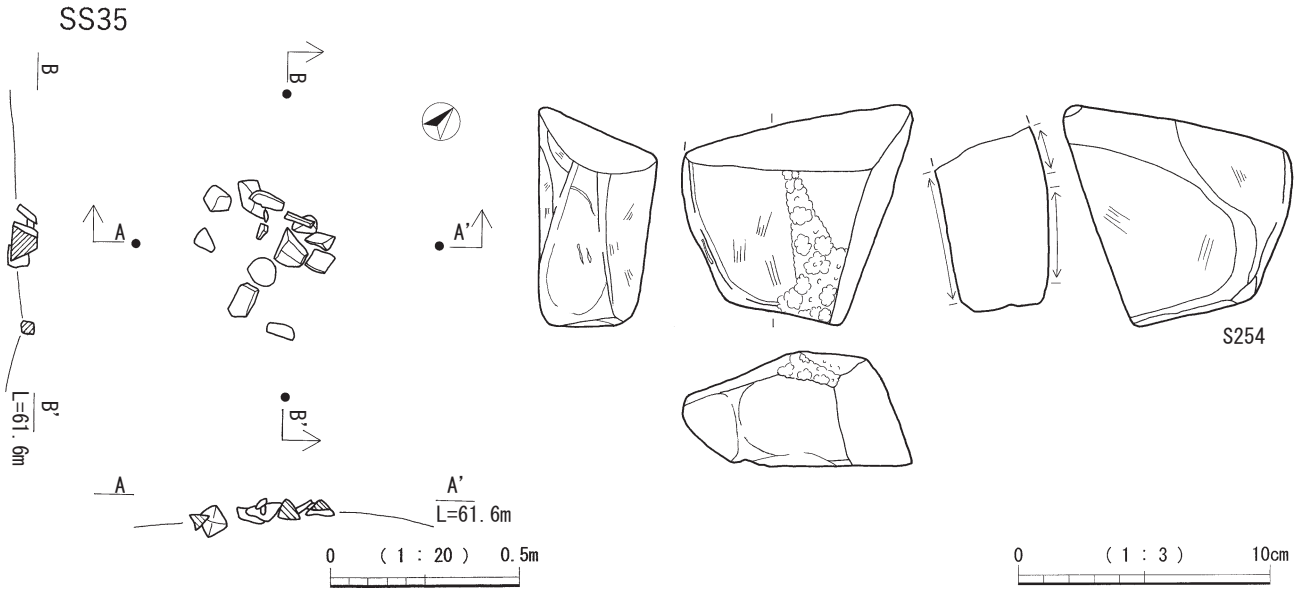
出土遺物

土器１点と石器２点が出土した。367は，平坦な口唇部に密なキザミ目を施し，口縁直下には２条の貝殻刺突文が施される。下位に楔形貼付突帯が密に貼り付けられ，貼付突帯の両側から貝殻腹縁部の押圧によりシャープに仕上げている。

S255・S256は掘り込みの外の西側で出土している磨敲石である。S255は多孔質の安山岩製で使用の頻度は少なかったと考えられる。上面は欠損しており割れ口も敲打に使用している。S256は凝灰岩製で，正面・裏面・側面には敲打痕が多く残る。風化が著しいため磨面の有無は判然としない。台石として使用していた可能性も考えられる。

集石37号（第164図）

分　類：タイプⅢ



第161図　集石35号・出土遺物

検出状況

SS37は，D－２・３区のⅥ層で検出された。礫が集中し，浅い掘り込みがある。礫の大半は被熱している。焼土や炭化物は確認できなかった。

規　模

構成礫数は70個で，１個平均の重さが333gであった。安山岩がほとんどであるが，軽石も１点含まれる。礫は，長軸1.26m，短軸1.07mの範囲に広がる。掘り込みの深さは11cmである。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石38号（第165図）

分　類：タイプⅠ

検出状況

SS38は，E－３区のⅥ層で検出された。散石状態で掘り込みはない。礫の大半は被熱を受けており，礫の色調は全体的に赤く，部分によっては，煤がついている。花崗岩の礫は，側面に煤が付き，被熱のせいか非常にもろい。掘り込みはなし。

規　模

構成礫数は７個で，１個平均の重さが459gであった。礫は，長軸0.56m，短軸0.49mの範囲に広がる。

出土遺物

石器２点が出土した。S257は花崗岩製（国見山系）の磨敲石である。正面・側面は被熱による風化が著しく，裏面には明瞭な磨面が確認できる。正面・裏面に敲打痕がみられることから磨敲石と判断した。S258は軟質の軽石製品で，左側面を面取り，全体を研磨して珠形に整形加工した遺物である。中央部には穿孔が施される。被熱の痕跡は確認できない。

集石39号（第166・167図）

分　類：タイプⅡ

検出状況

SS39は，F－２・３区のⅥ層で検出された。やや集中したエリアと散石状態の部分から成り，余り離れていないことから，ここでは一つの遺構として扱った。どちらも掘り込みは検出されなかった。散石状態の部分は，地形がゆるやかに下がる西側へばらけたものと思われる。被熱した礫が多く，炭化物は検出されなかった。

規　模

構成礫数は69個で，１個平均の重さが150gであった。礫は，長軸2.57m，短軸2.05mの範囲に広がる。

出土遺物

石器３点が出土した。S259・S260は安山岩製の被熱破砕した磨敲石片である。S260は多孔質な石材であり，礫の集中部から離れた位置で出土している。S261は凝灰岩製の磨敲石である。礫の集中部から少し離れた位置で出土した。使用頻度は少ないものと推測できる。

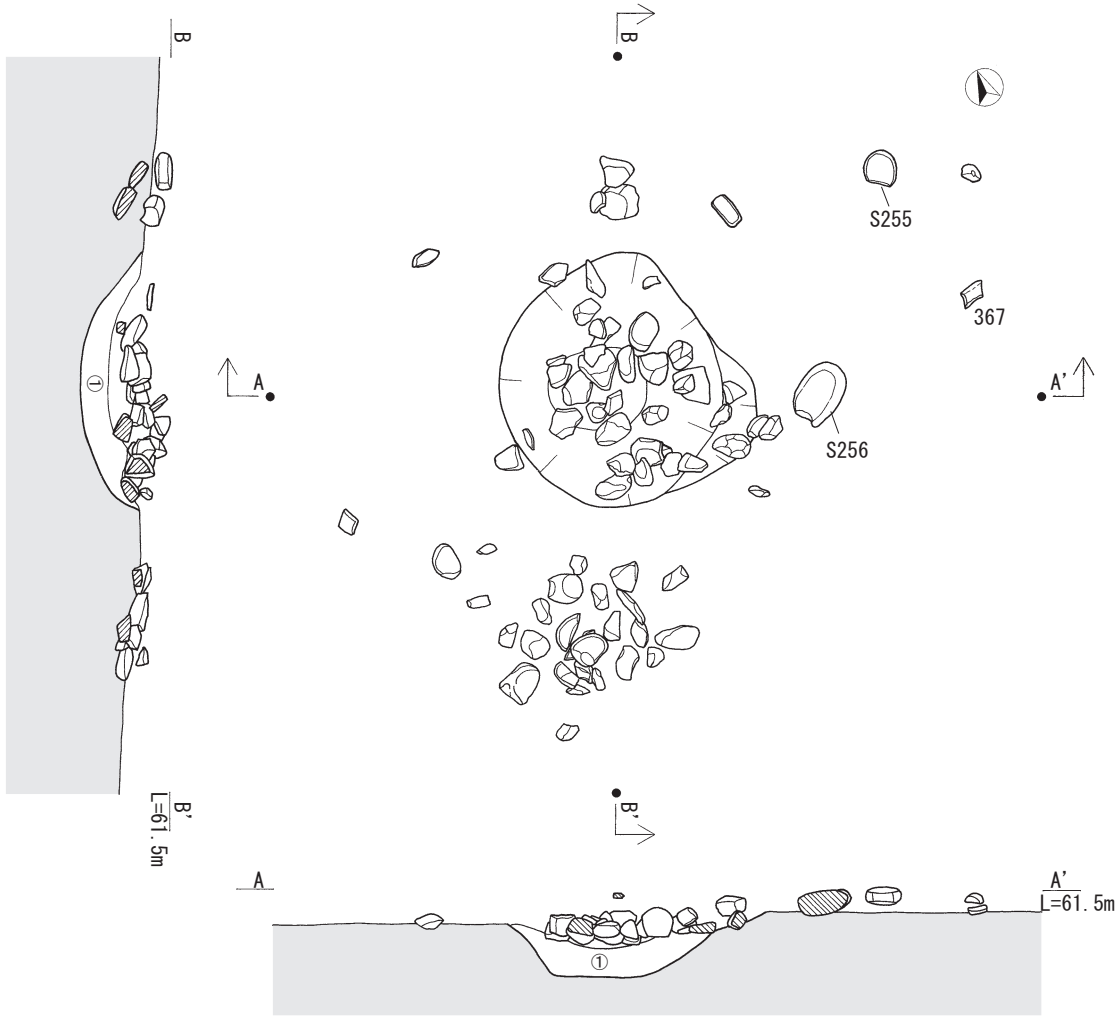
集石40号（第168図）

分　類：タイプⅠ

検出状況

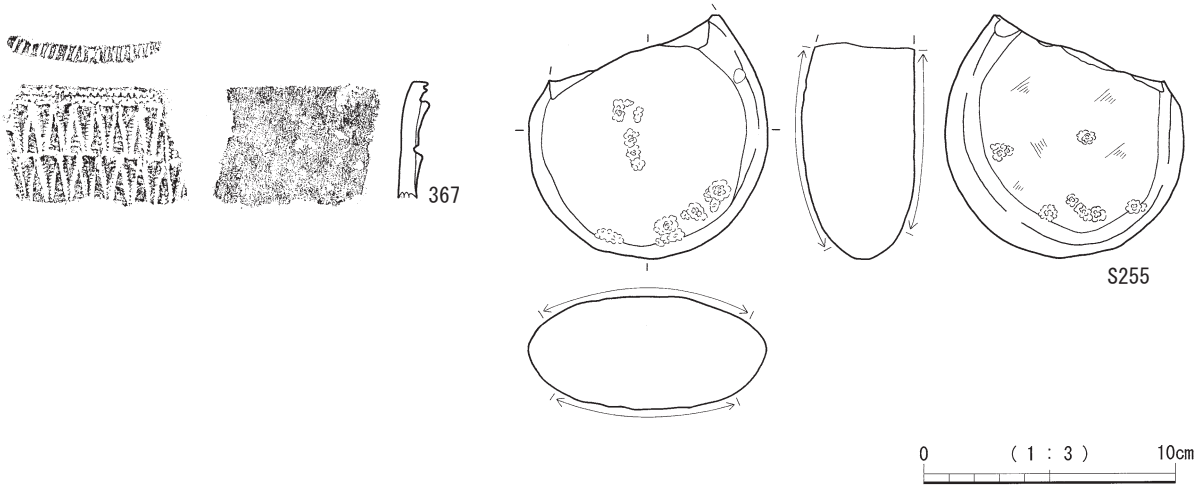
SS40は，F－３区のⅥ層で検出された。散石状態で掘り込みはない。焼土や炭化物は確認できなかった。安山岩がほとんどである。

SS36



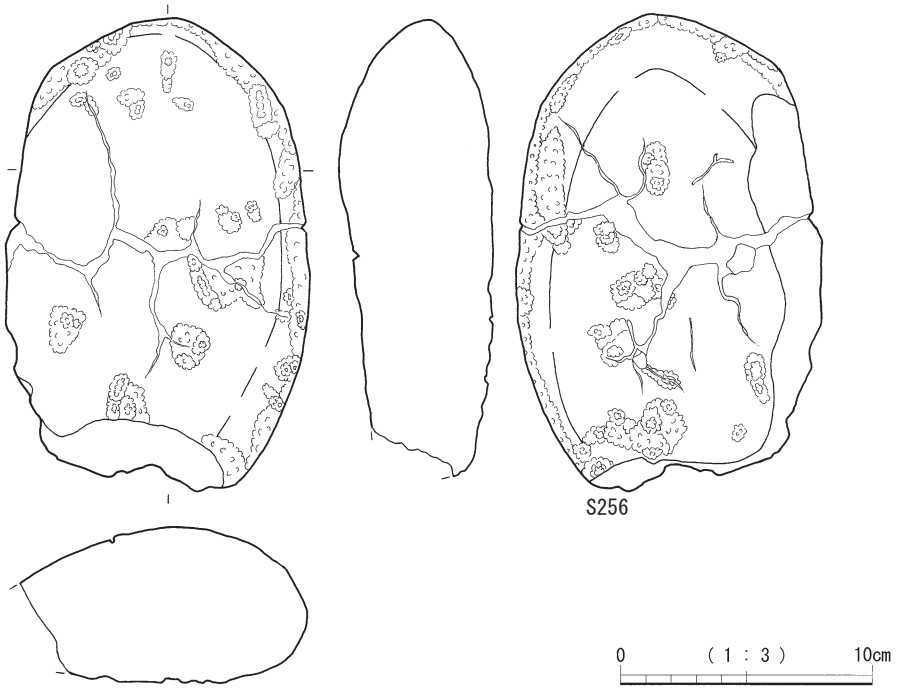
埋土
①黒褐色土
　炭化物の小片少量混ざる

0　（1：20）　0.5m



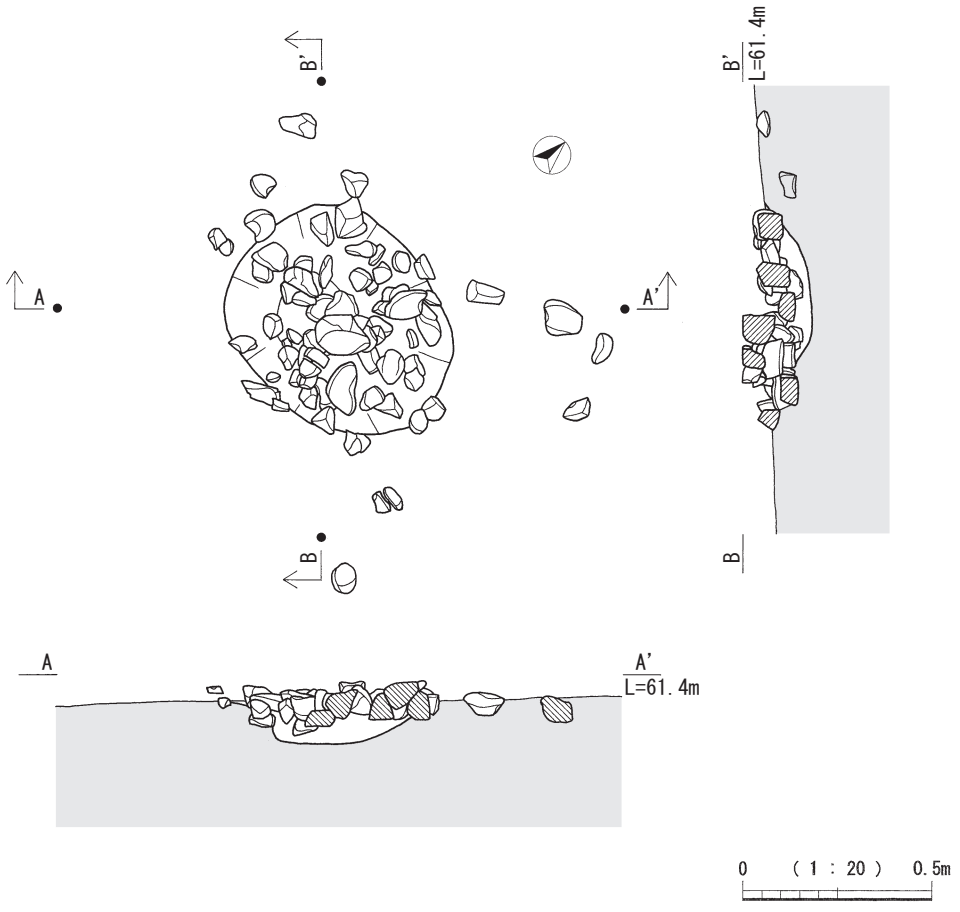
0　（1：3）　10cm

第162図　集石36号・出土遺物（1）



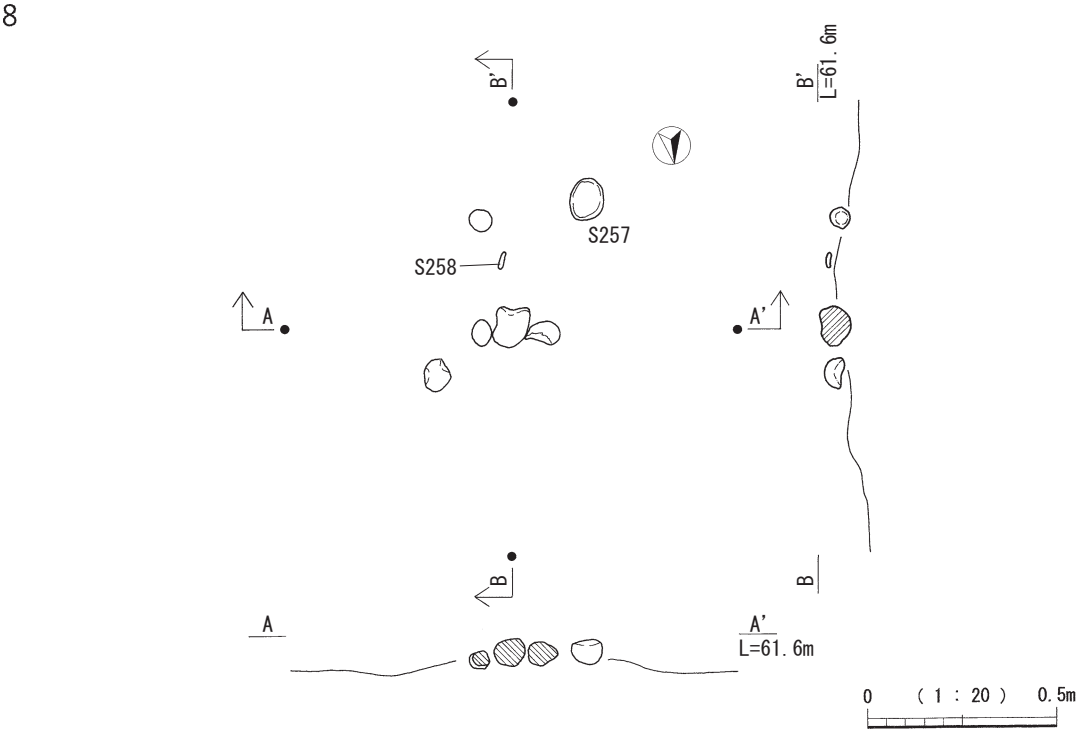
第163図　集石36号出土遺物（2）

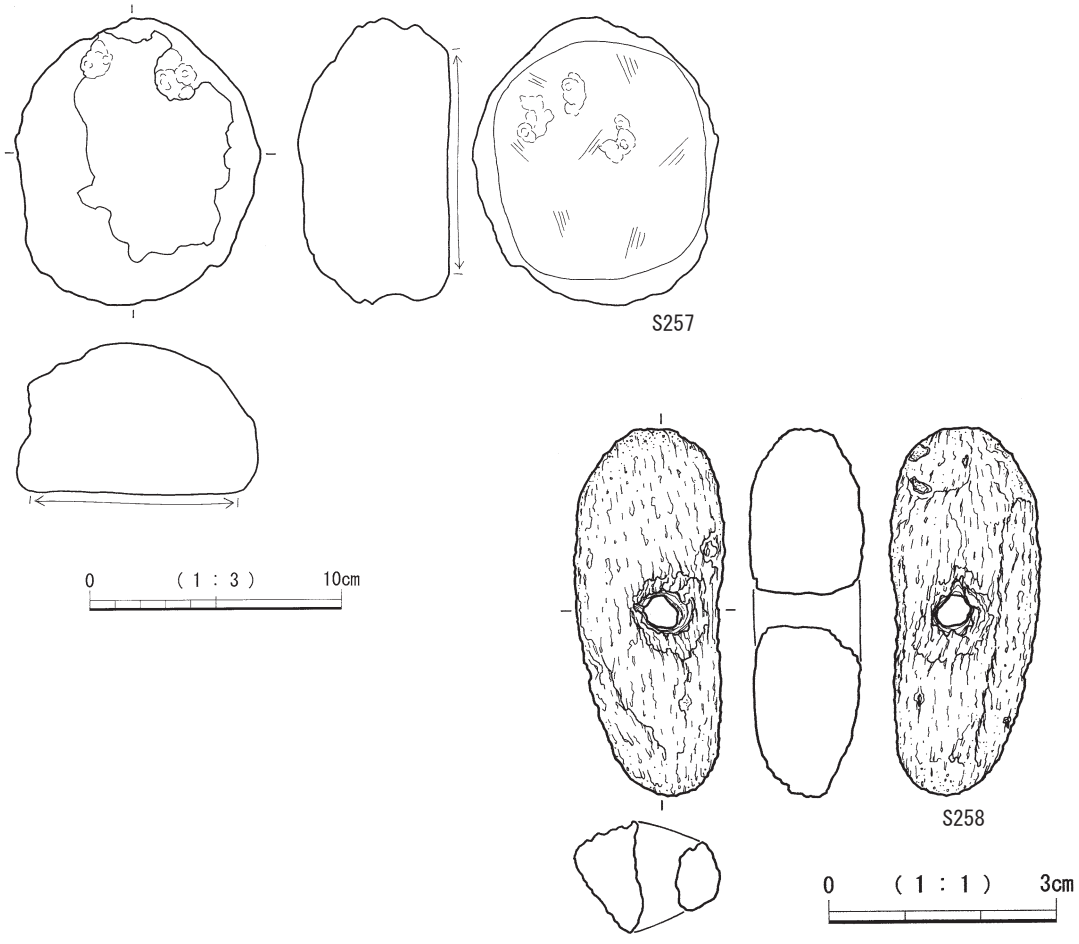
SS37



第164図　集石37号

SS38



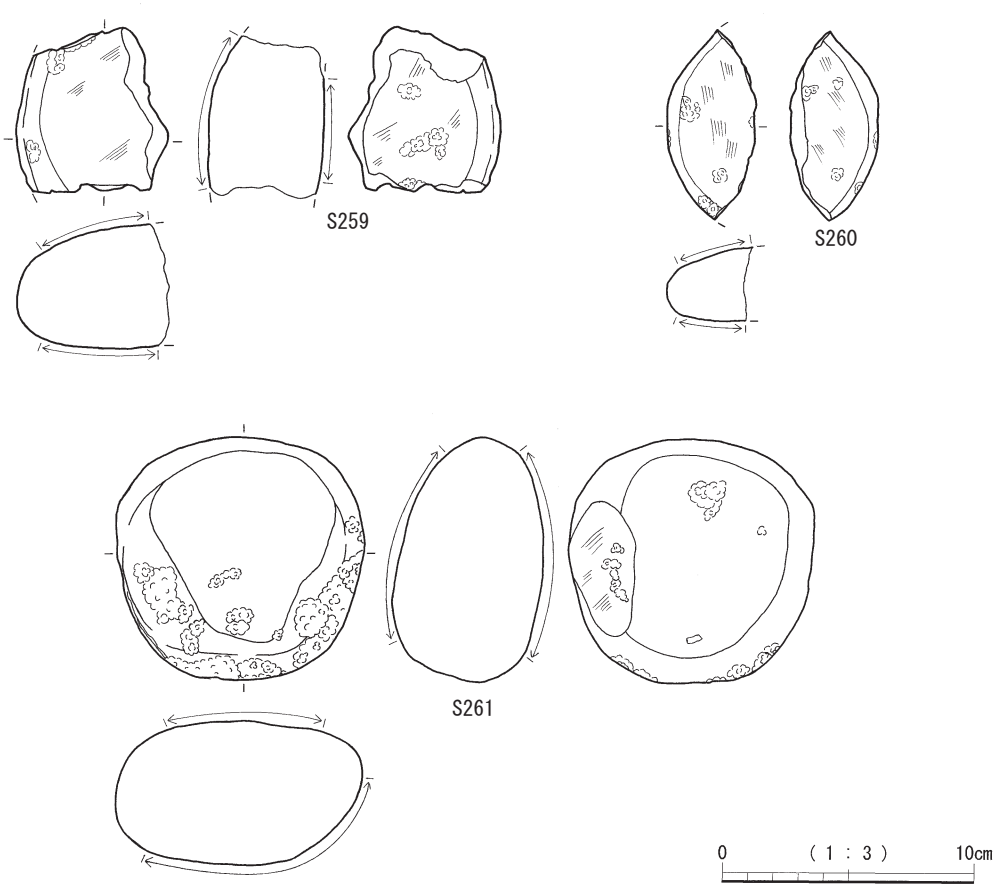


第165図　集石38号・出土遺物

SS39

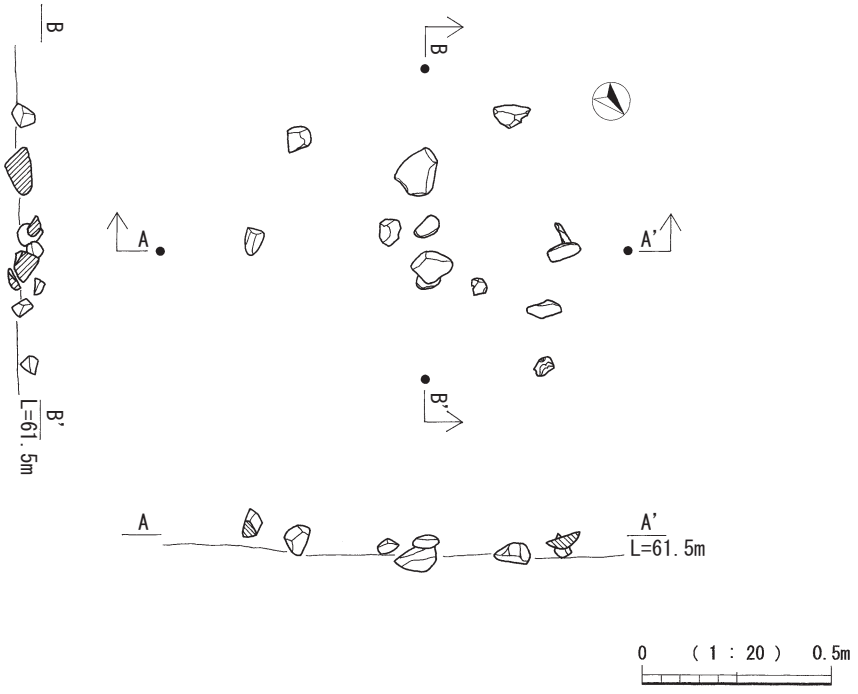


第166図　集石39号

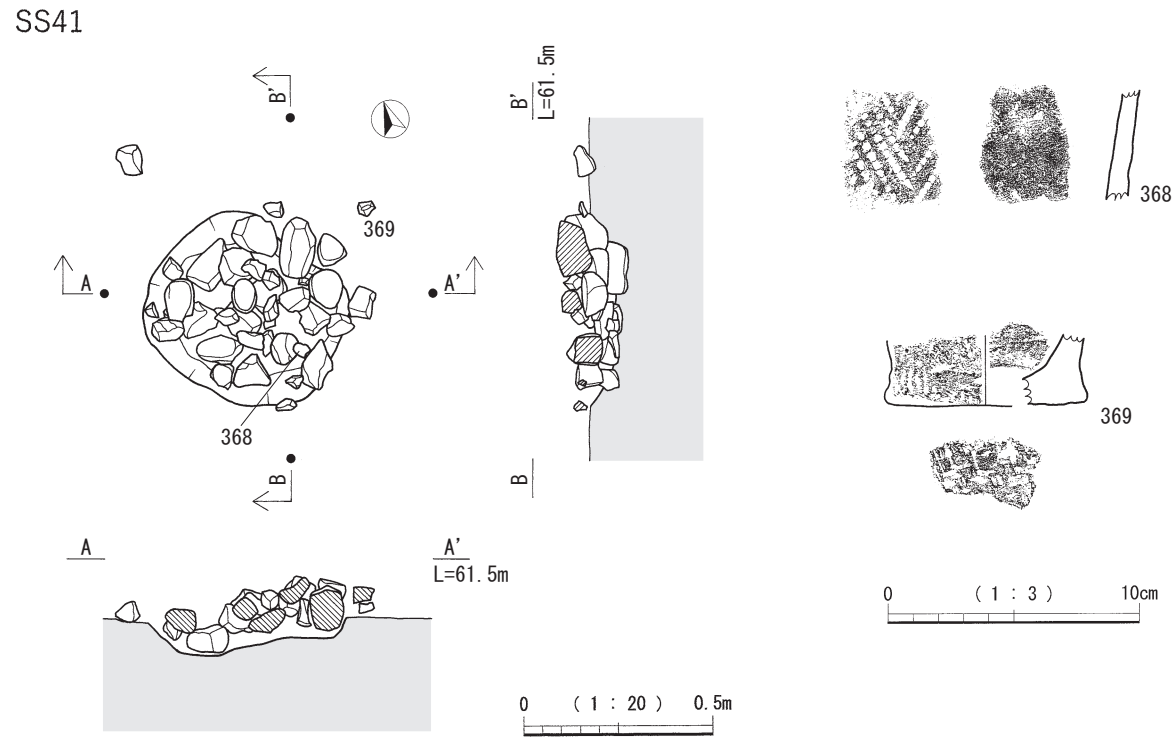


第167図　集石39号出土遺物

SS40



第168図　集石40号



第169図　集石41号・出土遺物

規　模

構成礫数は13個で，１個平均の重さが286gであった。礫は，長軸0.88m，短軸0.71mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石41号（第169図）

分　類：タイプⅢ

検出状況

SS41は，F－６区のⅣb層で検出された。南西に下る緩斜面に，10 ～ 15cm程度の火成岩転礫，10cm程度の堆積岩転礫及びこれらの破砕礫で構成される。浅い掘り込みを伴い，礫は被熱を受けている。焼土痕等は検出されなかった。

規　模

礫は，長軸0.70m，短軸0.70mの範囲に広がる。構成礫数は37個で，１個平均の重さが593gであった。掘り込みの深さは10cmである。

出土遺物

遺構内より土器２点が出土した。368は，貝殻刺突文を「V」字状に施す。Ⅵb類に分類される。369は底部で，胴部下位に縦位の貝殻条痕文が確認できる。接地面にも条痕がわずかに確認できる。

集石42号（第170・171図）

分　類：タイプⅡ

検出状況

SS42は，F－9区のⅥ層で検出された。拳大の円礫で構成されている。礫の重なりはないが，集中している。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規　模

構成礫数は16個で，１個平均の重さが648gであった。礫は，長軸0.67m，短軸0.53mの範囲に広がる。

出土遺物

石器５点が出土した。S262 ～ S266は楕円状の磨敲石であり，S266は被熱破砕している。S263は凝灰岩製で，そのほかは安山岩製である。そのなかでもS266は多孔質な石材である。使用頻度は高いと推測できる。完形品の形状・大きさは揃っており，図化した５点はすべて弱く熱を受けている可能性がある。S265には薄く煤が付着する。

集石43号（第172図）

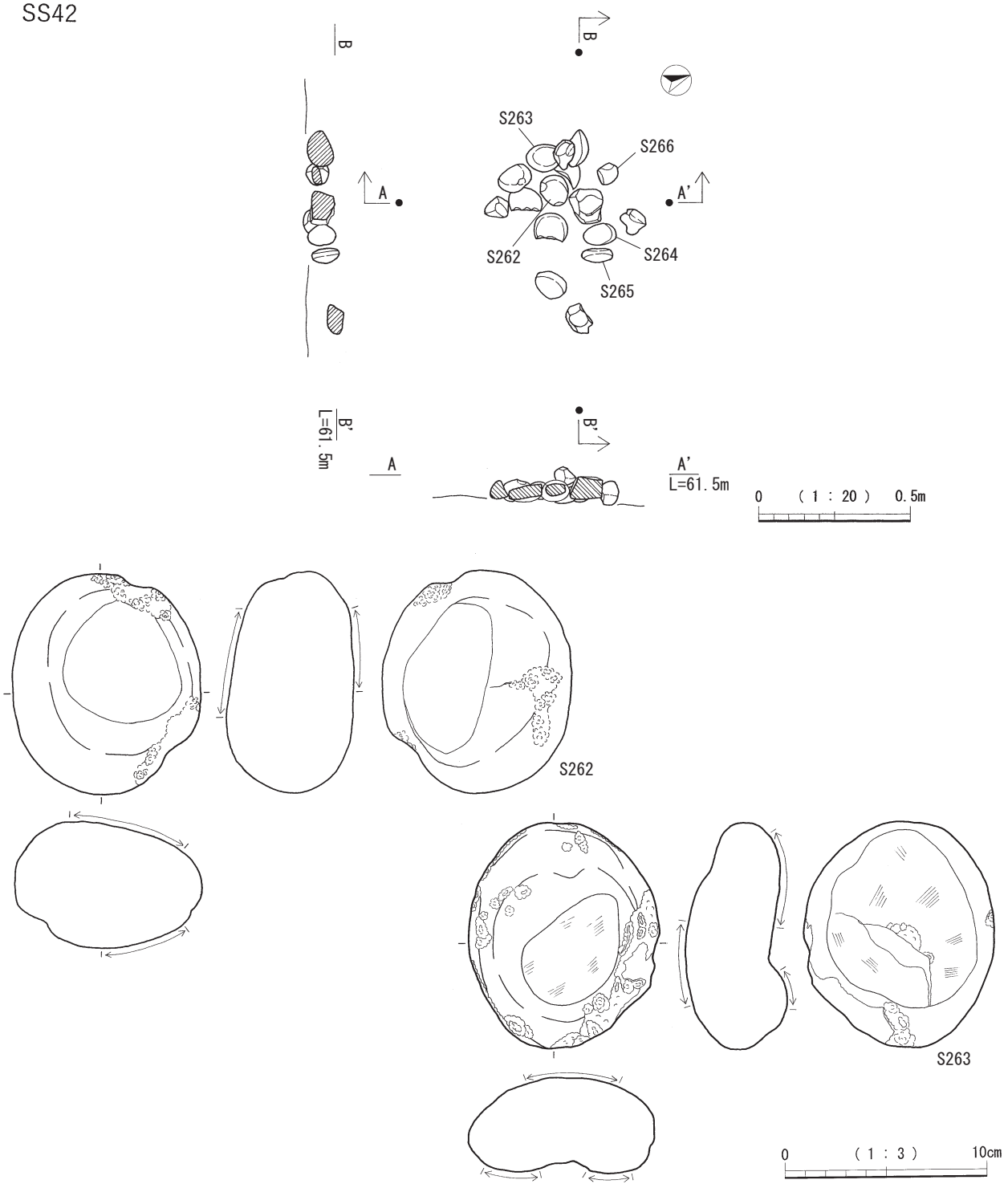
分　類：タイプⅠ

検出状況

SS43は，D－11区のⅥ層で検出された。拳大の礫で構成され，被熱している。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規　模

構成礫数は8個で，１個平均の重さが196gであった。



第170図　集石42号・出土遺物（1）

礫は，長軸0.49m，短軸0.25mの範囲に広がる。

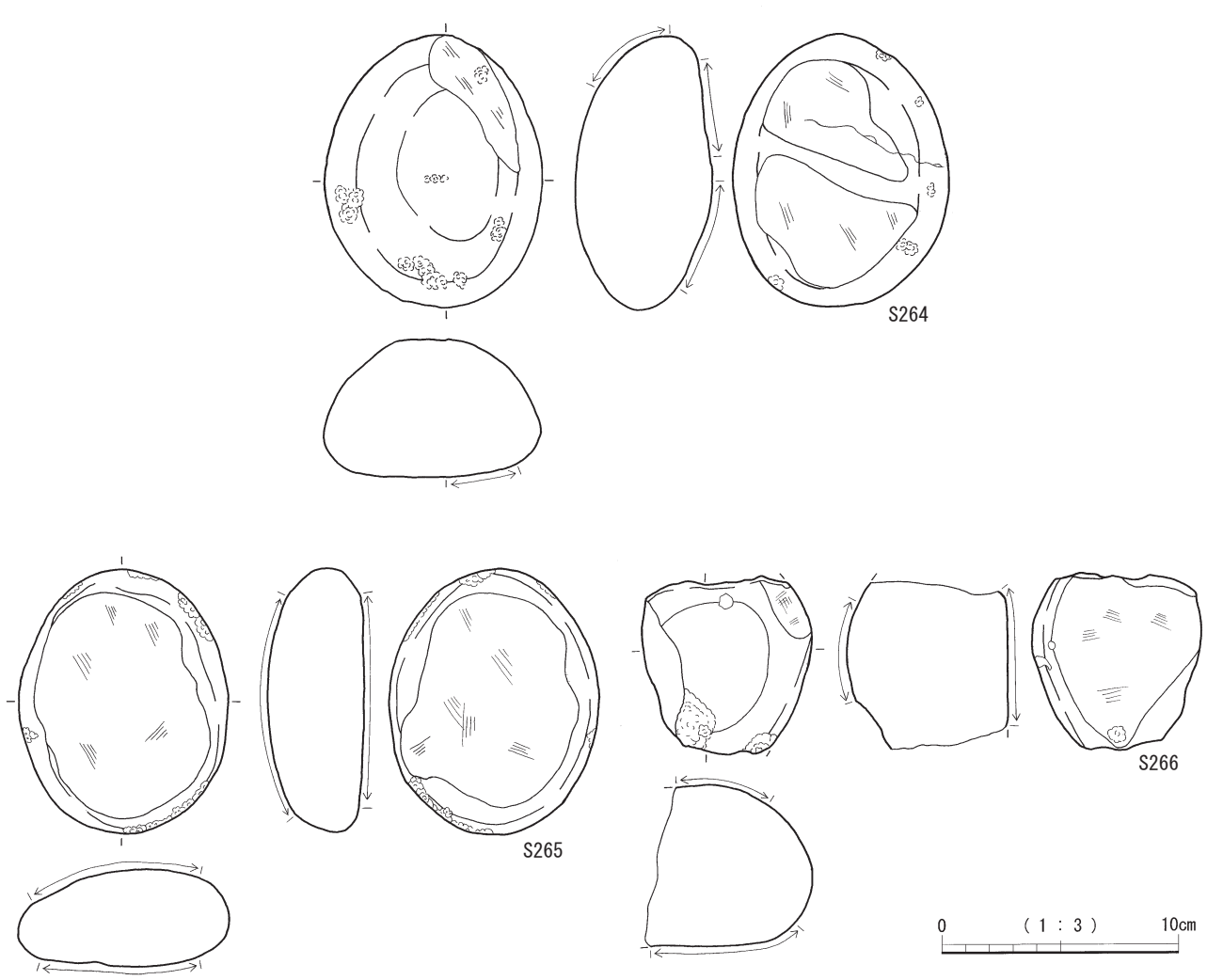
出土遺物

石器１点が出土した。S267は凝灰岩製で歪な楕円状の磨敲石である。やや小ぶりなタイプである。礫の集中部で出土している。よく使用されており，被熱による赤化・ヒビ割れが確認できる。

集石44号（第172図）

分　類：タイプⅡ

検出状況



第171図　集石42号出土遺物（2）

SS44は，B－12・13区のⅥ層で検出された。破砕礫で構成され，やや集中しているが，掘り込みは確認できなかった。礫は被熱しているが，焼土痕等は検出されなかった。

規　模

構成礫数は29個で，１個平均の重さが193gである。礫は，長軸1.20m，短軸0.56mの範囲にやや集中する。

出土遺物

石器１点が出土した。S268はホルンフェルス製の剥片で，礫の集中部から僅かに離れた位置で出土した。右側面は繰り返し敲打したことにより多くの剥離が生じ，左側面には使用痕が確認できる。被熱の痕跡はない。

集石45号（第173・174図）

分　類：タイプⅠ

検出状況

SS45は，C－13区のⅥ層で検出された。大きな礫を使用し，まとまりがあったものがばらけた感じである。礫は被熱しているが，焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規　模

構成礫数は38個で，１個平均の重さが423gであった。礫は，長軸2.75m，短軸2.40mの範囲に広がる。

出土遺物

石器１点が出土した。S269は安山岩製で，楕円状の磨敲石である。正面の中央部には凹みを有する。被熱による赤化が確認できる。

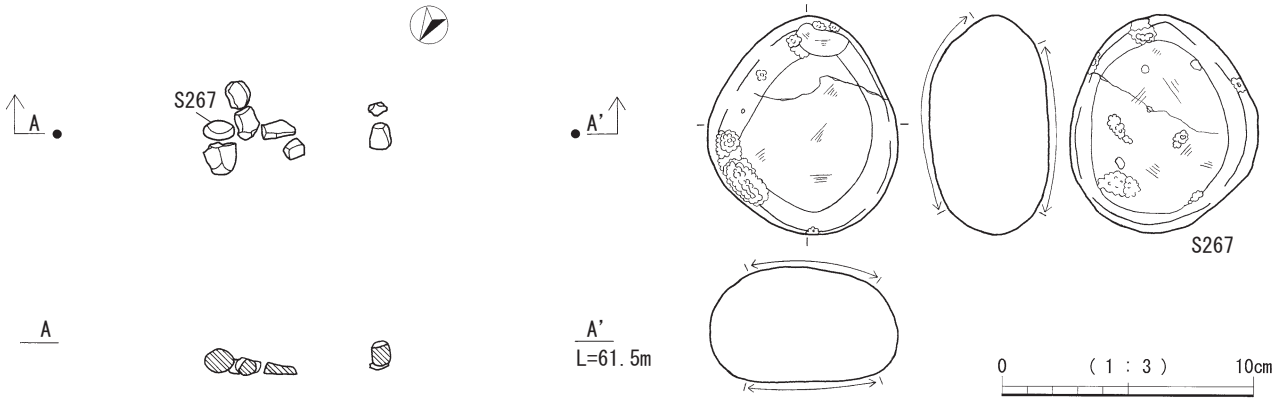
集石46号（第175 ～ 177図）

分　類：タイプⅢ

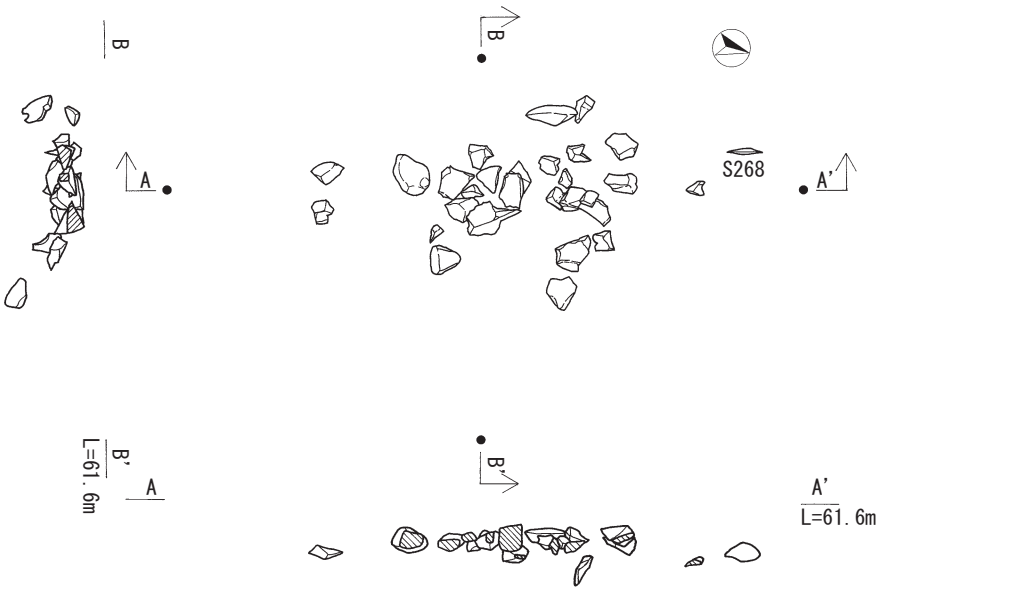
検出状況

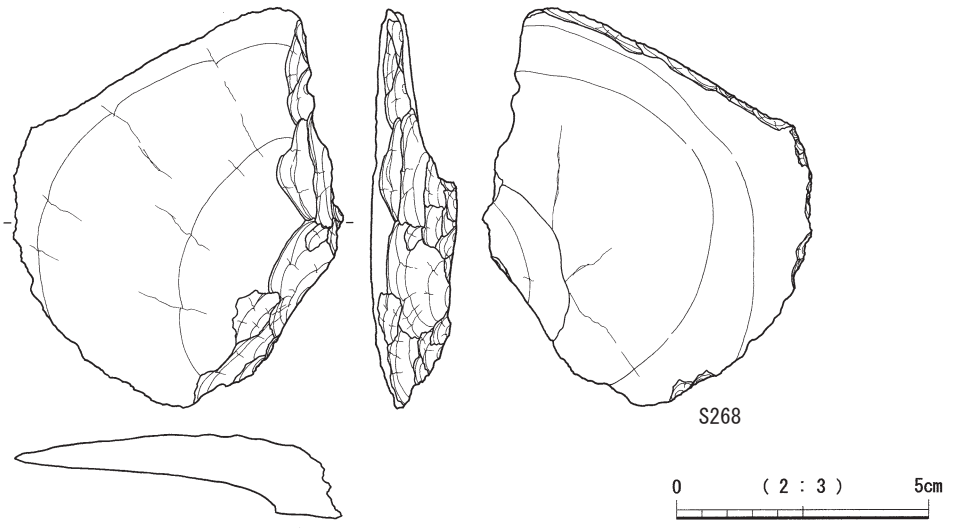
SS46は，D－15区のⅥ層で検出された。90cm×70cmの長方形に円礫が多く配されたように見える。被熱痕跡のある礫もあるが，多くは被熱なし。方形の形状は他の集

SS43



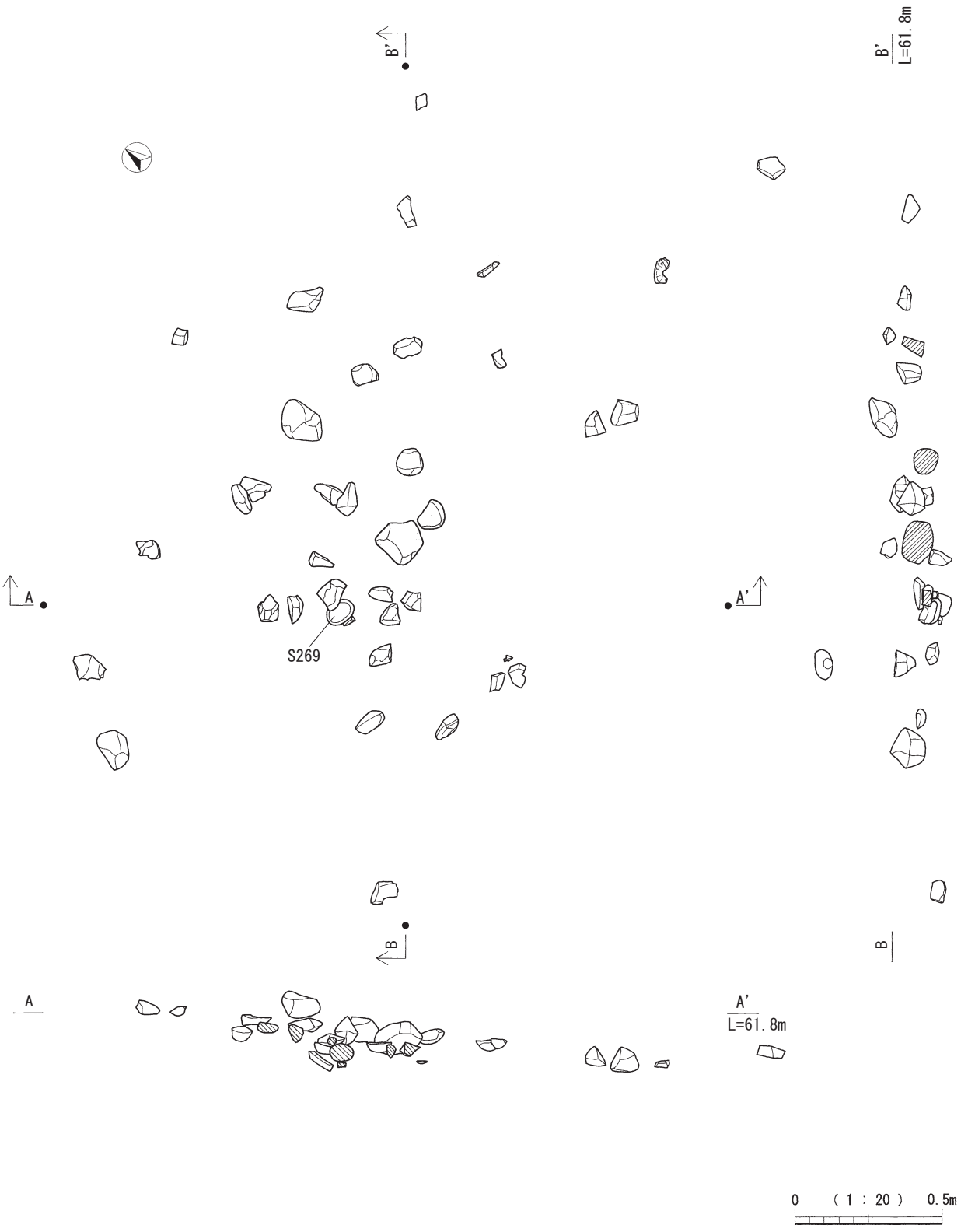
SS44



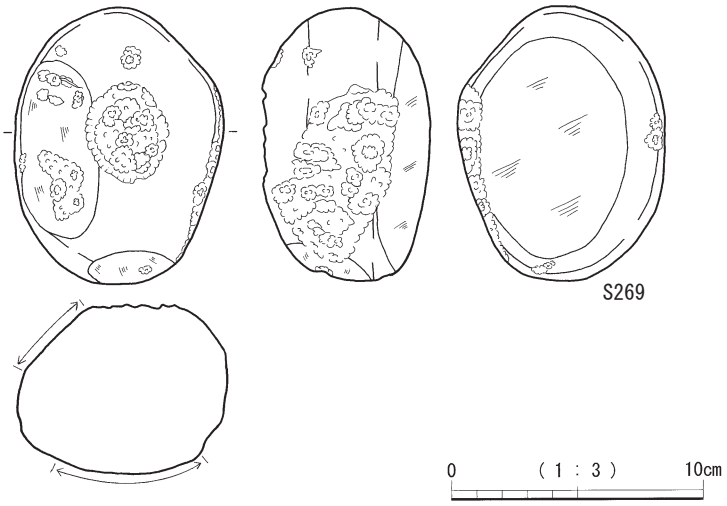


第172図　集石43号・出土遺物・集石44号・出土遺物

SS45



第173図　集石45号



第174図　集石45号出土遺物

石と比べ特徴的であり，小牧遺跡ではこの集石のみである。礫も意図的に配置したような様子が推察され，拳大の磨敲石が８個も使用されている。また、S270とS276を結ぶラインが冬至の日の入りと同じ方向を向く。浅い掘り込みがあるが，焼土痕や炭化物は検出されなかった。

規　模

構成礫数は51個で，１個平均の重さが755gであった。礫は，長軸0.99m，短軸0.97mの範囲に広がる。掘り込みの深さは約6cmである。

出土遺物

石器８点が出土した。S270 ～ S277は磨敲石で，S270・S271・S274・S277は安山岩製で，S272・S273・S275・S276は凝灰岩製である。S276は四角形状で，そのほかは楕円状である。S272・S276は特によく敲打に使用されている。S270 ～ S272・S275・S276には被熱によると思われる赤化が確認できる。S277は被熱破砕していると推測できる。

遺構の周辺には炭化物や被熱の痕跡はみられない。集石として使用された礫・石器の転用品なども構成礫として使用した可能性もある。

集石47号（第178図）

分　類：タイプⅣ

検出状況

SS47は，C－18区のⅥ層掘り下げ中に検出された。拳大かそれより大きめの円礫を配置したように構成されている。明瞭な掘り込み及び炭化物は確認できなかった。

規　模

構成礫数は5個で，１個平均の重さが3309gであった。礫は，長軸0.33m，短軸0.32mの範囲に広がる。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

集石48号（第178図）

分　類：タイプⅠ

検出状況

SS48は，C－20区のⅥ層で検出された。２点を除き同程度の堆積岩が散在している。焼土痕等は検出されなかった。掘り込みはなし。

規　模

礫は，長軸1.58m，短軸0.85mの範囲に広がる。構成礫数は12個で，１個平均の重さが188gであった。

出土遺物

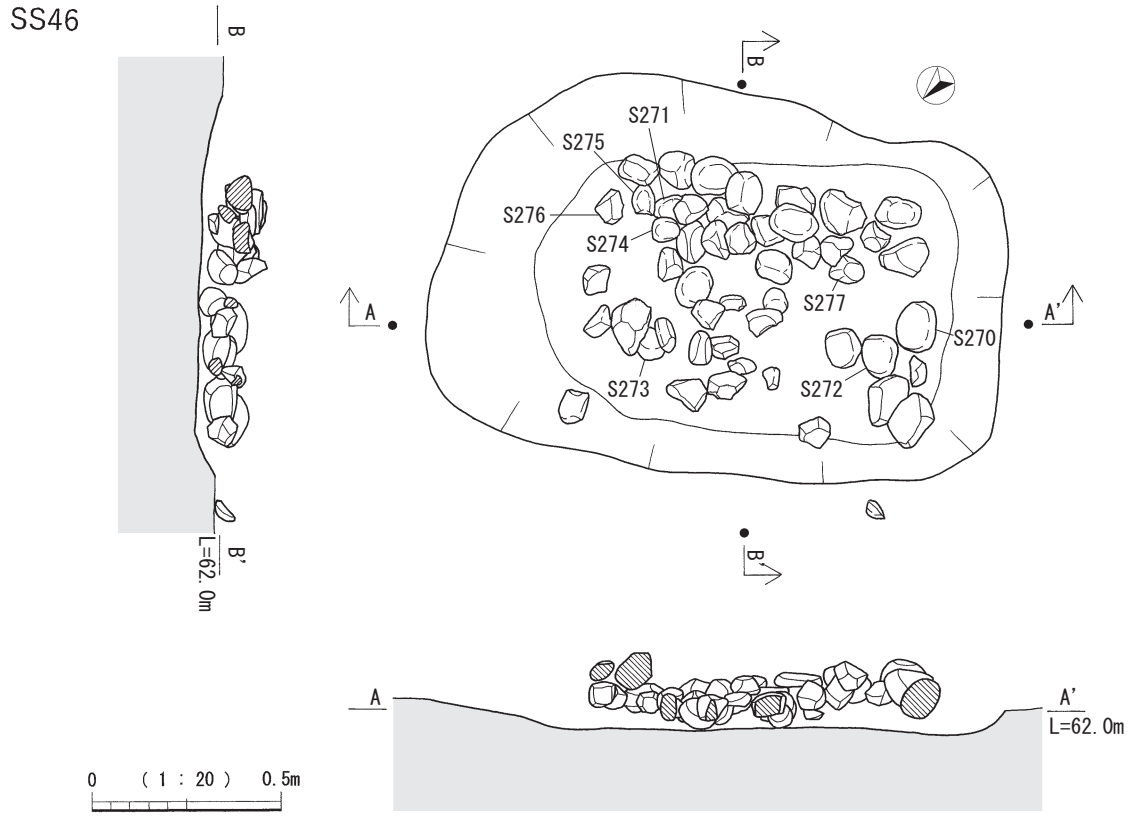
遺物は出土しなかった。

集石49号（第179・180図）

分　類：タイプⅠ

検出状況

SS49は，E－20区のⅥ層掘り下げ中に検出された。礫は，全て被熱痕跡が有るが，炭化物や焼土痕は検出されなかった。軽石S281も劣化している。ややまとまりがある箇所から20cm程度の軽石も出土した。掘り込み



第175図　集石46号



写真４　集石46号北側から

はなし。

規　模

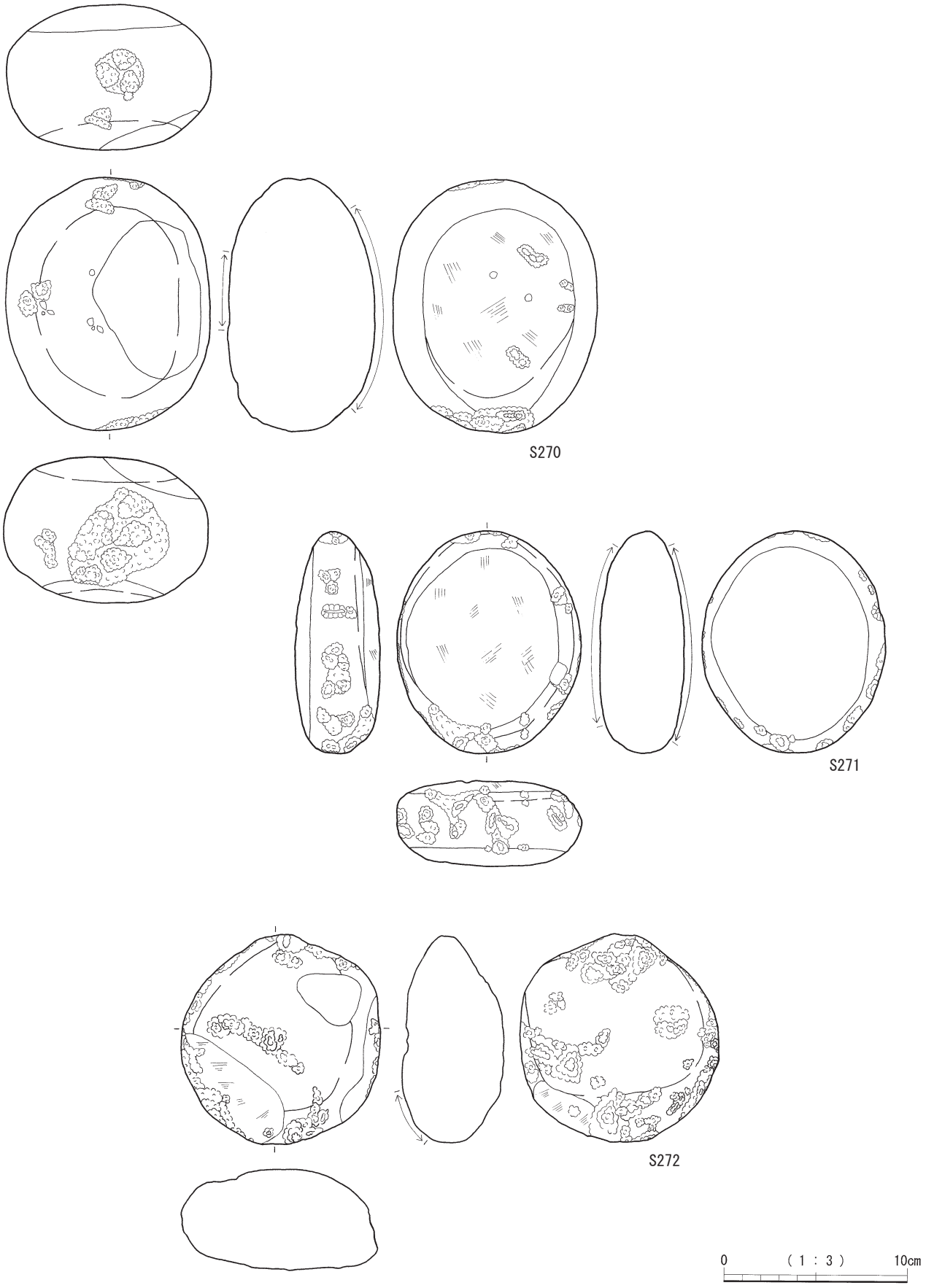
構成礫数は10個で，１個平均の重さが409gであった。礫は，長軸1.07m，短軸0.71mの範囲に広がる。

出土遺物

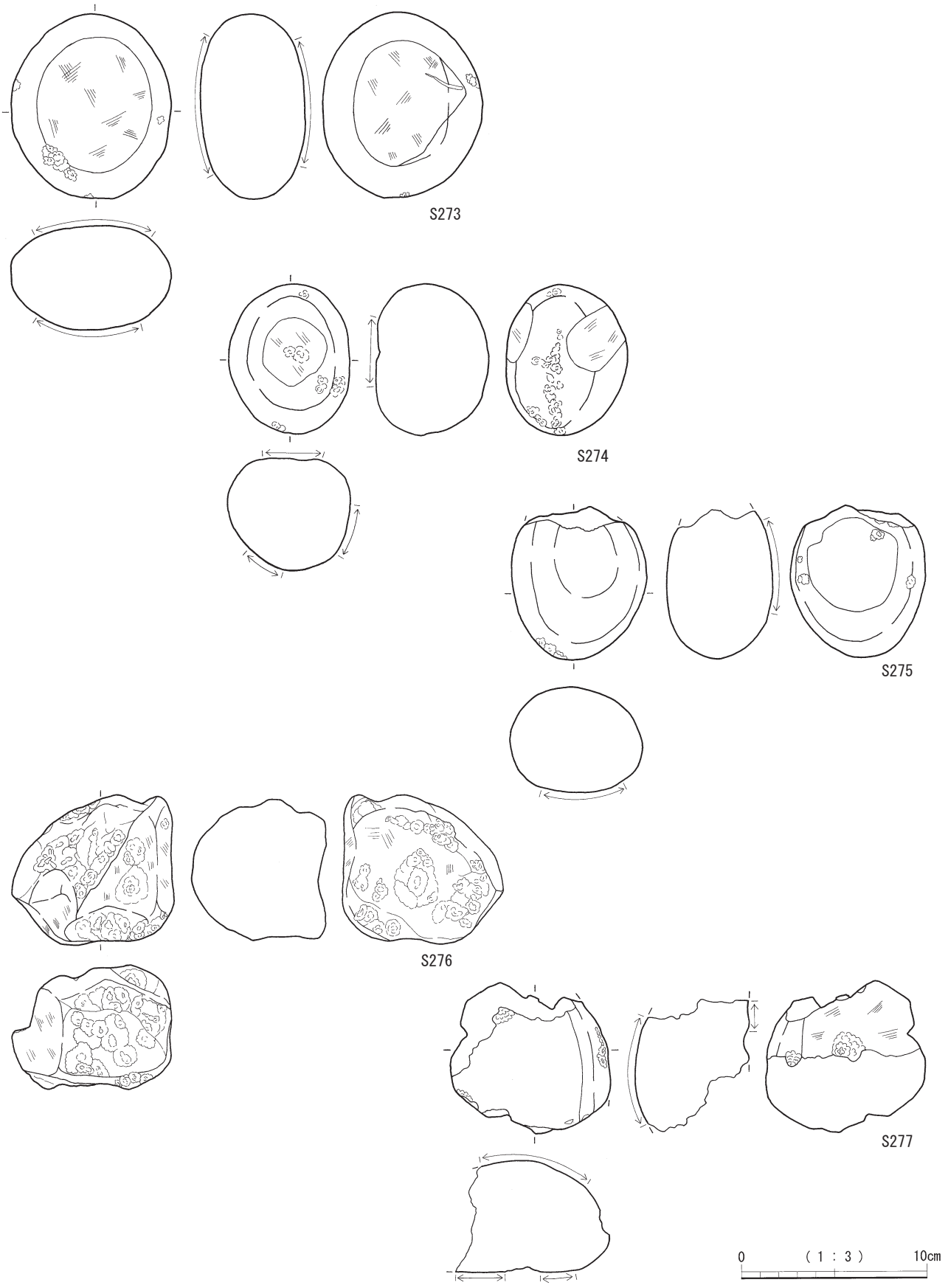
土器３点と石器４点が出土した。土器３点の内２点は胴部小片のため図化しなかった。370は，貝殻刺突文を「Z」字状に施す。器壁はやや厚めである。Ⅵa類に分類される。

S278 ～ S280は安山岩製の磨敲石である。S278・S279は多孔質の石材を使用している。S278は，裏面を特に強く擦っており，平たく成形している可能性も考えられる。S279の正面・側面の敲打は深い。S281は軽石製品である。構成礫の中心で出土しており，面取りを施すことにより成形している。用途は不明である。

すべてに被熱の痕跡が確認できる。

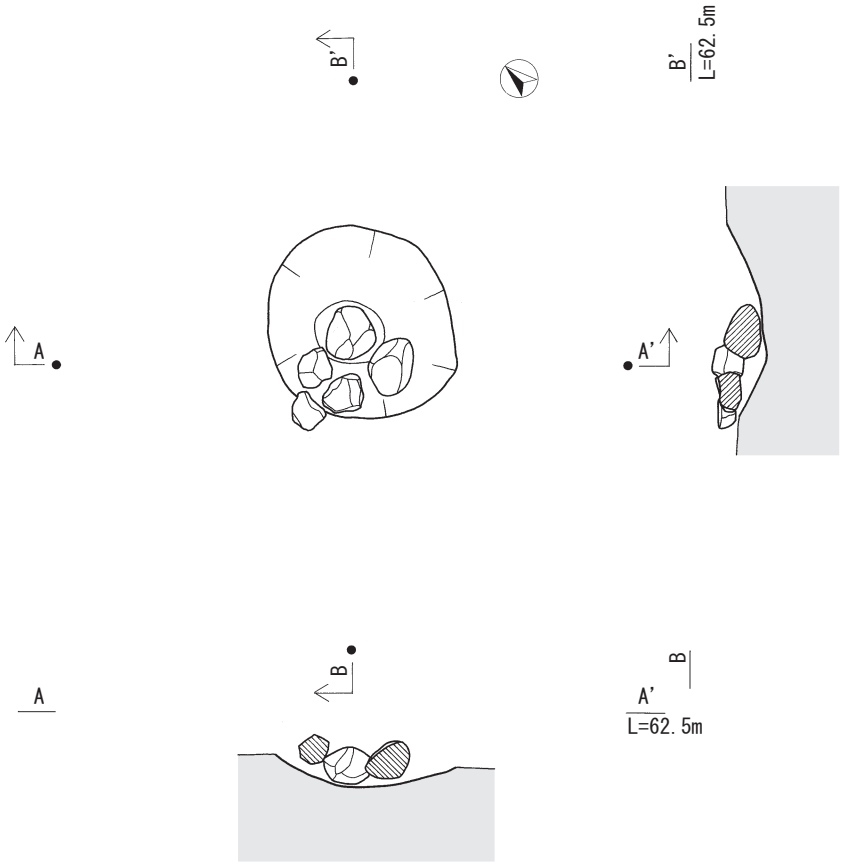


第176図　集石46号出土遺物（1）

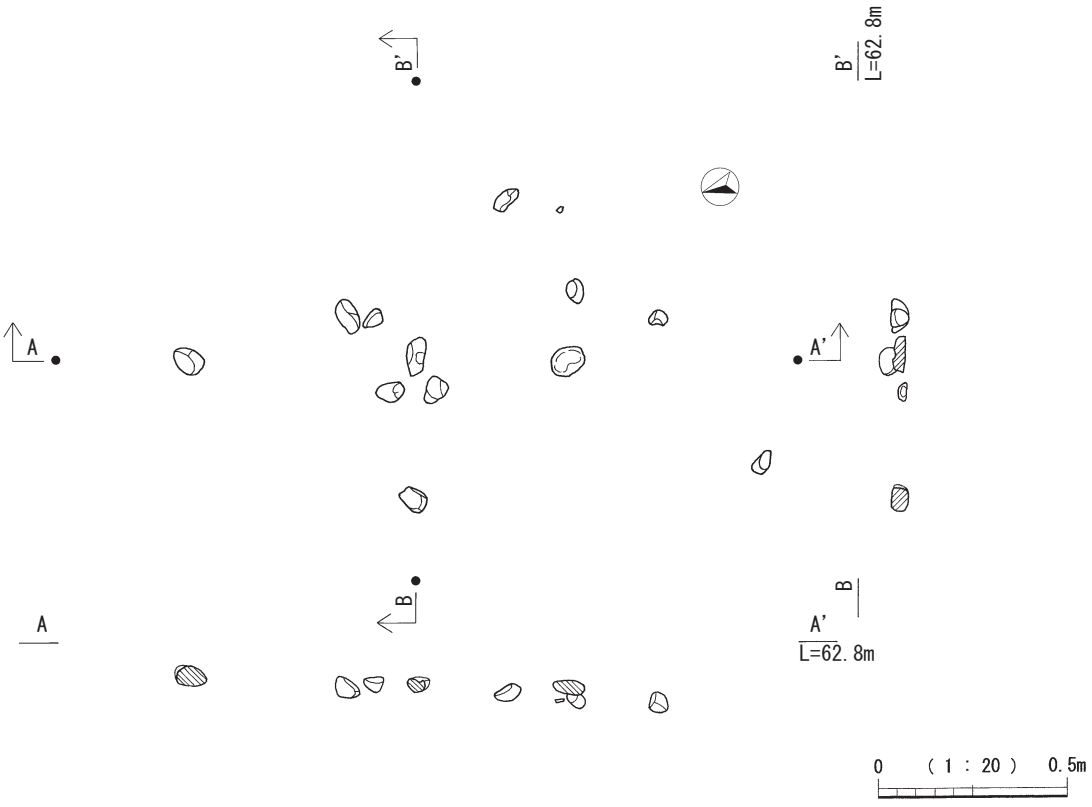


第177図　集石46号出土遺物（2）

SS47

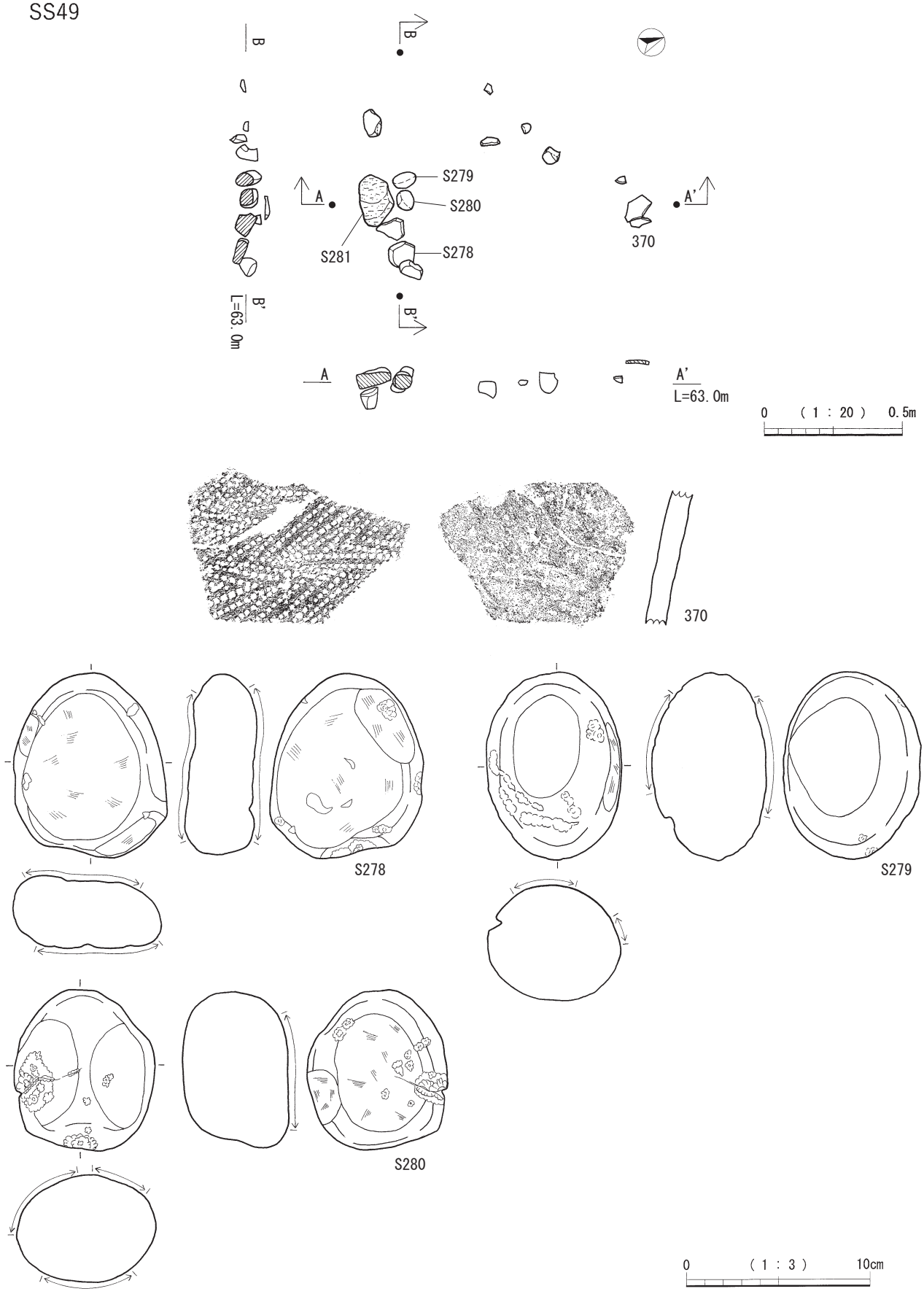


SS48

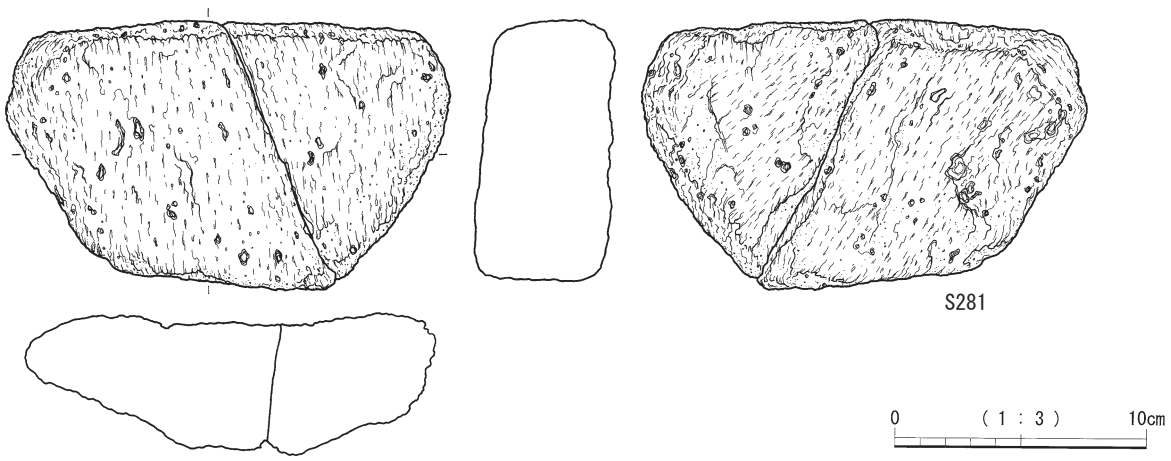


第178図　集石47号・集石48号

SS49



第179図　集石49号・出土遺物（1）



第180図　集石49号出土遺物（2）

集石50号（第181図）

分　類：タイプⅠ

検出状況

SS50は，C－21区のⅥ層下位で検出された。拳大の磨敲石の転用と思われるまとまった部分と，南西方向へ流れたような散石部分とから成る。礫はほとんど被熱しているが，一帯の土に被熱によると思われる赤変のような変異は認められなかった。

ややまとまりがある部分で，若干の炭化物は確認されたが，範囲を特定できる程ではなかった。掘り込みはなし。

規　模

構成礫数は12個で，１個平均の重さが440gであった。礫は，長軸2.14m，短軸0.59mの範囲に広がる。

出土遺物

石器３点が出土した。S282・S283は安山岩製の楕円形の磨敲石である。被熱による赤化が顕著であり薄く煤が付着する。２点ともよく使用されており，S282の正面には敲打の繰り返しによる凹みが形成されている。

S284は石皿の破片である。断面にも赤化がみられ，破砕後も強く被熱しているものと推測できる。S283は集石の北側の礫の集中部から，そのほかの２点は南側に離れた位置で出土している。

集石51号（第182図）

分　類：タイプⅡ

検出状況

SS51は，E・F－22区Ⅴ層（アカホヤ）直下のⅥ層で検出された。中央がわずかに凹むような構造だが，明確な掘り込みは確認できなかった。礫は，中央の空白部を囲むように環状に配置されたように見られ，ほぼ全てよく被熱し，破砕赤変している。

規　模

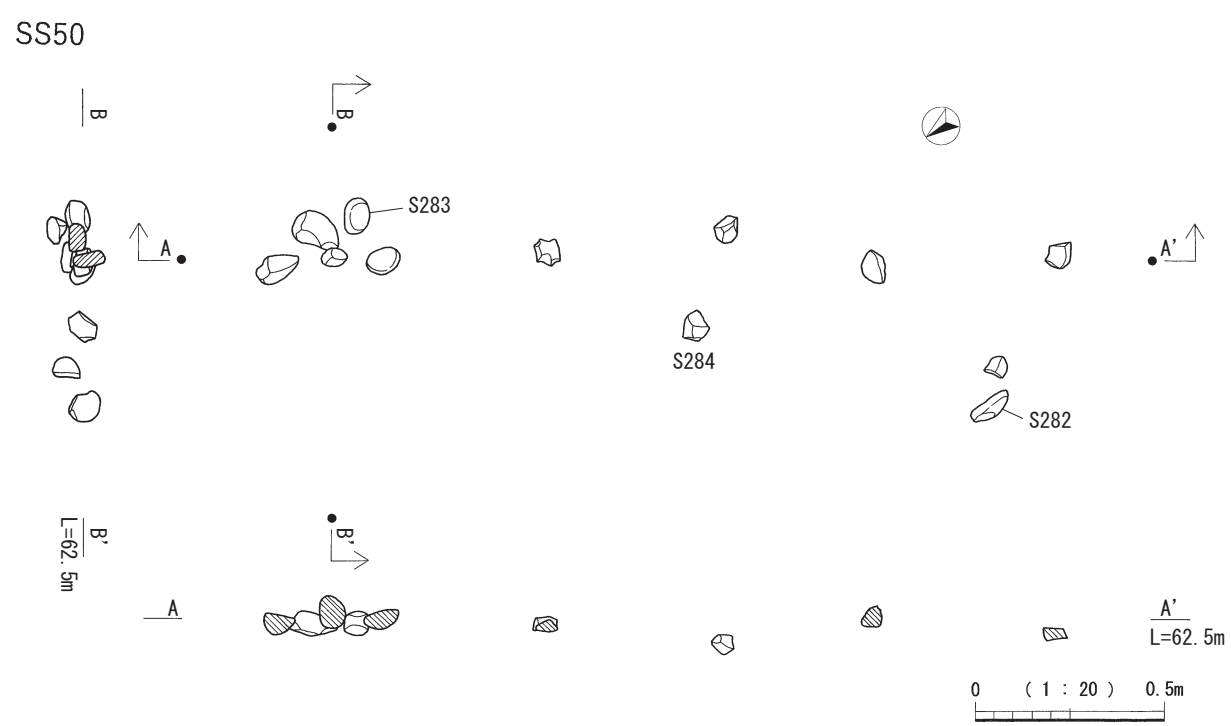
構成礫数は100個で，１個平均の重さが119gであった。礫は，長軸1.73m，短軸1.68mの範囲に広がる。

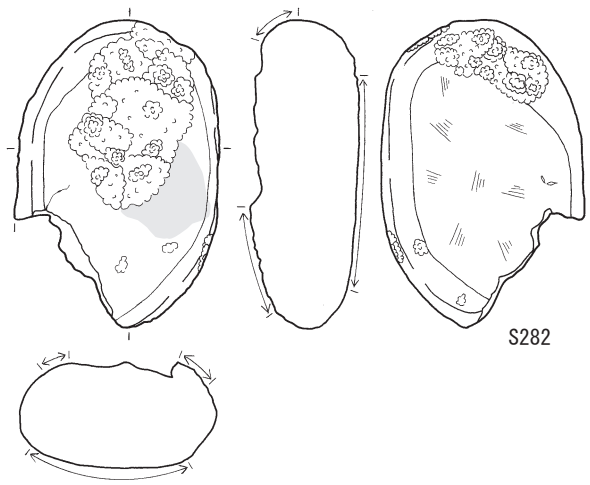
出土遺物

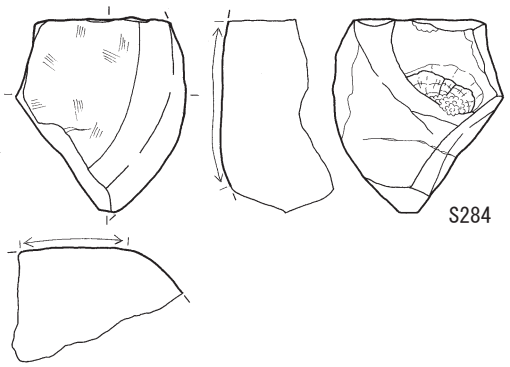
遺物は出土しなかった。

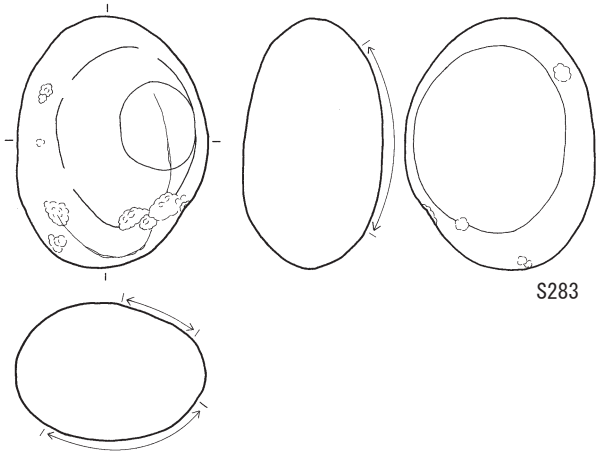
第33表　土器観察表（集石Ⅵ層出土）

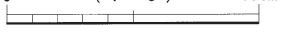
挿図番号	掲載番号	器種	部位	類別	出土区	遺構名	文様・器面調整等		色調						焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
162	367	深鉢	口縁	Ⅲd	D－2	SS36	貝殻刺突 キザミ・楔貼付	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	10YR6/3にぶい黄橙	○	○		金雲母	良好	
169	368	深鉢	胴	Ⅵb	F－6	SS41	貝殻刺突	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR4/2灰黄褐	○	△	△	金雲母	良好	
	369	深鉢	底	Ⅺ	F－6	SS41	貝殻条痕	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	○	○	○	金雲母	良好	
179	370	深鉢	胴	Ⅵa	E－20	SS49	貝殻刺突	ナデ	2.5Y5/3黄褐	10YR6/4にぶい黄橙	○	○	○	金雲母	良好	20042 20043





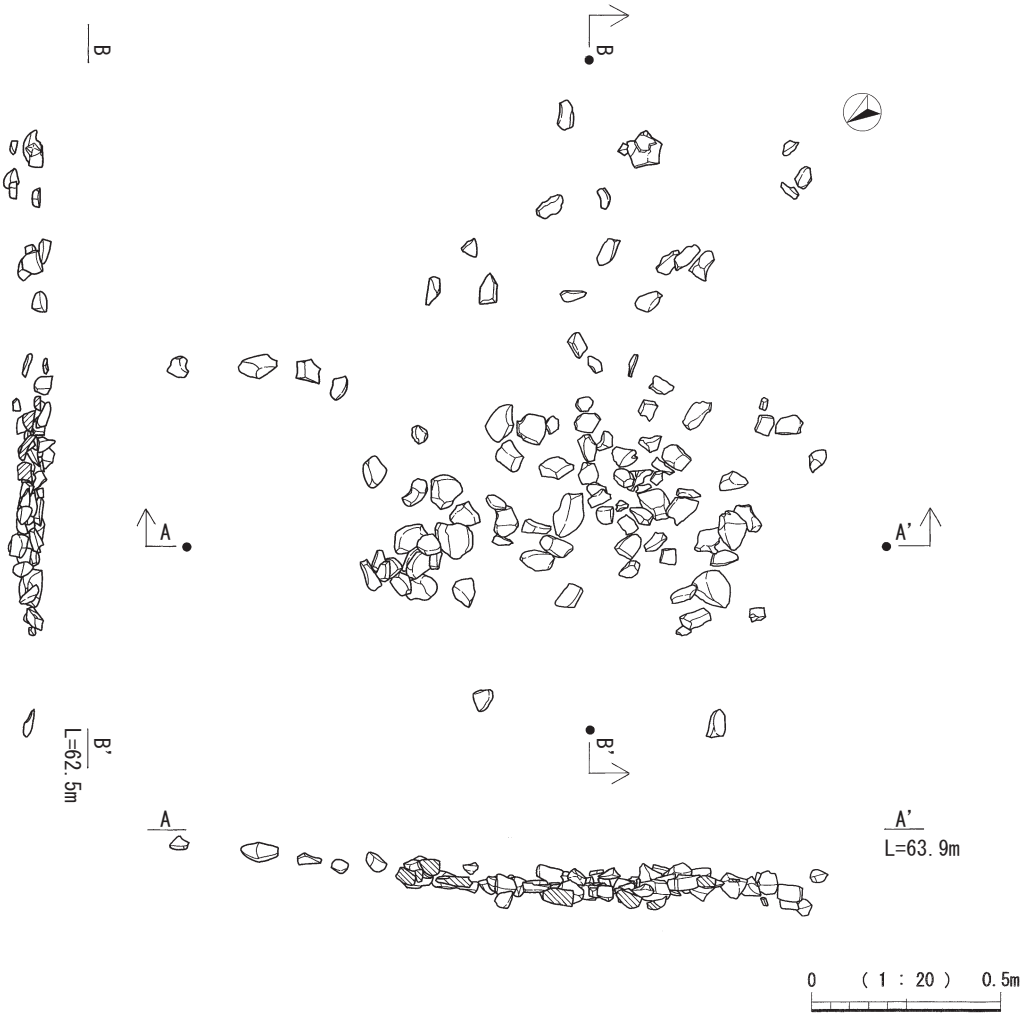






第181図　集石50号・出土遺物

SS51



第182図　集石51号

第34表　集石（Ⅵ層）一覧表

挿図番号	遺構名	検出区	検出層	タイプ	長軸(m)	短軸(m)	掘込	構成礫の内容数（個）								一個あたりの重量(g)	備考
								総数	安山岩	砂岩	頁岩	花崗岩	凝灰岩	ホルンフェルス	軽石		
159	SS33	D－2	Ⅵ	Ⅰ	2.23	1.62	無	39	—	—	—	—	—	—	—	367	
160	SS34	D－2	Ⅵ	Ⅲ	1.20	0.73	有	83	—	—	—	—	—	—	—	144	
161	SS35	D－2	Ⅵ	Ⅱ	0.43	0.38	無	14	12	2	0	0	0	0	0	175	
162	SS36	D－2	Ⅵ	Ⅲ	1.70	1.56	有	71	—	—	—	—	—	—	—	246	
164	SS37	D－2·3	Ⅵ	Ⅲ	1.26	1.07	有	70	68	1	0	0	0	0	1	333	
165	SS38	E－3	Ⅵ	Ⅰ	0.56	0.49	無	7	5	0	0	1	0	0	1	459	
166	SS39	F－2·3	Ⅵ	Ⅱ	2.57	2.05	無	69	—	—	—	—	—	—	—	150	
168	SS40	F－3	Ⅵ	Ⅰ	0.88	0.71	無	13	12	1	0	0	0	0	0	286	
169	SS41	F－6	Ⅵ	Ⅲ	0.70	0.70	有	37	14	4	0	0	7	12	0	593	
170	SS42	F－9	Ⅵ	Ⅱ	0.67	0.53	無	16	13	0	0	0	3	0	0	648	
172	SS43	D－11	Ⅵ	Ⅰ	0.49	0.25	無	8	5	1	0	0	1	0	0	196	
	SS44	B－12·13	Ⅵ	Ⅱ	1.20	0.56	無	29	0	23	0	0	3	3	0	193	
173	SS45	C－13	Ⅵ	Ⅰ	2.75	2.40	無	38	15	5	1	0	7	10	0	423	
175	SS46	D－15	Ⅵ	Ⅲ	0.99	0.70	有	51	26	15	0	0	10	0	0	755	
178	SS47	C－18	Ⅵ	Ⅳ	0.33	0.32	無	5	2	2	0	0	1	0	0	3309	
	SS48	C－20	Ⅵ	Ⅰ	1.58	0.85	無	12	1	3	6	0	1	1	0	188	
179	SS49	E－20	Ⅵ	Ⅰ	1.07	0.71	無	10	6	2	0	0	0	1	1	409	
181	SS50	C－21	Ⅵ	Ⅰ	2.14	0.59	無	12	7	5	0	0	0	0	0	440	
182	SS51	E·F－22	Ⅵ	Ⅱ	1.73	1.68	無	100	15	63	18	1	3	0	0	119	

第35表　石器観察表（集石Ⅵ層出土）

挿図番号	掲載番号	遺構番号	取上番号	出土区	層	器種	分類	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	備考
160	S251	SS34	SS102－66	D2	Ⅵ	磨敲石	－	80.0	53.0	34.0	188.10	砂岩	－	
	S252	SS34	SS102－21	D2	Ⅵ	磨石	－	87.0	54.0	24.0	160.00	安山岩	安山岩B	
	S253	SS34	SS102－42	D2	Ⅵ	磨敲石	－	50.0	45.0	31.0	96.20	凝灰岩	－	
161	S254	SS35	SS112－10	D2	Ⅵ	磨敲石	－	87.0	91.0	47.0	392.50	砂岩	－	
162	S255	SS36	SS100－62	D2	Ⅵ	磨敲石	－	96.0	94.0	45.0	473.50	安山岩	安山岩B	
163	S256	SS36	SS100－60	D2	Ⅵ	磨敲石	－	185.0	120.0	61.0	1410.00	凝灰岩	－	
165	S257	SS38	SS99－6	E3	Ⅵ	磨敲石	－	113.0	96.0	60.0	869.00	花崗岩	－	国見山系
	S258	SS38	SS99－4	E3	Ⅵ	軽石製品	－	48.5	20.0	15.0	3.24	軽石	－	珠形
167	S259	SS39	SS97－20	F2･3	Ⅵ	磨敲石	－	66.0	61.0	49.0	248.10	安山岩	安山岩B	
	S260	SS39	SS97－49	F2･3	Ⅵ	磨敲石	－	77.0	35.0	29.0	74.00	安山岩	安山岩B	
	S261	SS39	SS98－5	F2･3	Ⅵ	磨敲石	－	96.0	97.0	59.0	721.50	凝灰岩	－	
170	S262	SS42	44921	F9	Ⅵ	磨敲石	－	109.0	93.0	63.0	864.50	安山岩	安山岩B	
	S263	SS42	44922	F9	Ⅵ	磨敲石	－	111.0	94.0	51.0	594.50	凝灰岩	－	
171	S264	SS42	44920	F9	Ⅵ	磨敲石	－	114.0	91.0	57.0	791.00	安山岩	安山岩B	
	S265	SS42	44919	F9	Ⅵ	磨敲石	－	110.0	88.0	41.0	582.00	安山岩	安山岩B	
	S266	SS42	44923	F9	Ⅵ	磨敲石	－	75.0	71.0	68.0	532.50	安山岩	安山岩B	
172	S267	SS43	24994	D11	Ⅵ	磨敲石	－	86.0	70.5	46.0	321.00	凝灰岩	－	
	S268	SS44	22246	B13	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	79.0	65.5	17.0	54.60	ホルンフェルス	－	
174	S269	SS45	20294	C13	Ⅵ	磨敲石	－	109.0	82.0	66.0	818.00	安山岩	安山岩B	
176	S270	SS46	SS25－6	D15	Ⅵ	磨敲石	－	137.0	111.0	80.0	1696.00	安山岩	安山岩B	
	S271	SS46	SS25－34	D15	Ⅵ	磨敲石	－	120.0	100.0	46.0	792.80	安山岩	安山岩B	
	S272	SS46	SS25－7	D15	Ⅵ	磨敲石	－	112.0	107.0	54.0	885.50	凝灰岩	－	
177	S273	SS46	SS25－16	D15	Ⅵ	磨敲石	－	98.0	84.0	56.0	687.00	凝灰岩	－	
	S274	SS46	SS25－29	D15	Ⅵ	磨敲石	－	80.0	65.0	60.0	420.50	安山岩	安山岩B	
	S275	SS46	SS25－32	D15	Ⅵ	磨敲石	－	82.0	71.0	57.0	421.50	凝灰岩	－	
	S276	SS46	SS25－30	D15	Ⅵ	磨敲石	－	81.0	85.0	68.0	584.00	凝灰岩	－	
	S277	SS46	SS25－45	D15	Ⅵ	磨敲石	－	81.0	86.0	59.0	410.00	安山岩	安山岩B	
179	S278	SS49	20036	E20	Ⅵ	磨敲石	－	100.0	82.0	37.0	469.00	安山岩	安山岩B	
	S279	SS49	20039	E20	Ⅵ	磨敲石	－	101.0	72.0	62.0	542.00	安山岩	安山岩B	
	S280	SS49	20038	E20	Ⅵ	磨敲石	－	87.0	71.0	57.0	543.50	安山岩	安山岩B	
180	S281	SS49	20037	E20	Ⅵ	軽石製品	－	106.5	176.0	56.0	241.00	軽石	－	
181	S282	SS50	20051	C21	Ⅵ	磨敲石	－	121.0	80.0	44.0	588.50	安山岩	安山岩B	
	S283	SS50	20048	C21	Ⅵ	磨敲石	－	99.0	75.0	55.0	532.50	安山岩	安山岩B	
	S284	SS50	20049	C21	Ⅵ	石皿	－	78.0	68.0	45.0	261.00	砂岩	－	

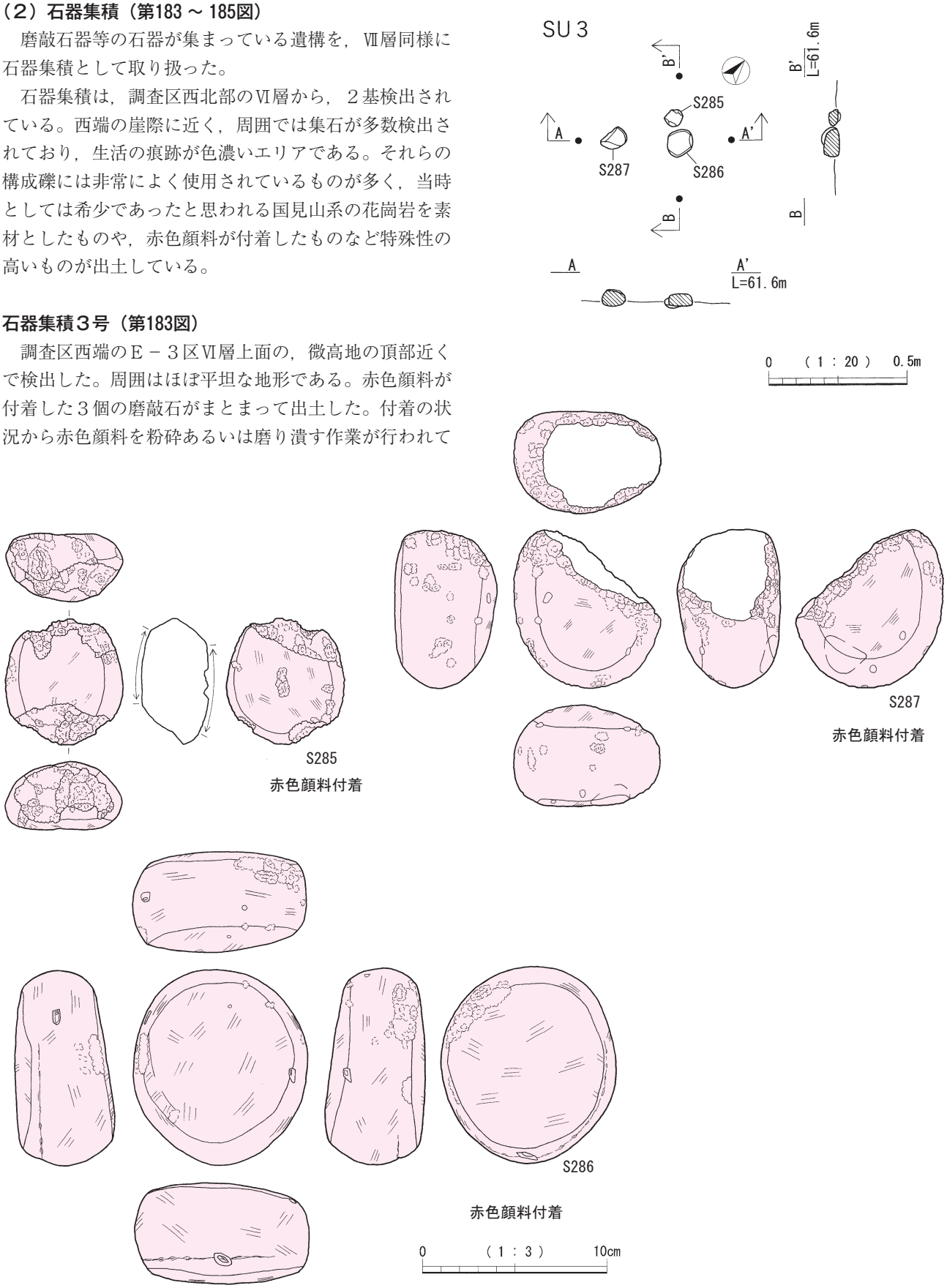
（2）石器集積（第183 ～ 185図）

磨敲石器等の石器が集まっている遺構を，Ⅶ層同様に石器集積として取り扱った。

石器集積は，調査区西北部のⅥ層から，２基検出されている。西端の崖際に近く，周囲では集石が多数検出されており，生活の痕跡が色濃いエリアである。それらの構成礫には非常によく使用されているものが多く，当時としては希少であったと思われる国見山系の花崗岩を素材としたものや，赤色顔料が付着したものなど特殊性の高いものが出土している。

石器集積３号（第183図）

調査区西端のＥ－３区Ⅵ層上面の，微高地の頂部近くで検出した。周囲はほぼ平坦な地形である。赤色顔料が付着した３個の磨敲石がまとまって出土した。付着の状況から赤色顔料を粉砕あるいは磨り潰す作業が行われて



第183図　石器集積３号・出土遺物

いた場所が近かった可能性が考えられる。

S285 ～ S287は安山岩製の磨敲石であり，S285・S287は多孔質な石材である。

S285は小型で，上面・下面はとてもよく使用されており，赤色顔料が付着する。裏面は強く磨られる。

S286は石鹸型の形状で，全面的によく磨られている。赤色顔料の付着は側面部分に多く確認できる。下面・左側面・右側面の３ヶ所に穿孔している可能性がある。

S287は上面が欠損している。敲打の繰り返しによるものと考えられる。所々に赤色顔料の付着が確認できる。

遺物とその周辺に被熱の痕跡は見られない。

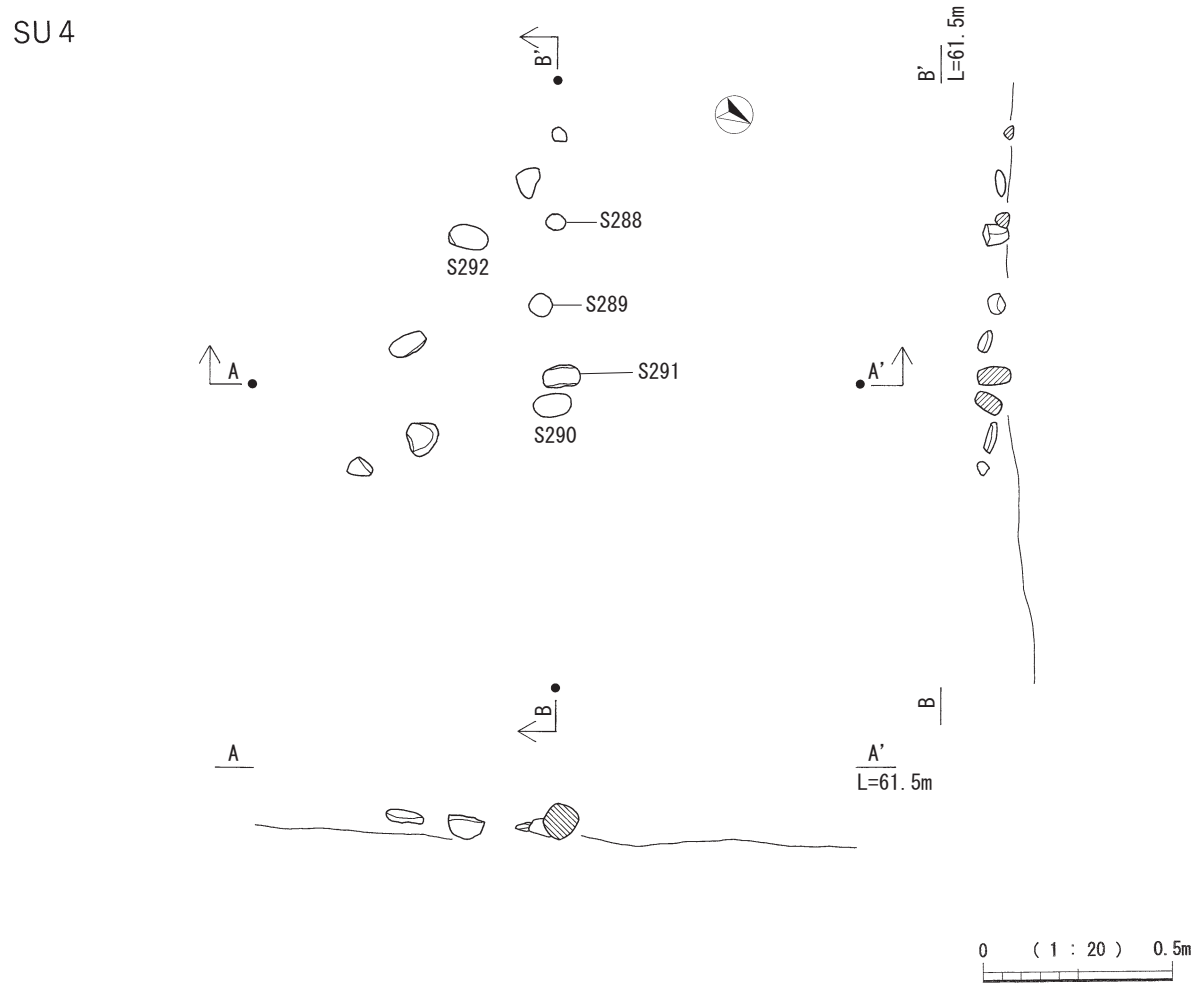
石器集積４号（第184・185図）

調査区西端のＧ－３区Ⅵ層で検出した。ほぼ平坦な場所に位置する。周辺では集石40号が検出されている。約100×75cmの範囲に６個の磨石・敲石と４個の礫が集中して出土しており，そのうち５点を図化した。

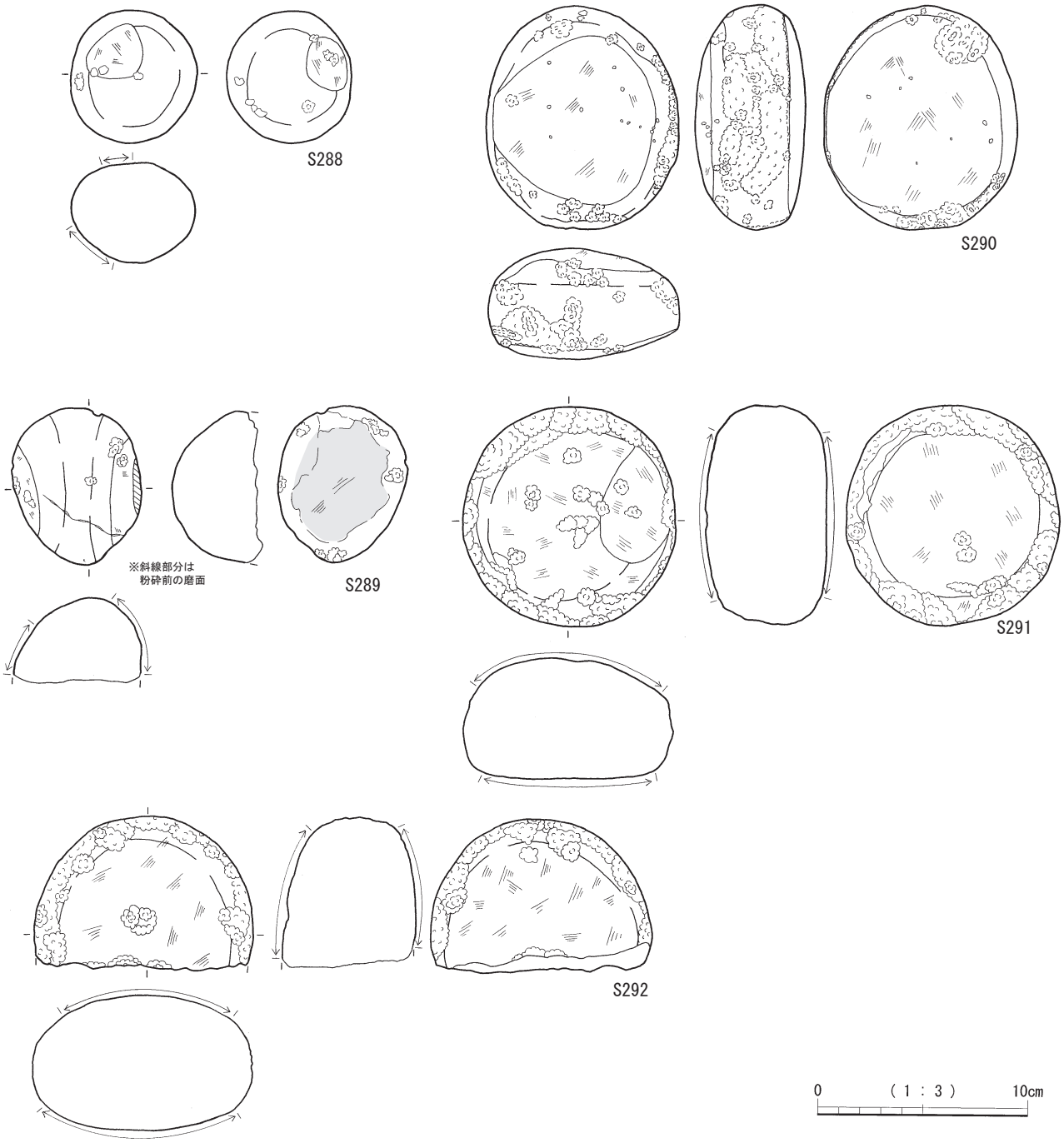
S288 ～ S290は安山岩製である。S288は小型の磨石である。磨面は部分的に強いが使用頻度は少ないものと考えられる。S289は円形の磨敲石であったものが最大径の部分で割れた後，割れ口をハンマー様に使用しているものである。割れ口には煤が付着している。S290は楕円形の磨敲石であり，特に裏面を強く磨って使用している。

S291・S292は国見山系の花崗岩製の磨敲石である。共に石鹸形の形状で，側面を一周敲打し正面・裏面を強く磨っている。S292は約半分が残存し，割れ口の縁の部分に敲打痕が確認できることから割れた後もさらに敲打具として使用した状況が伺える。人為的に半裁している可能性もある。

S289・S290にのみ若干の被熱の痕跡が確認できる。



第184図　石器集積４号



第185図　石器集積４号出土遺物

第36表　石器観察表（石器集積Ⅵ層出土）

挿図番号	掲載番号	遺構名	取上番号	出土区	層	器種	分類	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	備考
183	S285	SU3	IBS18－3	E3	Ⅵ	磨敲石	－	67.0	63.0	36.0	188.10	安山岩	安山岩B	赤色顔料付着
	S286	SU3	IBS18－2	E3	Ⅵ	磨敲石	－	105.0	94.0	54.0	829.50	安山岩	安山岩B	赤色顔料付着
	S287	SU3	IBS18－1	E3	Ⅵ	磨敲石	－	85.0	79.0	55.0	417.00	安山岩	安山岩B	赤色顔料付着
185	S288	SU4	IBS17－3	G3	Ⅵ	磨石	－	63.0	59.0	47.0	245.00	安山岩	安山岩B	
	S289	SU4	IBS17－2	G3	Ⅵ	磨敲石	－	75.0	60.0	42.0	231.20	安山岩	安山岩B	
	S290	SU4	IBS17－8	G3	Ⅵ	磨敲石	－	105.0	90.0	52.0	784.30	安山岩	安山岩B	
	S291	SU4	IBS17－1	G3	Ⅵ	磨敲石	－	104.0	100.0	58.0	922.00	花崗岩	－	国見山系
	S292	SU4	IBS17－5	G3	Ⅵ	磨敲石	－	73.0	105.0	63.0	720.50	花崗岩	－	国見山系

５　Ⅵ層の遺物

（１）土器（第186 ～ 189図）

小牧遺跡Ⅵ層出土の縄文早期土器は，アカホヤ火山灰層の下より出土する。遺構と同様，出土数が非常に少ない。

Ⅶ層土器との重複をさけるため，土器については分類を通し番号で行った。Ⅹ類からⅫ類までがⅥ層出土の土器である。出土層の異なる土器片もあるが，同一個体がⅥ層から出土していること，また土器形式からⅥ層に掲載した。

ⅩⅣ類はⅦ層からⅥ層までの分類できなかった土器の底部を掲載した。

Ⅹ類土器（第187図371 ～ 373）

Ⅹ類土器は，口縁部が大きく外反し，頸部でくびれ，胴部は「く」字状に屈曲する。ネガティブな押型文を施す土器である。

371は，口縁部で，大きく開いた口縁部から胴部にかけて，方形状の文様を施文する。施文が浅いため，文様がはっきりとしない。口縁部内面も同様の施文を行う。器壁は薄く，色調はにぶい黄橙色である。焼成は良好である。口縁部から胴部にかけてのくびれ部分に，煤が認められる。Ⅶ層で出土しているが，372と373と同一個体と推測し，ここで掲載した。

Ⅺ類土器（第187図374 ～ 380）

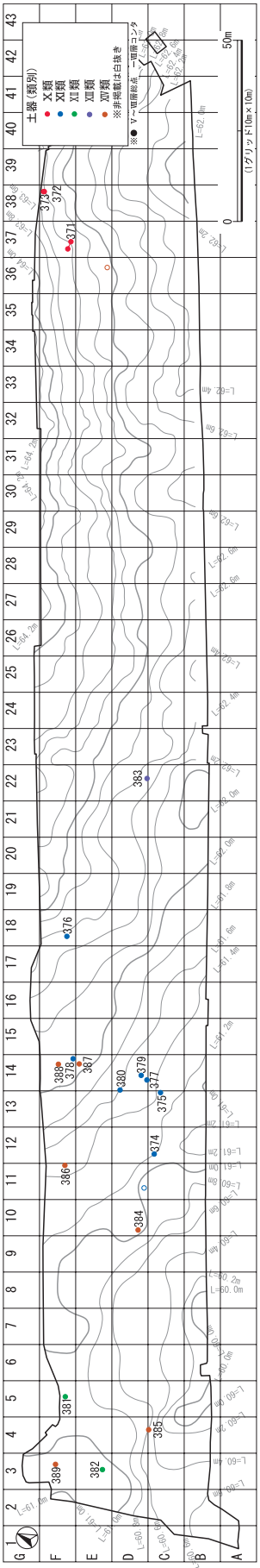
Ⅺ類は，口縁部が「く」字状に開きながら外反し，４ケ所のピークを持つ山形口縁を呈する。胴部はやや膨らみを持つ。口唇部は舌状を呈し，キザミを施す。口縁部を肥厚させ，沈線文と連点文を組み合わせて施文する。胴部は結節縄文が特徴である。

374 ～ 380は口縁部と胴部である。374は波状口縁で，口縁部に粘土を貼り付けて肥厚させ，口縁部には斜位の沈線を施す。口縁部下端には，短沈線を施す。胎土に金雲母が認められる。375は，肥厚させて口縁部に弧状の沈線を施し，その下位に連点文を巡らせる。376・377は肥厚した口縁部片である。口縁部には沈線が施され，その端部にはキザミが施されている。胎土に金雲母が確認される。378・379は胴部片で，沈線文を挟むように連点文が施される。胎土に金雲母が確認される。380は胴部片で，結節縄文が施されている。

Ⅻ類土器（第187図381・382）

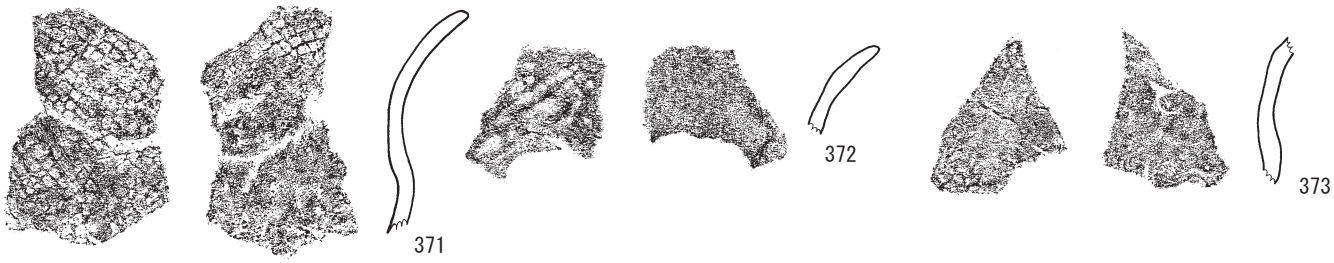
Ⅻ類土器は，緩やかに開く胴部を持つ。本遺跡では出土していないが，口縁部はラッパ状に開く特徴がある。底部は上げ底気味になるのが一般的である。Ⅻ類土器は，２点のみ出土した。

381・382は胴部片で，381は沈線区画の中に撚糸文を

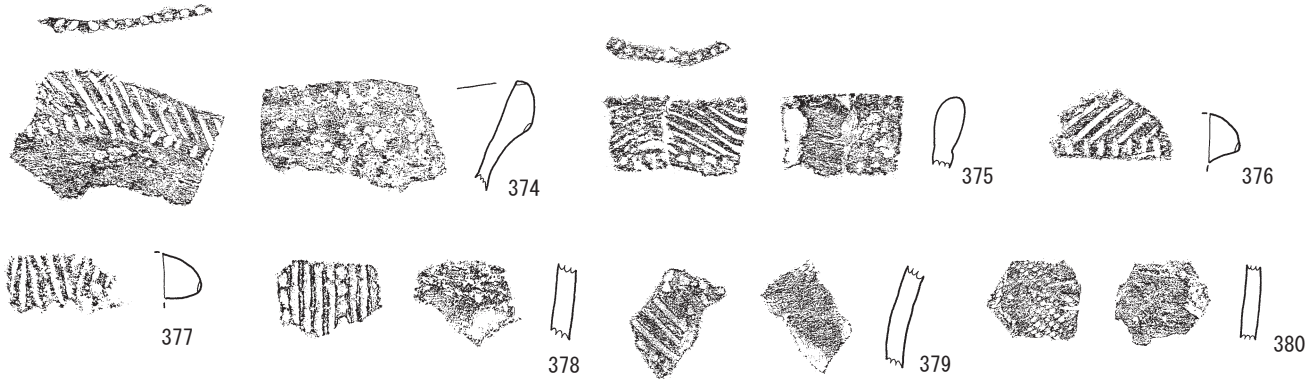


第186図　Ⅹ～ⅩⅣ類土器分布図

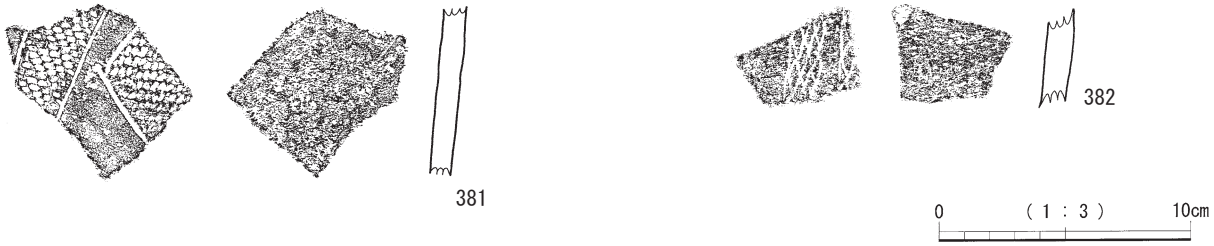
X類



XI類



XII類



第187図　X～XII類土器

施す。382は，編目撚糸文を施す。

XIII類土器（第188図383）

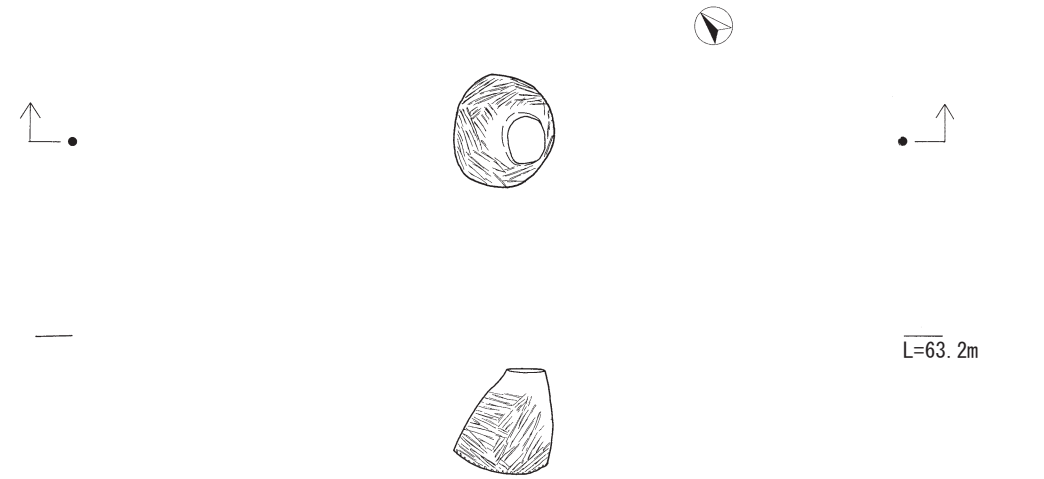
383は，口縁部は直行するが，胴部でやや膨らみ，小さな平底の底部へ曲線的に至る土器である。D－22区より完形品で１点だけ出土した。轟式土器との類似性も推測されるが，アカホヤ火山灰層の下層から出土しているため，早期の土器として掲載した。

平坦な口唇端部にはキザミを施す。わずかに波状口縁を呈すると思われるが，やや不明瞭であり，また，３つの波頂部を有する可能性もある。文様は，口縁部から胴部にかけて斜位の貝殻条痕文を施し，これらの組み合わせは綾杉状を呈するが，条痕は２本１組程度であり，V類土器とは異なる。内面は丁寧なナデが施される。内面には黒色を呈する痘痕状の剥落が認められ，土器使用時の痕跡である可能性も考えられる。

XIV類土器（第189図384 ～ 389）

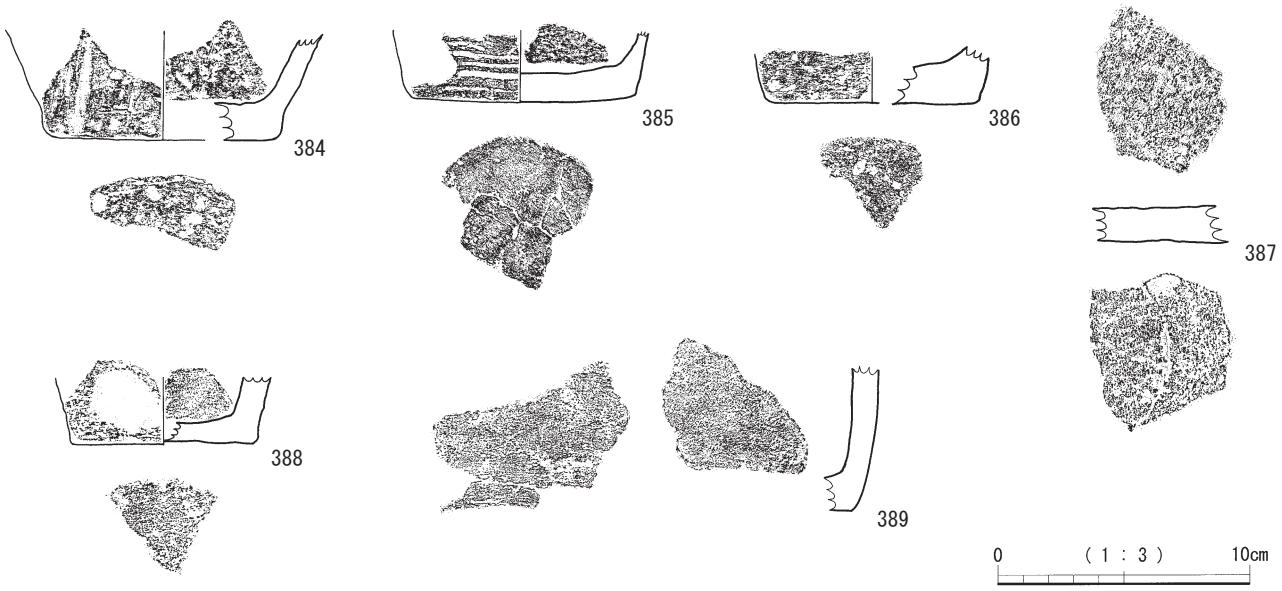
XIV類は，VIII・VII層～VI層出土の分類不明な底部を一括して掲載した。

384は，平底の底部で，外傾しながら立ち上がる。胴部下位にはヘラ状工具による条痕が確認できる。386は平底の底部で，圧痕が確認される。





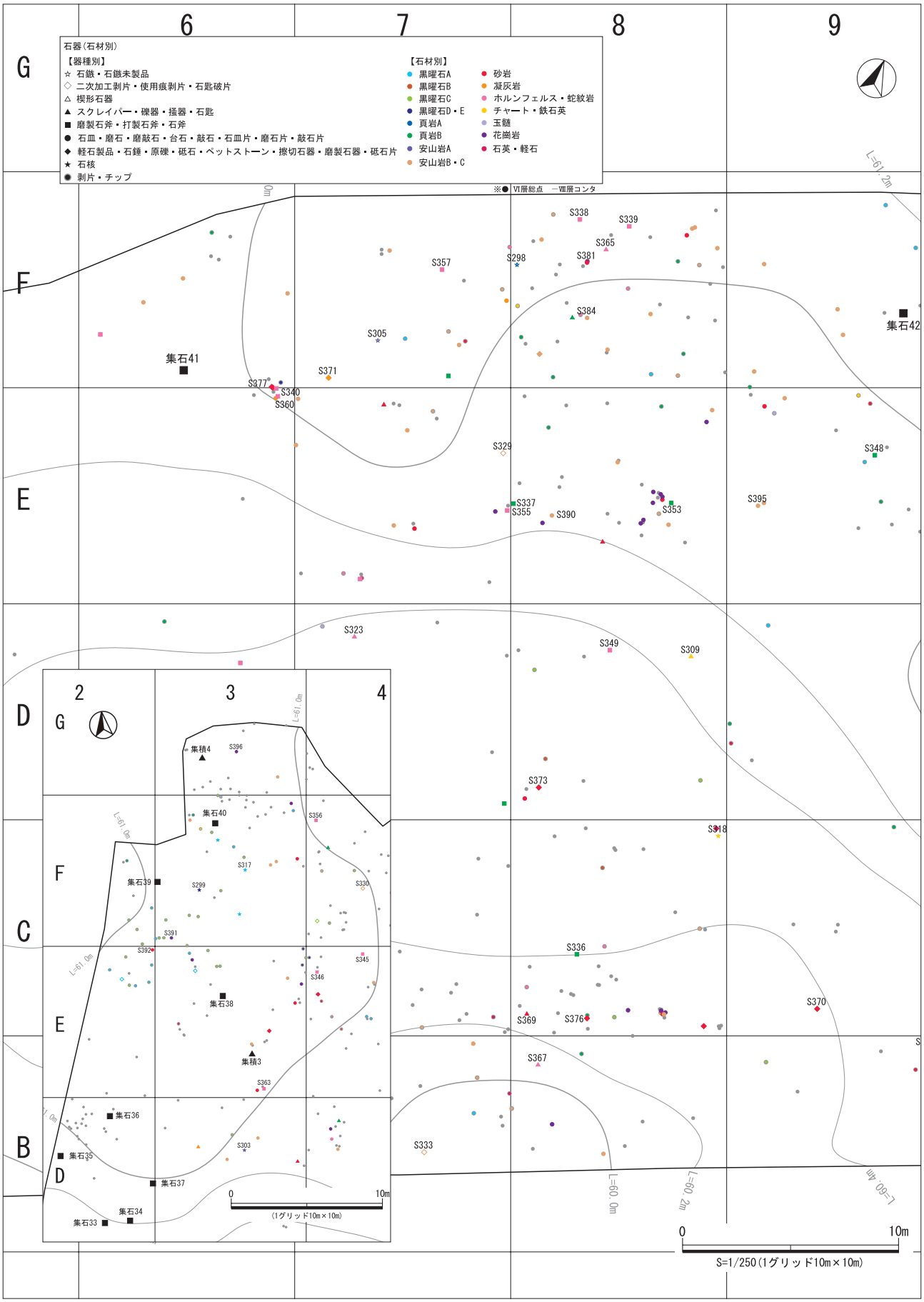
第188図　Ⅻ類土器



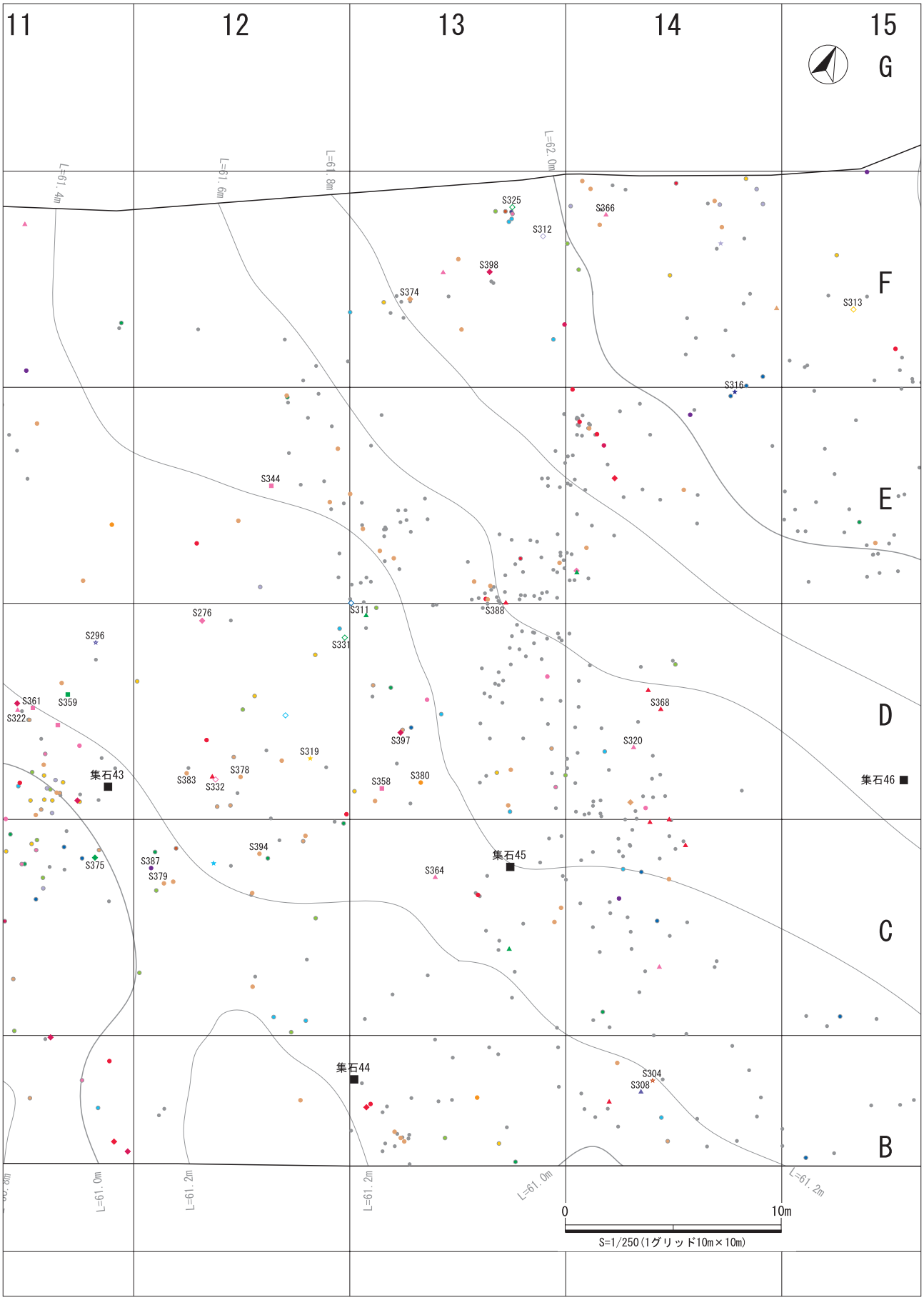
第189図　Ⅻ類土器

第37表　土器観察表（Ⅹ～Ⅻ類）

挿図番号	掲載番号	器種	部位	類別	出土区	層	文様・器面調整等		色調		胎土				焼成	取上番号
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	他		
187	371	深鉢	口縁	Ⅹ	F37	Ⅶa	ナデ，方形押型	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR5/1褐灰	○	○	○	金雲母	良好	104935，104932
	372	深鉢	口縁	Ⅹ	F38	Ⅵ	ナデ	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	○	○			良好	101944
	373	深鉢	胴	Ⅹ	F38	Ⅵ	ナデ	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	○	○	○		良好	101943
	374	深鉢	口縁	Ⅺ	C12	Ⅵ	沈線，ナデ	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐色	5YR6/4にぶい橙色		△		金雲母，白粒	良好	25140
	375	深鉢	口縁	Ⅺ	C13	Ⅵ Ⅶa	沈線，連点文	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐色	5YR6/4にぶい橙色	△	△		金雲母，白粒	良好	16214，20087
	376	深鉢	口縁	Ⅺ	F18	Ⅵ	沈線	ナデ	2.5YR6/6橙色	2.5YR6/6橙色	△			金雲母，白粒	良好	17392
	377	深鉢	口縁	Ⅺ	D14	Ⅵ	沈線	ナデ	2.5YR6/6橙色	2.5YR6/6橙色	△	△		金雲母，白粒	良好	16709
	378	深鉢	胴	Ⅺ	F14	Ⅵ	沈線，連点文	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	7.5YR5/2灰褐	△	△		金雲母，白粒	良好	16248
	379	深鉢	胴	Ⅺ	D14	Ⅵ	沈線，連点文	ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	5YR5/6明赤褐		△		金雲母	良好	16728
	380	深鉢	口縁	Ⅺ	D14	Ⅵ	ナデ，結節縄文	ナデ	2.5YR5/4にぶい赤褐色	2.5YR5/4にぶい赤褐色	△			金雲母	良好	16692
	381	深鉢	胴	Ⅻ	F5	Ⅳb	沈線，撚糸	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	◎		○		良好	45772
	382	深鉢	胴	Ⅻ	E3	Ⅶ	ナデ，撚糸	ナデ	10R6/4にぶい赤橙色	7.5YR6／4にぶい橙色	○	△			良好	52659
188	383	深鉢	完形	Ⅻ	D22	Ⅵ	貝殻条痕	ナデ	7.5YR7／4にぶい橙色	7.5YR7／3にぶい橙色	△	△		白粒	良好	19800
189	384	深鉢	底	Ⅻ	D10	Ⅷ	工具ナデ	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	○	△			良好	54993
	385	深鉢	底	Ⅻ	C4	Ⅶ	条痕	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	△			金雲母	良好	51577
	386	深鉢	底	Ⅻ	F11	Ⅶ	ナデ	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	○		○	黒雲母，白粒	良好	14298
	387	深鉢	底	Ⅻ	E14	Ⅵ	ナデ	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR6/6橙	○	○		金雲母，白粒	良好	17202
	388	深鉢	底	Ⅻ	F14	Ⅵ	条痕	ナデ	10YR7/6明黄褐	7.5YR7/6橙	△	○		白粒	良好	24963
	389	深鉢	底	Ⅻ	F3	Ⅶ	ナデ	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	10YR5/3にぶい黄褐	△	△		金雲母，白粒	良好	53099



第190図　Ⅵ層石器出土状況図（1）



第191図　Ⅵ層石器出土状況図（2）

（2） Ⅵ層出土石器（第193 ～ 205図　S293 ～ S398）

Ⅵ層からは，総数714点出土しており，石材および器種分類はP239第40表に示している。器種ごとの出土点数は，石鏃18点（未製品１点を含む），小型で精製のスクレイパー１点，大型で粗製のスクレイパー４点，石匙２点，楔形石器１点，二次加工や使用痕跡のある剥片21点（うち黒曜石・チャート製などの小型のもの11点，頁岩Ｂ類・安山岩Ｃ類製などの大型のもの10点），磨製石斧18点，打製石斧22点，礫器35点，石錘８点，磨敲系石器269点，砥石11点，擦切石器１点，石核（残核を含む）８点，軽石加工品４点である。

S293からS306は石鏃である。S293 ～ S298は平基か抉りが浅いタイプである。S293は黒曜石Ｃ類製の浅い抉りの正三角形鏃である。S294は黒曜石Ｃ類製の平基の正三角形鏃で先端部を欠損する。S295は頁岩Ｂ類製のごく浅い抉りの二等辺三角形鏃である。S293 ～ S295の側辺部は直線的である。S296は安山岩Ａ類製の抉りの浅い二等辺三角形鏃で，側縁部が外湾し，先端部を欠損する。S297・S298は抉りがやや深く側辺部が直線的である。S297は黒曜石Ｃ類製の二等辺三角形鏃で，S298は頁岩Ａ類製の石鏃であり，右脚部と先端部を欠損している。

S299・S300は浅い抉りをもつ長形の石鏃である。S299は黒曜石Ｅ類製で正面・背面に剥離面を残し，厚みがある。側縁部はやや外湾する。先端部の一部には調整剥離を施さない。形状は整っているが未製品である可能性もある。S300は玉髄製で側縁部は大きく外湾し先端部は鋭く尖る。最大径を同部下位に持つもので，「大久保型石鏃」または「帖地型石鏃」と呼称されているものである（1997.渡邊，1999.永野，2004.相美）。

S301・S302は山形に抉りが入る石鏃で，側辺部は直線的である。外形は正三角形である。S301は安山岩Ａ類製で基部は丸い。S302は黒曜石Ｂ類製で左脚部を欠損する。基部は先細りながら外側に大きく開く。

S303・S304は長形で抉りは深い。ハの字状に開いた脚で，脚端部は矩形で斜行する。S303は安山岩Ａ類製で先端部を欠損する。S304は黒曜石Ｂ類製で右脚部を欠損する。大型である。

S305・S306は欠損により基部形態は不明である。S305は安山岩Ａ類製で，大型で縦長の形態であることが想定できる。S306は頁岩Ａ類製で長身の磨製石鏃であり，先端部も欠損する。

S307・S308は石匙である。S307は灰色のチャート製で縦型のものである。剥片の打点近くに抉りを入れてつまみ部をつくり，右側面には刃部を形成する。先端部は両面からの調整剥離により尖る。S308は安山岩Ａ類製で横長の剥片の上部に浅い抉りを入れることで幅広のつまみ部を形成し，下縁に刃部を形成する。

S309 ～ S315は二次加工や使用痕のある剥片で緻密な素材を使用した小型の石器である。

S309 ～ S313は主に下縁に二次加工が施されるものである。S309は赤色のチャート製で下面に刃部を形成する。掻器の可能性がある。先端部は細やかな調整剥離により尖り，石鏃の未製品の可能性もある。S310は針尾産の特徴を持つ黒曜石Ｄ類製で，剥片の上面・下面に階段状の剥離がみられるものである。楔形石器として使用された可能性があるがその使用頻度は少ない。正面には自然面を残す。S311は頁岩Ａ類製で左側面を欠損しており，上縁・下縁の表裏に緻密な加工が施される。左側を欠損する。下縁は刃部を形成しており石匙の破片である可能性も考えられる。S312は玉髄製で下面・右側面に細やかな調整剥離が施される。左側を欠損する。断面形態から下面に刃部を形成して削器として使用した可能性が推測できる。S313は緑色のチャート製で，下面に微細な調整剥離が施される。

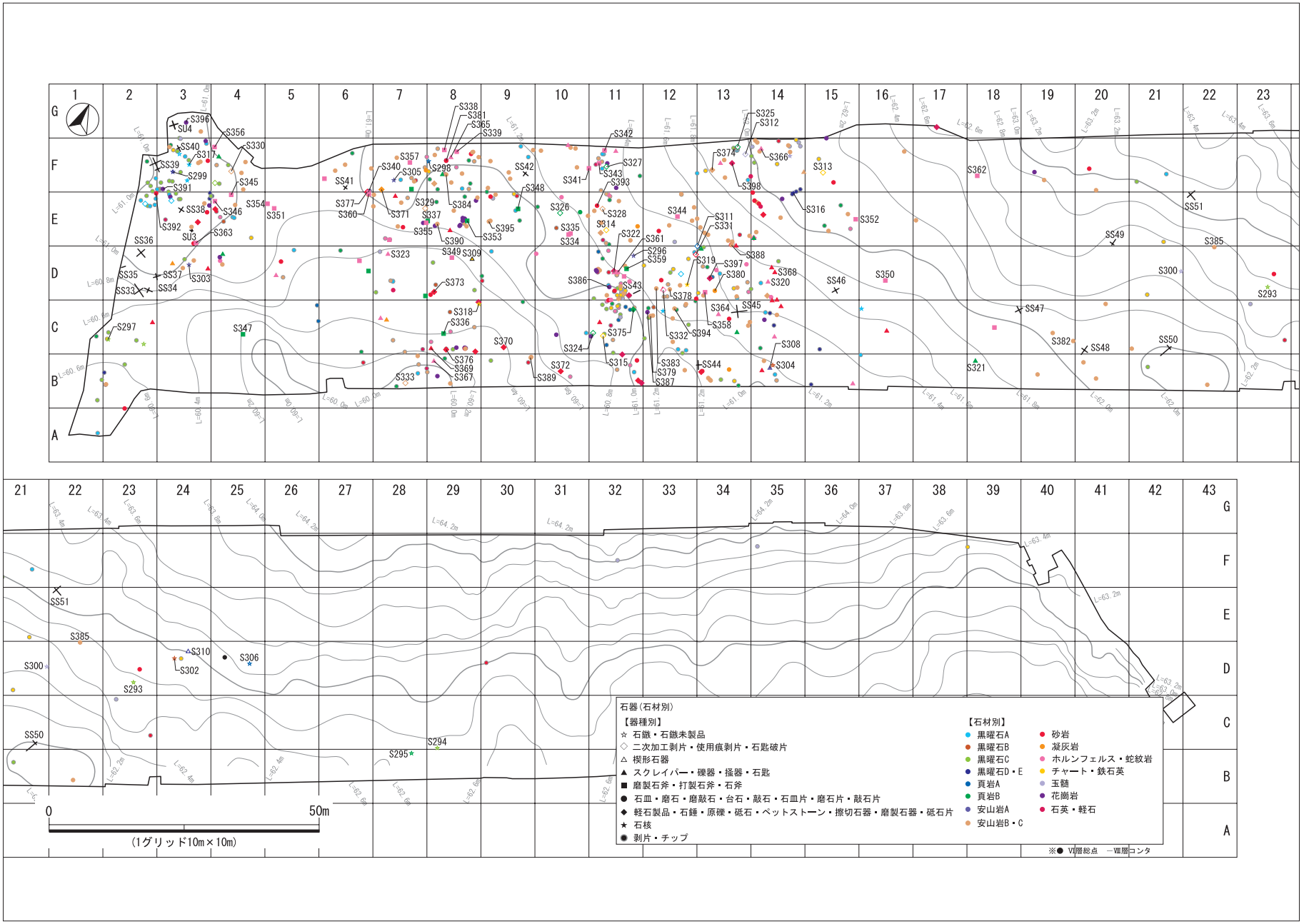
S314・S315は灰色のチャート製で主に側面に加工が施されるものである。S314は左側辺が微細な剥離痕と共に大きく抉れている。S315は左側辺に調整剥離が施される。

S316 ～ S319は残核と考えられる。S316・S317は打面転移を繰り返し行っている。S316は黒曜石Ｅ類製で，S317は黒曜石Ａ類製である。S318・S319は横方向の剥離の後に縦方向に連続して剥離を施しており，打面が水平に揃う。S318の正面と右側面には微細な剥離が連続して施されており，二次加工の痕跡がみられる。共にチャート製で，S318は緑色，S319は灰色である。

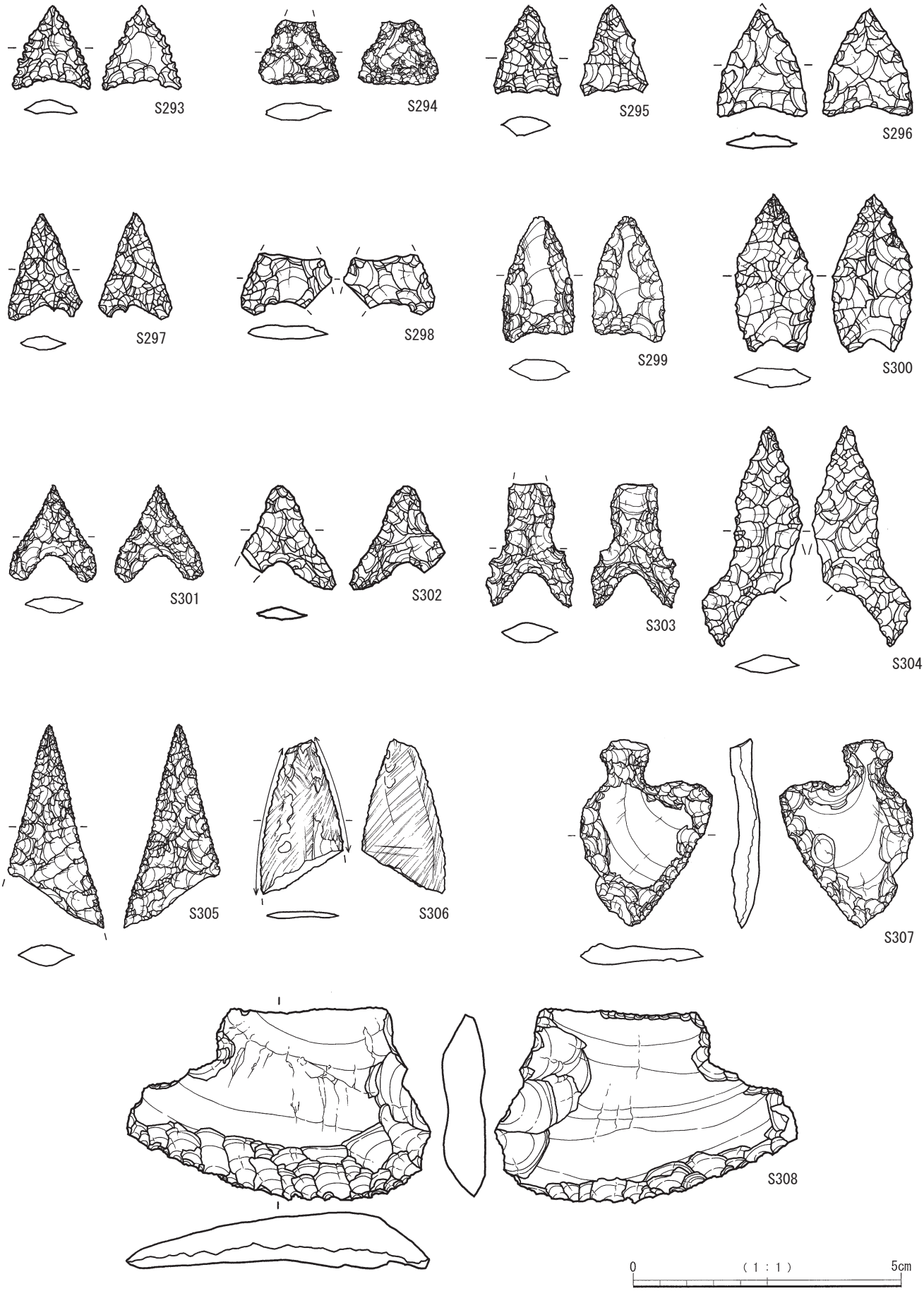
S320 ～ S323は粗製のスクレイパーであり，横長の剥片の主に下縁に明瞭な刃部を形成している。S321は頁岩Ｂ類製で，ほかの3点はホルンフェルス製である。S320とS321は上辺にも二次加工が加えられている。

S324 ～ S333は二次加工・使用痕のある剥片のうち粗製の大型品である。S324 ～ S327は頁岩Ｂ類製で，鉄分が付着した素材を使用している。S328 ～ S330，S333は安山岩Ｃ類製である。S326・S329・S333にはノッヂ状の抉れがあり，縦長の形状のS328の両側辺には摩耗が生じている。S333は下面に二次加工が施されている。S331は砂岩製，S332はホルンフェルス製でありともに母岩から薄く剥ぎ取った自然面を残す剥片の下辺を使用したものである。スクレイパーや礫器と素材は共通するが，計画的な剥離による刃部の形成がみられないことから使用痕のある剥片とした。

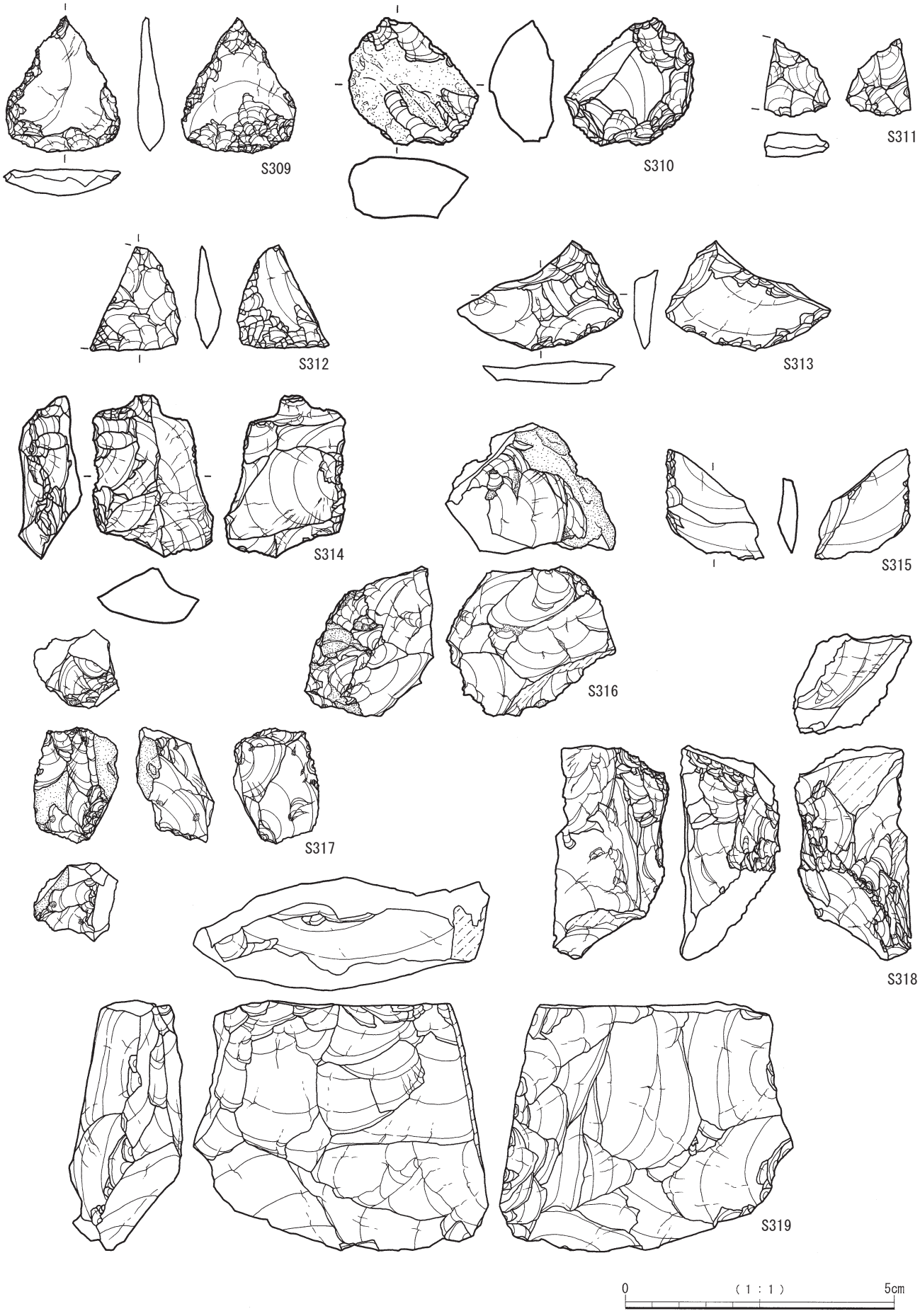
S334 ～ S338はⅠ－a類の磨製石斧である。S334・S335は蛇紋岩製で同一個体である。基部と刃部をそれぞれに敲打具として再利用している。欠損部を丁寧に打ち掻いて再成形している。Ｅ－10区のⅥ・Ⅶ層に分かれて出土しているが上層のⅥ層帰属として掲載した。



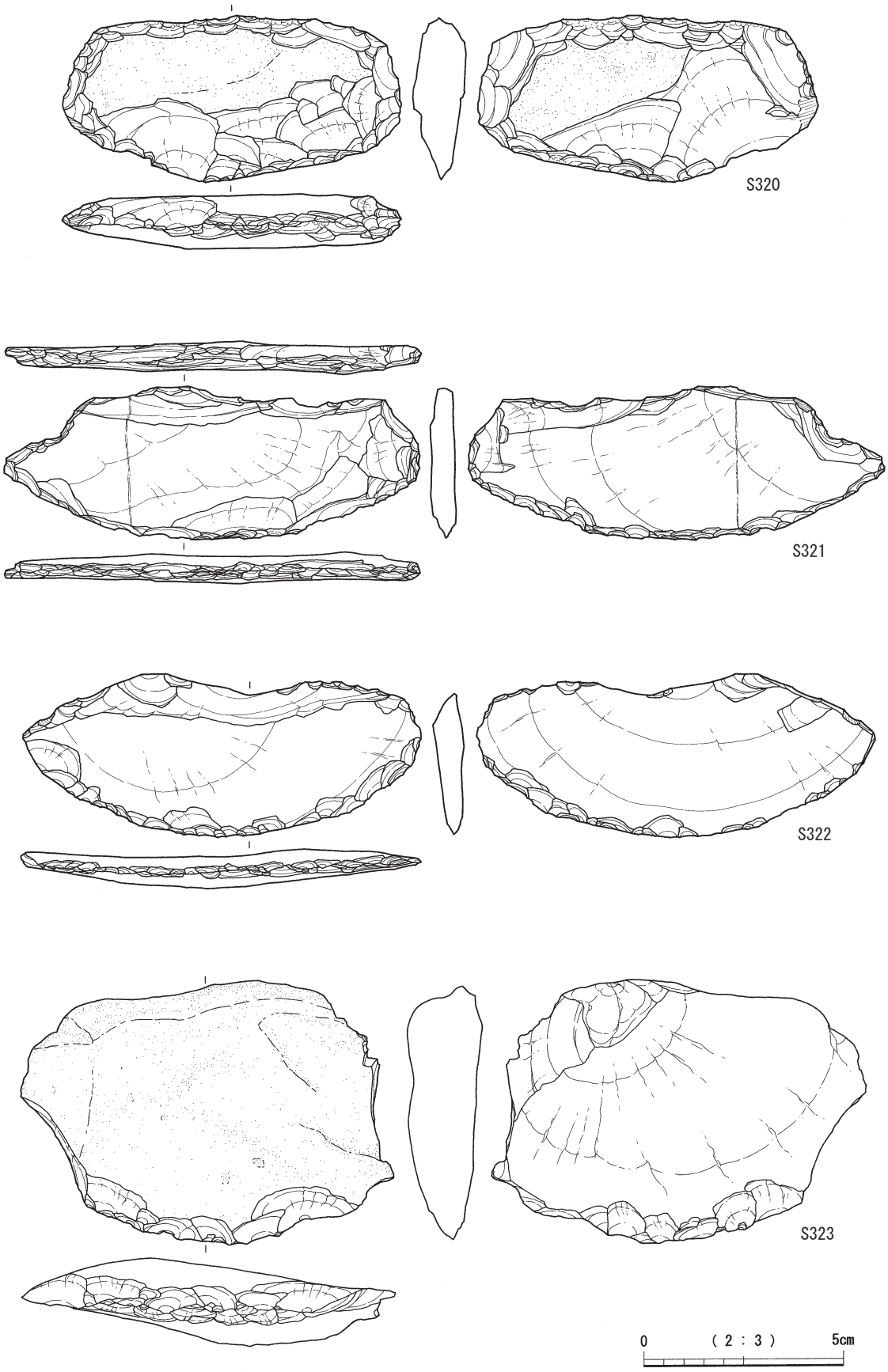
第192図　Ⅵ層石器出土状況図



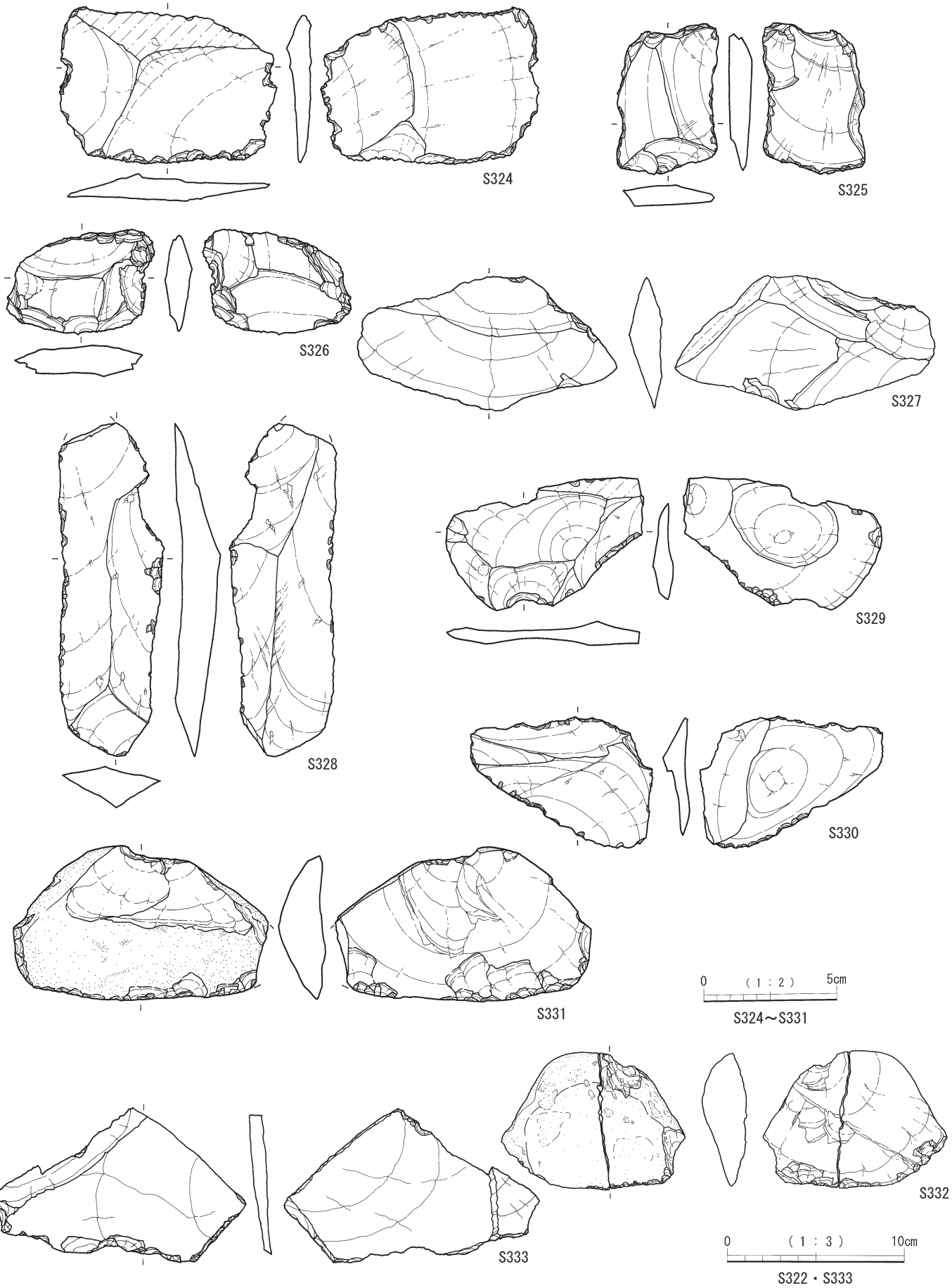
第193図　Ⅵ層出土石器（1）



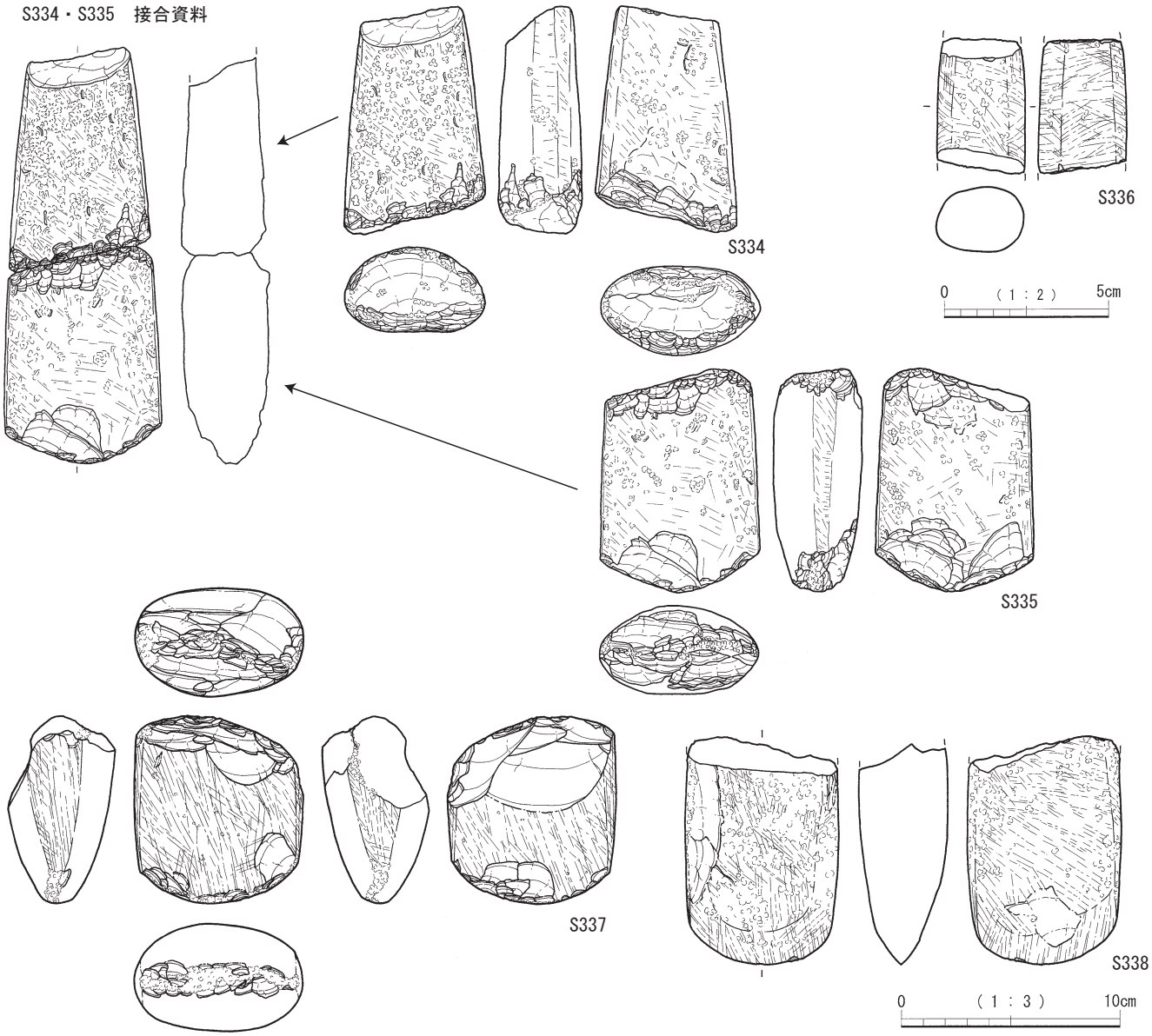
第194図　Ⅶ層出土石器（2）



第195図　Ⅶ層出土石器（3）



第196図　Ⅵ層出土石器（4）



第197図　Ⅵ層出土石器（5）

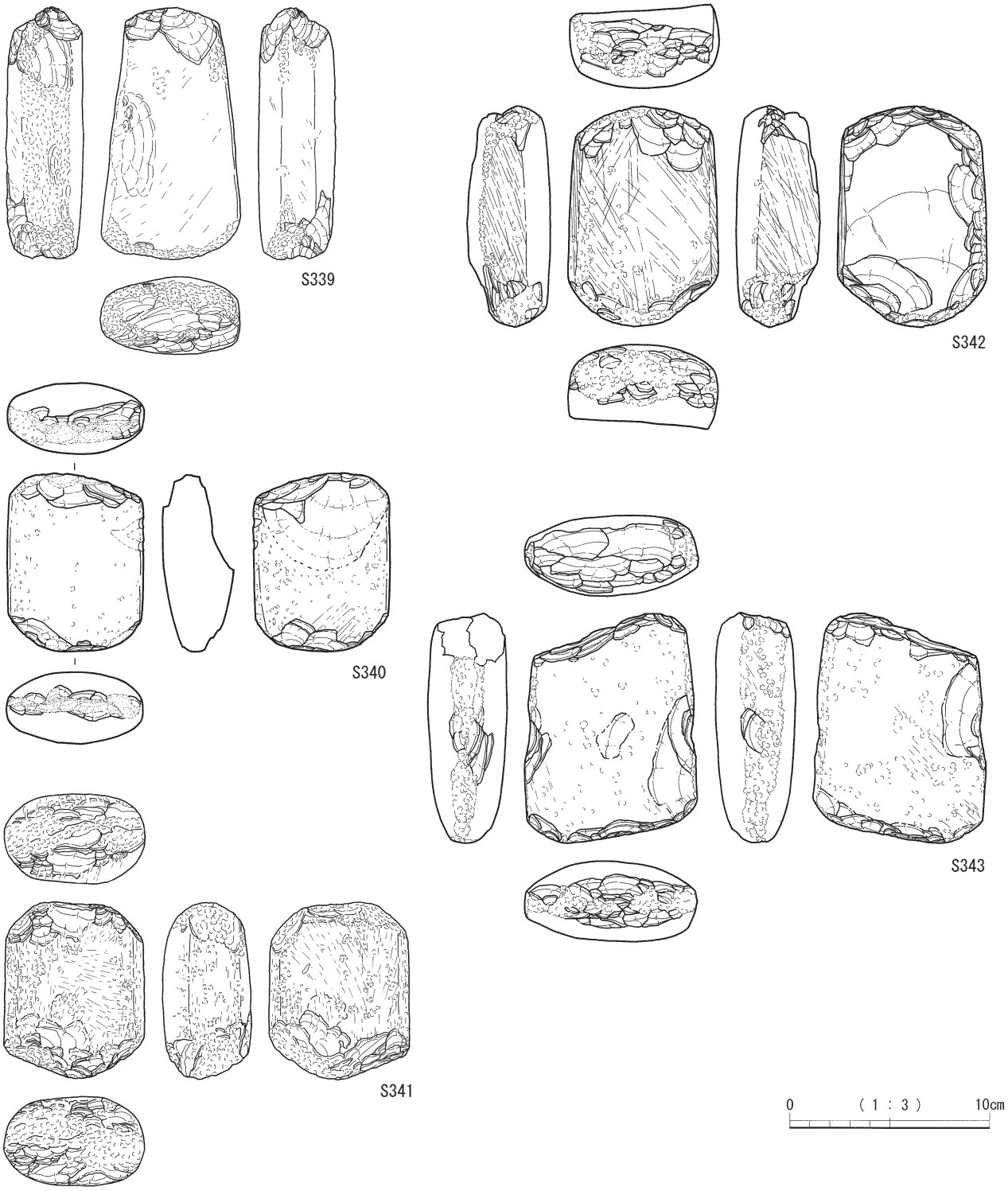
S336は頁岩Ｂ類製で小型の石斧の基部であり，基端部・刃部を欠損する。S337は頁岩Ｂ類製の刃部で，全面的に非常によく研磨されている。側面も縦方向に研磨されるが面取りは施されず断面は丸みを帯びる。基部・刃部の両側に敲打による潰れが確認できることから楔としての再利用も想定できる。S338はホルンフェルス製の刃部で，断面形は丸みを帯び表面に敲打痕を残す。側面の面取りはなされない。

S339 ～ S343はⅠ－b類の磨製石斧で，すべてホルンフェルス製である。S339は完形品に近い状態であったと思われる。石斧としての使用後に，刃部と左側面を敲打具として多用したと考えられる。S340 ～ S343は磨製石斧を磨敲石として転用したものである。S343には両側辺に２ヶ所，着装に由来すると思われる抉りがほぼ左右対称の位置に形成される。石錘として転用された可能性もある。

S344 ～ S347はⅡ類の磨製石斧で全て基部が欠損した状態で出土している。形態は，S346がバチ形で，そのほかは短冊形となるものと推測できる。全てに刃部に垂直方向に近い微細な擦痕が確認できる。S344 ～ S346はホルンフェルス製である。特に薄く平たい形状のS347は頁岩Ｂ類製であり，左側面にノッチ状の抉りをもつ。

S348 ～ S352はⅢ類の磨製石斧で，裏面は研磨されていない。S348は頁岩Ｂ類製で短冊形で，S349・S350はホルンフェルスのバチ形と推測できる。３点ともに下縁や側面に繰り返し敲打した痕跡が確認できる。S348の裏面には使用痕と考えられる擦痕が確認できる。

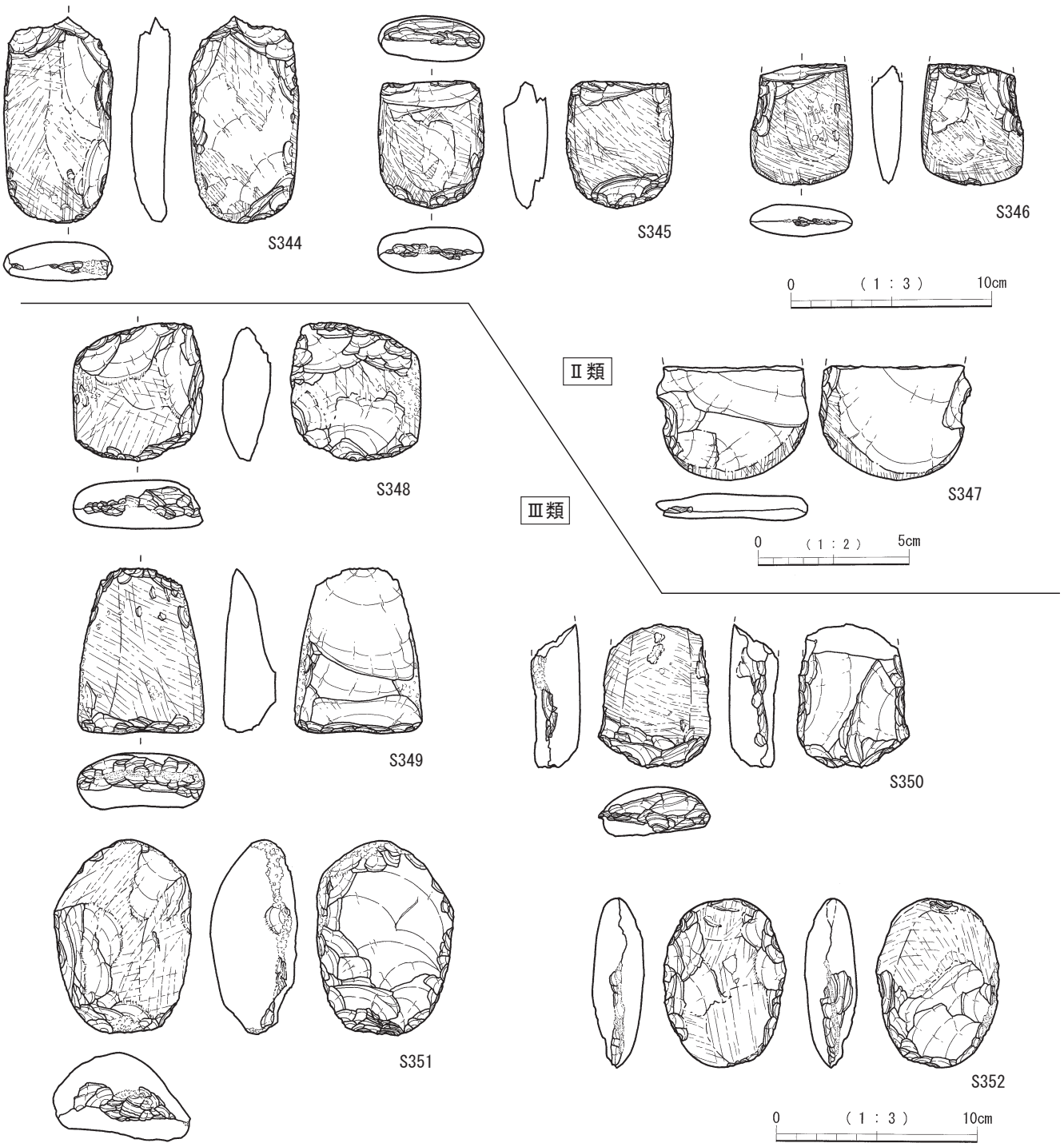
S351・S352はホルンフェルス製で楕円形の形状で敲



第198図　Ⅵ層出土石器（6）

打による刃部の潰れがみられる。

S353 ～ S363はⅣ類の打製石斧である。S353とS359は頁岩B類製で，ほかはホルンフェルス製で節理の発達した素材を使用している。全て扁平な形状である。S353・356は完形品である。S353の刃部には敲打による潰れが，S356の刃部には使用時のものと思われる垂直方向の擦痕が確認できる。S354は基部で，端部は平坦に形成される。S355・S357 ～ S360は刃部で，S355の正面には自然面が残り，刃部には使用時のものと思われる垂直方向の擦痕が確認できる。S359・S360は風化が著しく擦痕



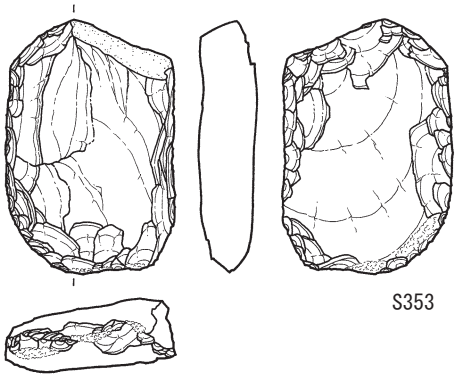
第199図　Ⅶ層出土石器（7）

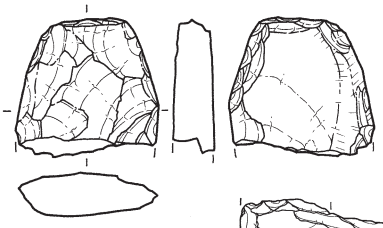
の有無は判然としない。S359には被熱による赤化が確認できる。

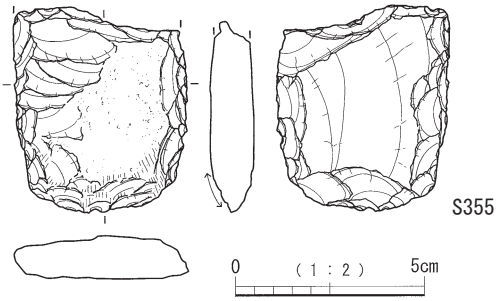
S357・S358は基部であり，ともに細長い形状で，ごく浅い抉りをもつ。S358は抉りを形成するタイプの基部である可能性もある。

S361は表裏両側から剥離を施すことで刃部や抉り部を形成しているのに対し，S362は自然な剥片の形状を利用したものである。打製石斧としての加工の方法とは異なるが下部を中心に使用痕があることから同じような用途に使用されたと判断し，ここに分類・掲載した。S363は刃部や抉り部の製作中途で廃棄された未製品の可能性もある。

S364～S369は礫器である。S364～S367はホルンフェルス製，S368・S369は砂岩製である。Ⅶ層出土のもの

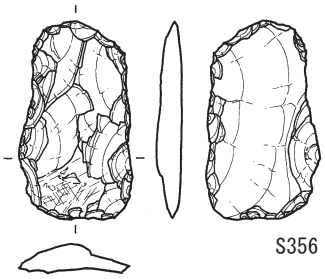

S353

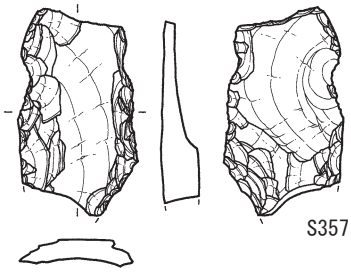

S354

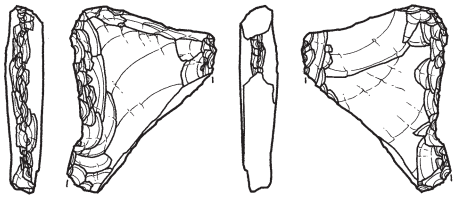

S355

0 （1：2） 5cm

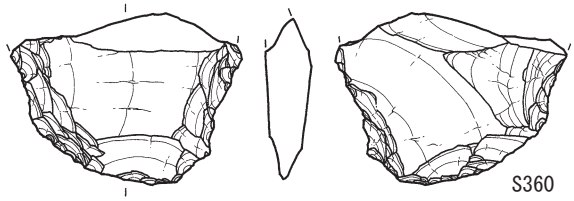
S354・S355

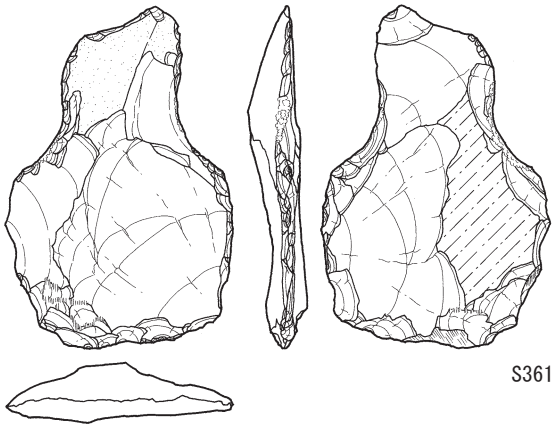

S356

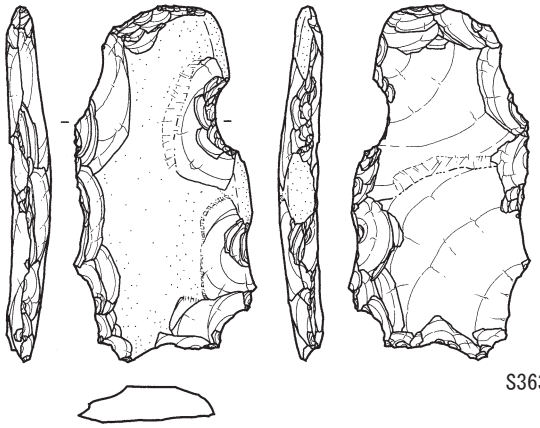

S357

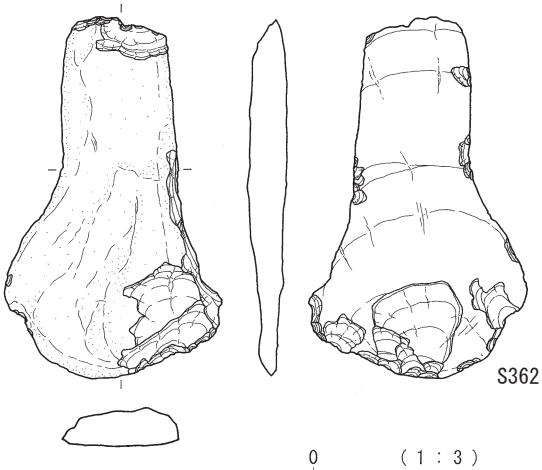

S358


S359


S360


S361

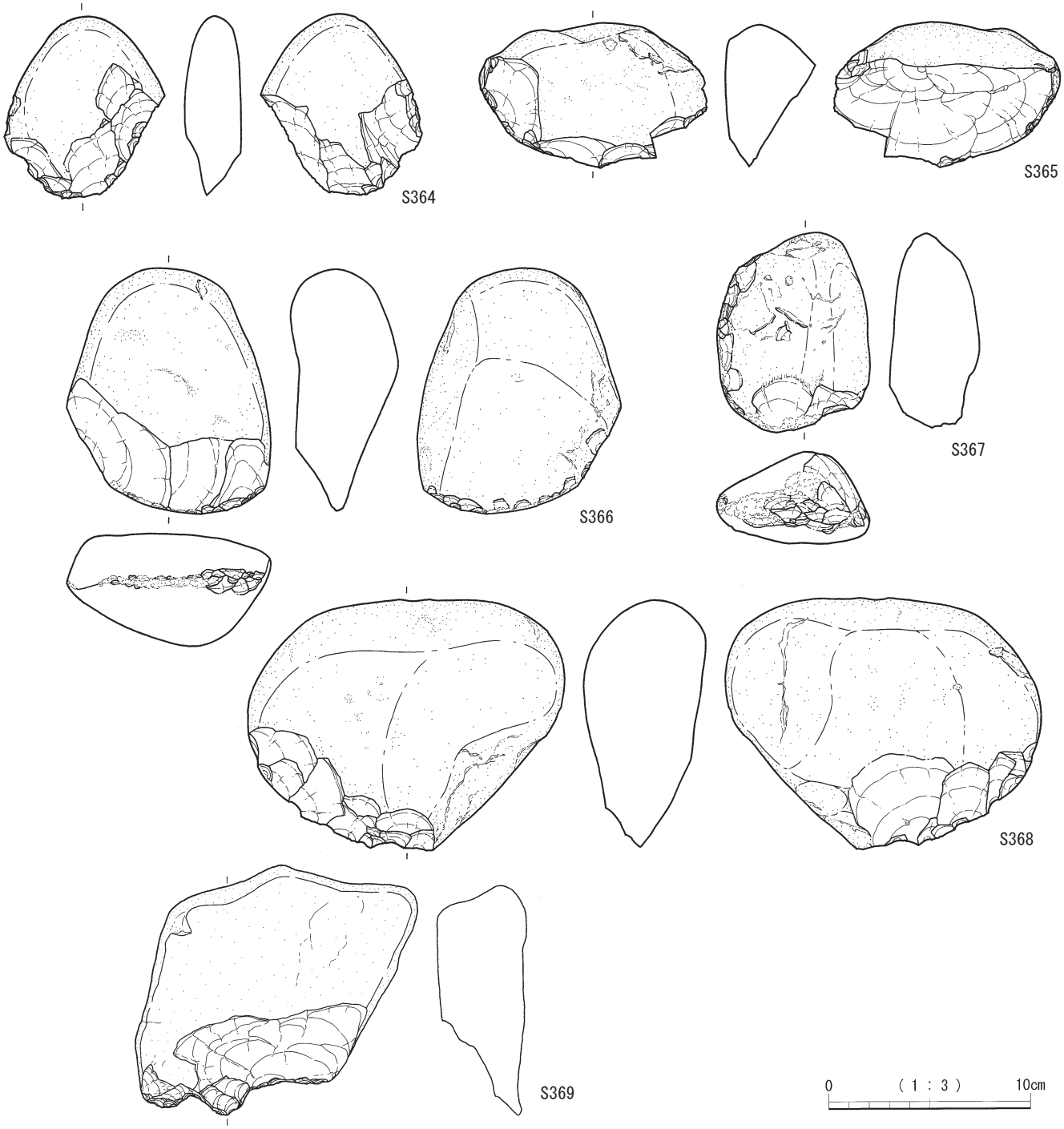

S363


S362

0 （1：3） 10cm

S353・S356～S362

第200図　Ⅵ層出土石器（8）



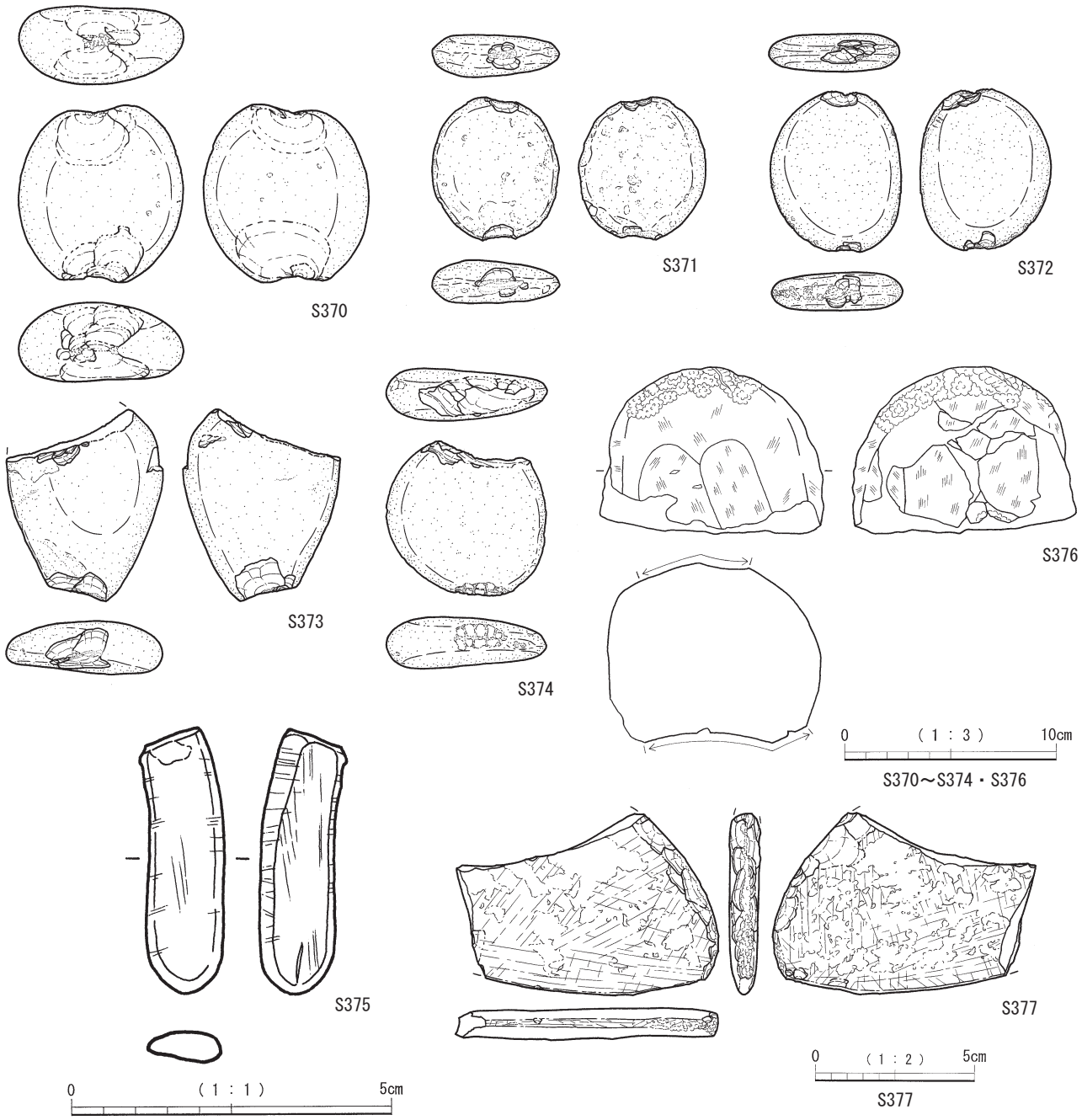
第201図　Ⅵ層出土石器（9）

と比較すると，持ち手から刃部までの長さが短く，横長や丸みをもったプロポーションである傾向がある。刃部形成の際に，両面を加工したものと片面のみ加工したものとがみられる。S366・S367は敲打具としても使用されている。S367は被熱により赤化する。

S370 ～ S374は石錘である。S371は凝灰岩製，S374は安山岩Ｂ類製でそのほかは砂岩製である。S373・S374は欠損品である。全て楕円状の平たい礫の長軸を打ち掻いて製作されている。

S375は幅２cm程の細長く平たい頁岩Ｂ類の礫を，人為的に滑らかに擦っているもので，光沢をもつ。使用法は不明である。研磨痕のある礫として掲載した。

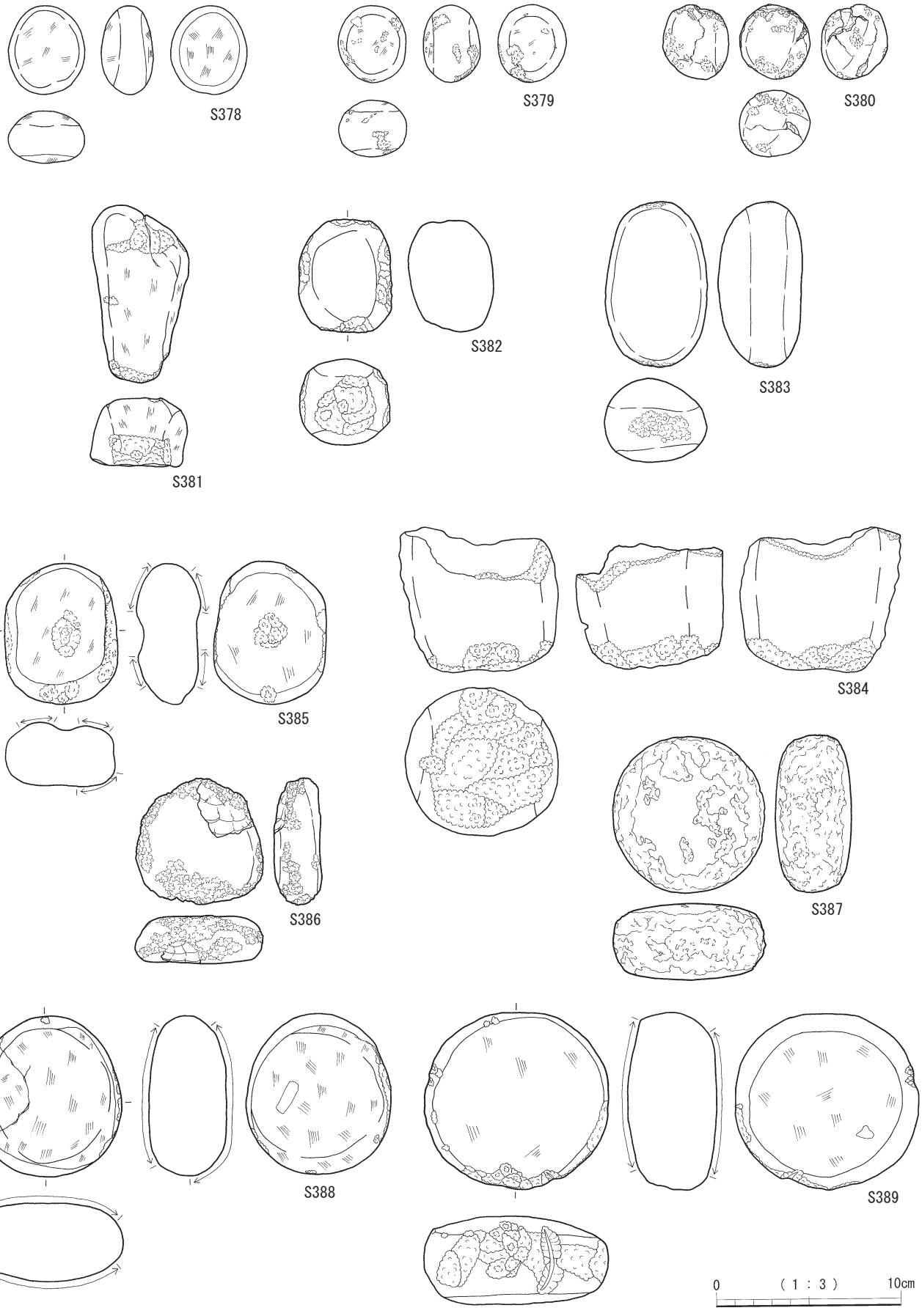
S376・S377はともに緻密で不純物の少ない砂岩を使用している。S376は厚みのある砥石である。丸みのあ



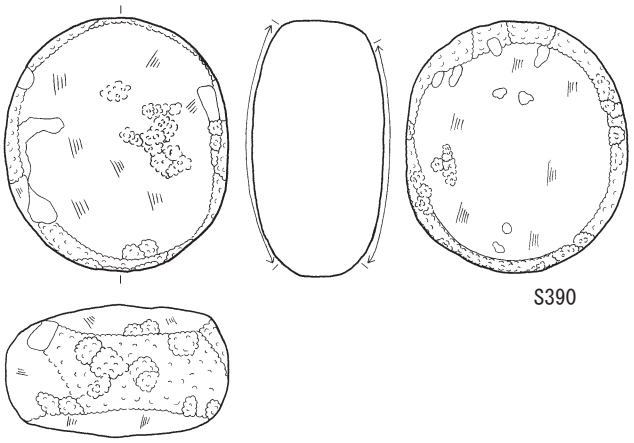
第202図　Ⅵ層出土石器（10）

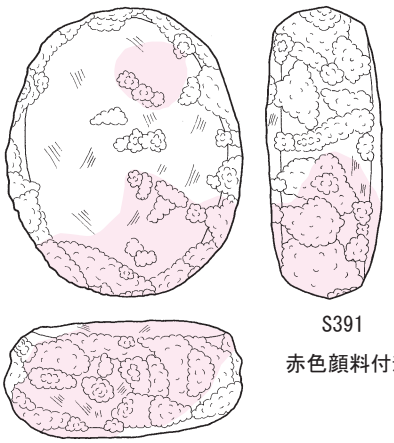
る上面は敲打具としても多用されている。全体的によく擦られており，正面に２ヶ所，裏面に１ヶ所浅いU字溝状の擦面が形成される。裏面の溝の幅は推定６～７cmで磨製石斧の刃部の研磨に使用した可能性もある。風化により裏面の大部分が剥落する。S377は擦切石器である可能性が高い。全面的によく擦られ，平たい形状をしている。下面は断面形が先細り横位の擦痕が明瞭に確認できる。上面～左側面を欠損する。

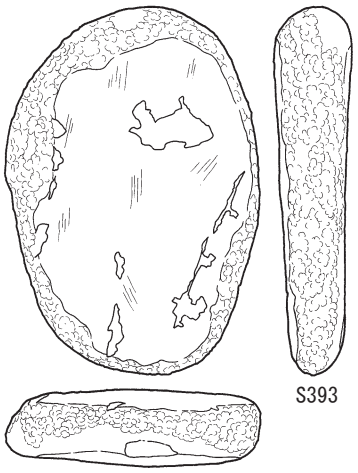
S378 ～ S395は磨敲石類である。S378 ～ S380は小型の円形のものでS379は安山岩Ｂ類製の磨石で，S378は安山岩Ｂ類製，S380は凝灰岩製の磨敲石である。S381 ～ S383は縦長の形状で，主に敲石として使用されたものである。S381は砂岩製で下面がやや窄まる。正面・右側面は擦られる。S382・S383は安山岩Ｂ類製の敲石である。S382は上下・左右が敲打により浅く凹む。S384は敲石の先端部である。多孔質の安山岩Ｂ類を使用しており，断面形は正円形に近い。下面は強い敲打により平坦な面が形成され，垂直方向の強い力が加えられたことを窺わせる。石棒など石製加工品の一部であった可能性もある。S385は安山岩Ｂ類製の磨敲石で正面・裏面ともに中央部が大きく凹む。S386 ～ S395は扁平な円形・楕円形状で，側面のほぼ全周に敲打痕や擦面がみられるものである。正面・背面の擦面は稜を形成する。S386 ～ S389は正円形に近いものである。S386・S387は国見

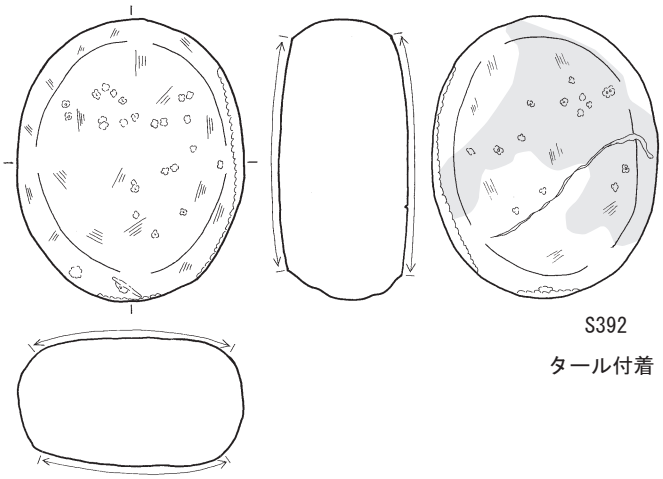


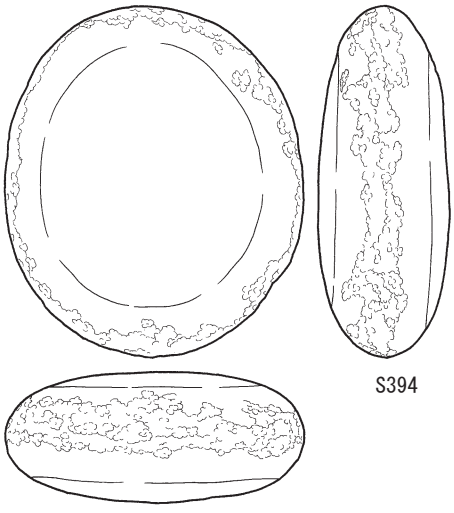
第203図　Ⅵ層出土石器（11）

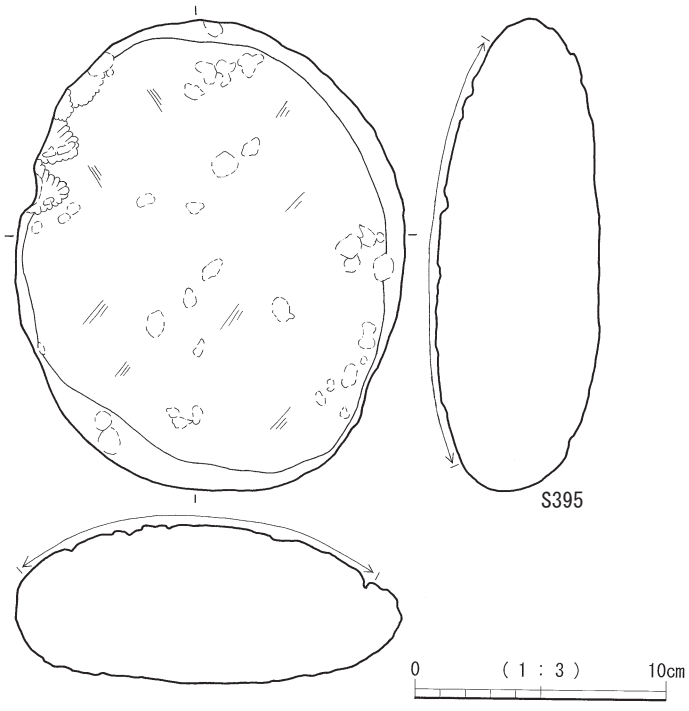




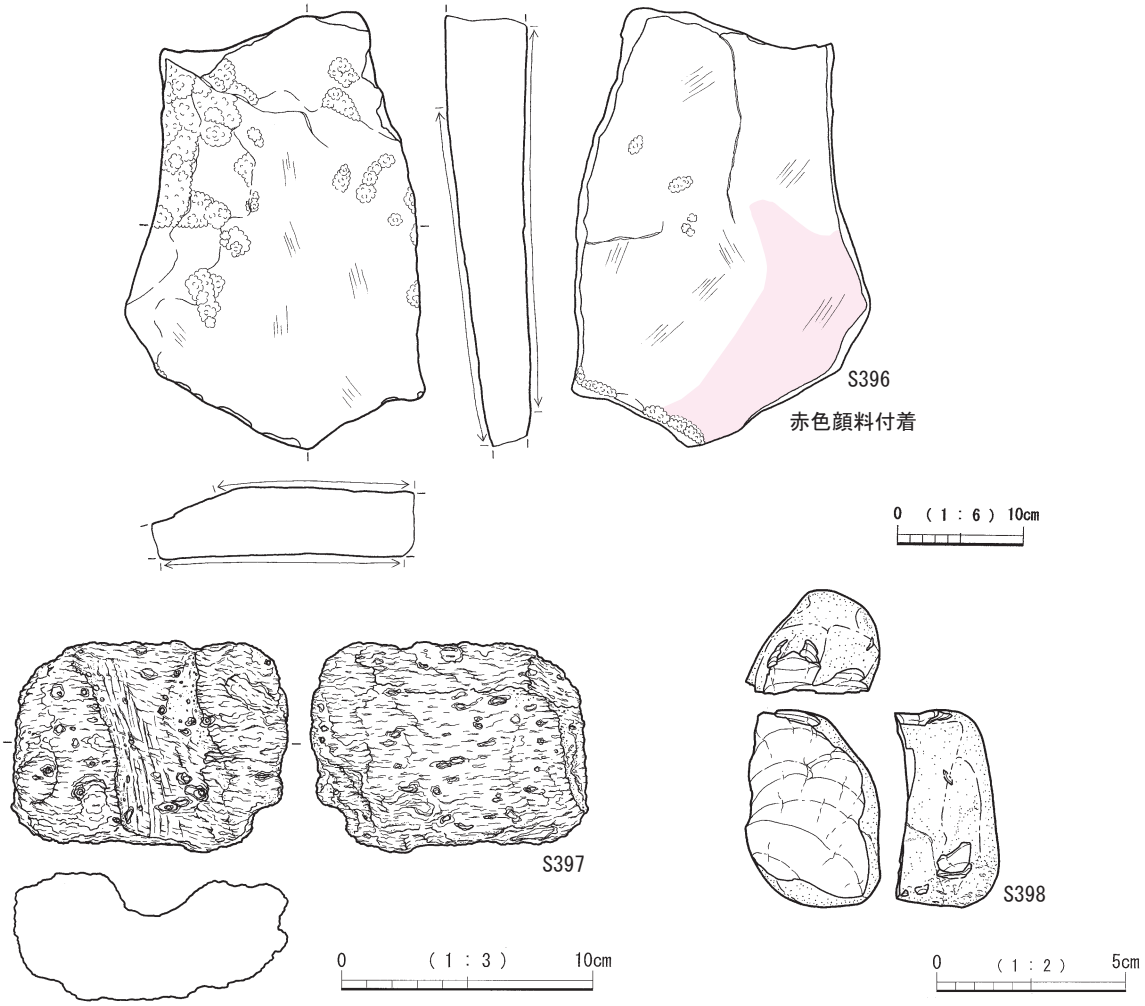








第204図　Ⅵ層出土石器（12）



第205図　Ⅶ層出土石器（13）

山系に類似する花崗岩製である。S388・S389は安山岩Ｂ類製である。S390 ～ S392は楕円形のものである。S390は安山岩Ｂ類製で，S392・S393は砂岩製である。S391は国見山系花崗岩製で，赤色顔料が付着する。S393 ～ S395はやや大型のものである。S393は正面にとても強い磨面を有する。S394は安山岩Ｂ類製で，敲打の範囲は広いが総じて浅く，使用頻度は少ない。S395は安山岩Ｂ類製の磨石で，多孔質の石材を使用している。大型のものであり，正面が主な使用面で明瞭な磨面を形成する。

S396は国見山系花崗岩の石皿であり，平たい形状である。表裏がよく使用されており，裏面はより強く磨られ，赤色顔料が付着する。

S397は軽石製品である。四角い形状に加工され，正面中央にはＵ字状の溝を形成する。

S398は石英原石である。人為的に半裁されている。下面の角部分を敲打に使用した可能性もある。



写真５　No.S391石器正面

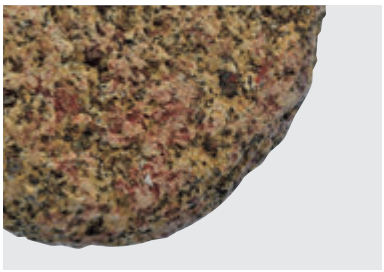


写真６　No.S391石器赤色顔料付着部分拡大

第38表　石器観察表（Ⅵ層出土）（1）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層	器種	分類	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	備考
193	S293	56429	D23	Ⅵ	石鏃	－	15.50	14.50	3.00	0.40	黒曜石	黒曜石C	
	S294	55098	B29	Ⅵ	石鏃	－	12.50	15.00	3.50	0.57	黒曜石	黒曜石C	欠損品
	S295	55097	B28	Ⅵ	石鏃	－	17.00	13.00	3.50	0.60	頁岩	頁岩B	
	S296	25066	D11	Ⅵ	石鏃	－	19.70	16.50	3.20	0.78	安山岩	安山岩A	欠損品
	S297	50551	C2	Ⅵ	石鏃	－	19.50	14.00	2.50	0.55	黒曜石	黒曜石C	
	S298	49032	F8	Ⅵ	石鏃	－	11.50	17.00	3.00	0.50	頁岩	頁岩A	欠損品
	S299	50298	F3	Ⅵ	石鏃	－	23.50	13.50	4.00	1.19	黒曜石	黒曜石E	
	S300	19915	D21	Ⅵ	石鏃	－	29.00	15.50	3.70	1.47	玉随	－	
	S301	16075	F17	Ⅴ	石鏃	－	18.50	16.50	3.00	0.52	安山岩	安山岩A	
	S302	55155	D24	Ⅵ	石鏃	－	19.00	17.30	3.00	0.60	黒曜石	黒曜石B	欠損品
	S303	50703	D3	Ⅵ	石鏃	－	23.00	16.50	4.00	1.07	安山岩	安山岩A	欠損品
	S304	16057	B14	Ⅵ	石鏃	－	41.00	18.50	3.50	1.30	黒曜石	黒曜石B	欠損品
	S305	46253	F7	Ⅵ	石鏃	－	38.00	18.00	4.00	1.91	安山岩	安山岩A	欠損品
	S306	55248	D25	Ⅵ	石鏃	－	29.00	15.50	1.50	0.50	頁岩	頁岩A	欠損品（磨製）
	S307	55920	D23	Ⅴa	石匙	－	35.00	25.00	5.50	3.19	チャート	－	縦型
	S308	19272	B14	Ⅵ	石匙	－	36.00	56.30	10.10	17.70	安山岩	安山岩A	
194	S309	49251	D8	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	25.50	21.50	5.00	2.28	チャート	－	掻器の可能性
	S310	55157	D24	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	23.80	24.00	11.40	6.30	黒曜石	黒曜石D	楔形石器の可能性
	S311	25252	E13	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	13.70	12.20	4.40	0.70	頁岩	頁岩A	石匙破片の可能性
	S312	24217	F13	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	16.60	21.50	5.00	1.49	玉髄	－	
	S313	16019	F15	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	20.20	30.70	4.00	2.23	チャート	－	
	S314	24912	E11	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	29.90	22.00	11.00	6.17	チャート	－	
	S315	25339	C11	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	13.00	26.30	3.80	1.15	チャート	－	
	S316	16253	E14	Ⅵ	石核	－	28.00	31.50	24.00	15.23	黒曜石	黒曜石E	
	S317	50262	F3	Ⅵ	石核	－	21.50	16.00	14.50	3.73	黒曜石	黒曜石A	
	S318	53771	C8	Ⅵ	石核	－	40.00	21.50	18.50	13.80	チャート	－	
	S319	24753	D12	Ⅵ	石核	－	46.30	54.70	21.00	57.00	チャート	－	
195	S320	16723	D14	Ⅵ	スクレイパー	－	42.00	85.00	13.50	61.10	ホルンフェルス	－	
	S321	20640	B18	Ⅵ	スクレイパー	－	38.00	14.00	8.00	36.20	頁岩	頁岩B	
	S322	25188	D11	Ⅵ	スクレイパー	－	41.00	100.00	10.00	34.80	ホルンフェルス	－	
	S323	53567	D7	Ⅵ	スクレイパー	－	66.70	93.50	22.00	133.50	ホルンフェルス	－	
196	S324	53862	C11	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	58.60	81.80	10.50	41.80	頁岩	頁岩B	
	S325	24349	F13	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	56.00	38.00	8.50	23.48	頁岩	頁岩B	
	S326	45996	E10	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	39.00	55.40	11.20	24.60	頁岩	頁岩B	
	S327	24533	F11	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	50.00	97.00	12.50	50.60	頁岩	頁岩B	
	S328	24886	E11	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	125.00	40.00	17.30	66.70	安山岩	安山岩C	
	S329	49455	E7	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	49.50	74.00	9.00	25.10	安山岩	安山岩C	
	S330	49830	F4	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	48.90	68.40	10.00	20.04	安山岩	安山岩C	
	S331	25070	D12	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	57.70	96.00	17.50	110.76	砂岩	－	
	S332	24749	D12	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	77.20	102.40	25.20	211.90	ホルンフェルス	－	
	S333	54840	B7	Ⅵ	二次加工・使用痕剥片	－	85.50	147.00	14.00	117.41	安山岩	安山岩C	
197			E10		磨製石斧接合資料	I-a	188.50	71.00	39.50	826.80	蛇紋岩	－	S334・S335　2点接合資料
	S334	54058	E10	Ⅶ	磨製石斧	I-a	103.50	64.00	38.50	381.80	蛇紋岩	－	S335と接合
	S335	53564	E10	Ⅵ	磨製石斧	I-a	99.00	71.00	39.50	445.00	蛇紋岩	－	S334と接合
	S336	53750	C8	Ⅵ	磨製石斧	I-a	40.70	27.20	20.40	35.30	頁岩	頁岩B	
	S337	49067	E8	Ⅵ	磨製石斧	I-a	84.20	76.40	48.80	410.60	頁岩	頁岩B	
	S338	49038	F8	Ⅵ	磨製石斧	I-a	102.80	70.00	41.00	437.50	ホルンフェルス	－	
198	S339	46323	F8	Ⅵ	磨製石斧	I-b	125.00	69.00	38.00	529.50	ホルンフェルス	－	
	S340	54445	E6	Ⅵ	磨製石斧	I-b	87.40	67.70	35.20	315.20	ホルンフェルス	－	
	S341	44259	F10	Ⅵ	磨製石斧	I-b	87.50	69.50	44.00	441.50	ホルンフェルス	－	
	S342	24521	F11	Ⅵ	磨製石斧	I-b	108.60	74.30	40.90	544.00	ホルンフェルス	－	
	S343	24556	F11	Ⅵ	磨製石斧	I-b	112.80	85.70	39.70	609.00	ホルンフェルス	－	
199	S344	25076	E12	Ⅵ	磨製石斧	Ⅱ	101.00	53.00	18.80	146.20	ホルンフェルス	－	
	S345	51600	E4	Ⅵ	磨製石斧	Ⅱ	62.30	52.00	22.10	102.20	ホルンフェルス	－	
	S346	50113	E4	Ⅵ	磨製石斧	Ⅱ	59.20	49.60	15.40	66.90	ホルンフェルス	－	
	S347	43867	C4	Ⅵ	磨製石斧	Ⅱ	37.40	49.80	8.90	18.50	頁岩	頁岩B	
	S348	49280	E 9	Ⅵ	磨製石斧	Ⅲ	67.20	64.10	24.00	150.60	頁岩	頁岩B	
	S349	49231	D8	Ⅵ	磨製石斧	Ⅲ	81.00	62.00	27.30	184.90	ホルンフェルス	－	
	S350	20714	D16	Ⅵ	磨製石斧	Ⅲ	70.00	54.70	23.80	122.10	ホルンフェルス	－	
	S351	49998	E5	Ⅵ	磨製石斧	Ⅲ	95.00	67.30	43.00	305.22	ホルンフェルス	－	
	S352	17472	E15	Ⅵ	磨製石斧	Ⅲ	82.80	60.00	25.30	150.10	ホルンフェルス	－	
200	S353	45874	E8	Ⅵ	打製石斧	Ⅳ	99.80	66.50	28.90	235.10	頁岩	頁岩B	
	S354	50002	E5	Ⅵ	打製石斧	Ⅳ	36.10	37.80	11.80	23.30	ホルンフェルス	－	
	S355	46462	E7	Ⅵ	打製石斧	Ⅳ	54.50	45.70	11.70	44.05	ホルンフェルス	－	
	S356	49844	F4	Ⅵ	打製石斧	Ⅳ	77.80	44.00	12.00	43.50	ホルンフェルス	－	
	S357	45125	F7	Ⅵ	打製石斧	Ⅳ	81.00	46.50	15.40	53.60	ホルンフェルス	－	
	S358	24616	D13	Ⅵ	打製石斧	Ⅳ	73.00	58.00	14.80	63.20	ホルンフェルス	－	
	S359	25197	D11	Ⅵ	打製石斧	Ⅳ	42.10	78.10	10.00	35.00	頁岩	頁岩B	
	S360	45911	E6	Ⅵ	打製石斧	Ⅳ	66.90	90.80	18.20	121.80	ホルンフェルス	－	
	S361	25192	D11	Ⅵ	打製石斧	Ⅳ	135.00	90.00	23.50	192.90	ホルンフェルス	－	
	S362	17393	F18	Ⅵ	打製石斧	Ⅳ	143.00	85.00	15.00	176.80	ホルンフェルス	－	
	S363	50712	E3	Ⅵ	打製石斧	Ⅳ	140.20	71.10	17.10	194.90	ホルンフェルス	－	未製品

第39表　石器観察表（Ⅵ層出土）（2）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層	器種	分類	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	備考
201	S364	24792	C13	Ⅵ	礫器	−	89.00	78.90	29.30	230.50	ホルンフェルス	−	
	S365	48838	F8	Ⅵ	礫器	−	70.70	111.40	44.00	342.50	ホルンフェルス	−	
	S366	24922	F14	Ⅵ	礫器	−	120.70	100.00	54.80	777.00	ホルンフェルス	−	
	S367	53735	B8	Ⅵ	礫器	−	97.90	74.80	44.80	408.90	ホルンフェルス	−	
	S368	16720	D14	Ⅵ	礫器	−	123.10	155.50	60.50	1348.50	砂岩	−	
	S369	54229	C8	Ⅵ	礫器	−	139.50	122.50	44.20	870.00	砂岩	−	
202	S370	53818	C9	Ⅵ	石錘	−	82.50	77.00	36.40	318.00	砂岩	−	
	S371	45139	F7	Ⅵ	石錘	−	66.60	58.80	19.60	85.80	凝灰岩	−	
	S372	49112	B10	Ⅵ	石錘	−	74.60	60.60	17.20	104.70	砂岩	−	
	S373	49158	D8	Ⅵ	石錘	−	89.40	73.00	23.00	183.40	砂岩	−	欠損品
	S374	14317	F13	Ⅵ	石錘	−	72.60	75.50	24.00	174.60	安山岩	安山岩B	欠損品
	S375	25288	C11	Ⅵ	ペットストーン	−	41.20	13.50	3.80	3.91	頁岩	頁岩B	
	S376	53746	C8	Ⅵ	砥石	−	79.00	99.00	84.00	844.00	砂岩	−	
	S377	54451	F6	Ⅵ	擦切石器	−	56.20	82.10	9.70	55.60	砂岩	−	
203	S378	24426	D12	Ⅵ	磨敲石	−	41.20	36.20	30.30	60.79	安山岩	安山岩B	
	S379	25354	C12	Ⅵ	磨石	−	47.50	41.00	27.90	76.28	安山岩	安山岩B	
	S380	24626	D13	Ⅵ	磨敲石	−	39.90	38.00	35.50	69.53	凝灰岩	−	
	S381	49042	F8	Ⅵ	敲石	−	93.00	52.00	36.00	217.00	砂岩	−	
	S382	20619	C17	Ⅵ	敲石	−	60.00	49.00	46.00	225.00	安山岩	安山岩B	
	S383	24441	D12	Ⅵ	敲石	−	89.50	54.90	45.00	297.08	安山岩	安山岩B	
	S384	44155	F8	Ⅵ	敲石	−	79.00	86.00	79.00	668.50	安山岩	安山岩B	
	S385	19936	D22	Ⅵ	磨敲石	−	76.00	59.00	35.00	223.30	安山岩	安山岩B	凹石
	S386	24376	D11	Ⅵ	磨敲石	−	68.00	69.00	25.80	163.11	花崗岩	−	国見山系
	S387	25387	C12	Ⅵ	磨敲石	−	84.30	81.80	40.90	436.00	花崗岩	−	国見山系
	S388	19631	E13	Ⅵ	磨敲石	−	87.00	78.00	42.00	440.50	安山岩	安山岩B	
	S389	48797	B9	Ⅵ	磨敲石	−	95.00	99.00	48.00	694.50	安山岩	安山岩B	
204	S390	49332	E8	Ⅵ	磨敲石	−	100.00	87.00	52.00	596.40	安山岩	安山岩B	
	S391	50317	F3	Ⅵ	磨敲石	−	114.50	93.00	46.00	799.40	花崗岩	−	赤色顔料付着 国見山系
	S392	50357	E2	Ⅵ	磨敲石	−	89.00	111.00	51.00	811.00	砂岩	−	
	S393	24668	E11	Ⅵ	磨敲石	−	145.30	101.00	30.50	654.00	砂岩	−	
	S394	24587	C12	Ⅵ	磨敲石	−	138.50	118.20	51.80	1100.00	安山岩	安山岩B	
	S395	46307	E9	Ⅵ	磨石	−	187.00	155.00	64.00	2260.00	安山岩	安山岩B	
205	S396	50194	G3	Ⅵ	石皿	−	350.00	240.00	66.00	7.52	花崗岩	−	赤色顔料付着 国見山系
	S397	24757	D13	Ⅵ	軽石製品	−	83.50	110.00	50.00	135.70	軽石	−	
	S398	24277	F13	Ⅵ	原礫	−	51.70	35.30	27.00	61.40	石英	−	

第40表　石器組成表（Ⅵ層）

	黒曜石A類	黒曜石B類	黒曜石C類	黒曜石D類	黒曜石E類	チャート	玉髄	頁岩A類	頁岩B類	頁岩C類	安山岩A類	安山岩B類	安山岩C類	ホルンフェルス	蛇紋岩	砂岩	凝灰岩	花崗岩	鉄石英	石英	軽石	計
打製石鏃（未製品含む）	1	2	5		1	1	1	2			4								1			18
磨製石鏃								1														1
石匙						1					1											2
石錐																						0
楔形石器				1																		1
二次加工・使用痕剥片（精製）	3		1			3	1	1	1													10
二次加工・使用痕剥片（粗製）									4				5	1		1						11
スクレイパー（精製）						1																1
スクレイパー（粗製）									1					3								4
磨製石斧									4					13	1							18
打製石斧									5					16		1						22
礫器									6					12		15	2					35
石錘												2		1		4	1					8
砥石（擦切石器含む）												3				9						12
石核（残核含む）	4				1	2	1															8
磨石・敲石・磨敲石・台石・石皿									1			169		9		35	18	34		3		269
剥片	44	7	59	5	8	28	15	8	36				36	18		11				8		283
原礫																				7		7
軽石加工品																					4	4
計	52	9	65	6	10	36	18	12	58	0	5	174	41	73	1	76	21	34	1	18	4	714

第41表　遺構番号新旧対応表

SH（Ⅶ層）	竪穴建物跡1	竪穴建物跡46
	竪穴建物跡2	竪穴建物跡36
	竪穴建物跡3	竪穴建物跡35
	竪穴建物跡4	竪穴建物跡51
	竪穴建物跡5	竪穴建物跡45
	竪穴建物跡6	竪穴建物跡37
	竪穴建物跡7	竪穴建物跡38
	竪穴建物跡8	竪穴建物跡53
	竪穴建物跡9	竪穴建物跡49
	竪穴建物跡10	竪穴建物跡52
	竪穴建物跡11	竪穴建物跡47
	竪穴建物跡12	竪穴建物跡48
	竪穴建物跡13	竪穴建物跡42
	竪穴建物跡14	竪穴建物跡44
	竪穴建物跡15	竪穴建物跡43
	竪穴建物跡16	竪穴建物跡39
	竪穴建物跡17	竪穴建物跡40
	竪穴建物跡18	竪穴建物跡41
	竪穴建物跡19	竪穴建物跡57
	竪穴建物跡20	竪穴建物跡59
	竪穴建物跡21	竪穴建物跡65
	竪穴建物跡22	竪穴建物跡64
	竪穴建物跡23	竪穴建物跡60－1
	竪穴建物跡24	竪穴建物跡60－2
	竪穴建物跡25	竪穴建物跡62
	竪穴建物跡26	竪穴建物跡63
	竪穴建物跡27	竪穴建物跡28
	竪穴建物跡28	竪穴建物跡29
	竪穴建物跡29	竪穴建物跡18
	竪穴建物跡30	竪穴建物跡20
	竪穴建物跡31	竪穴建物跡14
	竪穴建物跡32	竪穴建物跡19
	竪穴建物跡33	竪穴建物跡16
	竪穴建物跡34	竪穴建物跡17
	竪穴建物跡35	竪穴建物跡22
	竪穴建物跡36	竪穴建物跡23
	竪穴建物跡37	竪穴建物跡15
	竪穴建物跡38	竪穴建物跡21

REN（Ⅶ層）	連穴土坑1	連穴土坑7
	連穴土坑2	連穴土坑8
	連穴土坑3	連穴土坑5
	連穴土坑4	連穴土坑4
	連穴土坑5	連穴土坑3
	連穴土坑6	連穴土坑6
	連穴土坑7	連穴土坑1

SK（Ⅶ層）	土坑1	土坑202
	土坑2	土坑206
	土坑3	土坑205
	土坑4	土坑203
	土坑5	土坑200
	土坑6	土坑201
	土坑7	土坑225
	土坑8	土坑210
	土坑9	土坑208
	土坑10	土坑211
	土坑11	土坑216
	土坑12	土坑221
	土坑13	土坑217
	土坑14	土坑218
	土坑15	土坑219－1
	土坑16	土坑219－2
	土坑17	土坑220
	土坑18	土坑230
	土坑19	土坑85
	土坑20	土坑53
	土坑21	土坑54

SU（Ⅶ層）	石器集積1	IBS22
	石器集積2	IBS23
SU（Ⅵ層）	石器集積3	IBS18
	石器集積4	IBS17

※遺物出土状況略称：IBS

SS（Ⅶ層）	集石1	集石113
	集石2	集石109
	集石3	集石106
	集石4	集積107
	集石5	集石116
	集石6	集石111
	集石7	集石110
	集石8	集石198
	集石9	集石115
	集石10	集石104
	集石11	集石117
	集石12	集石226
	集石13	集石105
	集石14	集石123
	集石15	集石124
	集石16	集石125
	集石17	集石122
	集石18	集石227
	集石19	集石119
	集石20	集石92
	集石21	集石120
	集石22	集石121
	集石23	集石34
	集石24	集石37
	集石25	集石18
	集石26	集石17
	集石27	集石12
	集石28	集石129
	集石29	集石128
	集石30	集石127
	集石31	集石108
	集石32	集石114
SS（Ⅵ層）	集石33	集石103
	集石34	集石102
	集石35	集石112
	集石36	集石100
	集石37	集石101
	集石38	集石99
	集石39	集石98
	集石40	集石96
	集石41	集石44
	集石42	集石53
	集石43	集石33
	集石44	集石11
	集石45	集石16
	集石46	集石25
	集石47	集石26
	集石48	集石21
	集石49	集石20
	集石50	集石19
	集石51	集石15

第Ⅴ章　自然科学分析

第１節　小牧遺跡の出土資料の自然化学分析

パリノサーヴェイ株式会社

１．試料

試料は，各遺構覆土の水洗篩別回収物である。竪穴建物跡15（№15），集石36（№43，44），集石８（№45）の，計４点である。各試料の詳細は，結果と共に図１，表１～３に示す。

２．分析方法

（１）炭化種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し，ピンセットを用いて，同定が可能な炭化種実を抽出する。その他，炭化材同定試料や放射性炭素年代測定試料，骨片の確認抽出も併せて実施する。

炭化種実の同定は，現生標本および岡本（1979），椿坂(1993)，石川(1994)，中山ほか(2010)，鈴木ほか(2012)，真邉・小畑（2017）等を参考に実施する。次に，保存状態が良好な炭化種実を対象として，デジタルノギスを用いて大きさを計測する。

（２）炭化材同定

試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し，実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお，木材組織の名称や特徴は，島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また，日本産樹木の木材組織については，林（1991）や伊東（1995，1996，1997，1998，1999）を参考にする。

（３）放射性炭素年代測定

試料の状況を観察後，塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去，水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去，塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA：Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸，水酸化ナトリウム共に1mol/Lであるが，試料が脆弱な場合や少ない場合は，アルカリの濃度を調整して試料の損耗を防ぐ（AaAと記載)。試料がさらに少ない場合，アルカリ処理を行うと測定に必要な炭素が得られなくなるため，1mol/Lの塩酸処理のみにとどめている（HClと記載)。

試料の燃焼，二酸化炭素の精製，グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cube とIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径１㎜の孔にプレスし，測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS測定時に，米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-Ⅱ），国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等），バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。

δ^{13}Cは試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また，測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma；68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は，国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach, 1977)。また，暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは，OxCal4.3.2（Bronk, 2009）を用いる。較正曲線はIntCal13（Reimer *et al.*, 2013）を用いる。

３．結果

（１）炭化種実・炭化材同定

結果を表１・表２に示す。

炭化種実の遺構別出土個数（不明を除く）は，竪穴建物跡15（№15）が６個であった。集石36（№43，44），集石８（№45）は，炭化種実が確認されなかった。

栽培種は，竪穴建物跡15（№15）からヒエ？の胚乳が１個確認された。上記の特徴が確認されない子葉をコナラ属までの同定にとどめているが，イチイガシに由来する可能性が高い。

・ヒエ（*Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno）イネ科イヌビエ属

胚乳は炭化しており黒色，長さ1.75㎜，幅1.18㎜，残存厚0.90㎜のやや細長い半広卵体を呈す。腹面は平らで背面は丸みがある。背面基部正中線上に胚乳長の約2/3を占める浅い馬蹄形の胚の窪みがあり，腹面にも径0.6㎜程度の扇形で基部がやや尖る浅い窪みがある。出土胚乳は保存状態が不良で発泡している。

（２）放射性炭素年代測定

結果を図１，表３に示す。同位体補正を行った測定値は竪穴建物跡15（№15）のブナ科果実が8830±30BP，集石36（№44）の炭化材が5725±30BP，集石８（№45）の炭化材（クリ）が9620±30BPである。

暦年較正は，大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動，その後訂正された半減期（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することによって，暦年代に近づける手法である。測定誤

差2σの暦年代は，竪穴建物跡15（№15）が10147～9706calBP，集石36（№44）が6631～6442calBP，集石８（№45）が11170～10786calBPである。

竪穴建物跡15は縄文時代早期中頃，集石８は，縄文時代早期前半頃の暦年代を示した。調査所見と調和的な年代値と言え，該期の遺構であると推定される。集石36は，土坑土②の炭化材が縄文時代前期中頃の暦年代を示し，調査所見よりも新しい年代値と言える。炭化材は，燃料材の一部が残存した可能性があり，遺跡周辺で入手可能な木材を燃料として利用したこと等が推測される。

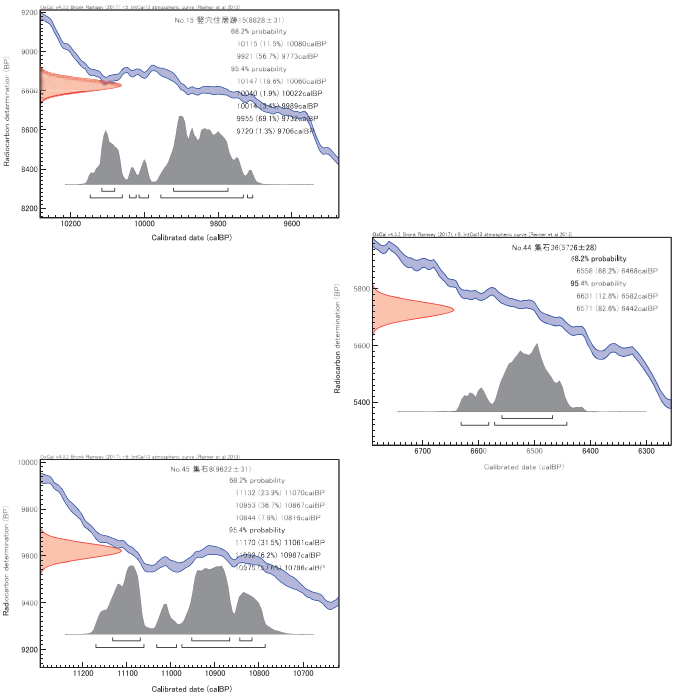


図１　暦年数正グラフ

【引用文献】

伊東隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181.

中山至大･井之口希秀･南谷忠志，2010，日本植物種子図鑑（2010年改訂版）.東北大学出版会，678p.

鈴木庸夫・高橋　冬・安延尚文，2012，ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種－.誠文堂新光社，272p.

椿坂恭代，1993，アワ・ヒエ・キビの同定.吉崎昌一先生還暦記念論集「先史学と関連科学」，261-281.

表１　小牧遺跡の炭化種実出土状況

No.	遺構名	採取場所	時代	イチイガシ	アカガシ亜属		コナラ属			コナラ属?	クリ?		ブナ科		サカキ	カラスザンショウ	イヌザンショウ	イネ			イネ?	ヒエ?	イネ科	不明	合計
				子葉	果実	果実子葉	果実子葉	果実	子葉	子葉	果実	子葉	果実	子葉	種子	種子	種子	穎(基部)	穎	胚乳	胚乳?	胚乳	胚乳		
1	竪穴建物跡15	埋土	縄文早期	－	－	－	－	－	－	－	－	－	5	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	6
2	集石36	土坑土①	縄文早期	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
3	集石36	土坑土②	縄文早期	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
4	集石8	埋土	縄文早期	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
合　計				0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	6

表２　小牧遺跡の炭化材同定結果

No.	遺構名	採取場所	時代	小牧No.	枝番	篩（mm）	形状	種類	備考
15	竪穴建物跡15	埋土	縄文早期	44	1	2	小破片	コナラ属コナラ節	
45	集石８	埋土	縄文早期	72	1	2	小破片	クリ	年代測定

表３　小牧遺跡の放射性炭素年代測定・暦年較正結果（１）

No. 遺構名	分類群部位	方法	補正年代 （暦年較正用）BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正年代 年代値															確率	Code No.	
No.15 竪穴建物跡15	ブナ科 果実	HCl	8830±30 (8828±31)	−23.39 ±0.44	σ	cal	BC	8166	−	cal	BC	8131	10115	−	10080	cal	BP	0.115	YU−7195	pal−11045
						cal	BC	7972	−	cal	BC	7824	9921	−	9773	cal	BP	0.567		
					2σ	cal	BC	8198	−	cal	BC	8111	10147	−	10060	cal	BP	0.196		
						cal	BC	8091	−	cal	BC	8073	10040	−	10022	cal	BP	0.019		
						cal	BC	8065	−	cal	BC	8040	10014	−	9989	cal	BP	0.034		
						cal	BC	8006	−	cal	BC	7783	9955	−	9732	cal	BP	0.691		
						cal	BC	7771	−	cal	BC	7757	9720	−	9706	cal	BP	0.013		
No.44 集石36	炭化材	AaA (0.1M)	5725±30 (5726±28)	−30.00 ±0.41	σ	cal	BC	4609	−	cal	BC	4519	6558	−	6468	cal	BP	0.682	YU−7205	pal−11055
					2σ	cal	BC	4682	−	cal	BC	4633	6631	−	6582	cal	BP	0.128		
						cal	BC	4622	−	cal	BC	4493	6571	−	6442	cal	BP	0.826		
No.45 集石８	クリ 炭化材	AaA (0.1M)	9620±30 (9622±31)	−24.60 ±0.38	σ	cal	BC	9183	−	cal	BC	9121	11132	−	11070	cal	BP	0.239	YU−7206	pal−11056
						cal	BC	9004	−	cal	BC	8918	10953	−	10867	cal	BP	0.367		
						cal	BC	8895	−	cal	BC	8867	10844	−	10816	cal	BP	0.076		
					2σ	cal	BC	9221	−	cal	BC	9112	11170	−	11061	cal	BP	0.315		
						cal	BC	9083	−	cal	BC	9038	11032	−	10987	cal	BP	0.062		
						cal	BC	9026	−	cal	BC	8837	10975	−	10786	cal	BP	0.576		

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4）AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAは試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
5）暦年の計算には、OxCal v4.3.2を使用
6）暦年の計算には、補正年代に0で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
7）１桁目を丸めるのが慣例だが、較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、１桁目を丸めていない。
8）統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、2σが95.4%である

第２節　赤色顔料分析

鹿児島県立埋蔵文化財センター

本遺跡出土遺物に付着した赤色物質について，双眼実体顕微鏡による観察及びエネルギー分散型蛍光X線分析装置による成分分析を行った。

１　試料について

表面に塗布または付着している赤色粒子　　土器７点
石器７点

表１　小牧遺跡出土赤色顔料付着資料一覧

掲載No	種別（分類）	遺構名	グリット	層
60	土器（Ⅲa）	－	F38	Ⅶa
63	土器（Ⅲa）	－	F33･C39	Ⅳa･Ⅶa
92	土器（Ⅲc）	－	C4	Ⅶ
93	土器（Ⅲc）	－	D6	Ⅶ
100	土器（Ⅲc）	－	E4	Ⅶ
109	土器（Ⅲd）	－	F6	Ⅵ
249	土器（Ⅵb）	－	E5	Ⅶ
S089	舟形軽石加工品	竪穴建物跡22号	F8･9	Ⅶ
S098	磨敲石	竪穴建物跡29号	B13	Ⅶ
S285	磨敲石	石器集積３号	E3	Ⅵ
S286	磨敲石	石器集積３号	E3	Ⅵ
S287	磨敲石	石器集積３号	E3	Ⅵ
S391	磨敲石	－	F3	Ⅵ
S396	石皿	－	G3	Ⅵ

２　観察・分析結果

（１）形状観察

以下の機器を使用して，形状を観察し撮影を行った。双眼実体顕微鏡（ニコン製SMZ1000）での８～80倍観察

（２）成分分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（堀場製作所製XGT－1000，X線管球ターゲット：ロジウム，X線照射径100㎛）を使用し，X線管電圧：15/50kV，電流：自動設定で分析を行った。以下，試料ごとの分析結果を掲載する。

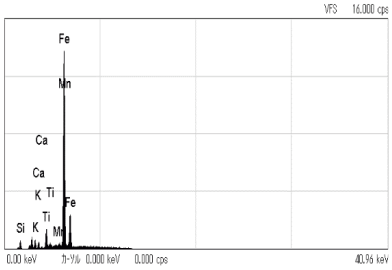
３　考察

蛍光X線分析の結果，14点すべての赤色部分から鉄（Fe）の成分が高く検出されたため，鉄を主成分とする広義のベンガラ（赤色顔料）である可能性が高い。磨石，軽石に付着した赤色顔料は表面の細かな凹みに残存している。土器表面に見られる赤色顔料は，塗布したものか，胎土自体の赤色物質かの区別は難しい。

①No.93（Ⅲc類土器）の分析結果

XGT値　：　100μm　　測定時間　：　300ｓ
X線管電圧　：　15/50kv　　電流　：　1000/760μA
パルス処理時間　：　P3　　X線フィルタ　：　なし　　試料セル　：　なし
定量補正法　：　スタンダードレス

元素		ライン	質量濃度[%]	3σ[%]	強度[cps/ma]
14	Si　ケイ素	K	20.97	1.38	9.66
19	K　カリウム	K	2.62	0.35	5.14
20	Ca　カルシウム	K	2.37	0.27	5.65
22	Ti　チタン	K	3.68	0.21	35.65
26	Fe　鉄	K	70.36	1.28	931.14



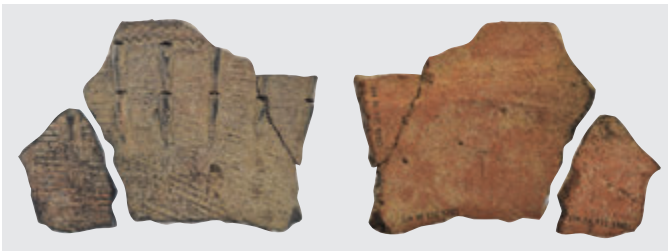


写真７　No.93土器　表面　　写真８　No.93土器　裏面

②No.100（Ⅲc類土器）の分析結果

XGT値　：　100μm　　測定時間　：　300ｓ
X線管電圧　：　15/50kv　　電流　：　1000/700μA
パルス処理時間　：　P3　　X線フィルタ　：　なし　　試料セル　：　なし
定量補正法　：　スタンダードレス

元素		ライン	質量濃度[%]	3σ[%]	強度[cps/ma]
14	Si　ケイ素	K	15.23	1.21	7.61
19	K　カリウム	K	3.25	0.32	7.43
20	Ca　カルシウム	K	2.24	0.22	6.1
22	Ti　チタン	K	4.8	0.22	52.78
25	Mn　マンガン	K	0.85	0.14	11.63
26	Fe　鉄	K	73.63	1.12	1056.83

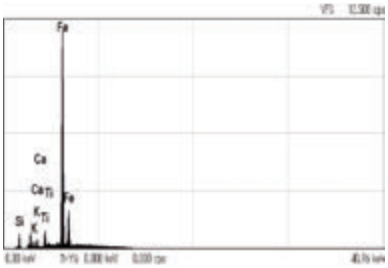




写真９　No.100土器　裏面

③S286（石器集積３号出土磨敲石）の分析結果

XGT値　：　100μm　　測定時間　：　300ｓ
Ｘ線管電圧　：　15/50kv　　電流　：　1000/540μA
パルス処理時間　：　P3　　X線フィルタ　：　なし　　試料セル　：　なし
定量補正法　：　スタンダードレス

元素		ライン	質量濃度[%]	3σ[%]	強度[cps/ma]
14	Si	ケイ素	K	2.22	0.39	2.21
20	Ca	カルシウム	K	0.18	0.07	1.29
22	Ti	チタン	K	0.28	0.05	9.41
25	Mn	マンガン	K	1.46	0.08	55.44
26	Fe	鉄	K	95.86	0.41	3417.05

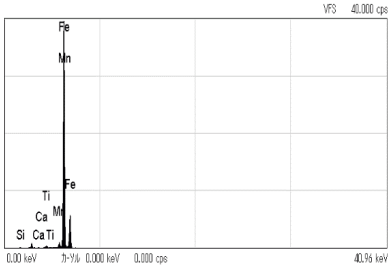




写真10　No.S286石器　正面　　写真11　No.S286石器　下面～右側面

④S396（花崗岩製石皿）の分析結果

XGT値　：　100μm　　測定時間　：　300ｓ
Ｘ線管電圧　：　15/50kv　　電流　：　1000/240μA
パルス処理時間　：　P3　　X線フィルタ　：　なし　　試料セル　：　なし
定量補正法　：　スタンダードレス

元素		ライン	質量濃度[%]	3σ[%]	強度[cps/ma]
13	Al	アルミニウム	K	13.24	0.65	21.32
14	Si	ケイ素	K	19.17	0.48	71.45
19	K	カリウム	K	0.84	0.06	14.33
20	Ca	カルシウム	K	0.51	0.05	11.14
22	Ti	チタン	K	0.37	0.05	35.36
25	Mn	マンガン	K	0.19	0.04	24.84
26	Fe	鉄	K	65.68	0.63	8966.85

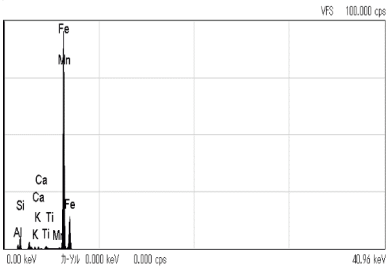




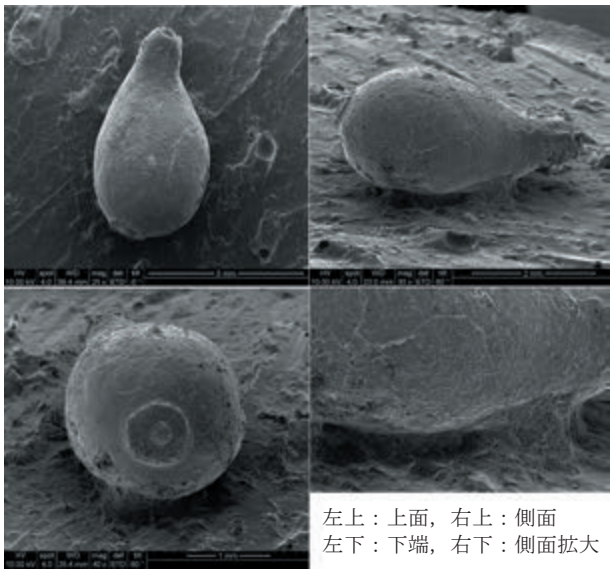
写真12　No.S396石器　裏面



写真13　No.S396石器
赤色顔料付着部分拡大

第３節　土器圧痕分析

整理作業の過程で，種実等の圧痕の可能性がある資料を３点確認し，実体顕微鏡またはシリコーン・ゴムによるレプリカの作製を行った。２点は堅果類等の果皮片であった。１点（圧痕試料番号No.189）については，作製したレプリカを走査型電子顕微鏡（以下,SEM）で撮影し，詳細な観察を行った。なお，SEM撮影は，鹿児島大学研究支援センターに委託した。No.189は，長軸4.1mm，短軸2.3mm，厚み2.3mmでしずく型に近い形状を呈する。また，下端側には同心円状の組織が明瞭にみられる。側面には，部分的に細かい筋状の組織が残っており，種実や球根類，芽などの植物資料であることが分かる。現状では，種同定には至っておらず，今後現生資料と比較し，改めて報告の機会を持ちたい。



左上：上面，右上：側面
左下：下端，右下：側面拡大

写真14　圧痕レプリカＳＥＭ画像

第Ⅵ章　総括

第１節　旧石器時代

１　小牧第Ⅰ文化層

小牧第Ⅰ文化層について，頁岩（粘板岩）を用いて素材面を残し，柳葉形に仕上げる尖頭器については，そもそも石材が薄く剥離できることを前提に「小牧３Ａ型尖頭器」として設定され，その後「小牧３Ａ型石槍」と呼称される。(長野1996)。

S003・S004は小牧３Ａ型尖頭器と言われるものであるが，S002からは一側縁をブランティング剥離するところと，S005・S006・S010の基部の一方を抉る形状は，剥片尖頭器と共通する技術的な背景があるとも考えられる。西丸尾Ⅷｂ層でも類似の尖頭器が出土し，大型の基部加工ナイフと今峠型ナイフや台形石器を伴っていた。三稜尖頭器はブロックから出土していないので，宮田栄二氏が位置づけたように剥片尖頭器以後の石器群の時期に当たる可能性がある（宮田2006)。

なお，頁岩の石器の大部分は，横剥ぎの剥片を素材としており，素材剥片も出土していることから，横剥ぎ技法による一連の製作技法の存在が予想される。横剥ぎの剥片利用については瀬戸内技法との関連が述べられてきている（宮田2002，桑波田2003，馬籠2013)。時期的には剥片尖頭器盛行期より後出とされるが，本遺跡と矛盾しない。

最も注目されるのは，特に槍先形尖頭器の摩滅痕であり，着柄痕として想定できることである。

摩滅痕については，使用痕研究の中で行われてきたが，御堂島正氏による石器使用痕分析と実験的検証が知られる。当初は運搬による石器の稜線の摩滅を，黒曜石の模擬石器による運搬実験により，その可能性を指摘した(御堂島2015)。さらに石器に残る使用痕については，総合的痕跡分析を提唱している（御堂島2017)。これは，使用痕跡だけに限らず，多様な要因で形成された痕跡を分析し，石器のライフヒストリーを復元しようとするものである。「石材の獲得，製作，着柄，使用，維持，運搬，再利用，廃棄，埋没後変化，発掘調査等を経て現在のわれわれの目の前に至るまでの痕跡である。こうした痕跡がどのようなものであるかを実験的方法によって把握して，そこから導き出された観察の視点と解釈の基準をもって石器を分析し，より多くの情報を得ようとするものである。」として，実験的な検証と石器使用痕分析の二頭立てでの方法論を呈示している。

さらにその中では，黒曜石製掻器の分析を通じて，柄から出ている部分はほとんど刃部のみとなる結果を得ている。

着柄についても，黒曜石製石器で実験して，着柄痕跡が形成された部位は，左右の側縁，基端縁，背・腹面の稜線やバルブ等の凸部，基端面であったとした。また，着柄によって輝斑が生じることや，併せて微小剥離痕跡・微小光沢面・線状痕跡等について実験結果が述べられている（御堂島2016)。さらに革ひもなど巻き付けや指の力による微小剥離痕跡の形成についても可能性を述べる（御堂島・堤2019)

こうした成果を踏まえて，着柄痕跡については具体的に使用痕について分析が進められている（佐野2020)。使用痕分析については，総合的に考察すべきであるが，今回は着柄の可能性を中心に述べて，使用痕跡について今後の機会に改めたい。

本遺跡の横長剥片を主体とする石器群については，前述した研究の積み重ねの成果を適用して，着柄により生じるとされる部位に痕跡が観察されるのに合わせて，結索痕跡と考えられる円錐状の摩滅痕跡が確認され，さらに着柄の具体性が顕れてきたものと考える。大きくは２つの着柄が想定できる。一つには石槍としての着柄痕跡であり，かなりの部分を覆ってソケット式にはめ込まれ，結索されたものと考えられる。もう一つは削器としてであり，刃部のみ露出した包丁形である。目的剥片と素材剥片については運搬による摩滅の可能性がある。

２　小牧第Ⅱ・Ⅲ文化層

ブロック２・３は，石器・接合資料・調整剥片・剥片・微細剥片が出土したことから，数個の原石を持ち込み，石器を製作したものであり，石器製作時に破損したものや石器製作に不向きであった剥片等を破棄していったものであると考えられる。

３　各文化期について

剥片尖頭器と三稜尖頭器の出現の前後関係については，剥片尖頭器後に三稜尖頭器と位置づけられ（吉留1994)，その後剥片尖頭器を３期に分け，南九州の小牧３Ａ遺跡と西丸尾遺跡を３期とした（吉留2002)。さらに宮田氏が桜島火山灰P15とP17と石器群の出土状況から，P15の上位では三稜尖頭器主体の石器群，P17の下位では剥片尖頭器を主体とする石器群が検出されるとして，大きく異なる時期である可能性を指摘した（宮田2006)。小牧3A型尖頭器は，剥片尖頭器伝播後まもなく鹿児島県南部で製作されるようになり，剥片尖頭器の終焉とほぼ同時に終焉を迎えるとした（桑波田2004）考え方もある。剥片尖頭器末期と近接した時期に，頁岩を用いて横長剥片を剥出して，小牧３Ａ型石槍を含む槍先形尖頭器と剥片石器を製作したブロックといえる。

以上から，本遺跡で出土した３つのブロックは，時期をそれぞれ異にする集団が利用した状況をよく顕している。

第２節　縄文時代早期

１　遺構

縄文時代早期遺構はⅦ・Ⅷ層段階の遺構とⅥ層段階の遺構に分かれるが，Ⅵ層の遺構は，集石と石器集積だけで非常に少ない。

Ⅶ・Ⅷ層段階の遺構は，特にＢ～Ｇ―２～５区，Ｅ・Ｆ―７～９区に集中して分布している。竪穴建物跡38基，連穴土坑７基，土坑21基，集石32基，石器集積２基が確認できた。

（１）竪穴建物跡

竪穴建物跡は，約７ケ所に分かれて分布している。竪穴建物跡がどの土器型式に帰属するのか，土器と竪穴建物跡の分布から考察を試みた。分類した土器の分布と竪穴建物跡との重なりを下の表にした。竪穴建物跡から出土した土器には「○」，遺物が少ないか竪穴建物跡の近くから出土した土器については「▲」で示してある。１種類だけの土器と竪穴建物跡が重なっている遺構は，SH ３，SH ９，SH22，SH23，SH24，SH26，SH29，SH33である。そのうちSH ３，SH22，SH23，SH24，SH26はⅥ類土器の出土が多いエリアと重なるため，Ⅵ類土器に帰属する可能性もある。SH ９はⅢ類の分布と重なるが，出土数は非常に少ないため，SH ９がⅢ類土器に帰属するのかは不明である。

表１　竪穴建物跡と土器の関係

掲載番号	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	形状
SH1						▲	▲			楕円形
SH2	▲		▲							隅丸方形
SH3						▲				隅丸方形
SH4			▲							隅丸方形
SH5	▲		▲			▲				隅丸長方形
SH6		▲	▲			▲				隅丸方形
SH7			▲		▲					隅丸方形
SH8			▲			▲				不定形
SH9			○							隅丸方形
SH10			○	▲						隅丸方形
SH11			▲			▲				楕円形
SH12		▲	▲		▲					不定形
SH13			▲		▲					隅丸方形
SH14			▲			▲			▲	不定形
SH15		▲	○			▲				隅丸方形
SH16		▲	○			○	▲			隅丸方形
SH17		▲	○			○				楕円形
SH18		▲	▲		▲	▲	▲		▲	隅丸方形
SH19			▲		▲	▲			▲	不定形
SH20			▲	▲			▲			隅丸長方形
SH21		▲	▲		▲	○				不明
SH22						○				不明
SH23						○				隅丸長方形
SH24						○				隅丸方形
SH25		▲				○				楕円形
SH26						○				隅丸方形
SH27										隅丸長方形
SH28										隅丸方形
SH29						▲				隅丸長方形
SH30			.	▲		○	▲			隅丸長方形
SH31		▲				▲	▲			隅丸長方形
SH32			▲			▲	▲			隅丸方形
SH33						▲				隅丸長方形
SH34							▲		▲	隅丸長方形
SH35										隅丸方形
SH36										隅丸長方形
SH37										隅丸方形
SH38										隅丸長方形

※　網かけ遺構は単体土器だけ出土

竪穴建物跡から炭化物が採集でき，科学分析に出すことができたSH15は，補正年代で8,830±30の年代が出ている。SH15は下の表で分かるように，Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ類の分布と重なるが，少ない出土数の中ではⅢ類が多い。Ⅲ類土器との関係が深い遺構と推測できる。

遺構内土器からの関係についても考察を試みた。同一遺構内に数種類の土器型式が混ざっていること。また，床着の土器が単体でも，包含層土器の分布域と重なっていないことから，関係性については判明しなかった。

次に，形状から考察を試みた。形状は，隅丸方形17基と隅丸長方形11基，不定形４基，楕円形４基，不明が２基である。Ⅵ類だけの分布域にある竪穴建物跡が７基あるが，隅丸方形３基，隅丸長方形３基，不明１基と，規格性は見当たらない。また，楕円形状の竪穴建物跡が４基あり，それぞれ２～３種類の土器型式が分布するが，いずれにもⅥ類は含まれている。特に，SH17とSH25はⅥ類の出土が多い箇所であり，Ⅵ類土器との関連が推測される。

いずれにしても，竪穴建物跡がどの土器型式と結びつくのか明確な評価はできなかった。

（２）連穴土坑

連穴土坑はⅦ・Ⅷ層で７基検出され，Ⅵ層段階では検出されなかった。連穴土坑の分布はＢ―２区，Ｆ―３区，Ｆ―12～14区，Ｄ―14区，Ｅ・Ｆ―19区の５ケ所に分かれる。その中でＤ―14区，Ｅ・Ｆ―19区のREN ５とREN ７は近くに遺構がなく，特にREN ７は20m四方に遺構が無い。単体で存在するという感じである。その他の連穴土坑は竪穴建物跡や集石，土坑等が周辺にある。７基とも形状や規模に規格性は認められない。REN １だけが，小穴部を竪穴建物跡がある低い方へ向けて作られている。竪穴建物跡に隣接しており，連穴土坑を作る時に，何らかの影響があったものと思われる。他は竪穴建物跡と隣接していないため，小穴部を地形の高いほうへ向けるという地形的な要因に作用され作られたものと思われる。

（３）土坑

土坑はⅦ・Ⅷ層で21基で，Ⅵ層段階の土坑は検出されなかった。平面形状により表２のように５タイプに分類したが，規格性は見いだせなかった。大きくはＤ・Ｅ―３・４区とＤ・Ｅ―６～８区の２

表２

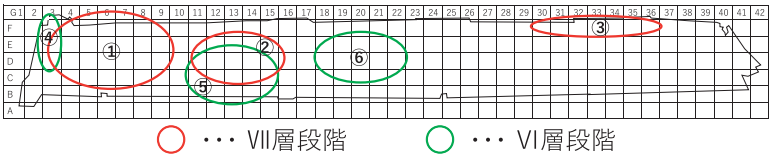
タイプ	基数
Ⅰ	5
Ⅱ	6
Ⅲ	5
Ⅳ	3
Ⅴ	2

つのエリアに集中する。SK 1はSH12を一部切って作られており，構造からSH12の付帯施設とは思われない。SH12の廃棄後に，さほど時間的な間隔を置かずに作られた遺構と思われる。

（4） 集石・石器集積

本報告では，集石（SS）・石器集積（SU）を検出層ごとに報告した。磨敲石などの石器が人為的に集められたと推測できるような検出状況であったものは，ほかの集石とは機能の違いが考えられることから，「石器集積」として区別して捉えた。

図１　集石・石器集積　分布エリア図



○ ･･･ Ⅶ層段階　　○ ･･･ Ⅵ層段階

Ⅶ層段階では，図１の①，②，③エリアに分布する。掘込が確認できた集石は32基中４基で，10cmほどのごく浅い掘込のものが殆どである。安山岩Ｂ類主体の集石が多いが，②・③の内陸側のエリアの集石は構成礫の砂岩使用比率が高い。①・②エリアでは，岩本・前平・小牧３Ａ・札ノ元Ⅶ類・石坂・下剥峯・桑ノ丸・押型文（山形）の土器が分布する。時期の幅が広く，集石の帰属時期の認定は難しかった。SS8（タイプⅢ）は深さ24cmの円形の掘込をもち，埋土内の炭化材の測定値は9620±30BP（11170 ～ 10786calBP）という結果で，下剥峯式・桑ノ丸式の年代と重なる（川口・黒木・立神，2020）。③のエリアでは，掘込をもつタイプの集石が，４基中２基検出されている。周辺では小牧３Ａタイプと吉田式のみが出土しており，この時期の遺構である可能性が高い。また，石器集積はともに竪穴建物跡の周辺で検出された。

Ⅵ層段階では，図１の④，⑤，⑥エリアに分布する。掘込が確認できた集石は19基中６基である。Ⅶ層にはみられない形態として，浅いレンズ状の掘込に礫が充填する集石が数基検出された。また，SS46は特殊な形態であり詳細は後述する。④の崖際のエリアには８基が密集し，赤色顔料付着の磨敲石が検出されたSU3も検出された。SS8からは穿孔の施された楕円形の大珠状の軽石製品が出土した。SS36（タイプⅢ）はレンズ状の掘込の集石の埋土上位に礫の集中部をもつもので，炭化材の測定値は5725±30BP（6631 ～ 6442calBP）というやや新しい年代値であった。この値は縄文時代前期の年代に相当するが，SS36の埋土の特徴，周辺のほかの遺構や土器の検出状況からⅥ層の時期に帰属すると判断した。②・③のエリアではⅦ層段階と同様に，砂岩の使用比率が高くなる傾向がみられる。平栫式土器片が散見されるが，集石の年代を比定するには出土数が少ない。Ⅵ層石器の出土数は多いエリアである。

①　SS46について

Ⅵ層下面で検出されたSS46は，下記のような理由により，配石遺構として取り扱っても良い特殊な集石である。

1　ほとんどが円礫で構成され大きさが揃っている。
2　被熱した礫と被熱してない礫が混在する。
　遺構内の焦土痕や炭化物はない。
3　方形状の形状を呈する。
4　周囲に遺構や遺物がほとんどない。
5　一部礫の重なりはあるが，大半は重なりがない。

発掘担当者も，冬至の日の入りがSS46のS270とS276の礫の中心を結んだラインとほぼ合致していた，と記録している。

上記のことより，遺構と太陽の動きに関係があるのか考察を試みた。

図２のように，遺構長軸西側の中央礫S270を中心として，東側のS276の石器の中心を結ぶと，現在の冬至の日の入りS62.8°Wの方向と合致する。また，S270とS272の中心を結ぶと真北方向を向く。

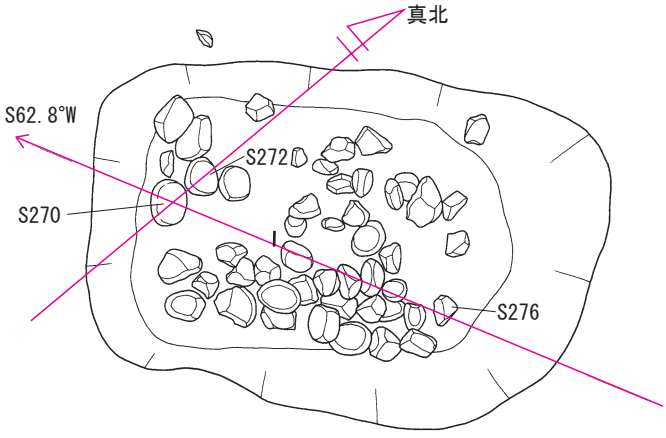
図３のようにこのエリアはⅥ層の遺構や土器が出土してなく，単独で存在している。遺構内の炭化物や焼土は確認されていない。遺構内の礫は大きさがそろった磨敲石や円礫が多い。

東日本等で報告されている二至二分（夏至，冬至，春分，秋分）を示すと思われる遺構は，縄文時代後期の時期が多く，それも大型の遺構ばかりである。

秋田県の特別史跡の大湯環状列石では，日時計状組石と呼ばれる遺構が，二重になったストーンサークル内にある。ストーンサークルの中心から日時計状組石を結んだ線が，夏至の太陽の日没線上にあることが報告されている（大湯環状列石発掘調査報告書 2009）。半径が20mを超える大型のストーンサークルである。

小牧遺跡のSS46は縄文時代早期という時期と，規模が

図２



小さいということ，遺構は平坦面に設けられているが，土地造成が行われた痕跡はないという観点から，二至二分を示す遺構と判断するに至らなかった。しかし，単なる集石と判断するには特殊な遺構である。今後の調査で類例が報告されることを期待したい。

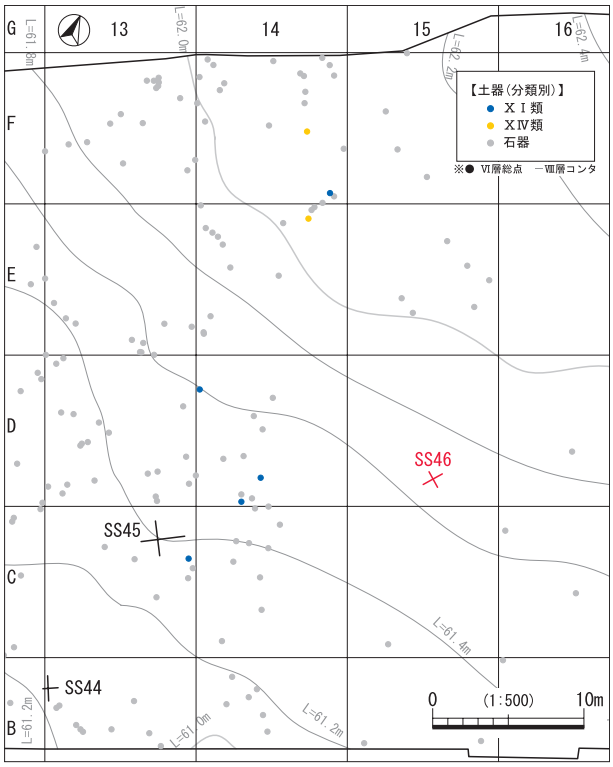


図３　Ⅵ層遺構配置図及び土器出土状況図

表３　小牧遺跡出土の土器分類と出土点数

分類	土器型式	出土点数
Ⅰ類	岩本式土器	3
Ⅱ類	前平式土器	48
Ⅲ類	加栗山，小牧3A，札ノ元Ⅶ類	167
Ⅳ類	吉田式土器	27
Ⅴ類	石坂式土器	50
Ⅵ類	下剥峯式土器	397
Ⅶ類	桑ノ丸式土器	64
Ⅷ類	中原式土器	6
Ⅸ類	押型文土器	24
Ⅹ類	手向山式土器	4
Ⅺ類	平椿式土器	7
Ⅻ類	塞ノ神式土器	2
ⅩⅢ類	苦浜式土器	1
ⅩⅣ類	Ⅰ～ⅩⅢ類底部	11
不明	型式不明土器	4
合　計		815

２　遺物

（１）土器

土器の総点数815点中389点を掲載した。掲載率47.7％である。総点数に対して，底部が非常に少ない。また，小破片が多く，ⅩⅢ類以外復元できる土器がなかった。

小牧遺跡の土器分類は，表３のような土器型式に比定される。遺構内土器で分類できなかった胴部片が４点あり，型式不明とした。

Ⅰ類土器は，C－２区，D－６区，C－９区の３ヶ所で出土しているのみである。遺構とは分布域を異にしている。形状は底部から口縁部にかけて開きながら直線的に立ち上がる。口唇部は外面より貝殻殻頂部ないしヘラ状工具を押し当て，結果断面が三角形状を呈する。口縁部には貝殻刺突文を横位に巡らせる。43は，口唇部の断面形状や口縁部の施文が貝殻刺突ではなく，横位の沈線を施す土器であるが，形状や器面構成からここに位置づけた。

Ⅱ類土器は48点出土しているが，C～G－２～９区，D～F－12・13区に点在し，14，22・23区に１点ずつ出土している。

Ⅲ類土器は，貝殻文円筒形の土器で，施文の仕方でさらに分類した。Ⅲ類はⅥ類に次ぐ出土量で，全体の20％を占める。

Ⅲa類は，横位ないし斜位に貝殻条痕を施した上から貝殻腹縁部による刺突を従位に施す。加栗山式土器に比定した。

Ⅲb類は，縦位方向に貝殻腹縁部による刺突文を密に施す。小牧３Ａタイプに比定した。

Ⅲc類は，横位ないし斜位の貝殻腹縁部による条痕文を施す。札ノ元Ⅶ類土器に比定した。その他Ⅲ類を細分類できなかった土器を底部も含めⅢd類とした。Ⅲ類の出土状況はおおよそ2～7区，32～39区の遺跡の両側2箇所に分かれて分布している。2～4区の分布域は，遺構の分布域とも重なっている。

Ⅳ類は，貝殻腹縁部による押引文を横位に施す。吉田式土器に比定される。出土点数は少ないが，器形がレモン形の土器が出土した。土器の器形を円形から楕円形に変えるため，屈曲部になる箇所を強くつまんで稜を形成しているように見える。つまみ出しているため，外面はやや丸みを帯びている。

Ⅴ類は，口縁部が大きく外反するタイプと外斜および直行するものがあるが，出土点数が少ないことから細分は行なわなかった。前迫氏の石坂式土器の細分に照らし合わせると（前迫2003），前者が石坂Ⅰ式，後者が石坂Ⅱ式土器となる。瘤付きのものやバケツ状のものは出土していない。分布は２～９区に多いが，全体的に散在している。

Ⅵ類は，本遺跡で一番多く出土した土器で，全出土土

器の49％を占める。分布域は広範におよんでいるが，特にＣ～Ｆ―７～９区に集中している。このエリアは遺構も多く，下剥峯式土器との関連も想定される。施文形態によりⅥa～Ⅵeまで分類した。Ⅵa類は直行・内湾器形があり，「Ｚ」字状の貝殻刺突文を施す。口縁部及び胴部に瘤状突起を持つ土器もあるが，細分はしなかった。Ⅵb類は，直行・内湾器形があり，縦位ないし「Ｖ」字状の貝殻刺突文を施す。口縁部直下の横位貝殻刺突文を半裁竹管状に施文する土器もある。また，器壁が１cmを超える大型の土器があるが，施文を優先してⅥb類で掲載した。重量感のある土器である。Ⅵc類は全面に貝殻腹縁部を刺突する土器をまとめた。器壁も薄くシャープな「Ｖ」字状の施文を施す。出土点数が極めて少ないため，全体の器形は不明である。Ⅵd類は施文形態が崩れたような横位の貝殻刺突文を施し，Ⅵa・Ⅵb類のような横位ないし斜位の口縁部文様帯は見られない。Ⅵe類は，２点しか出土していないが，施文具が貝殻ではなくヘラ状工具による短沈線を施す。辻タイプに属する土器と思われる。

Ⅶ類は，貝殻刺突文と貝殻条痕文を短く鋸歯状に施す土器で，本遺跡では全体の８％の出土量で３番目に多い。施文形態によりⅦa類とⅦb類に細分した。Ⅶa類には瘤状突起を施す土器もあるが，細分はしなかった。Ⅶb類土器は，沈線文と貝殻刺突文を施す土器であるが，施文構成はⅥ類土器と非常に類似している。分布はほぼⅥ類と重なるが，出土点数が64点と少ないために，Ⅵ類と同時期のものか，時間差があるものなのか分からない。

Ⅷ類土器は本遺跡で６点しか出土しておらず，小片ばかりで全体の器形ははっきりしない。施文形態の特徴から中原式土器に比定した。

Ⅸ類土器は，押型文土器で，出土点数は24点と少ない。出土状況（第142図）を見ると，Ⅸa類の山形押型文とⅨb類の楕円押型文の出土エリアが300m以上離れている。ただ，両エリアに数点ずつの山形押型文土器と，楕円押型文土器が混ざっている状況について解明するはに至らなかった。

Ｘ類土器は，出土点数が４点と非常に少なく，内３点を図化した。口縁部から胴部にかけての小片で，底部は出土していない。出土エリアは，Ⅸb類土器の出土付近で出土している。

Ⅺ類とⅫ類は合わせて９点の出土で口縁部から胴部の小片である。散在した状態で出土している。Ⅻ類は，塞ノ神A式の土器である。

ＸⅢ類は遺跡のほぼ中央で伏せた状態の完形で出土した。10m以内に遺構は全然なく，完形品１点だけという出土状況である。アカホヤ火山灰層の下位より出土しているため，早期後葉の土器として掲載した。

（２）石器

縄文時代早期石器の出土数数は1,438点で，334点を掲載している。このうち，77点が集石・石器集積から出土した遺構内遺物である。

本報告ではⅦ層を岩本式～押型文土器を包含する縄文時代早期前葉～中葉時期の層，Ⅵ層を手向山式～苦浜式を包含する縄文時代早期後葉の層として位置づけ掲載している。このため石器についても，出土した層別にⅦ層およびⅥ層石器として掲載した。

①出土状況と遺構・土器との関係について

剥片を含む石器のⅦ層の出土状況は，調査区西端の崖際から11区までのエリアが主で，竪穴建物跡１～24号までの範囲と重なり，数カ所の集中部が確認できる（第29～31図）。下剥峯式・桑ノ丸式土器の分布との重なりが大きく，この時代に最も多く製作・使用されている可能性が高い。そのほかには，33～40区に散見される。このエリアでは，Ⅶ層検出の集石が検出されており，加栗山式と小牧３Ａタイプの土器が分布している。

Ⅵ層の出土状況は１～25区までのエリアが主で，そのなかでも，８・11・12～15区にやや密に分布している。特に12～25区はⅦ層からの出土石器が極端に少なくなり，点数は少ないもののⅥ層からの出土が主体となる。同じエリアに竪穴建物跡27～38号が検出されている。本報告では，検出層・埋土の特徴・出土土器片の型式などからⅦ層段階の遺構として掲載したが，大型の長方形の平面プランの竪穴建物跡を中心とするエリアと，Ⅵ層石器の分布エリアが重なる可能性も考えられる出土状況である。集石も15～22区まではⅥ層検出のものが占めている。土器の分布は薄いエリアで，Ⅶ層段階の下剥峯式・桑ノ丸式，Ⅵ層段階の平椿式が散見される。

Ⅶ層段階では崖際のＥ～Ｇ－２・３区に黒曜石Ｃ類を中心とした剥片の集中部がみられ，黒曜石Ｃ類の石核も出土している（第29図）。竪穴建物跡近くの傾斜の緩やかな場所であり，石器製作の場であった可能性が高い。同様に竪穴建物跡近くに剥片の集中部がみられるエリアはＥ－10区（Ⅶ層段階），Ｃ・Ｄ－11区（Ⅵ層段階）にも存在している。

②遺物・石材について

石鏃はⅥ・Ⅶ層ともに約20点程出土しており，点数は少ない。各層ともに平基の石鏃・鍬形鏃の両方が出土している。鍬形鏃は押型文土器の時期以降のものである可能性が高いとされるが（長野1991・雨宮1991・堂込2020），層位的には大きな形態の差は確認できなかった。Ⅵ層出土石鏃S300・S303・S304には形態に特徴がみられる。S300は大久保型あるいは帖地型とよばれるもので（渡辺1997・長野1999・相美2004），草創期～石坂式土器に伴う可能性が指摘されている（堂込他2020）。本遺跡のⅥ層出土土器の年代観とは一致しないことになる。

遺跡では，層堆積が不安定な部分が存在することから，個別遺物の年代的位置づけについては慎重な判断が必要なものと考える。S304は脚部がへの字状に開き，尖端部が鋭く尖る特徴から塞ノ神式土器の時期の遺物である可能性が考えられるとされる（堂込2020）。S303は脚部の上部に２ケ所の突出がみられ，轟式などの条痕文土器に伴う例がみられる（堂込2020）ものである。磨製の石鏃も１点出土した（S306）が欠損により基部の形態は不明である。

他の精緻な加工を施した小型の剥片石器（以下：小型品）としては，石匙・石錐・スクレイパーなどが出土しており，石匙は２点ではあるがⅥ層からのみ出土する。竪穴建物跡23・24号からは，下剥峯式・桑ノ丸式土器片と共に，石鏃の製作途中で先端部をドリルに加工したものが出土している。ドリルについては，周辺の牧山遺跡・細山田段遺跡においても，縄文時代早期の層からドリルの出土が確認されるが，どちらも包含層からの出土である。両遺跡とも同じ層から年代幅の広い土器型式が出土していることから，どの段階に伴う遺物であるかは不明である。その状況下で下剥峯式・桑ノ丸式土器片と，竪穴建物跡埋土から共に出土した本遺跡の例には留意が必要である。

Ⅵ・Ⅶ層ともに，残核や剥片を二次的に加工・使用したもの，剥片の形状を活かして使用したものも少量出土している。用途不明の黒曜石Ｃ類製の半月状の異形石器もⅦ層から出土した。

小型石器の石材については，黒曜石Ｃ類が最も多く使用され，チャート・黒曜石Ａ類・玉髄の順となる。Ⅶ層とⅥ層で石材のバリエーションに大きな違いはないが，黒曜石Ｃ類とチャートはⅦ層段階に多い。それらの剥片類は製品数に比例するような状況で出土している（第32表，第40表）。石核の出土数は少ない。西北九州産産と思われる安山岩Ａ類については，石鏃・石匙などの製品のみがごく少量出土する。黒曜石Ｃ類のなかに腰岳産の特徴をもつものが含まれることを加味しても，西北九州系の石材の比率が少ない。周辺の牧山・細山田段・田原迫ノ上などの同時期の遺跡ではそれらの石材を使用した石器の比率が高いことが指摘されており，本遺跡の出土状況とは異なる。縄文時代早期の中でも，活動の主体となった時期の違いに帰因している可能性が考えられる。

頁岩・安山岩Ｂ類や硬質の砂岩を使用した粗製の大型のスクレイパー類については，明瞭な刃部形成が確認できる掻器・削器の総数８点全てを掲載している。Ⅶ層出土のものは形状が様々で，１点が円形の他は直線的な刃部を形成するのに対し，Ⅵ層出土のものはすべて横長剥片の縁辺部に丸みを帯びた刃部を形成したものである傾向がみられるが，資料点数が少ない。

本文中にも記載したが，ごく簡単な加工を施したり，軽微な使用痕跡がみられる頁岩Ｂ・安山岩Ｃ類製の剥片は，相対的にⅦ層の出土数が多い。近隣の牧山遺跡でも同様の輝石安山岩製の剥片が報告される。曽於市大隅町の定塚遺跡の報告書中では，安山岩製の剥片を素材とした「スクレイパー状石器」が，加工・使用痕の特徴から全７類に分類して報告され，詳細に使用痕が分析されている（2011，寒川）。また2013年に桑波田武志氏は，「確実に共伴事例が確認される最も古い事例は，定塚遺跡の前平式土器に伴う竪穴住居状遺構出土のもので，下限は，石峰遺跡（霧島市溝辺）の縄文前期に比定されている深浦・轟・春日式であり，最も共伴事例がおおいのは塞ノ神式土器である。」としている。本遺跡では土器の分布状況と重ねると，Ⅶ層段階では下剥峯・桑ノ丸式との，Ⅵ層段階では平栫式との共伴の可能性がある。なお，安山岩Ｃ製の剥片のなかには，被熱破砕痕をもつもの（S190・S329・S330）もみられ，寒川氏（2011）・桑波田氏（2013）が示唆した加熱による薄手の素材剥片の獲得が本遺跡でも行われていた可能性がある。肉眼による使用痕の観察を行ったが，使用の痕跡は総じてごく薄く，明瞭に二次加工・使用痕が確認できるものが非常に少なかった。Ⅵ層から出土したS326・S329・S333には同じような弧をえがくノッヂ状の抉りが形成されている。これらのことから，対象物が，使用痕跡を残しにくい柔らかいものであることや，同じような径の棒状のものであることが考えられる。今後類例資料を集成し，検討・検証をすすめる必要がある。

石斧については，伐採斧（Ⅰ－a，b類）が一定量出土した。欠損後の基部や刃部を打ち掻いて新たな刃部を形成したり，磨敲石に転用する傾向がみられる。特にⅥ層段階のものは，10点中８点が該当し，なかでもS334・S335は接合により，再利用の様子が観察できる。石斧に使用される蛇紋岩や硬質のホルンフェルスは串良川水系では獲得できなかった可能性が高く，希少な材質の石斧を破損後も転用し大切に使用した様子が窺える。また，刃部が薄い形状のⅡ類のものはⅦ層段階に，片面研磨で片刃のⅢ類と打製石斧のⅣ類はⅥ層段階に多い。円形の磨製石斧，バチ状の打製石斧はⅥ層にのみ出土した。

礫器については，Ⅶ・Ⅵ層共に掌で握りやすいサイズの，丸みのある形態のものが多いが，Ⅶ層からは，縦長の斧状のものも出土した。出土数は多く，Ⅶ層56点，Ⅵ層35点でありⅦ層段階で多く使用されている。

石錘は，Ⅶ層・Ⅵ層ともに出土し，砂岩・安山岩Ｂ類を使用したものが殆どである。Ⅶ層出土のものは楕円の短径を打ち掻いていたり，礫の自然の形状を活かしている傾向がみられた（S225 ～ S233）。対しⅥ層出土のものは全てが長径を打ち掻いて製作されており，Ⅶ層のものと比較して大ぶりである傾向がみられた。

砥石は，安山岩Ｂ類のなかでも緻密な素材や粒子がき

め細やかな砂岩を選択して使用している様子が窺えた。Ⅵ層出土のS376は磨製石斧の基部や刃部と擦面の凹みの幅が近いことからそれらの研磨に使用された可能性をもつ遺物であり，また，S377は下縁部の使用痕跡から擦切石器である可能性が高い。

石皿･台石及び磨敲石などの礫石器類については，Ⅶ･Ⅵ層ともに多量に出土しており，堅果類の加工を盛んに行っていた生業の様子が窺える。磨敲石の形状としては，正面・裏面と側面との境に稜を形成するいわゆる石鹸形のものが特に多く出土した。これらには，安山岩Ｂ類が圧倒的に多く使用されており，串良川で比較的容易に採取できる素材である。多孔質のものも多用される。Ⅵ層段階では国見山系の特徴をもつ花崗岩の使用頻度が高まり移動・交流圏の広がりが窺える。また，竪穴建物跡の埋土からも磨敲系の石器は多数出土した。道具としての使用後は集石の構成礫としても多用されている。さらに，Ⅵ層検出の石器集積３号の構成礫や，花崗岩製の磨敲石（S391）・石皿（S396）には赤色顔料の付着が確認され，これらは西端の崖際のエリアに集中して出土している。赤色顔料の精製等に用いられた可能性がある。また，見晴らしのよい場所であったことが想定され，祭祀的な行為に依る可能性も考えられる。

生活道具としての使用が想定される石器の出土状況は以上であるが，これらのほかにも装飾品や祭祀に使用された可能性のあるものとして，玦状耳飾片（S250）・用途不明の磨製の石器（S234）・舟形や，溝のある軽石製品（S089・S249・S397）などが出土している。

③石器からみた小牧遺跡早期の様相

伐採斧の出土から，住居用などの木材加工を行っていたことが窺え，堅果類の加工に使用したと思われる磨敲系の石器が竪穴建物跡からも多く出土していることから定住性の高さが考えられる。剥片石器の加工も行ってはいるが，剥片・石核・石鏃未製品の少なさから，狩猟具の製作を集中的には行っていないことが推測できる。石錘を漁労具であるとするならば，串良川近くである地の利を活かし，Ⅶ層の時期から漁労活動を行っていたことも想定される。また，竪穴建物跡の床付近と包含層から舟形の軽石加工品が出土していることからも川との関わりの深さを測り知ることができる。

当時の小牧遺跡が，豊かな森と川の恩恵を受け，定住に適した場所であったことが窺える石器の出土状況であるといえる。



写真15　集石46号東側より

【引用参考文献】

桑波田武士2003「鹿児島県のナイフ形石器文化後半期の研究」『鹿児島考古』第38号

桑波田武士2004「ナイフ形石器文化後半期における南九州の狩猟具的様相」『九州旧石器』第８号

佐野勝宏2020「秋田県縄手下遺跡出土石器の使用痕分析」『石器痕跡研究の理論と実践』同成社

長野眞一1996「第７章　まとめ」『小牧３Ａ遺跡・岩本遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（15）

長野眞一2003「鹿児島県における槍先形尖頭器の出現と消滅」『九州旧石器』第７号

長野眞一2004「鹿児島県における調査成果の現状と課題」『九州旧石器』第８号

馬籠亮道2011「南九州における角錐状石器の製作技術について」『九州旧石器』第15号

馬籠亮道2013「南九州における瀬戸内技法関連資料の評価」『九州旧石器』第18号

御堂島正2015「石器の稜線に形成される摩滅」『鴨台史学』第13号大正大学史学会

御堂島正2016「黒曜石製石器の着柄痕跡に関する予備的研究」『旧石器研究』12　日本旧石器学会

御堂島正2017「使用痕跡分析を越えて－石器の総合的痕跡分析の試験的適用」『理論考古学の実践１理論編』同成社

御堂島正・堤隆2019「石器痕跡分析の有効性－ブラインドテストによる研究－」『旧石器研究』15　日本旧石器学会

宮田栄二2002「南九州ナイフ形石器文化集団領域に関する予察－西丸尾遺跡を残した集団の活動領域と移動－」『九州旧石器』第６号

宮田栄二2006「剥片尖頭器石器群とその前後の石器群について」『縄文の森から』第４号

吉留秀敏1994「九州の瀬戸内技法を含む石器組成」『瀬戸内技法とその時代』　中・四国旧石器文化談話会

吉留秀敏2002「九州における剥片尖頭器の出現と展開」『九州旧石器』第６号

寒川朋枝2011「鹿児島県定塚遺跡出土スクレイパー状石器の使用痕分析」『九州旧石器』

堂込秀人2020「縄文時代早期の石鏃の編年について」『遺跡学研究の地平－吉留秀敏論文集－』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会

冨樫泰時「秋田県大湯遺跡」小林達雄1995「縄文時代における自然の社会化」　雄山閣

小林達雄1999「縄文人の文化力」　新書館

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書1996『小牧３Ａ遺跡・岩本遺跡』（15）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書2001『上野原遺跡第10地点』（28）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書2002『上野原遺跡第２～７地点』（41）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書2006『三角山遺跡群（3）』（96）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書2010『定塚遺跡・稲村遺跡』（153）

（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書2015『天神段遺跡１』発掘調査報告書（3）

（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書2016『町田堀遺跡』（7）

（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書2017『永吉天神段遺跡２　第２地点－１』（13）

（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書2017『牧山遺跡１』（14）

（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書2017『田原迫ノ上遺跡２』（15）

（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書2017『立小野堀遺跡１』（16）

（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書2019『細山田段遺跡１』（25）

（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書2020『牧山遺跡２』（30）

（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書2020『川久保遺跡２　Ｂ・Ｄ地点』（31）

串良町教育委員会2005『益畑遺跡』串良町埋蔵文化財発掘調査報告書（11）

輝北町教育委員会2005『新田遺跡・吉元遺跡』輝北町埋蔵文化財調査報告書（2）

角館市教育委員会2009『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書』（25）

曽於郡大崎町役場1975『大崎町史』

東串良郷土誌編纂委員会1980『東串良町郷土誌』

串良町郷土誌編纂委員会1973『串良町郷土誌』

図　版









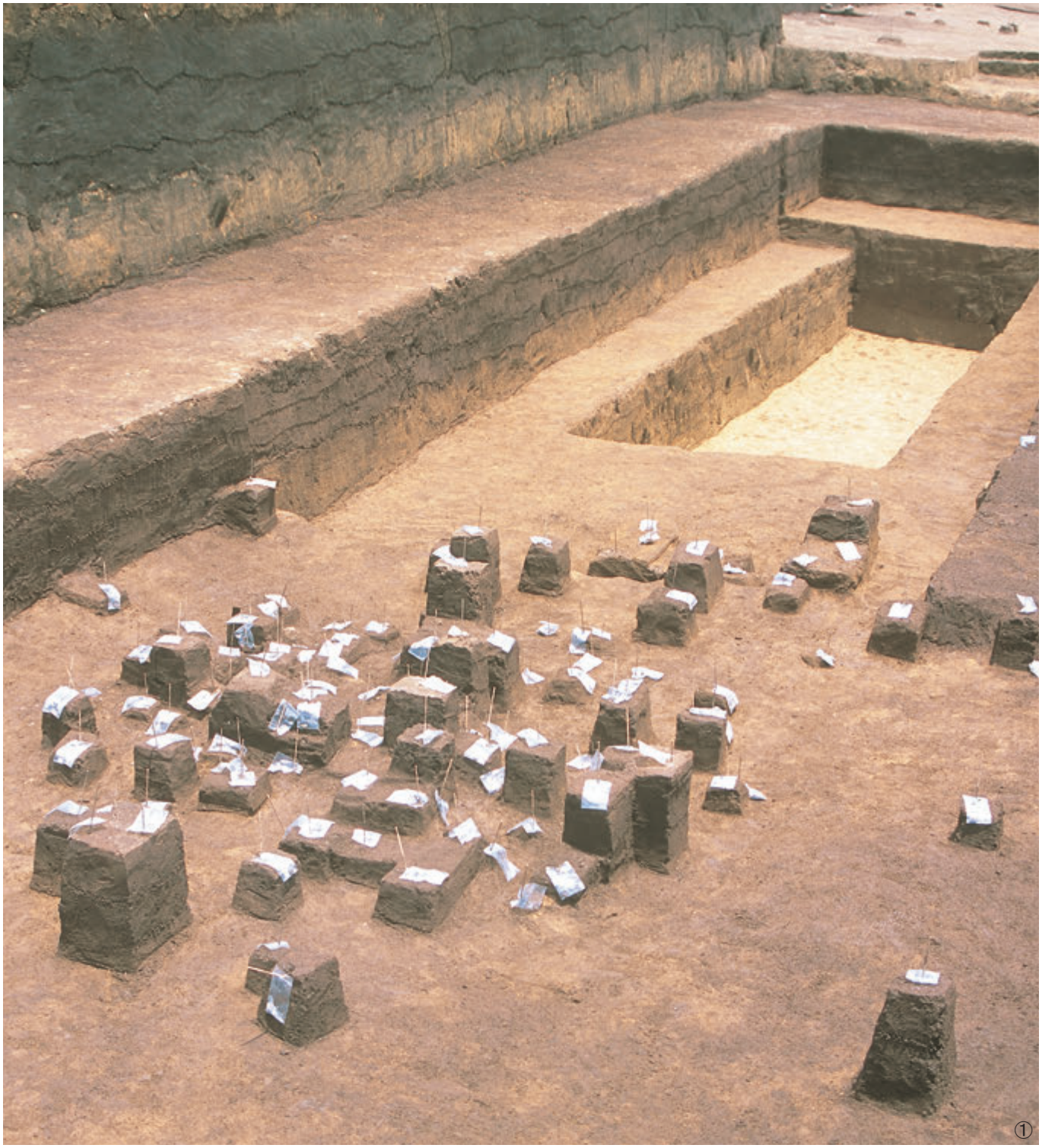
①小牧遺跡遠景（串良川左岸に小牧遺跡，右岸に川久保遺跡，志布志湾と国見山系を望む）
②Ｂ－３区南壁断面　③Ｂ・Ｃ－29区東壁断面　④Ｅ－１～５区北壁断面（工事による掘削によって現れたシラスまでの断面）

図版2





①B～D－27～29区Ⅺ層～Ⅻ層遺物出土状況
②C－28区Ⅻ層剥片出土状況







①Ｆ－32・33区Ⅸｂ～Ⅹ層遺物出土状況
②，③Ｆ－31区Ⅹ層上面遺物出土状況

図版4





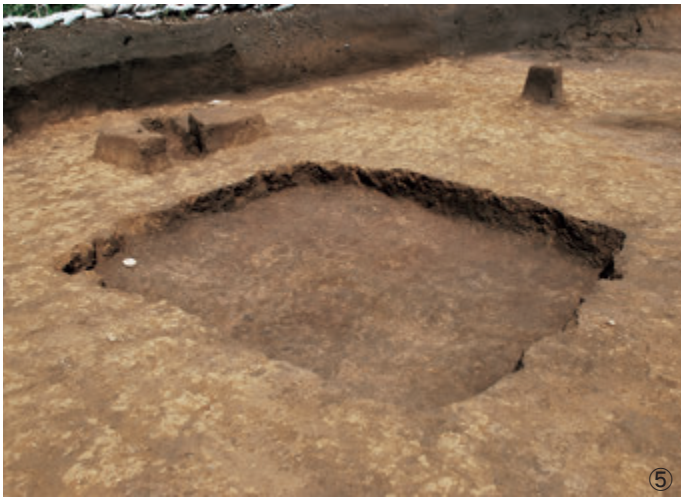
①Ｅ－30区区層遺物出土状況
②Ｅ・Ｆ－29・30区区層遺物出土状況











①竪穴建物跡１号，３号検出状況及び遺物出土状況　②竪穴建物跡１号検出状況　③竪穴建物跡１号完掘状況
④竪穴建物跡３号土層断面　⑤竪穴建物跡３号完掘状況

図版6













①竪穴建物跡２号検出状況　②竪穴建物跡２号断面　③竪穴建物跡２号完掘状況
④竪穴建物跡４号検出状況　⑤竪穴建物跡４号断面　⑥竪穴建物跡４号完掘状況











①竪穴建物跡８号完掘状況　②竪穴建物跡８号検出状況　③竪穴建物跡８号断面
④竪穴建物跡５号完掘状況　⑤竪穴建物跡５号検出状況

図版8









①竪穴建物跡６号，７号検出状況　②竪穴建物跡６号断面　③竪穴建物跡６号遺物出土状況
④竪穴建物跡６号，7号完掘状況

















①竪穴建物跡７号検出状況　②竪穴建物跡７号断面　③竪穴建物跡７号遺物出土状況　④竪穴建物跡７号完掘状況
⑤竪穴建物跡９号検出状況　⑥竪穴建物跡９号断面　⑦竪穴建物跡９号遺物出土状況　⑧竪穴建物跡９号完掘状況

図版10









①竪穴建物跡10号遺物出土状況　②竪穴建物跡10号検出状況　③竪穴建物跡10号断面
④竪穴建物跡10号完掘状況（奥から竪穴建物跡11号，12号）











①竪穴建物跡12号完掘状況　②竪穴建物跡12号検出状況　③竪穴建物跡12号断面１
④竪穴建物跡12号土層断面２　⑤竪穴建物跡12号断面及び土坑１号断面

図版12















①竪穴建物跡11号検出状況　②竪穴建物跡11号断面　③竪穴建物跡11号完掘状況
④竪穴建物跡13号検出状況　⑤竪穴建物跡13号断面　⑥竪穴建物跡13号遺物出土状況　⑦竪穴建物跡13号完掘状況













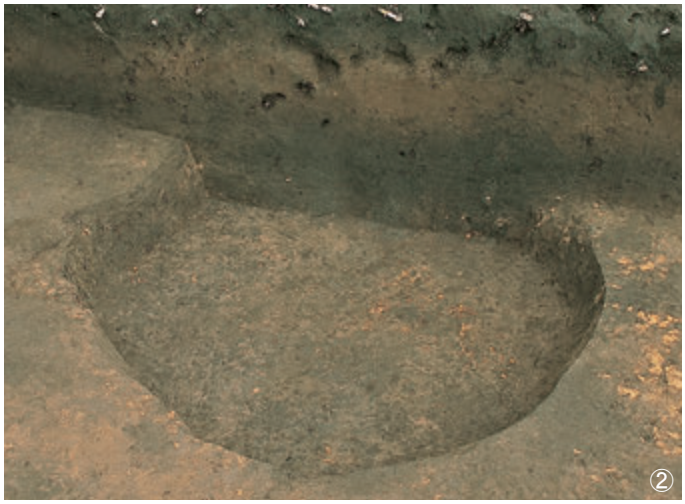


①竪穴建物跡14号断面　②竪穴建物跡14号完掘状況　③竪穴建物跡15号断面　④竪穴建物跡15号完掘状況（奥に14号）
⑤竪穴建物跡16号検出状況　⑥竪穴建物跡16号断面　⑦竪穴建物跡16号完掘状況（奥に17号）

図版14


①


⑤


②


⑥


③


⑦


④

①竪穴建物跡17号検出状況　②竪穴建物跡17号調査状況　③竪穴建物跡17号完掘状況　④竪穴建物跡17号断面
⑤竪穴建物跡18号検出状況　⑥竪穴建物跡18号断面　⑦竪穴建物跡18号完掘状況











①竪穴建物跡19号断面　②竪穴建物跡19号完掘状況
③竪穴建物跡20号検出状況　④竪穴建物跡20号断面　⑤竪穴建物跡20号完掘状況

図版16





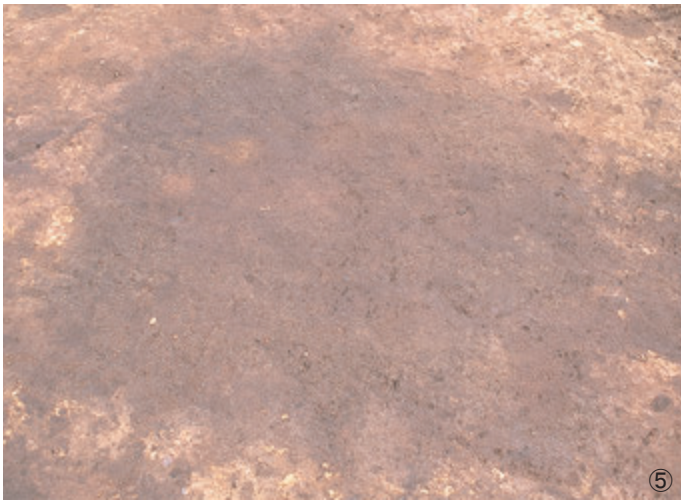






①竪穴建物跡21号，22号検出状況　②竪穴建物跡21号，22号断面　③竪穴建物跡21号，22号断面
④竪穴建物跡21号，22号断面　⑤竪穴建物跡21号，22号完掘状況















①竪穴建物跡25号検出状況　②竪穴建物跡25号断面　③竪穴建物跡25号遺物出土状況　④竪穴建物跡25号完掘状況
⑤竪穴建物跡26号検出状況　⑥竪穴建物跡26号断面　⑦竪穴建物跡26号遺物出土状況及び完掘状況

図版18











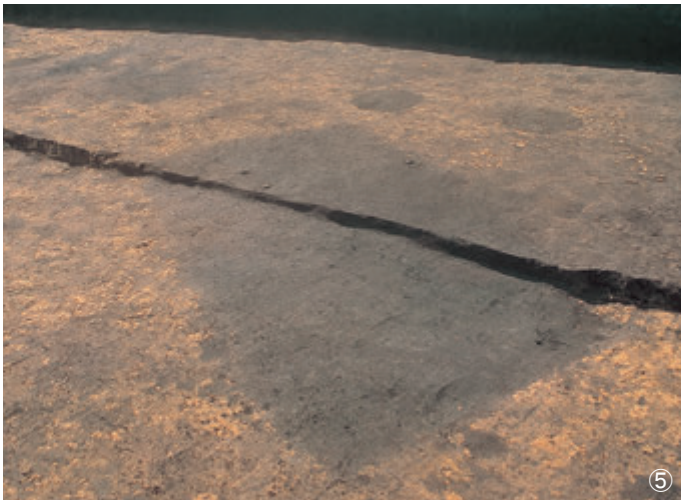






①竪穴建物跡23号，24号検出状況　②，③竪穴建物跡23号，24号断面　④竪穴建物跡23号，24号完掘状況
⑤竪穴建物跡27号，28号検出状況　⑥，⑦竪穴建物跡27号，28号断面　⑧竪穴建物跡27号，28号完掘状況

















①竪穴建物跡30号検出状況　②，③竪穴建物跡30号断面　④竪穴建物跡30号完掘状況
⑤竪穴建物跡31号検出状況　⑥，⑦竪穴建物跡31号断面　⑧竪穴建物跡31号完掘状況

図版20


①


②


③


④


⑤


⑥


⑦

①竪穴建物跡29号検出及び遺物出土状況　②竪穴建物跡29号完掘状況　③竪穴建物跡34号断面　④竪穴建物跡34号完掘状況
⑤竪穴建物跡32号検出状況　⑥竪穴建物跡32号断面　⑦竪穴建物跡32号完掘状況









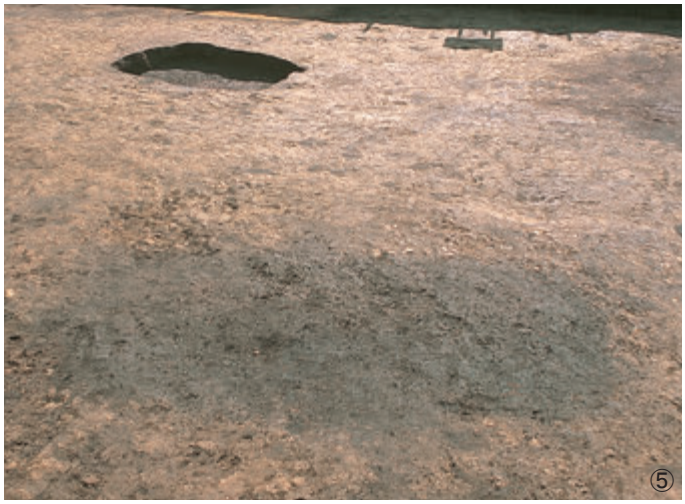


①竪穴建物跡33号，34号，37号検出状況　②竪穴建物跡33号断面　③竪穴建物跡33号完掘状況
④竪穴建物跡37号断面　⑤竪穴建物跡37号完掘状況

図版22















①竪穴建物跡35号，36号完掘状況　②竪穴建物跡35号検出状況　③竪穴建物跡35号断面　④竪穴建物跡35号完掘状況
⑤竪穴建物跡36号検出状況　⑥竪穴建物跡36号断面　⑦竪穴建物跡36号完掘状況











①竪穴建物跡33号，34号，35号，36号，37号，38号検出状況
②竪穴建物跡38号検出状況　③，④竪穴建物跡38号断面　⑤竪穴建物跡38号完掘状況

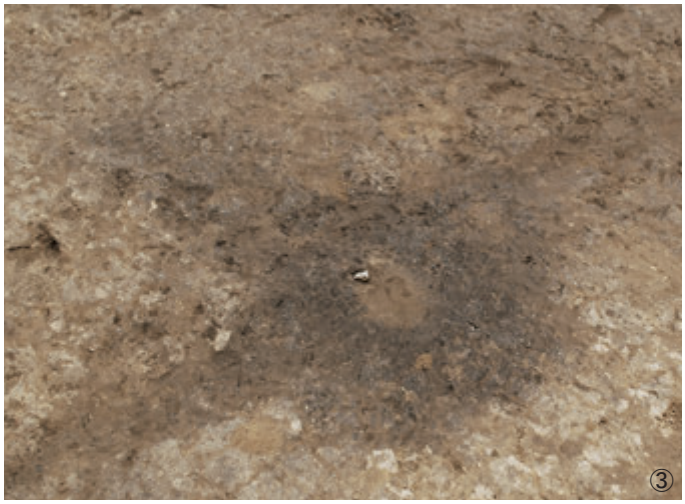
図版24











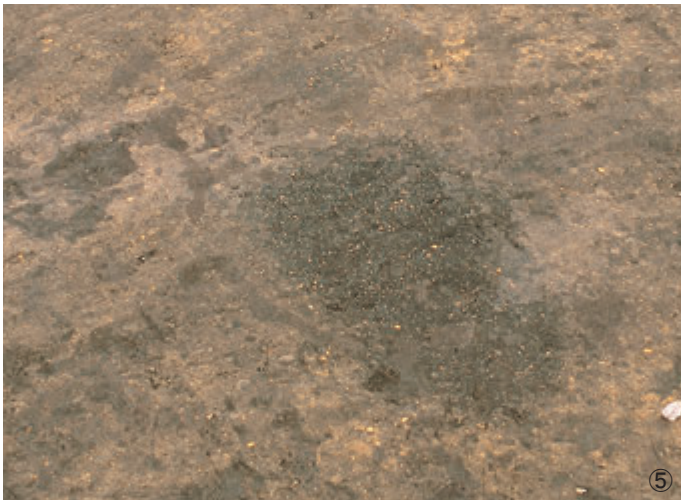






①連穴土坑１号と竪穴建物跡３号　②連穴土坑１号断面　③連穴土坑２号検出状況　④連穴土坑２号完掘状況
⑤連穴土坑３号検出状況　⑥連穴土坑３号完掘状況　⑦連穴土坑４号断面　⑧連穴土坑４号完掘状況


①


⑤


②


⑥


③


⑦


④

①連穴土坑５号検出状況　②連穴土坑５号断面　③連穴土坑６号断面　④連穴土坑６号完掘状況
⑤連穴土坑７号検出状況　⑥連穴土坑７号断面　⑦連穴土坑７号完掘状況

図版26

















①土坑２号，３号断面　②土坑２号，３号完掘状況　③土坑４号検出状況　④土坑４号完掘状況
⑤土坑５号断面　⑥土坑５号完掘状況　⑦土坑６号検出状況　⑧土坑６号完掘状況（奥に土坑５号）

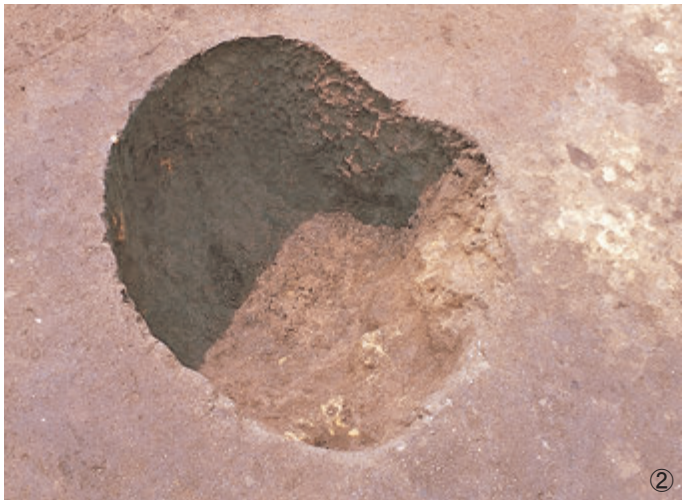


①土坑７号断面　②土坑７号完掘状況　③土坑８号断面　④土坑８号完掘状況
⑤土坑９号検出状況　⑥土坑９号完掘状況　⑦土坑９号断面　⑧土坑９号完掘状況

図版28

















①土坑12号断面　②土坑12号完掘状況　③土坑13号断面　④土坑13号完掘状況
⑤土坑14号断面　⑥土坑14号完掘状況　⑦土坑15号，16号断面　⑧土坑15号，16号完掘状況

















①土坑17号断面　②土坑17号完掘状況　③土坑18号断面　④土坑18号完掘状況
⑤土坑19号断面　⑥土坑19号完掘状況　⑦土坑20号，21号検出状況　⑧土坑20号，21号完掘状況

図版30

















①集石１号検出状況　②集石２号検出状況　③集石４号検出状況　④集石５号検出状況
⑤集石６号検出状況　⑥集石７号検出状況　⑦集石８号検出状況　⑧集石10号検出状況

















①集石11号検出状況　②集石12号検出状況　③集石13号検出状況　④集石14号検出状況
⑤集石15号検出状況　⑥集石16号検出状況　⑦集石17号検出状況　⑧集石18号検出状況

図版32

















①集石19号検出状況　②集石20号検出状況　③集石21号検出状況　④集石22号検出状況
⑤集石23号検出状況　⑥集石24号検出状況　⑦集石25号検出状況　⑧集石26号検出状況

















①集石27号検出状況　②集石28号検出状況　③集石29号検出状況　④石器集積１号検出状況
⑤集石30号検出状況　⑥集石31号検出状況　⑦集石32号検出状況　⑧石器集積２号検出状況

図版34

















①集石33号検出状況　②集石34号検出状況　③集石35号検出状況　④集石37号検出状況
⑤集石36号検出状況　⑥集石36号掘込完掘状況　⑦集石38号検出状況　⑧集石39号検出状況


①


⑤


②


⑥


③


⑦


④


⑧

①集石40号検出状況　②集石41号検出状況　③集石42号検出状況　④集石43号検出状況
⑤集石44号検出状況　⑥集石45号検出状況　⑦集石46号検出状況　⑧集石47号検出状況

図版36















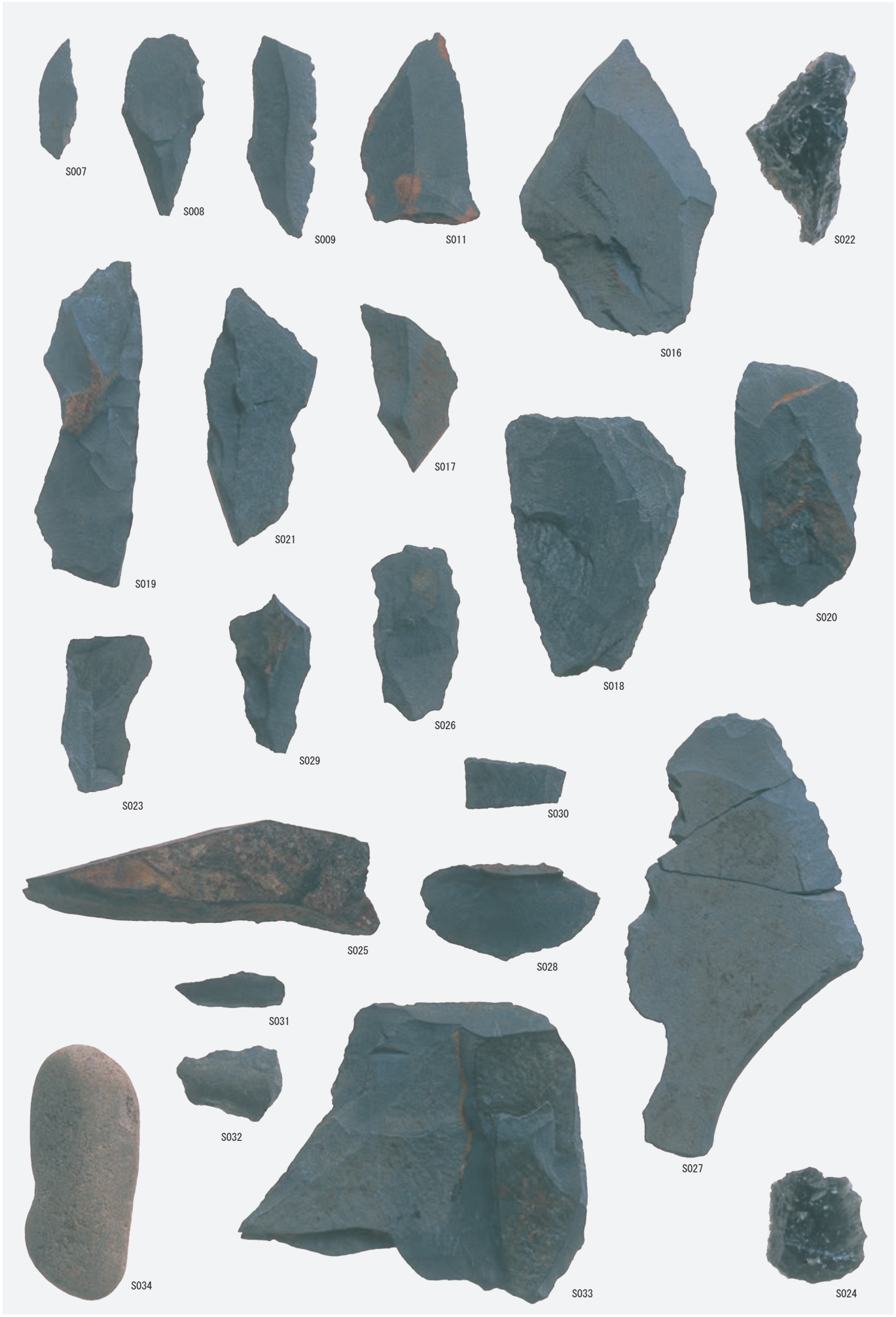


①集石48号検出状況　②集石49号検出状況　③石器集積３号検出状況　④Ⅲ類土器出土状況
⑤集石50号検出状況　⑥集石51号検出状況　⑦石器集積４号検出状況　⑧森脇広氏現地指導

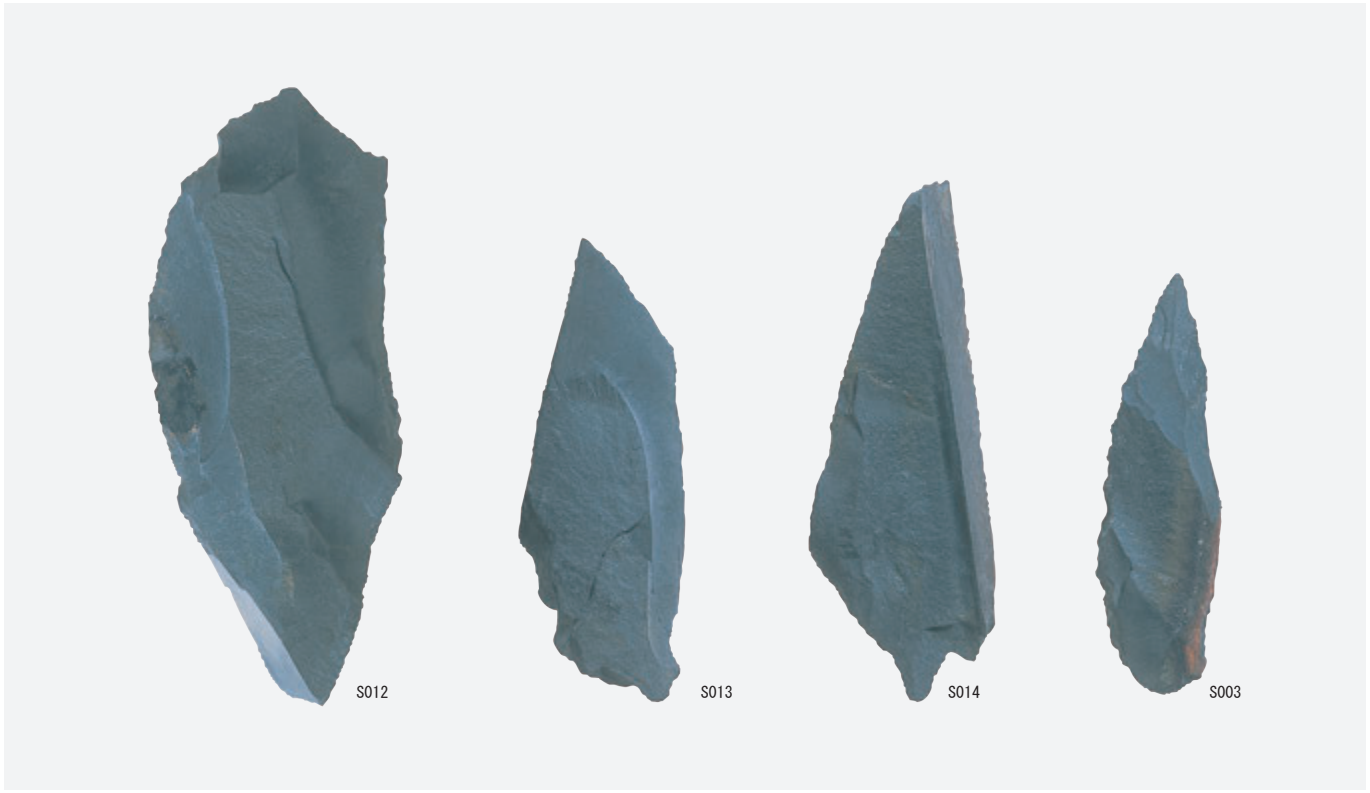


旧石器時代第Ⅰ文化層出土石器（１）

図版38

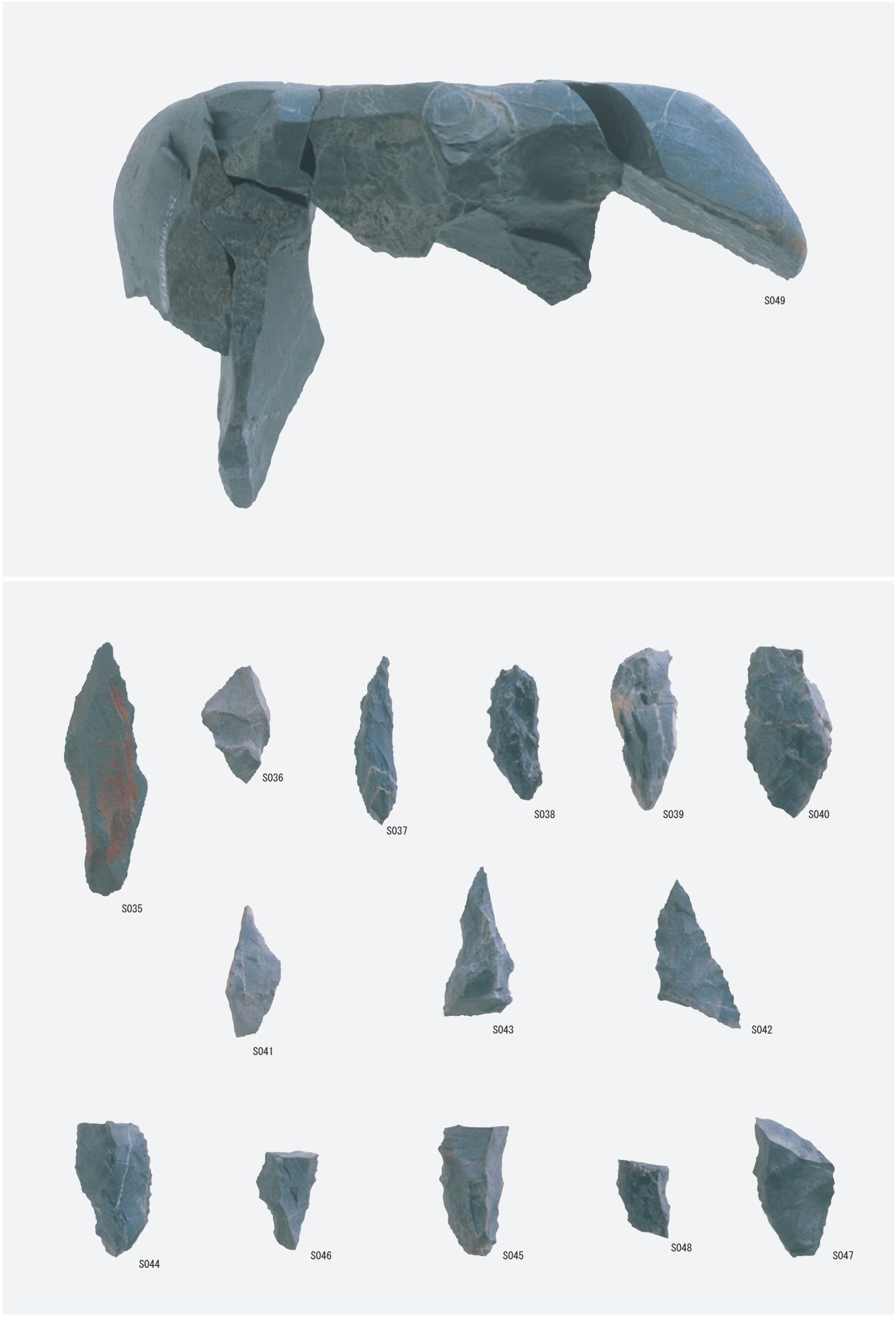


旧石器時代第Ⅰ文化層出土石器（２）





旧石器時代第Ⅰ文化層出土石器（３）及び剥片集中１出土状況



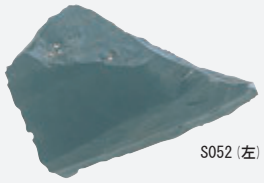
旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器（１）（上段　接合資料）





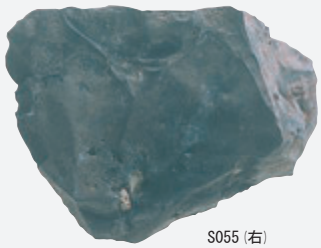
旧石器時代第Ⅱ文化層出土石器（２）（下段　非掲載遺物）

図版42


S052（左）


S053（右）

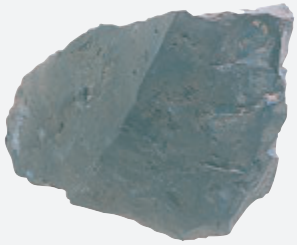

S054（右）


S055（右）


S052（正）


S053（正）


S054（正）


S055（左）

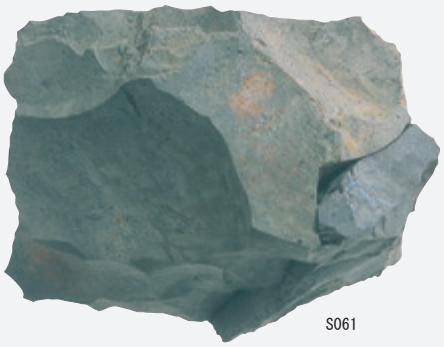

S056


S057


S058

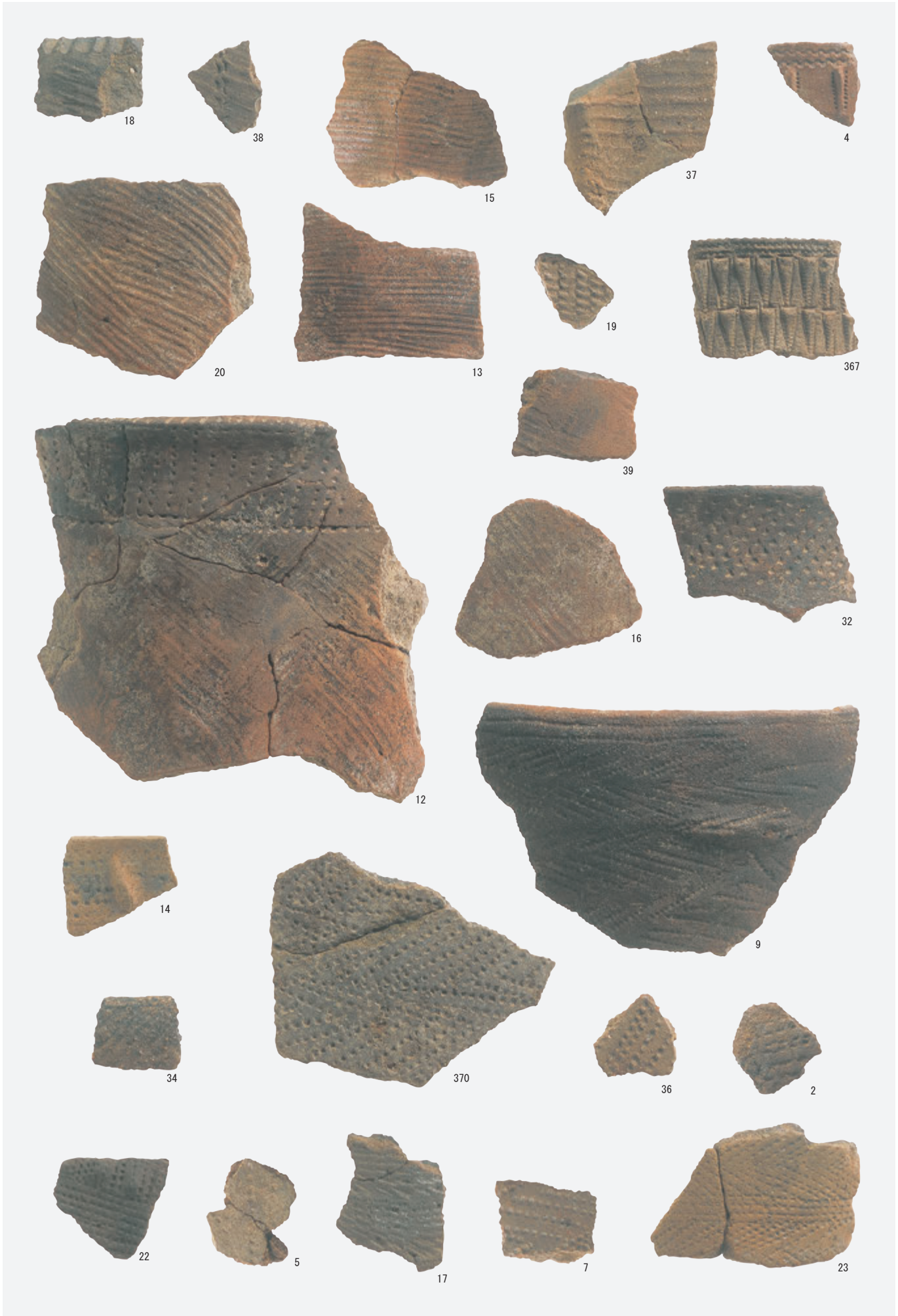

S060


S059


S061


S064
S063
S062

旧石器時代第Ⅲ文化層出土石器及びブロック外出土石器



Ⅶ層遺構内出土遺物（１）

図版44



Ⅶ層遺構内出土遺物（２）



S094



S090



S070



S107



Ⅶ層遺構内出土遺物（３）

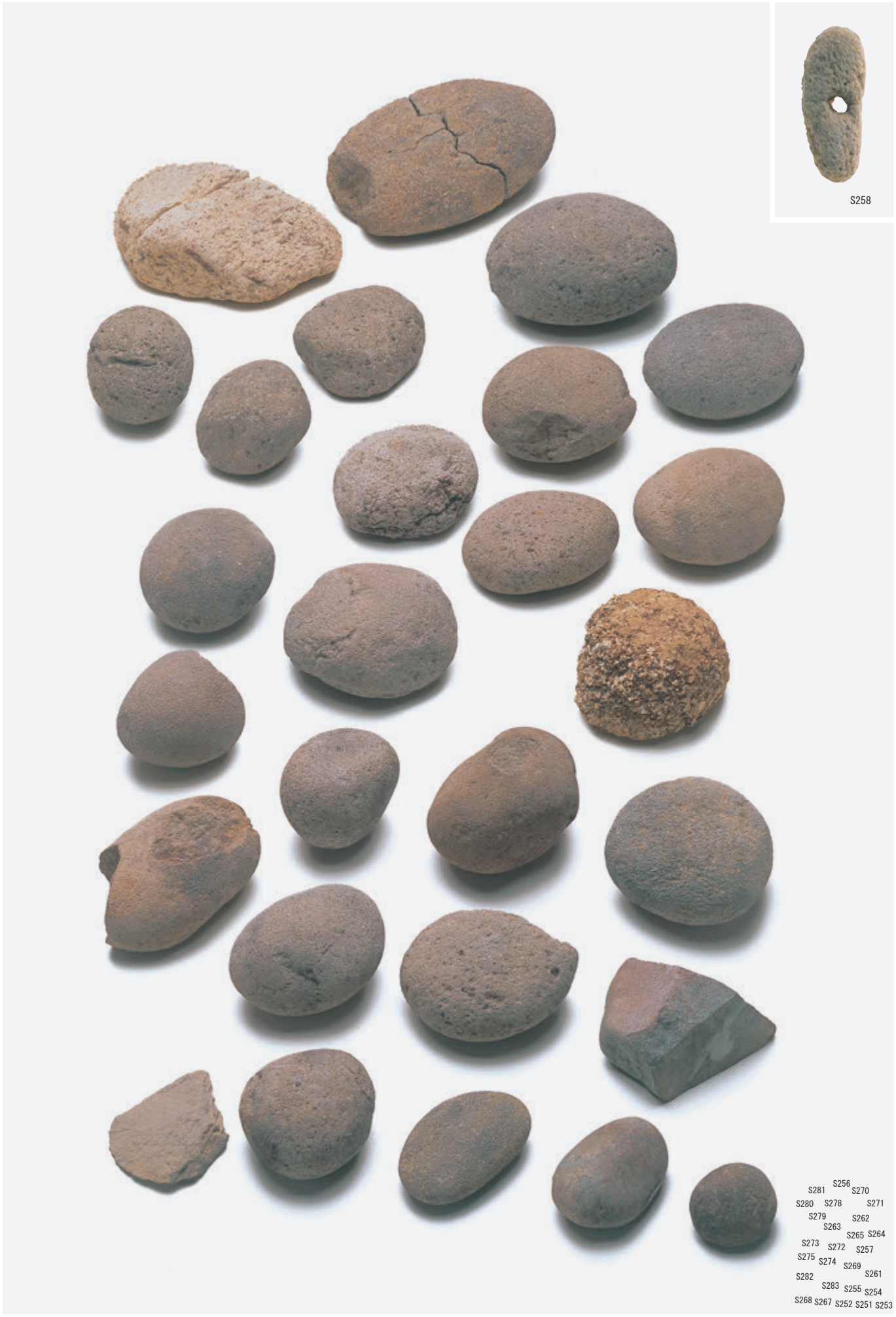

S111
S138
S112
S110
S131
S114
S130
S115
S129
S113
S135
S117
S134
S133
S137
S139
S136
S122
S125
S119
S123
S121
S118
S120

Ⅶ層遺構内出土遺物（４）





Ⅶ層遺構内出土遺物（５）・Ⅵ層遺構内出土遺物（１）


S258
S256
S281
S270
S280
S278
S271
S279
S262
S263
S265
S264
S273
S272
S257
S275
S274
S269
S261
S282
S283
S255
S254
S268
S267
S252
S251
S253

Ⅵ層遺構内出土遺物（２）



Ⅰ類・Ⅱ類土器

図版50

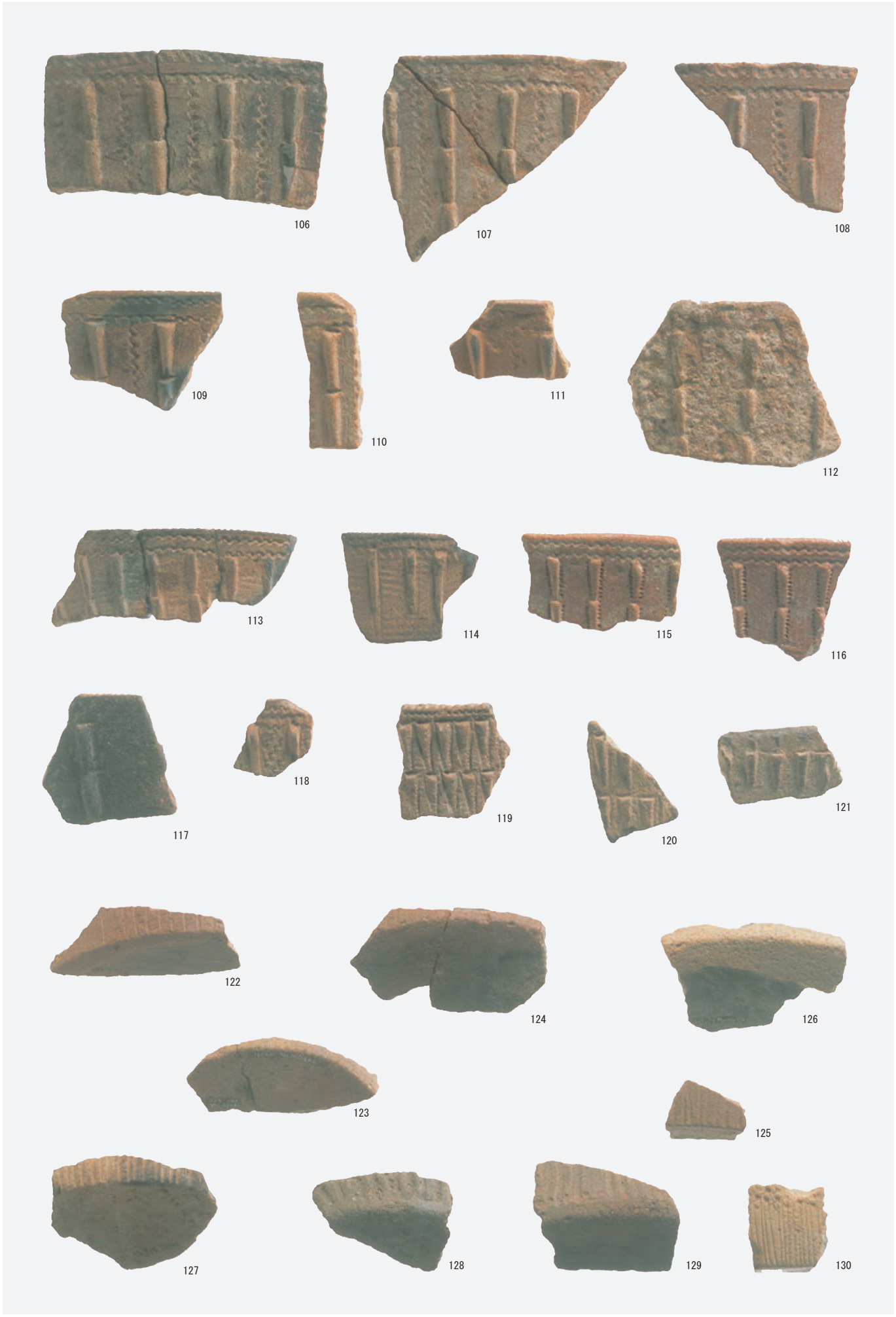


Ⅲａ類・Ⅲｂ類土器



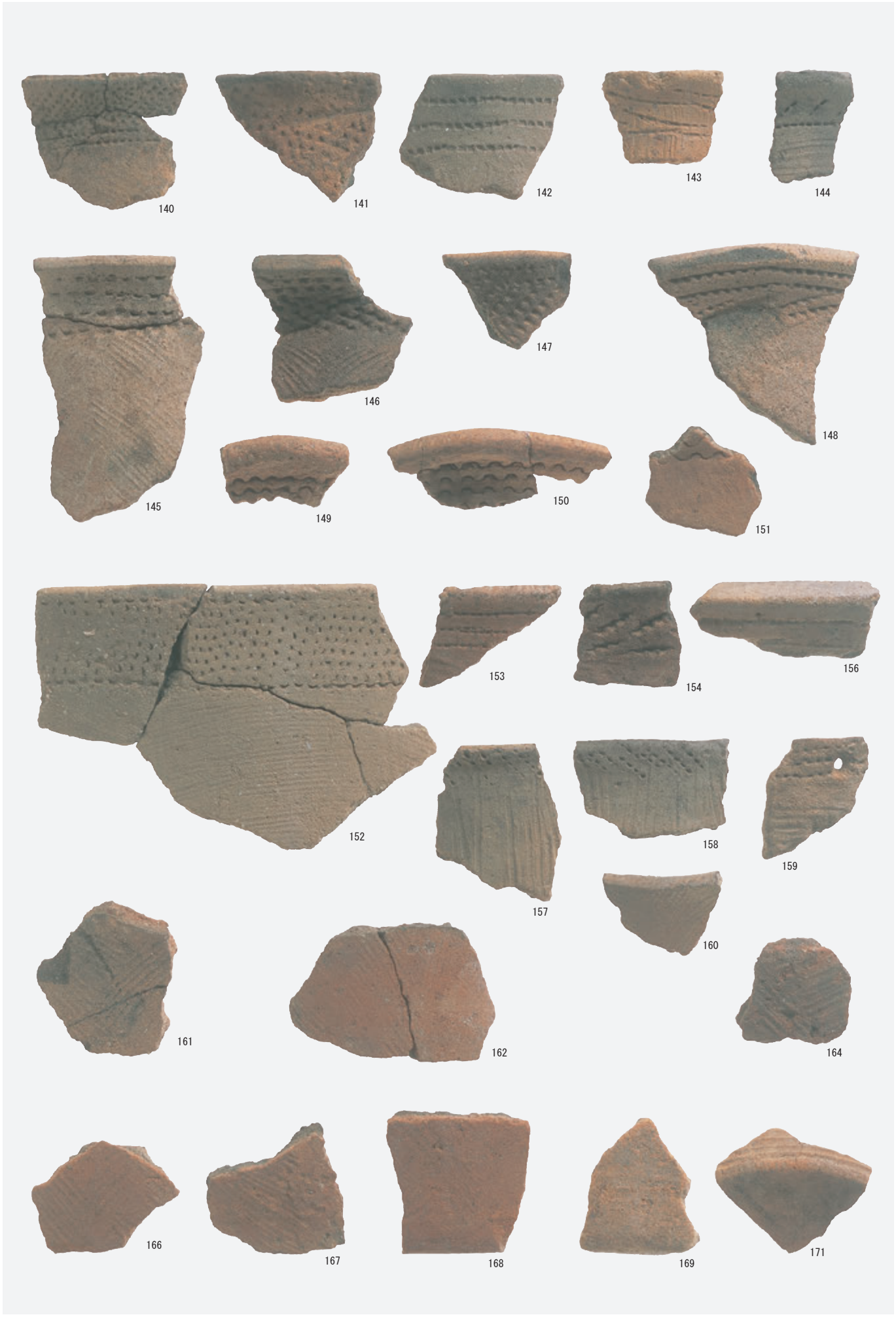
Ⅲｃ類土器

図版52

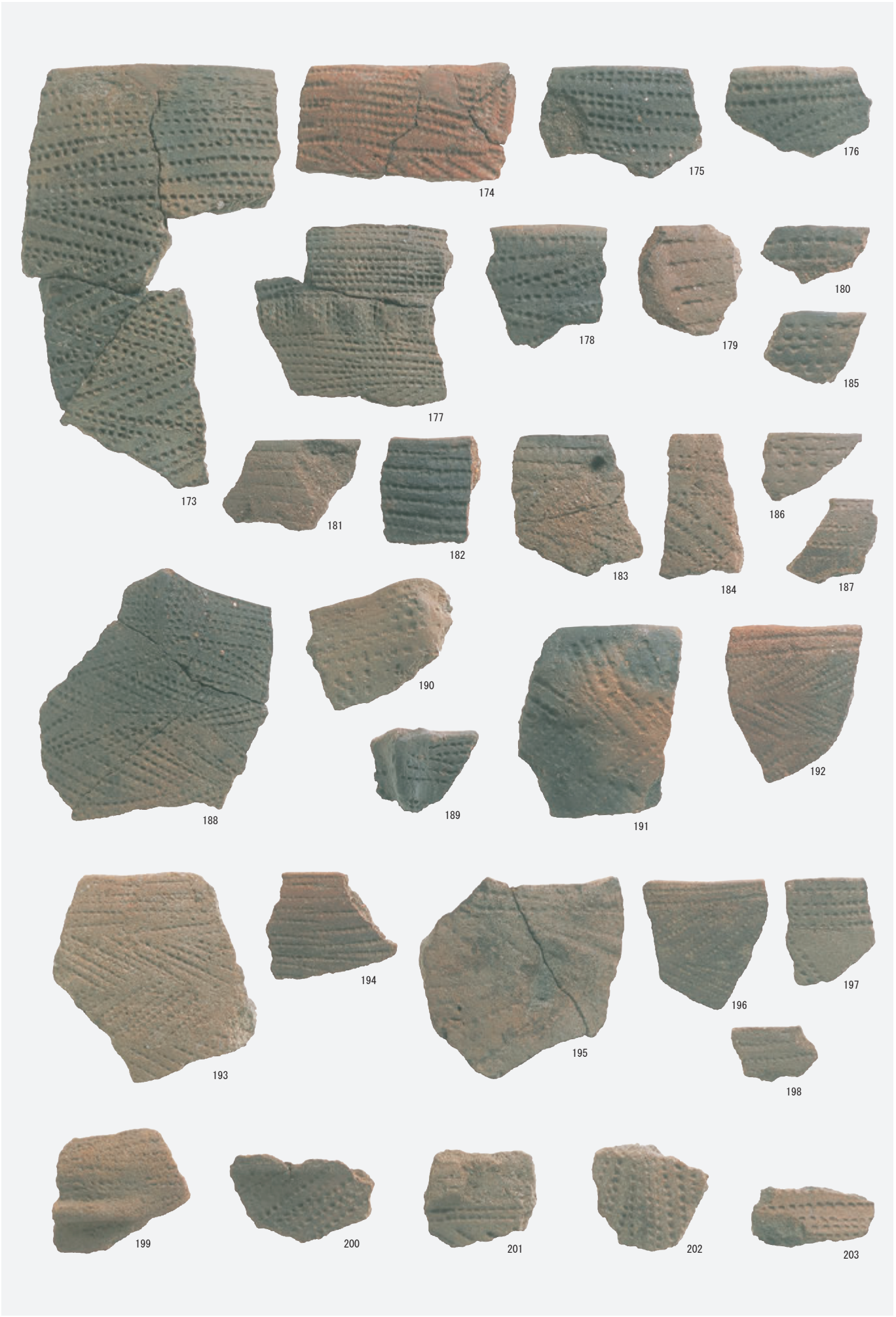

106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130

Ⅲｄ類土器


133
131
132
134
135
137
136
138
139


140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
156
157
158
159
160
161
162
164
166
167
168
169
171

V類土器

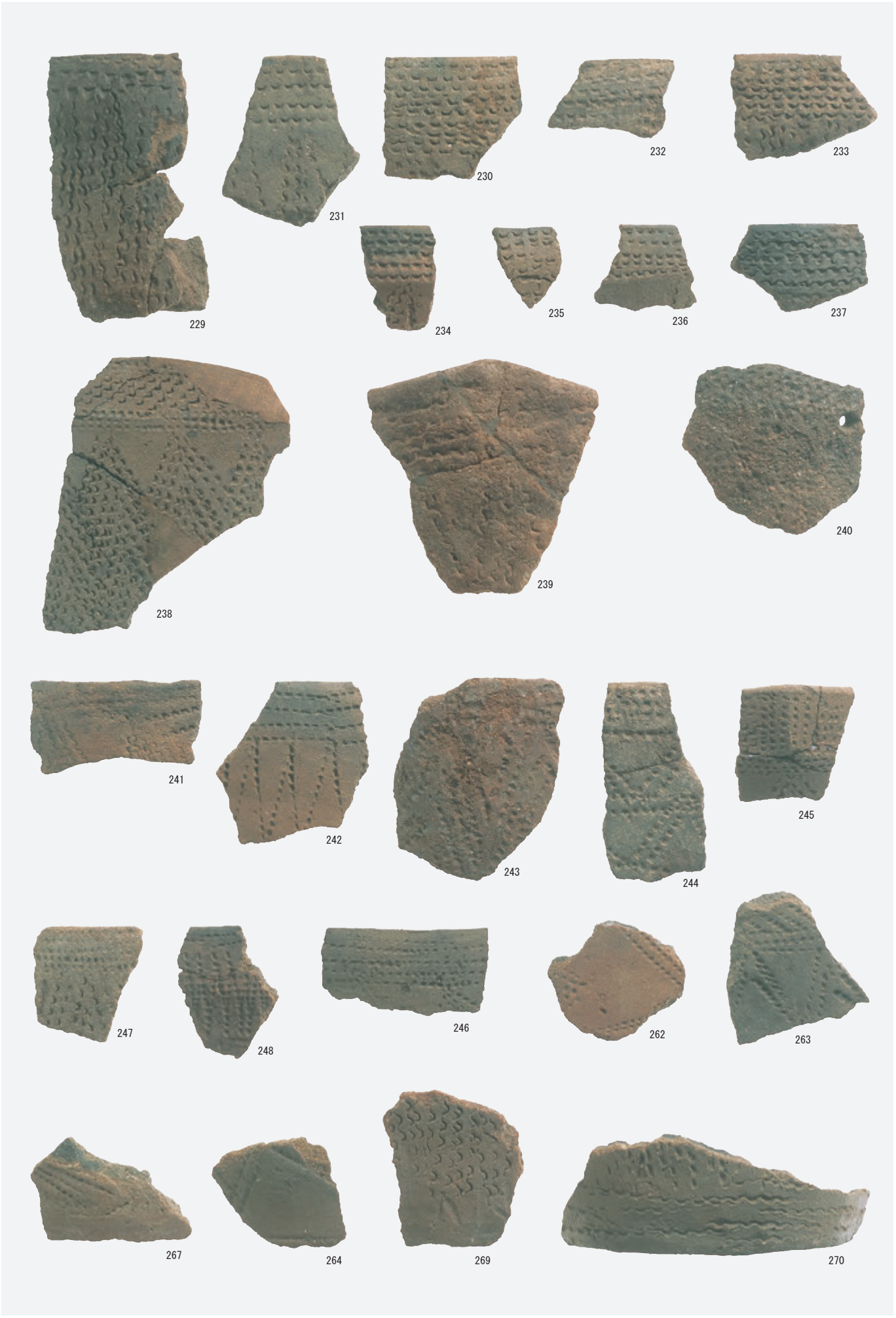

173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203

VI a 類土器（１）

図版56


204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228

Ⅵａ類土器（２）


229
231
230
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
247
248
246
262
263
267
264
269
270

Ⅵｂ類土器

図版58



VI b 類～VI e 類土器


303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339

Ⅶａ類・Ⅶｂ類土器

図版60



Ⅷ類～Ⅸｂ類土器


371


372


373


374


375


376


377


379

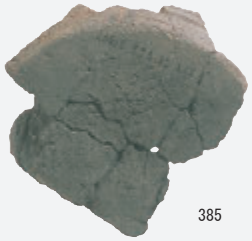

380


378

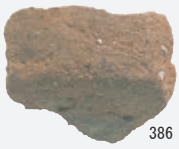

381


382


384


385


383


386


387


388


389

X類～XⅣ類土器

図版62



Ⅶ層出土石器（１）

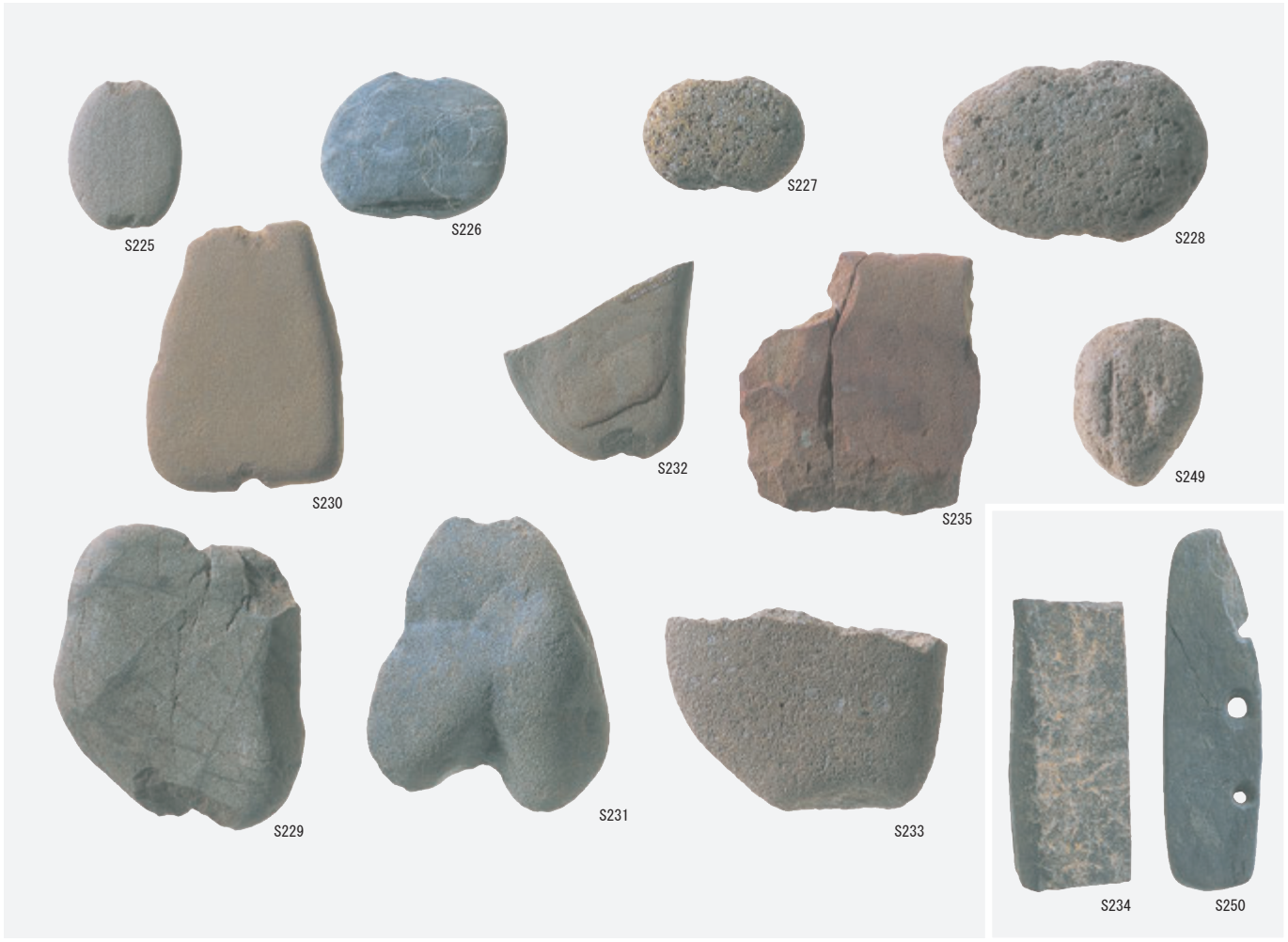


Ⅶ層出土石器（２）


S195
S193
S202
S200
S196
S201
S197
S199
S211
S212
S203
S213
S209
S204
S210
S208
S198
S207
S206
S192
S205
S194

Ⅶ層出土石器（３）


S216
S220
S222
S218
S224
S223
S217
S219
S221
S215
S214


S225
S226
S227
S228
S230
S232
S235
S249
S229
S231
S233
S234
S250

Ⅶ層出土石器（４）

図版66

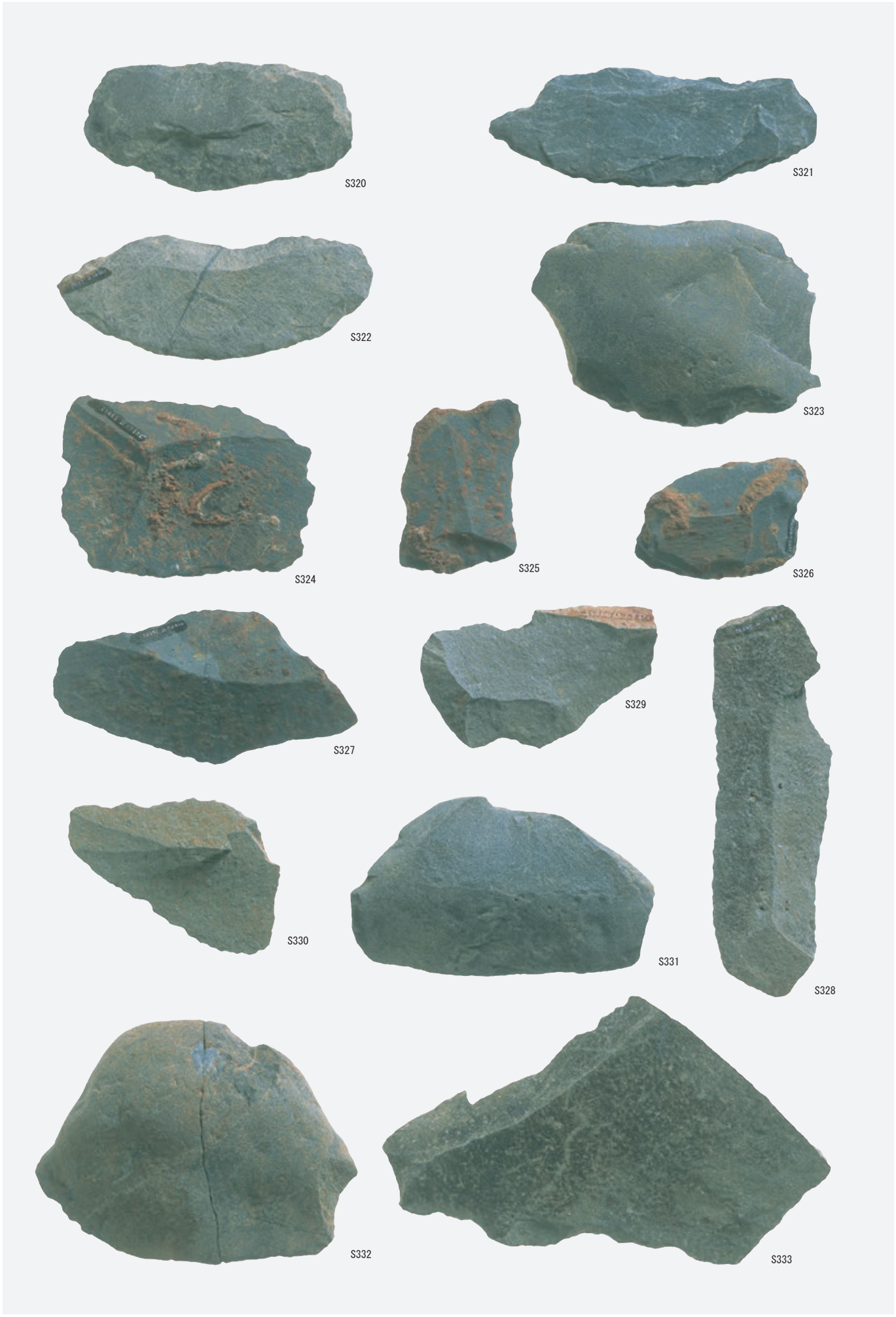


Ⅶ層出土石器（５）


S293
S294
S295
S296
S297
S298
S299
S300
S301
S302
S303
S304
S305
S306
S307
S308
S309
S310
S311
S312
S313
S314
S315
S316
S317
S318
S319

VI層出土石器（１）

図版68



Ⅵ層出土石器（２）


S342
S341
S339
S340
S343
S362
S335
S334
S338
S361
S363
S353
S337
S357
S360
S336
S358
S359
S356
S349
S354
S348
S345
S355
S350
S352
S344
S351
S346
S347

VI層出土石器（３）

図版70



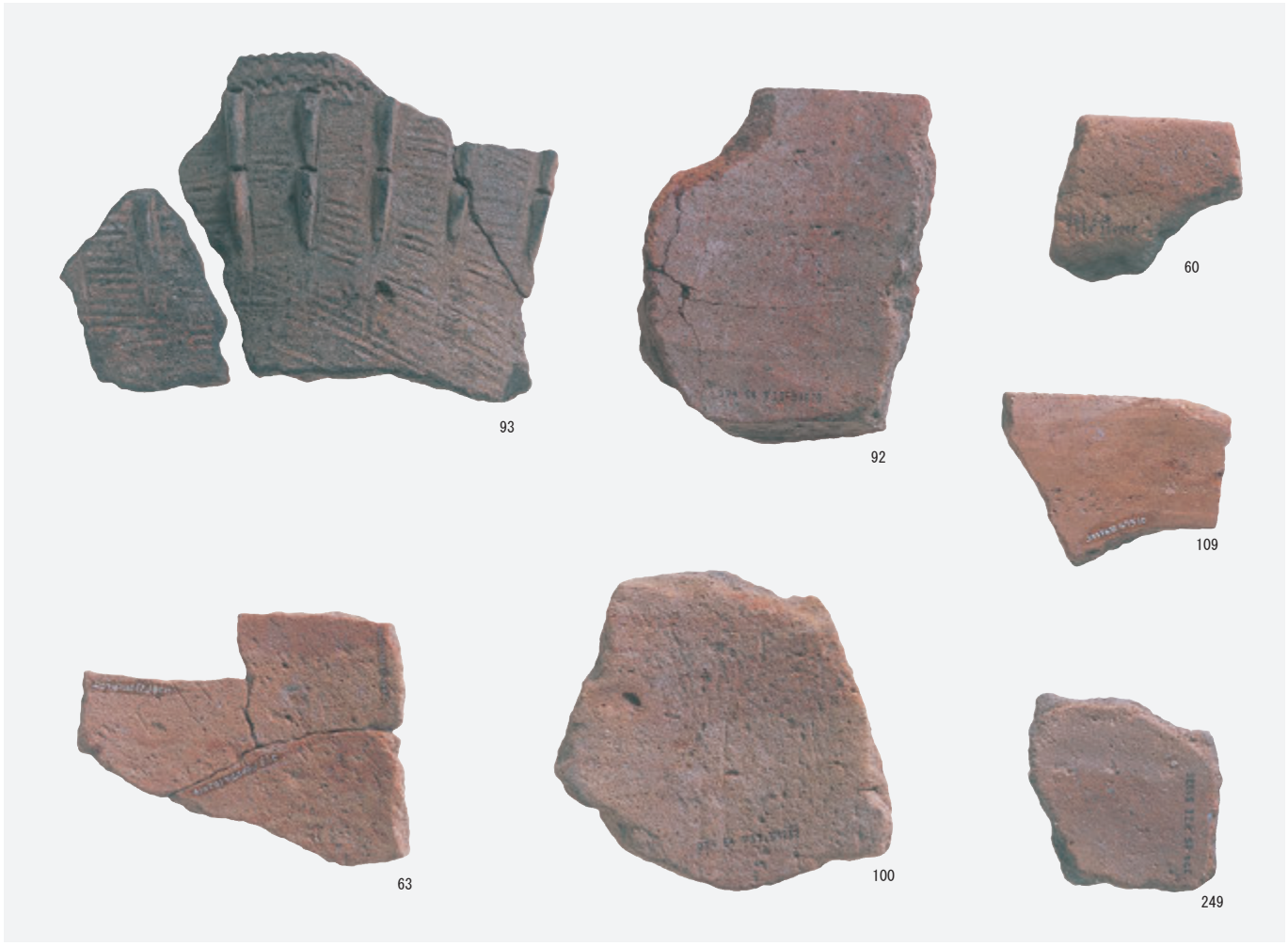


Ⅵ層出土石器（４）


S396
S395
S394
S384
S393
S391
S390
S392
S389
S387
S383
S388
S385
S382
S381
S386
S380
S379
S397
S398
S378

Ⅵ層出土石器（５）

図版72





赤色顔料付着遺物

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（39）

東九州自動車道建設（志布志IC～鹿屋串良JCT間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

小牧遺跡２

（旧石器時代～縄文時代早期編）

発行年月　2021年３月
編集・発行　鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL 0995-70-0574　FAX 0995-70-0576
印　刷　株式会社トライ社
〒892-0834　鹿児島市南林寺町12-6
TEL　099-226-0815　FAX　099-225-7933